

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03148 8646









發行所

東京市芝罘芝公園四丁目三番地  
大東出版

電話 三三〇四  
番號 東京 一六四七

木 齋  
福 嬰

印刷所 日 謙 舎

印刷所 日 謙 舎

印刷所 日 謙 舎

【定額 金一圓五十銭】

昭和十一年十一月十五日  
昭和十一年十一月二十日  
昭和十一年十一月二十五日

編輯 澤田高梧

昭和十年十一月十五日 印刷  
昭和十年十二月二十日 發行  
昭和十四年九月十五日 再版發行

不許  
複製

發行所

國譯一切經 釋經論部四

【定價 金一圓五十錢】

編輯者

岩野真雄

東京市芝區芝公園地七號地十番

印刷者

長尾文雄

東京市芝區芝浦二丁目三番地

印刷所

日進舍

東京市芝區芝浦二丁目三番地

東京市芝區芝公園地七號地十番

株式會社 大東出版社

振替東京一九四七一番  
電話芝三三〇四〇番



の故に衆生の爲に法を説きて、示教し利喜せしめ、六波羅蜜に住せしめ、佛道を開く。是の業の果報の故に、身を轉じて易く六波羅蜜に應ずる深經を得。若し能く疾く受持することを得、乃至所説の如く、修行し、精進して捨てず、世世に常に離れずんば、六波羅蜜を用ふる果報の故に佛世界を淨め、衆生を成就し、乃ち無上道に至らん。若し法を憍惜すれば、則ち常に邊地の佛法無き處に生ず。<sup>三</sup>

【三】石本卷を分たず。



報は富貴を得と雖も、好く用ふること能はず、亦た他に罪業の因縁を與ふること能はざるが故に諸根の闇鈍にして、好醜を擇ばず、是の善男子は未だ道を得ざる時、清淨なる福德の故に、上妙なる五欲を得、能く意を盡して用ひ、「亦た」能く意に隨つて施與し、或は窮乏に施し、或は福田を種ゑ、若くは善知識を得て佛法を聞き、欲に著する心を息め、衆生を憐愍し、阿耨多羅三藐三菩提の爲の故に、内外の所有る布施をば愛惜する所無く、若くは戒を持し、遍ねく十善道を行じ、戒律の儀を具へ、慈悲心を以て共に行す。餘の善法も亦た是の如く、皆な深心を以て自ら行じ、及び他人を引導して、善道を行ぜしむ。是の福德の因縁の故に、世樂・天王・人王の富貴の處を求めず、現に在す佛の處あることを聞いて、彼に往生せんことを願ふ。是の菩薩は、諸法實相を知るが故に、生を樂します。若し衆生の爲に十方の佛の前に生じて、深般若波羅蜜を聞き、聞き已つて、彼に於いて、無量百千の衆生を開發して、無上道心を發さしむ。舍利弗は、一切智無く、三世の菩薩の願行の事を説くを聞いて、希有の心を發し、佛に白して言さく、「世尊よ、佛は三世の中に於いて、法として知らざるもの無く、如・法性・實際に従つて知らざるもの無く、諸の衆生の心、所行の業・果報・因縁、事として知らざること無く、十方現在の諸佛より及び過去、未來世の佛及び世界の弟子、及び所行の事、皆な悉く遍ねく知りたまふ。佛の一切智は其の力甚だ大にして不可思議なり」と。

舍利弗、意に謂へらく、「同じく是れ出家の人にして、俱に般若波羅蜜を求むるに、何を以ての故に得るものあり、得ざる者ありや」と。佛の答へたまはく、「若し是の菩薩は、常に一心に、六波羅蜜を求め、身命を惜まざれば、是の人は内に好心あり、外に諸佛、菩薩及び諸天に護助せらるるが故なり」と。舍利弗、意へらく、「復た精進すと雖も、佛世に在らずんば、魔力復た大ならん。是の菩薩は云何ぞ是の般若波羅蜜の深經を得ん」と。是の故に更には是の六波羅蜜に應ずる深經を得ること問ふ。佛の言はく、「得」と。此の中に得るの因縁を説く。所謂、善男子、善女人は、無上道の爲

り。亦た能く大に施し、能く大に施し已りて、大善根を種ゑ、大善根を種ゑ已りて、大果報を得。衆生を攝するが爲の故に身を受け、能く衆生の中に於いて、内外の所有の物を捨つ。是の善根の因縁を以て、願を發して他方の世界に生ぜんことを欲す。現在の諸佛の深般若波羅蜜を説きたまふ處に、諸佛の前に於いて、是の深般若波羅蜜を聞き已りて、亦た彼に於いて百千萬億の衆生を示教し利喜し、阿耨多羅三藐三菩提心を發さしむ」と。

舍利弗、佛に白して言さく、「希有なり、世尊よ、佛は過去・未來・現在の法に於いて、法として知らざるもの無く、法如の相として知らざるもの無く、衆生の行は事として知らざること無し。今、佛は悉く過去の諸佛及び菩薩聲聞を知りたまひ、亦た今現在の十方諸佛の世界の菩薩及び聲聞をも知りたまひ、亦た未來の諸佛及び菩薩聲聞をも知りたまふ。世尊よ、未來世に善男子、善女人ありて、六波羅蜜を勤求し、受持し、讀誦し、乃至修行せば、得有りや、不得有りや」と。

佛、舍利弗に告げたまはく、「若し善男子、善女人、一心に精進し勤求すれば、當に六波羅蜜に應ずる諸經を得べし」と。舍利弗、佛に白して言さく、「善男子、善女人、是の如く勤行する者は、當に是の六波羅蜜に應ずる深經を得べきや」と。佛、舍利弗に語りたまはく、「是の善男子、善女人は、是の六波羅蜜に應ずる深經を得。何となれば、善男子、善女人は、阿耨多羅三藐三菩提の爲の故に、衆生の與に法を説き、示教し利喜し、六波羅蜜の中に住せしむ。是の因縁を以ての故に、是の善男子、善女人は、後身に轉生して、易く六波羅蜜に應ずる深經を得、得已つて六波羅蜜の所説の如く修行し、精勤して息まず、乃至佛世界を淨め、衆生を成就し、阿耨多羅三藐三菩提を得」と。

【論】釋して曰はく、佛の説きたまはく、「善男子、善女人は、我が前及び過去の諸佛の前に於いて誓願を立つ、「我は菩薩道を行じ、當に無量百千萬億の衆生をして、無上道の意を發さしめ、示教し、利喜せしめ、阿耨多羅三藐三菩提の記を得せしむべし。我れ及び過去の佛は、是の善男子の心に、大いに能く作す所あるを知るが故に隨喜す。善男子、善女人は、佛の其の心を知りたまふを聞いて、則ち歡喜を生じ、自ら過去に誓願を作せし事を念じて、倍精進を加ふ」と。大心とは、一切衆生の心は、皆な樂んで六塵を緣す。有人は、雜の福德を行す、所謂、福を作す時、心に疑悔を生じ、是の福德の果

して、淳熟するが故に多く衆生を利益することを。所謂、檀波羅蜜、尸羅波羅蜜の因縁の故に、富貴の家に生れ、自ら布施を行じ、人をして布施せしめ、瞋提波羅蜜、禪波羅蜜の因縁の故に、無量の衆生をして、出家し受戒し、阿耨多羅三藐三菩提心を發さしむ。此の中に、佛、因縁を説きたまはく、「是の人は我れ及び過去の諸佛より、薩婆若に應ずる大乘の法を聞く。是の故に後生に、是の心を失せざるなり。是の人は、亦た他人をも教化して、是の如き事を説く。一燈を然せば展轉して皆な然ゆる如し。是の人は、諸の煩惱薄く、慳貪・嫉妬・礙恚無きが故に、相讒謗せず、常に一心に和合す。是の故に魔、若くは魔民は、沮壞すること能はず」と。若し人、少しく錯あるが故に魔は其の便を得、人の瘡あれば、毒を受くるが如し。魔は是れ欲界の主なるすら尚ほ沮壞すること能はず、何に況んや悪行の人をや。或は人あり、悪行するも、而も惡に非ず。未だ欲を離れざる聖人の如し。是を以ての故に、惡行の人、般若波羅蜜を毀咎し、即ち菩薩を毀壞すと説く。

復次に、諸の善男子、善女人は、無量世より來た、佛法を愛し、深く實法に著し、信力・慧力多きが故に、深般若波羅蜜を聞き、大慈大悲の心を得るが故に、衆生の力に隨つて、深般若波羅蜜に入らしめ、若くは般若の因縁、所謂、布施持戒等の諸の善根を得せしむ。阿耨多羅三藐三菩提の爲の故にとは、是の善男子、善女人は無上道を求むるが故に、他を教へて諸の善根福德に住せしむるなり。

【經】是の善男子、善女人は、我が前に於いて誓願を立つ、「我れ菩薩道を行ずる時、當に無數百千萬億の衆生を度し、阿耨多羅三藐三菩提心を發さしめ、示教し利喜し、乃至阿耨跋致地を受記せしむべし」と。我れ其の心を知りて我も亦た隨喜す。是の善男子、善女人は、亦た過去の諸佛の前に於いても誓願を立て、「我れ菩薩道を行ずる時、當に無數百千萬億の衆生を度し、阿耨多羅三藐三菩提心を發さしめ、示教し利喜し、乃至阿耨跋致地を受記せしむべし」と。諸の過去の佛も亦た其の心を知りて而して隨喜したまふ。

舍利弗よ、是の諸の善男子、善女人の爲す所の心は大なり、受くる所の色・聲・香・味・觸・法も亦た大な

佛法興盛して法の滅することを畏れず。佛の滅後五百歳を過ぎて、正法漸く滅す。是の時、佛事轉じ難し。是の時、利根の者は讀誦し、正しく憶念し、亦た華香を供養し、鈍根の者は書寫し、華香等を供養す。是の二種の人は久久しうして皆な當に得度すべきが故に、當に佛事を作すべしと説く。佛の言はく、「是の善男子、善女人を、我れ及び十方の諸佛は、皆な佛眼を以て見、念知し、讚歎す」と。

舍利弗、佛に白して言さく、「是の深般若は北方に在りて、廣く行はるるや」と。廣く行はるとは、閻浮提に於いて、北方は廣大なるが故なり。又た北方の地には雪山あり。雪山は冷やかなるが故に、藥草は能く諸毒を殺し、食す所の米穀に、三毒大に發すること能はず。三毒大に發すること能はざるが故に、衆生は柔軟にして、信等の五根は皆な勢力を得。是の如き等の因縁もて、北方に多く、般若波羅蜜を行ふ。是の人は、是の深般若波羅蜜を聞き、書持し、乃至正憶念し、説の如く行す。當に知るべし、是の人は久しく大乘の意を發し、多く佛を供養したてまつり、善根を種ゑ、善知識と相隨ふことを。是の故に能く惡世に於いて書持し、信受し、乃至、説の如く修業す。

舍利弗、問ふ、「北方に幾許の人ありてか、是の深般若波羅蜜を聞き、能く書し、讀誦し、乃至、説の如く修行するや」と。佛、答へたまはく、「是の深般若波羅蜜は知り難く、行じ難く、多く人ありて、無上道心を發し、菩薩と名くることを得と雖も、少しく人ありて、是の般若波羅蜜を聞き、心通達して、驚かず没せず」と。心通達して、驚かず怖れざる相は、佛、此の中に自ら説きたまはく、「是の人は多く諸佛に親近す」と。諸佛に親近すとは、無量世に於いて、常に諸佛を見、恭敬し供養するなり。問難するとは、直に其の事を問ふも、疑心解けず、重ねて種種に問ふを名けて難と爲す。是の人は、世世に諸佛に従つて、般若波羅蜜の事を問難す。是の人の功德の果報は未だ成ぜずと雖も、當に知るべし、是の人は六波羅蜜・三十七品、乃至十八不共法を具足し、是の福德を具足

般若波羅蜜を書し、乃至説の如く修行すべきや」と。佛、舍利弗に告げたまはく、後時、北方に多く佛道を求むる善男子、善女人ありと雖も、少く、是の深般若波羅蜜を聞いて、没せず、驚かず、怖かず、畏れざるものあるのみ。何となれば、是の人は、多く諸佛に親近し、供養し、多く諸佛に諮問すればなり。是の人は、必ず能く、般若波羅蜜・禪波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・毘提波羅蜜・尸羅波羅蜜・檀波羅蜜を具足し、四念處を具足し、乃至十八不共法を具足せん。」

「舍利弗よ、是の善男子、善女人は、善根純厚なるが故に、能く多く衆生を利益し、阿耨多羅三藐三菩提の爲にす。何となれば、我れ今、是の善男子、善女人の爲に、薩婆若に應ずるの法を説き、過去の諸佛も、亦た是の善男子、善女人の爲に、薩婆若に應ずるの法を説きたまへり。是の因縁を以ての故に、是の人は後に生るる時、續いて阿耨多羅三藐三菩提心を得、亦た他人の爲に、阿耨多羅三藐三菩提の法を説く。是の善男子、善女人は、皆な一心に和合し、魔若くは魔民の阿耨多羅三藐三菩提心を沮壞すること能はず、何に況んや、惡行の人、深般若波羅蜜を行ずる者を毀害して、能く其の阿耨多羅三藐三菩提心を壞せんや。舍利弗よ、是の菩薩道を求むる諸の善男子、善女人は、是の深般若波羅蜜を聞いて、大に法喜法樂を得、亦た多く人を善根に立て、阿耨多羅三藐三菩提を爲す」と。

【論】釋して曰はく、是の深般若波羅蜜は佛の滅度の後、當に南方の國土に至るべしとは、佛は東方に出で、中に於いて般若波羅蜜を説いて、魔及び魔民外道を破し、無量の衆生を度し、然る後に、拘夷那竭雙樹の下に於いて滅度したまへり。後、般若波羅蜜は、東方より南方に至る。日月・五星・二十八宿の、常に東方より南方に至り、南方より西方に至り、西方より北方に至りて須彌山を圍遶するが如し。又た供養の常法の如く右遶して應に遍ねく閻浮提の人を度すべし。是の因縁を以ての故に、東方より南方に至り、南方より西方に至る。佛は著心無きが故に一處に定まらざるが如し、般若波羅蜜も亦た是の如く、定んで一處に住せず、西方より北方に至る。二方の衆生は、好んで供養し、書し、讀み、乃至修行し、華香乃至幡華もて供養して、大果報を得ること、經の中に説けるが如く、後、展轉して北方に至る。此の中の供養の所得の果報は上に説くが如し。舍利弗よ、是の般若波羅蜜は北方に當に佛事を爲すべし。是の中に因縁を説く、佛の在す時は、能く衆疑を斷じ、

塞・優婆夷は、當に是の深般若波羅蜜を書すべく、當に受持し、讀誦し、思惟し、説き、正憶念し、修行すべし。是の善根の因縁を以ての故に、終に惡道の中に墮せず、天上人中の樂を受け、六波羅蜜を増益し、諸佛を供養し、恭敬し、尊重し、讚歎し、漸く聲聞・辟支佛・佛乘を以て、而も涅槃を得。舍利弗よ、是の深般若波羅蜜は、南方より當に轉じて西方に至るべし。所在の處の此の中の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷は當に是の善根の因縁を以ての故に、終に惡道の中に墮せず、天上人中の樂を受け、六波羅蜜を増益し、諸佛を供養し、恭敬し、尊重し、讚歎し、漸く聲聞・辟支佛・佛乘を以て、而も涅槃を得ん。舍利弗よ、是の深般若波羅蜜は西方より當に轉じて北方に至るべし。所在の處の此の中の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷は當に是の深般若波羅蜜を書すべく、當に受持し、讀誦し、思惟し、説き、正憶念し、修行すべし。是の善根の因縁を以ての故に、終に惡道の中に墮せず、天上人中の樂を受け、六波羅蜜を増益し、諸佛を供養し、恭敬し、尊重し、讚歎し、漸く聲聞・辟支佛・佛乘を以て涅槃を得ん。舍利弗よ、是の深般若波羅蜜は、是の時、北方に當に佛事を作すべし。何となれば、舍利弗よ、我が法盛なる時は、滅相あること無ければなり。舍利弗よ、我れ已に是の善男子、善女人の是の深般若波羅蜜を受け、乃至修行することを念ず。亦た是の善男子、男女人、能く是の深般若波羅蜜を書し、恭敬し、供養し、尊重し、讚歎するに、華香乃至幡蓋もてせば、舍利弗よ、是の善男子、善女人は、是の善根の因縁を以ての故に、終に惡道の中に墮せず。天上人中の樂を受け、六波羅蜜を増益し、諸佛を供養し、恭敬し、尊重し、讚歎し、漸く聲聞・辟支佛・佛乘を以て、而も涅槃を得。何となれば、舍利弗よ、我れ佛眼を以て是の人を見、我れ亦た稱譽し、讚歎し、十方世界の中の無量無邊阿僧祇の諸佛も亦た佛眼を以て、是の人を見、亦た稱譽し、讚歎すればなり」と。

舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、是の深般若波羅蜜は、後時に、當に北方に在りて、廣く行はるべきや」と。佛の言はく、「是の如し、是の如し。舍利弗よ、是の深般若波羅蜜は、後時に、北方に在りて當に廣く行はるべし。舍利弗よ、後時、北方に於いて、是の善男子、善女人は、若くは是の深般若波羅蜜を聞き、若くは書し、受持し、讀誦し、思惟し、説き、正憶念し、説の如く修行せば、當に知るべし、是の善男子、善女人は、久しく大乘の心を發し、多く諸佛を供養し、諸の善根を種ゑ、久しく善知識と相隨はん」と。

舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、後時、北方に當に幾所の善男子、善女人ありて、佛道を求め、深

復次に、是の般若の中には、三世は分別無し、未來・過去・現在とは異ならず。若し現在を見れば過去・未來も亦た應に見るべく、若し過去・未來を見ざれば、亦た應に現在を見ざるべし。

問うて曰はく、北方の末法の衆生は漏結未だ盡さず、是れ罪惡の人なり。佛は何を以ての故に見知り念じたまへるや。

答へて曰はく、佛は大悲にして相愛骨髓に徹し給ふ。是の菩薩は能く無上道心を發し、衆生の爲にするが故に、佛は是の法の末後に熾盛にして、我が涅槃の後、是の人佛法を佐助することを觀ず、故に是を以て念知したまふ。

復次に、北方の末後の人は、邊地惡世に生れ、三毒熾盛にして刀兵劫中にあり、賢聖希少なり。

是の人は自ら罪福の業因縁を知らず、但だ人より聞き、若くは經を讀みて、便ち能く信樂し供養し、疾かに無上道に近づくこと久しからず。是の事は難しと爲す。若し佛在世に阿鞞跋致と作り、般若波羅蜜を信行することは、難しと爲すに足らず。是の如き等の種種の無量の因縁の故に、佛は應に見、念じ、知りたまふべし。

是の人は信解の相大なるが故に、能く般若波羅蜜を供養す。供養の具の華香等は先に説くが如し。是の供養の故に大果報を得。如し毀背する者は、大苦惱を受く。大果報とは、須陀洹の終りに三惡道に墮せざるが如く、是の菩薩の一心に般若波羅蜜を信解し供養するも亦た是の如し。諸佛を愛念するが故に、常に念佛三昧を行するが故に、終に諸佛に離れたたまつらず、乃至阿鞞跋致地に到りて衆生を教化し、諸佛を離るるも咎なし。小兒の其の母を離れざるは、諸難に墮することを恐るるが故なるが如し。常に深く善法を愛念するが故に、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るも、終に六波羅蜜等を離れず、是の如き等の今世、後世の大果報を得。

【經】「舍利弗よ、是の深般若波羅蜜は、佛の般涅槃の後、當に南方國土に至るべく、是の中の比丘・比丘尼・優婆

【二】石本卷を分ちて卷の第六十七の終りとし、次行に「大智度經論卷六十八覺魔品」十二字を掲ぐ。

れば此の中に佛眼を説くや。若し佛眼を以てせば、衆生は虚誑なり、云何なれば佛眼を以て見るや。答へて曰はく、天眼に二種あり、一には佛眼に攝せらる、二には佛眼に攝せず。攝せざる所とは、現在の衆生を見るに、限あり量あり。佛眼に攝せらるる者は、三世の衆生を見るに、限無く量無し、法眼は佛眼の中に入るも、但だ諸法を見るのみにして衆生を見ず。慧眼は佛眼の中に入るも、法を見ずして但だ畢竟空のみを見る。

問うて曰はく、佛眼に攝する所の天眼は實と爲すや、虚妄と爲すや。若し虚妄ならば、佛は虚妄を以て見るべからず、若し實ならば、衆生は空なり、現在の衆生すら尙ほ實ならず、何に況んや、未來・過去(の衆生をや)。

答へて曰はく、佛眼に攝する所は、皆な是れ實なり。衆生は涅槃に於いては是れ虚妄なれども、世界の見る所に於いては是れ虚妄に非ず。若し人衆生に於いて定相を取るが故に、説いて虚妄と言ふ。世諦の爲の故に説いて虚妄と言ふに非ず。是を以ての故に佛眼に攝する所の天眼もて衆生を見る。

問うて曰はく、若し爾らば何を以てか佛眼に攝する所の慧眼を以て衆生を見ざるや。

答へて曰はく、慧眼は無相にして利なるが故に、慧眼は常に空・無相・無作を以て、共に相應し、衆生を觀するに中らず。何となれば、五衆の和合せるを假に衆生と名くればなり。譬へば小兒は小杖を以て之を鞭つ可く、大杖を與ふるべからざるが如し。此の中に、菩薩の般若波羅蜜を讚するは、世諦の爲の故に説く、第一義諦には非ず。

問うて曰はく、未來世は未だ有らず、念じ知ることすら尙ほ難し、何に況んや眼に見ることをや。

答へて曰はく、過去法を滅して所有無しと雖も而も心數法の中の念力の故に、能く過去の事を憶し、其の宿命を盡くすが如し。聖人も亦た是の如く、聖智力あり、未だ起らずと雖も、而も能く知り能く見る。



我等は云何にして般若波羅蜜を行じて無上道を得ん」と。是の故に佛説きたまはく、「惡魔は留難せんと欲すと雖も、亦た破壊すること能はず。何となれば、大〔因縁は常に〕能く小〔因縁〕を破するが故なり。離欲の人は常に食欲の者に勝り、慈悲の人は、常に瞋恚の者に勝り、智人は常に無智の者に勝るが如し」と。般若波羅蜜は是れ眞智慧にして其の力甚だ大なり。魔事は虚誑なり。是の菩薩は未だ般若波羅蜜を具足することを得ずと雖も、其の氣分を得るが故に、魔は壞すること能はず。是の事の因縁の故に、舍利弗は佛に白さく、「誰の力の故に、魔は破ること能はざるや」と。佛、答へたまはく、「佛力の故に」と。惡人の中には、魔を大と爲し、善人の中には、佛を大と爲し、縛人の中には、魔を大と爲し、解人の中には、佛を大と爲し、留難の人の中には、魔を大と爲し、通達の人の中には、佛を大と爲すが如し。初に説く佛力とは釋迦文佛なり、後に説くは十方現在の佛なり。是の餘の佛は、阿閼、阿彌陀等なり。惡賊の餘の惡相を助くるが如く、諸佛の法も亦た是の如し。常に一切衆生の爲の故に、意を發す者あれば便ち爲に護りを作す。何となれば、般若波羅蜜は、是れ十方諸佛の母にして、人の沮壞んと欲すれば、護らざることを得ざればなり。應當に知るべし、其の書き讀み、乃至正憶念する者あるは、皆な是れ十方の佛の力なり。是れ諸の留難の力大なるが故なり。舍利弗の言はく、「若し書持し、乃至修行すること有れば、皆な是れ諸佛に護らる」と。佛は其の言を可としまふ。舍利弗、復た説く、「世尊よ、書持する等の善男子、善女人を、十方現在の諸佛は、皆な佛眼を以て見知り念じたまふや」と。佛、可して言はく、「是の如し、先づ惡魔來りて破壊せんに、佛及び十方の諸佛は、守護して沮壞せしめず、今、佛眼を以て、是の善男子、善女人を見、是の人の功德の有り難きことを知る」と。未だ魔網を破せずして、而も能く是の般若波羅蜜の大事を行す。是の故に、十方の佛は佛眼を以て見知り、是の人を念じたまふ。

問うて曰はく、「天眼を以て見ることを爲すや、佛眼を以て見るや。若し天眼を以て見ば、云何な

説の如く行する時も疾かに修行すべし。疾かにする所以は、是の有爲法は信す可からず、多く留難起ること有ればなり。是の般若波羅蜜の部黨經卷に多あり、少あり。上中下、所謂光讚・放光・道行あり。書寫すること有る者は、書するに遅疾あり、一心に勤め書する者あり、懈惰して精勤せざる者あり。人身は無常有爲の法にして信す可からず。釋迦文佛は惡世に出でたまふが故に多く留難あり。是の故に説きたまはく、「若し一月に書き竟る可くんば、當に勤めて書成すべし。中(途)にして廢すること有ること莫れ」と。(夫は)留難あることを畏るるが故なり。乃至一歳に書き乃至修行するが如きも亦た是の如し。人根の利鈍に隨つて遅疾あることを得。此の中に佛、更に因縁を説きたまはく、「世間は珍寶を以ての故に、多く賊の出づること有り。般若は即ち是れ大珍寶なるが故に多く留難あり」と。留難には、疾病飢餓等なりと雖も、但だ魔事は大なるを以ての故に、説いて魔事と言ふ。若くは魔、若くは魔民、惡鬼は惡因縁と作りて人身の中に入り、人の身心を擾亂し、般若を書するを破し、或は書する人をして疲厭ならしめ、或は國土に事を起らしめ、或は書する人供養することを得ず。是の如き等なり。讀誦の師徒和合せず、大衆の中に説く時、人ありて來り、法師の過罪を説き、或は言はく、「説の如く行すること能はず、何ぞ聽受するに足らん」と。或は言はく、「能く戒を持すと雖も、而も復た鈍根にして、深義を解せざれば、其の所説を聽くも了に益する所無し」と。或は説く、「般若波羅蜜は空にして所有無く、一切法を滅して行すべき處無し、譬へば裸人の自ら我は天衣を著くと言ふが如し」と。是の如き等に留難して説くことを得ざらしむ。

「正憶念せず」とは、魔は好身、或は善知識と作り、或は敬信せらるる沙門の形と作りて爲に、般若波羅蜜は空にして所有無く、罪福の名ありと雖も、而も道理無しと説き、或は般若波羅蜜は空なり、即ち涅槃を取るべしと説く。是の如き等は、佛道の正憶念を修する事を破す。新發意の菩薩は、是の事を聞きて、心大に驚怖すらく、「我等は生死の身、魔は是れ欲界の主にして、威勢甚だ大なり。

摩訶薩の深般若波羅蜜を書し、乃至修行するを留難すること能はず。舍利弗よ、亦是の十方世界に現在する諸佛の力の故なり。是の諸佛は是の菩薩を擁護し念じたまふが故に、魔をして菩薩摩訶薩を留難し、般若波羅蜜を書成し、乃至修行せざらしむること能はざらしむ。何となれば、十方世界の中に現在せる無量無邊阿僧祇の諸佛、是の菩薩の深般若波羅蜜を書し、乃至修行するを擁護し念ずる法、應に爾るべく、亦た能く留難を作すこと無ければなり。舍利弗よ、善男子、善女人は應當に是の念を作すべし、「我れ是の深般若波羅蜜を書し、乃至修行するは、皆な是れ十方諸佛の力なり」と。舍利弗の言さく、「世尊よ、若し善男子、善女人ありて、是の深般若波羅蜜を書し、乃至修行することは皆な是れ佛力なるが故に、當に是の人は是の諸佛に護らるるを知るべきや」と。佛の言はく、「是の如し、是の如し。舍利弗よ、當に知るべし。若し善男子、善女人ありて、是の般若波羅蜜を書し、乃至修行するは皆な是れ佛力なるが故に、當に知るべし、亦た是れ諸佛の護る所なり」と。舍利弗の言さく、「世尊よ、十方現在の無量無邊阿僧祇の諸佛は皆な識り、皆な佛眼を以て、是の善男子、善女人の深般若波羅蜜を書し、乃至修行する時を見たまふ」と。佛の言はく、「是の如し、是の如し。舍利弗よ、十方現在の無量無邊阿僧祇の諸佛は皆な識り、皆な佛眼を以て、是の善男子、善女人の深般若波羅蜜を書し、乃至修行する時を見たまふ。舍利弗よ、此の中に、菩薩道を求むる善男子、善女人、若し是の深般若波羅蜜を書し、受持し、讀誦し、正憶念し、説の如く修行せば、當に知るべし、是の人は阿耨多羅三藐三菩提に近づくこと久しからずと。舍利弗よ、善男子、善女人の、是の深般若波羅蜜を書し、受持し、讀誦し、乃至正憶念せば、是の人は深般若波羅蜜に於いて信解の相多く、亦た是の深般若波羅蜜を供養し、恭敬し、尊重し、讚歎し、華香、瓔珞乃至幡蓋をもて供養す。舍利弗よ、諸佛は皆な識り、皆な佛眼を以て、是の善男子、善女人を見たまふ。是の善男子、善女人は供養の功德もて、當に大利益、大果報を得べし。舍利弗よ、是の善男子、善女人は、是の供養の功德因縁を以ての故に、終に惡道中に墮せず。乃至阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、終に諸佛を遠離せず。舍利弗よ、是の善男子、善女人は、是の善根の因縁を以ての故に、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、終に六波羅蜜を遠離せず、終に内空乃至無法有法空を遠離せず、終に四念處乃至八聖道分を遠離せず、終に佛の十力乃至阿耨多羅三藐三菩提を遠離せず」と。

【論】釋して曰はく、留難とは魔事等の般若波羅蜜を壞する因縁なり。佛は須菩提の所説を可したまふ。若し善男子、善女人、是の般若波羅蜜を書せんと欲せば當に疾疾すまやかに書し、乃至正憶念し、

り、色等の諸法は清淨なるが故なり。色等の法の中に、正しく不邪を行するを名けて清淨と爲す。諸の過患無く、乃至畢竟空にも亦た著せず、不可思議にも亦た著せず、是の故に清淨聚と名く。爾の時、須菩提は應に是の念を作すべし、「是の般若波羅蜜は是れ珍寶聚にして、能く一切衆生の願、所謂、今世の樂、後世の樂、涅槃の樂、阿耨多羅三藐三菩提の樂を滿す。愚癡の人は、而も復た是の般若波羅蜜の清淨聚を破壊せんと欲せず。如意寶聚の瑕穢あること無きが如く、虚空の塵垢あること無きが如く、般若波羅蜜は畢竟清淨聚なり。而も人は自ら邪見の因縁を起し、留難を作して破壊せんと欲す。譬へば人の眼翳にして妙珍寶を見、謂つて不淨と爲すが如し」と。是の念を作し已れり。

【經】須菩提の言さく、「世尊よ、甚だ怪しむ可し、是の般若波羅蜜を説く時多く留難あり」と。佛の言はく、「是の如し、是の如し。須菩提よ、是の甚深般若波羅蜜は多く留難あり。是の事を以ての故に、善男子、善女人、若し是の般若波羅蜜を書せんと欲する時は、應當に疾かに書すべし。若し讀誦し、思惟し、説き、正憶念し、修行する時も、亦た應に疾かに修行すべし。何となれば、是の甚深般若波羅蜜を若くは書する時、(若くは)讀誦し、思惟し、説き、正憶念し、修行する時、諸難をして起らしめんと欲せざるが故なり。善男子、善女人、若し能く一月に書を成ぜんとせば、當應に勤めて書すべし。若し二月・三月・四月・五月・六月・七月、若くは一歳に書を成ぜんとせば、亦た當に勤めて書すべし。讀誦し、思惟し、説き、正憶念し、修行することも、若し一月に成就することを得、乃至一歳に成就することを得んと欲せば、應當に勤めて成就すべし。何となれば、須菩提よ、是の珍寶の中には多くの難起ること有るが故なり」と。須菩提の言さく、「世尊よ、是の甚深般若波羅蜜の中には、惡魔喜んで留難を作すが故に、書せしむることを得ず。讀誦し、思惟し、説き、正憶念し、修行せしむることを得ざるや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「惡魔は是の甚深般若波羅蜜を留難し、書し、讀誦し、思惟し、説き、正憶念し、修行することを得ざらしめんと欲すと雖も、亦た是の菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を書し、乃至修行することを破壊すること能はず」と。爾の時、舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、誰の力の故に、惡魔をして、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を書し、乃至修行するを留難すること能はざらしむるや」と。佛の言はく、「是の佛力の故に、惡魔は菩薩

の中に説く、「新發意の者ありて、亦た能く深般若波羅蜜を信ず」と。今、佛は説きたまはく、「久しく意を發すが故に能く信ず」と。是を以て須菩提は問ふ、「云何なれば是れ久しく意を發す者なる」と。佛の言はく、「若し菩薩摩訶薩、了了に般若波羅蜜の相を知れば、一切法を分別せず」と。所謂、色の四大、若くは四大造色を分別せず。

「色相を分別せず」とは、色は是れ見る可く、聲は是れ聞く可く、是の色は若くは好、若くは醜、若くは短、若くは長、若くは常、若くは無常、若くは苦、若くは樂なり等と分別せざるなり。「色性を分別せず」とは、色の常法、所謂、地の堅性等を見ざるなり。

復次に、色の實性を法性と名く。畢竟空なるが故なり。是の菩薩は法性を分別せず、法性は不壞の相なるが故なり。乃至一切種智も亦た是の如し。

問うて曰はく、地は是れ堅相なり、何を以てか性と言ふや。

答へて曰はく、是の相積習して性を成す。譬へば、人瞋りて、日に習つて已まざれば、則ち惡性と成るが如し。或は性と相とは異なり。烟を見て火を知るも、烟は是れ火の相にして火に非ざるが如し。或は相と性とは異ならず、熱は是れ火の相にして亦た是れ火の性なるが如し。此の中に、佛、因縁を説きたまはく、「色等の諸法は不可思議なり」と。不可思議は、即ち是れ畢竟空、諸法實相、常に清淨なり。須菩提の言はく、「菩薩は日月年歳久しからずと雖も、能く是の如く行ず。是を久しと名く」と。須菩提は般若波羅蜜を聞いて、更に深き利益を得るが故に、佛に白して言さく、「世尊よ、般若波羅蜜は甚深なり。色等は甚深なるが故なり。色等の甚深なる相は先に説くが如し。世尊よ、般若波羅蜜は是れ珍寶聚なり」と。珍寶〔聚〕とは、所謂、須陀洹果は、能く三結の惡毒を滅するが故なり。乃至阿耨多羅三藐三菩提は、能く一切の煩惱及び習を滅して、能く一切の願を滿す。是の諸果は諸禪乃至一切種智に依りて因果を合説す。是を珍寶聚と名く。是の般若波羅蜜は清淨聚な

水の百川萬流の皆な一味に合するが如し。爾の時、般若波羅蜜の具足を修す。

復次に、若し菩薩は法空の中に入れば、法に三世・善・不善等あるを見ず、六波羅蜜、乃至一切種智を見ず。爾の時、般若波羅蜜の具足を修す。何となれば、諸法に相無きは是れ實相なればなり。若し諸法を分別するは、皆な是れ邪見の相なり。十八空を用ふるが故に、諸法は空なりと名く。諸法は因縁を和合して生ずれば以て有りと爲し諸縁離るれば則ち破壊するが故に虚誑なり。一切の有爲法の中には、常無く實無きが故に、是を堅固ならずと名く。苦樂を受くる者無く、衆生は空なるが故に、覺者無く、苦樂を覺せず、壽命者無し。壽は命根に名く。有人の言はく、「是の命根に我相あり。是の故に壽命を我と爲す」と。衆生空の中に已に種種の因縁もて破〔壞〕す。是の故に、行法の者無く、受法の者無し。若し諸法空を觀すれば、衆生も空なり、法も空なり。是の如くんば、即ち般若波羅蜜を具足し修す。須菩提は、是の時、驚喜して自ら安んずること能はず、説く所の般若波羅蜜は不可思議なり。佛の言はく、「色等の諸法は不可思議なるが故に不可思議なり。何となれば、因果相似するが故なり」と。

復次に、若し菩薩は色等の法も亦た不可思議なることを知り、若し是の不可思議の中に住すれば、則ち般若波羅蜜を具足せず。(夫は)不可思議の相を取るが故なり。是の故に説けり、「若し菩薩は色等の法の不可思議の相を知るが故に則ち般若波羅蜜を具足せず」と。爾の時、須菩提は般若の中に於いて、依止する處を得ず、大海に没するが如くす。是の故に佛に白さく、「是の深般若は不可思議なり。不可思議も亦た不可思議なるが故に、誰か當に信解すべき者あらん」と。若し但だ不可思議なるすら猶ほ信す可からず。何に況んや、不可思議も復た不可思議なるをや。佛、答へたまはく、「若し菩薩は久しく六波羅蜜を行じ、久しく善根を種ゑ、久しく諸佛を供養し親近したてまつらば、久しく善知識と相隨はん。是の因縁の故に信心牢固にして、能く深般若波羅蜜を信受す」と。餘品

性を分別せず、檀波羅蜜乃至般若波羅蜜、內空乃至無法有法空、四念處、乃至八聖道分、佛の十力乃至十八不共法を分別せず、檀乃至十八不共法を分別せず、十八不共法の相、性を分別せず、道種智の相、性を分別せず、一切種智を分別せず、一切種智の性を分別せず、何となれば、須菩提よ、色は不可思議、受想行識は不可思議、乃至一切種智は不可思議なればなり。是の如く、須菩提よ、是を菩薩摩訶薩は、久しく六波羅蜜を行じ、善根を種え、多く諸佛に親近して、供養したてまつり、善知識と相隨ふと名く」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、色は甚深なるが故に、般若波羅蜜は甚深なり、受想行識は甚深なり。乃至一切種智は甚深なるが故に、般若波羅蜜は甚深なり。世尊よ、是の般若波羅蜜は珍寶聚なり。須陀洹果の寶あるが故に、斯陀含果、阿羅漢果、辟支佛道、阿耨多羅三藐三菩提の寶あるが故に、四禪・四無量心・四無色定・五神通・四念處乃至八聖道分・佛の十力・四無所畏・四無礙智・大慈大悲・十八不共法・一切智・一切種智の寶有るが故なり。世尊よ、是の般若波羅蜜は清淨聚なり、色は清淨なるが故に、般若波羅蜜は清淨聚なり。受想行識は清淨なり、乃至一切種智清淨なるが故に、般若波羅蜜は清淨聚なり」と。

【論】釋して曰はく、是の菩薩は大功德を成就すとは、先に説くが如く自ら行じ、亦た他人に教ふ。復次に、多くの功德とは、その衆生は親里に非ず、又た貪利する所無く、而も是の衆生の爲に勤苦して、般若波羅蜜を行じ、阿耨多羅三藐三菩提を得。是を菩薩摩訶薩と名け、大恩分有るが故に大功德と名く。

般若波羅蜜を修する相は、先の品の中に種種の因縁もて説くが如し。

今、般若を修する具足の相を問ふに、佛の言はく、「般若を修する具足の相の如きも亦た是の如し。所以何となれば、若し菩薩は色等の諸法の増減を見ざれば、是の如きを具足と名く」と。是の菩薩は十地を得、道場に坐し、爾の時、般若波羅蜜の具足を修すと雖も、夢の如く、幻の如く、増さず、減らず。畢竟空を以ての故に説くなり。

復次に、若し菩薩は一切の法に於いて、是れ法、是れ非法と分別せず。悉く皆な是の法は、大海の

# 卷の第六十七

## 第四十五 歎信行品(續)

【經】須菩提、佛に白して言さく、「希有なり、世尊よ、諸の菩薩摩訶薩は大功德を成就す、所謂、一切衆生の爲に般若波羅蜜を行じ、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲す。世尊よ、云何にして諸の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を具足し修行するや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「若し菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時、色の増相を見ず、色の減相を見ず、受想行識の増相を見ず、亦た減相を見ず、乃至一切種智の増相を見ず、亦た減相を見ず。菩薩摩訶薩は、是の時、般若波羅蜜を具足す。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時、是れ法、是れ非法と見ず。是れ過去法、是れ未來・現在法と見ず。是れ善法・不善法、有記法・無記法と見ず。是れ有爲法・無爲法と見ず。欲界・色界・無色界を見ず。檀波羅蜜・尸羅波羅蜜・羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜・般若波羅蜜を見ず、乃至一切種智を見ず。是の如く、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を具足し修行す。何となれば、諸法は無相なるが故に諸法は空なり、欺誑にして堅固ならず、覺者無く、壽〔命〕者無ければなり」と。須菩提の言さく、「世尊よ、世尊の所説は不可思議なり」と。佛、須菩提に告げたまはく、「色は不可思議なるが故に所説は不可思議なり。受想行識は不可思議なるが故に所説は不可思議なり。六波羅蜜は不可思議なるが故に所説は不可思議なり。乃至一切種智は不可思議なるが故に所説は不可思議なり。須菩提よ、若し菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時、色は是れ不可思議なり、受想行識は是れ不可思議なりと知り、乃至一切種智は是れ不可思議なりと知れば、菩薩は則ち般若波羅蜜を具足すること能はず」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、是の深般若波羅蜜は當に誰か信解すべき者ぞ」と。佛の言はく、「若し菩薩摩訶薩ありて、久しく六波羅蜜を行じ、善根を種え、多く諸佛に親近し供養したてまつり、善知識と相隨ふや」と。佛の言はく、「若し菩薩摩訶薩は色を分別せず色識と相隨はば、是の菩薩は能く深般若波羅蜜を信解す」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何にして菩薩摩訶薩は、久しく六波羅蜜を行じ、善根を種え、諸佛に親近し供養したてまつり、善知識と相隨ふや」と。佛の言はく、「若し菩薩摩訶薩は色を分別せず色相を分別せず、色性を分別せずんば受想行識を分別せず、識性を分別せず。眼・耳・鼻・舌・身・意・色・聲・香・味・觸・法・眼界乃至意識界も亦た是の如し。欲界・色界・無色界を分別せず、三界の相、

【二】明本は「釋開持品第四十五之下」、梁本は「釋第四十四品下」に作る。



め、癡者に智慧を教へ、是の如き等の善法を以て衆生を利益す。「同事」とは、菩薩は衆生を教化して善法を行ぜしめ、其の所行を菩薩の善心に同じくし、衆生の惡心は能く其の惡を化して己が善に同ぜしむ。是の菩薩は四種を以て衆生を攝し、十善道に住せしむ。一、施の中に於いて、法施は其の樂ふ所に隨つて爲に法を説く。是れ愛語中の第一なり衆生は壽命を愛惜せり。十善道を行ぜしむれば則ち久壽を得。利益とは、一切寶物の利中に於いて、法利は最勝なり。是を利益と爲す。同事の中には、同じく善法を行するを勝れりと爲す。是の菩薩は自ら十善を行じ、亦た以て他人に教ふ。有人の言はく、「後に自ら十善等を行するは、是れ第四の同の義なり」と。是の故に説く、「自ら十善を行じ、亦た人に教へて行ぜしめ、自ら初禪を行じ、亦た他をして行ぜしむ」と。初禪等は同じく欲を離れ、同じく戒を持す。是の故に相攝すと名く。相攝するが故に、漸漸に三乘の法を以て度す。乃至非有想非無想處も亦た是の如し。自ら六波羅蜜を行じ、亦た以て他を教へ、般若に因つての故に衆生をして般若の分を得せしむ。所謂、須陀洹等の方便力を得るが故に自ら證せず。是の人の福德智慧力増益するが故に、無量阿僧祇の衆生を教へて、六波羅蜜に住せしめ、自ら阿鞞跋致地等に住し、亦た以て他に教へ、乃至自ら法輪を轉じ、亦た他をして法輪を轉ぜしむ。是の故に我は慈悲心を以ての故に、善く菩薩に事を付す。以て愛著せざるが故なり。

【二】 石本は卷を分たず。

後好んで自ら奉行し、教示して衆生を利益し、謬錯せしむること無し。佛は善く付する因縁を説きたまへり。「諸の菩薩は阿耨多羅三藐三菩提心を發して、多くの衆生を安穩にす」とは、一切衆生の中は、無量無邊阿僧祇にして、佛を除き、能く計り知る者無く、佛の利益を得る者は、數ふ可からざるが故に「多」と名く。「安穩」とは、衆生の常に著する者には無常を教へ、樂に著する者には苦を教へ、實に著する者には空を教へ、我に著する者には無我を教ふ。是の如き等を安穩と名く。凡夫の人は是を聞き當時は喜樂せずと雖も、久久しうせば諸の煩惱を滅して安穩の樂を得。苦樂を服して、當時は苦なりと雖も、後に患を除くことを得るが如し。「無量の衆生樂を得」とは、菩薩は般若波羅蜜を求めて、未だ成就することを得ざる時、今世後世の樂を以て衆生を利益するなり。菩薩本生經に説くが如し。若し般若波羅蜜を得已れば、諸の煩惱を斷じて、亦た世間の樂、出世間の樂を以て衆生を利益す。若し無上道を得る時は、但だ出世間の樂のみを以て衆生を利益す。「安樂に饒益す」とは、但だ憐愍の心を以ての故に安樂なり。「饒」とは、多く天人を利益する(に言ひ)、餘道の中には饒益少きが故に説かず。「利益の事」とは、所謂四攝法なり。財施・法施の二種を以て衆生を攝取す。

「愛語」に二種あり。一には隨意の愛語、二には愛する所の法に隨つて爲に説く。是の菩薩は未だ道を得ざれば衆生を憐愍し、自ら高を破し、意に隨つて法を説く。若し道を得れば應に度すべき所の法に隨つて爲に説く。高心の富人には布施を讚ずることを爲すに、是の人は能く他の物を得て利す、名聲福德の故なり。若し持戒を讚じて、破戒を毀咎することを爲せば、則ち心に喜樂せず。是の如き等には其の應ずる所に隨つて爲に法を説く。利益にも亦た二種あり。一には今世の利、後世の利の爲に法を説き、法を以て生を治め、利事を勤修す。二には未だ信ぜざる(者)を教へて信ぜしめ、破戒(者)をして戒を持たせしめ、寡識をして多聞ならしめ、施(を好ま)ざる者をして布施せし

利は是れ聲聞、大利は是れ菩薩、魔界は是れ生死、佛界は是れ般若波羅蜜の甘露の法味、不死の處なりと分別するなり。「園林」とは、佛道の禪定・智慧等の樂に隨ふ、是の如き等の無量の善法の相なり。「聚落」とは、是れ柔順法忍、「邑」とは是れ無生法忍、「城」とは是れ阿耨多羅三藐三菩提なり。「安穩を得」とは、菩薩は是の法を聞いて思惟し籌量して行じ、我は是の法を得て心安穩なり、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。「賊」とは、是れ我等の六十二邪見なり。「惡蟲」とは、是れ愛・恚等の諸の煩惱なり。「賊を畏れず」とは、人の便を得ざるなり。「惡蟲を畏れず」とは、非人の便を得ざるなり。「飢を畏れず」とは、聖人の眞智慧を得ること能はざるを畏れざるなり。「渴を畏れず」とは、禪定・解脫等の法樂の味を得ること能はざるを畏れざるなり。此の中に自ら因縁を説く、菩薩摩訶薩の先相を得る者は久しからずして、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べく、惡道の中に墮することを畏れざるなり。飢餓して死すとは聲聞・辟支佛地に墮するを畏れず。佛は然も其の喩を可としまふ。鹿を以て細に喩へ、世間を以て出世間に喩ふ。

餘の三の譬喩も亦た應に上の如く分別して説くべし。「大海の水」は是れ無上道、「平地の樹無く山無き」は是れ般若波羅蜜の經卷等なり。「樹果」は是れ無上道、「樹華」は是れ阿鞞跋致地なり。「春時に陳葉落ちて更に新葉を生ずる」は、是れ諸の煩惱の邪見疑等滅して、能く般若波羅蜜の經卷等を得るなり。「母人」は是れ行者、「妊する所の身」は是れ無上道、「産せんと欲する相」は、是れ菩薩の久しく般若波羅蜜を習行するなり。「本習ふ所を厭ふ」とは、是れ世間の姪欲の樂を患とし、復た喜んで著せざるなり。佛は其の所説を善い哉と讚じたまへり。爾の時、須菩提は佛の然も須菩提の所説を「善い哉」と讚じたまふを聞き、佛の意に深く是の菩薩を敬ひ念じたまふを知る。是の故に佛に白して言さく、「世尊よ、甚だ希有と爲す。善く菩薩の事を付したまふ」と。「菩薩の事」とは、空道と福德道となり。亦た佛の種種の總相・別相の説の如きは、以て阿難、彌勒等に寄付し無餘涅槃に入り、

して法輪を轉せしむ」と。

【論】釋して曰はく、爾の時、帝釋、舍利弗に問ふ、「頗し未だ記を受けざる菩薩ありて、是の深般若を聞かんに驚怖せざる者ありや不や」と。舍利弗の言はく、「記を受けずして般若を聞くも能く信する者あること無し。若し或時は能く信する者あるも、當に知るべし、(是は)記を受けんと欲するに垂んとして、一佛二佛を見たてまつるに過ぎずして、便ち記を受くることを得るものなり」と。佛、舍利弗の語を可したまへば、舍利弗は佛の其の所説を可したまふを聞いて、歡喜を生じ、復た是の事を分明了りにせんと欲するが故に、譬喩を説きて是の言を作す。夢中の心は睡の爲に覆るゝが故に、真心の所作に非ず。若し善男子、善女人、夢中に於いて意を發し、六波羅蜜を行じ、乃至道場に坐せば、當に知るべし、是の人は福德輕微なれども、阿耨多羅三藐三菩提の記を受くるに近し。何に況んや菩薩摩訶薩の覺する時、實に心に阿耨多羅三藐三菩提を發し、行じて而も近く記を受けざらんや。世尊よ、若し人、六道生死の中に往來し、或時は般若波羅蜜を聞くことを得て、受持し、讀誦し、正憶念せば必ず是の人の久しからずして阿耨多羅三藐三菩提を得ることを知る。鈎かぎを吞める魚は復た池中に遊戯すと雖も、當に外に出在すること久しからざるを知るべきが如し。行者も亦た是の如く、深く般若波羅蜜を信樂すれば、久しく生死に住せず。

此の中に舍利弗は自ら譬喩を説けり。人の險道を過ぎんと欲するが若しと。「險道」とは、即ち是れ世間なり。「百由旬」とは、是れ欲界、「二百由旬」とは、是れ色界、「三百由旬」とは、是れ無色界、「四百由旬」とは、是れ聲聞・辟支佛道なり。復次に、四百由旬は、是れ欲界、三百は、是れ色界、二百は、是れ無色界、百由旬は、是れ聲聞・辟支佛なり。「出でんと欲す」とは、是れ信受して般若波羅蜜を行ずる人なり。「先づ諸法の相を見る」とは、大菩薩の世間の欲樂を捨て、深心に般若波羅蜜を樂しむるを見るなり。「壇界」とは、諸法を是れ聲聞法、是れ辟支佛法、是れ大乘法、是の如き小

善根を種え、多く諸佛を供養したてまつり、久しく六波羅蜜を行じ、善知識と相隨ひ、善根を成就し、深般若波羅蜜を聞くことを得、受持し、讀誦し、乃至正憶念し、説の如く行ぜば、諸人も、亦た是の菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提の記を得ること久しからざることを知らん」と。佛、舍利弗に告げたまはく、「善い哉、善い哉。汝が樂説する所は皆な是れ佛力なり」と。

爾の時、須菩提、佛に白して言さく、「希有なり、世尊よ、諸の多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀は、善く諸の菩薩摩訶薩に付する事なり」と。佛、須菩提に告げたまはく、「諸の菩薩摩訶薩は、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、多くの衆生を安隱にし、無量の衆生をして、樂を得せしめ、諸の天人を憐愍し安樂にし、饒益するが故に、是の諸の菩薩は、菩薩道を行ずる時、四事を以て無量百千の衆生を攝す。所謂布施・愛語・利益・同事なり。亦た十善道を以て衆生を成じ、自ら初禪を行じ、亦た他人を教へて、初禪を行ぜしめ、乃至自ら非有想・非無想處を行じ、亦た他人を教へて行ぜしめ、乃至非有想・非無想處に至り、自ら檀波羅蜜を行じ、亦た他人を教へて檀波羅蜜を行ぜしむ。自ら尸羅波羅蜜を行じ、亦た他人を教へて、尸羅波羅蜜を行ぜしめ、自ら羼提波羅蜜を行じ、亦た他人を教へて、羼提波羅蜜を行ぜしむ。自ら毘梨耶波羅蜜を行じ、亦た他人を教へて、毘梨耶波羅蜜を行ぜしむ。自ら禪波羅蜜を行じ、亦た他人を教へて、禪波羅蜜を行ぜしむ。自ら般若波羅蜜を行じ、亦た他人を教へて、般若波羅蜜を行ぜしむ。是の菩薩は般若波羅蜜を得、方便力を以て衆生を教へて、須陀洹果を得せしむ。自ら内に於いて證せず、衆生を教へて、斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果を得せしめ、内に自ら證せず衆生を教へて、辟支佛道を得せしむ。自ら内に證せず自ら六波羅蜜を行じ、亦た無量百千萬の諸の菩薩を教へて、六波羅蜜を行ぜしむ。自ら阿鞞跋致に住し、亦た他人をして阿鞞跋致地に住せしむ。自ら佛世界を淨め、亦た他人をして佛世界を淨めしむ。自ら衆生を成就し、亦た他人をして衆生を成就せしむ。自ら菩薩の神通を得、亦た他人を教へて菩薩の神通を得せしむ。自ら陀羅尼門を淨む。亦た他人をして陀羅尼門を淨めしむ。自ら樂説辯才を具足し、亦た他人をして樂説辯才を具足せしむ。自ら色の成就を受け、亦た他人を教へて色の成就を受けしむ。自ら三十二相を成就し、亦た他人をして三十二相を成せしむ。自ら童眞地を成就し、亦た他人をして童眞地を成就せしむ。自ら佛の十力を成就し、亦た他人を教へて佛の十力を成就せしむ。自ら四無所畏を行じ、亦た他人をして四無所畏を行ぜしむ。自ら十八不共法を行じ、亦た他人をして十八不共法を行ぜしむ。自ら大慈大悲を行じ、亦た他人を教へて大慈大悲を行ぜしむ。自ら一切種智を得、亦た他人を教へて一切種智を得せしむ。自ら一切の結使及び習を離れ、亦た他人を教へて一切の結使及び習を離れしむ。自ら法輪を轉じ、亦た他人を

阿耨多羅三藐三菩提に於いて動轉せず、能く深般若波羅蜜を得、得已りて能く受持し、讀誦し、乃至正しく憶念す。世尊よ、譬へば人の百由旬、若くは二百・三百・四百由旬の曠野險道を過ぎんと欣し、先づ諸相の、若くは放牧の者、若くは疆界、若くは園林、是の如き等の諸相を見るが故に、城邑聚落到に近けるを知り、是の人は是の相を見已りて是の念を作さく、「我が見る所の相の如くんば、當に城邑聚落の遠からざることを知るべし」と。心に安隱を得て賊難・惡蟲・飢渴を畏れざるが如し。世尊よ、菩薩摩訶薩も亦た是の如く、若し是の深般若波羅蜜を得、受持し、讀誦し、乃至正しく憶念せば、當に知るべし、近く阿耨多羅三藐三菩提の記を受くることを得ること久しからずと。當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は、聲聞辟支佛地に墮することを畏るべからず。是の諸の先相、所謂深般若波羅蜜なり、聞くことを得、見ることを得、受くることを得、乃至正憶念することを得るが故なり」と。佛、舍利弗に告げたまはく、「是の如し、是の如し。汝、復た説かんことを樂はば便ち説け」と。「世尊よ、譬へば人の大海を見んと欲し、心を發して往趣し、樹相を見ず、山相を見ざれば、是の人は未だ大海を見ずと雖も、大海の遠からざることを知るが如し。何となれば、大海(の邊)は處平らかにして、樹相無く、山相無きが故なり。是の如く世尊よ、菩薩摩訶薩は是の深般若波羅蜜を聞きて、受持し乃至正憶念する時、未だ佛前に劫數の記、若くは百劫・千劫・萬劫・百千萬劫を受けずと雖も、是の菩薩は自ら阿耨多羅三藐三菩提の記を受くること、近くして久しからざるを知る。何となれば、我れ是の深般若波羅蜜を聞き、受持し、讀誦し、乃至正しく憶念することを得るが故なり。世尊よ、譬へば初春に諸樹の陳葉已に墮つるが如きは、當に此の樹に新しき葉・華・果の出在すること、久しからざるを知るべし。何となれば、是の諸樹の先相を見ればなり。今久しからずして葉・華・果の出づることを知り。是の時、閻浮提の人は樹の先相を見て、皆な大に歡喜す。世尊よ、菩薩摩訶薩、是の深般若波羅蜜を聞くことを得、受持し讀誦し乃至正しく憶念し、説の如く行ぜば、當に知るべし、是の菩薩は善根を成就し多く諸佛を供養したてまつることを。是の菩薩は應に是の念を作すべし、先世の善根に追はれて阿耨多羅三藐三菩提に趣くと。是の因縁を以ての故に、是の深般若波羅蜜を見ることを得、聞くことを得、受持し、讀誦し、乃至正しく憶念し、説の如く行ぜば、是の中の諸天子の、會て佛を見たまつる者は歡喜踊躍して是の念を作してはく、「先の諸の菩薩摩訶薩も、亦た是の如き受記の先相あり。今是の菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提の記を受くることも亦た久しからず」と。世尊よ、譬へば母人の懷(妊)して身體の苦重く、行歩便ならず、坐起安からず、眠食轉た少く、言語を喜ばず、本習する所を壓ふ、苦痛を受くるが故に。異なる母人ありて其の先相を見、當に産生の久しからざるを知るべきが如し。菩薩摩訶薩も亦た是の如く

新學の菩薩、是の深智慧を聞かば、則ち心没せん。應當に阿鞞跋致の菩薩の前に在りて説くべし。阿鞞跋致は智慧深きが故に、信じて而も没せず。譬へば深水は小兒をして渡らしむべからず、應に大人をして渡らしむべきが如し」と。帝釋、舍利弗に問ふ、「若し新發意の菩薩の爲に説かば、何等の過有りや」と。舍利弗の答ふ、「是の新發意の者は、則ち信ぜずして心没し、心没するが故に、疑悔怖畏を生じ、若し一切空法を受くれば、我れ云何ぞ當に斷滅の中に墮すべき」と。若し受けずんば、佛の所説の法を、何ぞ受けざる可けん。是の故に怖畏して疑悔を生ず。若し心定まれば、則ち惡邪毀皆を生ず。毀皆の果報は地獄品の中に説くが如し。此の中には、略して三惡道の業因縁を種うれば、久久うして無上道を得難しと説く。

【經】釋提桓因、舍利弗に問ふ、「頗し未だ記を受けざる菩薩摩訶薩ありて、是の深般若波羅蜜を聞かんに、驚かず怖れざる者ありや不や」と。舍利弗の言はく、「是の如し、橋戸迦よ、若し菩薩摩訶薩ありて、是の深般若波羅蜜を聞き、驚かず怖れずんば、當に知るべし、是の菩薩は、阿耨多羅三藐三菩提の記を得ること、久しからず、一佛・兩佛に、過ぎざらん」と。佛、舍利弗に告げたまはく、「是の如し、是の如し。是の菩薩摩訶薩は久しく意を發し、六波羅蜜を行じ、多く諸佛を供養したてまつり、是の深般若波羅蜜を聞くも驚かず、畏れず、怖かず、聞いて即ち受持し、般若波羅蜜の中の所説の如く行ぜん」と。爾の時、舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、我れ譬喩を説かんと欲す。菩薩道を求むる善男子、善女人の、夢中に般若波羅蜜を修行し、禪定に入り、勤めて精進し、忍辱を具足し、戒行布施を守護し、内空外空を修行し、乃至道場に坐するが如きは、當に知るべし、是の善男子、善女人は、阿耨多羅三藐三菩提に近し」と。何に況んや、菩薩摩訶薩は、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲して、覺せる時、般若波羅蜜を修行し、禪定に入り、勤めて精進し、忍辱を具足し、戒行布施を守護して、而も疾く阿耨多羅三藐三菩提を成じ、道場に坐せざらんや。世尊よ、善男子、善女人の善根を成就し、般若波羅蜜を聞くことを得て受持し乃至説の如く行ずるに至らば、當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は久しく意を發して善根を種ふ、多く諸佛を供養し、善知識と相隨ふと。是の人は能く般若波羅蜜を受持し、乃至正しく憶念せば、當に知るべし是の人は近く阿耨多羅三藐三菩提の記を受くることを。當に知るべし、是の善男子、善女人は、阿鞞跋致の菩薩摩訶薩の如く、阿

觀れば、則ち深くして測る可からず。甚深なるが故に測量す可きこと難く、唯だ諸佛のみ有りて乃ち其の底を盡くしたまふ。甚深にして測量す可からざるが故に無量と名く。智慧あること無ければ能く色等の實相の若くは常、若くは無常を取る。籌量して過罪あるが故に。是の時、舍利弗及び諸の聽者は是の念を作す、「般若波羅蜜は測量す可からず、量あること無し。菩薩は當に云何にして行すべきや」と。佛、其の念を知り、舍利弗に告げたまはく、「菩薩摩訶薩、若し色等の甚深を行すれば、則ち般若波羅蜜を失すと爲し、若し色の甚深を行ぜざれば、是れ般若波羅蜜を得と爲す」と。凡夫は鈍根なるが故に甚深と言ひ。若し一心に福德ありて、利根なる者は、甚深に非すと爲す。譬へば水の深淺に定無く、若し小兒に於いては則ち深きも、長者には則ち淺く、乃至大海は人に於いては則ち深く、羅睺阿修羅王に於いては則ち淺きが如し。是の如く凡夫の人と、新發意の懈怠の者とに於いては甚深と爲すも、久しく徳を積みたる阿鞞跋致に於いては則ち淺し。諸佛は羅睺阿修羅王の如く、一切の法に於いて深き者あること無し。無礙解脫を得るが故なり。是を以ての故に知りぬ。衆生及び時節・利鈍・初久の懈怠精進の爲の故に分別して深淺を説くことを。測量す可からず、量あること無きも亦た是の如し。此の中に佛自ら因縁を説きたまはく、色等の法の甚深の相なるを色に非すと爲す。何となれば怖畏心・疑悔心を没すればなり。色を以て甚深と爲すに、色相には則ち深なること無きこと、先に説くが如し。舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、是の般若波羅蜜は甚深なり」と。甚深の相は見難く、解し難し。

問うて曰はく、上には菩薩の甚深を行ぜざるを、般若波羅蜜を行すと爲すと説けり。今、舍利弗は何を以てか復た甚深を説けるや。

答へて曰はく、舍利弗は定心に甚深を説くに非ず。佛の意趣を得、人の爲の故に甚深を説くなり。是の故に是の中に説けり、「世尊よ、新發意の菩薩の前に於いて、是の般若波羅蜜を説くべからず。



是を以ての故に、住せざる者は、能く般若波羅蜜を習行す。五衆・十二入・十八界も亦た是の如し。

問うて曰はく、何を以ての故に、六波羅蜜等の各々に住せずして、自ら其の行を習ふや。

答へて曰はく、是の六波羅蜜等は、皆な是れ善法の行法なり。是を以ての故に、六度等に住せざるを説いて、各其の行を習ふと言ふ。衆・界・入も、般若波羅蜜を習行すと爲す。若し是の法中に於いて著せざれば、則ち愛著を斷ず、愛著を斷ずるが故に、色等の諸法の中は清淨の習なり。此の中に住せざる因縁を説く、所謂色等の法の住處を得ず、色等の法の習處を得ざるなり」と。

復次に、佛は此の事は解し難きを以ての故に更に因縁を説きたまへり。色を習せずとは、是の菩薩は色の過を見るが故に色中に住せず、住せざるが故に習せず。色を習せば、色相の若くは常、若くは無常等を取ると名く。

復次に、菩薩は常に善法を行じ、正語正業等を積習して、純厚なるが故に、色を習すと名く。今、菩薩は般若を行ぜんと欲するが故に、是の色を散壞して習はず。所以何となれば、過去の色は已に隨つて滅し、未來の色は未だ有らざるが故に習ふ可からず。現在の色は生ずる時、即ち滅するが故に住せざるなり。若し一念に住するすら尙ほ習ふこと無し、何に況んや念念に滅するをや。是の故に是の中に色を習はざる因縁を説く。三世の色は不可得なり、乃至十八不共法も亦た是の如し。若し能く是の如く諸法の散壞を觀じて相を取らざれば、是れ能く色等の諸法の實相を習ふと名く。

爾の時、舍利弗は佛よりは是の義を聞き、歡喜して深く空智に入り、佛に白さく、「般若波羅蜜は甚深なり」と。佛は然も可して其の讚する所を成じたまはく、「色等の諸法は如なるが故に甚深なり」と。佛の語りたまはく、「但だ眼に色の甚深なることを見るのみにあらず、般若波羅蜜を以て色を分別して如實に入るが故に甚深なり。雨の滯滯を甚深と名けず、和合せる衆流の大海に入るを乃ち甚深と名くるが如し。色等も亦た是の如く天眼肉眼は、見ること淺くして深からず。若し慧眼を以て

色是れ無量相なれば、色に非ずと爲し、受想行識乃至十八不共法の無量相は十八不共法に非ずと爲せばなり」と。舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、是の般若波羅蜜は甚深にして、甚深の相は、見難く解し難く思量す可からず。新發意の菩薩の前に在りて説くべからず。何となれば、新發意の菩薩は、是の甚深の般若波羅蜜を聞かば、或は當に驚怖し、心に疑悔を生じ、是の甚深の般若波羅蜜を信ぜず、行ぜざればなり。當に阿耨跋致の菩薩摩訶薩の前に在りて説くべし。是の菩薩は、是の甚深の般若波羅蜜を聞きて、驚かず怖かず、心に疑悔せざれば、則ち能く信行す」と。

釋提桓因、舍利弗に問ふ、「若し新發意の菩薩摩訶薩の前に在りて、是の深般若波羅蜜を説かば、何等の過ありや」と。舍利弗、釋提桓因に報ふ、「憍尸迦よ、若し新發意の菩薩の前に在りて、是の深般若波羅蜜を説かば、或は當に驚怖し毀皆して信ぜざるべし。是の新發意の菩薩或は是處に有り。若し新發意の菩薩、是の深般若波羅蜜を聞き、毀皆して信ぜざれば、三惡道の業を種ゑ、是の業因縁の故に、久久しく阿耨多羅三藐三菩提を得ること難からん」と。

【論】釋して曰はく、爾の時、帝釋は佛より般若波羅蜜の具足を讚じたまふを聞くが故に、今、佛に問ふ、「菩薩は云何なれば般若波羅蜜・禪波羅蜜、乃至十八不共法に住するや」と。佛、讚じて、「善い哉、善い哉」と言へるは、釋提桓因は諸天中の主たるを以て、言必ず信すべく、是の事を問うて、大衆の疑を斷じ、通達無礙にして、能く大に利益するが故に、善い哉、善い哉と言へるなり。

復次に、佛は帝釋の能く上妙の五欲・七寶の宮殿を捨て、以て能く佛に賢聖の所行の事を問ふ。是の故に善い哉と言へり。佛の神力を以ての故に、汝は能く樂んで此の事を問ふ。是の中、更に上妙の諸天ありて、佛の神徳無量なることを觀ず。今、帝釋は能く大衆の中に於いて、佛事を諮問するが故に、是れ佛の威神なり。持心經に説くが如し。佛の光明身中に入りて能く佛事を問ふ。「佛、憍尸迦に答へたまはく、若し菩薩は色等に住せず、是れ般若波羅蜜を習行するなり」とは、是の菩薩は色の無常・苦等の過罪を見るが故に色に住せず、若し色に住せざれば、即ち是れ能く般若波羅蜜を習行するなり。凡夫の人は色を見て色に著するが故に、顛倒煩惱を起し、是の般若波羅蜜の道を失す。

羅蜜に住せざるを名けて、般若波羅蜜を習すと爲す。憍尸迦よ、内空中に住せざるを、内空を習すと爲し、乃至無法有法空に住せざるを、無法有法空を習すと爲し、四禪に住せざるを、四禪を習すと爲し、四無量心に住せざるを、四無量心を習すと爲し、四無色定に住せざるを、四無色定を習すと爲し、五神通に住せざるを、五神通を習すと爲し、四念處に住せざるを、四念處を習すと爲し、乃至八聖道分に住せざるを、八聖道分を習すと爲し、佛の十力に住せざるを、佛の十力を習すと爲し、乃至十八不共法に住せざるを、十八不共法を習すと爲す。何となれば憍尸迦よ、是の菩薩は色の住す可く習す可き處を得ず、乃至十八不共法は十八不共法の住す可く習す可き處を得ざればなり。

復次に、憍尸迦よ、菩薩摩訶薩は色を習せず。若し色を習せざれば、是を色を習すと名く。受想行識乃至十八不共法も亦た是の如し。何となれば、是の菩薩摩訶薩には、色の前際も不可得、中際も不可得、後際も不可得なればなり、乃至十八不共法も亦た是の如しと。

舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、是の般若波羅蜜は甚深なり」と。佛の言はく、「色如は甚深なるが故に、般若波羅蜜は甚深なり。受想行識如は甚深なるが故に、般若波羅蜜は甚深なり。乃至十八不共法も亦た是の如し」と。舍利弗の言さく、「世尊よ、是の般若波羅蜜は測量す可きこと難し」と。佛の言はく、「色は測量す可きこと難きが故に、般若波羅蜜は測量す可きこと難く、受想行識乃至十八不共法は測量す可きこと難きが故に、般若波羅蜜は測量す可きこと難し」と。「世尊よ、是の般若波羅蜜は無量なり」と。佛の言はく、「色は無量なるが故に、般若波羅蜜は無量なり。受想行識乃至十八不共法は無量なるが故に、般若波羅蜜は無量なり」と。佛、舍利弗に告げたまはく、「若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、色の甚深を行ぜざるを、般若波羅蜜を行ずと爲し、受想行識(の甚深)を行ぜず、乃至十八不共法の甚深を行ぜざるを、般若波羅蜜を行ずと爲す。何となれば色の甚深の相を、色に非ずと爲し、受想行識乃至十八不共法の甚深の相を、十八不共法に非ずと爲す。是の如く行ぜざるを、般若波羅蜜を行ずと爲す。舍利弗よ、若し菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時、色の測量し難きを行ぜざるを、般若波羅蜜を行ずと爲し、受想行識(の測量し難き)を行ぜず、乃至十八不共法の測量し難きを行ぜざるを、般若波羅蜜を行ずと爲す。何となれば、色の測量し難き相は色に非ずと爲し、受想行識乃至十八不共法の測量し難き相を、十八不共法に非ずと爲せばなり。

舍利弗よ、若し菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時、色の無量を行ぜざるを、般若波羅蜜を行ずと爲し、受想行識(の無量)を行ぜず、乃至十八不共法の無量を行ぜざるを、般若波羅蜜を行ずと爲す。何となれば

に生じ、續いて復た信ぜず」と。

復次に、有人の言はく、「五逆罪は次後の身に必ず餘罪を受くることは爾らず。或は次の後身、或は久しくしての後身なり」と。爾の時に、帝釋、舍利弗に語るらく、「是の般若波羅蜜は、畢竟空にして、所有無きが故に、甚深なり。菩薩は久しく功德を行ぜざれば、則ち著心堅固にして、信心微弱なり。般若波羅蜜、乃至一切智を信ぜざるは、何ぞ怪しむに足らん」と。帝釋思惟籌量すらく、「般若波羅蜜を信すれば、福德無量にして、信ぜざる者は罪を得ること深重なり」と。深く般若波羅蜜を愛敬するが故に、是の言を發すらく、「我れ當に是の般若を禮すべし。何となれば、般若を禮することは、則ち一切智を禮すと爲し、一切智を禮することは、則ち十方三世の諸佛を禮すべし」と。爾の時、佛、其の言を可とし、復た般若波羅蜜を讚する因縁を説きたまふ。「所謂、諸佛の一切智慧は皆な般若の中より生ず」と。是の故に言はく、「菩薩ありて一切智の中に住し、乃至比丘僧を總攝せんと欲せば、當に般若波羅蜜を習すべし」と。

【經】〔爾の時〕、釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ぜんと欲する時、云何なれば般若波羅蜜・禪波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・毘提波羅蜜・尸羅波羅蜜・檀波羅蜜に住すと名くるや。云何なれば内空乃至無法有法空に住し、云何なれば四禪・四無量心・四無色定・五神通に住し、云何なれば四念處乃至八聖道分に住し、云何なれば佛の十力乃至十八不共法に住するや。世尊よ、菩薩摩訶薩は、云何なれば般若波羅蜜乃至檀波羅蜜、内空乃至十八不共法を習するや」と。佛、釋提桓因に語りたまはく、「善い哉、善い哉。憍尸迦よ、汝は能く樂んで是の事を問ふ。皆な是れ佛の力なり。憍尸迦よ、若し菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時、若し色中に住せざるを、般若波羅蜜を習すと爲し、若し受想行識中に住せざるを、般若波羅蜜を習すと爲す。眼・耳・舌・身・意・色・聲・香・味・觸・法・眼界乃至意識界も亦た是の如し。憍尸迦よ、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜の中に住せざるを、般若波羅蜜を習すと爲し、禪波羅蜜の中に住せざるを、禪波羅蜜を習すと爲し、毘梨耶波羅蜜の中に住せざるを、毘梨耶波羅蜜を習すと爲し、毘提波羅蜜の中に住せざるを、毘提波羅蜜を習すと爲し、尸羅波羅蜜の中に住せざるを、尸羅波羅蜜を習すと爲し、檀波羅蜜の中に住せざるを、檀波羅蜜を習すと爲す。是の如く、憍尸迦よ、是の菩薩摩訶薩の般若波

さざれば、淺薄にして他人の語に隨ひ、般若波羅蜜を信受すること能はず。若し久しく福德を修すれば、他人の語に隨はずして、則ち能く深般若波羅蜜を信受し、驚かず怖かず」と。帝釋は思惟すらく、「般若波羅蜜を念するに、無量の功德有り」と。時に舍利弗は帝釋の念する所を知り、而して佛に白して言さく、「世尊よ、善男子、善女人は、未だ菩薩位に入らずと雖も、能く深般若波羅蜜を信受して、驚かず、怖かず、説の如く修行す。是の人は大福德・智慧・信力の故に、當に知るべし、阿鞞跋致の如くにして、異なること無し」と。此の中に佛自ら因縁を説きたまはく、「般若波羅蜜は甚深にして相無く、取る可く信す可く受く可し。若し能く信受すれば、是を希有と爲すこと、人の空中に種を殖うる、是を甚だ難しと爲すが如し」と。一切の凡人は勝法を得れば、則ち本事を捨つ。禪定の樂を得れば、五欲の樂を捨て、乃至有頂處に依りて、無所有處の功德を捨つるが如し。依止する所無ければ、而も捨つる所有ること能はず。尺蠖の條を尋ねて前足を安じ、後足を進め、樹の端を盡くせば、更に依止する所無くして、本處に還歸するが如し。是の菩薩は、未だ道を得ざれば般若波羅蜜に於いて、依止する所無く、而も能く福德を修し、五欲を捨つ。是の事は希有なり。是の中に因縁を説く。是の人は先世に信受して、久しく六波羅蜜を行じ、大に諸の福德を集む。信と相違すれば、則ち般若波羅蜜をも毀皆す。福德を厚くする者の久しき従り積集するが如く、不信にして毀皆する者も亦た久しきより習ふ。

問うて曰はく、若し先世に毀皆し誹謗せば、應に地獄に墮すべし。何の緣あつてか復た般若を聞くことを得るや。

答へて曰はく、有人の言はく、「是の人は地獄に墮し罪畢り還り來りて毀皆す。次の後身を説かず」と。有人の言はく、「作業を積集すること厚重なれば、則ち能く果報を與ふ。是の人は前世に信ぜずと雖も、而も業を積むこと、未だ厚からざれば、則ち未だ果報を得ず。餘の福德を以ての故に人中

如きの人は是の深般若波羅蜜を信解せず、何の怪むべきこと有らん。大徳舍利弗よ、我は般若波羅蜜を禮す。般若波羅蜜を禮するは、是れ一切智を禮するなり」と。

佛、釋提桓因に告げたまはく、「是の如し、是の如し。憍尸迦よ、般若波羅蜜を禮するは、是れ一切智を禮するなり。何となれば、憍尸迦よ、諸佛の一切智は、皆な般若波羅蜜より生じ、一切智は即ち是れ般若波羅蜜なればなり。是を以ての故に、憍尸迦よ、善男子、善女人は、一切智に住せんと欲せば、當に般若波羅蜜を習行すべし。波羅蜜に住すべし。若し善男子、善女人にして、道種智を生ぜんと欲せば、當に般若波羅蜜を習行すべし。一切の諸の結及び習を斷せんと欲せば、當に般若波羅蜜を習行すべし。善男子、善女人にして、法輪を轉ぜんと欲せば、當に般若波羅蜜を習行すべし。善男子、善女人にして、須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を習行すべし。辟支佛道を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を習行すべし。辟支佛道を得せしめんと欲せば、當に般若波羅蜜を習行すべし。若し善男子、善女人、衆生を教へて阿耨多羅三藐三菩提を得せしめんと欲し、若くは比丘僧を總攝せんと欲せば、當に般若波羅蜜を習行すべし」と。

【論】釋して曰はく、釋提桓因は是れ諸天の主なり。利根にして智勝れ、佛法を信するが故に、倍復た増益す。火の風を得れば、愈更に熾盛なるが如し。須菩提、種種の因縁を以て、般若波羅蜜を讚じ、佛の深理を以て、其の讚する所を成じたまふを聞き、帝釋は希有の心を發して、是の念を作さく、「若し善男子、善女人、般若經を聞く耳を得る者も、是の人は前世に於いて、多く諸佛を供養したてまつりて大功德を作し、今世に好師、同學等の善知識に遇ふことを得。先世に佛を供養するを因とし、今世の善知識を縁とするが故に、般若波羅蜜を聞いて能く信す。何に況んや讀誦し、思惟し、正憶念し、禪定を修習し、義趣を籌量して分別し、能く事を成辦する者をや」と。當に知るべし、是の人は過去の諸佛及び弟子より深般若波羅蜜の義を聞き、信受して怖かず畏れざるなり。何となれば、是の人は無量阿僧祇劫に於いて、六波羅蜜等の諸の功德を行す。是の故に未だ阿鞞跋致地を得ずと雖も、深法の中に於いて、疑はず悔いさればなり。譬へば新劈乾毳は風に隨つて東西し、濕雲縹緞は則ち動す可からざるが如し。新發意の菩薩も亦た是の如く、久しく徳を修し福を作

## 卷の第六十六

## 第四十五 歎信行品

【經】

爾の時、釋提桓因は是の念を作さく、「若し善男子、善女人、般若波羅蜜經を聞く耳を得ば、是の人は前世に佛の所に於て、功德を作し、善知識と相隨ふ。何に況んや受持し、親近し、讀誦し、正憶念し、説の如く行ぜんをや。當に知るべし。是の善男子、善女人は、多く諸佛に親近し、能く聽受し、乃至正しく憶念し、説の如く行じ、能く問ひ、能く答ふるを得ることを。當に知るべし。是の善男子、善女人は、前世に於て、多く諸佛を供養し親近するが故に、是の深般若波羅蜜を聞いて、驚かず怖かず畏れずと。當に知るべし、是の人は亦た無量億劫に於いて、檀波羅蜜・尸羅波羅蜜・羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜・妙若波羅蜜を行ぜり」と。

爾の時、舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、若し善男子、善女人ありて、是の深般若波羅蜜を聞いて、驚かず、怖かず、畏れず、聞き已つて受持し、親近し、説の如く習行せば、當に知るべし、是の善男子、善女人は、阿鞞跋致の菩薩摩訶薩の如しと。何となれば、世尊よ、是の般若波羅蜜は甚深なればなり。若し先世に久しく檀波羅蜜・尸羅波羅蜜・羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜・般若波羅蜜を行ぜずんば、終に深般若波羅蜜を信解すること能はず。世尊よ、若し善男子、善女人ありて、深般若波羅蜜を皆毀せば、當に知るべし、是の人は前世にも、亦た深般若波羅蜜を皆毀すと。何となれば、是の善男子、善女人は、深般若波羅蜜を説くを聞く時、信ずること無く、樂ふこと無く、心清淨ならざればなり。當に知るべし、是の善男子、善女人は、先世に諸佛及び弟子に問はず難せず、(即ち)云何にして應に檀波羅蜜・尸羅波羅蜜・羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜・般若波羅蜜を行すべきや。云何にして應に内空を修すべきや。乃至云何にして當に無法有法空を修すべきや。云何にして應に四念處を修すべきや。乃至、云何にして應に八聖道分を修すべきや。云何にして應に佛の十力を修すべきや。乃至、云何にして應に十八不共法を修すべきや」と。

釋提桓因、舍利弗に語るらく、「是の深般若波羅蜜は、若し善男子、善女人ありて、久しく檀波羅蜜・尸羅波羅蜜・羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜・般若波羅蜜を行ぜず、内空乃至無法有法空を行ぜず、四禪・四無量心・四無色定を行ぜず、四念處乃至八聖道分を行ぜず、佛の十力乃至十八不共法を行ぜずんば、是の

【一】宋元明宮の諸本は俱に「開持品」に作る。但し明本は「經作經耳開持品」七字の夾註を附す。又た聖本は「運耳品」に作る。

復次に是の般若波羅蜜の實相は自然にして他に由りて作らざるが故に自然と名く。佛の言はく、「佛は一切法の中にて、自在力を得たまふが故に、自然波羅蜜と名く」と。十地を具足し、十力四無所畏を得、法輪を轉じ、法鼓を撃つて、世間の無明に睡れる衆生を覺するが故に、名けて佛波羅蜜と爲す。佛は秦には覺者、知者と言ふ。何者か是なる。所謂、正しく一切法、一切種を知るが故に覺と名く。一切法とは、所謂五衆・十二入・十八界等なり。

復次に、一切法は、外道の經書、伎術、禪定等に名け、略說するに五種あり。所謂、凡夫法、聲聞法、辟支佛法、菩薩法、佛法なり。佛には略して知るに二種の相あり。所謂、總相と別相となり。又た分別相と畢竟空相とを以てす。廣く知れば則ち一切種なり。一切種は是れ一切無量無邊の法門なり。是の事を以ての故に、名けて佛波羅蜜と爲す。佛身を以ての故に、名けて佛波羅蜜と爲すにあらず、但だ一切種智を以ての故なり。



破す可からず、亦た伏す可からず」と。佛意は衆生の爲の故に十力を説きたまへり。佛力は無量無邊なり。佛力の如く、一切法の實相も、亦た是の如し。伏す可からざるが故に、十力波羅蜜と名く。

菩薩は是の般若波羅蜜の力を得て、佛前に於いて能く説法論議す、何に況んや餘處をや。尙ほ魔王をすら畏れず、何に況んや外道をや。故に無所畏波羅蜜と名く。佛の言はく、「道種智は没せざるが故に、道種智は法眼に名く」と。一切衆生の何の道を以て涅槃を得るかを知るなり。般若波羅蜜は常寂滅の相にして不可説なり。此の菩薩は道種智を以ての故に衆生を引導し、大衆の中に於いて師子吼し、道種智を増益するが故に没せず、畏るる所無く、自ら我に是の法ありて無畏波羅蜜と名くと僣慢せず。須菩提は佛より法を聞き、畏るること無きこと、轉た深きが故に、般若波羅蜜を讚じて無礙波羅蜜と言ふ。佛の言はく、「但だ四無礙のみに非ず。一切法は如・法性・實際に入るが故に、皆な是れ無礙相なり」と。菩薩は般若波羅蜜に因りて、能く十力・四無所畏・四無礙智・大慈大悲等の諸の佛法を集むるが故に、佛法波羅蜜を説く。佛の言はく、聲聞法は凡夫法より勝れりと爲し、辟支佛法は聲聞法より勝れりと爲し、佛法は一切の法に於いて最とも勝れたり。一切の色中にて虚空は廣大なるが如く、佛法は最勝にして、能く及ぶもの無く、喩ふべきもの無し。一切法を過ぐるが故に佛法波羅蜜と名く。過去佛の六波羅蜜を行じて、諸法の如相を得たまふが如く、今佛も亦た是の如し。六波羅蜜を行じて佛道を得たまへり。故に多陀阿伽陀波羅蜜と名く。多陀阿伽陀とは、或は如來と言ひ、或は如實説と言ひ、或は如實知と言ふ。此の中に佛の説きたまはく、「但だ佛説を如實説と名くるのみに非ず、一切の語言は、皆な是れ如實なるが故に、如實説波羅蜜と名く」と。是の般若波羅蜜を具足し、後身に自然に作佛するが故に、自然波羅蜜と名く。自然を佛と名け、佛の説きたまふ所なるが故に、自然波羅蜜と名く。

なるが故に無常なり。般若波羅蜜の所縁處なる、如・法性・實際は無爲法なるが故に常なり、須菩提は有爲の般若を説くが故に、般若は無常なりと言ふ。

問うて曰はく、若し爾らば、佛は何を以てか、一切法は盡く是れ破壊し無常にして、無爲法は破壊無きの相なりと説きたまへるや。

答へて曰はく、一切法は六情に名く。内外は皆な是れ作法なり。作法なるが故に必ず破壊の相に歸す。有爲法を離れて無爲法無く、亦た更に法相有ること無し。有爲法相に因るが故に無爲法は不生不滅なりと説く。

復次に、一切の有爲法に二種あり。一には名字一切、二には實の一切なり。一切の有爲法は破壊するが故に、一切の無常苦等に名く。乃至、無法有法空も亦た是の如し。須菩提は一切の法相を説いて般若を讚じ、佛は一切法を擧げて答へたまへり。正しく身等の四法を觀することは、四念處より生じ、四念處は是れ四諦の初門、四諦は是れ四沙門果の初門なり。阿羅漢果は分別すれば、即ち是れ三乘なり。四念處は般若波羅蜜の中に種種に廣く説けり。佛の言はく、「是の四種の法の縁處は、本より已來、皆な不可得なるが故に、念處波羅蜜と名く」と。四正勤より乃至般若波羅蜜までも亦た是の如し。

問うて曰はく、餘法を以て般若を讚すべし、云何なれば復た般若を以て般若を讚するや。

答へて曰はく、二種の般若あり。一には常住の般若、二には五波羅蜜と共に行じて般若波羅蜜を用ふること有り。須菩提の讚するは般若波羅蜜を用つて能く無明の黑闇を破し、能く眞智慧を興ふること有り。是の故に佛は常住般若波羅蜜を説きたまへり。癡と慧とは、不可得なるが故なり。是の般若波羅蜜を行する菩薩は、初に菩薩の十力を得、後に佛の十力を得。是の故に、十力波羅蜜を説く。佛の言はく、「但だ十力の者のみ破す可からず、伏す可からざるに非ず、一切法の實相も亦た

の言はく、「五力は不可得なるが故なり」と〔七十〕。「世尊よ、覺波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「七覺分は不可得なるが故なり」と〔七十一〕。「世尊よ、道波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「八聖道分は不可得なるが故なり」と〔七十二〕。「世尊よ、無作波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「無作は不可得なるが故なり」と〔七十三〕。「世尊よ、空波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「空相は不可得なるが故なり」と〔七十四〕。「世尊よ、無相波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「寂滅相は不可得なるが故なり」と〔七十五〕。「世尊よ、背捨波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「八背捨は不可得なるが故なり」と〔七十六〕。「世尊よ、定波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「九次第定は不可得なればなり」と〔七十七〕。「世尊よ、檀波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「慳貪は不可得なるが故なり」と〔七十八〕。「世尊よ、尸羅波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「破戒は不可得なるが故なり」と〔七十九〕。「世尊よ、屬提波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「忍・不忍辱は不可得なるが故なり」と〔八十〕。「世尊よ、毘梨耶波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「懈怠、精進は不可得なるが故なり」と〔八十一〕。「世尊よ、禪波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「定亂は不可得なるが故なり」と〔八十二〕。「世尊よ、般若波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「癡慧は不可得なるが故なり」と〔八十三〕。「世尊よ、十力波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「一切法は伏す可からざるが故なり」と〔八十四〕。「世尊よ、無所畏波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「道種智は没せざるが故なり」と〔八十五〕。「世尊よ、無礙智波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「一切諸法は無障、無礙なるが故なり」と〔八十六〕。「世尊よ、佛法波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「一切法を過ぐるが故なり」と〔八十七〕。「世尊よ、如實說者波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「一切の説は如實なるが故なり」と〔八十八〕。「世尊よ、自然波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「一切法中に自在なるが故なり」と〔八十九〕。「世尊よ、佛波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「一切法、一切種智を知るが故なり」と〔九十〕。

【論】釋して曰はく、般若波羅蜜の中に、無常の聖行有り、故に無常波羅蜜と名く。佛の言はく、但だ般若の中にのみ無常あるに非ず、一切法の無常を觀するが故に、無常波羅蜜と名く」と。

問うて曰はく、上來、般若波羅蜜の法性常住なることを説けり。今、何を以てか無常なりと説くや。答へて曰はく、般若波羅蜜は是れ智慧觀法なり。因縁の和合することに從つて生ず。是れ有爲法

「世尊よ、苦波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「一切法は苦惱の相なるが故なり」と〔四十五〕。  
「世尊よ、無我波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「一切法に著せざるが故なり」と〔四十六〕。  
「世尊よ、空波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「一切法は不可得なるが故なり」と〔四十七〕。  
「世尊よ、無相波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「一切法は不生なるが故なり」と〔四十八〕。  
「世尊よ、内空波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「内法は不可得なるが故なり」と〔四十九〕。  
「世尊よ、外空波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「外法は不可得なるが故なり」と〔五十〕。「世尊よ、内外空波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「内外法は不可得なるが故なり」と〔五十一〕。  
「世尊よ、空空波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「空空法は不可得なるが故なり」と〔五十二〕。  
「世尊よ、大空波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「一切法は不可得なるが故なり」と〔五十三〕。  
「世尊よ、第一義空波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「涅槃は不可得なるが故なり」と〔五十四〕。  
「世尊よ、有爲空波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「有爲法は不可得なるが故なり」と〔五十五〕。  
「世尊よ、無爲空波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「無爲法は不可得なるが故なり」と〔五十六〕。  
「世尊よ、畢竟空波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「諸法は畢竟不可得なるが故なり」と〔五十七〕。  
「世尊よ、無始空波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「諸法の無始は不可得たるが故なり」と〔五十八〕。  
「世尊よ、散空波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「散法は不可得なるが故なり」と〔五十九〕。  
「世尊よ、性空波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「有爲・無爲法は不可得なるが故なり」と〔六十〕。  
「世尊よ、諸法空波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「一切法は不可得なるが故なり」と〔六十一〕。  
「世尊よ、自相空波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「自相を離るるが故なり」と〔六十二〕。  
「世尊よ、無法空波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「無法は不可得なるが故なり」と〔六十三〕。  
「世尊よ、有法空波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「有法は不可得なるが故なり」と〔六十四〕。  
「世尊よ、無法有法空波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「無法有法空は不可得なるが故なり」と〔六十五〕。  
「世尊よ、念處波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「身・受・心・法は不可得なるが故なり」と〔六十六〕。  
「世尊よ、正勤波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「善・不善法は不可得なるが故なり」と〔六十七〕。  
「世尊よ、如意足波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「四如意足は不可得なるが故なり」と〔六十八〕。  
「世尊よ、根波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「五根は不可得なるが故なり」と〔六十九〕。  
「世尊よ、力波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛

り。般若波羅蜜の中には、是の諸邊無きが故に、無二邊波羅蜜と名く。佛の言はく、「是の諸邊は本より已來、無にして、但だ虚誑顛倒を以ての故に著す。菩薩は實事を求むるが故に是の顛倒の邊を離る。是の般若波羅蜜は一相にして空なるが故に破す可からず」と。

佛の言はく、但だ般若波羅蜜のみにあらず。一切法には皆な定異の相無し。果は因を離れず、因は果を離れざるが如く、有爲法は無爲法を離れず、無爲法は有爲法を離れず、般若波羅蜜は一切法を離れず、一切法は般若波羅蜜を離れず、一切法の實相は、即ち是れ般若波羅蜜なるが故に、不破波羅蜜と名く。破とは、所謂諸法は各各離散し、一切法は常無常等の過失あり、是の故に般若波羅蜜は一切法を取らず。

佛の言はく、「一切法は乃至二乘、出世間の清淨法をも亦た取らざるが故に不取波羅蜜と名く」と。分別とは、相を取るに名け、心を生じて妄想分別するなり、般若波羅蜜は是れ實相なるが故に是の妄想分別無し。佛の言はく、「憶想分別に因りて有無を分別す。今憶想分別は、本より已來、無なるが故に、無分別波羅蜜と名く」と。

般若波羅蜜は四無量を出すが故に無量波羅蜜と名く。復次に、畢竟空は涅槃の無量法を得るが爲の故に無量と名く。復次に、智慧の到る能はざる所の邊崖、是を無量と名く。是は六情の籌度する所に名く。是の法空は無相にして生滅無く、六情の量ること能はざる所なり。何となれば物は多く、而も量器は小なるが故なり。佛の言はく、「但だ是の般若波羅蜜のみ無量なるに非ず、色等の一切法は、不可得なるが故に、皆な無量なり」と。

虚空の無色無形にして、能く作す所無きが如く、般若波羅蜜も亦た是の如し。佛の言はく、「但だ虚空のみ無所有なるに非ず、色等の諸法は皆な無所有なるが故に、虚空波羅蜜と名くと。

【經】「世尊よ、無常波羅蜜は、是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「一切法は破壊なるが故なり」と(四十四)。

無常にして破壊するも心に憂を生ぜず。是の如き等の因縁の故に、不動波羅蜜と名く。

一切法は妄解にして、但だ愛染のみに非ざるが故に、無染波羅蜜と名く。

憶想分別は、是れ一切の結使の根本にして、結使有りて能く後身の業を起し、憶想分別の虚妄なることを知れば、一切後生の生業、更に復た起らず、故に是れを不起波羅蜜と名く。

般若波羅蜜の中には、三毒の火相を取らざるが故に寂滅波羅蜜と言ふ。

佛の言はく、「但だ三毒の相寂滅なるのみに非ず、一切の法相は不可得なるが故に、是の般若波羅蜜より、乃ち善法中に至るまで尙ほ貪らず、何に沉んや餘の欲をや」と。佛の説きたまはく、「欲は本より已來、不可得なるが故に、貪欲は虚誑にして、自性は不可得なるが故に、無欲波羅蜜と名く。是れ欲を離るるに非ざるが故に無欲と名く。

瞋恚の性は、畢竟無所有なるが故に、無瞋波羅蜜と名く。是れ瞋を離るるに非ざるが故に無瞋と名く。

一切法の中の、無明の黒闇を破するが故に、無癡波羅蜜と名く。是れ癡を滅するに非ざるが故に無癡と名く。

無煩惱波羅蜜とは、菩薩は無生法忍を得るが故に、一切の煩惱を滅す。佛の言はく、「憶想分別は是れ煩惱の根本なり。憶想すら尙ほ無し、何に沉んや煩惱をや」と。故に無煩惱波羅蜜と名く。

般若は能く破す。衆生無き中に、衆生有りて顛倒するが故に、無衆生波羅蜜と名く。佛の言はく、「是の衆生は本より已來、不生にして所有無きが故に、無衆生と名く」と。

須菩提の意おもへらく、「般若波羅蜜は、能く一切の有漏法を斷するを以ての故に、斷波羅蜜と名く」と。佛の言はく、「諸法は不起不生、所作無く、諸法は自然に斷相なるが故に斷と名く」と。

二邊とは、所謂、我・無我、斷・無斷、可斷法・無斷法、常・滅、有・無、是の如き等の無量の二邊な

と〔三十六〕。「世尊よ、斷波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「諸法は不起なるが故なり」と〔三十七〕。「世尊よ、無二邊波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「二邊を離るるが故なり」と〔三十八〕。「世尊よ、不破波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「一切法は不離なるが故なり」と〔三十九〕。「世尊よ、不取波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「聲聞、辟支佛地を過ぐるが故なり」と〔四十〕。「世尊よ、不分別波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「諸の妄想は不可得なるが故なり」と〔四十一〕。「世尊よ、無量波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「諸法の量は不可得なるが故なり」と〔四十二〕。「世尊よ、虚空波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「一切法は無所有なるが故なり」と〔四十三〕。

【論】釋して曰はく、須菩提は般若波羅蜜を讚じて衆生に示す。世間は空にして夢の如し、佛の言はく、夢も亦た不可得なるが故に夢波羅蜜と名くと。響・影・焰・幻も亦た是の如し。人は心に聲を以て實と爲し、響を以て虚と爲し、影は人面鏡を以て實と爲し、かたち條を虚と爲す。焰は風・塵・日光を以て實と爲し、水を虚と爲す。幻は祝術を以て實と爲し、祝術の所作を以て虚と爲す。須菩提は般若を讚じ、喩を以て空と爲す。佛の説きたまはく、「喩の本事は皆な空なり。本事皆な空なるが故に是の喩も亦た空なり」と。

是の般若波羅蜜には垢けがれなく、能く一切の垢を斷滅す。佛の言はく、諸の煩惱は本よりこのかた已來常に無なり。今に何の斷する所あらんと。是の故に無垢波羅蜜と名く。無淨波羅蜜も亦た是の如し。

煩惱無ければ即ち是れ淨なり。婬欲瞋恚等の、諸の煩惱を名けて汚と爲す。是の般若波羅蜜は一切の垢法の汚さざる所なり。六情は是れ諸の煩惱の處、六情及び一切法は諸の煩惱の緣處住處なり。皆な不可得なるが故に、不汚波羅蜜と名く。

是の般若波羅蜜を得れば一切の戲論・憶想・分別滅するが故に、不戲論波羅蜜と名く。

一切法は畢竟空なるが故に、憶無く念想なし。憶無く念想なきが故に、無念波羅蜜と名く。

菩薩は一切の論議する者の勝つこと能はざる所、一切の結使、邪見の覆ふ能はざる所、一切法の

天眼は生死有ることを見る。空の慧眼を用つて生死を見るに不可得なり。生死は不可得なるが故に今世の衆生は死して後世に到る者なく、但だ五衆の先業の因縁相續の生なるが故に不到波羅蜜と名く。

般若波羅蜜は諸法實相を失せず、亦た能く一切法をして實相を失せざらしむ。般若波羅蜜を離るれば一切法は皆な失す。一切法の實相を觀すれば、般若波羅蜜を得。是の故に不失波羅蜜と名く。

【經】

「世尊よ、夢波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「乃至夢中に見る所は不可得なるが故なり」と  
「十八」。「世尊よ、響波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「聲を聞く者は不可得なるが故なり」と  
「十九」。「世尊よ、影波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「鏡面は不可得なるが故なり」と  
「二十」。「世尊よ、焰波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「水流は不可得なるが故なり」と  
「二十一」。「世尊よ、幻波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「術事は不可得なるが故なり」と  
「二十二」。「世尊よ、不垢波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「諸の煩惱は不可得なるが故なり」と  
「二十三」。「世尊よ、無淨波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「煩惱は虚誑なるが故なり」と  
「二十四」。「世尊よ、不汚波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「處は不可得なるが故なり」と  
「二十五」。「世尊よ、不戲論波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「一切の戲論は破るが故なり」と  
「二十六」。「世尊よ、不念波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「一切の念は破るが故なり」と  
「二十七」。「世尊よ、不動波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「法性は常住なるが故なり」と  
「二十八」。「世尊よ、無染波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「一切法は妄解なることを知るが故なり」と  
「二十九」。「世尊よ、不起波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「一切法は分別無きが故なり」と  
「三十」。「世尊よ、寂滅波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「一切の法相は不可得なるが故なり」と  
「三十一」。「世尊よ、無欲波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「欲は不可得なるが故なり」と  
「三十二」。「世尊よ、無瞋波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「瞋恚は不實なるが故なり」と  
「三十三」。「世尊よ、無癡波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「無明黑暗は滅なるが故なり」と  
「三十四」。「世尊よ、無煩惱波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「分別憶想は虚妄なるが故なり」と  
「三十五」。「世尊よ、無衆生波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「衆生は無所有なるが故なり」と



す、入る者は出づるに非ず、念念に生滅する不可得の實相なり。息は不可得なるが故に一切法も亦た不可得なり。不可得なるが故に空種波羅蜜と名く。

一切法は空寂の相なるが故に覺觀を須るす、覺觀無きが故に則ち言説無く、言説無きが故に、般若波羅蜜は語言の道を斷すと説く。是の故に不可説波羅蜜と名く。

二法は一切法を攝す。所謂、名と色なり。四大及び造色は、色の攝する所、受等の四衆は名の攝する所なり。諸法を分別する者は、般若波羅蜜は是れ智慧の相なりと説く、故に名に攝せらる。今、實に色を離れず、是を不離と名け、名は是れ色、是の般若波羅蜜は、知相無きが故に受想行識は不可得なりと説く。故に無名波羅蜜と名く。

一切法は、無來無去なるが故に、無去波羅蜜と名く。

般若波羅蜜は、是れ三世十方の佛の法藏にして、三法印を以て印し、無天、無人能く破するが故に、無移波羅蜜と名く。

諸の有爲法は、念念に盡く滅して、住する時有ること無し。若し爾れば過去の法は盡きず、未來の法も亦た盡きず、現在の法は住せざるが故に盡きず、三世盡く不可得なるが故に、名けて畢竟盡と爲し、畢竟盡の故に盡波羅蜜と名く。

一切法は三世の中より生じて、不可得なるが故に無生なり、無生なるが故に無生波羅蜜と名く。

不滅波羅蜜多も亦た是の如し。作に二種あり。一には衆生作、二には法作なり、衆生作とは、布施持戒等なり。法作とは、火の燒き、水の爛らする心識の所知なり。

無生は空なるが故に作者無く、一切法は鈍にして不起不作の相なるが故に法も亦た不作なり。是の二無作なるが故に、無作波羅蜜と名く。

無知波羅蜜も亦た是の如し。一切法は鈍なるが故に、所知無し。

蜜なり」と。無邊の義は品の初より竟まはりに至るまで皆な是れ無邊の義なり。餘事を説くことを妨ぐるが故に略して説く。若し廣く説かば則ち無量なり。

復次に、常は是れ一邊、無常も是れ一邊にして、我・無我・有・無・世間の有邊・無邊・衆生の有邊・無邊、是の如き等の法を名けて、邪見の邊と爲す。般若波羅蜜を得れば、則ち是の諸邊無きが故に、無邊と言ふ。

復次に、譬へば、物の盡くる處を名けて「有」邊と爲し、虚空は無色無形なるが故に、無邊なるが如く、般若波羅蜜は、畢竟清淨なるが故に、邊あること無く、盡くる「處」あること無く、取る處無く、受くる處無く、「著する處無し」是の故に佛、答へたまはく、「虚空の如く無邊なるが故に、般若波羅蜜も亦た無邊なり」と。

菩薩は法忍を得て、一切法を觀するに皆な平等なり。是の故に、一切法は等しきが故に等波羅蜜と言ふと説く。

菩薩は畢竟空心を用つて諸の煩惱を離れ、亦た諸法をも離る。是の故に離波羅蜜と名く。

菩薩は是の般若波羅蜜の總相別相を用つて、諸法を求むるに定相を得ず、毛髮許はかりの如きも、不可得なるを以ての故に、一切法に於いて心著せず。若し邪見戲論の人ありて、邪見戲論を用つて、是の菩薩を破壊せんと欲するに、是の菩薩は著する所無きが故に破壊すべからず。是れを不壞波羅蜜と名く。

此岸しがんを名けて生死と爲し、彼岸を涅槃と名け、中に諸の煩惱の大河有り、一切の出家の人は、此岸を捨てんと欲して、彼岸に貪著す。而して般若波羅蜜には彼岸無し。彼岸は是れ涅槃にして無色無名なり。是の故に無色無名と説き、故に是を無彼岸波羅蜜と名く。

虚空有れば、則ち出入の息有り、出入の息は、皆な虚誑の業因縁より生じ、出づる者は入るに非

第四十四 諸波羅蜜品

【經】爾の時、慧命須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、無邊波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「虚空の如く無邊なるが故なり」と。「世尊よ、等波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「諸法は等しきが故なり」と。「世尊よ、離波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「畢竟空なるが故なり」と。「世尊よ、不壞波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「一切法は不可得なるが故なり」と。「世尊よ、無彼岸波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「名無く身無きが故なり」と。「世尊よ、空種波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「入出の息は不可得なるが故なり」と。「世尊よ、不可說波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「覺觀は不可得なるが故なり」と。「世尊よ、無名波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「受想行識は不可得なるが故なり」と。「世尊よ、不去波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「一切法は來らざるが故なり」と。「世尊よ、無移波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「一切法は伏す可からざるが故なり」と。「世尊よ、盡波羅蜜は、是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「一切法は畢竟盡くるが故なり」と。「世尊よ、不生波羅蜜は、是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「一切法は不滅なるが故なり」と。「世尊よ、不滅波羅蜜は、是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「一切法は不生なるが故なり」と。「世尊よ、無作波羅蜜は、是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「作者は不可得なるが故なり」と。「世尊よ、無知波羅蜜は、是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「知者は不可得なるが故なり」と。「世尊よ、不到波羅蜜は、是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「生死は不可得なるが故なり」と。「世尊よ、不失波羅蜜は、是れ般若波羅蜜なり」と。佛の言はく、「一切法は失せざるが故なり」と。「十七」。

【論】釋して曰はく、無邊波羅蜜とは、須菩提は佛の大珍寶波羅蜜を説きたまへるを聞き、因つて自ら般若を讀じて摩訶波羅蜜と爲す、又た智慧を以て深く種種の法門に入りて、般若波羅蜜は、大海の水の如く無量無邊なるを觀じ、深く般若波羅蜜の功德を知り、因つて大歡喜心を發し、種種の因縁を以て般若を讚歎せんと欲す。是の故に佛に白して言さく、「世尊よ、無邊波羅蜜は是れ般若波羅蜜なり」と。

【四】宮本は「第四十四品經通款品」、聖・石二本は「第四十三百波羅蜜品」、明本は夾註に「經に百波羅蜜通款品」と作る。

知らざれば、智慧を以て明に之を照らして知らしむるなり。「開」とは、寶藏の門を閉れば、好物ありと雖も、而も得ること能はず、若し其の門を開けば意に隨つて取る所あるが如く、人の疑つて般若を信ぜざる如きを、邪疑の扉を開き、無明の關を折れば、是の人は則ち意に隨つて取る所あり。「示」とは、人の眼に視て、明らかならざれば、指して好醜を指示するが如く、人の小信小智有る者に、是道、非道、是れ利、是れ失等と示すが如し。「分別」とは、諸法の是れ善、是れ不善、是れ罪、是れ福、是れ世間、是れ涅槃の經書を分別して、略説し解し難く信じ難きを、能く爲に分別解説して、信解することを得せしむ。「顯現」とは、佛は種種の衆生の爲に、種種の法を説きたまひ、或時は善法を毀訾して不善法を助け、輒く衆生をして解を得せしめたまひ、説法者は佛意を説きて趣ち以て衆生に應じ、輕重の相を知らしむ。「解釋」とは、囊中の寶物の如きは、口を繫げば則ち人知らず、若し人の爲に、經卷の囊を解きて、義理を解釋し、又た重物を抜き析けて、輕からしむるが如く、種種の因縁、譬喩もて本末を解釋して、解し易からしむ。「淺易」とは、深水は渡り難きも、人あり、此の水を分散して淺からしむれば、則ち渡る者皆な易きが如し。般若波羅蜜は、水の甚だ深きが如く、論議の方便力の故に、種種に説いて、能く淺易ならしむれば、乃ち小智の人に至るまで皆な能く信解す。能く十種を以て首と爲して甚深の義を説く。是を清淨に般若波羅蜜の義を説くと名く。第一義の中には實に所説無く、畢竟空なるが故に、説くこと無く、説くこと無きが故に受くること無く、受くること無きが故に證すること無く、證すること無きが故に諸の煩惱を滅する者なし。若し煩惱を滅するもの無ければ、則ち福田無し。受くとは、信受し讀誦して是の法を行するに名け、沙門果、無生法忍を得る、是を名けて證と爲し、證する時、諸の煩惱滅して有餘涅槃を得。有餘涅槃を得るが故に是れ畢定福田なり。「畢定」とは、諸法は無餘涅槃の性に同じきが故に、畢定福田無しと説く。

【三】石本は「釋四十三品竟」六字附加。

も般若波羅蜜は、能く菩薩を利益して、阿耨多羅三藐三菩提を得せしめ、得と雖も、亦た所得無く、法輪を轉ずと雖も、亦た轉ずる所無きなり。

問うて曰はく、若し諸法空ならば、般若波羅蜜も空、阿耨多羅三藐三菩提も亦た空にして、般若を讚じて摩訶波羅蜜と爲すべからず。

答へて曰はく、此の中に、「一切の法は自性空なり」と説く。故に自性空の中にも、亦た自性空無し。是の故に摩訶波羅蜜と名く。若し空相無ければ難を作すべからず。畢竟空なるを以ての故に、破する所無く、而も能く諸の善法を行じて、阿耨多羅三藐三菩提を得。世俗法の故に第一義に非ず。諸佛は法を説き、他をして道を得、煩惱を破せしめ、此より彼かしこに至るを名けて轉と爲すと雖も、今、我等は諸の煩惱もて虚誑、顛倒、妄語して定相あること無し。若し定相無くんば何の斷ずる所とか爲ん。若し斷ずる所無くんば、亦た轉ずること無く還ること無し。是の故に、法輪を轉ずと雖も、亦た轉じ還ること無しと説く。何となれば、是の般若波羅蜜の中には、法有りて、五眼の、能く若くは轉じ、若くは還ることを見る所無し。一切法は本より已來、畢竟不生なるが故なり。是の自性空は、畢竟空にして轉相に非ず、還相に非ず。常に墮することを畏るるが故に轉ぜず、滅に墮することを畏るるが故に還らず、有に墮することを畏るるが故に轉ぜず、無に墮することを畏るるが故に還らず、世間に著することを畏るるが故に轉ぜず、涅槃に著することを畏るるが故に還らず。是の如く自性空、畢竟空、十八空等の無量の諸空、是の空解脱門は轉ぜず還らず、無相無作たるも、亦た是の如し、是の三解脱門に入りて、我、我所の心を捨つる、是を名けて解脱を得と説く。能く是の如く相を取らず、心に著せざれば、般若波羅蜜を説くなり。

「教照等」の説は若くは文を案じ、若くは口に傳ふるなり。「教」とは、人の爲に般若を讚じて受持し、讀誦し、正しく憶念せしむるなり。「照」とは人の燈を執りて物を照らすが如く、若し人、般若を

の中に説くが如し。無明は畢竟空なるが故に、實に諸行等を生ずること能はず。無明は虚妄顛倒にして、實定あること無きが故に法の滅すべきもの無し。世間の生法を説くが故に名けて轉すと爲し、世間の滅法を説くが故に名けて還ると爲す。般若波羅蜜の中には、此の二事無きが故に轉すること無く。還ること無しと説く。(そは)無法有法空の故なり。轉すること無きは、是れ有法空、還ること無きは是れ無法空なり。

問うて曰はく、須菩提は何を以てか是の間を作すや、「有法無法空の故に、般若波羅蜜は轉を爲さず、還を爲さざるが故に出づるや」と。而も佛は還つて空を以て答へたまひしや。

答へて曰はく、有人は説く、「諸法に四種の相あり。一には有と説き、二には無と説き、三には亦有亦無と説き、四には非有非無と説くなり。是の中、邪憶念の故に、四種の邪行あり。此の四法に著するが故に、名けて邪道と爲す。是の中に正憶念するが故に四種の正行あり。中に著せざるが故に名けて正道と爲す。是の中に、有に非ず無に非ざることを破するが故に、無法有法空と名く。佛は乃至有に非ず無に非ざるを破するを説きたまふが故に、轉すること有ること無く、還ること有ること無しと説く。有に非ず無に非ざることを破するに二種有り。一には上の三句を用つて破し、二には涅槃實相を用つて破す。須菩提は佛の涅槃を以て有無を破したまふを知ると雖も、是の中に新發意の菩薩ありて、或は錯謬するが故に三句を用つて、有に非ず無に非ざることを破せり。無法有法空の中に於いて還つて邪見を生ずるが故なり。佛の説きたまはく、「有法無法も亦た自相空なり」と。是の故に、「般若波羅蜜は轉すること無く還ること無し」と説く。般若波羅蜜の中には、般若波羅蜜の相無し、一切の法は無相なるが故なり。乃至檀波羅蜜も亦た是の如く、内空、乃至一切種智の相なるも亦た是の如し。爾の時、須菩提及び大衆は歡喜し、般若波羅蜜を讚じて是の言を作さく、「大波羅蜜なり」と。所謂、般若波羅蜜なり。大波羅蜜とは、所謂、一切の法は、自性空なりと雖も、而

法輪轉と言ふや。若し佛説を以て、名けて轉法輪と爲さば、皆な是れ法輪なり、何ぞ第二に限らんや。

答へて曰はく、初の説法は定んで實に一法輪と名け、初轉より乃ち法を盡くすに至るまで、通じて名けて轉と爲す。是の諸天は、是の會中に多くの人有りて、無上道を發して、無生法忍を得るを見、是の利益を見るが故に、讚じて第二轉法輪と言ふ。初轉法輪には、八萬の諸天無生法忍を得、阿若憍陳如一人初道を得、今は無量の諸天無生法忍を得。是の故に第二法輪轉と説く。今の轉法輪は初轉の如くに似たり。

問うて曰はく、今の轉法輪は多くの人得道し、初轉法輪には得道の者少し、云何なれば大を以て小に喩ふるや。

答へて曰はく、諸佛の事に二種あり。一には密、二には現なり。初轉法輪に、聲聞の人は、八萬一人の初道を得るを見、諸の菩薩は無數阿僧祇の人、聲聞道を得、無數の人、辟支佛道の因縁を得、無數阿僧祇の人、無上道心を發し、無數阿僧祇の人、六波羅蜜の道を行じて諸の深三昧・陀羅尼門を得、十方無量の衆生は無生法忍を得、無量阿僧祇の衆生は初地中より乃至十地に住し、無量阿僧祇の衆生一生補處を得、無量阿僧祇の衆生道場に坐することを得、是の法を聞いて疾く佛道を成ずるを見る。是の如き等の不可思議の相は、是を密轉法輪の相と名く。譬へば大に雨ふれば大樹は則ち多く受け、小樹は則ち少しく受くるが如し。是を以ての故に、當に知るべし、初轉法輪も亦た大にして、後(者)を以て前(者)に喩ふるに咎なきことを。

「法輪を轉するは(第一)一に非ず、(第二)二に非ず」とは、畢竟空なると、及び轉法輪の果報は涅槃なるが爲の故に、是の如く説くなり。是れ則ち因中に果を説くなり。法輪は即ち是れ般若波羅蜜なり。是の般若波羅蜜は、無起・無作の相なるが故に、轉すること無く、還ること無きこと、十二因縁

ず、是の般若波羅蜜は、轉を爲さざるが故に出で、還を爲さざるが故に出づ。無法有法空の故なり」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何なれば無法有法空の故に、般若波羅蜜は轉を爲さず、還を爲さざるが故に出づるや」と。

佛の言はく、「般若波羅蜜、般若波羅蜜の相は空なり。乃至檀波羅蜜、檀波羅蜜の相は空なり。內空、內空の相は空なり。乃至無法有法空、無法有法空の相は空なり。四念處、四念處の相は空なり。乃至八聖道分、八聖道分の相は空なり。佛の十力、佛の十力の相は空なり。乃至十八不共法、十八不共法の相は空なり。須陀洹果、須陀洹果の相は空なり。斯陀含果、斯陀含果の相は空なり。阿那含果、阿那含果の相は空なり。阿羅漢果、阿羅漢果の相は空なり。辟支佛道、辟支佛道の相は空なり。一切種智、一切種智の相は空なり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、諸の菩薩摩訶薩の般若波羅蜜は、是れ摩訶波羅蜜なり。何となれば、一切法は自性空なりと雖も、而も諸の菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜に因りて、阿耨多羅三藐三菩提を得ればなり。亦た法として得べきこと無く、轉法輪も亦た法として轉ず可きこと無く、亦た法として還る可きこと無し。是の摩訶波羅蜜の中にも、亦た法として見る可きもの有ること無し。何となれば是の法は不可得なればなり。若くは轉じ、若くは還る。一切法は畢竟不生なるが故なり。何となれば、是の空相は轉ずること能はず、還ること能はず。無相の相は轉ずること能はず、還ること能はず。無作の相は轉ずること能はず、還ること能はず。若し能く是の如くなれば般若波羅蜜を説き、教詔し、開示し、分別し、顯現し、解釋し、淺易にし、能く是の如く教ふる者有らば、是を清淨に般若波羅蜜を説くと名く。亦た説く者も無く、亦た受くる者も無く、亦た證する者も無し。若し説くこと無く、受くること無く、證すること無く、亦た滅する者無ければ、是の說法の中には、亦た畢定福田も無し」と。

【論】釋して曰はく、諸天は般若を聞きて大に歡喜踊躍す。諸天は身軽く利根にして、相を分別し著し輕重あることを知る。般若波羅蜜の畢竟清淨にして、平等實相、大に衆生を利益すること、(之に)過る者有ること無きを聞く。是の故に踊躍歡喜して、身業、口業を起し、供養の具、蓮華等を持して、佛を供養したてまつり、是の言を作さく、「我等は閻浮提に於いて、第二の法輪轉を見る」と。

問うて曰はく、初の說法は人をして道を得せしむれば、是を轉法輪と名け、今、何を以てか第二を



蜜なり。出世間の般若波羅蜜の中には善不善を分別せず、是を大珍寶波羅蜜と名け、能く衆生を利し、畢竟して憂なし。是の珍寶波羅蜜は、善法すら尙ほ汚染すること能はず。何に況んや不善法をや。此の中に説くが如し。

「是の如く亦た知らず」とは、上に説くが如く、般若の相は亦た是の知を作さず、知を作さざる者は相を取らず、亦た著を生ぜず、分別せず、定相を得ず、是を過患有ること無く、法愛有ること無く、諸の戲論を斷すと名く。是の如き人は、能く實に般若波羅蜜を修行し、法を以て佛を禮し、自ら實法の利益を得るが故に、能く衆生を利し、能く自ら惡を離れ、能く衆生をして、惡を離れしむるが故に、佛世界を淨むることを得。無所得の方便力を用ふるが故に、諸法の畢竟寂滅相を知り、而して能く衆生の爲の故に、諸の善法を起す。般若波羅蜜は、畢竟清淨なるが故に力無く、力に非ざる事無し。譬へば、虚空の如きは、法有ること無しと雖も、而も虚空に因りて所作有ることを得。一法の定相の著すべきこと有ること無きが故に、力有ること無く、諸法實相を得。諸の善法に於いて礙無きより、乃ち魔を降し、佛を成するに至るまで、力有ること無きに非ず、受けず、與へず、生ぜず、滅せざる等より、乃ち有爲法を捨てず、無爲法を與へざるに至るも亦た是の如し。此の中に因縁を説く、「佛有るも、佛無きも、諸法の性は常住なり」と。世間の諸法の性とは、即ち是れ諸法實相なり。諸法實相とは、即ち是れ般若波羅蜜なり。若し常、無常等を以て、諸法實相を求むるは、是れ皆な錯あやまりと爲す。若し人、法性の中に入りて求むれば、則ち錯謬有ること無く、法性は常なるが故に失せざるなり。

【經】爾の時、諸天子の虚空の中に立ち、大音聲を發して踊躍歡喜し、漚鉢羅華、波頭摩華、拘物頭華、分陀利華を以て、而して佛の上に散じ、是の如く言はく、「我等は閻浮提に於いて第二の法輪を見る」と。是の中に無量百千の天子は無法忍を得たり。佛、須菩提に告げたまはく、「是の法輪は第一轉に非ず、第二轉に非

復次に、是の六齋日は、是れ惡目にして、人をして衰凶ならしむ。若し是の日に八戒を受け、持齋、布施、聽法すること有れば、是の時、諸天は歡喜し、小鬼は其の便を得ず、行者を利益す。是の日、法師は、高座に法を説く。是の如き等の種種因縁の故に、諸天は皆な來る。說法者は無量無邊無上の法、所謂般若波羅蜜を讚じ、亦た無量無邊の福德を得。若し人の爲に説くに、人は鈍根にして福德薄きが故に、福を得ること少く、諸天は利根にして福德多く、福田勝るるが故に福を得ること多し。故に佛説き給はく、「行者は、齋日に諸天及び大衆の中に、般若を説くに福を得ること無量なり」と。

此の中に、佛、須菩提の言ふ所を可とし、復た自ら無量の因縁を説きたまへり。所謂般若波羅蜜は是れ大珍寶波羅蜜なり。如意寶珠の能く一切の人の願を満すが如く、是の般若波羅蜜は、能く一切衆生の願を満す、所謂苦を離れて樂を得せしむ。苦を離るとは、般若波羅蜜は、能く衆生の地獄・畜生・餓鬼、及び人中の貧窮を抜く。樂を與ふとは、能く利利の大姓、乃至阿耨多羅三藐三菩提を與ふるなり。是の樂の因縁は、善法般若波羅蜜の中に廣く説けり。所謂十善道、乃至一切智なり。如意寶の能く衣服・飲食・金銀等の、意に隨つて須ふる所を出すが如く、般若波羅蜜も亦た是の如く、能く十善道、乃至一切智、利利の大姓、乃至佛を得せしむ。是の事を以ての故に、名けて珍寶波羅蜜と爲す。

復次に、珍寶波羅蜜とは、人の如意寶を得れば、則ち意に隨つて須ふる所を皆な得、失すれば則ち憂惱するが如く、是の般若波羅蜜は、不生、不滅にして常に失せず、世世に衆生に樂を與へ、末後に佛道を得せしむ。人の如意寶を得れば、則ち心に自ら高うし、他人を輕賤することを生じ、是を衰の因縁と爲すが如し。若し人、世間の般若波羅蜜を得るも亦た是の如し。分別して諸の善法に著し、諸の惡法を捨て、高心を生じて餘人を輕蔑すれば、則ち諸罪の門を開く。是れ珍寶般若波羅

重罪もて、今世に所説の如く行ぜざるが故に、般若の力を得ざるも、般若の過とがに非ざるなり。

問うて曰はく、天上にも亦た般若波羅蜜有り、諸天は何を以てか六齋日に於いて、不淨人の身を隨逐して、般若を求め聞かや。

答へて曰はく、天上に經卷有りと、傳へ聞くことは是の如けれども、亦た佛説に非ず、若し有らしむれば、忉利天上、兜率天上にも當に有るべし。何となれば、阿修羅が忉利天と闘ふ時、佛、帝釋に「汝、當に般若を誦念すべし」と勅したまへばなり。兜率天上には、常に補處の菩薩ありて、諸天の爲に説くが故に有る可し。色界の諸天は、身及び衣服輕微なるより、乃ち兩數無きに至るまで、常に宴寂を樂しみ、禪定味を受く。是の故に經卷あるべからず。諸天は二種の樂に著す。(即ち)欲樂と定樂となり。勤苦して般若波羅蜜を書持すること能はず。閻浮提の人は能く精進して、書持し受學し正憶念す。經に説くが如くんば、閻浮提の人は、三因縁を以て、諸天及び鬱單曰鬱單曰の人に勝る。一には能く淫欲を斷じ、二には識念の力強く、三には能く精勤勇猛なり。是の閻浮提の人は、能く書寫し讀誦し受持す。是を以ての故に、諸天は來り下りて、般若の經卷を禮拜し、或は説を聞かんと欲す。復た有人の言はく、天上に若し經卷有るも遠く來りて供養し、福德を増益し、般若波羅蜜を求めて厭足無し。有菩薩の天は、般若を尊重せしめんと欲するが故に來り下り、衆生をして益益、信敬を加へしめんと欲す。諸天すら尙ほ來る、何に況んや我等行者をや。若くは好香を聞き、若くは光明を見、是の如き希有の事有るが故に、深心に般若を信樂す。又た未だ欲を離れざる人は、惡鬼魔民、常に逐うて便を伺ひ、惡處に墮せしむ。四天王より乃ち淨居天に至るまで、是の大力の諸天來れば、小鬼は避け去る。菩薩は能く清淨の大心を生ずること、先の品の中に説くが如し。是の故に來りて法師を隨逐す。

六齋日には諸天來りて、人心を觀る。十五日、三十日は上りて諸天に白す。

【一】「鬱單曰」、宋元明宮諸本は「鬱單越」に作る。鬱多羅究留 Ustakuru に同じ、是れ須彌山の四方に在る四大洲の中、北方の大洲の名。

【二】「六齋日」の稱、毎月八日十四日二十三日二十九日三十日をいふ。此の六箇日は四天王が人の善惡を伺ふ日なり、或は惡鬼が人の便を求め伺ふ日なりとして謹慎し殊に午後食物を斷つ。齋は梵音遺沙他 Pagantha 不過中食の謂、古來所傳の聖法、佛教以後は此の日に八戒をも受持せしめて六箇の八齋齋日とす。

よ、是を無所得の珍寶波羅蜜と名く。

須菩提よ、是の珍寶波羅蜜は、法として能く染汚有ること無し。何となれば、用ふる所の染法は不可得なればなり。須菩提よ、是を以ての故に、無染の珍寶波羅蜜と名く。須菩提よ、若し菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時も、亦た是の如く知らず、亦た是の如く分別せず、亦た是の如く得ず、亦た是の如く戲論せず。是を能く般若波羅蜜を修行すと爲す。亦た能く禮して諸佛を觀じ、一佛國より一佛國に至りて、諸佛を供養し、恭敬し、尊重し、讚歎す。諸の佛刹に遊びて、衆生を成就し佛國土を淨む。須菩提よ、是の般若波羅蜜は諸法に於いて、力有ること無く、力あること無く、亦た受くることも無く、亦た與ふことも無く、不生、不滅、不垢、不淨、不增、不減なり。是の波羅蜜は亦た過去に非ず、未來に非ず、現在に非ず、欲界を捨てず、色界に住せず、色界を捨てず、無色界を捨てず、無色界に住せず、是の般若波羅蜜は檀波羅蜜を與へず、亦た捨てず、尸羅波羅蜜を與へず、亦た捨てず、毘提波羅蜜を與へず、亦た捨てず、毘梨耶波羅蜜を與へず、亦た捨てず、禪波羅蜜を與へず、亦た捨てず、般若波羅蜜を與へず、亦た捨てず、乃至八聖道分を與へず、亦た捨てず、佛の十力を與へず、亦た捨てず、乃至十八不共法を與へず、亦た捨てず、須陀洹果を與へず、亦た捨てず、乃至阿羅漢果を與へず、亦た捨てず、辟支佛道を與へず、亦た捨てず、乃至一切智を與へず、亦た捨てず。是の般若波羅蜜は阿羅漢法を與へず、凡夫法を捨てず、辟支佛法を與へず、阿羅漢法を捨てず、佛法を與へず、辟支佛法を捨てず。是の般若波羅蜜は亦た無爲法を與へず、有爲法を捨てず。何となれば、若くは諸佛有るも、若くは諸佛無きも、是の諸法の相は常住にして異ならず。法相、法住、法位常住にして謬らず、失せざるが故なり」と。

【論】問うて曰はく、若し般若を受持し正憶念するも猶ほ衆の患あり。云何なれば終に眼等を病まずと言ふや。

答へて曰はく、是の事は上の功德、地獄品の中に已に廣く説けり。所謂必受報業に非ざるが故に衆患無く、又た常に受持し正しく憶念し、所説の如く般若を行するが故に衆患無し。譬へば良藥は能く衆病を破するも、若し能く將たち順たはされば、則ち患を除かず。(是は)藥の失に非ざるが如し。又た障人が利器を得と雖も、難を禦ぐこと能はざるは、器の過に非ざるが如し。行者も是の如く、先世の

## 卷の第六十五

## 第四十三 無作實相品(續)

【經】須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し善男子、善女人の、是の般若波羅蜜を受持し、親近し、正しく憶念する者は、終に眼を病まず。耳鼻舌身も亦た終に病まず、身に形殘無く、亦た衰萎せず、終に横死せず。無數百千萬の諸天、四天王天乃至淨居の諸天、皆な悉く隨從して聽受す。六齋日なる、月の八日、二十三日、十四日、二十九日、十五日、三十日には、諸天衆會し、善男子の法師たる者、在所に般若波羅蜜を説くに皆な悉く來集す。是の善男子、善女人は、大衆の中に在りて是の般若波羅蜜を説き、無量無邊阿僧祇の不可思議不可稱量の福德を得」と。

佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。是の善男子、善女人は、若し六齋日なる、月の八日、二十三日、十四日、二十九日、十五日、三十日に諸天衆の前に在りて、般若波羅蜜を説かば、是の善男子、善女人は、無量無邊阿僧祇の不可思議不可稱量なる福德を得。何となれば、須菩提よ、般若波羅蜜は、是れ大珍寶なり。是の般若波羅蜜は、能く地獄・畜生・餓鬼及び人中の貧窮を抜き、能く刹利・婆羅門の大家、居士の大家を與へ、能く四天王天處、乃至有想非無想處を與へ、能く須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道、阿耨多羅三藐三菩提を與ふ。何となれば、是の般若波羅蜜の中に、廣く十善道、四禪、四無量心、四無色定、四念處乃至八聖道分、檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜を説き、廣く內空乃至無法有法空を説き、廣く佛の十力乃至一切〔種〕智を説く。是の中より學して刹利の大家、婆羅門の大家、居士の大家に出生し、四天王天、三十三天、夜摩天、兜率陀天、化樂天、他化自在天、梵身天、梵輔天、梵衆天、大梵天、光天、少光天、無量光天、光音天、淨天、少淨天、無量淨天、遍淨天、阿耶婆伽天、得福天、廣果天、無想天、阿浮呵耶天、不熱天、快見天、妙見天、阿迦尼吒天、虛空無邊處天、識無邊處天、無所有處天、非有想非無想處天に出生し、是の法の法の中に學して、須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果を得、辟支佛道を得、阿耨多羅三藐三菩提を得。是を以ての故に、須菩提よ、般若波羅蜜を名けて大珍寶と爲す。珍寶波羅蜜の中、法の若くは生、若くは滅、若くは垢、若くは淨、若くは取、若くは捨あること無く、珍寶波羅蜜も亦た法の若くは善、若くは不善、若くは世間、若くは出世間、若くは有漏、若くは無漏、若くは有爲、若くは無爲あること無し。是を以ての故に須菩提

問うて曰はく、是の二は皆な虚誑なり。何を以ての故に小菩薩は凡夫の法を以て虚と爲し、聖法を實と爲すや。

答へて曰はく、聖法は、持戒・禪定・智慧を修集する功德に因りて、成ずる所なるが故に、以て實と爲し、凡夫の法は、自然に有ること、響の自然に出づるが如く、是れ「人の」故らに作るに非ざるを以て虚と爲す。衆生は無始世より來た、此の身に著するが故に、聲の身より出づるを以て實と爲し、小菩薩は深く善法を樂しむるが故に以て實と爲す。

復次に、如し虚空中には、音聲語言の相無きが故に所説無し。是の語言音聲は、皆な是れ作法にして虚空は是れ無作法なり。般若波羅蜜も亦た是の如く、第一深義は畢竟空にして言説有ること無し。一切の語言の道を斷するが故なり。

復次に、虚空の如きは無所得の相にして、有を得ず無を得ず。若し有無の相は先に破するが如し。虚空の相は、若し是の虚空に因りて、無量の事を造らず。般若波羅蜜も亦た是の如く、有無の相は不可得なるが故に清淨なり。

復次に、般若波羅蜜は諸法の正憶念に因るが故に生ず。正憶念とは、畢竟空にして、清淨なるが故に、一切の法は不生・不滅・不垢・不淨なり。

【四】石本は卷を分たず、宋元宮各本は「釋第四十二品下訖第四十三品上」の夾註を附し、聖本は「釋第四十一品下訖第四十二品上」に作る。

ことを知る。是の般若波羅蜜は、過去・未來・現在の佛の所説にして、應當に信受すべし。須菩提の問ふ、「彌勒は何の相・何の因を以て、何の法門を以て説くや」と。佛の言はく、「我が説の如きは、色等の諸法は、常に非ず無常に非ず、縛に非ず解に非ざる等と説くが如し。亦た色は過去・未來・現在なりと説かず。涅槃は三世の色等を出づるが如く、諸法も亦た是の如しとは、先に説くが如く、一切法は涅槃の相の如し。彌勒の所説も亦た是の如し」と。

爾の時、須菩提は歡喜して、佛に白して言さく、「世尊よ、是の般若波羅蜜は第一清淨なりや」と。佛の言はく、「色等の諸法は清淨なるが故なり。因果相似するが故に」と。色等の法は清淨なりとは、所謂色等の法は業因縁を失せざるが故に、及び諸法の生相は定實なることを得ざるが故に不生不滅なり。諸法の相は、常に汚染せざるが故に不垢不淨なり。此の中に譬喩を説くは、事をして明了ならしめんと欲するが故なり。虚空の如きは塵水著せず、性清淨なるが故なり。般若波羅蜜も亦た是の如し。不生不滅なるが故に常に清淨なり。虚空の染汚すべからざるが如く、般若波羅蜜も亦た是の如く、邪見戲論ありと雖も、染汚すること能はず。刀仗惡事も壞すること能はず。無色無形なるが故に取る可からず、取る可からざるが故に、則ち染汚す可からず。

復次に、諸の菩薩は、辯才・樂説・無礙智の中に住し、衆生の爲に十二部經、八萬四千の法聚を説く。皆な是れ般若波羅蜜の一事をば、而も分別して説くことを爲すなり。是の故に、般若波羅蜜は説く可きが故に、清淨なること、虚空の如しと説く。虚空及び山谷に因りて、人聲ありて口中の空より出づ。是の二聲に因るが故に響と名く。響の空なるが如く、口聲も亦た是の如し。是の二聲は皆な虚誑不實なり。而も人は聲を以て實と爲し、響を以て虚と爲す。般若も亦た是の如し。一切法は、皆な畢竟空にして、幻の如く、夢の如し。凡夫の法、聖法も、皆な是れ虚誑なり。小菩薩は、凡夫の法を以て、虚誑と爲し、聖法を實と爲す。

【論】釋して曰はく、是の般若波羅蜜は、皆な甚深なりと雖も、是の品の中に、了了に諸法實相を説くが故に、是を以て三千大千世界中の諸天は、諸の供養の具を持し來り、佛を供養したてまつりて一面に立てり。

問うて曰はく、即ち是の上の諸天は今更に來るや。

答へて曰はく、有人の言はく、「事久しきが故に去り竟つて更に來る」と。有人の言はく、「更に新しく天〔上〕より來る者ありて、般若を信ぜしめんと欲するが故に、十方面に各千佛現す。是の人は福德の因縁もて應に千佛を見たてまつるべきが故なり。佛の神力の故に會に在り、衆人は皆な十方の佛を見たてまつる。人天の見る所は限有つて、佛の威神〔力〕に非ずんば、彼の諸佛を見得るに由無し。佛前に法を説く者を皆な須菩提と字け、難問する者を皆な釋提桓因なつと字け、其の同字を取る者千人あり。

是の時、須菩提、帝釋は皆な歡喜して言はく、「獨り我等のみ能く説き、能く問ふに非ず」と。

佛は其の事を證せんと欲したまふが故に、廣く其の事を引いて説きたまはく、「彌勒及び賢劫の菩薩は、是の摩伽陀國、王舍城、耆闍崛山に於いて、般若波羅蜜を説きたまふ」と。經中に説くが如し。「彌勒菩薩は大衆を將ゐて耆闍崛山に到り足指を以て山頂を開く。摩訶迦葉は骨身に僧伽梨を著け、杖を執り鉢を持して出づ。彌勒は大衆の爲に説いて言はく、「過去に釋迦牟尼佛有り、人壽百歲なり。時に是の人は、是れ少欲知足にして、頭陀を行すること、弟子中第一にして、六神道を具へ三明を得、常に衆生を憐愍し利益するが故に、神通力を以て是の骨身をして今に至らしむ。此の小身に因りてすら是の如き利を得。何に況んや、汝等は大身なるをや。〔大身にして〕好世に生じ、而も自ら利すること能はざらんや」と。爾の時に、彌勒は是の事に因りて、廣く法を説き、無量の衆生をして、苦際を盡くすことを得せしむ。是の事を以ての故に、彌勒は耆闍崛山中に在りて、法を説く



なり、當に是の如く法を説くべし。受想行識は畢竟清淨なり、當に是の如く法を説くべし。乃至一切種智も畢竟清淨なり、當に是の如く法を説くべし」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、是の般若波羅蜜は清淨なりや」と。佛の言はく、「色は清淨なるが故に、般若波羅蜜は清淨なり。受想行識は清淨なるが故に、般若波羅蜜は清淨なり」と。「世尊よ、云何なれば色は清淨なるが故に般若波羅蜜は清淨なるや。云何なれば受想行識は清淨なるが故に、般若波羅蜜は清淨なるや」と。佛の言はく、「若し色は不生・不滅・不垢・不淨ならば、是を色清淨と名け、受想行識は不生・不滅・不垢・不淨ならば、是を受想行識清淨と名く。

復次に、須菩提よ、虚空は清淨なるが故に、般若波羅蜜は清淨なり」と。「世尊よ、云何なれば虚空は清淨なるが故に、般若波羅蜜も亦た是の如し。

復次に、須菩提よ、色は汚れざるが故に、般若波羅蜜は清淨なり、受想行識は汚れざるが故に、般若波羅蜜は清淨なり」と。「世尊よ、云何なれば色は汚れざるが故に、般若波羅蜜は清淨なりや、受想行識は汚れざるが故に、般若波羅蜜は清淨なりや」と。佛の言はく、「虚空は汚す可からざるが故に、虚空は清淨なるが如し」と。「世尊よ、

云何なれば虚空は汚す可からざるが故に、虚空は清淨なるが如きや」と。佛の言はく、「虚空は取る可なり、虚空は清淨なるが故に、般若波羅蜜は清からざるが故に、虚空は清淨なり。復次に、須菩提よ、虚空は説く可きが故に、般若波羅蜜は清淨なり」と。「世尊よ、云何なれば虚空は説く可きが故に、般若波羅蜜も亦た虚空の如く説く可きが故に清淨なり。須菩提よ、虚空は説く可からざるが故に、般若波羅蜜は清淨なり」と。「世尊よ、云何なれば虚空は説く可からざるが故に、般若波羅蜜は清淨なりや」と。佛の言はく、「虚空は説くべきこと無きが如き故に般若波羅蜜は清淨なり。復次に、虚空は不可得の如きが故に、般若波羅蜜は清淨なり」と。

「世尊よ、云何なれば虚空は不可得の如きが故に、般若波羅蜜は清淨なりや」と。佛の言はく、「虚空は無所得の相なるが如く、般若波羅蜜も亦た虚空の如く、無所得の相なるが故に清淨なり。復次に、須菩提よ、一切法は不生・不滅・不垢・不淨なるが故に、般若波羅蜜は清淨なり」と。「世尊よ、云何なれば一切法は不生・不滅・不垢・不淨なるが故に、般若波羅蜜は清淨なりや」と。佛の言はく、「一切法は畢竟清淨なるが故に、般若波羅蜜は清淨なり」と。

ことを知ることを得たりと、是を我れ夢を念ずと名く。餘の喻も亦た是の如し。

爾の時、須菩提は答ふらく、「帝釋よ、若し行者は、色・是色・人色・非人色・樹色・山色・是の四大、若くは四大所造の色等を念ぜず。是の色の常、若くは無常等を念ぜず。色を以ての故に心に憍慢を生ぜず、色は是れ我所（或は）非我所なりと念ぜず、無我門に入りて、直に諸法實相の中に至る。是の人は能く夢を念ぜず、是の夢等を念ぜず、是の夢等の譬喩を用ゐて、五衆に著するを破す。著を破するが故に、夢中に於て亦た錯らす。若し色の著を破すること能はざれば、是の人は、色に於いて錯り、夢に於いても亦た錯る。受想行識、乃至一切種智も亦た是の如く、幻・焰・響・影・化等も亦た是の如し。諸の菩薩は諸法の夢の如きことを知り、夢に於いても亦た念ぜざるなり。」

【經】爾の時、佛の神力の故に、三千大千世界の中の諸の四天王天、三十三天、夜摩天、兜率陀天、化樂天、他化自在天、梵輔天、梵衆天、大梵天、少光天、乃至淨居天、是の一切の諸天は、天の梅檀を以て、造しに佛の上に散じ、佛の所に來詣し、頭面に佛足を禮し、却して一面に住す。

爾の時、四天王天・釋提桓因、及び三十三天・梵天王、乃至諸の淨居天は、佛の神力の故に東方千佛の說法、亦た是の相の如く、是の名字の如きを見る。是の般若波羅蜜品を説く諸の比丘を皆な須菩提と字け、般若波羅蜜品を問難する者を、皆な釋提桓因と字く。南西北方四維上下も亦た是の如く各千佛現じたまふ。

爾の時、佛、須菩提に告げたまはく、「彌勒菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提を得る時も、亦た當に是の處に於いて般若波羅蜜を説くべく、賢劫の中の諸の菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提を得る時の如きも、亦た當に是の處に於いて般若波羅蜜を説くべし」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、彌勒菩薩摩訶薩は阿耨多羅三藐三菩提を得る時、何の相、何の因、何の義を用つてか、是の般若波羅蜜の義を説くや」と。

佛、須菩提に告げたまはく、「彌勒菩薩摩訶薩は阿耨多羅三藐三菩提を得る時、色は常に非ず、色は無常に非ず、當に是の如く法を説くべし。色は苦に非ず、樂に非ず、色は我に非ず、無我に非ず、色は淨に非ず、不淨に非ず、當に是の如く法を説くべし。色は縛に非ず、解に非ず、當に是の如く法を説くべし。受想行識は常に非ず、無常に非ず乃至縛に非ず、解に非ず、當に是の如く法を説くべし。色は過去に非ず、色は未來に非ず、色は現在に非ず、當に是の如く法を説くべし。受想行識も、亦た是の如し。色は畢竟淨

【三】石本は茲を以て卷を分ち、の第六十五の終りとし、次行經文を卷の第六十六の首となす。

乃ち一切諸法に至るまで皆な厭離し、我無く我所無きが故に皆な著する所なく、草木を斬るに憂愁を生ぜざるが如し、二には上妙の法を得るが故に、十方の諸佛・菩薩・諸天の爲に守護せらるるなり。

復次に、譬へば、人の虚空を守護せんと欲するが如し。虚空は雨を壞すること能はず、風日も乾かすこと能はず、刀杖等も傷くこと能はず。若し人有り、虚空を守護せんと欲せば、徒に自ら疲苦し、空に於いて益すること無し。若し人、般若波羅蜜を行じ、菩薩を守護せんと欲するも亦た是の如し。此の事をして明了ならしめんと欲するが故に問ふ、「汝は能く空及び夢中に見る所の人及び影響幻化の人を守護するや不や」と。答へて曰はく、「不なり」と。此の法は但だ心眼を誑はし、暫らく現じて已に滅す、云何ぞ守護すべけんや。般若を行ずる菩薩も亦た是の如く、五衆を觀すること、夢等の虚誑なるが如し。無爲法・如・法性・實際・不可思議性の能く守護する者無く、亦た利益する所無きが如く、般若を行ずる菩薩は、身を知ること如・法性・實際の別に得ざるが如し。供養して利する時喜ばず、破壊して失する時憂ひず。是の如きの人は何ぞ守護を須るん。爾の時、帝釋は、是の夢の如き等の智慧を貪り貴ぶ。菩薩は是の智慧力を得て外の守護を須るず。故に問ふ、「須菩提よ、云何にして菩薩は是の夢の如き等の空法を知り、知る所の如く見るや」と。夢を念ぜず等とは、夢等を五衆に喩ふ。五衆は人の著する所にして、夢等には著せず。著事を離れしめんと欲するが故に、不著の事を以て喩と爲し、五衆を觀すること、夢の如くならしめんと欲す。夢に於いて亦復た著を生ず。是の故に帝釋は問ふ、「夢も亦た不著是れ夢なるが如し」と。凡夫人は、夢を以て五衆に喩ふれば、即ち復た夢に著して、是の言を作さく、「定んで夢法有りて睡眠の時に生ず」と。是を夢を念すと名く。是の夢は惡、是の夢は好と、是の如く、分別する、是を夢を念すと名く。夢に好事を得れば、則ち心高ぶり、惡事を得れば則ち心愁ひ、又た此の夢の譬喩を用ふれば、是の夢の如き實智慧を得。是を用夢を念すと名く。是の譬喩を聞いて、我は此の夢に因りて、諸法の夢の如き

羅蜜を聞き、歡喜して佛に白して言さく、「我れ當に何事をか作して守護すべく、其の所須に隨ひて盡く當に之を與ふべきや」と。須菩提及び一比丘は、出家の法を敬禮するに、已に諸の惡鬼は、常に是の人を惱まし、魔、若くは魔民は、常に行者を惱ます。是の故に佛に問ふ、「我れ當に何事を以てか守護し、若くは自ら守護し、若くは子弟を遣はし、若くは官屬を遣はして侍衛せしめ佛の教勅に隨ふべきや」と。須菩提は般若の無量の力あることを知り、又た佛意を知り、般若波羅蜜をして貴重ならしめんと欲し、恩を受くることを用ゐざるが故に、帝釋に語るらく、「憍尸迦よ、般若波羅蜜の中は、皆な空にして、幻の如く、夢の如し。汝、頗し定んで一法の有ることを見て護るべきや不や」と。帝釋の言はく、「不なり。若し見るべくんば、名けて般若波羅蜜を畢竟空と爲さず。若し見るべからずんば、云何なれば説いて、我れ當に何事を作してか守護すべきと言ふや」と。

復次に、憍尸迦よ、若し行者、所説の如く、般若の中に住せば、即ち是れ守護なり。若し菩薩、般若の中の所説の如く、一心に信受し、思惟し、正しく憶念し、禪定に入りて、諸法の實相を觀じ、畢竟空の智慧を得ば、應に無生法忍を得て菩薩の位に入るべし。是の如き人は身命を惜まず、何に況んや外物をや。是の人は守護を須ゐず。守護の名は、諸の苦惱を遮りて、安樂を得せしむ。是の人は一切の世間の法を離るるが故に、憂愁苦惱有ること無く、世間の事を得て以て喜と爲さず、世間の事を失うて以て憂と爲さず。所謂、常に所説の如く、般若波羅蜜の行を離れず。若し人少時應に行じて後、還つて失すべき者は、宜しく須らく守護すべし。若し常に所説の如く、般若波羅蜜を離れずんば、則ち守護を須ゐず。

伽羅夜叉の拳を以て舍利弗の頭を打つが如し。舍利弗は時に滅盡定に入りて打痛を覺えず、般若波羅蜜の氣分は即ち是れ滅盡定なり。是の故に、若くは人、若くは非人は便を得ること能はず。略して説くに二種の因縁もて、守護を須ゐず。若くは人、若くは非人は便を得ざるは、一には身より

般若波羅蜜の中の所説の如く行ずれば、即ち是れ守護なり。所謂、常に遠離せずして、所説の如く般若波羅蜜を行ずるに、是の善男子、善女人は、若くは人、若くは非人も、其の便を得ず。當に知るべし、是の善男子、善女人は、般若波羅蜜を遠離せず。憍尸迦よ、若し人、般若波羅蜜を行ずる菩薩を護らんと欲せば、虚空を護らんと欲すと爲す。憍尸迦よ、汝が意に於いて云何、汝は能く夢・焰・影・響・幻化を護るや不や」と。

釋提桓因の言はく、「護ること能はず」と。「若し人般若波羅蜜を行ずる諸菩薩摩訶薩を護らんと欲するも、亦た是の如し、徒に自ら疲苦するのみ。憍尸迦よ、汝が意に於いて云何、能く佛の所化を護るや不や」と。

釋提桓因の言はく、「護ること能はず」と。「若し人、般若波羅蜜を行ずる諸菩薩摩訶薩を護らんと欲するも亦た是の如し。憍尸迦よ、汝が意に於いて云何、能く法性・實際・如・不可思議性を護るや不や」と。釋提桓因の言はく、「護ること能はず」と。「若し人、般若波羅蜜を行ずる諸の菩薩摩訶薩を護らんと欲するも亦た是の如し」と。

爾の時、釋提桓因、須菩提に問ふ、「云何なれば菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行じ、諸法を見て、夢の如く、焰の如く、影の如く、響の如く、幻の如く、化の如しと知るや。諸の菩薩摩訶薩は、所知の如く見るが故に、夢を念せず、是夢を念せず、用夢を念せず、我夢を念せず、焰・影・響・幻・化も、亦た是の如くなるや」と。須菩提の言はく、「憍尸迦よ、若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行じて、色を念せず、是色を念せず、用色を念せず、我色を念せずば、是の菩薩摩訶薩も亦た能く夢を念せず、是夢を念せず、用夢を念せず、我夢を念せず、乃至化も亦た化を念せず、是化を念せず、用化を念せず、我化を念せず。受想行識も亦た是の如し。乃至一切智も一切智を念せず、是一切智を念せず、用一切智を念せず、我一切智を念せず、是の菩薩摩訶薩も亦た能く夢を念せず。是夢を念せず、用夢を念せず、我夢を念せず、乃至化も亦た是の如し。是の如く、憍尸迦よ、菩薩摩訶薩は、諸法の夢の如く、焰の如く、影の如く、響の如く、幻の如く、化の如きことを知るなり」と。

【論】釋して曰はく、即時に帝釋は問ふ。佛、須菩提より聞く所の是の甚深の般若は、何の法をか習はんが爲なりや」と。須菩提の言はく、「諸法は久久しうして皆な涅槃に歸するが故に、當に諸法の空を習ふべし」と。是の故に説けり、「般若を習はんと欲せば、當に空を習ふべし」と。帝釋は是れ人天の王にして、世間に於いて自在に能く須ふる所を與へ、守護を作さんことを願ふ。是の般若波

「世尊よ、虚空等の衆生を度せんが爲の故に、大莊嚴す」と。虚空の如きは、無色無形にして、若し虚空を擧げんと欲すること有れば、是を難しと爲す。衆生法も亦た是の如く畢竟空なり。而も菩薩は三界の衆生の、涅槃の中に著するを擧げんと欲す。是の故に大莊嚴と名く。

須菩提は、復た是の菩薩の大精進力を讚す。邪疑の心に隨はざるが故に、未だ佛道を得ず、未だ諸結を滅せずと雖も、而も能く大勇猛にして、能く是の如く菩薩の道を行じ、衆生の爲にす。衆生も亦た空なることは、譬へば種種の彩色を以て、虚空を畫かんと欲するが如し。此の中に佛は衆生空の因縁を説きたまへり。所謂十方如恆河沙の諸佛は、神通力を以て、衆生の爲に無量劫に法を説きたまひ、一一の佛は、無量阿僧祇の衆生を度して涅槃に入らしめたまふに、假令是の如くなりとも、衆生に於いては、減少する所無し。若し衆生有りて實に減少有らば、諸佛は應に衆生を滅する罪有るべし。若し衆生は實に空にして、和合の因縁もて、假名の衆生有るが故に、定相有ること無し。是の故に爾所の佛、衆生を度したまふも、實に減少すること無く、若し度したまはずとも亦た増さず。是の故に諸佛には衆生を滅する咎なし。是の故に説く、菩薩の衆生を度せんと欲するは、虚空を度せんと欲すと爲す。爾の時、一の比丘、畢竟空の相を聞き、驚喜して言はく、「我れ當に般若波羅蜜を禮すべし」と。般若の中には、法として定實の相あること無きも、而も戒衆等及び諸の果報有り。

【經】爾の時、釋提桓因、須菩提に語るらく、「若し菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を習ふは、何の法をか習はんが爲なりや」と。須菩提、釋提桓因に語りて言はく、「橋戸迦よ、是の菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を習ふは、空を習はんが爲なり」と。釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、若し善男子、善女人、般若波羅蜜をば受持して、親近し、讀誦し、説き、正憶念せば、我は當に何等の護を作すべきや」と。爾の時、須菩提、釋提桓因に語りて言はく、「橋戸迦よ、汝は頗し是の法の守護すべき者を見るや不や」と。釋提桓因の言はく、「不なり。須菩提よ、我は是の法の守護すべき者を見ず」と。須菩提の言はく、「橋戸迦よ、若し善男子、善女人、

法と相違するなり。佛は須菩提の所説を可としたまふ。若くは説き、(若くは)説かざるも、増すこと無く減すること無きは、是れ諸法實相にして、若し身業の毀壞を以ても、亦た異ならしむること能はず。何に況んや口説をや。常に不生の相なるが故なり。譬へば虚空の如し。虚空は是れ般若波羅蜜、幻人は是れ行者なり。行者は罪業の因縁を以て、是の虚誑の法を生ずと雖も、般若波羅蜜と合するが故に、異なること有ること無し。種種の諸色は、須彌山の邊に到れば、同じく金色と爲るが如し。是の諸法實相は知る可からず、説く可からざるが故に、若くは説き、若くは説かざるも、本の如くにして異ならず。

爾の時、須菩提は是の念を作さく、「若し諸法は畢竟空にして所有無く、虚空の如く乃至微細の相有ること無く、而も菩薩は能く善法を修集して無上道を得ば、是の事は信じ難く受け難し」と。是の念を作し已つて佛に白して言さく、「諸の菩薩の爲す所は甚だ難く、能く難事を爲すが故に應に禮拜すべし」と。謂はく、「能く大莊嚴するが故なり」と。須菩提は希有の心もて説く、「是の菩薩摩訶薩は阿耨多羅三藐三菩提の爲に大莊嚴す。一切の天人は皆な應に禮拜すべし」と。

問うて曰はく、云何にして是の大莊嚴を知るや。

答へて曰はく、須菩提は此の中に自ら譬喩を説けり。有る人は、虚空の爲の故に勤行精進し、利益するが故に大莊嚴するが如く、菩薩の衆生を利益せんが爲に、勤めて精進するも亦た是の如し。世尊よ、若し人あり、虚空を度せんと欲し。菩薩摩訶薩の衆生を度せんと欲するも亦た是の如し。

問うて曰はく、一事をば何を以て再び説くや。

答へて曰はく、利益とは、未だ涅槃を得ず、但だ智慧禪定等の今世後世の樂を得せしむ。度せんと欲すとは、漏を盡くすことを得、三乗の道を成じ、無餘涅槃に入らしむるなり。虚空の如きは、無生・無滅・無苦・無樂・無縛・無脱なり、所有無きが故なり。衆生も亦た是の如し。是の故に説く、

問うて曰はく、色等の罪法は不淨苦なりと觀すべきも、餘の善法は云何にして不淨苦なりと觀するや。

答へて曰はく、是の名字の不淨苦とは、隨意安隱の好法を清淨快樂と名くるが如く、不隨意、非安隱の法を不淨苦と名く。善法の中に於いて愛樂し悦可する者をば、以て淨樂と爲し、厭惡し喜ばざる者をば、以て不淨苦と爲す。

須菩提は是の念を作さく、「若し諸の觀法を離るる者は、將に菩薩道を具足せざること無きや」と。是の故に佛、説きたまはく、「色等の不具足を行ぜざる、是れ般若波羅蜜を行するなり」と。

「色の具足」とは、有人は言ふ、「色等の法中に常無常等を憶想分別する。是を具足と名く。」「不具足」とは、是の中に無常等の觀を用つて常等を破す、是を不具足と名く。少しく常なる等の故に、今、色の中に於いても、亦た無常等を行ぜず。是の故に色の不具足を行ぜず、是を般若波羅蜜を行すと爲すと説く」と。復次に、有人は言ふ、「具足とは、謂はく、補處の菩薩の能く色の實觀、乃至一切種智の如き、是を具足と名け、餘は是れ不具足なり。若し菩薩は色等の不具足を行ぜずとは、即ち是れ、具足の般若波羅蜜を行するなり。何となれば、色は不具足なれば則ち色に非ず、色は無常相に非ざるが故なり」と。佛の言はく、「衆生は常の中より出でて、無所有の中に著す。語言音聲に隨ふが故なり」と。是の故に、是の如き實清淨をも亦た行ぜざる、是を般若波羅蜜を行すと爲すと説く。善く道と非道とを説くが故に、須菩提は希有なりと言へり。

「礙」とは、是れ非道なり。「無礙」とは是れ道なり。佛は會衆の心、多く空に廻向して、般若波羅蜜の無礙の相を知れるを觀じたまふ。是の故に説きたまはく、「色等の無礙を行ぜざるは、是れ般若波羅蜜を行するなり」と。能く是の如く行する者は、色等の法に於いて礙無し。須菩提は究盡して、畢竟空の理を知ること能はずと雖も、而も常に樂んで是の空法を説けり。「希有」とは、一切世間の



世尊よ、菩薩摩訶薩は大誓莊嚴して、衆生を度せんと欲するが故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發す。

世尊よ、諸の菩薩摩訶薩は大勇猛にして、虚空の如き等の衆生を度せんが爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發す。何となれば、世尊よ、若し三千大千世界の中に滿つる諸佛は、譬へば竹葦・甘蔗・稻麻・叢林の如くならん。諸佛は若くは一劫、若くは減一劫に法を説き、一一の佛は無量無邊阿僧祇の衆生を度して涅槃に入らしめん、世尊よ、是の衆生の性も亦た減ぜず亦た増さず。何となれば、衆生は、無所有の故に、衆生は離なるが故なり。乃至十方世界中の諸佛の度したまふ所の衆生も亦た是の如し。世尊よ、是の因縁を以ての故に我は是の如く説く、是の人は衆生を度せんと欲するが故に阿耨多羅三藐三菩提心を發し、虚空を度せんと欲することを爲すと。是の時一比丘有りて、是の言を作さく、「我れ當に般若波羅蜜を禮すべし。般若波羅蜜の中には、法の生ずること無く、法の滅すること無しと雖も、而も戒衆・定衆・慧衆・解脫衆・解脫知見衆有り、而も諸の須陀洹、諸の斯陀含、諸の阿那含、諸の阿羅漢、諸の辟支佛あり、諸の佛あり、而も佛寶・法寶・比丘僧寶有り、而も轉法輪有ればなり」と。

【論】釋して曰はく、須菩提は、佛の般若波羅蜜の無起無作の相を説きたまへるを聞く。是の故に今、佛前に在りて、般若波羅蜜の所作無きことを説けり。若し無作ならば、諸の煩惱を斷すること能は。諸の善法を修集すること能はず。此の中に、佛・因縁を説きたまはく、「作者乃至一切法は、不可得なるが故に、知者すら尙ほ無し、何に況んや作者をや」と。須菩提の言はく、「若し無作ならば、般若波羅蜜は能く作す所無し。應に般若波羅蜜を云何にして行じ、云何にして得べきや」と。佛の言はく、「若し菩薩、一切法を行ぜずんば、一切法の、所謂若くは常、若くは無常、乃至若くは淨、若くは不淨を得ず。是を般若波羅蜜を行すと名く。一切法とは、色より乃ち一切種智に至る。是れ菩薩の行法なり。是の法の中に、無智の人は、諸法の常等を行じ、智人は諸法の無常等を行す。是の般若波羅蜜は、諸法の畢竟實相を示すが故に、諸法の常無常を説かず。無常等は、能く諸法の顛倒を破すと雖も、般若の中には是の法を受けず。(そは)能く著心を生ずるを以ての故なり。思惟籌量して常無常の相を求むるに、定實を得べからず。

蜜の不礙を行ぜざる、是れ般若波羅蜜を行ずるなり。毘提波羅蜜の不礙を行ぜざる、是れ般若波羅蜜を行ずるなり。毘梨耶波羅蜜の不礙を行ぜざる、是れ般若波羅蜜を行ずるなり。禪波羅蜜の不礙を行ぜざる、是れ般若波羅蜜を行ずるなり。般若波羅蜜の不礙を行ぜざる、是れ般若波羅蜜を行ずるなり。乃至一切種智の不礙を行ぜざる、是れ般若波羅蜜を行ずるなり。須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の如く般若波羅蜜を行ずる時、色は是れ不礙なりと知り、受想行識は是れ不礙なりと知り、乃至一切種智は是れ不礙なりと知り、須陀洹果は不礙なりと知り、斯陀含果は不礙なりと知り、阿那含果は不礙なりと知り、阿羅漢果は不礙なりと知り、辟支佛道は不礙なりと知り、阿耨多羅三藐三菩提の道は不礙なりと知る」と。

爾の時に、慧命須菩提、佛に白して言さく、「未曾有なり、世尊よ。是の甚深の法は若し説くも亦た増さず減せず、若し説かざるも亦た増さず減せず」と。佛、須菩提に語りたまはく、「是の如し、是の如し。是の甚深の法は、若し説くも亦た増さず減せず、若し説かざるも亦た増さず減せず。譬へば、佛、形壽を盡くすまで、虚空を、若し讚し、若し毀らんに、讚する時も亦た増さず減せず、毀る時も亦た増さず減せざるが如し。須菩提よ、幻人は、若し讚する時も増さず減せず、毀る時も亦た増さず減せず、讚する時喜ばず、毀る時も空へざるが如し。須菩提よ、諸法の相も亦た是の如く、若し説くとも亦た本の如くして異ならず、若し説かざるも亦た本の如くにして異ならず」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、諸の菩薩摩訶薩の爲す所は甚だ難し。是の般若波羅蜜を修行する時、憂ひず喜ばずして、而も能く般若波羅蜜を習行し、阿耨多羅三藐三菩提に於いても亦た轉還せず。何となれば、世尊よ、般若波羅蜜を修すること、虚空を修するが如くなればなり。虚空の中に般若波羅蜜無く、禪(波羅蜜多)無く、毘梨耶(波羅蜜多)無く、毘提(波羅蜜多)無く、尸羅(波羅蜜多)無く、檀(波羅蜜多)無きが如し。虚空の中に色無く、受想行識無く、亦た内外空外空内外空、乃至無法有法空無く、四念處無く、乃至八聖道分無く、佛の十力無く乃至十八不共法無く、須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果無く、辟支佛道無く、阿耨多羅三藐三菩提無きが如く、般若波羅蜜を修するも亦た是の如し。世尊よ、應に是の諸の菩薩摩訶薩の能く大莊嚴することを禮すべし。世尊よ、是の人は衆生の爲に大莊嚴し、勤めて精進すること、虚空の爲に大莊嚴し。勤めて精勤するが如し、世尊よ、是の人は衆生を度せんと欲すること、虚空を度せんと欲するが如し。世尊よ、是の諸の菩薩摩訶薩の大莊嚴すること、虚空に等しき衆生の爲に大莊嚴するが如し。世尊よ、是の人は大莊嚴して衆生を度せんと欲すること、虚空を擧ぐるが如しと爲す。世尊よ、諸の菩薩摩訶薩は、大精進力もて、衆生を度せんと欲するが故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發す。



歡喜して言はく、「我れ當に般若の爲に禮を作すべし」と。須菩提、意に是の念を作さく、「我は是の般若波羅蜜の、甚深の相を解することを得るが故に發心す。我れ應に禮を作すべし」と。佛の言はく、「是の般若波羅蜜は、無起無作なるが故に、十方如恆河沙の佛は能く得る者無し。汝は聲聞の人に於て、云何ぞ得と言ふや」と。須菩提の言さく、「世尊よ、但だ般若のみに非ず。一切の法は皆な知ること無く、得ること無し」と。佛の言はく、「諸法は一性にして二無し」と。一性とは、所謂畢竟空なり。二無しとは、畢竟、不畢竟無く、一法性にして即ち是れ無性畢竟空なり。著すべからず、相を取るべからず。所以何となれば、因縁の和合より生ずるが故なり。須菩提、是の念を作さく、「若し無性ならば、即ち是の性は不起不作なるを以ての故に、後世の苦は相續せず」と。能く是の如く般若波羅蜜を知れば、一切諸の礙皆な遠離す。若し諸の礙を遠離すれば、則ち自在に無上道を得。須菩提は是の説を聞いて是の念を作さく、「我は佛を得るが爲を以て不得と謂ふ。是の般若波羅蜜は解し難く知り難し」と。佛、答へたまはく、「獨り汝のみ〔解し〕難きに非ず、一切衆生は見る者無く、聞く者無く、知る者無く、識る者無く、得る者無く、耳鼻舌身の知らざる所、意の識らず、得ざる所なり。是の般若は六種の知を出過するが故に、難解なりと言ふ」と。須菩提は深般若の中に入り、智力窮極するが故に、不可思議と言ふ。佛の言はく、「是の般若は心より生ずるに非ず、五衆より生ずるに非ず。乃至十八不共法より生ずるにあらず。生相無きが故なり」と。

問うて曰はく、若し心より生ぜずと説かば、何を以てか復た五衆を説き、五衆の中の識衆は、即ち是れ心なるや。

答へて曰はく、先に心を説くは、是れ略説にして、後に五衆等を説くは、是れ廣説なり。五衆乃至十八不共法は、般若の興めに因縁と作るべきも、般若を生ずること能はず。譬へば、猛風は雲を除き、能く日月をして出現せしむるも、而も日月を作ること能はざるが如し。

んと欲せば、應に實法を以て、示教し、利喜せしむべし。示教し、利喜せしむるの義は、先に説くが如し。實法とは、所謂諸の憶想分別を滅するなり。是の故に、檀を行する時、我は與ふ等と分別せずと説く。若し能く是の如く教化すれば、二種の利を得。一には錯謬無く、二には亦た佛の得たまふ所の如き法を以て他人を化す。是の如き等の無量の礙相と相違する、是を無礙相と名く。

問うて曰はく、佛は已に須菩提の無礙相を説くことを讚じたまへり。今、何を以ての故に復た更に自ら微細の礙相を説くや。

答へて曰はく、佛は須菩提の力の中に就いて讚歎したまはく、「汝は是の衆生人を捨てて而して能く菩薩の礙相を説く」と。微細の礙相は須菩提の力の及ばざる所なり。是の故に佛は自ら説きたまはく、「是の礙相は微細なるが故に汝一心に好く聽け」と。

何者か是なる。所謂、菩薩は取相を用つて諸佛等を念じ、皆な是の無相の相の般若波羅蜜を礙ふ。佛、般若の中より出でたまへるは、亦た是れ無相の相なり。諸の善根をば著心もて、相を取り廻向するは、是れ世間の果報にして、盡く毒を雜ふること有るが故に、無上道を得ること能はず。

問うて曰はく、上には鹿なる礙を説いて相を取ると言ひ、今、微細の礙中に亦た相を取ると言ふ、何の差別あるや。

答へて曰はく、上に、「我は是れ與ふる者、彼は是れ受くる者なり」と説く。是の如き等を今は但だ相を取ると説く。復次に、今は諸の菩薩の念佛三昧を説くが故に微細の相なり。微細の心は人中の礙なり。是の故に微細の礙と名く。

須菩提は佛の所説の深妙にして、己が及ぶ所に非ざることを知る。故に讚じて言はく、「深なり」と。佛、答へたまはく、「一切の法は、常に遠離の相なるが故なり」と。佛の説きたまへる是の般若は一切の法を離る。一切の法を離るるが故に、細微の相も、般若の中に入ることを得ず。須菩提、

釋多羅三藐三菩提に廻向す。須菩提よ、有る可き所の相は、皆な是れ礙相なり。何となれば、相を取りて諸佛を憶念すべからず。亦た應に相を取りて、諸佛の善根を念すべからざればなり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、是の般若波羅蜜は甚深なり」と。佛の言はく、「一切法は、常に離なるが故なり」と。須菩提の言さく、「世尊よ、我は當に般若波羅蜜を禮すべし」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の般若波羅蜜は無起・無作なるが故に、能く得る者あること無し」と。須菩提の言さく、「世尊よ、一切の諸法も亦た不可得なりや」と。佛の言はく、「一切其は一性に於て二性に非ず。須菩提よ、是の一法性は是も亦た無性なり。是の無性は即ち是れ性なり。是の性は不起・不作なり。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は若し諸法の一性、所謂無性・無起・無作なることを知らば、則ち一切の礙相を遠離す」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、是の般若波羅蜜は、知り難く解し難きや」と。佛の言はく、「汝が言ふ所の如く、是の般若波羅蜜は、見る者なく、聞く者無く、知る者無く、識る者無く、得る者無し」と。「世尊よ、是の般若波羅蜜は不可思議なりや」と。佛の言はく、「汝が言ふ所の如し。是の般若波羅蜜は心より生ぜず、受想行識より生ぜず、乃至十八不共法より生ぜず」と。

【論】問うて曰はく、若し無礙と相違する、是を名けて礙と爲さば、帝釋は何を以てか更に礙を問ひしや。

答へて曰く、菩薩の礙法は微妙にして、諸の善法に入りて和合し、利根の者には覺せられ、鈍根なる者は覺せず。解し難きを以ての故に、佛前に於いて、更に礙法を問ふ。

何者か是なる。所謂菩薩は、慳心施心を分別し、慳心を捨てて施心を取る。是を心相を取ると名く。布施物の貴賤を知り、布施を修集して、能く一切に與ふることを知る。是の檀波羅蜜より乃ち隨喜の福德に至るまでは相を取るなり。諸の善法は是れ妙なりと爲すと雖も、内に我に著し、外に法に著して、礙法の中に墮す。譬へば、食は香美なりと雖も、過噉すれば則ち病むが如し。此の中に須菩提は自ら因縁を説けり。「色等の諸法の相は、畢竟空なるが故に、無上道に廻向することを得べからず」と。上には礙相を説き、今は無礙の相を説くなり。所謂、菩薩は若し他に無上道を教へ

## 卷の第六十四

## 第四十二 歎淨品の餘を釋す

【經】

爾の時、釋提桓因、須菩提に問ふ、「云何なれば是れ菩薩道を求むる善男子の礙法なるや」と。須菩提、釋提桓因に報へて言はく、「憍尸迦よ、菩薩道を求むる善男子、善女人ありて心相を取る。所謂、檀波羅蜜の相を取り、尸羅波羅蜜の相、曇提波羅蜜の相、毘梨耶波羅蜜の相、禪波羅蜜の相、般若波羅蜜の相を取り、佛の十力の相乃至十八不共法の相を取り、諸佛の相を取り、諸佛の種ゑたまふ善根の相を取り、是の一切の福徳を和合して相を取り、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。憍尸迦よ、是を菩薩道を求むる善男子、善女人の礙法と名く。是法を用ふるが故に、礙無くして般若波羅蜜を行ずること能はず。何となれば、憍尸迦よ、是の色相は廻向す可からず、受想行識の相は廻向す可からず、乃至一切智の相は廻向す可からざればなり。

復次に、憍尸迦よ、若し菩薩摩訶薩は他人に阿耨多羅三藐三菩提を示教し、利喜せしめんとせば、應に一切諸法の實相を示教し、利喜せしむべし。若し菩薩道を求むる善男子、善女人は、檀波羅蜜を行ずる時、是の分別を作して言ふべからず。我は施與し、我は戒を持し、我は忍辱し、我は精進し、我は禪に入り、我は智慧を修し、我は内空・外空・内外空を行じ、乃至、我は無法有法空を行じ、我は四念處を修し、乃至、我は阿耨多羅三藐三菩提を行ず」と。善男子、善女人は、應に是の如く、他人に阿耨多羅三藐三菩提を示教し、利喜せしむべし。若し是の如く、阿耨多羅三藐三菩提を示教し、利喜せば、自ら錯謬無く、亦た佛の所説の法の如く、示教し利喜せば、是の善男子、善女人をして、一切の礙法を遠離せしむ」と。爾の時に、佛、須菩提を讚じて（曰はく）、「善い哉、善い哉。汝が諸の菩薩の爲めに、諸の礙法を説けるが如し。須菩提よ、汝今更に聴け、我れ微細に礙相を説かん。汝須菩提よ、一心に好く聴け」と。佛、須菩提に告げたまはく、「善男子、善女人あり、阿耨多羅三藐三菩提心を發して、相を取り、諸佛を念ず。須菩提よ、有る可き所の相は、皆な是れ礙相なり。又た諸佛の初發意より乃至法住まで、其の中間に於いて、所有る善根に於いて、相を取りて憶念し、相を取り憶念し已りて、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。須菩提よ、有る可き所の相は、皆な是れ礙相なり。又た諸佛及び弟子の所有る善根、及び餘の衆生の善根に於いて相を取りて、阿

【二】 宋本元本宮本は「釋第四十二品下訖第四十三品上」、聖本は「釋第四十一品下訖第四十二品上」に作る。

物となり。「此の二事は皆な是れ外なり」。今は與ふる者を破す。乃至我が修する一切種智も亦た是の如し。此の中に因縁を説く。菩薩の般若を行するは方便の故に、是の如き分別無し。内空を以ての故に、乃至自相空、是の十三空は諸法を破し盡せり。後の五種の空は、總相の説なり。是を菩薩の無所礙と名く。無所礙とは、是の諸の空を以て、一切の法に於いて、礙する所無きなり。<sup>六</sup>

【六】石本は卷を分たず。宋本元本宮本は「〔釋〕第四十一品ト訖第四十二品上一の十三或は十四字、聖本は「第四十品下訖第四十一品上」十二字の夾註を附加す。



に因縁を説く。所謂一切法は無垢無淨なり。二の清淨の中に、是は垢、是は淨と分別す。我、無邊なるが故に五衆清淨なりとは、我は空なり、空なるが故に無邊なるが如く、五衆も亦た是の如し。

問うて曰はく、常に、「畢竟清淨なるが故に」と言ふ。今何を以てか、畢竟空・無始空と言ふや。答へて曰はく、畢竟空とは即ち是れ畢竟清淨なり。人は空を畏るゝを以ての故に清淨と言ふ。此の中に「我は無邊なり」と説く。我とは、即ち衆生にして、衆生は空なり。何となれば、無始空の故なり。説いて曰はく、能く是の如く知る、是を般若と名くとは、能く衆生空・法空なるを以て、（又た）一切法畢竟空なるを以て、是を般若波羅蜜と名く。般若波羅蜜は即ち是れ畢竟清淨なり。佛は常に畢竟空なりと答へたまへり、是の故に問ふ、「若し畢竟空ならば云何なれば菩薩の能く是の如く知る、是を菩薩の般若と名くと言ふや」と。「畢竟空を難するなり。（そは）畢竟空は無知なるを以ての故なり」。佛の言はく、「道種を知るが故なり」と。菩薩は一切法の畢竟空を知ると雖も衆生をして此の畢竟空を得、著心を遠離せしめんと欲す。畢竟空は、但だ著心を破せんが爲の故に説く。是れ實の空には非ず。「畢竟空は即ち是れ、道種智なりと答ふ」。爾の時に、須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、般若を行する者は是の念を作す。色は色を知らず等は佛意にして、般若には定相なく、但だ道種智を以ての故に、分別して説き、菩薩をして般若を行ぜしめ、方便あるが故に法は畢竟空なりと雖も、亦た是の如く知ると。色は色法を知らず等とは、一切法を觀するに、畢竟空にして、唯だ能觀の智慧のみ在ること有り。畢竟空を以て、衆生の著心を引導し、畢竟空に入らしむべからず」と。佛、答へたまはく、「若し菩薩、般若を行じ、方便ありて、能く外法を觀するに畢竟空なり」と。色は色を知らず等とは、内に自ら觀す、内心も亦た是の如し、方便力の故なり。若し檀を行する時は是の念を作さず。「我は施與し、彼は是れ施を受く」と。須菩提の「色は色を知らず」等とは、一切法は空なるが故に相知らず。相知らざるが故に所作無く一事を破せり。所謂受者と、施す所の

縁を求むべからず。若し餘人の所説は、當に因縁を求むべし。舍利弗、已に清淨の相を問ひ、佛、證を作したまへり。今、須菩提、清淨の相を説くに、佛、亦た證を作したまふ。我は淨なるが故に五衆は淨なりとは、我の畢竟所有無く不可得なるが如く、五衆も亦た是の如し。畢竟空なれば即ち是れ我は清淨なり。五衆も清淨なり。我空を解することは易く、五衆空を解することは難し。是の故に、解し易きを以て解し難きに喩ふ。六波羅蜜乃至十八不共法、須陀洹果、乃至佛道も亦た是の如し。我は淨なるが故に、是の法も亦た淨なり。

問うて曰はく、上に我は所有無きが故に、色乃至十八不共法も、亦た所有無しと言へり。我は何を以てか、須陀洹果乃至佛道は、自相空なりと説くや。

答へて曰はく、我は和合の因縁に従つて假名生じ、無我の中に於て我顛倒あり。是の故に、我は虚妄にして所有無しと説く。五衆は著處の因縁を以ての故に所有無し。檀波羅蜜等の諸法は、善なりと雖も、是れ有爲の作法にして、菩薩の著する所なるが故に、所有無しと言ふ。須陀洹果等は是れ無爲法なり。無爲法は自相空にして、所謂無生・無滅・無住・無異なるが故に、是の故に所有無しと説かず、但だ自相空なりと説くなり。

復次に、有爲法の中には、邪行多きが故に、所有無しと説き、無爲法の中には、無生・無滅にして、邪行無きが故に、自相空なりと説く。我、淨なれば一切種智も淨なりとは、菩薩は深く著するを以ての故に、無相・無念なり。無相とは、是れ無相三昧なり、無念とは、無相三昧 於ても、亦た念ぜざるなり。今、須菩提は、般若波羅蜜の眞に清淨なることを知るが故に、佛に白さく、「二淨を用ふるが故に、無得・無著なり」と。清淨に二種あり。一には二法の清淨を用ひ、二には不二法の清淨を用ふ。二法の清淨とは、是れ名字の清淨なり。不二法の清淨を用ふとは、是れ眞の清淨なり。佛の言はく、「諸法は畢竟空の相なり。云何ぞ一法清淨なるを以て、得あり著あらんや」と。此の中

は淨なりや。我、淨なるが故に、阿那含果は淨なりや。我、淨なるが故に、阿羅漢果は淨なりや。我、淨なるが故に、辟支佛道は淨なりや。我、淨なるが故に、佛道は淨なりや」と。佛の言はく、「畢竟淨なるが故なり」と。須菩提の言さく、「何の因縁の故に、我淨なれば須陀洹果は淨、斯陀含果は淨、阿那含果は淨、阿羅漢果は淨、辟支佛道は淨、佛道は淨なりや」と。佛の言はく、「自相空なるが故なり」と。「世尊よ、我は淨なるが故に、一切智は淨なりや」と。佛の言はく、「畢竟淨なるが故なり」と。

須菩提の言さく、「何の因縁の故に、我、淨なるが故に、一切智は淨なりや」と。佛の言はく、「無相無念なるが故なり」と。世尊よ、二淨を以ての故に無得、無著なりや」と。佛の言はく、「畢竟淨なるが故なり」と。須菩提の言さく、「何の因縁の故に、二淨を以ての故に、無得、無著は是れ畢竟淨なりや」と。佛の言はく、「垢無く淨なきが故なり」と。世尊よ、我は無邊なるが故に、色は淨、受想行識は淨なりや」と。佛の言はく、「畢竟淨なるが故に、色は淨、受想行識は淨なりや」と。佛の言はく、「畢竟空、無如空なるが故なり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し菩薩摩訶薩、能く是の如く知らば、是を菩薩摩訶薩の般若波羅蜜と名くるや」と。佛の言はく、「畢竟淨なるが故なり」と。須菩提の言さく、「何の因縁の故に、菩薩摩訶薩は能く是の如く知らば、是を菩薩摩訶薩の般若波羅蜜と名くるや」と。佛の言はく、「道種を知るが故なり」と。

「世尊よ、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずるには、方便力を以ての故に、是の念を作すや。色は色を知らず、受想行識は受想行識を知らず、過去法は過去法を知らず、未來法は未來法を知らず、現在法は現在法を知らず」と。佛の言はく、「菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずるや、方便力を以ての故に是の念を作さず。我れ彼の人に施與す。我れ戒を持すること、是の如く戒を持す。我れ忍を修すること、是の如く忍を修す。我れ精進すること、是の如く精進す。我れ禪に入ること、是の如く禪に入る。我れ智慧を修すること、是の如く智慧を修す。我れ福德を得ること、是の如く福德を得。我れ當に菩薩の法位の中に入るべし。我れ當に佛世界を淨め、衆生を成就すべし。當に一切種智を得べし」と。

須菩提よ、是の菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずるに、方便力を以ての故に、諸の憶想分別なし。內空・外空・内外空・空空・大空・第一義空・有爲空・無爲空・無始空・散空・性空・諸法空・自相空の故に、須菩提よ、是を菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずるに、方便力の故に、礙する所無しと名く」と。

【論】釋して曰はく、佛は初に須菩提に命じて般若を説かしたまへり。「若し」所説あるも其の因

欲す。かるが故に説いて言はく、「世尊よ、般若波羅蜜には、是の如き力ありと雖も、畢竟清淨なるが故に、薩婆若に於いても、亦た益なく損なきこと。夢幻中に得失ありと雖も、亦た益なく損なきが如く、虚空の畢竟清淨にして所有無く、亦た是れ虚空に因りて成濟する所あるも、亦た空にして所作ありと言ふことを得ず、亦た空にして所益なしと言ふことを得ざるが如し。檀波羅蜜は般若波羅蜜に因りて所作あり。是の故に般若波羅蜜は益無く損無しと言ふ。般若波羅蜜は、一切法を觀じて、不淨を失すること有り。無常・苦・空・無我・不生・不滅・非不生・非不滅等の種種の因縁を讚歎して、諸觀戲論を滅し、語言の道を斷ず。是の故に、般若波羅蜜は清淨なりと説くなり。諸法に於てい受くる所無く、諸觀戲論を滅し、語言の道を斷ずれば、即ち是れ法の性相に入る。是の故に、此の中に、「法性は不動なるが故に」と説けり。

【經】爾の時、慧命須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、我、淨なるが故に、色は淨なりや」と。佛の言はく、「畢竟淨なるが故なり」と。須菩提の言さく、「何の因縁を以てか、我淨なるが故に、色淨は畢竟淨なるや」と。佛の言はく、「我は所有無きが故に、色は所有なくして、畢竟淨なり」と。「世尊よ、我、淨なるが故に、受想行識は淨なりや」と。佛の言はく、「畢竟淨なるが故なり」と。須菩提の言さく、「何の因縁の故に、我淨なれば受想行識の淨は畢竟淨なりや」と。佛の言はく、「我は所有無きが故に、受想行識は所有なく、畢竟淨なり」と。「世尊よ、我、淨なるが故に、檀波羅蜜は淨なりや。我、淨なるが故に、尸羅波羅蜜は淨なりや。我、淨なるが故に、毘梨耶波羅蜜は淨なりや。我、淨なるが故に、毘羅波羅蜜は淨なりや。我、淨なるが故に、般若波羅蜜は淨なりや。世尊よ、我、淨なるが故に、四念處は淨なりや。世尊よ、我、淨なるが故に、乃至八聖道分は淨なりや。世尊よ、我、淨なるが故に、佛の十力は淨なりや。世尊よ、我、淨なるが故に、乃至十八共法は淨なりや」と。佛の言はく、「畢竟淨なるが故なり」と。

須菩提の言さく、「何の因縁の故に、我、淨なれば檀波羅蜜は淨なりや。我、淨なれば乃至十八不共法は淨なりや」と。佛の言はく、「我は所有無きが故に、檀波羅蜜は所有無く、淨なり。乃至十八不共法は所有なきが故に淨なり」と。「世尊よ、我、淨なるが故に、須陀洹果は淨なりや。我、淨なるが故に、斯陀含果

たまはく、「色等の諸法は清淨なるが故に、是の淨は甚深なり。所以何となれば、色法の諸法は、本末因果、清淨なるが故に、是の淨は甚深なり」と。上の品中に説くが如し。菩薩は色等の法中に於いて、觀行を斷するが故に、是の如き清淨を得。是を以ての故に名色等は清淨なり。是の淨は能く一切法中の戲論を破す、無明は能く畢竟空の智慧光明を與ふ。是の故に「淨明」と言ふ。檀波羅蜜等の諸の菩薩の妙法を行するが故に、是の淨の明を得。是の淨は能く有餘涅槃を與ふるが故に、是を淨の明と言ふ。今、無餘涅槃を與ふるが故に、是の淨は「相續せず」と言ふ。先づ空「空」等の三昧を以て、諸の善法を捨て、後、壽命自然に盡くるが故に、色等の五衆は去らず、亦た相續せず。故に淨は相續せず。百八の諸の煩惱、遮覆し汚染すること能はずして淨なるを以ての故に、「淨にして無垢なり」と言ふ。是の如き諸法實相不二の道を行じ、苦法忍より乃ち十五心に至るまで、是を得と名く。第十六心には沙門果を得、是を著と名く。著者の著は墮落せず、得の別名なり、復次に、六波羅蜜を行するより、乃ち柔順忍を生ずるに至るまで、是を得と名く。能く無生法忍を生じて、菩薩の位に入る、是を著と名く。是の清淨法の中に無所得心を用ふ。此の二事無きが故に、無得、無著と名く。是の如き法を行じて、一切法の畢竟空を知る。畢竟空なるが故に、相を取らず、相を取らざるが故に、三種の業を起さず、作さず。「三種の」業を作さざるが故に、一切の間は無生なり。世間とは所謂三界なり。此の中、二因縁の故に不生なり。一には三種の生業は起らざるが故に、二には三界の自性は不可得なるが故なり。此の中に佛は總じて因縁を説きたまへり。所謂三界の自性は空なり。是の故に三界の色等の諸法の自性は不可得なりと説く。是の淨は無知なり諸法鈍なるが故に。上の品中に説くが如し。一切諸法の性は常に不生なり。不生なるが故に不可得なり。不可得なるが故に畢竟清淨なり。舍利弗は聲聞の波羅蜜を得、佛は一切智人たり。是の二人の問答なるが故に、諸の菩薩は是の般若波羅蜜に貪著す。是の故に舍利弗は其の貪著を斷ぜんと

【五】「著者の著は墮落せず、得の別名なり」原文十一字、元本明本俱に夾註となす。

【論】釋して曰はく、「是の淨は甚深なり」とは、淨に二種あり。一には智慧の淨、二には所縁の法の淨なり。此の二事は相待せり。離智淨と無縁淨、離縁淨と無智淨となり。所以何となれば、一切の心心數法は縁より生ず。若し縁無ければ則ち智生ぜず。譬へば、薪も火無ければ、然ゆる所無きが如し。智有るを以ての故に、縁を淨と爲すことを知る。智なければ、則ち縁の淨なることを知らず。此の中に智淨と縁淨と相待するは、世間の常法なり。是の中には離智離縁と説く。諸法の實相は本自ら清淨なり、心心數法を所縁と爲して、則ち汚染不清淨なり。譬へば、百種の美食も毒と器を同じうすれば、則ち食す可からざるが如し。諸法實相は常に淨にして、佛の所作に非ず、菩薩、辟支佛、聲聞、一切の凡夫の所作に非ず。有佛にも、無佛にも、常住にして、不壞の相なり。顛倒虚誑の法及び果報の中に在れば則ち染汚不淨なり。是の清淨に種種の名字あり。或は如・法性・實際と名け、或は般若波羅蜜と名け、或は道と名け、或は無生・無滅・空・無相・無作・無知・無得と名け、或は畢竟空等と名く。是の如きの無量無邊の名字有り。舍利弗は是の般若波羅蜜の相を觀じ、見る可からず、聞く可からず、説く可からず、破壊す可からずと雖も、而も誹謗して無量の罪を得、正行を信受して、則ち無上の果報を得。舍利弗は希有の歡喜心を發し、而も佛に白して言さく、「世尊よ、是の淨は甚深なりや」と。佛の答へたまはく、「汝が見る所の者は以て希有と爲すも、實相の中は復た汝が見る所に過ぎたり。一切の法中、畢竟淨にして、著する所なく、乃至淨體にも亦た著せず、是を華死河淨と名く」と。

復次に、清淨の主は、所謂十方三世の諸佛なり、諸佛にも亦た著せざるは、是れ清淨なり。是の故に畢竟清淨なり。故に是の清淨なる般若波羅蜜は、能く一切の賢聖をして無邊の苦を盡さしむ。是の大利益あるも、而も亦た是の般若波羅蜜に著せず。是の如き無量の因縁あり。畢竟清淨にして、是の淨は甚深なり。舍利弗問ふ、「何の法か畢竟清淨なるが故に、是の淨は甚深なりや」と。佛答へ

乃至一切種智は、得ること無く、著すること無きが故に、是の淨は得ること無く著すること無し」と。世尊よ、是の淨は無生なりや」と。佛の言はく、「畢竟淨なるが故なり」と。

舍利弗の言さく、「何の法か無生なるが故に、是の淨は無生なりや」と。佛の言はく、「色は無生なるが故に、是の淨は無生なり。乃至一切種智は無生なるが故に、是の淨は無生なり」と。世尊よ、是の淨は欲界中に生ぜざるや」と。佛の言はく、「畢竟淨なるが故なり」と。

舍利弗の言さく、「云何なれば是の淨は欲界の中に生ぜざるや」と。佛の言はく、「欲界の性は不可得なるが故に、是の淨は欲界の中に生ぜず」と。世尊よ、是の淨は色界の中に生ぜざるや」と。佛の言はく、「畢竟淨なるが故なり」と。舍利弗の言さく、「云何なれば是の淨は色界の中に生ぜざるや」と。佛の言はく、「色界の性は不可得なるが故に、是の淨は色界の中に生ぜず」と。世尊よ、是の淨は無色界の中に生ぜざるや」と。佛の言はく、「無色界の性は、不可得なるが故に、是の淨は無色界の中に生ぜず」と。世尊よ、是の淨は無智なりや」と。佛の言はく、「畢竟淨なるが故なり」と。

舍利弗の言はく、「云何なれば是の淨は無知なりや」と。佛の言はく、「諸法は鈍なるが故に是の淨は無知なり」と。世尊よ、色は無知にして是の淨は淨なりや」と。佛の言はく、「畢竟淨なるが故なり」と。舍利弗の言さく、「云何なれば色は無知にして是の淨は淨なりや」と。佛の言はく、「色の自性は空なるが故に、色は無知にして是の淨は淨なり」と。受想行識は無知にして是の淨は淨なりや」と。佛の言はく、「畢竟淨なるが故なり」と。舍利弗の言さく、「云何なれば受想行識は無知にして是の淨は淨なりや」と。佛の言はく、「受想行識の自性は空なるが故に、無知にして是の淨は淨なり」と。

「世尊よ、一切法は淨なるが故に、是の淨は淨なりや」と。佛の言はく、「畢竟淨なるが故に」と。舍利弗の言さく、「云何なれば一切法は淨なるが故に、是の淨は淨なりや」と。佛の言はく、「一切法は不可得なるが故に、一切法淨にして是の淨は淨なり」と。世尊よ、是の般若波羅蜜は薩婆若に於いて益なく損なきや」と。佛の言はく、「畢竟淨なるが故なり」と。舍利弗の言さく、「云何なれば般若波羅蜜は薩婆若に於いて益なく損なきや」と。佛の言はく、「法は常住の相なるが故に、般若波羅蜜は薩婆若に於いて益なく損なきや」と。佛の言はく、「法は常住の相なるが故に、般若波羅蜜は薩婆若に於いて益なく損なし」と。世尊よ、是の般若波羅蜜の淨は暗法に於いて受くる所無きや」と。佛の言はく、「畢竟淨なるが故なり」と。舍利弗の言はく、「云何なれば般若波羅蜜の淨は、諸法に於いて受くる所無きや」と。佛の言はく、「法性は不動なるが故に、是の般若波羅蜜の淨は、諸法に於いて受くる所無し」と。

心を覆ひ、今世後世の業果を疑ふ。何に況んや、能く甚深の般若を信ぜんをや。復た經卷を書し、供養し、惡罪を免れんことを望むと雖も、般若を去ること大に遠し。或は善知識に遇ふ有り、先世に精進して福德あり、利智第一にして、般若波羅蜜の清淨の因縁を信じて、能く所説の如き果報を得。阿闍世王の如きは、殺父の罪ありしも、佛・文殊師利の善知識(の教敎を)蒙るが故に、其の重罪を除き、所説の如く、般若の果報を得て、無上道の記を受けぬ。

#### 第四十二 歎淨品

【經】爾の時、舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、是の淨は甚深なりや」と。佛の言はく、「畢竟淨なるが故なり」と。舍利弗の言さく、「何の法か、淨なるが故に、是の淨は甚深なるや」と。佛の言はく、「色淨なるが故に、佛の十力淨なるが故に、乃至十八不共法淨なるが故に、法淨・菩薩淨・佛淨の故に、一切智・一切種智淨なるが故に、是の淨は甚深なり」と。「世尊よ、是の淨は明なりや」と。佛の言はく、「畢竟淨なるが故なり」と。舍利弗の言さく、「何の法か淨なるが故に、是の淨は明なるや」と。佛の言はく、「般若波羅蜜淨なるが故に、是の淨は明なり。乃至檀波羅蜜淨なるが故に、是の淨は明なり。四念處乃至一切智淨なるが故に、是の淨は明なり」と。

「世尊よ、是の淨は相續せざるや」と。佛の言はく、「畢竟淨なるが故なり」と。舍利弗の言さく、「何の法か相續せざるが故に、是の淨は相續せざるや」と。佛の言はく、「色は去らず、相續せざるが故に、是の淨は相續せず。乃至一切種智は、去らず、相續せざるが故に、是の淨は相續せず」と。「世尊よ、是の淨は無垢なりや」と。佛の言はく、「畢竟淨なるが故なり」と。舍利弗の言さく、「何の法か無垢なるが故に、是の淨は無垢なりや」と。佛の言はく、「色性は常に淨なるが故に、是の淨は無垢なり。乃至一切種智の性は常に淨なるが故に、是の淨は無垢なり」と。

「世尊よ、是の淨は得ること無く、著すること無きや」と。佛の言はく、「畢竟淨なるが故なり」と。舍利弗の言さく、「何の法か得ること無く、著すること無きが故に、是の淨は得ること無く著すること無きや」と。佛の言はく、「色は得ること無く、著すること無きが故に、是の淨は得ること無く、著すること無し。」

【三】石本は茲を以て卷の第六十四の終りとなし、次行、卷の第六十五の首となす。  
【四】「第四十二歎淨品」、宋元明等諸本は「第四十二歎淨品の上」に作る。



持戒精進の者有つて而も般若を信ぜざらんには、是は云何なれば地獄に墮するや。

答へて曰はく、般若を破するに二種あり。一には、佛口づから説きたまへる所を弟子誦習し、書して經卷を作るに、愚人は誘りて言はく、「是れ佛説に非ず、是れ魔、若くは魔民の作る所、亦た是れ斷滅の邪見の人の手筆し、莊嚴せる口力の者の説なり」と。或は言はく、「是れ佛説なり」と雖も、其中の處處は餘人（是を）増益す」と。或は有人は、著心もて分別して、相を取り、般若波羅蜜を説く。口に空法を説くも而も心は有に著す。初破の者は大地獄に墮す。（そは）聖人の般若を説く意を得ざるが故なり。第二には、著心もて論議する者を破す。是れを名けて般若を破すと爲さず。調達は佛身より血を出だし、祇域も亦た佛身より血を出だせり。同じく血を出だすと雖も、心異なるが故に、一人は罪を得、一人は福を得るが如し。畫して佛像を作り、一人は像を好まざるを以ての故に壞し、一人は惡心を以ての故に破せんに、心同じからざるを以ての故に、一人は福を得、一人は罪を得るが如く、般若波羅蜜を破する者も、亦た是の如し。

復次に、或は有人は般若を破して、瞋らず、佛を輕んぜずと雖も、自ら心を用ゐて是の甚深の法を憶想分別すらく、「一切智人の所説には、應に深妙の法あるべし、云何ぞ都て空なりと言はん。佛は著心無きを以て、衆生を度せんが爲の故に、法を説きたまへり」と。是の人は著心を以て相を取るが故に口業を起し、般若を毀咎し破壊し、能く身業を起し、手に靡き、指に撥き、毀りて去らしむるに非ず。二種の不信と相違するが故に、二種の信と名く。一には般若の實義を知り、信じて説の如き果報を得、二には、經卷の言語文字を信ずることは、功德を得ること少く、邪見の罪重きが故に、持戒等の身口の業好しと雖も、皆な邪見惡心に墮す。佛自ら譬喩を説きたまへるが如し。苦種を種うれば、復た四大所成たりと雖も、皆な苦味と作るが如く、邪見の人も亦た是の如し。持戒精進すと雖も、皆な惡法を成す。此と相違するを名けて正見と爲す。五逆の罪人は、惡罪常に

復次に、十八空を用つての故に、色等乃至一切種智は空なり、乃至一切種智空なるが故に、十八空も亦た空なり。一切種智は十八空を離れず、十八空は一切種智を離れず、是の故に不二・不別と言ふ。空とは、即ち是れ清淨なり。今、色、乃至一切種智の一法を首はじと爲し、餘法を各各首と爲さんに、展轉して皆な清淨なり。

復次に、諸法は多なり、無量なるが故に、略して有爲無爲と説く。有爲法の實相は即ち是れ無爲法なり。淨行を知る者は諸法の中に於いて、常・樂・我・淨を求むるに不可得なり。若し不可得ならば、是れ實に有爲法を知れりと爲す。實に不可得を知れば、即ち是れ無爲法なり。是の故に、有爲法淨なるが故に、無爲法も清淨なりと説く。

復次に、有爲法に因るが故に無爲法を知る。聖人は是の無爲法を得て、有爲法の相を説く。是の故に、「有爲法清淨なるが故に無爲法は清淨に、無爲法清淨なるが故に、有爲法は清淨なり」と説く。有爲法は三世の中に在るが故に、過去世清淨なるが故に未來世も亦た清淨、未來世清淨なるが故に過去世も亦た清淨なりと説く。所以何となれば、如し過去世は、破壊散滅して所有無きが故に空なり。未來世は未だ生ぜず、未だ有らざるが故に空なり。三世無きが故に現在も亦た無し。何となれば、先有り後有りて現在有ることを知ればなり。

復次に、有爲法は念念生滅するが故に住する時無く、住する時無きが故に現在世無し。三世、空なるが故に、有爲法は空なり。有爲法空なるが故に、無爲法は空なり。空なれば即ち是れ畢竟清淨にして、破せず、壞せず、戲論無きこと虚空の如し。是の如く般若波羅蜜は、畢竟清淨にして、三世諸佛の法藏なり。是を破して能く實相般若の言説文字を宣示するが故に地獄に墮す。

問うて曰はく、若し般若を信ぜざれば、地獄に墮し、信する者は佛と作ることを得。若し五逆の罪・破戒・邪見・懈怠の人有らんに、是の般若を信ぜば、是の人は佛と作ることを得るや不や。復た

は淨なり。生淨なるが故に老死は淨なり。老死淨なるが故に般若波羅蜜は淨なり。般若波羅蜜淨なるが故に乃至檀波羅蜜は淨なり。檀波羅蜜淨なるが故に内空は淨なり。内空淨なるが故に乃至無法有法空は淨なり。無法有法空淨なるが故に四念處は淨なり。四念處なるが故に乃至一切智は淨なり。一切智淨なるが故に一切種智は淨なり。何となれば、是の一切智の淨と一切種智の淨とは、不二・不別・無斷・無壞なればなり。

復次に、須菩提よ、般若波羅蜜淨なるが故に色は淨なり。乃至般若波羅蜜淨なるが故に一切智は淨なり。何となれば、是の般若波羅蜜の淨と一切智の淨とは、不二・不別なるが故なり。須菩提よ、禪波羅蜜淨なるが故に、乃至一切智淨なり。毘梨耶波羅蜜、毘提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀波羅蜜淨なるが故に、乃至一切智は淨なり。内空淨なるが故に、乃至一切智は淨なり。四念處淨なるが故に、乃至一切智は淨なり。

復次に、須菩提よ、一切智淨なるが故に乃至般若波羅蜜淨なり。是の如きの一一は先に説けるが如し。復次に、須菩提よ、有爲淨なるが故に無爲は淨なり。何となれば、有爲の淨と無爲の淨とは、不二・不別・無斷・無壞なるが故なり。

復次に、須菩提よ、過去淨なるが故に、未來・現在は淨なり。未來淨なるが故に、過去・現在は淨なり。現在淨なるが故に、過去・未來は淨なり。何となれば、現在の淨と過去・未來の淨とは、不二・不別・無斷・無壞なるが故なり。

【論】問うて曰はく、佛は、「三毒は是れ垢穢にして不淨なり」と説きたまへり。此の中には、云何なれば淫欲等は淨なるが故に、色等も亦た淨なりと言ふや。

答へて曰はく、佛は「三毒の實性、清淨なるが故に、色等の諸法も、亦た清淨なり」と説きたまへり。三毒も淨、色等も淨なるが故に、不二・不別なり。廣く三毒の清淨及び三毒清淨の果報、因縁を説かんと欲するが故に、無明淨なるが故に諸行も亦た淨なりと説く。「無明淨なり」とは、所謂無明は畢竟空なり。無明を破する十喻の中に説くが如し。十二因縁、乃至一切種智も亦た是の如し。是の故に色等無明等の諸法は清淨なり。故に般若波羅蜜は清淨なり。般若波羅蜜清淨なるが故に、諸の菩薩の行する所の法、所謂禪波羅蜜、乃至一切種智も清淨なり。禪波羅蜜等の諸法も亦た是の如し。

るが故に因も亦た淨なりと言ふや。

答へて曰はく、不淨觀は是れ初入の門にして實觀に非ず。是の故に十六聖行に入らず。是の十六行の中には、無常・苦・空・無我を觀じて不淨を觀ぜず。淨顛倒の故に婬欲を生じ、淨を破するが故に不淨と言ふ、是れ實に非ず。是の故に不淨は十六聖行に入らず、但だ是れ解を得るの觀なり。是の般若の中には、常を觀ぜず、無常を觀ぜず、淨を觀ぜず、不淨等を觀ぜざれば、常・無常・淨・不淨・空・實等の諸觀滅し、戲論滅す。是れ色の實相なり。色の實相淨なるが故に果も亦た淨なり。

復次に、佛は此の中に自ら因縁を説きたまはく、「般若波羅蜜は、虚空の如く、畢竟〔清〕淨にして、染汚する所なし。是の般若波羅蜜は、色等の諸法實相にして、不生、不滅なるを觀じ、六波羅蜜を行じ、四念處等を修す。是の如くにして般若波羅蜜を得べし。是の般若波羅蜜に三種の因縁あり。正觀と、正行と、正修となり。是の故に言はく、「般若波羅蜜淨なるが故に、色等の諸法は淨なり。色等の諸法淨なるが故に、般若波羅蜜は淨なり。所以何となれば、色等の諸法と般若波羅蜜とは、實相の中に無二・無別・不異・不別にして、不離・不散なるが故に、不斷・不壞なればなり」と。

復次に、我の法は、乃至十方三世の中に求むれども不可得なり。五衆の中に於いて、但だ假名の衆生のみ有り、乃至知者・見者も亦た是の如し、我の空・無所有なるが如く、清淨なるが故に、一切法も亦た是の如し。

【經】復次に、須菩提よ、婬は淨なるが故に色は淨なり。乃至一切種智は淨なり。何となれば、婬淨と色淨乃至一切種智淨とは、不二不別なればなり。瞋、癡は淨なるが故に色は淨なり。乃至一切種智は淨なり。何となれば、瞋・癡淨と色淨乃至一切種智淨とは、不二、不別、〔無斷、無壞〕なればなり。

復次に、須菩提よ、無明淨なるが故に諸行は淨なり。諸行淨なるが故に識は淨なり。識淨なるが故に名色は淨なり。名色淨なるが故に六入は淨なり。六入淨なるが故に觸は淨なり。觸淨なるが故に受は淨なり。受淨なるが故に愛は淨なり。愛淨なるが故に取は淨なり。取淨なるが故に有は淨なり。有淨なるが故に生

ず、解せず。此の中に佛、自ら因縁を説きたまはく、「色等の諸法は、有爲の作法にして、因縁の和合より、生ずるが故に、定性あること無きが故に、無所有の性は是れ色等の諸法なりと説く」と。

復次に色等の諸法は、三世の中に縛せず、解せず。三世を破する中に説くが如し。「是の時、須菩提は、般若波羅蜜の甚深に非ず、甚深ならざるに非ざることを知る」と。後品の中に説くが如し。

「若し般若波羅蜜は甚深なりと謂はば、則ち般若波羅蜜を遠離す」と。是を以ての故に、佛に白して言さく、「世尊よ、悪人は、般若波羅蜜の甚深なるを以て解し難し。善人を謂ふに非ず。悪人は般若と相應せず、一心に勤めて精進せず、般若波羅蜜を解する善根を種えず、随つて般若を破壊す。悪師、懈怠の者は、世間の樂に著して、出世間を願はず。此の如きの人は、若し精進ありとも、少うして言ふに足らず。諸の煩惱、心を亂すが故に、喜んで善不善の法相を忘れ、憍慢を破せず、邪見戲論を除かざるが故に、諸法實相を求むれども、諸法の相の好醜を分別することを知らず。是を巧便の慧無しと名く。是の如き等の惡法あるが故に、是の人は、甚深の般若を解し難し」と。佛、其の意を可として言はく、「是の如し、是の如し」と。

問うて曰はく、須菩提の説の中には、魔事あること無し。佛説の中に何を以てか魔事を益すや。答へて曰はく、須菩提は直に内外の因縁を説いて具足せず。佛は今、具足して説きたまふが故に言はく、「是の人は魔の爲に使はる」と。

佛は更に甚深にして解し難き相を説かんと欲して、須菩提に告げたまはく、「色等の諸法淨なるが故に、果も亦た淨なり。四念處は是れ色等の諸法の果なり。何となれば、色等の諸法は、不淨無常等と觀すれば、即ち身念處を得ればなり」と。餘念は上に説くが如し。是の中、四念處の性は無漏にして煩惱を斷じ、涅槃の爲の故に清淨なり。果、淨なるを見るが故に、因も亦た淨なるを知る。問うて曰はく、「先には色の不淨無常なり等と觀じて、身念處を得と説けり。云何なれば、果、淨な

行識淨なれば、即ち般若波羅蜜淨なり。般若波羅蜜淨なれば、即ち受想行識淨なり。乃至一切種智淨なれば、即ち般若波羅蜜淨なり。般若波羅蜜淨なれば、即ち一切種智淨なり。色の淨なると、般若波羅蜜の淨なるとは二無く別無く、斷ずること無く、壞すること無し。乃至一切種智の淨なると般若波羅蜜の淨なるとは、二無く別無く、斷ずること無く、壞すること無し。

復次に、須菩提よ、不二にして淨なるが故に色は淨なり、不二にして淨なるが故に乃至一切種智は淨なり。何となれば、是の不二にして淨なれば、色は淨乃至一切種智も淨なりとは、二無く別無きが故なり。我淨・衆生淨・乃至智者・見者淨なるが故に、色淨・受想行識淨・乃至一切種智淨なり。色淨乃至一切種智淨なるが故に、我・衆生、乃至知者・見者淨なり。何となれば、我・衆生、乃至知者・見者淨と、色淨、乃至一切種智淨とは、二ならず別ならず、斷ずること無く、壞すること無ければなり」と。

【論】釋して曰はく、爾の時、須菩提、佛に白して言さく、「是の般若波羅蜜は、甚深なるが故に、懈怠して惡知識に隨ひ、不善根を種うるが故に、信じ難し、上と相違するを名けて、般若波羅蜜を信ずと爲す」と。佛は其の言を可としたまへり。須菩提、更に是の般若波羅蜜を問ふ、「云何なれば甚深なるが故に信じ難きや」と。佛の答へたまはく、「色等の諸法は縛すること無く、解くこと無し。三毒は是れ縛にして、三解脱門は是れ解なり。是の三毒等の諸の煩惱は虚誑不實にして、和合の因縁より生じ、自性無きが故に、縛すること無し。縛すること無きが故に、解くこと無し。是の三毒を破するが故に、三解脱門も亦た空なり」と。

復次に、相を取り法に著するは顛倒なり。一切の煩惱等は是れ縛なり。縛法若し實に定んで自性あらば、則ち解く可からず。若し實に定んで有ならば、誰か能く破する者ぞ。若し破せば即ち斷滅の中に墮す。若し取相顛倒等の諸の煩惱は、虚誑不實にして亦た斷ずる所無し。

復次に、一切の心心數法は、憶想分別して相を取り、皆な緣中に縛在す。若し諸法實相の中に入れて、皆な是れ虚誑なることを知る。上品の中に説くが如し。「心清淨の相とは、即ち是れ心相に非ず。是の縛は空なるが故に、解も亦た空なり」と。是の如き等の種種の因縁の故に、色等の諸法は縛せ

信じ難く解し難きや」。佛の言はく、「是の如し、是の如し。須菩提よ、是の深般若波羅蜜をば、勤めて精進せず、不善根を種え、惡友を相得る人は、信じ難く解し難し。」

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、是の般若波羅蜜は、云何なれば、甚深にして、信じ難く解し難きや」。「須菩提よ、色は縛せず、解せず。何となれば、無所有の性は、是れ色なればなり。受想行識は縛せず、解せず。何となれば、無所有の性は、是れ受想行識なればなり。檀波羅蜜は縛せず、解せず。何となれば、無所有の性は、是れ尸羅波羅蜜なればなり。尸羅波羅蜜は縛せず、解せず。何となれば、無所有の性は、是れ毘梨耶波羅蜜なればなり。毘梨耶波羅蜜は縛せず、解せず。何となれば、無所有の性は、是れ禪波羅蜜なればなり。般若波羅蜜は縛せず、解せず。何となれば、無所有の性は、是れ般若波羅蜜なればなり。須菩提よ、内空は縛せず、解せず。何となれば、無所有の性は、是れ内空なればなり。乃至無法有空は縛せず、解せず。何となれば、無所有の性は、是れ四念處なればなり。乃至一切智、一切種智は縛せず、解せず。何となれば、無所有の性は、是れ一切種智なればなり。須菩提よ、色の本際は縛せず、解せず。何となれば、本際の無所有の性は、是れ色なればなり。受想行識乃至一切種智の本際は縛せず、解せず。何となれば、本際の無所有の性は、是れ一切種智なればなり。須菩提よ、色の後際は縛せず、解せず。何となれば、後際の無所有の性は、是れ色なればなり。受想行識、乃至一切種智の後際は縛せず、解せず。何となれば、後際の無所有の性は、是れ一切種智なればなり。須菩提よ、現在の色は縛せず、解せず。何となれば、現在の無所有の性は、是れ色なればなり。受想行識、乃至現在の一切種智は縛せず、解せず。何となれば、現在の無所有の性は、是れ一切種智なればなり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、是の般若波羅蜜をば、勤めて精進せず、善根を種えず、惡友を相得て、懈怠して進むこと少く、喜んで忘れ、巧便の慧なき、此の如きの人は、實に信じ難く解し難きや」と。「是の如し、是の如し。須菩提よ、是の般若波羅蜜をば、勤めて精進せず、善根を種えず、惡友を相得て、魔に繫屬せられ、懈怠して進むこと少く、喜んで忘れ、巧便の慧なき、此の如きの人は、實に信じ難く、解し難し。何となれば、色淨なれば果も亦た淨なり。受想行識淨なれば果も亦た淨なり。乃至阿耨多三藐三菩提淨なれば果も亦た淨なればなり。」

復次に、須菩提よ、色淨なるが故に即ち般若波羅蜜淨なり。般若波羅蜜淨なれば、即ち色淨なり。受想

を受く。

問うて曰はく先に已に破法の因縁、所謂、愛著の法等を説けり。須菩提は何を以てか更に問へるや。答へて曰はく、先には論中に説き、今は經中に説く。先には遍ねく説かず、今は遍ねく廣く説く。所謂四因縁なり。是の人は魔の爲に使はれ、若くは魔、若くは魔人來りて、其の心中に入り、其の身口を轉じて般若波羅蜜を破せしむ。阿難に佛は三たび閻浮提の樂、壽命を問ひたまひしに、亦た樂魔身に入るが故に三たび佛に答へたてまつらざりしが如し。阿難（の如く）初道を得てすら猶ほ魔の爲に燒みださる。何に況んや凡夫人をや。

復次に、魔に四種あり、（即ち）五衆魔、煩惱魔、死魔、自在天子魔なり。四魔の中にて、多く煩惱魔、自在天子魔の故に、般若を信ぜざらしめ、自ら法に貪著し、他法を憎嫉し、愚癡顛倒するが故に、能く般若波羅蜜を破す。有人の言はく、「初の因縁は煩惱魔にして、後のは第四の自在天子魔なり。是の二種の魔に使はるゝが故に、魔の爲に使はると名く。堅く邪見に著し、自法に貪愛し、慧根鈍なるが故に、佛意を識らず、甚深の般若を信ぜず、受けざるが故に破す。人あり、利根にして、信するに堪へれば、魔は又た來らず、但だ惡師の教に隨ふが故に、亦た般若を破す。有人は惡知識に屬すと雖も、諸の結使薄きが故に、勤め精進して能く般若波羅蜜を信ず。是の故に二事合して一と爲る。亦た惡知識に屬し、亦た深く五衆の結使に著し、厚く懈怠の心を生ず。是の故に般若を信ぜず。是の人は、世世に、多く瞋恚を集めて、其の性を成す。瞋相は是れ不信の相なり。是の人は剛強にして自ら高うし、説法の人を輕賤して、「我が智徳の是の如きすら尙ほ解すること能はず、況んや汝愚賤なんぢにして而も能く之を知らんや」と（言ふ）。是の瞋恚・憍慢多きを以ての故に、般若波羅蜜を破するなり。

【經】須菩提、佛に白して言さく、「是の深般若波羅蜜をば、勤めて精進せず、不善根を種ふ、惡友を相得る人は、



【論】問うて曰はく、口業は是れ法を破す。何を以てか身口意業を攝すと言ふや。

答へて曰はく、意業は是れ口業の本なり。若し口業を攝せんと欲せば、先づ意業を攝す。意業攝するが故に、身口の業も亦た善なり。身口の業善なれば意業も亦た善なり。是の中に須菩提は自ら因縁を説けり。「是の諸苦を受くること莫れ、或は佛を見たてまつらず」と。世間の人は、身業を以て重しと爲し、口業をもて輕しと爲す。是の故に須菩提は問ふ、「但だ口業のみを以て、是の如き罪を得るや」と。佛は其の意を可とし、示して言はく「是の愚癡の人は、自ら急事なく、又た作者を使ふなく、亦た所得なく、而も自ら舌を以ての故に、是の如きの罪を作す。是を大狂「の人」と爲す。是の狂人は、未來世に我が法中に在りて出家す」と。出家には、五衆あり。受戒には、七衆あり。是の聲聞の人は、聲聞法(或は)佛法に著し、五百歳を過ぎて後、各各に分別して五部あり。是より以來、諸法の決定相を求むるを以ての故に、自ら其の法を執して佛を知らず、解脱の爲の故に法を説くも、而も堅く語言に著す。故に般若の諸法は畢竟空なりと説くを聞けば、刀の心を傷くるが如くにして、皆な言はく、「決定の法をば、今、云何ぞ無と言はん」と。般若波羅蜜の、無得無著の相中に於て得と作し、著相を作す、故に毀些し破壊して、佛教に非ずと言ふ。佛は衆生を憐愍したまふが故に、爲に是道、非道を説きたまへり。今、般若の中の、是道非道は、盡く一相たり、所謂無相なり。是の故に先づ疑意を生じ、後、心を定む。空法に於て邪見を生じ、邪見、力を得るが故に、大衆の中に於いて、處處に般若波羅蜜を毀壞し、般若波羅蜜を毀壞するが故に、則ち十方三世諸佛の一切智等の諸の功德を破し、佛の功德を破するが故に、即ち三寶を破し、三寶を破するが故に、則ち世間の樂の因縁、所謂世間の正見を破し、若し世間の正見を破すれば、則ち出世間の樂の因縁、出世間の正見、所謂四念處、乃至一切種智を破す。是の法を名けて無量無邊福德の因縁と爲す。是の法を破するが故に、無量無邊の罪を得、無量無邊の罪を得るが故に、無量無邊の憂愁苦惱

【二】「五部」、宋元明宮聖五本は「五百部」に作る。

# 卷の第六十三

## 第四十一 信 誘 品 (續)

【經】爾の時に、須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、善男子、善女人は、應に好んで身口意業を攝し、是の如きの諸苦を受け、或は佛を見ず、或は法を聞かず、或は僧に親近せず、或は無佛世界の中に生じ、或は人中に生じて貧窮の家に墮し、或は人、其の言を信受せざること無かるべし」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、口業を積集するを以ての故に、是の破法の重罪ありや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「口業を積集するを以ての故に、是の破法の重罪あり。須菩提よ、是の愚癡の人は、佛法の中に在りて、出家し受戒するも、深般若波羅蜜を破し、毀皆して受けず。須菩提よ、若し般若波羅蜜を破し、般若波羅蜜を毀皆すれば、則ち十方諸佛の一切智を破すと爲し、一切智を破するが故に、則ち佛寶を破すと爲し、佛寶を破するが故に、法寶を破し、法寶を破するが故に、僧寶を破し、三寶を破するが故に、則ち世間の正見を破し、世間の正見を破するが故に、則ち四念處を破すと爲し、乃至一切種智法を破す。一切種智法を破するが故に、則ち無量無邊阿僧祇の罪を得。無量無邊阿僧祇の罪を得れば、則ち無量無邊阿僧祇苦を受く」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、是の愚癡の人の深般若波羅蜜を毀皆し破壊するに幾の因縁ありや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「四の因縁ありて、是の愚癡の人は、是の深般若波羅蜜を毀皆し破壊す」と。須菩提の言さく、「世尊よ、何等か(是れ)四なるや」と。「佛、須菩提に告げたまはく」「是の愚癡の人は魔の爲に使はるるが故に、深般若波羅蜜を毀皆し破壊せんと欲す。是を初因縁と名く。是の愚癡の人は、深法を信ぜず。信ぜず、解せざれば、心清淨なることを得ず。是の第二の因縁の故に、是の愚癡の人は、深般若波羅蜜を毀皆し破壊せんと欲す。是の愚癡の人は、惡知識と相知り、心没して懈怠し、堅く五受衆に著す。是の第三の因縁の故に、是の愚癡の人は、深般若波羅蜜を毀皆し破壊せんと欲す。是の愚癡の人は、多く瞋恚を行じ、自ら高うして人を輕んず。是の第四の因縁の故に、是の愚癡の人は、深般若波羅蜜を毀皆し破壊せんと欲す。須菩提よ、是の四の因縁を以ての故に、是の愚癡の人は、深般若波羅蜜を毀皆し破壊せんと欲するなり」と。

【一】 宋本元本宮本は「釋第四十一品下訖四十二品上」、明本は「釋信毀品第四十一之下」、聖本は「釋第四十品下訖四十一品上」に作る。

はざりしや。

答へて曰はく、舍利弗は既に罪を受くる時節、及び處所を聞くも、其の身の大小を聞かざれば、意に佛の其の大身を説きたまふを聞かんと欲す。又た帝釋の如きは、身長十里にして、樂を受くること遍滿するが故に、罪を受くる身の大にして、苦を受くることも亦た多きことを知らんと欲す。二因縁あるが故に、佛は説きたまはざるなり。一には上に已に其の二惡道の中に在りて、久しく苦惱を受くることを説き、今復た其の身の大に醜惡なることを説かば、人は或は信ぜず、信ぜざれば、當に久しく劇しき苦を受くべきが故なり。二には若し佛語を信すれば則ち大に憂怖し、憂怖するが故に風發り、熱血を吐きて死す。「若くは死す等」とは、設令死せざるも、身常に乾枯し、若くは後世に重罪を受くることを信ぜざるが故に、佛は説きたまはざるなり。舍利弗、佛に白すらく、「今、二因縁を以ての故に、説きたまはずと雖も、願はくは、未來世の人を憐愍するが故に説きたまへ」と。佛の言はく、「若し善根、白性、福德の人あらば、依止を作すに足れり」と。白性は、黒性と相違す。「依止」とは、是の苦を受くることを聞きて、更に敢へて作さず、若し信ぜずんば、身の大を説くと雖も亦た信ぜず、若し信ぜば、上の苦を受くることも久遠なることも聞いて信すべきに足れり。

【七】石本は茲を以て卷を分たず。又た宋本宮本聖本は卷を分つて「釋第三十九品訖第四十品上」、元本は「釋第四十品訖四十一上」の夾註を附加す。

須彌〔山〕に過ぎ、以て衆生に施す。佛身より血を出だし、阿羅漢を殺すは、但だ肉身を壊して法身を壊せず。僧を壊し、是の眷屬を離れ、五法を讚するは、般若を壊せず。是の故に五逆罪は、般若波羅蜜を壊するに似ることを得ず。般若波羅蜜は能く人をして、佛と作らしむ。般若を毀る罪は、則ち喩無し。是の故に、般若を破する人は、我は其の名字を聽聞することを欲せず。何に況んや眼に是の般若を破する人を見るをや。或は先世の福德の因縁もて、廣學、多聞、富貴、威徳にして、談語を巧にし、諸の魔官屬常に隨逐佐助するが故に、未だ阿鞞跋致を得ざるも、菩薩は、其の多く人の供養し、多くの出家在家の弟子あるを見る。是の故に若し其の名を讚する者あるも、之れを聽聞せず。何に況んや、親附禮拜して、其の教訓を受けんや。所以何となれば、菩薩は善法を増長し、衆生を利益せんと欲するに、是の人は法を破し、衆生をして大衰濁に墮せしめんと欲し、二事相違するが故なり。

「衰濁」とは、人の衰に著くが如し。好衣、美食すと雖も、常に色力なく、身を勤めて作務すと雖も、財産日に耗<sup>ひた</sup>し。是の人は一切の佛の上法寶を壞するが故に、身口の業は善なりと雖も、持戒、布施、讀經、善法は終に増長せず、濁れる水泥には面像を見ず、亦た飲むに中らざるが如く、是の人は親近に中らず。若し親近せば、則ち喜んで染著す。是の人は法を破するが故に、邪見もて疑悔し、常に心を擾亂し、先に聞く所の法に深く染みて、愛著し、般若波羅蜜の相を解せず。故に言はく、「般若波羅蜜は、所有なく、空にして、堅固ならず、罪福あること無し」と。是の如く濁亂して、其の心を蔽ふが故に、能く清淨實法の相を見ることを得ず。「黒性」とは、佛法の中には、善法を白と名け、不善の法を黒と名く。是の人は常に不善の法を積集するが故に不善性を成す。若し其の語を信受すること有れば、其の罪も亦た同じ。

問うて曰く、舍利弗は何を以てか、是の人の受くる身の大小あるやを問へるに、而も佛は答へ給

他方の世界の畜生の中に生じ、展轉して苦を受け、彼の間に火劫起れば、此の間に還り來りて、復た展轉すること前の如し。罪轉た微輕にして、或は人身を得て、下賤の家に生ず、所謂生盲の家に生ず。(そは)般若波羅蜜を見ることを欲せざる罪の故なり。說法の人を輕賤するが故に、旃陀羅、及び除糞、死人を擔ぐ等の下賤の家に生じ、說法者を毀訾するが故に、舌なく、聞くことを欲せざるが故に耳なく、手摩ヨシヤきて非を撥かくが故に手なし。此の人は心に佛を愛すと雖も愚癡無智を以ての故に、佛母を毀滅し、法藏を破壊す。法藏を破壊するが故に、無佛法衆の處に生ず。

問うて曰はく、何を以てか餓鬼の中に生ずることを説かざるや、

答へて曰はく、是の法を破壊する者は、多く二煩惱、所謂、瞋恚と愚癡とを以てし、慳貪を發すが故に餓鬼に墮す。此の中には慳無きが故に説かず。

問うて曰く、舍利弗は何を以てか五逆罪と破法の罪と相似たりと言へるや。

答へて曰く、舍利弗は是れ聲聞人にして、常に五逆罪の最も重くして、阿鼻地獄に墮し、一劫六(の間)苦を受くることを聞く。聲聞の人は悉く般若を供養して、大果報を得ることを知らず、又た般若を謗毀して、大罪を得ることを知らず、故に五逆を擧げて、相似せりや不やと對問す。答へて「相似せず」と言ふは、相去ること懸はるかに遠きを以ての故なり。何となれば、此の人は般若を毀謗すれば自ら大利を失し、亦た他をして失せしめ、自ら般若を遠離し、亦た他をして遠離せしめ、自ら善根を破し、亦た他の善根を破し、自ら邪見の毒を塗り、亦た他に邪見の毒を塗り、自ら其の身を失し、亦た他の身を失す。自ら知らざるが故に、法愛に著するが故に「自ら」破し、亦た他をして般若波羅蜜を破せしむ。父母の子を愛するが如きは、恩一世に極まり、又た因縁を以ての故に愛す。是の般若波羅蜜を行する菩薩は、無邊世の中に於いて、深心に衆生を愛念す。父母は子を念するも、能く一眼を以て與ふるなし。般若波羅蜜を行する者は、無邊の劫中に於いて、頭目髓腦を以て、積むこと

【六】「一劫(の間)苦を受くることを聞く」、元本明本は「一切の苦を受くることを聞く」に作る。

「諸法の利益無きを見ず」とは、即ち是れ上に説けり。中に於いて利なる者を出す、是れ徳福具足するが故に、終に六波羅蜜を遠離せず、乃至佛世界を淨むるなり。略して義を説く、菩薩あり、新發意なりと雖も、深く是の般若波羅蜜を信受す。菩薩あり、久しく意を發して、千萬億の諸佛を供養したてまつるも、有所得を用つて、六波羅蜜を行じ、是の般若波羅蜜を信ぜず。此の中に佛は自ら因縁を説きたまはく、「是の人は過去世に於て深般若波羅蜜を聞くも信ぜず、受けず、坐より起ちて去る」と。今、佛は信ぜず、受けず、般若波羅蜜を破する罪業の果報を説くが爲の故に説きたまふ。是の人は信ぜず、受けざる業因縁の故に、即ち愚癡の業因縁を起し、愚癡の業因縁を得るが故に、疑悔惡邪著心轉た増す。著心轉た増すが故に、大乘の中に於て、毀訾して般若波羅蜜を破壊し、般若波羅蜜を破壊するが故に、三世十方の諸佛の一切智を破壊し、三世十方の諸佛の一切智を破する罪の故に、身を轉じて大地獄に墮す。

「大地獄」とは、阿鼻地獄にして無量百千萬億阿僧祇歲に憂愁苦惱を受く。憂愁は是れ心苦にして、〔苦〕惱は是れ身苦なり。一大地獄より一大地獄に至るとは、福德の因縁の故に上に六欲天あるが如く、罪業の因縁も亦た是の如し。下に八種の大地獄あり。八種の大地獄には各十六の小地獄あり。是の中阿鼻は最も大なり。餘の須彌の四天下も、亦た是の如し。是の三千大千世界の中に、百億の須彌山あり、百億の阿鼻地獄あり。是の故に一阿鼻大地獄あり、一阿鼻大地獄に至ると説く。人の會より、會に至るが如く、又た正位に入る者の、天上より來りて人間の樂を受け、人中より還た、天上に至りて樂を受くるが如し。若し此の間に火劫起れば、其の罪未だ盡きざるが故に、轉じて他處に至り、十方世界の大地獄の中に罪を受け、若し彼の間に火劫起れば、復た展轉して、他方に至り、他方に火劫起れば、復た還つて此の間の阿鼻地獄の中に生じ、展轉すること前の如し。是くして般若波羅蜜を破する罪を小減し、展轉して生じて勤苦す。畜生の中に此の間に火劫起れば、復た

れ耳、是れ聲なりとの分別を作す。六情は是れ利、六塵は是れ鈍、色等の諸法は是れ鈍、慧等は是れ利。諸法は、般若波羅蜜の中に入れば、百川の海に歸して、皆な一味と爲るが如し。是の故に、「般若波羅蜜は見る可からず、聞く可からず」と説く。諸法は鈍なるを以ての故なり。檀波羅蜜、乃至佛道、須陀洹乃至佛も、亦た是の如し。

復次に、衆生は法を離れて、聞くこと能はず、見ること能はず、法は衆生を離れて、亦た聞くこと能はず、見ること能はざるなり。

問うて曰はく、上に已に、菩薩は意を發してより幾の時にして、幾の佛を供養したてまつり、能く順じて深義を解するやを問へり。今何を以てか更に問ふや。

答へて曰はく、上に佛は般若の聞くこと無く、見ること無きことを説き、亦た般若の經卷を見ることは、佛を見たてまつるが如く、般若を讀むことは、佛より一相の説を聞くが如しと説きたまひ、是の般若は亦た見る可く聞く可しと言ひ、亦た見る可からず聞く可からずと言ふ。是の故に還た問ふ、「佛、菩薩は幾の時か行じて是の方便を得、能く有を行じ、能く無を行じ、有を行じて三界に墮せず、無を行じて斷滅に墮せず、能く般若波羅蜜多の相に隨つて行するや」と。佛の答へたまはく、「此事あり、定まらず、應當に分別して説くべし」と。或は菩薩あり、初發心に便ち能く甚深の六波羅蜜を習行す。習行とは、一心に信受して、常に行するなり。方便力の故にとは、六波羅蜜を行すと雖も、福德の因縁を起して、而して心諸法に著せざるなり。破壊する所なしとは、是の菩薩の信力、智慧力は大なるが故に、摩訶衍の深法を聞いて、即時に信じ、聲聞法を聞いても亦た信じ、外道、在家、出家の法を聞いても、亦た破壊せず、而も中に於いて二種の利を出だす。一には是道と非道を分別し、非道を捨てて是道を行す。二には一切法は、般若波羅蜜の中に入れば、是も無く非も無く、破することも無く、受くることも無きなり。

せず、空を行するに五波羅蜜を和合して、般若波羅蜜を行じ、大慈悲心を用つて、一切衆生の爲に、般若波羅蜜を行するが故に、十方諸佛の清淨世界の中より、終に是の間に來生する者は、有縁の衆生を度するが爲に、又た釋迦文尼佛と共なる因縁の故なり。此の間に死し此の間に生ずる者ありと雖も、但だ他方の佛所より來る者を貴しとするを以ての故なり。發心より來た、無量阿僧祇劫に、諸の福德力を集むること厚きが故に、能く深義を信解し隨順す。有人は無量阿僧祇劫に發心すと雖も、久しく功德を行ぜざる者あり。是の故に發心より來た、常に六波羅蜜を行することを説く。常に六波羅蜜の福德を行するが故に、能く無量無邊阿僧祇の佛を見ることを得、能く供養することを得。是の菩薩は上の四因縁を成就するが故に、無量無邊の福德智慧を得。是の福德の因縁の故に、諸の煩惱を薄くし、心柔軟なり。菩薩は智慧等の諸根の力を轉増して、力を得るが故に、深く般若波羅蜜に入り、世間の事を汚厭す。若し般若波羅蜜の經卷を見れば、即時に心生じて、佛を見たとまつるが如し。若し卷を披き義を尋ねれば、即時に心生じて佛より聞きたてまつるが如し。信力を成就し、慧力を成就するが故に、隨順して深般若波羅蜜の義を解す。所謂、一切は無相なるが故に十二入を出づ。二法、不二法の中に心著する所なきが故に、無所得と名け、略して三相を説き、是に隨順して般若波羅蜜の義を解す。須菩提は説を聞き經卷を見るに、佛を見たとまつるが如く、經文を讀むに、佛より聞きたてまつるが如く、著すること有るが如きに似たり。是の故に問ふ、「般若若見るべく聞くべきや」と。須菩提の意おもへらく、「般若波羅蜜は畢竟空なるを以て、天眼天耳すら猶ほ見聞すること能はず、何に況んや肉眼、肉耳をや。出世間の慧眼も亦た見ることを得ず、何に況んや世間の眼をや」と。佛は其の意に順じて答へたまはく、「般若波羅蜜は見聞することを得べからず」と。此の中に因縁を説きたまはく、「諸法は般若波羅蜜の中に入れば、皆な一相無相にして、是の中に聞者、見者、及び可聞、可見を分別すること無し。三界の凡夫人は是れ眼、是れ色、是



何となれば、當に知るべし、是の人を名けて汚法の人と爲し、衰濁に墮せる黒性と爲す。是の如き人の若し其の言を聽くこと有りて、其の語を信用せば、亦た是の如き苦を受く。舍利弗よ、若し人、般若波羅蜜を破すれば、當に知るべし、是を名けて破法の人と爲すことを」と。

舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、世尊は破法の人を受くる所の重罪を説き、是の人の受くる所の身體の大小を説きたまはざるや」と。佛、舍利弗に告げたまはく、「是の人の受くる身の大小を説くことを須るず。何となれば、是の破法の人、若し受くる所の身の大小を聞かば、便ち當に熱血を吐きて、若くは死し、若くは死苦に近づくべし。是の破法の人、是の如く身に重罪あることを聞かば、是の人は便ち大に愁憂し、箭の心に入れるが如く、漸漸に乾枯して、是の念を作さん、「破法の罪の故に、是の如き大醜身を得、是の如き無量の苦を受く」と。是を以ての故に、佛は舍利弗に是の人の受くる所の身體の大小を聞ふを聽し給はず。」舍利弗、佛に白して言さく、「願はくは、佛、之を説いて、未來世の爲に明誠と作し、破法の業の積集の故に、是の如き大醜身を受け、是の如き大苦を受くることを知らしめたまへ」と。佛、舍利弗に告げ給はく、「後世の人、若し是の破法の業を積集し、厚重に具足して大地獄の中に、久久しく無量の苦を受くることを聞かば、是の久久しき無量の苦を聞く時、未來世の爲に明誠と作すに足る」と。舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、若し白性の善男子、善女人、是の法を聞かば、依止と作すに足り、寧ろ身命を失するも終に法を破らず。自ら念ずらく、我れ若し法を破せば、當に是の如きの苦を受くべし」と。

【論】釋して曰はく、舍利弗は般若波羅蜜の甚深微妙なることを聞く、聞くことすら尙ほ難し、何に況んや能く行するをや。是の故に言はく、「般若を信解する者は、是を希有と爲す」と。是の故に問ふ、「世尊よ、若し般若を信解せば、是の人は何處に於いて終りて、是の間に來生するや」と。舍利弗は是の念を作さく、「是の人は應に好き世界より終に是の間に來生すべし。是の人は新發意なるべからず。少しく佛を供養すべからず。少しく六波羅蜜を行すべからず。必ず是れ大徳の人なり。未だ聖ならざるも、而も能く聖法を知るが故なり」と。是の故に問ふ、「意を發してより、幾の時にして幾の佛を供養したてまつり、六波羅蜜を行すること幾の時なりや」と。

「能く隨順して深般若波羅蜜の義を解す」とは、是の菩薩は、諸法に於いて相を取らず、空行に著

【五】「白性」二字、別本にて「白淨」に作る、白性は黒性の對、善性即ち善人に同じ。

是の如き等の諸の菩薩摩訶薩は、能く深般若波羅蜜を習行す。

須菩提よ、菩薩摩訶薩あり、多く諸佛を見たてまつること、若くは無量百千萬億なるも、諸佛に従つて行ずる所の布施・持戒・忍辱・精進・一心・智慧は、皆な有所得なるを以ての故に、是の菩薩は、深般若波羅蜜を説くを聞く時、便ち衆中より起ち去り、深般若波羅蜜、及び諸佛を恭敬したてまつらず。是の菩薩は、今此の衆中に在りて坐し、是の甚深般若波羅蜜を聞くも、樂はずして便ち捨て去る。何となれば、是の善男子、善女人等は、先世に深般若波羅蜜を聞く時、棄捨し去り、今世に深般若波羅蜜を聞くも、亦た棄捨し去る。身心和せず、是の人は愚癡の因縁の業を種う。是の愚癡の因縁の罪を種うが故に、深般若波羅蜜を説くを聞いて毀皆す。般若波羅蜜を毀皆するが故に、過去、現在、未來の諸佛の一切智、一切種智を毀皆す。是の人は、三世諸佛の一切智を毀皆するが故に、破法の業を起す。(是の)因縁を集むるが故に、無量百千萬億歳に大地獄の中に墮つ。是の破法の人輩は、一大地獄より一大地獄に至り、若し火劫起る時は、他方の大地獄の中に至り生じて彼の間に在り、一大地獄より一大地獄に至る。彼の間、若し火劫起る時は、復た他方の大地獄の中に至り生じて彼の間に在り、一大地獄より一大地獄に至る。是の如く十方に遍し、彼の間、若し火劫起るが故に、彼より死するも、破法の業因縁未だ盡きざるが故に、還つて是の間の大地獄の中に来りて、此の間に生じ、亦た一大地獄より一大地獄に至りて無量の苦を受く。此の間火劫起るが故に、復た十方の他世界に至り、畜生の中に生じて、破法の罪劫の苦を受くこと地獄の中に説くが如し。重罪漸く薄らぎて、或は人身を得るも、盲の人の家に生じ、旃陀羅の家に生じ、廁を除き、死人を擔ぐ種種下賤の家に生じ、若くは無眼、若くは一眼、若くは瞎眼、若くは舌なく、耳なく、手無く、所生の處は佛無く、法無く佛弟子無き處なり。何となれば、破法の業を種ゑて積集し、厚重に具足するが故に、是の果報を受く」と。

爾の時、舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、五逆罪と破法の罪と相似なるや」と。佛、舍利弗に告げ給はく、「相似なりと言ふべからず。所以何となれば、若し人ありて、是の甚深般若波羅蜜を説くを聽く時、毀皆し、信ぜずして、是の言を作す、是の法を學すべからず。是は法に非ず、善に非ず、佛教に非ず、諸佛は是の語を説きたまはず」と。是の人は、自ら般若波羅蜜を毀皆し、亦た他人をして、般若波羅蜜を毀皆せしむ。自ら其の身を壞し、亦た他人の身を壞せしむ。自ら毒を飲んで身を殺し、亦た他人に毒を飲ましむ。自ら其の身を失し、亦た他人の身を失す。自ら深般若波羅蜜を知らず、信ぜず、毀皆して、亦た他人をして、不信不知ならしむ。舍利弗よ、是の如き人は我れ其の名字を聽聞せず、何に況んや眼に見んをや。

【經】

爾の時に、慧命舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩ありて、是の般若波羅蜜を信解する者は、何處より來りて是の間に生じ、阿耨多羅三藐三菩提心を發してより來た、幾の時とか爲すや、幾の佛を供養すと爲すや、檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜を行じ來りて、幾の時か、能く隨順して、深般若波羅蜜の義を解すと爲すや」と。佛、舍利弗に告げたまはく、「是の菩薩摩訶薩は、十方の諸佛を供養したてまつりて、是の間に來生し、是の菩薩は阿耨多羅三藐三菩提心を發してより來た、無量無邊阿僧祇百千萬億劫なり。是の菩薩摩訶薩は初發心より、常に檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜を行じ、無量無邊不可思議の阿僧祇の諸佛を供養したてまつりて、是の間に來生す。

舍利弗よ、是の菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を、若くは見、若くは開きて、是の念を作す、「我は佛を見たてまつり、佛より法を聞く」と。「舍利弗よ、是の菩薩摩訶薩は、能く隨順して深般若波羅蜜の義を解す。無相・無二・無所得を以ての故なり」。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、是の般若波羅蜜は聞く可く見る可きや。」

佛、須菩提に告げたまはく、「是の般若波羅蜜は、聞く者あること無く、見る者あること無し。般若波羅蜜は、聞くこと無く、見ること無し。諸法は鈍なるが故なり。禪波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、羼提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀波羅蜜は、聞くこと無く見る可く見ること無し。諸法は鈍なるが故なり。乃至無法有法空も、聞くこと無く見ること無し。諸法は鈍なるが故なり。四念處は聞くこと無く見ること無し。諸法は鈍なるが故なり。乃至八聖道分は聞くこと無く見ること無し。諸法は鈍なるが故なり。佛の十力乃至十八不共法も聞くこと無く見ること無し。諸法は鈍なるが故なり。須菩提よ、佛及び佛道は聞くこと無く見ること無し。諸法は鈍なるが故なり。」須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、是の菩薩は幾の時か佛道を行じて、能く是の如き、深般若波羅蜜を習行するや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の中に應に分別して説くべし。須菩提よ、菩薩摩訶薩あり、初發意に、深般若波羅蜜、禪波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、羼提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀波羅蜜を習行し、方便力を以ての故に、諸法に於いて、破壞する所なく、諸法に利益なき者を見ず、亦た終に六波羅蜜を行ずることを遠離せず、亦た諸佛を遠離せず、一佛の世界より、一佛の世界に至り、若し善根の力を以て、諸佛を供養したてまつらんと欲せば、意に隨つて即ち得、終に母人の腹中に生ぜず、終に諸の神通を離れず、終に諸の煩惱及び聲聞、辟支佛心を生ぜず、一佛の世界より、一佛の世界に至りて、衆生を成就し、佛世界を淨む。須菩提よ、

きを諍競す。無所得の相は、我、衆生の如きは、十方に求索するに不可得にして、但だ假名ののみ有り、實には不生なり。衆生は不生なるが故に、般若波羅蜜も亦た衆生の相の如く、吾我の顛倒を破するが故に不生不滅なり。色等の諸法の如きは、生相不可得なるが故に、二法を生ぜず、一切法を攝す。若くは衆生、若くは法、此の二法は因縁和合の生なり。但だ假名ののみ有りて定性あること無し。若し法に定性なければ、此の法は即ち無生なり。是の二法は無生なるが故に、當に色等の諸法も、亦た無生なることを知るべし。衆生の法の無生にして所有なく、空・離・不可思議・不滅・不可知なることも亦た是の如し。

「衆生の力は成就せざるが故に、般若波羅蜜の力は成就せず」とは、先に一切法は因縁の和合より生じて、各各に自力なきことを説けり。般若波羅蜜は、諸法の各各自力なきが故に自性なく、自性なきが故に空なることを知る。般若波羅蜜は諸法より生ずるが故に自力なく、自力無きが故に、亦た諸法の畢竟空に同じ。是の故に、衆生及び法力は成就せざるが故に、般若波羅蜜の力も亦た成就せずと説く。

問うて曰はく、先には色等の諸法は有力と作さず、無力と作さずと説けり。今何を以てか、更に衆生及び色等の諸法の力は成就せざるが故に、般若波羅蜜の力も、亦た成就せずと説くや。

答へて曰はく、上に、般若諸法を觀じて有力と作さず、無力と作さずと説く。聽く者の謂はく、「般若波羅蜜は、能く是の觀を作せば、即ち大力あり」と。是の故に、是の中には、「衆色等の力は、成就せざるが故に、般若波羅蜜の力も、亦た成就せず」と説く。是の如き等の種種の因縁の故に摩訶波羅蜜と名く。

#### 第四十一 信謗品

【三】石本は「三十九品を釋し竟る」原文六字附加。

【四】宋元明宮本は「第四十一信毀品」、聖石二本は「第四十泥梨品」に作る。

に無量と説き、實なるが故に有量と説く。般若波羅蜜は、空實を遠離するが故に、非量非無量と言ふ。凡夫人は、心の憶念に隨つて、解を得るが故に、色に於いて廣と作し、狹と作す。般若波羅蜜は、實の法相を觀じて、心に隨はざるが故に、廣に非ず、狹に非ず。凡夫人は、和合の因縁もて、諸法を生ずることを知らざるが故に、色を有力と言ふ。衆縷を合して以て繩と爲さんに、知らざる者は繩を有力と謂ふが如く、又た墻崩れて人を殺さんに、墻は有力なりと言ふが如し。若し各各に分散すれば、則ち力あること無し。般若波羅蜜は、和合の相を知り、一法の有力を説かず、説いて無力なりと言はず、是の故に摩訶般若波羅蜜と名く。

復た大因縁あり。若し菩薩は六波羅蜜を遠離せず。色等の諸法を大と作さず、小と作さず。但だ般若波羅蜜のみを行すれば、則ち心散亂して調順ならず、多く疑悔邪見を生じて、般若波羅蜜の相を失す。若し五波羅蜜と和合して行すれば、則ち調柔にして錯らず、能く衆事を成辦す。譬へば、八聖道分の正見は、是れ道なるも、若し七事の佐助なくんば、則ち事を辦すること能はず、亦た正見と名けざるが如し。是の故に佛の説きたまはく、「一切諸の善法は、皆な因縁の和合より共に生じ、一法として獨り自ら生ずる者あること無し」と。是の故に和合の時は各各に力あり。但だ力に大小あり。是を般若波羅蜜を行すと名く。若し菩薩、五波羅蜜を離れて、般若波羅蜜を行じ、色等の諸法の若くは大、若くは小等を分別せば、是の人は即ち墮して、有所得を用ひ、有邊の中に墮す。若し色等の諸法に於いて、若くは大、若くは小なりと分別する所なく、五波羅蜜を離れ、是の大ならず小ならず等の空相に著せば、先には諸法の大小を分別する有所得の失を爲し、今、大ならず小ならず等の空相に著するも亦た是れ失なり。所以何となれば、此の中に須菩提は因縁を説けり、「有所得の相は、乃至阿耨多羅三藐三菩提無し」と。所以何となれば、阿耨多羅三藐三菩提は、寂滅の相、無所得の相、畢竟清淨の相なればなり。有所得の相は、諸の戲論を生じ、一切法は生なく滅な

力は成就せず。乃至、佛の力は成就せざるが故に、般若波羅蜜の力は成就せず。世尊よ、是の因縁を以ての故に、諸の菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を名けて、摩訶波羅蜜と爲す。

【論】釋して曰はく、須菩提は、佛の所説を聞いて、疑心を開解し、般若波羅蜜を讚歎して言はく、「是の般若を名けて摩訶波羅蜜と爲す」と。佛、反問したまはく、「須菩提よ、汝が意に於いて云何、何を以て「の故に」、名けて大波羅蜜と爲すや」と。須菩提の答ふらく、「色等の諸法を大と作さず、小と作さざるが故なり」と。凡夫人の心は、諸法の中に於いて、意に随つて大小と作す。人の急なる時は、其の心縮小し、安隱富樂なる時は、心則ち寛大なるが如し。又た八背捨の中、心に随ふが故に、外色は或は大に、或は小なるが如く、又た凡夫の人は眼見の色中に於いて、色に非ざる事を亦た色と言ふが如く、業を指し、量を指し、數を指し、一異等の法の合せるを指して色と爲すが如し。是を色を大と作すと名く。有人は、眼見の色を見る可き處を色と名け、見る可からざる處を色と名けず。有人の言はく、「麁色は虚誑にして眞色に非ず、但だ微塵のみ常なるが故に是は眞色なり。微塵の和合する時、假に名けて色と作す」と。是を色を小と作すと名く。是の如き等の因縁もて、凡夫の人は色に於いて或は大と作し、或は小と作し、憶想分別に随ふが故に、諸法の性を破す。般若波羅蜜は、色性に随つて實の如く觀すれば、大小と作さず。

「合せず、散ぜず」とは、般若波羅蜜は、微〔塵の〕色、和合して更に色生ずること有りと言ふ。但だ假名のみ有りて定相の色あること無し。是の故に合すること無く、散すること無し。色は無邊なるが故に無量なり。處として色あらざること無く、時として色あらざること無きが故に量あること無し。色は是れ作法なり。般若波羅蜜の中には、微塵を以て合するが故に、麁色あるにあらず。麁色の散するを以ての故に、還た微塵に歸するにあらず。是の故に合せず散ぜずと言ふ。起法は分別、籌量、多少ありて、合せず、散ぜず、無量なりと言ふことを得ず。凡人の如きは、空なるが故

世尊よ、若し新發意の菩薩摩訶薩は、若し般若波羅蜜を遠離せず、禪波羅蜜を遠離せず、毘梨耶波羅蜜を遠離せず、毘提波羅蜜を遠離せず、尸羅波羅蜜を遠離せず、檀波羅蜜を遠離せずして、是の如く念ず、  
 「是の般若波羅蜜は色を大と作さず、色を小と作さず。乃至諸佛を大と作さず、小と作さず。色を合すと作さず。散ずと作さず。色を無量と作さず、色を非無量と作さず。色を有力と作さず、色を無力と作さず、乃至諸佛を有力と作さず、無力と作さず」と。

世尊よ、菩薩摩訶薩は、若し是の如く是を知れば、般若波羅蜜を行ぜずと爲す。何となれば、是は般若波羅蜜の相に非ざればなり。所謂、色を大小と作し、乃至諸佛を大小と作し、色を有力、無力、乃至諸佛を有力、無力(と作す)。世尊よ、是の菩薩摩訶薩は、有所得を用ふるが故に大過失あり。

所謂、般若波羅蜜を行ずる時、色を大と作し、色を小と作し、乃至諸佛を有力と作し、無力と作す。何となれば、有所得の相ある者は、阿耨多羅三藐三菩提無ければなり。所以何となれば、衆生は不生なるが故に、般若波羅蜜も亦た應に不生なるべく、色不生なるが故に、般若波羅蜜は不生なり。乃至佛不生なるが故に、般若波羅蜜は不生なり。衆生の性は無なるが故に、般若波羅蜜の性は無なり。色性は無なるが故に、般若波羅蜜の性は無なり。乃至佛性無なるが故に、般若波羅蜜の性は無なり。

衆生は非法なるが故に、般若波羅蜜は非法なり。色は非法なるが故に、般若波羅蜜は非法なり。乃至佛は非法なるが故に、般若波羅蜜は非法なり。衆生は空なるが故に、般若波羅蜜は空なり。色は空なるが故に、般若波羅蜜は空なり。乃至佛は空なるが故に、般若波羅蜜は空なり。

衆生は離なるが故に、般若波羅蜜は離なり。色は離なるが故に、般若波羅蜜は離なり。乃至佛は離なるが故に、般若波羅蜜は離なり。衆生は有ること無きが故に、般若波羅蜜は有ること無し。色は有ること無きが故に、般若波羅蜜は有ること無し。乃至佛は有ること無きが故に、般若波羅蜜は有ること無し。

衆生は不可思議なるが故に、般若波羅蜜は不可思議なり。色は不可思議なるが故に、般若波羅蜜は不可思議なり。乃至佛は不可思議なるが故に、般若波羅蜜は不可思議なり。衆生は不滅なるが故に、般若波羅蜜は不滅なり。色は不滅なるが故に、般若波羅蜜は不滅なり。乃至佛は不滅なるが故に、般若波羅蜜は不滅なり。

衆生は不可知なるが故に、般若波羅蜜は不可知なり。色は不可知なるが故に、般若波羅蜜は不可知なり。乃至佛は不可知なるが故に、般若波羅蜜は不可知なり。

衆生の力は成就せざるが故に、般若波羅蜜の力は成就せず。色の力は成就せざるが故に、般若波羅蜜の

後變異するが故に著せず。一切世間は顛倒し、顛倒の果報は不實にして、幻の如く、夢の如く、滅する所なきが故に斷ぜず。是の故に佛は法に著せず、高心を生ぜず。畢竟空、善相の中に入り、深く大悲に入りて、以て衆生を救ひたまふ。菩薩は應に佛心の合するが如くなるべし。帝釋は歡喜し讚じて言く、「希有なり。是の般若波羅蜜は、諸法を破壊せず、不生、不得、不失なるが故に、而も能く菩薩を成就し、佛に至ることを得せしむ」と。須菩提の言はく、「若し菩薩は有所得を用ゐ、是の如く一切智等と一切法の、若くは合し、若くは合せざことを分別せざる、是の菩薩は則ち般若波羅蜜を失す」と。佛は然も其の言を可とし、「是の如し、更に因縁あり。菩薩、若し汝が説く所の一切法に、合と不合と無きことを取り、是の空相を取りて、般若は空にして所有なく、牢固ならずと言はば、是も亦た般若波羅蜜を失す」と。須菩提は、般若波羅蜜の不可得の相なることを知り、是の故に問ふ、「若し般若波羅蜜を信ぜば、何の法をか信ぜん。般若波羅蜜は空にして、亦た不可得なり、心を決定せんが爲に何の法をか信ぜん」と。佛の言はく、「色等の一切法は信すべからず。何となれば、色等の一切法の自性は、不可得なるが故に、信すべからざるなり」と。

【經】須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、是の般若波羅蜜を名けて、摩訶波羅蜜と爲す」と。須菩提よ、何の因縁の故に、是の般若波羅蜜を名けて、摩訶波羅蜜と爲すや」と。須菩提の言さく、「世尊よ、是の般若波羅蜜は色を大と作さず、色を小と作さず。受想行識を大と作さず、小と作さず。眼乃至意、色乃至法、眼識界乃至意識界を、大と作さず、小と作さず。檀波羅蜜乃至禪波羅蜜を大と作さず、小と作さず。內空乃至無有法空を大と作さず、小と作さず。四念處乃至阿耨多羅三藐三菩提を大と作さず、小と作さず。諸の佛法を大と作さず、小と作さず。諸佛を大と作さず、小と作さず。是の般若波羅蜜は色を合すと作さず、色を散ずと作さず。受想行識を合すと作さず、散ずと作さず。乃至諸佛を合すと作さず、散ずと作さず。色を無量と作さず、非無量と作さず。乃至諸佛を無量と作さず、亦た非無量と作さず。色を廣と作さず。色を狹と作さず。乃至諸佛を廣と作さず、狹と作さず。色を有力と作さず、色を無力と作さず。乃至諸佛を有力と作さず、無力と作さず。世尊よ、是の因縁を以ての故に、是の般若波羅蜜を摩訶波羅蜜と名く。

【三】茲を以て石本は卷の第六十三の終りとなし、次行を大智度經品之餘第六十四の首とす。



力ありと雖も、主將の力大なるが故に、主は名字を得るが如し」と。

舍利弗は已に般若を供養することを問ひ、今、行者は云何にして般若波羅蜜を生ずるやと問ふ。佛の答へたまはく、「若し行者、色等の諸法の不生の相を觀すれば、是れ則ち般若波羅蜜を生ず」と。

舍利弗、復た問ふ、「云何なれば色等の不生を觀するが故に、般若波羅蜜を生ずるや」と。答へて曰はく、「色等は因縁和合して起る、行者は色の虚妄なることを知りて起らしめず、起らざるが故に生ぜず、生ぜざるが故に得ず、得ざるが故に失せず。爾の時に、舍利弗は意に問ふ、「般若無生なれば、緣處行者も亦た無生なり。是の如くんば般若は何の法と合し、終に何處に歸して住し、何の果報を得るや」と。答へて曰はく、「般若波羅蜜は無生の相なるが故に、合する所なし。若し般若波羅蜜に、法の合する者ありて、若くは善、若くは不善等ならば、是を般若波羅蜜と名けず」と。今、合する所なきが故に、般若波羅蜜の數中に入るなり。

問うて曰はく、若し爾らば、帝釋は已に一切法の合せざることを知れり、何を以てか獨り薩婆若の合せざることをのみを問ふや。

答へて曰はく、帝釋は是の般若を貴重し、深く著し、薩婆若に於いて、愛未だ斷ぜざるが故に、乃至薩婆若も亦た合せざるやと言ふ。佛の答へたまはく、「般若波羅蜜と薩婆若とも亦た合せず、一切法は畢竟無生なるが故なり」と。此の中に佛は斷滅の邪見を破するが故に、般若波羅蜜と合すと説きたまへり。凡夫の人の相を取り、名に著し、有爲法を作起して合するが如くならず、佛心の合するが如し。

問うて曰はく、云何なれば佛心の合するが如くなるや。

答へて曰はく、一切の相は、虚誑なるが故に相を取らず。一切法の中には、無常等の過咎あるが故に受けず。吾我の心は、世間に縛著して、皆な動相なるが故に住せず。能く種種の苦惱を生じて、

希有なるが故に、般若波羅蜜を尊敬す。是の故に佛に、「云何にして供養せん」と。問ふ」と。復次に、「橋戸迦よ、般若波羅蜜は自の力勢の故に五波羅蜜に勝る」と。

問うて曰はく、五波羅蜜は、應に五盲人を以て喩と作すべし。何を以てか乃ち百千を説くや。

答へて曰はく、此の中に其の力勢を説きて多少を論ぜず。復次に、若し五を導くと言はば、貴

しと爲すに足らざるが故に百千を説く。復次に、波羅蜜も亦た多し。賢劫三昧の中に、八萬四千

の波羅蜜あり。廣く説くときは、則ち無量なるが如し。

問うて曰はく、檀波羅蜜にも亦た眼あり。所以何となれば、罪福あることを信じ、邪見等の無明を破するが故に能く布施すればなり。何を以ての故に眼無きに喩ふるや。

答へて曰はく、布施の中の智慧は、是れ客來にして正體に非ず。譬へば四大は常に和合して相離るることを得ざるが如く、諸の波羅蜜の和合も亦た是の如し。

「道に越くこと能はず」とは、道は菩薩の十地の道なり。「城」は一切種智等の諸佛の法なり。復次に、「道」とは、八聖道分なり。「城」とは、涅槃なり。盲人は手足の力ありと雖も、意に隨つて所至

あることを得ること能はず。有眼の人の示導を得て、則ち意に隨つて往く所、皆な能く成辦するが如く、五波羅蜜は各各事ありと雖も、能く般若の示導を得ざれば、尚ほ二乗をすら得ず。何に況ん

や無上道をや。五波羅蜜は般若波羅蜜の將導を得るが故に、波羅蜜の名字を得、佛道を成するに至る。帝釋の問ふ、「汝は自ら説けり、諸の波羅蜜は、和合して互に相佐助すること、四大の相離るる

ことを得ざるが如しと。是の如くんば、般若波羅蜜も亦た五法を待つ。何を以てか獨り般若を以ての故に、五法は、波羅蜜の名字を得と説くや」と。答へて曰はく、「六事は和合して互に相佐助すと雖

も、但だ般若波羅蜜の力は大なるが故に、五法は因りて波羅蜜の名字を得。譬へば、合散は衆樂に各各方ありと雖も、石の勢大なるが故に、名けて石散すと爲すが如し。又た大軍は敵を摧き、各各

使は是れ一切の生死の中の苦の本なり。是の故に「生死を遠離す」と言ふ。能く衆生をして、三寶等の諸の善法の寶を信じて、諸の善法の寶を得せしむるが故に、世間と出世間の樂を得て、能く衆生をして、二種の樂を得せしむるが故に、「救なき者を護ると作る」と言ふ。是の般若波羅蜜の相は乃ち十方の諸佛に至るまで、壞することを能はざる所なり。何となれば、(そは)畢竟不可得なるが故になり。何に況んや餘人をや。故に波羅蜜を具足すと言ふ。是の般若波羅蜜の中には、自性なきが故に、諸法は轉ぜずと説く。生死の中に還らず、涅槃に入りて不生なるが故に、轉ぜず、滅せず、故に還らず。故に能く三轉十二行法輪を轉ずと言ふ。三轉十二行法輪の義は、先に説くが如し。一切の法に二分あり。若くは有、若くは無なり。是の般若の中には、有も亦た取るべからず、無も亦た取るべからず、是の有無を離るるは、即ち是れ諸法の性なり。是の故に、能く諸法の性を示すと言ふ。是の如き等の無量の因縁もて般若を讚歎す。後に當に廣く説くべし。是の般若波羅蜜は、是れ無相の相なり。有人は心未だ淳熟せず其の定相を求めて得ること能はざれば便ち慢心を生ず。是の故に舍利弗問ふ、「應に云何にして供養すべき」と。佛、教へて言はく、「當に佛を供養したてまつるが如くすべし」と。人は久遠より已來、このかた深く衆生相に著するを以て、貴法に於いて情薄し。是の故に、「世尊を供養したてまつるが如くせよ」と言ふ。智者は之を觀じて、佛と般若と等うして異なること無しとす。所以何となれば、般若の修集は、即ち變じて、一切智と爲ればなり。此の中に佛自ら因縁を説きたまはく、「是の般若波羅蜜の中より、賢聖等を出生し、十善道等の世間、出世間の法、乃至一切種智を出生す」と。

「爾の時に帝釋は是の念を作せり」とは、帝釋は意に舍利弗を以て、漏盡離欲の人にして、著法の人の如くに似て般若を讚歎すと(爲せるなり)。今、舍利弗は自ら因縁を説きて、「菩薩は般若の爲の故に、方便の力を以つて、能く福德を隨喜し、廻向し、而して般若波羅蜜の相を破らず、是の事は

ずる時、色を信ぜず、乃至一切種智を信ぜざるなり」と。

【論】釋して曰く、上に佛は彌勒、須菩提、釋提桓因と共に、隨喜の義を説きたまへるに、舍利弗は默然として、是の般若波羅蜜の隨喜の義の甚深無量無邊にして、大に衆生を利益するを聽聞し、漏盡寂滅なりと雖も、歡喜の心を發し、座より起つて、掌を合せ、佛に白して言さく、「能く隨喜を作して諸の戲論を斷じ、無量の衆生を利益して、佛道に入らしむる者は、是れ般若波羅蜜なり」と。佛は其の語を可としたまへるが故に言はく、「是の般若波羅蜜の中に諸法實相を説き、諸法實相の中には、戲論垢濁なきが故に、畢竟清淨と名け、畢竟清淨なるが故に、能く遍なく一切五種の法藏、所謂過去と未來と現在と、無爲と及び不可説とを照らす」と。是の故に、舍利弗の言はく、「世尊よ、般若波羅蜜は、能く一切法を照らす。(そは)畢竟淨なるが故なり」と。般若波羅蜜は、能く菩薩を守護し、諸の苦惱を救うて、能く所願を滿すこと、梵天王の三千大千世界を守護するが故に衆生皆な禮するが如し。三界の中の三毒の泥、汚さざる所なるが故に、「三界に著せず」と言ひ、一切の愛等の百八煩惱、我見等の六十二見を破するが故に、「無明の黑闇を破す」と言ひ、諸法の中に、智慧は最上にして、一切の智慧の中にて、般若波羅蜜を上と爲し、智慧を以て本と爲して、四念處等の三十七品を分別す。是の故に、「一切の助道法の中にて最上なり」と言ふ。能く生老病死等の諸の怖畏苦惱を斷するが故に、「安隱」と言ひ、是の般若波羅蜜の中に、五眼を攝するが故に、「能く光明を與ふ」と言ひ、右邊、無邊等の諸の二邊を離るるが故に、能く正道を示すと云ひ、菩薩は、金剛三昧に住して、一切の煩惱を斷じ、微習だも、遺餘なからしめて、無礙解脱を得るが故に、「一切種智」と言ふ。復次に、一切法の總相別相、一切種智の因縁を知るが故に、一切種智と名け、能く十方三世の無量の諸佛の法を生ずるが故に、「諸の菩薩の母」と言ひ、一切法の中、各各の自相は空なるが故に、「不生不滅」と言ふ。斷と常とは是れ諸見の本、諸見は是れ諸の結使の本、諸の結

言はく、「不善法と合せず、善法と合せず、世間法と合せず、出世間法と合せず、有漏法と合せず、無漏法と合せず、有罪法と合せず、無罪法と合せず、有爲法と合せず、無爲法と合せず。何となれば、般若波羅蜜は、諸法を得ることを爲さざるが故に生ずればなり。是を以ての故に、諸法に於いて合する所なし」と。

爾の時、釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、是の般若波羅蜜は、亦た薩婆若とも合せざるや」と。

佛の言はく、「是の如し、憍尸迦よ。般若波羅蜜は、亦た薩婆若とも合せざることも亦た得ざるや」と。釋提桓因の言さく、「世尊よ、云何なれば般若波羅蜜は、亦た薩婆若とも合せざることも亦た得ざるや」と。佛の言はく、「般若波羅蜜は名字の如くならず、相の如くならず、起作法の合するが如くならず」と。釋提桓因の言さく、「今、云何なれば合するや」と。佛の言はく、「若し菩薩摩訶薩の不取・不受・不住・不著・不斷の如く、是の如く合するも、亦た合する所なし。是の如し、憍尸迦よ。般若波羅蜜は、一切法と合する所なし」と。

爾の時、釋提桓因、佛に白して言さく、「未曾有なり。世尊よ、是の般若波羅蜜は、一切法の不起・不生・不得・不失の爲の故に生ず」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、是の念を作す、「般若波羅蜜は、若くは一切法と合し、若くは合せず。是の菩薩摩訶薩は、則ち般若波羅蜜をば捨て、般若波羅蜜を遠離す」と。佛、須菩提に告げたまはく、「復た因縁ありて、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を捨て、般若波羅蜜を遠離す」と。佛、須菩提に告げたまはく、「復た因縁ありて、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を捨て、般若波羅蜜を遠離す。若し菩薩摩訶薩は是の念を作す、是の般若波羅蜜は、無所有空虛にして堅固ならず」と。是の菩薩摩訶薩は、則ち般若波羅蜜を捨て、般若波羅蜜を遠離す。須菩提よ、是の因縁を以ての故に、般若波羅蜜を捨離す」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、般若波羅蜜を信じて、何の法をか信ぜずと爲すや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「般若波羅蜜を信ずれば、則ち色を信ぜず、受想行識を信ぜず、眼乃至意を信ぜず、色乃至法を信ぜず、眼界乃至意識界を信ぜず、檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜を信ぜず、内空乃至無法有法空を信ぜず、四念處乃至八聖道分を信ぜず、佛の十力乃至十八不共法を信ぜず、須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道を信ぜず、菩薩道を信ぜず、阿耨多羅三藐三菩提乃至一切種智を信ぜず」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何なれば般若波羅蜜を信ずる時、色乃至一切種智を信ぜざるや」と。佛、須菩提に告げ給はく、「色は不可得なるが故に、般若波羅蜜を信じて色を信ぜず、乃至一切種智は不可得なるが故に、般若波羅蜜を信じて一切種智を信ぜず。是を以ての故に、須菩提よ、般若波羅蜜を信

菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜に守護せられ、漚和拘舍羅の力を以ての故に、過去未來現在の諸佛に於いて、初發心より乃至法住まで、其の中間に於いて、作す所の善根の一切和合し、隨喜して、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是の因縁を以ての故に、我は是の事を問ふ。憍尸迦よ、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜は檀波羅蜜、尸羅、離提、毘梨耶、禪波羅蜜に勝ること、譬へば生盲の人、若くは百、若くは千、若くは百千あるも、而も前導無ければ道に趣き域に入ること能はざるが如し。憍尸迦よ、五波羅蜜も亦た是の如く、般若波羅蜜を離れば、盲の導き無くして、道に趣くこと能はざるが如く、一切種智を得ること能はず。憍尸迦よ、若し五波羅蜜は、般若波羅蜜の將導を得れば、是の時、五波羅蜜を名けて有限と爲す。般若波羅蜜の將導は、波羅蜜の名字を得」と。

釋提桓因、舍利弗に語るらく、「汝の言ふ所の如く、般若波羅蜜は、五波羅蜜を將導するが故に、波羅蜜の名字を得るも、舍利弗よ、若し檀波羅蜜なければ、五波羅蜜は、波羅蜜の名字を得ず。若し尸羅波羅蜜、離提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜なければ、五波羅蜜は、波羅蜜の名字を得ず。若し爾らば、何を以ての故に、獨り般若波羅蜜のみを將導するや」と。舍利弗の言はく、「是の如し、是の如し、憍尸迦よ。檀波羅蜜なければ、五波羅蜜は、波羅蜜の名字を得ず。尸羅波羅蜜、離提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜なければ、五波羅蜜の名字を得ず。但だ菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜の中に住してのみ、能く檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、離提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜を具足す。是を以ての故に、憍尸迦よ、般若波羅蜜は、五波羅蜜の中に於いて、最上にして第一、最妙にして無上、與に等しきもの無きなり」と。

舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、云何にして應に般若波羅蜜を生ずべきや」と。佛、舍利弗に告げたまはく、「色は不生なるが故に、般若波羅蜜を生じ、受想行識は不生なるが故に、般若波羅蜜を生じ、檀波羅蜜は不生なるが故に、般若波羅蜜を生じ、乃至禪波羅蜜は不生なるが故に、般若波羅蜜を生じ、乃至無法有法空、四念處、乃至八聖道分、佛の十力乃至一切智、一切種智は不生なるが故に般若波羅蜜を生ず。是の如く諸法不生なるが故に、般若波羅蜜は應に生ずべし」と。

舍利弗の言はく、「世尊よ、云何にして色は不生なるが故に、般若波羅蜜を生じ、乃至一切諸法は不生なるが故に、般若波羅蜜は應に生ずべきや」と。佛の言はく、「色は不起、不生、不得、不失なるが故に、乃至一切諸法は、不起、不生、不得、不失なるが故に、般若波羅蜜を生ず」と。

舍利弗、佛に白して言さく、「是の如く生ずる般若波羅蜜と何等の法と合するや」と。佛の言はく、「合する所なし。是を以ての故に、般若波羅蜜と名くることを得」と。「世尊よ、何等の法と合せざるや。」佛の

【一】「漚和拘舍羅の力」原文六字、石本は「方便力」に作る。蓋し前者は梵音 Uḥāṣṭaka = uḥāṣṭa の音寫、後者はその意譯なり。

## 卷の第六十二

## 第四十 照明品

【經】爾の時に、慧命舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、是れ般若波羅蜜なりや」と、佛の言はく、「是れ般若波羅蜜なり」と。「世尊よ、般若波羅蜜は能く一切法を照らす。(そは)畢竟淨なるが故なり。世尊よ、應に般若波羅蜜を禮すべし。世尊よ、般若波羅蜜は三界に著せず。世尊よ、般若波羅蜜は諸の闇冥を除く、(そは)一切の煩惱、諸見を除くが故なり。世尊よ、般若波羅蜜は一切の助道法中の最上なり。世尊よ、般若波羅蜜は安穩なり。(そは)能く一切の怖畏苦惱を斷ずるが故なり。世尊よ、般若波羅蜜は能く光明を與ふ。(そは)五眼を莊嚴するが故なり。世尊よ、般若波羅蜜は能く邪見に墮する衆生を示導す。(そは)二邊を離るるが故なり。世尊よ、般若波羅蜜は是れ一切種智なり。(そは)一切の煩惱及び習を斷ずるが故なり。世尊よ、般若波羅蜜は諸の菩薩摩訶薩の母なり。(そは)能く諸佛の法を生ずるが故なり。世尊よ、般若波羅蜜は不生不滅なり。(そは)自相空なるが故なり。世尊よ、般若波羅蜜は生死を遠離す。(そは)非常非滅なるが故なり。世尊よ、般若波羅蜜は救なき者の護と作る。(そは)一切の珍寶を施すが故なり。世尊よ、般若波羅蜜は力を具足す。(そは)能く破壊するもの無きが故なり。世尊よ、般若波羅蜜は能く三轉、十二行の法輪を轉ず。(そは)一切諸法は不轉不還なるが故なり。世尊よ、般若波羅蜜は能く諸法の性を示す。(そは)無法有法空なるが故なり。

世尊よ、應に云何にして般若波羅蜜を供養すべきや。佛の言はく、當に世尊を供養するが如くすべし。般若波羅蜜を禮すること、當に世尊を禮するが如くすべし。何となれば、世尊は般若波羅蜜に異ならず、般若波羅蜜は世尊に異ならず。世尊は即ち是れ般若波羅蜜なり、般若波羅蜜は即ち是れ世尊なればなり。是の般若波羅蜜の中に、諸佛・菩薩・辟支佛・阿羅漢・阿那含・斯陀含・須陀洹を出生し、般若波羅蜜の中に、十善道・四禪・四無量心・四無色定・五神通・內空・乃至無法有法空、四念處、乃至八聖道分を生じ、是の般若波羅蜜の中に、佛の十力・十八不共法・大慈大悲・一切種智を生ずればなり。

爾の時に、釋提桓因、心に念ずらく、「何の因縁の故に舍利弗は是の事を問ふや」と。念じ已りて舍利弗に語るらく、「何の因縁の故に、是の事を問ふや」と。舍利弗、釋提桓因に語りて言はく、「憍尸迦よ、諸の

徳は毒を雜へ、今の福德には毒なし。先の福德は生死に隨ひ、今の福德は涅槃に隨ふ。先の福德は不定にして或は佛と作り、或は退し、今の福德は定んば到り、必ず疾く佛と作ればなり。是の如き等の差別あり。是の故に、四種の人の(中)、若くは凡夫の人は世間の樂を求む。若くは聲聞、辟支佛の人は涅槃の樂を求め、若くは諸の菩薩摩訶薩は、佛の樂を求む、應に是の如く、隨喜して福德を生じ、阿耨多羅三藐三菩提に廻向すべしとす。此の品の中に説くが如し。<sup>五</sup>

【五】石本は茲に「釋第三十八品竟」七字附加。而も次に正本の如く卷を改めて「卷の第六十二」とせず。



問うて曰はく、先に種種の因縁もて、正廻向を説けり。正廻向は即ち是れ最上なり。今、何を以てか更に問ふや。

答へて曰はく、上には處處に廣く説き、今は略して説く。所謂、三世十方の一切法は決定して、心には是の法中に於いて生者、滅者等のなきことを知る。一切法は得べからず、念すべからず。念ぜざるが故に、取らず捨てず。諸法實相の中に入りて是の念を作さく、「諸法實相の如く、我も亦た是の如し、隨喜の福德を以て、廻向して諸法を分別せず、法性を壞せず」と。是を最上の廻向と名く。何となれば、果報は常に無盡なるが故なり。

問うて曰はく、六波羅蜜等の諸法の各おのの相と名づくる（ものは、若くは色相、若くは無色相等なり。解脱に二種あり。有爲解脱と無爲解脱なり。云何なれば皆な解脱と等しきや。

答へて曰はく、我れ先に已に説けり。凡夫の人は肉眼を以てし、六識顛倒して觀するが故に、異を見る。若し慧眼を以て觀すれば、諸法は皆な虚妄なり。唯だ涅槃のみを實と爲す。是の有爲解脱は、無爲に屬し、無爲に隨ふが故に解脱と名く。實の如く道を得る者を道人と名け、今、未だ道を得ざる者も、衣服の法は則ち得道の者に隨ふが故に、亦た道人と名く。無餘涅槃の如し、不生・不滅・不入・不出・不垢・不淨・非有・非無・非常・非無常・常寂滅相・心識の觀滅し、語言の道斷え、非法・非非法等の相なり。無所有の相を用つての故なり。慧眼もて一切法を觀するも亦た是の如きの相なり。是を六波羅蜜と解脱と等しく名く。是の故に佛法の中に、「解脱を貴しと爲し、上智慧は解脱を貴ぶ」と説けり。佛、是の中に分別して説きたまはく、「若し人、無量阿僧祇劫に六波羅蜜を行じ、有所得の法を用つて、種種に善根は修集せるは、一人の無所得の法を用ゐ、但だ心を以て隨喜し、他の功德を念じて、無上道に廻向する是の人の、百千萬分の其の一にも及ばず。何となれば、先の福德には量あり、是の福德は量なし。先の福德は盡ること有り、今の福德は盡くること無し。先の福

に是の假名の相を取りて、諸の煩惱業を起す。法相とは、五衆・十二入・十八界等の諸法は、肉眼もて観るが故に有り。慧眼を以て觀れば、則ち無し。是の故に法も亦た虚誑妄語なれば、應に法相を捨離すべし。是の二相を離るれば、餘は但だ無相相のみ有り。人ありて是の無相相を取り、隨逐して相を取り、還た結使を生ず。是の故に亦た無相相を取るべからず。三種の相を離るるが故に無相と名く。若し相あること無くんば、是の中に所得なく、得なきが故に出づること無し。若し法にして、得なく、出なくんば、即ち是れ無垢無淨なり。若し法にして、無垢無淨ならば、即ち是れ無法性なり。若し法にして性なくんば、即ち是れ自相空なり。若し法にして自相空ならば、即ち是の法は常に自性空なり。若し法にして常に自性空ならば、即ち法性、如、實際に同じ。是の如き法を用つて、和合して福德を隨喜し廻向するが故に讚じて、善い哉、善い哉と言ふ。復た善哉の因縁あり。所謂、隨喜の福德は、大に衆生を利益し、大なる果報あり。何者か是れ大利益なる。所謂、佛、須菩提に語りたまはく、「若し三千大千世界の衆生、十善、乃至五通を行す」と。

問うて曰はく、欲界の中の二處の天及び梵天王は何を以てか多くの天と俱にし、餘の四天は何を以てか少なきや。

答へて曰はく、是の二天は、地に依止して、佛に近づくが故なり。又た五欲は上天に如かず。佛の生れたまふ時、苦行の時、降魔の時、得道の時、轉法輪の時、常に來りて佛を供養したてまつれり。是の故に多し。餘の四處の天の宮殿は、虚空の中にありて、地に屬せず。五欲妙にして、染著すること深きが故に、多く來ること能はず。又た兜率陀天は、利根にして法を樂しむと雖も、而も其の天上に常に補處の菩薩ありて法を説く。是の故に來らず。梵天は欲を遠離すと雖も、故らに法を樂しむ情深く、佛を法王と爲す。是の故に多く來る。復次に、梵天王は、色界の主と爲りて、佛の初轉法輪を請す。是の故に、應に多衆と俱に來るべし。餘の色界の天は、盡く梵天と名く。

繫せざるが故に、三世に攝せず。諸佛及び弟子、并に諸の功德・隨喜心・廻向處・用ふる所の廻向法・廻向者も、亦た是の如し。是を正廻向と名く」と。爾の時、菩薩は是の念を作さく、「若し色は三界を出でて、三世に攝せずんば、取相有所得を以て、廻向す可からず。何となれば、是の色は三界を出づとは、即ち是れ色の實相にして、初後の生相は、不可得なればなり。破生品の中に説くが如し。若し法にして無生ならば、即ち是れ無所有なり。無所有の廻向心、云何にして無所有の菩提心に廻向せん。色・受・想・行・識、乃至常捨行も亦た是の如し。是を毒を雜ふる無きの廻向と名く。所謂、無相無得の廻向なり。「毒を雜ふ」とは、所謂、諸佛讚歎したまはず、六波羅蜜等を具足すること能はず、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はざるなり」と。

復次に、菩薩は應に是の念を作すべし、「十方三世諸佛の知りたまふ所の如く、應に是の如く心生じ、是の如く念じ、是の如く觀じ、是の如く廻向せば、是の功德もて、直に無上道に至るべし。我も亦た是の如く、隨喜し廻向せん」と。是の菩薩の、必ず實の隨喜、廻向を得ることひなの虚しからざること、先に因縁を説けるが如し。是れ略して諸の廻向品を説くなり。菩薩の佛を禮するに三品あり。一には悔過品、二には隨喜廻向品、三には勸請諸佛品なり。廣く説かば則ち無量無邊なり。善い哉、善い哉、汝は佛事を作すとは、佛は初發心に一切衆生を度せんことを誓ひたまふ。須菩提は是れ阿羅漢なりと雖も、而も能く佛の説法を助けたてまつりて、菩薩の道を開く。是の故に讚じて、善い哉、善い哉と言へり。

復次に、佛は自ら因縁を説き、諸の菩薩の爲に、應に廻向すべき所の法を説きたまへり。

「無相を用つての故に」とは、無相の智慧を以て、和合し廻向するなり。「福德の相」とは、上と相違し、名けて無相と爲す。無相に三種あり、假名相・法相・無相相なり。假名相とは、車の如く、屋の如く、林の如く、軍の如し。衆生の如きは、諸法和合する中に、更にはの名あり。無明の力の故

【四】菩薩の佛を禮するに三品あり。一には悔過品、二には隨喜廻向品、三には勸請諸佛品なり。原文二十六字、宋元明三本及び宮本聖本は俱に夾註に作る。

復次に、須菩提よ、佛道を求むる善男子、善女人は、過去・未來・現在の諸佛及び聲聞・辟支佛に於いて初發心より、乃至法住まで、其の中間に於ける所有る善根、若くは布施乃至智慧、檀波羅蜜乃至無量の諸佛の法、及び餘の一切衆生の所有る善根、若し隨喜せんと欲せば、應に是の如く隨喜して、是の念を作すべし、布施は解脫と等し、戒・忍・精進・禪・智は解脫と等し、色は解脫と等し、受・想・行・識も亦た解脫と等し、内空は解脫と等し、乃至無法有空も亦た解脫と等し、四念處は解脫と等し、乃至八聖道分も亦た解脫と等し、佛の十力は解脫と等し、乃至一切種智も亦た解脫と等し、戒衆・定衆・慧衆・解脫衆・解脫知見衆も亦た解脫と等し、隨喜は解脫と等し、過去・未來・現在の諸法は解脫と等し、十方の諸佛は解脫と等し、諸佛の廻向は解脫と等し、諸佛は解脫と等し、諸佛の滅度は解脫と等し。諸佛の弟子・聲聞・辟支佛は解脫と等し。諸佛の弟子の滅度と等し。諸佛の法相は解脫と等し。諸の聲聞・辟支佛の法相は解脫と等し。一切諸法の相も亦た解脫と等し。我れ是の諸の善根の相を以て、隨喜の功德を阿耨多羅三藐三菩提に廻向するも、亦た解脫と等し。不生不滅なるが故なり」と。須菩提よ。是を諸の菩薩摩訶薩の隨喜の功德は、最上にして第一、最妙にして無上、與に等しきもの無しと名く。須菩提よ、菩薩は是の隨喜の功德を成就して、當に疾く阿耨多羅三藐三菩提を得べし。

復次に、須菩提よ、十方如恆河沙等の諸佛、及び弟子の、現在に佛道を求むること有らんに、善男子、善女人ありて、形壽を盡して、是の諸佛及び弟子を供養し、一切の須ふる所の衣服・飲食・臥具・醫藥を供養し、恭敬し、尊重し、讚歎す。是の諸佛の滅度の後、晝夜に勸修し、華香乃至幡蓋・伎樂もて供養し、恭敬し、尊重し、讚歎す。(夫は)取相・有所得を以ての故なり。持戒・忍辱・精進・禪定・智慧を修す。(夫は)取相・有所得を以ての故なり。

復た善男子、善女人ありて、意を發して阿耨多羅三藐三菩提を求め、檀波羅蜜・尸羅波羅蜜・羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜・般若波羅蜜を行ずる時、相を取らざるを以て、所得の法無く、方便力(を以て)、諸の善根を阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是の福德は最上にして第一、最妙にして無上、與に等しきもの無く、前の福德を勝ること、百倍・千倍・百千億倍乃至算數譬喩も及ぶ能はざる所なり。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩、檀波羅蜜・尸羅波羅蜜・羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜・般若波羅蜜を行ずる時、方便力を以ての故に、諸の善根を、應に阿耨多羅三藐三菩提に廻向すべし。相を取らざるを以て所得の法無きが故なり」と。

【論】釋して曰はく、菩薩は應に是の念を作すべし、色より乃ち常捨行に至るまで、諸法は三界に

力を以ての故に、前の善男子、善女人の取相、有所得の者に勝る」と。光音天乃至阿迦尼吒天は、無數百千億那由他の諸天と俱に、佛の所に詣り、頭面に佛の足を禮し、大音聲を發して、是の如き言を作さく、「未曾有なり。世尊よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜の爲に護られ、方便力を以ての故に、前の善男子、善女人の取相、有所得の者に勝る」と。

爾の時、佛、四天王天、乃至阿迦尼吒の諸天子に告げたまはく、「若し三千大千世界の中の所有る衆生、皆な阿耨多羅三藐三菩提心を發さば、是の一切の菩薩は、過去・未來・現在の諸佛及び聲聞・辟支佛の諸の善根、初發意より乃至法住まで其の中間に於ける所有る善根、並に餘の一切衆生の所有る善根、所謂布施・持戒・忍辱・精進・一心・智慧・檀波羅蜜乃至般若波羅蜜・戒衆・定衆・慧衆・解脫衆・解脫知見衆、是の如き等の諸餘の無量の佛法を念し、一切和合し隨喜し、隱喜し已りて、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。(夫は)取相・有所得を以ての故なり。

復た善男子、善女人ありて、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、過去・未來・現在の諸佛及び聲聞・辟支佛の初發意より、乃至法住まで、其の中間に於ける、所有る善根、並に餘の一切衆生の所有る善根、所謂布施・持戒・忍辱・精進・一心・智慧・檀波羅蜜乃至無量の諸の佛法を念じ一切和合し稱量す。(夫は)無所得を以ての故に、無二の法なるが故に、無相の法なるが故に、不著の法なるが故に、無覺の法なるが故なり。是は最上の隨喜、第一、最妙、無上にして與に等しきもの無き隨喜なり。隨喜し已りて、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是の善男子、善女人の功德の、前の善男子、善女人の功德に勝れることは、百倍・千倍・百千億倍乃至算數譬喩も及ぶこと能はざる所なり。

爾の時に、須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、世尊は善男子、善女人の、諸の善根を和合し、稱量し、隨喜し、廻向する最上にして第一、最妙にして無上、與に等しきもの無しと説きたまふ。世尊よ、云何なれば隨喜は最上乃至與に等しきもの無しと名くるや」と。佛の言はく、「若し善男子、善女人、過去・未來・現在の諸法に於いて、取らず、捨てず、念せず、念ぜざるに非ず、得ず、得ざるに非ず、是の諸法の中にも亦た法として生ずる者、滅する者、若くは垢、若くは淨あること無く、諸法は増さず、減らず、來らず、去らず、合せず、散せず、入らず、出でず、過去・未來・現在の諸法相、如如相・法性・法住・法位の如く、我也亦た是の如く隨喜し、隨喜し已りて、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是の如き廻向は最上第一最妙無上にして、與に等しきもの無し。須菩提よ、是の隨喜の法を餘の隨喜に比するに、百倍・千倍・百千億倍、乃至算數譬喩も及ぶこと能はざる所なり。

ず、阿耨多羅三藐三菩提に廻向せんには如かず。最上にして第一、最妙にして無上、與に等しきもの無し」と。

「復次に、須菩提よ、若し三千大千世界の中の衆生、皆な阿耨多羅三藐三菩提心を發し、十方如恆河沙等世界の中の一の衆生、如恆河沙等の劫に、是の菩薩を恭敬し、尊重し、讚歎し、供養し、衣服・飲食・臥具・醫藥もて須ふる所のものを供給せば、須菩提の意に於いて云何。是の善男子、善女人は、是の因縁の故に、福を得ること多きや不や」と。「甚だ多し、世尊よ、無量無邊阿僧祇にして譬喩を以て比と爲す可からず。世尊よ、若し是の福德にして形有らば、十方如恆河沙等の世界も受けざる所なり」と。

佛、須菩提に告げたまはく、「善い哉、善い哉、汝が言ふ所の如し。爾りと雖も、善男子、善女人は、諸の善根に於いて心著せず、阿耨多羅三藐三菩提に廻向せんには如かず、最上にして第一、最妙にして無上、與に等しき者なし。是の著せざる廻向の功德を、前の功德に比するに、百倍・千倍・百千億倍乃至算數譬喩も及ぶ能はざる所なり。何となれば、是の善男子、善女人は、取相・得法して、十善道・四禪・四無量心・四無色定・五神通を行じ、取相・得法して、須陀洹を供養し、恭敬し、尊重し、讚歎し、衣服・飲食・臥具・醫藥、須ふる所のものを供給し、乃至相を取りて菩薩を供養するが故なり」と。

爾の時、四天王天、二萬の諸の天子と共に合掌し、佛を禮し上りて、是の言を作さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩の最とも大なる廻向は、方便力を以ての故に、無所得を以ての故に、無相の法を以ての故に、無覺の法を以ての故に、諸の善根を阿耨多羅三藐三菩提に廻向するなり。是の如く廻向せば、二法に墮せず」と。

爾の時、釋提桓因も、亦た無數の三十三天、及び餘の諸の天子と共に「天華・瓔珞・搗香・澤香・天衣・幡蓋・鼓・天の妓樂を持し、以て佛に供養し上りて、是の言を作さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩の最とも大なる廻向は、方便力を以ての故に、無所得を以ての故に、無相の法を以ての故に、無覺の法を以ての故に、諸の善根を阿耨多羅三藐三菩提に廻向するなり。是の如く廻向せば二法に墮せず」と。須夜摩天王は、千の天子と共に、册兜率陀・化樂・他化自在の諸天王は、各千の天子と共に、佛を供養し已りて是の言を作さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩の最とも大なる廻向は、方便力を以ての故に、無所得を以ての故に、無相の法を以ての故に、無覺の法を以ての故に、諸の善根を阿耨多羅三藐三菩提に廻向するなり。是の如き廻向は二法に墮せず」と。

爾の時、諸の梵天王は、無數百千億那由他の諸天と俱に、佛の所に詣り、頭面に佛の足を禮し、大音聲を發して、是の如き言を作さく、「未曾有なり。世尊よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜の爲に護られ、方便

般若波羅蜜を行ずる時、是の如く色は三界に繫せず、不繫の法は過去・未來・現在と名けずと知り、若し法、過去・未來・現在と名けずんば、取相有所得の法を以て、阿耨多羅三藐三菩提に廻向すべからず。何となれば、是の色は無生なり、若し法にして無生ならば、則ち法無し、無法の中に廻向すべからざればなり。受・想・行・識も亦た是の如し。檀波羅蜜乃至般若波羅蜜、四念處乃至無錯謬の法・常捨行は三界に繫せず、不繫の法は、亦た過去・未來・現在に非ず。若し過去・未來・現在法に非ざれば、相取有所得の法を以て、阿耨多羅三藐三菩提に廻向すべからず。何となれば、是の法は無生なり。若し法、無生ならば、即ち無法にして、無法の中には、廻向す可からざればなり。菩薩摩訶薩、是の如く廻向すれば、則ち毒を雜へず。若し佛道を求むる善男子、善女人にして、取相を以て法を得、諸の善根を以て、阿耨多羅三藐三菩提に廻向せば、是を邪廻向と名く。若し邪廻向せば、諸佛の稱譽したまはざる所なり。是の邪廻向を用つては、檀波羅蜜、乃至般若波羅蜜を具足すること能はず、四念處乃至八聖道分、內空乃至無法有法空、佛の十力乃至無錯謬の法・常捨行を具足すること能はず、佛世界を淨め、衆生を成就すること具足すること能はず。若し佛世界を淨め、衆生を成就すること能はざれば、即ち阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず、何となれば、是の廻向は毒を雜ふればなり。

復次に、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時、應に是の念を作すべし。「諸佛の知りたまふ所の、諸の善根の廻向は、眞の廻向なるが如く、我も亦た應に是の法相を以て廻向すべし」と。是を正廻向と名く。

爾の時、佛、須菩提を讀じたまはく、「善い哉、善い哉、汝が所爲の如きは佛事を爲作し、諸の菩薩摩訶薩の爲に所應の廻向の法を説けり。(夫は)相なく、得なく、出なく、垢なく、淨なく、法性なく、自相空、常性空、法性、如、實際なるを以ての故なり。須菩提よ、若し三千大千世界の中の衆生、皆な當に十善道、四禪、四無量心、四無色定、五神通を得べんに、須菩提の意に於いて云何。是の衆生は福を得ること多きや不や」と。「甚だ多し、世尊よ」と。佛の言はく、「是の善男子、善女人、諸の善根に於いて心著せず阿耨多羅三藐三菩提に廻向せんに如かず。須菩提よ、是の善男子、善女人の福德は、最上にして第一、最妙にして無上、與に等しきもの無し」と。

「復次に、須菩提よ、若し三千大千世界の中の衆生、皆な當に須陀洹、乃至阿羅漢・辟支佛と作るべく、若し善男子、善女人ありて、形壽を盡して供養し、恭敬し、尊重し、讚歎し、衣服・飯食・臥具・醫藥もて須ふる所のものを供給せば、須菩提の意に於いて云何。是の善男子、善女人は、是の因縁の故に、福德を得ること多きや不や」と。「甚だ多し、世尊よ」と。佛の言はく、「是の善男子、善女人は、諸の善根に於いて心著せ

自ら失し、若くは受けて具足せざるなり。

「義を解せず」とは、經の意を得ざるなり。是の如き少智の師は弟子を教化すらく、「汝、善男子よ、過去・未來・現在の十方の諸佛、初發意より乃至（云云）」と。是の如く廻向するを、則ち佛を謗り、佛教に隨はず、法説に隨はずと爲し、此と相違するを名けて、正廻向と爲す。

復次に、正廻向の菩薩は、應に是の念を作すべし、「十方三世諸佛の知りたまふ所の如く、無上の智慧を用つて諸の善根を相を知らん。一切の智人の中に、佛は第一に勝れたまふ。佛の知りたまふ所の諸の善根は、必ず是れ實相なり。佛の知りたまふ所の如く、我も亦た是の如き善根の相を用つて廻向せん。譬へば地を射れば、著かざる時なく、若し餘物を射れば、或は著き或は著かざるが如し。如し諸佛の知りたまふ所の隨喜は、地を射れば著かざること無きが如く、若し餘道の隨喜を用ふれば、餘物を射て、或は著き、或は著かざるが如し。是の如き廻向は、佛を謗りたてまつらずと爲す。<sup>三</sup>

【經】復次に、佛道を求むる善男子、善女人は、般若波羅蜜を行ずる時、諸の善根を應に是の如く廻向すべし。色は欲界に繫せず、色界に繫せず、無色界に繫せざるが如く、繫せざる法は過去と名けず、未來と名けず、現在と名けず。受・想・行・識は欲界に繫せず、色界に繫せず、無色界に繫せざるが如く、不繫の法は過去・未來・現在と名けず。十二入・十八界も亦た是の如し、般若波羅蜜は欲界に繫せず、色界に繫せず、無色界に繫せざるが如く、繫せざる法は過去・未來・現在と名けず。禪波羅蜜乃至檀波羅蜜も亦た是の如く、内空乃至無法有法空も亦た是の如し。四念處は欲界に繫せず、色界に繫せず、無色界に繫せざるが如く、繫せざる法は過去・未來・現在と名けず。乃至八聖道分も亦た是の如く、佛の十力乃至十八不共法も亦た是の如し。如如・法性・法相・法住・法位・實際・不可思議性・戒・定・慧・解脫・解脫智見衆・一切種智・無錯謬の法・常捨行は欲界に繫せず、色界に繫せず、無色界に繫せざるが如く、繫せざる法は過去・未來・現在と名けず。是の廻向、廻向せらるる處、行者の繫せざること皆な亦た是の如し。是の如く諸佛も亦た繫せず、諸の善根も亦た繫せず。是の諸の聲聞、辟支佛の善根も、亦た繫せず。不繫の法は過去・未來・現在と名けず。若し菩薩摩訶薩の、

【三】石本は茲を以て卷の第六十二の終りとなし「大智度經卷第六十二終」十字を附加し、次行に「大智度經品第二十八之餘卷六十三」の十五字掲載、卷の第六十三の首とす。



を得べからずと説く。何となれば、是の般若波羅蜜は畢竟空にして、福德を分別すること有ること無く、若くは般若波羅蜜を離れ、若くは般若波羅蜜を離れず、廻向することを得べからず。菩薩は應に是の念を作すべし、「諸の過去の佛、及び弟子の身、並に諸の善根、福德は皆な滅す。我れ今、相を取りて分別す、所謂、是は諸佛、是は弟子、是は善根、是は隨喜の福德なりと、相を取りて廻向す。我は是ならずと爲す。何となれば、諸法實相と異なるが故なり。果報を受け已りて、久久<sup>ひさし</sup>うして當に盡くべきが故に、疾く佛道に至らず、有所得の故に、過去の諸佛に於いて、憶想し、分別す。即ち是れ大失なり。所謂、過去の佛は空無なるに、而も我は憶想し、分別す。譬へば毒を雜ふる食の如し。食は是れ隨喜の福德、毒は是れ取相なるが故に、愛見等の諸の煩惱を生ず」と。

好色とは、福德の因縁もて、人王・轉輪王・天王と作りて、福樂を得るなり。

好香とは、好き名譽・富貴・勢力を得て、凡夫・無智の人に共に貪愛せらるるなり。

愚癡の人とは、是れ新發意にして、相を取る著心の菩薩なり。

之を食して歡喜すとは、富樂福德の因縁の故に、天人の中に於いて、此の富樂を受くるなり。

飯の消えんと欲する時、若くは死、若くは死に等しき苦を受くとは、是の富樂は、若くは無常にして破壊し、離るる時に憂愁して遂に死し、若くは死に次いで諸の苦惱を受く。

復次に、若くは死し、若くは死に等しとは、自ら命根を失するを死と名け、著する所の物を失するを死に等しと名く。

復次に、若くは死し、若くは死に等しとは、苦惱多きが故に、智慧の命を失するを死と名け、善道を行ふを妨ぐるを死に等しと名く。此の經の中に須菩提は自ら説けり、「是の無智の人は、審かに諦かに受けず、其の義を取らず、但だ語言に著す」と。

「諦に相を取らず」とは、法の如く分別せざるなり。「諦に讀誦せず」とは、句逗を忘失し、若くは

復次に、若し菩薩は、隨喜の福德の中に、隨喜の福德の性に自ら離るることを知り、諸佛及び善根並に諸の起せる阿耨多羅三藐三菩提心・廻向心・菩薩の般若波羅蜜等の諸行の法は、自性空なることを知る。是の正廻向と名く。隨喜の福德とは、總じて一切の福德の相を説く。善根を隨喜し、福德を起すは、是れ別相の説なり。菩薩は自ら求むる所の阿耨多羅三藐三菩提を緣す。是を阿耨多羅三藐三菩提心と名く。是の菩薩の隨喜心の功德の果は、但だ無上道を求む。是を廻向心と名く。行者は五衆の中の假の名字を菩薩と爲す。般若波羅蜜等の諸法は、先に義を説くが如し。先には福德の中に五種を離るることを説き、今は福德と福德の自相は空なることを説く。

復次に、菩薩は過去の佛の因縁生の福德を念じて、應に是の如く廻向すべし。過去の諸佛は無餘涅槃に入りたまひ、無相無戲論にして、性常に寂滅なるが如く、是の福德及び廻向心も亦た是の如し。是の如き廻向は、是を正廻向と名け、顛倒に墮せず。

復次に、若し菩薩、諸の過去の佛の功德に於いて、相を取り、分別して廻向するは、是を廻向と名けず。何となれば、有相は是れ一邊、無相も是れ一邊にして、是の二邊を離れて、中道を行するは、是れ諸佛の實相なればなり。是の故に、諸の過去の佛は、相の數中に墮せず、無相の數中に墮せずと説く。若し是の如く相數を取るは、是を廻向と名けず、則ち顛倒に墮す。上と相違するは是れを顛倒に墮せずと爲す。是の事は難きが故に、彌勒重ねて問へり。所謂、一切法は相を取らずして、而も復た能く廻向す。須菩提は是の中に決定して答ふる處を得ず。是の故に、彌勒に語るらく、「是の事を知るが故に、菩薩は般若波羅蜜を學するに方便力を求む」と。是の福德は、般若波羅蜜を離れて、廻向することを得ずとは、一切法の中に、一法は實にして而も誑ならず。所謂阿耨多羅三藐三菩提なり。是の阿耨多羅三藐三菩提に隨ひ、不誑道を行じて爾も乃ち得べし。

不誑道とは即ち是れ般若波羅蜜なり。是の故に、般若波羅蜜を離れて、是の福德は廻向すること

雜ふるが如し。好色、好香ありて、人の食する所と爲ると雖も、而も毒を雜ふ。愚癡の人は、之を食して歡喜し、其の好色、香美を食りて口にす可きも、飯、消せんと欲する時、若くは死、若くは死に等しき苦を受く。若し善男子、善女人、諦あきらかに受けず、諦に相を取らず、諦に誦讀せず、中の義を解せずば、是の如く他に教へて言はく、「汝、善男子よ、過去・未來・現在の十方の諸佛は、初發意より已來、阿耨多羅三藐三菩提を得るに至り、無餘涅槃に入り乃至法盡き、其の中間に於いて、般若波羅蜜を行ずる時に作せる。諸の善根、禪波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・歸提波羅蜜・尸羅波羅蜜・檀波羅蜜を行ずる時に作せる諸の善根、四禪・四無量心・四無色定・四念處乃至八聖道分・佛の十力を修し、乃至十八不共法を修する時に作せる諸の善根、佛世界を淨め、衆生を成就するに作せる諸の善根、及び諸佛の戒衆・定衆・慧衆・解脫衆・解脫知見衆・一切種智・無錯謬法・常捨行、及び諸の弟子の中に種うる所の善根、及び諸佛の記せられ、當に辟支佛と作るべき（善根）、是の中に諸天・龍・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽等の種うる所の善根、是の諸の福德を稱量し、和合し、隨喜して、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是の廻向は、相を取り法を得るを以ての故に、毒を雜ふる食の如く、法を得る者は、終に正廻向なし。何となれば、是の法を得るは毒を雜へ、相あり、動あり、戲論あればなり。若し是の如く、廻向すれば、即ち佛を謗り、佛教に隨はず、法説に隨はずと爲す。是の善男子、善女人、佛道を求めんとせば、應に是の如く學すべし。過去・未來・現在の諸佛、初發意より乃至法の盡くるまで、及び弟子の般若波羅蜜を行ずる時に作せる善根、乃至一切種智を修するは、上に説けるが如し。云何なれば諸の善根を阿耨多羅三藐三菩提に廻向するは、正廻向なるや。佛道を求むる善男子、善女人ありて、般若波羅蜜を行じて、諸佛を謗らんと欲せざる者は、諸の福德もて、應に是の如く廻向すべし。佛の知りたまふ所の如く、無上の智慧を以て、是の諸の善根の相、是の諸の善根の性を知り、我も亦た是の如く隨喜し、諸佛の知りたまふ所の如く、我も亦た是の如く、阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、菩薩の道を求むる善男子善女人は、應に是の如く阿耨多羅三藐三菩提に廻向すべし」と。若し是の如く廻向すれば、即ち佛を謗らず、佛の教へたまふ所の如く、佛法に説くが如しと爲す。是の菩薩・訶薩の廻向には、即ち毒を雜ふること無し。

【論】釋して曰はく、起す所の福德、五衆を離るとは、先には但だ過去の事を説き、今は自ら隨喜の福德を起すことを説く。若し是の福德の中に、五衆・十二入・十八界なきことを知れば、般若波羅蜜等の諸法を行すと雖も、亦た空にして相を離ると知る。是の如き福德を正廻向と名く。

諸の善根も亦た善根の性を離れ、菩提心の菩提心性も亦た離れ、廻向の廻向性も亦た離れ、菩薩の菩薩性も亦た離れ、般若波羅蜜の般若波羅蜜性も亦た離れ、禪波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪提波羅蜜・尸羅波羅蜜・檀波羅蜜の檀波羅蜜性も亦た離れ、乃至十八不共法の十八不共法性も亦た離るるを知れば、菩薩摩訶薩は、應に是の如く、離相の般若波羅蜜を行ずべし。是を菩薩摩訶薩の般若波羅蜜の中に隨喜の福德を生ずと名く。

復次に、菩薩摩訶薩、諸の過去の滅度の佛の諸善根、若し廻向せんと欲せば、應に是の如く廻向して、是の念を作すべし、「諸佛の滅度の相の如く、諸善根の相も亦た是の如く滅度す、法相も亦た是の如し。我れ心を用つて廻向せば、是の心相も亦た是の如し。若し能く是の如く廻向せば、當に知るべし、是れ阿耨多羅三藐三菩提に廻向す」と。(是の如く廻向せば) 想顛倒・心顛倒・見顛倒に墮せず。若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、諸佛の善根の相を取りて、阿耨多羅三藐三菩提に廻向せば、是を名けて廻向と爲さず。何となれば、諸の過去の佛、及び善根は、相縁に非ず、無相縁に非ざればなり。若し菩薩摩訶薩、是の如く、相を取ることを爲さば是を善根もて阿耨多羅三藐三菩提に廻向すと名けず。是の如きの菩薩摩訶薩は想顛倒・心顛倒・見顛倒に墮す。若し菩薩摩訶薩、諸佛及び諸善根、及び諸心の相を取らざれば、是を諸善根を以て、阿耨多羅三藐三菩提に廻向すと名く。是の如きの菩薩摩訶薩は、想顛倒・心顛倒・見顛倒に墮せず。

爾の時、彌勒菩薩、須菩提に問ふ、「云何なれば菩薩摩訶薩は、諸善根に於いて相を取り、能く阿耨多羅三藐三菩提に廻向せざるや」と。善須提の言はく、「是の事を以ての故に、當に知るべし、菩薩摩訶薩の學する所の般若波羅蜜の中には、應に般若波羅蜜の方便力あるべし」と。若し是の福德、般若波羅蜜を離るれば、阿耨多羅三藐三菩提に廻向するを得ず。何となれば、般若波羅蜜の中には、諸佛得べからず、諸善根得べからず、阿耨多羅三藐三菩提に廻向するも、亦た得べからざればなり。是の中に於いて、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時、應に是の如く思惟すべし、「諸の過去の佛及び弟子の身は皆な滅し、諸の善根も亦た滅す。我れ今相を取りて、諸佛の諸善根及び諸心を分別し、是の如く相を取つて阿耨多羅三藐三菩提に廻向するは、諸佛の許さざる所なり」と。何となれば、取相は有所得なるが故なり。所謂過去の諸佛に於いて、相を取りて分別す。是の故に、菩薩摩訶薩は、諸善根を以て、阿耨多羅三藐三菩提に廻向せんと欲するも、得ること有るべからず、相を取るべからず、是の如く廻向す。若し取相を得ること有りて、諸佛は廻向せば、大利益ありと説かず。何となれば、是の廻向は、毒を雜ふるが故なり。譬へば美食に毒を

諸佛等の、隨喜の功德を憶念す。後心は是れ廻向心なり。若し是の此く廻向するは、是を正廻向と名く。

問うて曰はく、初心と後心は、是れ生滅の相にして、無常なる可し。所廻向の處の法は、是れ無上道にして、未來世の中に在り。云何なれば盡滅すと言ふや。

答へて曰はく、汝は我が先の答を聞かず。無常門に入りて、法性の中に到る。此の中、盡く是れ無常なりとは説かず。但だ諸法實相は是れ盡と説く。先に亦た阿耨多羅三藐三菩提は、三世を出で三界を過ぎ、無受の相なりと説く。能く是の如く廻向する、是を正廻向と爲す。

復次に、正に非ず邪に非ざるの廻向とは、所謂菩薩は過去の諸佛の善根等、乃至無上無與等に於て、無上道に廻向す。若し菩薩、是の事の皆な盡滅するを知り、廻向處の法も亦た自性空なることを知る。能く滅を知り空を知るは、是れ眞の廻向なり。若し過去の法は無常なり。無常なるが故に自性空法の中に廻向す可からず。若し過去の法は空なり。空なるが故に、自性空法の中に廻向すべからず。是の如き智慧を用つて廻向するは、是を正廻向と名く。

復次に、若し菩薩は、一切法は因縁生なるが故に、自力常住、自法相、不動なること無きを知る。況んや能く所作あらんや。所作なきが故に、一切法の中に、法として能く廻向すること無し。是を正廻向と名く。是の如く菩薩は般若波羅蜜等の諸の善法を行すと雖も、亦た顛倒に墮せず。(夫は)一切法に著せざるが故なり。

【經】復次に、若し菩薩摩訶薩は、所起の福德、五衆、十二入、十八界を離るるを知り、亦た般若波羅蜜も是れ相を離れ、乃至檀波羅蜜も是れ相を離れ、內空乃至無法有法空も是れ相を離れ、四念處乃至十八不共法も是れ相を離るるを知る。是の如く、菩薩摩訶薩は、隨喜心して福德を起し、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。

復次に、若し菩薩摩訶薩、隨喜の福德には隨喜の福德の自性を離るるを知り、亦た諸佛も佛性を離れ、

るが故に、是れ重擔なり。五衆に二種の捨あり。一には、有餘涅槃の中に（入りて）、五衆の因縁、諸の煩惱を捨す。二には、無餘涅槃の中に入りて、五衆の果を捨す。一切の白衣の舎を名けて、聚落と爲す。出家の人は白衣の舎に依りて活く。而も白衣の舎に五欲の刺あり。食の爲の故に、惡刺の果林に來入し、果を取るを以ての故に、刺の爲に刺る。如し人、木履を著けて刺を踐めば、刺は即ち摧折す。是の如く諸佛の禪定智慧の履を以て五欲の刺を摧きたまふを、下分の五結を滅斷すと名け、有分の結盡るを、上分の五結を斷すと名け、諸法實相・金剛三昧、相應の智慧もて、一切の煩惱及び習を斷するが故に、正智もて解脱を得と言ふ。是等の如きは、皆な過去の諸佛を讚歎したてまつると名く。及び弟子の所作の功德とは、佛弟子に三種あり。（即ち）菩薩・辟支佛・聲聞なり。刹利の大姓、乃至淨居天には是の中に善根を種うる者なり。是の四種の福田は、是に因りて福德を種うる處なり。是の福德を和合して稱量するに、隨喜の心は最上にして、與に等しきもの無く、無上道に廻向す。是の廻向心は、正にして邪に非すと作す。所以何となれば、今、彌勒、須菩提に問ふ、「若し新發意の菩薩は、諸佛等の功德を念じて、無上道に廻向す。云何なれば顛倒に墮せざるや」と。須菩提の答ふ、「若し是の菩薩は、般若波羅蜜の方便力を以ての故に、諸佛に於いて佛想及び弟子の想を生ぜず、諸の善根の中に（於て）善根の想を生ぜず。一切法は和合より生じて、自性あること無きが故に、定法あること無し、（是を）名けて佛と爲す。是の故に佛等の想を生ぜず、是の廻向心も亦た心想を生ぜず。是の故に菩薩は顛倒に墮せず。上と相違すれば即ち顛倒に墮す。

復次に、菩薩は是の心を以て、諸佛等及び諸の善根を念じ、是の心の盡るとき、即ち盡ることを知る。盡きたる心は、廻向することを得ず。何となれば變失滅壞すればなり。是の心も亦た無常門に入り、法性の中に至る。法性の中には、是は心、是は非心、是は佛、是は弟子、是は善根、是は無上道と分別することあること無し。廻向心、廻向處の盡る相も、亦た是の如し。初心は是れ過去

者の爲に説くべし。是の二種の人は聞いて能く信行す。已に正廻向の因縁を説くすら、猶ほ空法を説く。是の故に帝釋は疑つて言はく、「是の衆中に新發意の者あり、云何なれば更に説いて恐怖せざらしむるや」と。須菩提、彌勒の所説を成ぜんと欲し、新發意の者をして、應に正しく廻向すべからしめんと欲するが故に、帝釋に答ふらく、「若し新發意の菩薩、久しく六波羅蜜を行ぜず、諸佛を供養したてまつらずと雖も、而も利根を以て善知識を得。是の二因縁の故に正廻向に堪任す」と。是の故に、帝釋に語るらく、「新發意の菩薩は、般若波羅蜜を行じて、是の般若を受けず。無所得なるを以ての故に、畢竟空なるが故なり」と。般若波羅蜜も亦た得ず、亦た著せず。乃至檀波羅蜜も亦た是の如し。多く内空を信解する者は、常に内空三昧を修樂し、入觀するが故に信解す、乃至十八不共法を多く信解するも亦た是の如し。善知識の相は先に説くが如し。此の中に但だ明に能く六波羅蜜の義に隨つて説く。是の義を聞き已りて、常に般若波羅蜜を離れず、乃至菩薩の法位に入ることを得。久しく行ふこと有りて菩薩位に入り、(或は)新發意ありて菩薩位に入る。

復次に、是の新發意の菩薩に、善知識は爲に魔事を説くに、魔事を聞き已りて、増さず減らず。善く諸法の實相を修習するを以ての故なり。若し魔破せんと欲せば、空を破せんと欲すと爲す。空なれば則ち破すること無く、若し増益すること有るも、幻の如く、夢の如し。何ぞ増益する所あらんや。是の故に不増不減と説くなり。是の因縁の故に、常に諸佛を離れたてまつらず、常に菩薩の家に生れて、世世に、善根、乃至無上道を離れず。是の新發意の菩薩は、是の如き因縁を得れば、久しく意を發する(もの)と異なること無し。

復次に、隨喜し廻向す。所謂る新發意の菩薩は、過去十方無量阿僧祇の世界の中に於ける諸佛の道を斷ずとは、生死の道を斷じて、無餘涅槃に入り、諸の戲論を斷ずるが故に、諸の戲論を滅すと云ふ。(夫は)空空等の三昧を以て八聖道分を捨するが故に、道を盡すと言ふ。五衆は能く苦惱を生ず

隨喜せる功德は最上第一、最妙無上にして、與に等しき者なく、隨喜し已りて、應に阿耨多羅三藐三菩提に廻向すべくんば、云何にして菩薩は、想顛倒・心顛倒・見顛倒に墮せざるや」と。須菩提の言はく「若し菩薩摩訶薩、諸佛及び僧を念ずれば、是の中に於いて、佛想を生ぜず、僧想を生ぜず、善根の想なし。是の心を用つて阿耨多羅三藐三菩提に廻向す、是の心中にも亦た心想を生ぜず。菩薩は是の如く廻向せば、想顛倒せず、心顛倒せず、見顛倒せず、若し菩薩摩訶薩、諸佛及び僧の善根を念じて、想を取り、相を取り已りて、阿耨多羅三藐三菩提に廻向せば、菩薩の是の如きを名けて、想顛倒・心顛倒・見顛倒と爲す。若し菩薩摩訶薩、是の心を用つて、諸佛及び僧の諸の善根を念ぜば、是の心を念ずる時、即ち盡滅を知る。若し是の法を盡滅すれば、廻向することを得べからず。用ふる所の廻向心も、亦た是れ盡滅の相なり、所廻向の處の法も、亦た是の相の如し。若し是の如く廻向せば、是を正廻向と名く。邪廻向に非ず。菩薩摩訶薩は、應に是の如く、阿耨多羅三藐三菩提に廻向すべし」と。

復次に、若し菩薩摩訶薩、過去の諸佛の善根、及び弟子の善根、是の中に凡夫人の法を聞いて種うる善根、若くは諸天・龍・夜叉・犍闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽の法を聞いて種うる善根、若くは刹利の大姓、婆羅門の大姓、居士の大家、四天王天、乃至阿迦尼吒天の法を聞いて種うる善根、阿耨多羅三藐三菩提心を發すもの、是の一切の福德を和合し稱量するに、隨喜せる福德は最第一、最妙無上にして、與に等しき者なく、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是の時、菩薩、若し是の如く是の諸法盡滅し、所廻向の處、及び是の法も、亦た自性空なりと知り、能く是の如く廻向せば、是を眞に阿耨多羅三藐三菩提に廻向すと名く。

復次に、若し菩薩、是の如く法あること無きを知らば、其く法を廻向す。何となれば、一切法の自性は空なるが故なり。若し是の如く廻向せば、是を正しく阿耨多羅三藐三菩提に廻向すと名く。是の如く菩薩摩訶薩、般若波羅蜜乃至檀波羅蜜を行ずれば、想顛倒・心顛倒・見顛倒に墮せず、何となれば、菩薩は、是の廻向に著せず、亦た諸の善根を以て菩提心に廻向する處を見ざればなり。是を菩薩摩訶薩の無上廻向と名く。

【論】問うて曰はく、新發竟の菩薩は、是の事を聞いて、將に怖畏し驚懼する者なからんとするやと、此の義は先に已に問答せり。今何を以てか復た問うや。

答へて曰はく、上に彌勒は須菩提に語ると雖も、新學の爲に説くべからず、阿鞞跋致及び久行の



なること無し」と。是の故に經の中に説かく、「是の心を用つて廻向するに是の心は即ち盡滅し、是の如き等は過去世に入るが故に、諸法實相に入るが故に、是の心、是の縁、是の事、是の善根等を分別すること有ること無し。若し能く是の如く廻向すれば、是を正廻向と爲す」と。

復次に、一時に二心は和合せず。隨喜心の時は、菩提心なし。一切の心相は畢竟空なり、取相を以て廻向すべからず、何となれば、菩薩は、般若波羅蜜の空にして、定法あること無く、般若波羅蜜の如く、一切法、乃至、無上道も亦た是の如きことを知り、是の時、法愛を斷じ、著心を捨て、空に於いて淨なし。是を菩薩の正廻向と名くるなり。

【經】爾の時、釋提桓因、須菩提に語るらく、「新發意の菩薩は、是の事を聞いて、將に驚懼怖畏なからんや。須菩提よ、云何なれば新發意の菩薩は、諸の善根を作して、阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、復た云何なれば福徳を隨喜し、阿耨多羅三藐三菩提に廻向するや」と。須菩提、釋提桓因に語るらく、「若し新發意の菩薩は、般若波羅蜜を行ずるも、是の般若波羅蜜を受けず。所得なきを以ての故に、無相の故に。乃至檀波羅蜜も亦た是の如し。多く内空を信解し、乃至多く無法有法空を信解し、多く四念處乃至十八不共法を信解し、常に善知識と相隨ふ。是の善知識は爲に六波羅蜜の義を説き、開示し、分別し、是の如く教授して、常に般若波羅蜜を離れざらしめ、乃ち菩薩の法位に入るを得るに至るまで、終に般若波羅蜜を離れず、乃至檀波羅蜜を離れず、四念處乃至十八不共法を離れざらしめ、亦た魔事を語らしめ、種種の魔事を聞き已りて、増さず、減らず、何となれば、是の菩薩摩訶薩は、一切法を受けざるが故なり。是の菩薩は亦た常に諸佛を離れず、乃至菩薩の位を得、中に於いて善根を種う。是の善根を以ての故に、菩薩の家に生じ、乃ち阿耨多羅三藐三菩提を得るに至るまで、終に是の善根を離れず。

復次に、新發意の菩薩摩訶薩は、過去十方無量無邊阿僧祇の世界の中に於ける、諸佛の生死の道を斷じ、諸の戲論の道を斷じ、盡く重擔を棄て、棄落の刺を滅し、諸有の結を斷じ、正智もて、解脱を得、及び弟子の所作の功徳の中に於いて、若くは刹利の大姓、婆羅門の大姓、居士の大家、四天王天、乃至淨居天の種うる所の善根、是の一切を和合し稱量するに、隨喜心は、最上にして第一、最妙にして無上、與に等しき者なきを以て、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す」と。

爾の時、彌勒菩薩、須菩提に語るらく、「若し新發意の菩薩摩訶薩、諸佛及び弟子の諸の善根を念じ、

にして、過去の諸佛・諸縁・諸事・諸善根の中に相を取らず。能く隨喜の心を起し、無相を用つて、無上道に廻向す。無相とは、能く不二・非不二法、乃至不生・不滅等を用ふ。上と相違せば、是を廻向すること能はずと名く。彌勒は須菩提の樂んで空を説くことを知るが故に、語りて言はく、「是の如き般若波羅蜜の隨喜の義は、新學の菩薩の前に説くべからず。何となれば若し少福德あり善根ある者は、是の畢竟空の法を聞けば、即ち空に著して、是の念を作さん。」若し一切法は畢竟空にして所有なくんば、我れ何すれぞ福德を作さん」と。即ち前業を忘失すればなり。是を以ての故に、新發意の菩薩には、先づ相を取る隨喜を教へ、漸く方便力を得て、爾して乃ち能く無相の隨喜を行す。譬へば、鳥子の羽翼未だ成らざれば、逼ひて高く翔けしむ可からず、六翻成就すれば、即ち能く遠く飛ぶが如し。阿鞞跋致の菩薩は、法位に入りて、法忍を得れば、能く信じ、能く行するが故に、爲に説くべし。若し久しく六波羅蜜を行すること有り、善知識と相隨ひ、内の福德と外の因縁の力に助けらるれば阿鞞跋致に非すと雖も、能く信じ能く行す。是の二種の人は、是を聞き、心清淨にして、歡喜し信受す。久しく飢渴せる者の好き飲食おんじきを得るが如く、大熱に涼を得、大寒に温を得て、其の心愛樂し歡喜するが如し。是の二菩薩も亦た是の如く、是の無相の智慧を得て、是の念を作さく、「我れ是の智慧に因りて、能く無量の衆生を度す。何に況んや、驚懼恐怖あらんや。恐怖は我の心中より出づ。是の法中には、諸法の法相すら尙ほ空なり。何に況んや、我あらんや」と。而も決定して諸法の相を取り、一切法の無相を聞けば、則ち驚懼を生ず。是の隨喜の義體を説き竟りて、後に當に更に種種の異門を以て、上の事を釋すべし。

復次に、須菩提よ、菩薩は應に是の如く思惟すべし、「是の心を用つて、無上道に廻向す。是の心は、念念に盡滅し、變離して、住する時あること無く、是の諸の縁と事とは、所謂、過去の諸佛、及び諸の善根、諸佛等の諸の縁と事として、久しく已に滅し、隨喜の心も今滅し、既に滅して異

べからず。何となれば、是の菩薩は、所有の少許の信樂、恭敬、清淨心、皆な忘失すればなり。當に阿鞞跋致の菩薩摩訶薩の前に在りて説くべし。若くは善知識の爲に護られ、若くは久しく諸佛を供養したてまつり、諸の善根を種うるあり。應に是の人の爲に是の如きの般若波羅蜜の義乃至一切種智の義、所謂内空乃至無法有法空を説くべし。是の人は是の法を聞いて、没せず、驚かず、畏れず、怖おそかさざればなり。須菩提よ、菩薩摩訶薩は福德を隨喜して應に是の如く阿鞞多羅三藐三菩提に廻向すべし。所謂菩薩は心を用ゐて隨喜の功德を阿鞞多羅三藐三菩提に廻向す。是の心、盡く滅し變離すれば、是の緣、是の事、是の諸の善根も亦た盡く滅し變離す。是の中、何等か是れ隨喜心、何等か是れ諸緣、何等か是れ諸事、何等か是れ諸善根ありて、阿鞞多羅三藐三菩提に隨喜廻向せんや。二心俱ならず。是の心性も亦た廻向を得べからず。菩薩、云何ぞ隨喜心も阿鞞多羅三藐三菩提に廻向せんや。若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、是の如く、是の般若波羅蜜法あること無く、乃至檀波羅蜜も亦た法あること無く、色法あること無く、受想行識乃至阿鞞多羅三藐三菩提も法あること無しと知る。菩薩摩訶薩は應に是の如く功德を隨喜し、阿鞞多羅三藐三菩提に廻向すべし。若し能く是の如く廻向せば、是を功德を隨喜して阿鞞多羅三藐三菩提に廻向すと名く。

【論】釋して曰はく、彌勒は意へらく、「諸法は甚深隨喜心は微妙なるを以て、所謂、諸の法相を壊せずして、而も隨喜心を無上道に廻向する、是の事は甚だ難く。凡夫の人は、心剛強にして、是の法を行すること能はず」と。是の故に彌勒答へて言はく、「行者は久しく六波羅蜜を修すれば、諸の功德深厚なるが故に動ぜず。所謂、能く信じ能く行じ、多く諸佛を供養したてまつり、善根を種うるが故に無量無邊阿僧祇の功德を集め、結使しやくじんを折損し、其の心柔軟なり。此は是れ先世の因縁もて、今世に好師、好同學を得、亦た自らも諸法實相の空を學し、巧方便の故に是の空に著せず」と。是の如き等の種種の無量の因縁の故に、諸法は無相なりと雖も、而も能く隨喜心を起して、無上道に廻向す。譬へば、鐵は堅韌なりと雖も、爐に入るれば、則ち柔軟にして、隨つて何なる器をも作るが如し。菩薩の心も亦た是の如く、久しく六波羅蜜を行じ、善知識に識らるるが故に、其の心調柔

るや」と。「顛倒」とは、四顛倒にして三種の分別あり。此の顛倒は是れ譬喩なり。佛なくして、而も憶想して佛を念ずるは、猶ほ無常なるを而も常と念じ、不淨なるを而も淨と念ずるが如し。

問うて曰はく、見を諸の顛倒の本と爲す。初道を得る人の、能く想・心顛倒を起して、見顛倒なきが如きは、見諦道斷なるを以ての故なり。

答へて曰はく、是の顛倒は、生時異なり、斷時異なれり。生する時は想前に在りて、次は是れ心、後は是れ見なり。斷する時は先づ見を斷す。見諦もて斷する所なるが故なり。顛倒の體は、皆な是れ見相にして、見諦もて斷する所なり。「想・心顛倒」とは、學人は未だ欲を離れず、憶念するも忘るるが故に、淨相を取り、結使を起し、還つて正念を得れば即時に滅す。經中の譬喩の如し。「沛水も大熱の鐵上に墮つれば、即時に消滅するが如し」と。小なる錯なるが故に、假に顛倒と名くるも、實の顛倒に非ず。是の故に、凡夫の人には、三種の顛倒、學人には、二種の顛倒を説くなり。

復次に、諸緣、諸事は、實に畢竟空なるが如く、念も亦た空、菩提も亦た空、隨喜心も亦た空、檀波羅蜜、乃至十八不共法も亦た空なり。若し諸法は一相、所謂、無相ならば、此の中に何等か是れ緣、何等か是れ事、何等か是れ心にして、無上道に廻向せん。

【經】彌勒菩薩、須菩提に語るらく、「若し諸の菩薩摩訶薩、久しく六波羅蜜を行じ、多く諸佛を供養し上り、善根を種ふ、善知識と相隨ひ、善く自相空法を學せば、是の諸の菩薩、是の緣、是の事、諸佛の諸善根、隨喜の福徳相を取らずして、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。不二法を以てして、不二法に非ず、相に非ず、不相に非ず、可得法に非ず、不可得法に非ず、淨に非ず、垢に非ず、生にあらざり、滅にあらざる法、是を阿耨多羅三藐三菩提に廻向すと名く。若し諸の菩薩、久しく六波羅蜜を行ぜず、多く諸佛を供養せず、善根を種ふ、善知識と相隨はず、善く自相空法を學せずんば、是の諸の菩薩、是の諸緣、是の諸事、諸佛の諸善根、隨喜の福徳、諸心の相を取りて、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す、是を廻向と名けず。須菩提よ、是の如きの般若波羅蜜の義、乃至一切種智の義、所謂内空乃至無法有法空は、乃至新學の菩薩の爲に説く

を求むる人とは、總じて凡夫の聖人なり。今の學・無學とは、純ら是れ聖人なり。相好は是れ無記の色法にして、是れ善功德に非ざるが故に、但だ佛を説くのみ。五無學衆・大慈大悲・佛法の義は、初品の中に説くが如し。

「諸佛所説の法、是の法を學して須陀洹果を得、乃至菩薩の位に入る」とは、是の佛の滅度の後、遺法の中に得道す。是の故に重ねて説く。「及び餘の衆生の諸の善根を種う」とは、此は是れ佛在世及び遺法の中の天人乃至畜生の種種の福德の因縁なり。是の上の四段の福德をば、行者は心に遍ねく縁じ、憶念し隨喜して、佛道を求むるが故に廻向するを無上の隨喜と名く。最上にして與に等しきもの無きなり。

問うて曰はく、佛道を求むる者にして、何を以てか、自ら功德を作さずして、而も心に隨喜を生ずるや。

答へて曰はく、諸の菩薩は、方便力を以て、他を勤勞して功德を作し、能く中に於いて隨喜を起さば、(その)福德自ら作者に勝る。

復次に、是の隨喜の福德は、即ち是れ實の福德なり。所以何となれば過去の佛を念ずるは、即ち是れ念佛三昧なり。亦た是の六念中にも念佛・念法・念僧・念戒・念捨・念天等あり。清淨戒を行するに因りて禪定に入り、畢竟の智慧を起して和合するが故に、能く正しき隨喜を起す。是の故に但だ隨喜するのみにあらず、亦た是の實法をも行す。是の心、廻向すとは、即ち是れ隨喜の心なり。

「縁す」とは、隨喜の心の縁する所にして、所謂、一切諸佛及び一切衆生の作す所の功德なり。「事」とは、是れ縁する所の本なり。福德は是れ縁にして、功德の所住の處、所謂、諸佛及び衆生、併に土地・山林・精舍・住處を皆な事と名く。「念ずる所の如く得べきや不いなや」。彌勒答へて曰はく、「不なり」と。須菩提、彌勒に語るらく、「若し諸事・諸縁にして所有なくんば、云何にして顛倒に墮せざ

劫の諸佛は、久しく已に滅度して、復た遺餘なく、菩薩は或は宿命智なく、或は有るも而も及ぶこと能はず。但だ聞く所の如く、憶想分別するを以ての故に、念する所の如くならず。二には、諸佛及び功德は、三界を出で三世を出で、戲論語言の道を斷じて、涅槃の相の如く、畢竟空にして清淨なり。隨喜する者は、諸佛及び諸の弟子の善根功德を分別し、是の廻向心及び無上道は、實に非ざるが故に不なりと言ふなり」と。須菩提の難じて言はく、「若し是の事なくんば、是の菩薩の憶想分別は、應に顛倒に墮すべし。若し是の事、畢竟空にして清淨の相ならば、憶念も亦た是の如くならん、諸の過去の佛の功德も亦た是の如く、分別なく異なること無し。云何ぞ隨喜することを得ん」と。是は略して義を説く、廣くは則ち經に説くが如し。所謂、須菩提・彌勒に問ふ。若し菩薩摩訶薩は、過去の十方無量無邊阿僧祇の世界の中の諸の滅度の佛を憶念したてまつるとは、是の菩薩は隨喜の福德を起さんと欲す。佛は是れ福德の主なり。是の故に佛を念す。經書の説を聞きて、過去の佛名あるが故に、是の名に因つて、廣く一切の過去の諸佛を念す。初發心よりは、初發心に願を作す、「我れ當に一切衆生を度すべし」と。是の心は、三善根、不貪・不瞋・不癡の善根に相應し、諸の善法及び善根の起す所の身心口業に相應し、是の法に和合するを名けて福德と爲す。初發心より六波羅蜜を行じて菩薩位に入り、十地を得、乃至道場に坐す。是の中の菩薩は、自ら福德を修し、和合して佛道を得、乃至無餘涅槃に入る。滅度の後の舍利及び遺法は、皆な是れ佛自身の功德の和合なり。諸佛に因りて大乘の人は六波羅蜜に相應する福德を行す。相應とは、六波羅蜜を除きて、餘の菩薩の所行の法は、皆な六波羅蜜の中に攝入するが故に、六波羅蜜に應じて和合すと説く。若し聲聞・辟支佛を求むる人は、布施・持戒・修定等の福德を種う。聲聞・辟支佛に二種あり、(即ち)一には漏の盡きて無學と名くるもの、二には道を得るも、漏未だ盡きずして名けて學と爲すものなり。是の二人は、諸の福德の中にて、善根勝るるが故に、但だ善根のみと説く。上に言ふ二乘

阿僧祇の衆生を度し、般涅槃の後、身を碎いて、舍利に人の供養を與へ、久しうして後、皆な道を得せしむ。是の果報は、一切衆生に與ふべく、果中に因を説くを以ての故に、福德を衆生と共にすと言ふ。若し福德は以て人に與ふべしとは、諸佛は初發心より、集むる所の福德を、盡く人に與ふべく、然る後に更に善法の體を作りて人に與ふべからず。今は直に無畏・無惱を以て、衆生に施與す、無所得を用ふるが故にとは、「此の」義は先に説くが如し。是を菩薩摩訶薩の隨喜の福德と名く。一切の聲聞・辟支佛、及び衆生の三種の福德の中に比するに、最勝・最上・第一・最妙・無上にして、與に等しきもの無し。(此の)義は先に説くが如し。是の中に勝れる因縁を説く

是の二乗の福德は、皆な自調・自淨・自度の爲なりとは、持戒は是れ自ら調へ、修禪は是れ自ら淨め、智慧は是れ自ら度す。

復次に、自調とは、正語・正業・正命なり。自淨とは、正念・正定なり。自度とは、正見・正思惟・正方便なり。

復次に、布施の因縁の故に自ら調へ、持戒の因縁の故に自ら淨め、修定の因縁の故に自ら度す。修定は是れ無漏法の近因縁なり。無漏とは、所謂、三十七品、三解脱門等なり。布施・持戒は遠きが故に解せず。菩薩の隨喜の福德は、勤勞無しと雖も、一切衆生を度するが爲の故に勝れり。

問うて曰はく、實に一切衆生を度せず、何を以てか、一切衆生を度するが故に、勝れりと言ふや。

答へて曰はく、諸佛、菩薩の功德力は、能く一切衆生を度す。但だ衆生に和合の因縁なきを以ての故なり。譬へば、大火には常に燒く力あり。但だ薪近からざるを以ての故に燒くを得ざるも、近ければ則ち能く燒くが如し。爾の時に、須菩提は、畢竟空の智慧を以て、彌勒菩薩を難問すらく「諸佛を念じ、福德を隨喜し、無上道に廻向する、是の念する所は過去の事なり。是の事は念する所の如くなるや不いなや」と。彌勒は二の因縁を以ての故に答へて言はく、「不いななり、一には、過去無量阿僧祇

鬪なり。能く福德を修行し、道を行する人は、一切衆生に共に尊重・愛敬せらる。譬へば、熱時には清涼なる満月を楽しみ仰がざること無きが如く、亦た大會の集りを告ぐるや、伎樂餽饌、畢備せざること無く、遠近の諸人、咸く共に欣び赴くが如く、修福の人も亦復た是の如し。福德に二種の樂の因縁あり、世間と出世間なり。出世間とは、諸の無漏法は福報なしと雖も、能く福德を生ずるが故に福德と名く。是の故に有漏・無漏を通じて福德と名く。

復次に、福德は、是れ菩薩摩訶薩の根本にして、能く所願を滿じ、一切の聖人の讚歎する所、無智の人の毀皆する所、智人の所行の處、無智の人の遠離する所なり。是の福德の因縁の故に、人王・轉輪聖王・天王・阿羅漢・辟支佛・諸佛・世尊と作り、大慈大悲・十力・四無所畏・一切種智・自在無礙は、皆な福德の中より生ず。是の如き等の種種の福德もて、正見を得るが故に、隨つて歡喜す。

復次に、菩薩は自ら念ずらく、「我れ應に一切衆生に樂を與ふべし」と。而して衆生は能く自ら福德を行す。是の故に心に歡喜を生ず。

復次に、一切衆生の善を行するは、我と相似す、是れ我の同伴なり。是の故に隨喜す。諸の菩薩摩訶薩は、十方三世の諸佛、及び菩薩、聲聞、辟支佛、及び一切修福の衆生の布施・持戒・修定・慧に於いて此の福德の中に於いて隨喜の福德を生ず。是の故に隨喜と名く。是の隨喜の福德を持し、一切衆生と共に、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。

「一切衆生と共に」とは、是の福德は、一切衆生に與ふることを得べからず、而も果報を與ふべし。菩薩は既に福德の果報を得、衣服・飲食等の世間の樂具を以て、衆生を利益し、菩薩は福德清淨なる身口を以て、人に信受せられ、衆生の爲に說法して十善道・四禪等を得せしめ、與に後世の利益を作し、末後に成佛するに福德の果報を得、身に三十二相・八十種の隨形好・無量の光明ありて、觀る者は厭ふこと無く、無量の清淨なる、梵音・柔和・無礙解脫等の諸の佛法は、三事に於いて示現し、無量

【二】「三事」聖本「三乘」に作る。



るらく、「若し諸事、諸緣所有なくんば、是の善男子の菩薩乘を行ずる者、相を十方の諸佛の諸の善根、初發心より乃ち法の盡くるに至るまで、及び聲聞の諸の善根、學・無學の善根に取り一切和合せる、隨喜の功德を、阿耨多羅三藐三菩提に廻向するは、無相を以ての故に、是の菩薩は將に顛倒なからんか、無常を常と謂ふは、想顛倒・心顛倒・見顛倒なり。不淨を淨と謂ひ、苦を樂と聞ひ、無我を我と謂ふは、想顛倒・心顛倒・見顛倒なり。若くは緣の如く、事の如く、阿耨多羅三藐三菩提となすも、亦た是の如し。廻向心も亦た是の如く。檀波羅蜜、尸羅・羼提・毘梨耶・禪・般若波羅蜜乃至十八不共法も、亦た是の如くならん。若し爾らば、何等か是れ緣、何等か是れ事、何等か是れ阿耨多羅三藐三菩提、何等か是れ善根、何等か是れ隨喜の心もて、阿耨多羅三藐三菩提に廻向するや」と。

【論】釋して曰はく、先の七品の中に、佛は須菩提に命じて、般若を説かしめたまひ、中間には、帝釋は多く問ひ、多く功德の事を説き、今、彌勒は佛の本意に順じ、還つて須菩提をして、隨喜の法に因らしめんと欲して、廣く般若波羅蜜を説くなり。

復次に、帝釋は、上に般若を供養するに、華香・妓樂・幡蓋の具を以てすれば、福を得ること甚だ多きことを聞いて、深く自ら慶幸すらく、「此の供養の具は、唯だ我等のみ能く辦す、出家の人の所々に非ず」と。是の故に、彌勒は其の自ら多しとするの情を抑へんと欲するが故に、須菩提に語るらく、「菩薩は但だ心に隨喜するを以て、則ち聲聞・辟支佛、一切衆生の布施等、及び諸の無漏の功德に勝れり。何に況んや、華香を以て、經卷等に供養することに對してをや」と。菩薩摩訶薩の義は、先に説くが如し。

「福德を隨喜す」とは、身口業を勞せずして、諸の功德を作し、但だ心の方便を以て、其の修福を見るのみにして、隨つて歡喜し、是の念を作すなり。「一切衆生の中、能く福を修し、道を行ずる者を最勝と爲す。若し福德を離るる人は、畜生と同じく三事を行す」と。「三事」とは、姪欲・飲食・戰

# 卷の第六十一

## 第三十九 隨喜迴向品

【經】爾の時に、彌勒菩薩摩訶薩、慧命須菩提に語るらく、「菩薩摩訶薩あり、福德を隨喜し、一切衆生と之を共にし、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。(そは)所得なきを以ての故なり。若くは聲聞辟支佛の福德、若くは一切衆生の福德、若くは布施、若くは持戒、若くは修定、若くは隨喜よりも、是の菩薩摩訶薩の福德を隨喜して一切衆生と之を共にし、阿耨多羅三藐三菩提に廻向するは其の福最上第一最妙無上にして、與に等しき者なし。何を以ての故に、聲聞・辟支佛、及び一切衆生の布施・持戒・修定・隨喜は、自調の爲、自淨の爲、自度の爲の故に〔起す。〕所謂、四念處、乃至八聖道分・空・無相・無作なり。菩薩の福德を隨喜し阿耨多羅三藐三菩提に廻向するは、是の功德を持つて、一切衆生を調へんが爲め、一切衆生を淨めんが爲め、一切衆生を度せんが爲めの故に起せばなり」と。

爾の時、慧命須菩提、彌勒菩薩に白して言さく、「諸の菩薩摩訶薩は、十方無量無邊阿僧祇の世界の中の、無量無邊阿僧祇の諸の滅度せる佛を念じ、是の佛の初發心より、阿耨多羅三藐三菩提を得るに至り、乃至無餘涅槃に入り、乃ち法を盡すに至るまで、其の中間に於ける、諸の善根六波羅蜜に應じ、及び諸の聲聞人の善根、若くは布施の福德、持戒、修定の福德、及び諸の學人の無漏の善根、無學人の無漏の善根、諸佛の戒衆、定衆、慧衆、解脫衆、解脫知見衆、一切智、大慈大悲、及び餘の無量阿僧祇の諸佛の法、及び諸佛の所説の法、是の法の中に學びて須陀洹果を得、乃至阿羅漢果、辟支佛道を得、菩薩摩訶薩の位に入り、及び餘の衆生の種うる諸の善根、是の諸の善根の一切を和合せる隨喜の福德を、阿耨多羅三藐三菩提に廻向せば、最上第一、最妙無上にして與に等しきもの無し。是の如く隨喜し已りて、是の隨喜の福德を持つて、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。若し善男子ありて、菩薩乘を行ずる者は、是の念を作す、我が是の心、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す、是れ心を生じ事を緣するなり。若し善男子、相を取りて、阿耨多羅三藐三菩提に廻向せば、念ずる所の如く得べきや不や」と。

彌勒菩薩、須菩提に語るらく、「是の善男子、菩薩乘を行じて、阿耨多羅三藐三菩提に廻向する心は、是れ事を緣するなり。若し善男子、相を取らば、念ずる所の如くなることを得ず」と。須菩提、彌勒菩薩に語

【一】聖・石等諸本は唯だ「隨喜品」に作る。

菩薩の因縁なければなり。十善道、乃至無量の佛法、世に出現す。是の故に三惡道を斷じ、刹利の大姓、乃至諸佛ありて、世に出現す。是の故に、菩薩の般若波羅蜜の正義を説き、佛道に近づくを教ふる福德は最も大なり。<sup>三</sup>

【三】石本は「第三十七品を釋し竟る」を附加す。

答へて曰はく、般若の正義を説くに、二種あり。一には生死肉身の菩薩、二には三界を出でたる不生不死の法性生身の菩薩なり。是の菩薩は、但だ阿鞞跋致を過ぐる菩薩の事を説く。所謂、衆生を教化し、佛世界を淨め、一切衆生の三世無量劫の心、行業の因縁を分別し、諸の世界の起滅、成敗、劫數の多少、大慈大悲、一切智等の無量の諸の佛法を分別す。是の一人の説法は、聞浮提、乃至如恆河沙世界の衆生を教へて、發心せしむるに勝れりと爲し、又復た阿鞞跋致に至り、阿鞞跋致より已上、佛道に至るの中間に、更に一人あり、佛道に近づき、疾かに成佛せんと欲す。是の人に般若波羅蜜の正義を教ふる者は、其の福最も多し。何となれば、福田大なるが故に、福德も亦た大なればなり。譬へば、一切十方の如恆河沙等の世界の聖人、乃至道場に坐せんと欲する菩薩を供養するは、一佛を供養したてまつるに如かざるが如し。譬へば、太子を犯して得る罪は、一切の人を犯す(罪)に過ぎ、若し太子を供養して得る恩は、一切の凡人を供養するに勝り、若し國王を犯して得る罪は、太子を犯す(罪)に過ぎ、若し國王を供養するは、太子を供養するに勝るが如し。是の如く、疾く作佛に近づき菩薩を教化供養するは、如恆河沙等の阿鞞跋致の菩薩を供養教〔化〕する功德に勝る。何となれば、福田深厚にして、其の法は能く衆生をして、增長せしむればなり。

爾の時、帝釋は、是の法力の大なることを〔了〕知するが故に、佛に白して言さく、「菩薩は轉轉して無上道に近づく。是の如きを教化供養する功德は、轉た多かるべし」と。爾の時、須菩提、帝釋を讃じて言はく、「善い哉、善い哉、汝は能く諸の菩薩の、阿耨多羅三藐三菩提の爲にする者を、慰安し勸進するに、財法の二施を以てす」と。財施とは、供養の具、衣食等なり。法施とは、所謂六波羅蜜を教ふる等なり。帝釋は道を得るが故に名けて聖弟子と爲す。聖弟子の法は、應に等しく諸の菩薩を安慰し勸進すべし。是の中に因縁を説けり。是の諸の聖衆は、皆な菩薩の中より出づ。何となれば、若し菩薩にして、六波羅蜜を行ぜず、無上道を成ぜざれば、則ち須陀洹、乃至辟支佛、

を教ふへし。亦た應に衣服・臥具・飲食・湯藥を其の須ふる所に隨つて供養すべし。是の善男子善女人、法施財施をもて是の菩薩に供養せば、得る所の功德は前者に勝れり。何となれば、世尊よ、是の菩薩摩訶薩は、疾く阿耨多羅三藐三菩提を得ればなり」と。

爾の時、慧命須菩提、釋提桓因に語りて言はく、「善哉、善哉、憍尸迦よ、汝を聖弟子と爲す。諸の菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提を爲す者を安慰し、法施財施を以て、法の應に爾るべきを利益す。何となれば、菩薩の中に、諸佛聖衆を生ずればなり。若し菩薩にして、阿耨多羅三藐三菩提心を發さざる者は、是の菩薩は、六波羅蜜乃至十八不共法を學すること能はず。若し六波羅蜜乃至十八不共法を學せざれば、阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず。若し阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はざれば、則ち聲聞、辟支佛なし。是を以ての故に、憍尸迦よ、諸の菩薩摩訶薩は六波羅蜜乃至十八不共法を學し、六波羅蜜乃至十八不共法を學する時、阿耨多羅三藐三菩提を得。阿耨多羅三藐三菩提を得るが故に、地獄・畜生・餓鬼道を斷じ、世間に便ち刹利の大姓、婆羅門の大姓、居士の大家、四天王天、乃至非有想非無想天有り、便ち檀波羅蜜・尸羅・禪提・毘梨耶・禪波羅蜜、般若波羅蜜、內空乃至無法有法空、四念處乃至十八不共法世に出現し、聲聞乘、辟支佛、佛乘も、皆な世に現はる」と。

【論】者の言はく、閻浮提の人、乃至如恒河沙の世界の中の人を教へて、聲聞、辟支佛道を得せしむるも、他人の爲に般若波羅蜜の義を演說せんには如かず。此の中に因縁を説きたまはく、是の諸の賢聖は、皆な般若波羅蜜の中より出づるが故なり」と。般若波羅蜜は、是れ諸法實相なり。正遍知を名けて佛と爲す。小は是の大菩薩に如かず。辟支佛、阿羅漢も、轉た是の阿那含、斯陀含、須陀洹の諸法實相を愛念し、供養し、能く知る者に如かず。是の天王、人王等は、世間の福德の人なり。是の故に常に般若波羅蜜を説き、諸の賢聖、刹利の大姓、乃至一切諸天を出生す。復次に、一閻浮提、乃至恒河沙の世界の人をして、無上道を發し、乃ち阿鞞跋致に至らしむるも、一阿鞞跋致の人の爲に般若波羅蜜の正義を解説するには如かず。

問うて曰はく、上に凡夫の法、二乗の法の如かざるを説けるは爾るべし。今、人をして無上道を發し、阿鞞跋致を得せしむと説けるは、是れ佛道の事なり。何が故に如かざるや。

して解し易からしめ、是の如く言はんには如かず、「汝當に般若波羅蜜の中に隨つて學すべくんば、當に一切智法を得べし。汝、若し一切智法を得ば、汝、便ち般若波羅蜜を修行し増益し具足することを得ん。若し般若波羅蜜を修行し増益し具足することを得ば、汝、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし」と。何となれば、憍尸迦よ、般若波羅蜜の中に、諸の初發意の菩薩摩訶薩を生ずるが故なり。乃至十方如恆河沙等の世界も亦た是の如し」と。

「復次に、憍尸迦よ、善男子、善女人、一閻浮提の中の衆生に教へて、阿耨跋致地に住せしめん、汝が意に於いて如何、是の人の福を得ること多きや不や」と。答へて言はく、「甚だ多し、世尊よ」と。佛の言はく、「善男子、善女人は、般若波羅蜜を以て、他人の爲めに、種種の因縁もて、其の義を演説し開示し分別して解し易からしめ、是の如く言はんには如かず、「汝來れ、善男子よ、是の般若波羅蜜を受け、乃至般若波羅蜜の中の所説の如く行ぜば、汝、便ち一切智法を得、一切智法を得已りて乃至便ち阿耨多羅三藐三菩提を得ん」と。何となれば、般若波羅蜜の中に、諸の菩薩摩訶薩の阿耨跋致地を生ずればなり。乃至十方如恆河沙等の世界も亦た是の如し」と。

「復次に、憍尸迦よ、一閻浮提中の衆生、意を發して阿耨多羅三藐三菩提を求めんに、若し善男子、善女人あり、是の人の爲に、般若波羅蜜を演説し、及び其の義を解し、開示し分別して是の如く言はん、「汝來れ、善男子よ、是の般若波羅蜜を受け、乃至般若波羅蜜の中の所説の如く行じ、學し已らば、汝、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし」と。復た人あり、一阿耨跋致の菩薩の爲に般若波羅蜜を演説し、及び其の義を解し開示し分別して、是の如く言はん、「善男子よ、汝來れ、是の般若波羅蜜を受け、乃至般若波羅蜜の中の所説の如く行じ、學し已らば、汝は當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし」と。是の善男子の得る所の功德甚だ多し。乃至十方如恆河沙等の世界の中も亦た是の如し」と。

「復次に、憍尸迦よ、若し一閻浮提の中に衆生ありて、皆な阿耨跋致、阿耨多羅三藐三菩提を得んとするに、復た善男子、善女人あり、般若波羅蜜を以て、是の人の爲に、其の義を演説す。是の中に於いて一の菩薩あり、疾く阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲す。若し善男子、善女人ありて、是の菩薩の爲に、般若波羅蜜を説き、及び其の義を解せんに、是の人の功德は最も多し。乃至十方如恆河沙等の世界亦た是の如し」と。

釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩、轉轉して阿耨多羅三藐三菩提に近づく者の如きは、是の如く應に轉轉して、檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜を行ぜしむべし。應に內空乃至無法有法空、四念處、乃至八聖道分、佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法

男子、善女人は、般若波羅蜜を以て、他人の爲に種種のも因縁もて、其の義を演説し開示し分別して解し易からしめ、是の如く言んには如かず。「善男子よ、汝來りて、是の般若波羅蜜を受け、勤めて讀誦して説き、正しく憶念し、般若波羅蜜の中の所説の如く行ぜよ」と。何となれば、是の般若波羅蜜の中より諸の須陀洹を出生すればなり。憍尸迦よ、閻浮提中の衆生を置き、復た四天下の衆生、小千世界、二千中千世界、三千大千世界の中の衆生を置き、若くは人あり、十方如恆河沙等の世界中の衆生に教へ、盡く教へて須陀洹を得せしめば、汝が意に於いて云何、是の人は福を得ること多きや不や」と。答へて言はく、「甚だ多し、世尊よ」と。佛の言はく、「是の善男子善女人は、般若波羅蜜を以て、他人の爲に種種の因縁もて、其の義を演説し開示し分別して解し易からしめ、是の如く言はんに如かず。「善男子よ、汝來りて、是の般若波羅蜜を受け、勤めて讀誦して説き、正しく憶念し、般若波羅蜜の中の所説の如く行ぜよ」と。何となれば、般若波羅蜜の中の諸の須陀洹を出生すればなり」と。

復次に、憍尸迦よ、若し善男子善女人あり、閻浮提の中の人を教へて、斯陀含、阿那含、阿羅漢を得せしめば、汝が意に於いて云何、「是の人は福を得ること多きや不や」と。答へて言はく、「甚だ多し、世尊よ」と。佛の言はく、「是の善男子、善女人は、般若波羅蜜を以て、他人の爲に、種種の因縁もて、其の義を演説し開示し分別して解し易からしめ、是の如く言はんに如かず。「汝來れ、善男子よ、是の般若波羅蜜を受け、勤めて讀誦し、説き、正しく憶念し、般若波羅蜜の中の所説の如く行ぜよ」と。何となれば、般若波羅蜜の中より諸の斯陀含、阿那含、阿羅漢を出生すればなり。乃至十方如恆河沙等の世界中の衆生も亦た是の如し」と。

「復次に、憍尸迦よ、若し善男子、善女人ありて、閻浮提中の衆生を教へて、辟支佛道を得せしめば、汝が意に於いて云何。是の人は福を得ること多きや不や」と。答へて言はく、「甚だ多し」と。佛の言はく、「善男子善女人は般若波羅蜜を以て、他人の爲に、種種の因縁もて、其の義を演説し開示し分別して解し易からしめ、是の如く言はんに如かず。「汝來れ、善男子よ、是の般若波羅蜜を受けて、勤めて讀誦し説き正しく憶念し、般若波羅蜜の中の所説の如く行ぜよ」と。何となれば、般若波羅蜜の中に諸の辟支佛道を出生すればなり。四天下乃至十方如恆河沙等の世界中の衆生も亦た是の如し」と。

「復次に、憍尸迦よ、善男子、善女人、一閻浮提中の衆生を教へて、阿耨多羅三藐三菩提心を發せしめば、波が意に於いて云何、是の人は福を得ること多きや不や」と。答へて言はく、「甚だ多し、世尊よ」と。佛の言はく、「善男子、善女人は、般若波羅蜜を以て、他人の爲に、種種の因縁もて、其の義を演説し開示し分別

生を憐愍するが故に、爲に其の義を解せしめ、解し易からしめたまふことは自ら正しく憶念すること  
に勝れり。是の時、佛は廣く福德を分別せんと欲するが故に説いて言はく、「若し人あり、形壽を  
盡すまで、十方の佛を供養したてまつるも、他の爲に般若の義を解説するに如かず」と。此の中に  
勝れる因縁を説きたまはく、「三世の諸佛は皆な是の般若を學して無上道を成じたまへり」と。

復次に、若し菩薩は無量劫に於て、六波羅蜜を行するも、有所得を以ての故に、人の爲に般若波  
羅蜜を解説するに如かず。「有所得」とは、所謂、我心を以て諸法の中に於いて、相を取るが故なり。  
佛、更に般若の正義を説かんと欲し給ふが故に、帝釋に答へたまはく、「菩薩は無所得を以て、六波  
羅蜜を行すれば、則ち具足することを得。具足すれば即ち是れ般若波羅蜜の正義なり」と。人あり、  
未來世に、相似の般若を説くとは、會中の人、正憶念すと説くをば聞いて、是の思惟を作さく、「何  
者か、是れ邪憶念なる」と。是の故に相似の般若波羅蜜の相を説く。人の是なる道と非なる道とを  
知るが故に、能く非道を捨てて正道を行するが如し。

復次に、未來世の衆生を憐愍して、佛及び諸の大菩薩を見ず、但だ經書のみを見て、邪憶念する  
が故に、隨つて音聲に著し、相似の般是波羅蜜を説く。相似とは、名字語言を同じうして、而も心  
義異なるなり。著心を以て相を取り、五衆等の無常、乃至生なく、滅なきを説くは、是れ相似の般  
若なるが如し。若し著せざるの心を以て、相を取らざれば、五衆の無常を説くも、但だ常顛倒を破  
するが爲の故にして、無常に著せざるは、是れ眞實の般若なり。是の如く説法の人の、相似の般若  
波羅蜜を捨てて、眞の般若を修習することを教ふるは、是を般若波羅蜜の正義を説くと名け、前の  
功德に勝る。

【經】「復次に、憍尸迦よ、闍浮提の中の所有る衆生をして、皆な教へて須陀洹を得せしめん、汝が意に於いて  
云何。是の人は福を得ること多きや不や」と。答へて言はく、「甚だ多し、世尊よ」と。佛の言はく、「是の善

【二】茲を以て石本は卷の第  
六十一の終りとなし、大智度  
經論卷第六十一の十字を附  
言し、次に卷の第六十二の首  
として「大智度經品第三十七  
之餘卷六十二」の十四字を掲  
ぐ。



乃至阿羅漢、辟支佛道を得るも亦た是の如し。佛は更に譬喩を説きたまはく、「若し人あり、一閻浮提の人を教へて、聲聞、辟支佛道を行ぜしむるは、人あり、一人を教へ、阿耨多羅三藐三菩提を得せしめ、是の人の福を得ること多きには如かず。何となれば、須陀洹乃至辟支佛は、皆な菩薩より生ずるが故なり。是の般若波羅蜜の中には、種種に佛道の因縁を説く。是の故に、般若の經卷を書して、人に與ふるは、十善を以て、四天下、乃至如恆河沙等の世界を教ふるに勝る。

復次に、閻浮提の人、乃至恆河沙等の世界の人を教へて、四禪等、乃至五神通を行ぜしむるも、亦た是の如し。但だ四禪等は、是れ離欲の人にして、十善と差別す。

復次に、若し人あり、一閻浮提の人乃至如恆河沙の世界を教へて、十善道・四禪・四無量心・四無色定・五神通を行ぜしむるも、是の人の般若波羅蜜をば受持して、讀誦し、説き、正しく憶念して、福を得ること多きに如かず。福を得ること多しとは、上には般若の經卷を以て他人に與へ、今は自ら般若を行ずるを異なれりと爲す。先には十善道、乃至五神通を別説し、今は合説す。

問うて曰はく、何を以てか受持し、讀誦し、説くことを解せず、但だ正しく憶念することのみを解するや。

答へて曰はく、受持し讀誦し説くことは福德多く、正しく憶念することは能く二事、所謂、福德と智慧とを具ふるを以て、是の故に別説す。人の藥草を授り乃至合和するも、而も未だ之を服せざれば、病を損すること無く、服すれば乃ち病を除くが如し。正しく憶念するは藥を服して病愈ゆるが如し。是の故に但だ正しく憶念することのみを解す。正しく憶念するの相は、所謂、二に非ず、不二に非ずして、般若波羅蜜を行ずるなり。二、不二の義は先に説くが如し。初には、經卷を書するを以て舍利に勝り、中には、經卷を以て人に與ふれば、人をして十善乃至五〔神〕通を行ぜしむるに勝り、今は、受持し、讀誦し、説くに、受持の邊より、正しく憶念するは最も勝れり。今は諸佛の衆

中に色は常に非ず、無常に非ず。何となれば、是の中、色すら尙ほ不可得なり、何に況んや、常・無常をやと。橋戸迦よ、善男子、善女人の、是の如く説く者は、是を相似の般若波羅蜜を説かず名く。受・想・行・識も亦た是の如し。

復次に、橋戸迦よ、善男子、善女人は、佛道を求むる者の爲に説く、汝、善男子よ、般若波羅蜜を修行し、諸法に於いて過ぐる所あること莫く、住する所あること莫れ。何となれば、般若波羅蜜の中には、法として過ぐる可く、住す可きもの有ること無ければなり。何となれば一切法の自性は空なり、自性空は是れ法に非ず、若し法に非ざれば即ち是れ般若波羅蜜と爲す。般若波羅蜜の中には法の入る可く、出づ可く、生ず可く、滅す可きもの有ること無ければなりと。橋戸迦よ、是の善男子、善女人の是の如く説く、是を相似の般若波羅蜜を説かずと名く。廣く説くこと上の如く、相似のものと同相する、是を相似の般若波羅蜜を説かずと名く。是の如く、橋戸迦よ、善男子善女人は、應に是の如く般若波羅蜜の義を演説すべし。若し是の如く、般若波羅蜜の義を説かば、得る所の功德は前者に勝る。

【論】論者の言はく、佛は更に異門を以て、般若波羅蜜の勝れることを明かにせんと欲したまふが故に、帝釋に問うて言はく、「若し人あり、一閻浮提の人をして、十善道を行ぜしめば、其の福多きや不や」と。經中に廣く説くが如し。此の中に勝る所以の因縁を説きたまふ。所謂般若波羅蜜は廣く諸の無漏法を説き、三乘道を成じて涅槃に入り、復た十善道に還らず。但だ善の有漏のみにては世間の無常の福樂を受くるも、還つて復た苦に墮つ、是の故に如かず。

復次に、先は是れ世間法、後は是れ出世間法、先は是れ能く生死の法を生じ、後は是れ能く生死の法を滅す。先は是れ無常なる樂の因縁、後は是れ常なる樂の因縁、先は是れ凡夫、聖人に共にある法、後は但だ是れ聖人の法なるのみと爲し、是の如き等の差別あり。無漏法とは、三十七品、十八不共法、乃至無量諸佛の法なり。是の事をして了に解し易からしめんと欲したまふが故に、更に因縁を説きたまへり。所謂、一人を教へ、須陀洹果を得せしめて、大福德を得ることは、閻浮提の人をして十善道を行ぜしむることに勝る。十善を行すと雖も、未だ三惡道を免れざるが故なり。

き乃至、意界・法界・意識界の無常を説き、地種の無常を説き、乃至識種の無常を説き、眼識衆の無常を説き、乃至意識衆の無常を説き、眼觸因縁生の受の無常を説き、乃至意觸因縁生の受の無常を説く、廣く説くこと五衆の如し。色の苦を説き乃至意觸因縁生の受の苦を説き、色の無我を説き乃至意觸因縁生の受の無我を説くこと、皆な五衆を説くが如し。行者、檀波羅蜜を行ずる時、爲めに色の無常・苦・無我を説き、乃至、意觸因縁生の受の無常・苦・無我を説く。尸羅波羅蜜乃至般若波羅蜜も亦た是の如し。四禪・四無量心・四無色定を行ずる爲めに、無常・苦・空・無我を説き、四念處を行ずる爲めに、無常・苦・無我を説き、乃至薩婆若を行ずる時、無常・苦・無我を説く。是の如き教を作して能く是の如く行ずる者は、是を般若波羅蜜を行ずと爲す。憍尸迦よ、是を相似の般若波羅蜜と名く。

復次に、憍尸迦よ、若し善男子、善女人、當來世に相似の般若波羅蜜を説いて、是の言を作さく、「汝、善男子よ、般若波羅蜜を修行せよ。汝は般若波羅蜜を修行する時、當に初地を得べく乃至當に十地を得べし。禪波羅蜜乃至檀波羅蜜も亦た是の如し」と。行者は相似の有所得を以て、總相を以て是の般若波羅蜜を修す。憍尸迦よ、是を相似の般若波羅蜜と名く。

復次に、憍尸迦よ、善男子、善女人は、般若波羅蜜を説かんと欲して、是の言を作さく、「汝、善男子は、般若波羅蜜を修行し已んぬ。當に聲聞辟支佛地を過ぐべし」と。是を相似の般若波羅蜜と名く。

復次に、善男子、善女人、佛道を求むる者の爲に是の如く説く、「汝、善男子、善女人、般若波羅蜜を修行し已りて、菩薩の位に入り、無生法忍を得、無生忍を得已りて、便ち菩薩の神通に住し、一佛界より一佛界に至りて、諸佛を供養し恭敬し尊重し讚歎す」と。是の如く説く者、是を相似の般若波羅蜜と名く。

復次に、憍尸迦よ、善男子、善女人、佛道を求むる者の爲に、是の如く説く、「汝、善男子、善女人よ、是の般若波羅蜜を學し、受持し、讀誦し、説き、正憶念せば、當に無量無邊阿僧祇の功德を得べし」と。是の如く説く者、是を相似の般若波羅蜜と名く。

復次に、善男子、善女人、佛道を求むる者の爲に説く、「過去・未來・現在の諸佛の功德善本の如きは、初發心より佛を成得するに至るまで都べて合共し、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す」と。是の如く説く者、是を相似の般若波羅蜜と名く」と。釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、云何なれば善男子、善女人、佛道を求むる者の爲に、相似の般若波羅蜜を説かずとするや」と。佛の言はく、「若し善男子、善女人、佛道を求むる者の爲に、般若波羅蜜を説く、汝、般若波羅蜜を修行して、色の無常を觀すること莫れ。何となれば、色は色性空なり、是の色性は法に非ず、若し法に非ざれば、即ち名けて般若波羅蜜と爲す。般若波羅蜜の

有所得を用つての故に布施せば、布施の時、是の念を作さく、「我れ與へ、彼れ受け、施す所の物あり」と。是を檀を得て波羅蜜を得ずと名く。「我は戒を持す、此は是れ戒なり」と。是を戒を得て、波羅蜜を得ずと名く。「我は忍辱し、是の人の爲に忍辱す」と。是を忍辱を得て波羅蜜を得ずと名く。「我は精勤し、是の事の爲に勤め精進す」と。是を精進を得て波羅蜜を得ずと名く。「我は禪を修す、修する所は是れ禪なり」と。是を禪を得て波羅蜜を得ずと名く。「我は慧を修す、修する所は是れ慧なり」と。是を慧を得て波羅蜜を得ずと名く。憍尸迦よ、是の善男子、善女人、是の如く行ずる者は、檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜を具足することを得ず」と。

釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩は、云何に修して、檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜を具足するや」と。佛、釋提桓因に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は布施する時、與ふる者を得ず、受くる者を得ず、施す所の物を得ず。是の人は檀波羅蜜を具足することを得。乃至般若波羅蜜を修する時、智を得ず、修する所の智を得ず。是の人は般若波羅蜜を具足することを得。憍尸迦よ、是を菩薩摩訶薩の檀波羅蜜、乃至般若波羅蜜を具足すと爲す。善男子、善女人は是の如く般若波羅蜜を行じて、當に他人の爲に其の義を演説し開示し分別して解し易からしめ、禪波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、羼提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀波羅蜜、其の義を演説し開示し分別して解し易からしむべし。何となれば、憍尸迦よ、未來世に當に善男子、善女人あり、般若波羅蜜を説かんと欲して、而も相似の般若波羅蜜を説くべけん、善男子、善女人ありて、阿耨多羅三藐三菩提心を發すも、是の相似の般若波羅蜜を聞いて正道を失せん。善男子、善女人は、當に是の人の爲に具足して、般若波羅蜜の義を演説し開示し分別して解し易からしむべし」と。

釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、何等か是れ相似の般若波羅蜜なる」と。佛の言はく、「善男子、善女人ありて、有所得の般若波羅蜜を説く、是を相似の般若波羅蜜と爲す」と。釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、云何なるを善男子、善女人、有所得の般若波羅蜜を説き、是を相似の般若波羅蜜と爲すや」と。佛の言はく、「善男子、善女人、有所得の般若波羅蜜を説くは、是れ相似の般若波羅蜜なりとは、色の無常を説いて是の言を作さく、「能く是の如く行ずれば是れ般若波羅蜜を行ず」と。行者は色の無常を求む。是を相似の般若波羅蜜を行ずと爲す。受・想・行・識の無常を説いて、是の言を作さく、「能く是の如く行ずれば、是れ般若波羅蜜を行ず」と。行者は受・想・行・識の無常を求む。是を相似の般若波羅蜜を行ずと爲す。眼の無常を説き乃至意の無常を説き、色の無常を説き乃至法の無常を説き、眼界の無常・色界・眼識界の無常を説

不二法を以つてせず、禪波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、圓提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀波羅蜜をば受持して、親近し、乃至正しく憶念し、二法を以てせず、不二法を以てせず、阿耨多羅三藐三菩提の爲に正しく憶念し、内空乃至一切種智、二法を以てせず、不二法を以てせざるなり。

復次に、憍尸迦よ、若し善男子、善女人ありて、他人の爲に種種の因縁もて、般若波羅蜜の義を演説し開示し分別して解し易からしむ。憍尸迦よ、何等か是れ般若波羅蜜の義なる。憍尸迦よ、般若波羅蜜の義は、二相を以て觀ずべからず、不二相を以て觀ずべからず。相あるに非ず、相なきに非ず、入らず出でず、増さず損ぜず、垢ならず淨ならず、生ぜず滅せず、取らず捨てず、住せず住せざるに非ず、實に非ず虚に非ず、合するに非ず散ずるに非ず、著するに非ず著せざるに非ず、因に非ず因ならざるに非ず、法に非ず法ならざるに非ず、如に非ず如ならざるに非ず、實際に非ず實際ならざるに非ず。憍尸迦よ、若し善男子、善女人にして、能く是の般若波羅蜜の義を以て、他人の爲に種種の因縁もて演説し開示し分別し解し易からしめば、是の善男子、善女人の得る所の福德は甚だ多くして、自ら般若波羅蜜を受持し、親近し、讀誦し、説き、正しく憶念するに勝る。

復次に、憍尸迦よ、善男子、善女人は、自ら般若波羅蜜をば受持して、親近し讀誦し説き正しく憶念し、亦た他人の爲に種種の因縁もて、般若波羅蜜の義を演説し開示し分別して解し易からしめば、是の善男子、善女人の得る所の功德甚だ多し」と。釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、善男子、善女人は應に是の如く般若波羅蜜の義を演説し開示して解し易からしむべし」と。佛、釋提桓因に語りたまはく、「是の如し、憍尸迦よ、是の善男子善女人は、應に是の如く般若波羅蜜の義を演説し開示し分別して解し易からしむべし。憍尸迦よ、善男子、善女人は、是の如く般若波羅蜜の義を演説し開示し分別して解し易からしめば、無量無邊阿僧祇の福德を得。若し善男子、善女人ありて十方の無量阿僧祇の諸佛を供養したてまつり、其の壽命を盡すまで、其の須ふる所に隨つて恭敬し、尊重し、讚歎し、華香乃至幡蓋もて供養するも、若し復た善男子、善女人あり、種種の因縁もて他人の爲に廣く般若波羅蜜の義を説き開示し分別して解し易からしめば、是の善男子、善女人は功德甚だ多し。何となれば、諸の過去、未來、現在の佛は皆な是の般若波羅蜜の中より學して、阿耨多羅三藐三菩提を得べく、已に得、今、得、當に得べければなり。

復次に、憍尸迦よ、若し善男子、善女人、無量無邊阿僧祇劫に於いて、檀波羅蜜を行ずるも、是の善男子、善女人の、般若波羅蜜を以て、他人の爲に其の義を演説し開示し分別して解し易からしむる其の福の甚だ多きには如かず。(そは)無所得を以ての故なり。云何なるを有所得と名く。憍尸迦よ、若し菩薩摩訶薩、

ればなり。

橋戸迦よ、一閻浮提の人を置き、若し善男子、善女人ありて、四天下の世界の中の衆生に教へて十善道を行ぜしめば、汝が意に於いて云何、是の人は是の因縁を以ての故に、福を得ること多きや不や」と。答へて言さく、「甚だ多し、世尊よ」と。佛の言はく、「善男子、善女人の、般若波羅蜜の經卷を書し、他人に與へ、書持し、讀誦し、説かしむる福を得ること多きには如かず。餘は上に説くが如し。橋戸迦よ、四天下の世界の中の衆生を置き、若くは小千世界の中の衆生に教へて、十善道を行ぜしむるも、亦た是の如し。橋戸迦よ、小千世界の中の衆生を置き、若くは二千中世界の中の衆生に教へて十善道を行ぜしむるに、若し善男子、善女人ありて、般若波羅蜜の經卷を書し、他人に與へて書持し、讀誦せしめば、是の人は福を得ること多し。餘は上に説くが如し。橋戸迦よ、二千中世界の中の衆生を置き、若くは三千大千世界の中の所有る衆生に教へて、十善道を行ぜしめんに、復た人ありて、般若波羅蜜の經卷をば書し、他人に與へ、書持し、讀誦せしめば、是の人は福德多し。橋戸迦よ、三千大千世界の中の衆生を置き、若くは如恆河沙等の世界の中に、所有る衆生に教へて、十善道を行ぜしめんに、若し復た人ありて、般若波羅蜜の經卷を書し、他人に與へ、書持し、讀誦せしめば其の福多し。餘は上に説くが如し。

復次に、橋戸迦よ、人あり、一閻浮提の衆生に教へて、四禪・四無量心・四無色定・五神通に立たしめば、汝が意に於いて云何、是の善男子、善女人は、福德多きや不や」と。釋提桓因の言さく、「甚だ多し、世尊よ」と。佛の言はく、「是れ善男子、善女人の般若波羅蜜の經卷を書し、他人に與へ、書持し、讀誦し、説かしめて、福を得ること多きに如かず。何となれば、是の般若波羅蜜の中に、廣く諸の善法を説けばなり。餘は上に説くが如し。橋戸迦よ、閻浮提の衆生を置き、復た四天下の世界の中の衆生、小千世界の中の衆生、二千中世界の中の衆生、三千大千世界の中の衆生を置き、橋戸迦よ、若し人ありて、十方如恆河沙等の世界の中の衆生に教へて、四禪・四無量心・四無色定・五神通に立たしめば、汝が意に於いて云何、是の人は福德多きや不や」と。答へて言さく、「甚だ多し、世尊よ」と。佛の言はく、「善男子、善女人、般若波羅蜜の經卷を書し、他人に與へ、書持し、讀誦せしめて、福を得ること多きに如かず。何となれば、是の般若波羅蜜の中に廣く諸の善法を説けばなり。餘は上に説くが如し。

復次に、橋戸迦よ、若し善男子、善女人ありて、是の般若波羅蜜を受持し、讀誦し、説き、正しく憶念せば、是の人の福德は、閻浮提の人に教へて、十善道を行ぜしめ、四禪・四無量心・四無色定・五神通に立たしむるに勝る。正憶念とは、般若波羅蜜をば受持して、親近し、乃至、正しく憶念し、二法を以てせず、

## 卷の第六十

## 第三十八 校量法施品

【經】佛、釋提桓因に告げて言はく、「憍尸迦よ、若し善男子、善女人ありて、一閻浮提の人をして、十善道を行ぜしめば、汝が意に於いて云何。是の因縁を以ての故に、福を得ること多きや不や」と。答へて言さく、「甚だ多し、世尊よ」と。佛の言はく、「善男子、善女人の般若波羅蜜の經卷を書持し、他人に與へ、讀誦し、説かしむることの福を得ること多きに如かず。何となれば、是の般若波羅蜜の中に、廣く諸の無漏法を説けばなり。善男子、善女人は、是の中に從つて學し、已に學し、今、學し、當に學すべし。正法位の中に入る、已に入り、今、入り、當に入るべし。須陀洹果を得る、已に得、今、得、當に得べしと。乃至阿羅漢果、辟支佛道を求むるも亦た是の如し。諸の菩薩摩訶薩は阿耨多羅三藐三菩提を求めて正法位の中に入る、已に入り、今、入り、當に入るべし。阿耨多羅三藐三菩提を得る、已に得、今、得、當に得べし。

憍尸迦よ、何等か是れ無漏法なる。所謂、四念處乃至八聖道分、四聖諦、內空乃至無法有法空、佛の十力乃至十八不共法なり。善男子、善女人は、是の法を學し、阿耨多羅三藐三菩提を得る、已に得、今、得、當に得べし。憍尸迦よ、若し善男子、善女人ありて、一人に教へて須陀洹果を得せしめば、是の人福徳を得ること、一閻浮提の人に十善道を行ぜしむるに勝る。何となれば、憍尸迦よ、一閻浮提の人をして、十善道を行ぜしむるも、地獄、畜生、餓鬼の苦を離れず、憍尸迦よ、一人をして須陀洹果を得せしむれば、三惡道を離るるが故なり。乃至阿羅漢果、辟支佛道も亦た是の如し。憍尸迦よ、若し善男子、善女人、一閻浮提の人をして、須陀洹果・斯陀含・阿那含・阿羅漢・辟支佛道を得せしむるも、善男子、善女人、一人に教へて阿耨多羅三藐三菩提を得せしむるの福を得ること多きには如かず。何となれば、憍尸迦よ、菩薩の因縁を以ての故に、須陀洹乃至阿羅漢・辟支佛道を生じ、菩薩の因縁を以ての故に諸佛を生ずればなり。是の因縁を以ての故に、憍尸迦よ、當に知るべし、善男子、善女人、般若波羅蜜の經卷を書して、他人に與へ、書持し、讀誦し、説かしむれば、福を得ること多きことを。何となれば、是の般若波羅蜜の中に、廣く諸の善法を説き、是の善法の中に學して、便ち刹利の大姓、婆羅門の大姓、居士の大家、四天王天、乃至非有想非無想天を出生す。便ち四念處乃至一切種智有り、便ち諸の須陀洹乃至阿羅漢、辟支佛あり、便ち諸佛あ

【一】宋本「法施品」、元本明本は「十善品」に作る。

り、譬へば、好き穀子あり、田も又た良美なれば、所收必ず多きが如し。是の故に、心は好しと雖も、必ず舍利に因りて、然る後に大果報を得。佛は、既に其の言を可とし、復た更に自ら説きたまはく、「人あり、經卷を書寫し、人に與ふると、復た人あり、大衆の中に於いて、廣く其の義を解すると、其の福は前に勝る。是の人を視ること佛の如く、若くは佛に次ぐ」と。佛の如く、若くは佛に次ぐの義は、先に説くが如し。佛は二種の因縁を以て、般若波羅蜜の勝れたることを證したまへり、一には、三世の聖人は、(般若の)中より學して、聖道を成じ、二には、我は此の法を以ての故に、無上聖を成ずることを得。我れ今、還つて師として、此の法を仰ぐ。法とは、諸法實相、所謂、般若波羅蜜なり。我は更に求むる所なけれども、而も猶ほ般若を推尊して供養す。何に況んや、善男子は種種の供具を以て、般若波羅蜜を供養せざらんや。此の中に因縁を説きたまはく、「般若は是れ菩薩の根本の因縁、菩薩は是れ諸佛の根本の因縁、諸佛は是れ一切世間の大利益安樂の因縁なり」と。是の故に、聲聞・辟支佛の人は、疾く安隱に三解脱の門に入らんと欲すれば、猶尚ほ般若波羅蜜を供養す。何に況んや、菩薩をや。「供養の具」とは、所謂、一心を以て聽受し、乃至、正しく憶念し、及び華香乃至幡蓋を以てするなり。

【六】石本は茲に「第三十六品を釋し竟る」七字附加。



阿那婆達多池より、四大河流れ、一大河に五百の小川あり之に歸し、俱に大海に入れば、則ち其の本名を失し、合して一味と爲りて、別異あること無きが如し。又た樹木の枝葉華果の衆色は、別異なれども、蔭には則ち別なきが如し。

問うて曰はく、蔭にも亦た差別あり、樹大なれば則ち蔭大に、枝葉華果の大小も、種種にして、形を異にす、云何なれば差別なきや。

答へて曰はく、光を蔽ふが故に、影現じ、光なきの處を即ち名けて蔭と爲す。蔭は大小異形を以て義と爲さず。

問うて曰はく、般若波羅蜜を行じ、受け、誦するより、乃ち正しく憶念するに至るまで、此の事は難しと爲し、般若の經卷を、書持して、他人に與ふるは、易しと爲す。(その)功德すら尙ほ等しかるべからず、云何なれば勝れりと言ふや。

答へて曰はく、獨り行じて、讀誦し、正しく憶念することは、難しと雖も、或は我心を以ての故に功德少し。經卷を以て他に與ふるは、大悲の心ありて、佛道の因縁と作り、吾我なきが故に、功德は大なりと爲す。佛、帝釋に問ひたまへるが如し、「若し人、自ら舍利を供養すると、復た人あり、舍利を以て、他に與へて供養せしむると、其の福は何の所に多しと爲すや」と。答へて曰はく、「他人に與へて供養せしむることは、福を得ること多し。吾我なく、慈悲の心もて與ふるを以ての故なり」と。佛は福德を用ゐたまはずと雖も、是の如く、大に衆生を利益すること有るを見る故に、是を以て金鋼三昧に入り、自ら其の身を碎きたまへり。

問うて曰はく、若し福德、「佛」心に在らば、佛は何ぞ身を碎くこと、芥子の如くなるを用つて、人をして供養せしめたまひしや。

答へて曰はく、信淨の心は、二因縁より生ず。一には内に正しく憶念し、二には外に良き福田あ

欲す。有爲法の相は所謂、十八空、三十七品より、乃ち十八不共法に至り、略して善不善等より、乃ち世間、出世間に至るを説く、是を有爲の法相と名く。何となれば、是れ作相にして、先には無にして今は有、已に有にして還た無なればなり。上と相違するは、即ち是れ無爲法の相なり。是の二の法〔相〕は、皆な般若波羅蜜の中に攝す。有爲の善法は、是れ行處、無爲法は、是れ依止の處、餘の無記、不善法は捨離を以ての故に説かず。此は是れ新發意の菩薩の學する所にして、若し般若波羅蜜の方便力を得れば、應に無生忍にして、則ち行法を愛せず、捨法を増さず、有爲法を離れず、而も無爲法あるべし、是の故に涅槃に依止せず。是を以て經中に、般若波羅蜜を説く中に、廣く三乘を説けり。無相法を用ふるが故に、無生、無滅等あり。世諦を以ての故に、是の説を作すも、第一義諦に非ず。菩薩は是の諸法實相を行じ、能く一切衆生の心を觀すと雖も、亦た衆生を得ず。能く一切法を行すと雖も、亦た一切法を得ず。何となれば、無所得の般若波羅蜜を得るを以ての故なり。佛は其の歎する所を可としたまへり。菩薩の常に是の行、乃至阿耨多羅三藐三菩提を習ふも得べからず何に況んや、餘法をや。帝釋、意に念すらく、「若し般若は、是れ究竟の法ならば、行人は、但だ般若波羅蜜のみを行ぜん、何ぞ餘法を用ゐんや」と。佛の答へたまはく、「六波羅蜜を行するに、般若波羅蜜の無所得の法を用つて、和合するを以ての故に、此は即ち是れ般若波羅蜜を行するなり。若し但だ般若のみを行じて、五法を行ざれば、則ち功德具足せず、美ならず、妙ならず。譬へば、愚人は飲食、種種に具はるを識らず、醬は是れ衆味の主なりと聞き、便ち純ら醬を飲み、味を失うて患を致すが如し。行者も亦た是の如く、著心を除かんと欲するが故に、但だ般若のみを行じ、反つて邪見に墮して、善法を増進すること能はず。若し五波羅蜜と和合すれば、則ち功德具足し、義味調適す。衆行和合すと雖も、般若を主と爲す。若し布施等の諸法は、般若波羅蜜を離るれば、則ち種種の差別あり。般若波羅蜜の中に至れば、皆な一相にして差別あること無し。譬へば、閻浮提の

蜜の經卷を書し、供養し、恭敬し、華香乃至幡蓋をもてするも、若し復た人あり、般若波羅蜜の經卷を書し、他人に與へて學せしむるあらば、是の善男子善女人は、其の福甚だ多し。

復次に、憍尸迦よ、善男子、善女人、般若波羅蜜の中の義の如く、他人の爲に説き、開示し分別して、解し易からしめん、是の善男子、善女人は、前の善男子、善女人の功德に勝る。従つて般若波羅蜜を聞く所、當に其人を視ること佛の如く、亦た高勝梵行人の如くすべし、何となれば、當に知るべし、般若波羅蜜は、即ち是れ佛なり。般若波羅蜜は佛に異ならず。佛は般若波羅蜜に異ならず。過去、未來、現在の諸佛は、皆な般若波羅蜜の中より學して、阿耨多羅三藐三菩提、及び高勝梵行人のを得。高勝梵行人とは、所謂、阿鞞跋致なり。菩薩摩訶薩も亦た般若波羅蜜を學して、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。聲聞の人は是の般若波羅蜜を學して、阿羅漢道を得、辟支佛道を求むる人は、是の般若波羅蜜を學して辟支佛道を得、菩薩も亦是の般若波羅蜜を學して菩薩の位に入ることを得。是を以ての故に、憍尸迦よ、善男子、善女人は、現在の佛を供養し、恭敬し、尊重し、讚歎し、華香、乃至幡蓋もてせんと欲せば、當に般若波羅蜜を供養すべし。我れ、是の利益を見る。初めて阿耨多羅三藐三菩提を得る時、是の如きの念を作さく、「誰か供養し、恭敬し、尊重し、讚歎し、依止し、住すべき者ぞ」と。

憍尸迦よ、我れ一切世間の中の、若くは天、若くは魔、若くは梵、若くは沙門、婆羅門の中に、我と等しきものを見ず。何に況んや、勝る者あらんや。我れ自ら思念すらく、「我が所得の法は、自ら作佛を致す、我れ是の法を供養し、恭敬し、尊重し、讚歎し、當に是の法に依止し住すべし」と。何等か是の法なる。所謂、般若波羅蜜なり。憍尸迦よ、我れ自ら是の般若波羅蜜を供養し、恭敬し、尊重し、讚歎し已り、依止し住せん。何に況んや、善男子、善女人は、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲し、而も般若波羅蜜を供養し、恭敬し、尊重し、讚歎し、華香、瓔珞乃至幡蓋をもてせざらんや。何となれば般若波羅蜜の中には諸の菩薩摩訶薩を生じ、諸の菩薩摩訶薩の中には諸佛を生ずればなり。是を以ての故に、憍尸迦よ、善男子、善女人、若くは佛道を求め、若くは辟支佛道を求め、若くは聲聞道を求めば、皆な應に般若波羅蜜を供養し、恭敬し、尊重し、讚歎し、華香乃至幡蓋をもてすべし」と。

【論】問うて曰はく、何の因縁の故に、是の有爲法、無爲法の相を説くや。

答へて曰はく、帝釋は、般若波羅蜜の、一切法を攝することを讚歎し、此の中に因縁を説かんと

なきを以ての故に檀波羅蜜を行ずるも、施者を得ず、受者を得ず、財物を得ず。尸羅波羅蜜を行ずるも戒を得ず、持戒の人を得ず、破戒の人を得ず。乃至般若波羅蜜を行ずるも智慧を得ず、智慧の人を得ず、智慧なき人を得ず。憍尸迦よ、菩薩摩訶薩の布施を行ずる時、般若波羅蜜は爲に明導と作りて能く檀波羅蜜を具足す。菩薩摩訶薩の持戒を行ずる時、般若波羅蜜は、爲に明導と作りて、能く尸羅波羅蜜を具足す。菩薩摩訶薩の精進を行ずる時、般若波羅蜜は爲に明導と作りて、能く毘梨耶波羅蜜を具足す。菩薩摩訶薩の禪を行ずる時、般若波羅蜜は爲に明導と作りて、能く毘梨耶波羅蜜を具足す。菩薩摩訶薩の諸法を觀する時、般若波羅蜜は、爲に明導と作りて、能く般若波羅蜜を具足す。一切法は無所得なるを以ての故に、所謂色乃至一切種智あり。憍尸迦よ、譬へば、閻浮提の諸の樹の種類の葉、種類の華、種類の果、種類の色あるも、其の蔭に差別なきが如く、諸の波羅蜜の、般若波羅蜜の中に入り、薩婆若に至れば、差別なきことも亦た是の如し。所得なきを以ての故なり」と。釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、般若波羅蜜は、大功德を成就す。世尊よ、般若波羅蜜は一切の功德を成就す。世尊よ、般若波羅蜜は、無量の功德を成就し、無邊の大功德を成就し、無等の功德を成就す。世尊よ、若し善男子、善女人あり、是の般若波羅蜜の經卷を書し、恭敬し、供養し、尊重し、讚歎し、華香、乃至幡蓋(をもてし)、般若波羅蜜に説く所の如く、正しく憶念すると、復た善男子、善女人あり、般若波羅蜜の經卷を書して、他人に與ふると、其の福は何れか多しと爲すや」と。

佛、釋提桓因に告げたまはく、「憍尸迦よ、我れ還つて汝に問はん。汝が意に隨つて我に報へよ。若し善男子、善女人あり、諸佛の舍利を供養し、恭敬し、尊重し、讚歎し、華香乃至幡蓋もてすると、若し復た人ありて、舍利を分つこと、芥子許の如きを、他人に與へて、恭敬し、尊重し、讚歎し、華香乃至幡蓋もてせしむると、其の福は何所をか多しと爲すや」と。

釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、我が佛より聞ける法の中の義の如くんば、若し善男子、善女人あり、自ら舍利を供養し、乃至幡蓋もてするも、若し復た人あり、舍利を分つこと、芥子許の如きを他人に與へて供養せしむるあらば、其の福甚だ多し。世尊よ、佛は是の福の衆生を利するを見したふが故に、金剛三昧に入りて、金剛身を碎いて末舍利と作す。何となれば、人あり、佛の滅度の後、佛舍利乃至芥子許の如きを供養するも、其の福報無邊にして、乃ち苦を盡すに至るが故なり」と。

佛、釋提桓因に告げたまはく、「是の如し、是の如し。憍尸迦よ、若し善男子、善女人ありて、般若波羅

と名くるや。所謂、内空の中の智慧乃至無法有法空の中の智慧、四念處の中の智慧乃至八聖道分の中の智慧、佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法の中の智慧、善法の中、不善法の中、有漏の中、有漏法の中、世間法の中、出世間法の中の智慧、是を有爲の諸の法相と名く。云何なるを無爲の諸の法相と名くるや。若し法の生なく、滅なく、住なく、畏なく、垢なく、淨なく、増なく、減なきは、諸法の自性なり。云何なるを諸法の自性と名くるや。諸法は所有の性なき、是れ諸法の自性なり。是を無爲の諸の法相と名くしと。

爾の時、佛、釋提桓因に告げたまはく、「是の如し、是の如し。憍尸迦よ、過去の諸佛は、是の般若波羅蜜に因りて、阿耨多羅三藐三菩提を得たまへり。過去の諸佛の弟子も、亦た般若波羅蜜に因りて、須陀洹道乃至阿羅漢・辟支佛道を得たり。未來現在世の十方の無量阿僧祇の諸佛も、是の般若波羅蜜に因りて、阿耨多羅三藐三菩提を得ん、未來、現在の諸佛の弟子も、亦た般若波羅蜜に因りて、須陀洹道乃至辟支佛道を得ん。何を以ての故に、般若波羅蜜の中に、廣く三乘の義を説くや。無相法を以てするが故に、無生・無滅法の故に、無垢・無淨法の故に、無作・無起・不入・不出・不增・不損・不取・不捨法の故に、俗法を以ての故に、第一義を以てするに非ざればなり。何となれば、是の般若波羅蜜は、此に非ず彼に非ず、高に非ず下に非ず、等に非ず不等に非ず、相に非ず無相に非ず、世間に非ず出世間に非ず、有漏に非ず無漏に非ず、有爲に非ず無爲に非ず、善に非ず不善に非ず、過去に非ず現在に非ず未來に非ざればなり。何となれば、憍尸迦よ、般若波羅蜜は聲聞・辟支佛の法を取らず、亦た凡夫の法をも捨てざればなり」と。

釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行じて、一切衆生の心を知るも亦た衆生を得ず、乃至、知者見者をも亦た得ず、是の菩薩は色を得ず、受・想・行・識を得ず、眼乃至意を得ず、色乃至法を得ず、眼觸因縁生の受、乃至意觸因縁生の受を得ず、四念處、乃至十八不共法を得ず、阿耨多羅三藐三菩提を得ず、諸の佛法を得ず、佛を得ず。何となれば、般若波羅蜜は、法を得ることを爲さざるが故に出づればなり。何となれば、般若波羅蜜の性は、所有なく得べからず、所用の法も得べからず、處も亦た得べからざればなり」と。

佛、釋提桓因に告げたまはく、「是の如し、是の如し。憍尸迦よ、汝が説く所の如し。菩薩摩訶薩は、長夜に般若波羅蜜を行ずるに、阿耨多羅三藐三菩提を得べからず。何に況んや、菩薩及び菩薩法をや」と。

爾の時、釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩は、但だ般若波羅蜜のみを行じて、餘の波羅蜜を行ぜざるや」と。佛、釋提桓因に告げて言はく、「憍尸迦よ、菩薩は盡く六波羅蜜の法を行ず。所得

しめ、般若は能く心數の善法に隨順す。珠は人心を轉すること能はず、般若は能く一切衆生の心性の樂たがふ所、欲する所を轉ず。珠は能く所著の處の濁水をして清かならしむるも一切の水に非ず、般若の力は能く六覺の濁心をして、即時に清淨ならしめ、又た諸の龍王・鬼神王・人王等の貪恚の濁心に於いて、能く清淨ならしむ。珠は能く所著の函篋、房舎をして威徳あらしめ、般若の力は、能く十方無量の世界の阿僧祇の衆生を度して威徳あらしむ。珠の功德力は函篋に入るも、函篋は人に隨意の功德を與ふること能はず。舍利は般若の熏修を得るが故に、人の、(之を)供養するあれば、必ず還た般若を得、而して成佛を得。是の函篋は、凡夫の人の貴ぶ所、舍利は凡夫聖人の貴ぶ所、函篋は世間の樂を受くる人の貴ぶ所、舍利は出世間と世間の樂を受くる人の貴ぶ所なり。般若は是れ如意寶珠、函篋は是れ舍利にして、舍利の中には般若なしと雖も、般若に熏ぜらるゝが故に供養を得。

復次に、諸の聖法の中にて、般若は第一にして、譬喩す可きもの無し。世間の人は、是の寶珠を貴ぶを以ての故に、珠を以て喩と爲す。人は如意寶珠を見れば、願ふ所皆な得、若し珠の所住の處を見るも、亦た少願を得。行者も亦た是の如く、是の般若波羅蜜の義を得れば、即ち佛道に入り、若し般若の住する所の舍利を見て、供養するが故に、今世後世に、無量の福樂を得、久しうして必ず道を得。是の如きの總相別相、應當に知るべし。

問うて曰はく、般若に若し是の如きの功德あらば、何を以ての故に、舍利は是れ五波羅蜜、乃至一切種智の所住の處なるが故に、供養を得と説くや。

答へて曰く、先に已に説けり。「一切の諸法は、般若波羅蜜を首はじめと爲し、明導と爲す。譬へば王來れば必ず將從あり、但だ其の主の名を擧ぐるのみにして、餘の者は已に盡く得るが如し」と。般若波羅蜜を讚ずとは、是の義は先に已に説けり。

【經】「復次に、世尊よ、二種の法相あり、有爲の諸の法相と無爲の諸の法相となり。云何なるを有爲の諸の法相

煩惱、邪見、戲論、擾心、渾濁あらんに、般若を得れば、則ち清淨一色なり。如意珠に無量の功德あるが如く、般若の功德も亦た是の如し。

今、當に別相もて、般若の功德を説くべし。是の如意珠は但だ能く惡鬼を除くのみにして、魔天を壞すること能はず。般若は則ち能く二事を除く。珠は能く身病を治し、般若は能く身心の病を治す。珠は能く人に治せらるゝ病を治し、般若は能く一切の天・龍・鬼神の治する能はざる所の病を治す。珠は能く世世に會つて治する所の病を治し、般若は能く無始の世界より來、未だ會つて治せられざる病を治す。是の如き等の種種の差別あり、珠は能く所在の處の夜闇を照らし、般若は能く一切の煩惱相應の無明の黑闇、及び不共の無明、及び一切法中の不了の癡の黑闇を照らす。珠は但だ能く所在の處の熱を破するのみにして、餘處の熱を破すること能はず。般若の力は、乃ち無量世界の劫盡の大火に至るも、一吹に能く滅す、何に況んや、一處の熱をや。珠は但だ能く形質火日の熱を除くのみなるも、般若は能く三毒の心熱を除く。珠は能く風雨寒雪を除き、般若は能く十方無量世界の衆生の、不信・不恭敬・懈怠心等の寒を除く。珠は能く外の毒螫を却くるも、四大の毒蛇を除くこと能はず。般若は能く畢竟して、此の二種の毒を除く。珠は邪見の毒を治すること能はざるも、般若は能く(之を)除く。珠は能く肉眼を治し、般若は能く慧眼を治す。珠は能く近見眼を治し、般若は能く遠見眼を治す。珠は能く肉眼を治するも、肉眼は珠と作らず。般若は能く慧眼を治し、慧眼は即ち般若と作る。珠は能く肉眼を治するも後に病復た發し、般若の慧眼を治するは畢竟清淨なり。珠は能く癩瘡惡腫を治し、般若は能く身癩心癩を治す。

問うて曰はく、四種の病の中に、一切の病を攝す。何を以ての故に、眼痛、癩病等を別説するや。

答へて曰はく、眼は是れ身中第一にして、所用最も貴し。是の故に別説す。諸病の中、癩病は最も重く、宿命の罪の因縁の故に治し難し。是の故に更に説く。珠は能く水をして裹む所の色に隨は

一千を分ち、愚癡の病に二萬一千を分ち、等分の病に二萬一千を分つなり。不淨觀を以て貪欲を除き、慈悲心を以て瞋恚を除き、因縁を觀するを以て愚癡を除き、總じて上の三藥の、或は不淨、或は慈悲、或は因縁を觀じて、等分の病を除く。寶珠の能く黒闇を除くが如く、般若も亦た是の如く、能く三界の黒暗を除く。寶珠の能く熱を除くが如く、般若も亦た是の如く、能く婬欲瞋恚の熱を除く。寶珠の能く冷を除くが如く、般若も亦た是の如く、能く無明・不信・不恭敬・懈怠等の冷心を除く、日月は、皆な諸寶の所成にして、日は能く熱を作し、月は能く冷を作して、俱に衆生を利益すと雖も、兼ぬること能はざるを以ての故に、名けて如意と爲さず。寶珠の所在の處には、毒蛇等の諸の惡蟲も害すること能はざる所なり。般若も亦た是の如く、貪欲等の毒の能く病まざる所なり。若し人あり、毒蛇に螫れんに、寶珠を持して之に示せば、即時に除き愈えん。人あり、貪欲等の毒蛇の爲に螫れんに、般若波羅蜜を得れば、貪恚の毒即ち除く。難陀、鴛群梨摩羅等の如し。人あり、眼痛み、盲瞽ならんに、寶珠を以て之に示せば、即時に除き愈えん。般若波羅蜜も亦た是の如し。人あり、無明・疑悔・顛倒・邪見等を以て、慧眼を破せんに、般若を得れば、即時に明了なり。人の癩瘡癰腫に、寶珠を以て之に示せば、即時に除き愈ゆるが如く、般若も亦た是の如し。五逆の癩罪等あらんに、般若を得れば、即時に消滅す。種種の色を以て寶珠を裏み、水中に著くれば、随つて一色と作るが如く、般若も亦た是の如し。行者、般若の力を得るが故に、心則ち柔軟にして著する所なく、信手の五根等に隨ひ、亦た四禪・四無量心・背捨・勝處及び一切入に隨順す。

復次に、須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢・辟支佛地に於いて隨順し、遍ねく學して、違逆する所なく、第六の縹色は是れ虛空色にして、行者は般若を得て、諸法の空を觀するに、心も亦た隨順にして著せず。是の如き等の種種は、一切諸法に入りて、皆な隨順にして無礙なり。水の渾濁・雜色・不淨ならんに、珠を以て中に著くれば、皆な清淨一色なるが如く、般若も亦た是の如し。人に種種の



問うて曰はく、摩尼寶珠は、頗梨・金銀・車渠・馬瑙・琉璃・珊瑚・琥珀・金剛等の中に於いて、是れ何等の寶なるや。

答へて曰はく、有人の言はく、「此の寶珠は龍王の腦中より出づ。人、此の珠を得れば、毒も害すること能はず、火に入るも焼くこと能はず、是の如き等の功德あり」と。有人の言はく、「是れ帝釋の執る所の金鋼を用つて、阿修羅と闘ひし時、閻浮提に碎落せり」と。有人の言はく、「諸の過去久遠の佛の舍利にして法既に滅盡し、舍利は變じて此の珠と成り、以て衆生を益す」と。有人の言はく、「衆生の福德の因縁の故に、自然に此の珠あり。譬へば、罪の因縁の故に、地獄の中に自然に罪を治するの器あるが如し」と。此の寶珠を如意と名け、定色あること無く、清徹輕妙にして、四天下の物、皆な悉く照現す。如意珠の義は、先に説くが如く、是の寶は、常に能く一切の寶物を出だし、衣服、飲食、意の欲する所に隨つて、盡く能く之を與へ、亦た能く諸の衰惱、病苦等を除く。是の寶珠に二種あり。天上の如意寶あり、人間の如意寶あり。諸天は、福德厚きが故に、珠の德具足し、人は、福德薄きが故に、珠の德具足せず。是の珠を著する所の房舍函篋の中は、其の處にも亦た威徳あり。般若波羅蜜も、亦た是の如しとは、如意寶珠の能く在家の人は、今世の富樂を與ふること、意の欲する所に隨ふが如く、般若波羅蜜は能く出家求道の人に、三乗の解脱の樂を與ふること、意の願ふ所に隨ふなり。如意寶珠の所著の處に在りては、非人も其の便を得ず。般若波羅蜜も亦た是の如く、行者の心と相應すれば、惡邪羅刹も、其の心中に入りて、道意を沮壞し、智慧の命を奪ふこと能はず。

復次に、般若の所在の處には、魔・若くは、魔民・地神・夜叉、諸の惡鬼等は、便を得ること能はず。如意珠は能く四百四病を除く。根本の四病は、風・熱・冷・雜なり。般若波羅蜜も、亦た能く八萬四千の病を除く。根本の四病は、貪・瞋・癡五等分にして、姪欲の病に二萬一千を分ち、瞋恚の病に二萬

【四】「鋼」字、宋元明等他本は皆な「剛」に作る。以下之に順ず。

【五】等分とは、人が食の煩惱と瞋の煩惱と癡の煩惱とを等分に有する心の状態をいふなり。

問うて曰はく、一切の説法人の中に佛と等しき者なく、佛の説き給へる十二部經は、則ち備具せざること無し。云何が善男子は、但だ般若を受持し、讀誦するのみにして、佛と等うして異なること無きや。

答へて曰はく、此の中に、佛は般若を稱歎して、大と爲さんと欲するが故に、十二部經の中に於いて、般若を最勝と爲したまへり。所以何となれば、是の般若波羅蜜を説けば、多く菩提心を發する有り、十二部經を説けば、雜して三乘の意を發すればなり。菩薩の功德を以て、佛の無量身に比するにあらず。此の法身の菩薩は但だ般若のみを説きて、大乘に勸導し、佛は雜説して三乘に勸導したまふが故に、等うして異なること無きなり。

復次に、三事の示現、及び十二部經の根本とは、所謂、般若波羅蜜是なり。十方如恒河沙等の諸佛を供養すると、若くは復た般若の經卷を供養すること有ると、亦た等うして異なること無し。此の中に佛は般若の福德の勝れたる所以の因縁を説きたまふ。所謂、般若は能く一切の苦惱、衰病、怖畏等を破すること、負債の人の王に依るが如し。王は般若に喩へ、負債の人は舍利に喩ふ。舍利は是れ先世の因縁の所成にして、因縁の中には應に諸對を償ふべし。般若波羅蜜の熏修を以ての故に、宿命の因縁、諸對及び飢渴寒熱の得る能はざる所にして、而して諸天、世人に供養せらるゝ所なることを得、負債の人は王に依りて、反つて債主の爲に敬せらるゝが如し。先には諸の衰病、及び怖畏なきことを説き、以て内を明かにし、今は摩尼寶もて、人、非人の其の便を得ざることを説き、以て外を明かにす。是の人は般若波羅蜜を供養するが故に、若くは今世、若くは後世に、若くは身衰、心病、盡く皆な能く除き、諸善願事、意に隨つて能く與へらる。是の般若波羅蜜の大寶を得るが故に、諸の怖畏なく、乏短する所なきこと、譬へば、無價の寶珠もて顯ふ所、皆な得るが如し。

じて、常に捨を行じ、法を錯謬せざる等の諸佛の功德の住處なり。是を以ての故に舍利を供養することを「得」と。世尊よ、舍利は是れ諸功德寶なり、波羅蜜の住處は不垢、不淨なり。波羅蜜の住處は不生、不滅なり。波羅蜜は不入、不出なり、波羅蜜は不増、不損なり、波羅蜜は不來、不去、不住なり、波羅蜜は是れ佛舍利なり、是れ諸の法相波羅蜜の住處なり。是の諸の法相波羅蜜を以て、熏習するが故に、舍利は供養を得。

復次に、世尊よ、三千大千世界の中に滿つる舍利と、如恆河沙等の諸の世界の其の中に滿つる舍利とを置きて一分と作し、人あり、般若波羅蜜の經卷を著して一分と作さんに、二分の中、我は般若波羅蜜を取らん。何となれば、是の般若波羅蜜の中より諸佛の舍利を生じ、是の般若波羅蜜の修熏の故に、舍利は供養を得ればなり。世尊よ、若し善男子、善女人ありて、舍利を供養し、恭敬し、尊重し、讚歎せば、其の功德の報は邊を得べからずして人中、天上の福樂を受けん。所謂、刹利の大姓、婆羅門の大姓、居士の大家、四天王天處乃至他化自在天の中に福樂を受け、亦た是の福徳の因縁を以ての故に、當に苦を盡くすことを得べし。若し是の般若波羅蜜を受け、讀誦し、説き、正しく憶念せば、是の人は能く禪波羅蜜を具足し、乃至能く檀波羅蜜を具足し、能く四念處を具足し、乃至能く十八不共法を具足し、聲聞、辟支佛地を過ぎ、菩提の位に住す。菩薩の位に住し已りて、菩薩の神通を得、一佛界より一佛界に至る。是の菩薩は衆生の爲の故に身を受け、其の應ずる所に隨つて、衆生を成就す。若くは轉輪聖王と作り、若くは刹利の大姓と作り、若くは婆羅門の大姓と作りて、衆生を成就す。是を以ての故に、世尊よ、我は輕慢にして恭敬せざるが故に、舍利を取らざるにあらず。善男子善女人、般若波羅蜜を供養せば、則ち舍利を供養することと爲るを以ての故なり。

復次に、世尊よ、人あり、十方無量阿僧祇の諸の世界の中の、現在の諸佛の法身、色身を見んと欲せば、是の人は應に般若波羅蜜を聞き、受持し、讀誦し、正しく憶念し、他人の爲に廣く説くべし。是の如きの、善男子、善女人は、當に十方無量阿僧祇の世界の中の、諸佛の法身、色身を見るべし。是の善男子、善女人は、般若波羅蜜を行じ、亦た應に法相を以て、念佛三昧を修すべし。

復次に、善男子、善女人、現在の諸佛を見んと欲せば、應當に、是の般若波羅蜜を受け、乃至正しく憶念すべしと。

## 【論】

復次に、「佛は三事の示現に住して十二部經を説きたまふ」とは、

復次に、世尊よ、所在の三千大千世界の中に、若し般若波羅蜜を受持し、供養し、恭敬し、尊重し、讚歎すること有らば、是の處に、若くは人、若くは非人、其の便を得ること能はずして、是の人は漸漸に涅槃に入ることを得。世尊よ、般若波羅蜜の大利益を爲すこと是の如し。三千大千世界の中に於いて、能く佛事を作す。世尊よ、所在の處に、般若波羅蜜あらば、則ち佛ありと爲す。譬へば、無價の摩尼寶の、所住の處に在りては、非人も其の便を得ざるが如し。若くは男子、若くは女人、熱病ありて、是の珠を以て、身の上に著くなれば、熱病は即時に除き差えん。若くは風病あり、若くは冷病あり、若くは雜熱風冷病ありて、珠を以て身の上に著くれば、皆な悉く除き愈えん。若し闇中にては是の寶能く明かならしめ、熱時には能く涼しからしめ、寒時には能く温かならしめ、珠の所住の處、其の地は寒からず、熱からず、時節和適す。其の處には亦た諸餘の毒螫なし。若くは男子、女人の、毒蛇の爲に螫れんに、珠を以て之を示せば、毒は即ち除滅す。

復次に、世尊よ、若し男子女人の、眼痛、膚瘡、盲、瞽ならんに、珠を以て之に示せば、即時に除き愈えん。若し癩瘡、惡腫あらんに、珠を以て其の上に著くれば、病即ち除き癒えん。

復次に、世尊よ、是の摩尼寶所在の水中、水は隨つて一色を作す。若し青き物を以て、裏んで水中に著くれば、水の色は則ち青と爲り、若し黄・赤・白・紅・縹物を以て、裏んで水中に著くれば、水は隨つて、黄・赤・白・紅・縹色を作す、是の如き等の、種種の色物を以て、裏んで水中に著くれば、水は隨つて種種の色を作す。世尊よ、若し水濁らんに、珠を以て水中に著くれば、水は即ち清と爲る。是の珠は其の徳や是の如しと。

爾の時に、阿難、釋提桓因に問うて言はく、「是の摩尼寶は、是れ天上の寶と爲すや、是れ閻浮提の寶と爲すや」と。釋提桓因、阿難に語りて言はく、「是は天上の寶なり。閻浮提の人も亦た是の寶あれども、但だ功德の相少なくして具足せず。天上の寶は、清淨輕妙にして、譬喩を以て比を爲すべからず。

復次に、世尊よ、是の摩尼寶を、若し篋の中に著けて舉げんに、珠は其の功德を出だし、篋を覆するが故に人皆な愛敬す。是の如く、世尊よ、所住の處に在りて、般若波羅蜜の經卷を書すること有れば、是の處には則ち衆の惱患なく、亦た摩尼寶所著の處、則ち衆難なきが如し。世尊よ、佛般泥洹の後、舍利を供養することを得るは、皆な般若波羅蜜の力、禪波羅蜜、乃至檀波羅蜜、內空乃至無法有法空、四念處、乃至十八不共法・一切智・法相・法住・法位・法性・實際・不可思議性・一切種智、是の諸の功德の力なり。善男子、善女人は是の念を作さく、「是の佛の舍利は一切智、一切種智、大慈大悲にして、一切の結使、及び習を斷

【經】

復次に、世尊よ、佛は、三事の示現に住し、十二部經(即ち)修多羅、祇夜乃至優婆提舍を説きたまふが如く、復た善男子、善女人ありて、是の般若波羅蜜を受持し、誦說せんに、等うして異なること無し。何となれば、世尊よ、是の般若波羅蜜の中に、三事の示現、及び十二部經(即ち)修多羅、乃至優婆提舍を生ずるが故なり。

復次に、世尊よ、十方の諸佛の三事の示現に住し、十二部經(即ち)修多羅、乃至優婆提舍を説くと。復た人あり、般若波羅蜜を受け、他人の爲に説くとは、等うして異なることなしと。何となれば、般若波羅蜜の中に諸佛を生じ、亦た十二部經(即ち)修多羅、乃至優婆提舍を生ずればなり。

復次に、世尊よ、若し十方如恆河沙等の世界の中の諸佛を供養し、恭敬し、尊重し、讚歎し、華香乃至幡蓋を以てするあると、復た人あり、般若波羅蜜の經卷を善し、恭敬し、尊重し、讚歎し、華香乃至幡蓋を以てするあると、其の福は正に等し。何となれば、十方の諸佛は、皆な般若波羅蜜の中より生ずればなり。

復次に、世尊よ、善男子、善女人、是の般若波羅蜜を開き、受持し、讀誦し、正しく憶念し、亦た他人の爲に説かば、是の人は、地獄道、畜生道、餓鬼道に墮せず、亦た聲聞、辟支佛地に墮せずと。何を以ての故に、當に知るべし、是の善男子、善女人は、正しく阿耨跋致地の中に住するが故に、是の般若波羅蜜は一切の苦惱衰病を遠離することを。

復次に、世尊よ、若し善男子、善女人あり、是の般若波羅蜜の經卷を善し、受持し、親近し、供養し、恭敬し、尊重し、讚歎せば、是の人は諸の恐怖を離れん。世尊よ、譬へば負債人の、國王に親近し、左右に供給せば、債主、反つて更に是の人を供養し、恭敬し、是の人復た怖畏せざるが如し。何となれば、世尊よ、此の人は、國王に近づくに依り、有力を憑恃するが故なり。是の如く、世尊よ、諸佛の舍利は、般若波羅蜜の熏修の故に、供養、恭敬を待。世尊よ、當に知るべし、般若波羅蜜は王の如く、舍利は負債人の如しと。負債人は王に依るが故に供養を得。舍利も亦た般若波羅蜜の修熏に依るが故に供養を得。世尊よ、當に知るべし、諸佛の一切種智も、亦た般若波羅蜜の修熏を以ての故に、成就することを得と。是を以ての故に、世尊よ、二分の中、我は般若波羅蜜を取る。何となれば、世尊よ、般若波羅蜜の中より、諸佛の舍利、三十二相を生じ、般若波羅蜜の中に、亦た佛の十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法・大慈大悲を生ずればなり。世尊よ、般若波羅蜜の中に五波羅蜜を生じ、波羅蜜の名字を得せしむ。般若波羅蜜の中に、諸佛の一切種智を生ずればなり。

言へり。釋提桓因の意は、一切法の中に於いて、二相なく、舍利を以て小と爲さず、般若波羅蜜を以て大と爲さず。般若波羅蜜には二無く、分別の相無く、新發意の菩薩を利益せんが爲の故に、世諦を以て致す。是の如く、般若波羅蜜を説きて、能く衆生の心をして、無二、無分別ならしむ。是の利益を以ての故に「我は般若を取る」と言ふ。是の時、佛、釋提桓因を讚じたまはく、「善い哉、善い哉」と。能く諸法を分別し、亦た能く善く般若の相を説くを以ての故なり。所謂、無二の相なり。是の故に讚歎したまへり。佛は此の中に自ら譬喩を説きたまはく、「若し人、法性、實際等を分別して、二分と作さんと欲せば、是の人は般若波羅蜜を分別して二分と作さんと欲すと爲す」と。帝釋は自ら般若を説き、又た佛の重ねて説きたまふを聞きて、其の心清淨にして、深信に歡喜して言はく、「一切世間の應に禮敬すべき所なり」と。帝釋は此の中に自ら因縁を説けり、「一切の菩薩は、是の般若を學して、阿耨多羅三藐三菩提を得」と。又た此の中に己が身を以て喩と爲し、己が身を佛に喩へ、般若の經卷を坐處に喩ふ。有人の言はく、「己身を般若に喩へ、坐處を舍利に喩ふ。是の故に、二分の中、我は般若を取る」と。

復次に、「世尊よ、我れ若し般若を受持し讀誦せんに、是の時より乃ち怖畏の相を見ざるに至る。何に況んや、實に怖畏せんや。何となれば、一切の諸法は、無相、無言、無説なればなり。般若波羅蜜は能く人をして、是の無相の法を得せしむるが故に、畏るゝ所なし。般若を受持し、供養する者は、三惡趣、及び二乘道に墮せず、世世に諸佛を離れず、十方の諸佛を供養したてまつる。是の故に、般若波羅蜜は、一切世間の供養すべき所なり。

復次に、佛は其の初に舍利を以て滿つる閻浮提を開き給へり。帝釋は既に二事の勝負を悟り、一切衆生の爲の故に、廣く増して三千大千世界に至り、此の中に自ら因縁を説き、般若波羅蜜を見ると佛を見るとは、「等うして」異なること無きなり。

【三】「是の如く、般若波羅蜜を説きて」八字、宋・宮二本は「是の如く利益するが故に我は（般若波羅蜜を）取りて」に作る。

【三】石本に據れば茲を以て卷の第六十の終りとなし、次行に「大智度經論卷六十」の八字、更に次の經文の首に「摩訶般若波羅蜜經舍利校量品之餘六十一」の十八字を掲げ卷の第六十一の首となす。

尊よ、是の般若波羅蜜は、佛と無二無別なるが故なり。

【論】問うて曰はく、上に七寶の塔を起つるを以て、般若波羅蜜を供養するに〔對〕校し、義已に具足せり。今、佛は何を以てか、舍利を以て經卷に對校したまふや。

答へて曰はく、先には七寶の塔は、是れ舍利の住處なることを明かにし、今は但だ舍利のみを明かにし、以て經卷に對す。舍利は般若には及ばすと雖も、而も閻浮提に滿ち、般若の妙の故に、但だ經卷のみを明かにす。

復次に、出家の人は多く智慧を食る。智慧は是れ解脱の因縁なるが故なり。在家の人は多く福德を食る。福德は是れ樂の因縁なるが故なり。出家の人は多く意識の知る所の物を食り、在家の人は多く五識の知る所の物を食る。釋提桓因は、已に福樂の果報最大なることを證し、在家の人の中に於て、最も尊勝たり。是を以ての故に、佛は釋提桓因に問ひたまふ。釋提桓因の言さく、「我は二分の中に於て、般若波羅蜜の經卷を取らん」と。此の中に自ら因縁を説けり、「世尊よ、我は敢て輕慢して、舍利を恭敬せざるにはあらず、我は芥子許の舍利を供養するの功德無量無邊にして、乃ち佛を得て功德盡きざることを知る。何に況んや、閻浮提に滿つるをや。世尊よ、菩薩は身を受けて、便ち舍利あるも人の貴ばざる所なり。成佛を得る時、舍利は般若を以て熏修するが故に、人の恭敬し、尊重し、供養する所なり。是の故に、二分の中、我は勝れたる者を取るなり」と。

問うて曰はく、舍利弗は、釋提桓因の世諦を以ての故に、般若波羅蜜を取ると言へることを知り。何を以ての故に難するや。

答へて言はく、釋提桓因は在家の中にありて、煩惱の爲に縛せられ、五欲に覆はれ、而も能く般若波羅蜜を説く。是の事は希有なり。是を以ての故に、舍利弗は質問して、釋提桓因をして更に佛の深義を問はしめんと欲す。故に難す。釋提桓因は、舍利弗の意に順つて答へて、「是の如し」と

供養すべし。何となれば、諸の菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜の中に學して、阿耨多羅三藐三菩提を得ればなり。世尊よ、我は常に善法堂上に在りて坐す。我、若し座に在らざる時は、諸の天子來りて我を供養するが故に、我が坐する處なるが爲に禮を作し、遶り竟りて遶り去る。諸の天子は是の念を作さく、「釋提桓因は是處に在りて坐し、諸の三十三天の爲に法を説くが故に」と。是の如く、世尊よ、在所の處に是の般若波羅蜜の經卷を書し、受持し、讀誦し、他の爲に演說せば、是處に十方世界の中の諸天、龍、夜叉、健闍婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽は、皆な來りて禮拜し、般若波羅蜜を供養し已りて去る。何となれば、是の般若波羅蜜の中には、諸佛及び一切衆生の樂具を生ずればなり。諸佛の舍利も亦た是の一切種智の住處の因縁なり。是を以ての故に、世尊よ、二分の中、我は般若波羅蜜を取る。

復次に、世尊よ、我れ若し般若波羅蜜を受持し、讀誦し、心深く法中に入らば、我れ是の時に怖畏の相を見ず。何となれば、世尊よ、是の般若波羅蜜は相無く、貌無く、言無く、説無ければなり。世尊よ、無相、無貌、無言、無説は、是れ般若波羅蜜乃至是れ一切種智なり。世尊よ、般若波羅蜜、若し當に有相にして無相に非ずんば、諸佛は一切法の無相、無貌、無言、無説を知りて、阿耨多羅三藐三菩提を得、弟子の爲に諸法も亦た無相、無貌、無言、無説と説くべからず。世尊よ、般若波羅蜜は、實に是れ無相、無貌、無言、無説なるを用つての故に、諸佛は一切諸法の無相、無貌、無言、無説を知りて、阿耨多羅三藐三菩提を得、弟子の爲に、諸も亦た無相、無貌、無言、無説と説く。是を以ての故に、世尊よ、是の般若波羅蜜をば、一切世間の諸の天人、阿修羅は、應に供養し、恭敬し、尊重し、讚歎し、華香、瓔珞、乃至幡蓋もてすべし。

復次に、世尊よ、若し人あり、般若波羅蜜を受持し、親近し、讀誦し、説き、正しく憶念し、及び書し、華香、乃至幡蓋を供養せば、是の人は地獄・畜生・餓鬼道の中に墮せず、聲聞、辟支佛地に墮せず、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得て、常に諸佛を見たまつり、一佛界より一佛界に至りて、諸佛を供養し、恭敬し、尊重し、讚歎するに華香、乃至幡蓋を以てす。復次に、世尊よ、三千大千世界に滿つる佛舍利を一分と作し、般若波羅蜜の經卷を書せるを一分と作さば、是の二分の中、我は故に般若波羅蜜を取らん。何となれば、世尊よ、是の般若波羅蜜の中に諸佛の舍利を生ずればなり。是を以ての故に、舍利は供養、恭敬、尊重、讚歎を得。是の善男子、善女人は、舍利を供養し、恭敬するが故に、天上人中の福樂を受けて、常に三惡道に墮せず、所願の如く、漸く三乗の法を以て涅槃に入る。是の故に、世尊よ、若くは現在佛を見たまつること有ると、若くは般若波羅蜜の經卷を見るときは、等うして異なること無し。何となれば、世



## 卷の第五十九

## 第三十七 校量舍利品

【經】

佛、釋提桓因に告げて言はく、憍尸迦よ、若し閻浮提に滿つる佛舍利を一分と作し、復た人あり、般若波羅蜜の經卷を書して一分と作さば、二分の中、汝は何所を取るや」と。釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、若し閻浮提に滿つる佛舍利を一分と作し、般若波羅蜜の經卷を一分と作さば、二分の中、我は寧ろ般若波羅蜜の經卷を取らん。何となれば、世尊よ、我は佛舍利に於いて恭敬せざるには非ず、尊重せざるには非ず、舍利は般若波羅蜜の中より生じ、般若波羅蜜に薰修せらるるを以て故に、是の舍利を供養し、恭敬し、尊重し、讚歎することを得ればなり」と。

爾の時、舍利弗、釋提桓因に問ふ、憍尸迦よ、是の般若波羅蜜は、取る可からず。色無く、形無く、對無く、一相、所謂、無相なり。汝、云何にして取らんと欲するや。何となれば、是の般若波羅蜜は取ることを爲さざるが故に出で、捨つることを爲さざるが故に出で、増減、聚散、損益、垢淨を爲さざるが故に出づ。是の般若波羅蜜は、諸佛の法を與へず、凡人の法を捨てず。辟支佛の法、阿羅漢の法、(有)學の法を與へず、凡人の法を捨てず、無爲性を與へず、有爲性を捨てず、內空乃至無法有法空を與へず、四念處乃至一切種智を與へず、凡人の法を捨てざればなり」と。釋提桓因、舍利弗に語るらく、「是の如し、是の如し。舍利弗よ、若し人あり、是の般若波羅蜜は、諸佛の法を與へず、凡人の法を捨てず、乃至一切種智を與へず、凡人の法を捨てずと知らば、是の菩薩摩訶薩は、能く般若波羅蜜を行じ、能く般若波羅蜜を修す。何となれば、般若波羅蜜は、二法を行ぜざればなり。不二法相は是れ般若波羅蜜なり。不二法相は是れ禪波羅蜜乃至檀波羅蜜なり」と。爾の時、佛、釋提桓因を讚じて言はく、「善い哉、善い哉。憍尸迦よ、汝の所説の如く、般若波羅蜜は二法相を行ぜざるが故に、不二法相は是れ般若波羅蜜なり。不二法相は是れ禪波羅蜜乃至檀波羅蜜なり。憍尸迦よ、若し人、法性の二相を得んと欲せば、是の人は般若波羅蜜の二相を得んと欲すと爲す。何となれば、憍尸迦よ、法性と般若波羅蜜とは無二無別なればなり。乃至檀波羅蜜も、亦た是の如し。若し人、實際不可思議性の二相を得んと欲せば、是の人は般若波羅蜜の二相を得んと欲すと爲す。何となれば、般若波羅蜜と不可思議性とは無二無別なればなり」と。

釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、一切世間の人、及び諸天、阿修羅は、應に般若波羅蜜を禮拜し、

【一】石本は「舍利校量品第三十六」、聖本は「釋第三十六品」、宋・元・明三本及び宮本は「舍利品第三十七」に作る。

ち聞く所の如く、般若の中に人相を取らず、法相を取らず、是の心を用つて供養するが故に福德大なり。

復次に、般若波羅蜜は是れ一切の十方諸佛の母にして、亦た是れ諸佛の師なり。諸佛の是の身に三十二相、八十隨形好、及び無量の光明、神通變化を得たまへるは、皆な是れ般若波羅蜜の力なり。是を以ての故に、般若波羅蜜を供養するは勝れたり。是等の因縁を以ての故に、十方の諸佛を供養するに勝れたり。佛を敬せざるには非ざるなり。

【二】石本は茲に「第二十五品を釋し覺る」聖本は「大智度經論第五十八（第三十三品を釋し第三十五品に註す）」を附加す。

復次に、山河・樹木・土地・城廓・一切の鬼神は、皆な四天王に屬し、四天王來るが故に、皆な隨從して共に來る。是の諸の鬼神の中には、般若の經卷の得ざる者あり、是の故に般若波羅蜜の處に來至し、供養し、讀誦し、禮拜す。亦た善男子を利益せんが爲の故に、此も亦た是れ今世の功德もて、諸天・善神來るを以ての故に、天帝は肉眼の人の疑を破するが故に、「云何にして大徳の天の來るを知るや」と問ひ、時に「大光明を見、若くは殊異の香を聞く」と答ふ。亦た先に説くが如く、住處清淨なるを以ての故なり。

問うて曰はく、人身は不淨内に充つ、外のみ淨なるも何ぞ益せん。

答へて曰はく、其の住處及び衣服を淨うすれば、則ち外に不淨なく、外に不淨なきが故に、諸天は歡喜す。譬へば、國王、大人の來る處には、群細の庶民は、避け去るが如く、諸の大徳の天來れば、小鬼の去るも、亦た是の如し。大天の威徳重きが故に、舊住の小鬼は避け去る。是の諸の大天、來り近づくが故に、是の人の心は、則ち清淨廣大なり。行者、若し大徳の天をして來らしめんと欲せば、當に經に説く所の如くすべし。惡鬼遠く去るが故に身心輕便なり。所以何となれば、諸の惡鬼を近づくれば、人の身心をして漸く惡しからしむ。譬へば瞋人を近づくれば、喜んで人をして瞋らしめ、美色を近づくれば、則ち人をして好色の情を發さしむるが如し。是の人は内外の惡しき因縁を遠離するが故に、臥するに安らかに、覺するに安らかに、諸の惡夢なく、若し夢に但だ諸佛を見たてまつることは、經に説く所の如し。

問うて曰はく、般若波羅蜜は佛身の中に在り、若し一佛を供養すれば、則ち般若波羅蜜を供養す。何を以てか、十方の佛を供養することは、般若波羅蜜を供養するに如かずと言ふや。

答へて曰はく、供養する者の心に、若し佛を供養して人相を取らんに、人は畢竟不可得なり。相を取るを以ての故に、福德は大なりと雖も、而も功德は薄少なり。般若波羅蜜を供養する者は、則

法の處を清淨に、華香、幡蓋、香水を地に灑ぎ、諸の不淨を無からしむ。是の故に諸天は歡喜し、亦た諸の聽法者、說法者を利益す。多く内外の經書を読まずと雖も、深く般若波羅蜜の義に入るが故に、心怯弱ならず、没せず、畏かず、恐れず。何となれば、般若波羅蜜の中には、定法の執るべく、難すべく、破すべきもの有ること無ければなり。

復次に、是の般若波羅蜜の中に、亦た分別して諸法の世間、出世間、常、無常、善、不善等を説き、法として有らざる無く、備に諸法あるを以ての故に、怯まず畏れざるなり。若し但だ一法あれば、則ち闕くる所多きが故に恐れあり。是の菩薩は般若波羅蜜を行じ、煩惱折薄し、諸の福德増益して、身を熏するが故に、威徳敬すべし。身は是れ功徳の住處なり。故に形體は醜陋にして能く作す所なしと雖も、猶ほ人の爲に愛重せらる。何に況んや、自然に端正にして、能く人を利益するをや。

問うて曰はく、若し諸佛、沙門、婆羅門の愛敬する所は爾るべし。父母の愛念は何ぞ稱するに足らんや。

答へて曰はく、人は父母の生ずる所なりと雖も、父母の教に順ぜざれば、則ち愛念せず、菩薩は恭順の中に於いて、倍復た殊勝なり。道徳を供養し、恭敬し、尊重するが故に、沙門婆羅門は、平實至誠を愛敬し、口に妄言せず、深く後世の功徳を愛し、今世の樂に著せず、下人を接養し、自ら高大ならず。若し他の過あるを見るすら、尙ほ其の實を説かず、何に況んや、讒毀せんや。若し必ず已むを得ざるも終に盡く説かず、孤窮を給恤して、已に私附せず。是の如き等の事は、皆な是れ般若波羅蜜の力なり。是の人の功徳は、遠く聞ゆるが故に、諸天、世人の皆な愛敬する所なり。是の般若波羅蜜を供養するが故に、世世に常に六波羅蜜等を得て、斷絶すること有ること無く、時に是の人の福德智慧の名聞ゆるが故に、若し問難、毀謗あるも、悉く能く降伏す。

復次に、諸天は般若波羅蜜をば供養するが爲の故に、般若の所住の處に來至す。

の聲聞に恭敬し、圍遶せられて、法を説くを見る。復た十方の無數百千萬億の諸佛の般涅槃を見、復た無數百千萬億の諸佛の七寶の塔を見、諸塔を供養し、華香乃至幢蓋もて恭敬し、尊重し、讚歎するを見る。憍尸迦よ、是の善男子、善女人は、是の如きの善夢を見、臥して安く、覺めて安し。諸天は其の氣力を益して、自ら其の身體の輕きを覺え、便ち大に飲食、衣服、臥具、湯藥を貪著せず。此の四供養に於いて、其の心輕微なることは、譬へば、比丘の坐禪して、禪定より起つに、心、定と合して、飲食に貪著せずして、其の心輕微なるが如し。何となれば、憍尸迦よ、諸天の法は、應に諸味の精を以て、其の氣力を益すべければなり。十方の諸佛及び天、龍、鬼神、阿修羅、犍闍婆、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽も、亦た其の氣力を益す。是の如く、憍尸迦よ、善男子、善女人は、今世に、是の如きの功德を得んと欲せば、應當に般若波羅蜜を受持し、親近し、讀誦し、説き、正しく憶念し、亦た薩婆若の心を離れざるべし。

憍尸迦よ、善男子、善女人は、受持し、乃至、正しく憶念すること能はずと雖も、應當に經卷を善持し、華香、瓔珞乃至幡蓋もて、恭敬し、供養し、尊重し、讚歎すべし。憍尸迦よ、若し善男子、善女人、是の般若波羅蜜を聞いて、受持し、讀誦し、説き、正しく憶念し、經卷を書し、華香乃至幡蓋もて、恭敬し、供養し、尊重し、讚歎せんに、是の善男子、善女人は、功德甚だ多く、十方の諸佛及び弟子を供養し、衣服、飲食、臥具、湯藥もて、恭敬し、尊重し、讚歎し、諸佛及び弟子の般涅槃の後、七寶の塔を起し、華香乃至幢蓋をもて恭敬し、供養し、尊重し、讚歎するに勝れり。

【論】問うて曰はく、天上に自ら般若あり、何を以てか、説法の人の所に來至すれば、其の膽力を益すや。

答へて曰はく、天上に般若ありと雖も、諸天は衆生を憐愍するが故に來り、天來れば惡鬼遠く去り、法師の膽力を益し、其をして樂説せしめ、又た衆生をして、益信敬を加へしむ。是を以ての故に來る。有人の言はく、「天の甘露味は微細にして、沾洽く能く毛孔に入り、善男子の四大諸情は、柔軟輕利にして、樂んで説く所あらしむ」と。

問うて曰はく、一切の般若を説く者は、皆な諸天の甘露味を得、其をして樂説せしむるや不や。

答へて曰はく、不なり。若し行者あれば、一心に佛道を求め、結使を折伏し、衣服淨潔に、所説

憍尸迦よ、三千大千世界の中の、所有る諸の四天王乃至阿迦尼吒天、及び十方世界の中の諸の四天王、乃至阿迦尼吒天、阿耨多羅三藐三菩提心を發す者は、是の善男子、善女人を護持し、諸惡も便を得ること能はず、其の宿命の重罪を除く。

憍尸迦よ、是の善男子、善女人も、亦た是の今世の功德を得。所謂、諸の天子は、阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、皆な是の處に來到す。何となれば、憍尸迦よ、諸の天子は、阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、一切衆生を救護し、一切衆生を捨てず、一切衆生を安樂にせんと欲するが故なり」と。

爾の時、釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、善男善子女人は、云何にして當に、諸の四天王天、乃至阿迦尼吒天來り、及び十方世界中の諸の四天王乃至阿迦尼吒天來りて、般若波羅蜜を見、受け、讀誦し、説き、供養し、禮拜する時を知るべきや」と。佛、釋提桓因に告げたまはく、「憍尸迦よ、若し善男子、善女人は大なる淨光明を見れば、必ず大德の諸天ありて來り、般若波羅蜜を見て、受け、讀誦し、説き、供養し、禮拜する時と知らん。」

復次に、憍尸迦よ、善男子、善女人、若し異妙なる香を聞かば、必ず大德の諸天ありて來り、般若波羅蜜を見、受け、讀誦し、説き、供養し、禮拜する時と知らん。

復次に、憍尸迦よ、善男子善女人は、淨潔を行ずるが故に、諸天、其の處に來到し、般若波羅蜜を見、受け、讀誦し、説き、供養し、歡喜し、禮拜す。是の中に小鬼の輩あらば即時に出で去り、任に堪ふること能はず。是れ大德諸天の威德の故なり。是の大德諸天來るを以ての故に、是の善男子、善女人は、大心を生ず。是を以ての故に、般若波羅蜜の所住の處には、四面に諸の不淨あるべからず。應に燈を然し、香を燒き、衆の名華を散じ、衆の香を地に塗り、衆の蓋、幢、幡もて、種種に嚴飾すべし。

復次に、憍尸迦よ、善男子、善女人は、法を説く時、終に疲極すること無く、自ら身の輕きを覺え、心樂しみ、法に隨つて偃息し、臥し、覺め、安隱にして、諸の惡夢なく、夢中には、諸佛の三十二相、八十隨形好あり、比丘僧に恭敬し、圍遶せられて、法を説くを見、諸佛の邊に在りて法敷、所謂六波羅蜜、四念處乃至十八不共法を聽受し、六波羅蜜の義を分別し、四念處乃至十八不共法をも、亦た其の義を分別すと見、亦た菩提樹の莊嚴殊妙なるを見、諸の菩薩の菩提樹に趣きて、阿耨多羅三藐三菩提を得るを見、諸佛の成じ已りて、法輪を轉ずるを見、百千萬の菩薩、共に集りて法を論議し、應に是の如く薩婆若を求むべく、應に是の如く、衆生を成就すべく、應に是の如く、佛世界を淨むべしとするを見る。亦た十方の無數百千萬億の諸佛を見、亦た其の名號を聞く。某の方、某の界、某の佛の、若干百千萬の菩薩、若干百千萬

【一〇】「某の方、某の界、某の佛の」、聖本は「其の方、其の界、其の佛の」に作る。

なり。何となれば、是の善男子、善女人は、是の法の没者、恐怖者を見ざればなり。憍尸迦よ、善男子、善女人、般若波羅蜜を受持し、乃至正しく憶念し、華香もて供養し、乃至憍蓋もて(供養)せば、亦た是の今世の功德を得。

復次に、憍尸迦よ、善男子善女人、般若波羅蜜を受持し、乃至、正しく憶念し、經卷を書持し、華香もて供養し、乃至憍蓋もて(供養)せば、是の人は父母の爲に愛せられ、宗親、知識に念ぜられ、諸の沙門、婆羅門に敬せられ、十方の諸佛及び菩薩摩訶薩、辟支佛、阿羅漢乃至須陀洹に愛敬せられ、一切の世間、若くは天、若くは魔、若くは梵及び阿修羅等も皆な亦た愛敬せん。是の人、檀波羅蜜を行するや、檀波羅蜜斷絶する時あること無く、尸羅波羅蜜、鬘提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜も、亦た斷絶する時あること無し。内空を修して斷ぜず乃至無法有法空を修して斷ぜず、四念處を修して斷ぜず、乃至十八不共法を修して斷ぜず、諸の三昧門を修して斷ぜず、諸の陀羅尼門を修して斷ぜず、諸の菩薩の神通を修して斷ぜず、衆生を成就し佛世界を淨めて斷ぜず、乃至一切種智を修して斷ぜず、是の人は亦た能く難論、毀謗を降伏す。善男子善女人は、般若波羅蜜を受持し乃至正しく憶念し、薩婆若の心を離れず、經卷を書持し、華香を供養し、乃至憍蓋もて(供養)せば、亦た是の今世、後世の功德を得。

復次に、憍尸迦よ、善男子、善女人、經卷を書持せんに、所住の處に在りて、三千大千世界の中の所有る諸の四天王天、阿耨多羅三藐三菩提心を發す者は皆な是の處に來到し、般若波羅蜜を見て受(持)し、讀誦して説き、供養し禮拜して還つて去る。三十三天、夜摩天、兜率陀天、化樂天、他化自在天、梵衆天、梵輔天、梵會天、大梵天、光天、少光天、無量光天、光音天、淨天、少淨天、無量淨天、遍淨天、無蔭行天、福德天、廣果天の阿耨多羅三藐三菩提心を發す者も皆な是の處に來到して、般若波羅蜜を見、受け、讀誦し、説き、供養し禮拜して還つて去る。淨居の諸天、所謂無誑天、無熱天、妙見天、喜見天、色究竟天も、皆な是の處に來到し、是の般若波羅蜜を見、受け、讀誦し、説き、供養し禮拜して還つて去る。

復次に、憍尸迦よ、十方世界の中の諸の四天王天、乃至廣果天、阿耨多羅三藐三菩提心を發す者、及び淨居天、並に餘の諸の天、龍、鬼神、健闍婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽も亦た來りて、般若波羅蜜を見、受け、讀誦し、説き、供養し、禮拜して還つて去る。是の善男子善女人は、應に是の念を作すべし、十方世界の中の諸の四天王天乃至廣果天、阿耨多羅三藐三菩提心を發す者、及び淨居天、並に餘の諸の天、龍、鬼神、健闍婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽は來りて、般若波羅蜜を見、受け、讀誦し、説き、供養し、禮拜するに、我は則ち法を施し已んぬ」と。

答へて曰はく、供養に二種あり。一には効他の供養、二には深心の供養なり。般若の功德を知りて、深心に供養するが故に、二世の功德を得、是の般若には種種の門ありて入る。若し聞持し、乃至正しく憶念する者は、智慧、精進門より入り、書寫し供養する者は、信及び精進門より入る。若し一心に深信すれば、則ち經卷を供養するに勝れたり。若し一心ならざれば、受持すと雖も、而も如かず。

復次に、如意寶珠の如き有り、是れ無記の色法にして、無心無識なり。衆生の福德の因縁を以ての故に生ず。人ありて供養せば、能く人をして意に隨つて所得あらしむ。何に況んや、般若波羅蜜は是れ無上の智慧、諸佛の母にして、諸の法寶の中にて、是れ第一の寶なるをや。若し人、所聞の如く、一心に信受し供養せば、云何ぞ二世の功德を得ざらん。但だ人は一心に供養せず、又た先世の重罪の故に、般若を供養すと雖も、而も上の如き功德を得ず。般若には咎なきなり。

【經】佛、釋提桓因に告げたまはく、「憍尸迦よ、是の善男子、善女人、般若波羅蜜を讀誦し、説かんと欲する時、無量百千の諸天、皆な來りて法を聽く。是の善男子、善女人の、般若波羅蜜の法を説くや、諸の天子は其の瞻力を益す。是の諸の法師、若し疲極して法を説くことを欲せざれば、諸天は其の瞻力を益すが故に、便ち能く更に説く。善男子、善女人は、是の般若波羅蜜を受持し、乃至、正しく憶念し、華香乃至伎樂もて供養するが故に、亦た是の今世の功德を得。

復次に、憍尸迦よ、是の善男子、善女人は、四部衆の中に於いて、般若波羅蜜を説く時、心に怯弱なく、若し論難あるも、亦た畏想なし。何となれば、是の善男子善女人は、般若波羅蜜の爲に護持せらるればなり。般若波羅蜜中には、亦た一切法を分別して、若くは世間、若くは出世間、若くは有漏、若くは無漏、若くは善、若くは不善、若くは有爲、若くは無爲、若くは聲聞法、若くは辟支佛法、若くは菩薩法、若くは佛法とす。善男子、善女人は、内空に住し、乃至、無法有法空に住するが故に、能く般若波羅蜜を難する者の有ることを見ず、亦た難を受くる者を見ず、亦た般若波羅蜜を見ざるなり。是の如きの善男子、善女人は般若波羅蜜の爲に護持せらるるが故に、能く難壞する者あること無し。

復次に、善男子、善女人は、般若波羅蜜を受持し、乃至正しく憶念する時、没せず、畏れず、怖かざる



答へて曰はく、般若波羅蜜は、無量無邊なれば、功德も亦た無量無邊なり。説の未だ究竟せざる中間に、外道、梵志及び魔の來るが故に、傍かたはらに異事に及ぶ。今は還つて續いて聞かんと欲す。帝釋は深く福德の果報を愛し、樂んで般若の功德を聞き、聽くに厭足すること無く、今更に説くことを聞かんと欲するが故に、自ら因縁を説けり。世尊よ、若し人、般若波羅蜜を受持し、乃至、正しく憶念せば、則ち三世の諸佛の、無上道の功德智慧を受く。所以何となれば、般若の中に、應に一切種智を求むべく、一切種智の中に、應に般若を求むべければなりと。上品の末に説くが如く、行者、若し般若を受持し、發心して、阿耨多羅三藐三菩提を求め、衆生を度せんが爲の故に、般若波羅蜜等の諸の功德、所謂ナ十善道、乃至十八不共法を集むれば、世間に是の善法の因縁現はるゝが故に、刹利の大姓、乃至諸佛有り。佛、天帝に告げたまはく、「是の人は、但だ上の如き功德を得るのみならず、亦た無量の戒衆等の功德を得」と。「戒衆」とは、是の菩薩は般若波羅蜜を行じ、一切衆生の中に於いて、畢竟無畏施を修するなり。衆生の十方中の數は無量無邊、三世中の數も亦た無量無邊、六道四生の種類の各各の相も、亦た無量無邊なり。此の無量無邊の衆生の中に於て、第一に愛樂する所の物、所謂、壽命を施す。是の故に無量戒衆の果報を得。是の如き不殺等の戒は、但だ名字のみを説けば、則ち二百五十なり。毘尼の中に略説すれば則ち八萬四千、廣く説けば則ち無量無邊なり。是の戒を凡夫の人は、或は一日に受け、或は一世、或は百千萬世（に受く）。菩薩は世世に、一切衆生の中に於いて、無畏を施し、乃ち無餘涅槃に入るに至る。是を無量の戒衆と名く。乃至解脫知見衆も亦た是の如く、義に隨つて分別す。是の五衆の功德は、二乘に勝ること計量すべからず。若し人、般若波羅蜜を書寫し供養せば、今世・後世の功德を得。

問うて曰はく、今世後世の功德は深重にして、書持供養は輕微なり。云何にして二世の功德を得るや。

【九】「十善道、乃至十八不共法を集むれば、世間に是の善法の……現はるる」原文十七字、聖本缺之。

答へて曰はく、名字を説くと雖も稱美を爲さず、皆な般若の中に入るが爲の故に説く。佛、阿難に語りたまはく、「一切の有爲法の中、智慧は第一なり、一切の智慧の中、彼岸に度す般若波羅蜜は第一なり。譬へば、路を行くに衆の伴ありと雖も、導師は第一なるが如し。般若も亦た是の如く、一切の善法は、各各力ありと雖も、般若波羅蜜は能く示導し、三界を出でて三乘に到る。若し般若波羅蜜無ければ、布施等の善法を行すと雖も、隨受業行の果報盡くすること有り。盡くすること有るを以ての故に、尙ほ小乘の涅槃すら得ること能はず、何に況んや、無上道をや。若し布施等の善法は、能く佛道の相の如く、不二、不生、不滅、不得、不失、畢竟空寂なりと觀ぜば、是を薩婆若に廻向すと名く。是の布施の福は世世に常に果報を受けて而も盡きず、後に當に一切種智を得べし。布施の如く、一切法も亦た是の如きの相なり。

問うて曰はく、佛は何を以てか、不二の因縁を答へずして、還つて不二を以て解したまひしや。答へて曰はく、阿難は不二の因縁を問はず、但だ「何の法か是れ不二なる」と問へり。是の故に佛、答へたまはく、「色等の諸法は不二なるが故に、般若波羅蜜は、能く五事をして、等しく波羅蜜と作らしむ。故に但だ般若波羅蜜のみを稱譽す」と。佛は是の義をして、了了に解し易からしめんと欲するが故に、是の喩を作したまふ。譬へば大地の能く萬物を生ずるが如く、般若波羅蜜も亦た是の如く、能く一切善法の種子を持する者なりと。發心従り來た、般若波羅蜜を除いて、餘の一切の善法は、是れ因縁和合する者にして、是の佛道の中に、一心に信忍し精進して、休せず息せず、受けて通達し、壞せざることを欲すれば、是の如き等の法あり。事を成辦することを得る者は、是れ増長の者にして、發心より起りて、諸の波羅蜜を學し、一地従り一地に至る、乃至佛地是なり。問うて曰はく、帝釋は何を以ての故に、佛、行者の般若を受持する功德は、未だ盡きずと説きたまへりと言ふや。

【八】「不二の因縁を答へずして」、宋・元・明・宮・聖各本は「不二の因縁を答ふるに」作る。

に現ず、般若波羅蜜を受持し、乃至正しく憶念するが故に、世間に便ち刹利の大姓、婆羅門の大姓、居士の大家、四天王天乃至阿迦尼吒の諸天あり。般若波羅蜜を受持し、乃至正しく憶念するが故に、便ち須陀洹乃至阿羅漢、辟支佛、菩薩摩訶薩あり。般若波羅蜜を受持し、乃至正しく憶念するが故に、諸佛は世間に出でたまふ」と。

爾の時に、佛、釋提桓因に告げたまはく、「憍尸迦よ、善男子、善女人般若波羅蜜を受持し、乃至正しく憶念せば、我は但だ爾所の功德あるのみと説かず。何となれば、憍尸迦よ、是の善男子、善女人は、般若波羅蜜を受持し、乃至正しく憶念し、薩婆若の心を離れずんば、無量の戒衆成就し、定衆、慧衆、解脫衆、解脫知見衆を成就すればなり。

復次に、憍尸迦よ、是の善男子、善女人、能く般若波羅蜜を受持し、乃至、正しく憶念し、薩婆若の心を離れずんば、當に知るべし、是の人は佛の如しと爲すことを。

復次に、憍尸迦よ、一切の聲聞、辟支佛の有する所の、戒衆、定衆、慧衆、解脫衆、解脫知見衆は、是の善男子善女人の、戒衆乃至解脫知見衆に及ばざること、百分、千分、千億萬分、乃至算數、譬喩も及ぶ能はざる所なり。何となれば、是の善男子善女人は、聲聞、辟支佛地中に於て、心に解脫を得、更に大乘の法を求めざるが故り。

復次に、憍尸迦よ、若し善男子善女人あり、般若波羅蜜の經卷を書持し、華香、瓔珞、乃至伎樂もて供養し、恭敬し、尊重するも、亦た今世、後世の功德を得」と。爾の時、釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、是の善男子善女人は、般若波羅蜜を受持し、乃至正しく憶念し、薩婆若の心を離れずして、般若波羅蜜を供養し、華香乃至伎樂もて恭敬し、尊重せば、我れ常に當に是の人を守護すべし」と。

「論」釋して曰はく、阿難は多聞の力もて、能く空を分別すと雖も、而も未だ欲を離れざるが故に、深く入ること能はず。常に佛に侍したてまつると雖も、數空事を問難せず。今、佛は般若波羅蜜を讚歎し、亦た行者をも讚歎したまふ。是の故に、阿難、佛に白して言さく、「世尊よ、何を以てか、餘の波羅蜜、及び諸法を稱歎せずして、而も獨り般若波羅蜜を稱歎したまふや」と。

問うて曰はく、佛は初より以來、常に六波羅蜜の名を説きたまへり。今、阿難は何を以てか稱説し給はずと言へるや。

【經】

爾の時、慧命阿難、佛に白して言さく、「世尊よ、何を以ての故に、檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、鬘提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜乃至十八不共法を稱譽せずして、但だ般若波羅蜜のみを稱譽したまふや」と。佛、阿難に告げたまはく、「般若波羅蜜は五波羅蜜乃至十八不共法に於いて尊導たり。阿難よ、汝が意に於いて云何。薩婆若に廻向せざる布施をば檀波羅蜜と稱し得るや不や」と。「不なり、世尊よ」と。「薩婆若に廻向せざる尸羅、鬘提、毘梨耶、禪、智慧は、是れ般若波羅蜜なりや不や」と。「不なり、世尊よ」と。「是を以ての故に、般若波羅蜜は、五波羅蜜、乃至十八不共法に於て尊導たることを知る。是の故に稱譽す」と。

阿難、佛に白して言さく、「世尊よ、云何なれば布施は薩婆若に廻向して檀波羅蜜と作り、乃至般若波羅蜜と作るや」と。佛、阿難に告げ給はく、「無二法を以て布施し、薩婆若に廻向せば、是を檀波羅蜜と名け、不生不可得を以て薩婆若に廻向する布施、是を檀波羅蜜と名く。乃至無二法の智慧を以て薩婆若に廻向せば、是を般若波羅蜜と名け、不生不可得を以て薩婆若に廻向する智慧、是を般若波羅蜜と名く」と。

阿難、佛に白して言さく、「世尊よ、云何なれば不二法を以て薩婆若に廻向する布施、是を檀波羅蜜と名け、乃至不二法を以て薩婆若に廻向する智慧、是を般若波羅蜜と名くるや」と。佛、阿難に告げ給はく、「色は不二法なるを以ての故に、受・想・行・識は不二法なるが故に、乃至阿耨多羅三藐三菩提は不二法なるが故に」と。

「世尊よ、云何なれば色は不二法、乃至阿耨多羅三藐三菩提は不二法なるや」と。佛の言はく、「色、色相は空なり。何となれば檀波羅蜜と色とは不二不別なり、乃至阿耨多羅三藐三菩提と檀波羅蜜とは不二不別なればなり。五波羅蜜も亦た是の如し。是を以ての故に、阿難よ、但だ般若波羅蜜のみを稱譽す、五波羅蜜乃至一切種智に於いて尊導たり。阿難よ、譬へば、地の如し、種を以て中に散ずるに、因縁の和合を得るが故に便ち。生ず是の諸の種子は、地に依りて而して生ず。是の如く、阿難よ、五波羅蜜は、般若波羅蜜に依りて生ずることを得、四念處乃至一切種智も、亦た般若波羅蜜に依りて生ずることを得。是を以ての故に、阿難よ、般若波羅蜜は、五波羅蜜乃至十八不共法に於て尊導たり」と。

爾の時、釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、佛の説きたまへる、善男子、善女人の般若波羅蜜を受持し、乃至正しく憶念する者の功德は、未だ盡きず。何となれば、般若波羅蜜をば受持し、乃至正しく憶念すれば、則ち三世諸佛の無上道を受くればなり。何となれば、薩婆若を得んと欲せば、當に般若波羅蜜の中より求むべく、般若波羅蜜を得んと欲せば、當に薩婆若の中より求むべければなり。世尊よ、般若波羅蜜をば受持し、乃至正しく憶念するが故に、十善道世に現じ、四禪、四無量心、四無色定乃至十八不共法世

舍利弗よ、般若波羅蜜を説く時は、但だ此の梵志のみに非ず、一切世間の人、惡心を持し來るも便を得ること能はず。何となれば、一切の諸佛及び諸菩薩、諸天は、常に般若を守護するが故なり。所以何となれば、諸佛・菩薩・天人は是の念を作さく、「我等は皆な般若より生ずるが故に」と。魔來り、難問して、破壊せんと欲するも、亦た是の如し。是の時に、會中の諸の天子は、先には般若の功德を聞き、今は證驗を見て、心大に歡喜し、華を化して供養し、是の願を作さく、「般若波羅蜜をして、久しく閻浮提に住せしめん」と。是の事は下に廣く説くが如し。

佛は即ち印可したまふに、諸天は佛前に於て、自ら誓つて言はく、「行者若し般若波羅蜜を聞受し、乃至正しく憶念せば、我等は、常に當に守護すべし。所以何となれば、我等は是の人を視ること、佛の如くし、若くは佛に次げばなり」と。「佛の如し」とは、法性身の阿鞞跋致に住して、無生法忍を得るより乃ち十地に至るまでなり。「佛に次ぐ」とは、肉身の菩薩にして、能く般若波羅蜜及び其の正義を説く。爾の時に、帝釋は先世の因縁もて、集むる所の功德、智慧を以て是の菩薩を讚す。此の中に更に讚歎の因縁を説けり。「諸佛の一切種智は應に般若の中より求むべし」とは、菩薩は般若波羅蜜を行すること具足するが故に、佛を得る時、般若は變じて一切種智と成る。故に一切種智は、當に般若の中より求むべしと言ふ。佛は能く般若波羅蜜を説きたまふが故に、般若波羅蜜は當に一切智の中より求むべしと言ふ。譬へば乳變じて酪と爲れば、乳を離れて酪なきも、亦た乳は即ち是れ酪なりと言ふことを得ざるが如く、般若波羅蜜變じて一切種智と爲れば、般若を離れて亦た一切種智なきも、亦た般若は即ち是れ一切種智なりと言ふことを得ず。般若は一切種智の與よに生因よと作り、一切種智は般若の與よに説因よと作り、因果相離れざるが故に不二不別と言ふ。

### 第三十六 稱譽品

【六】石本「第三十四品四を釋し意を」七字附加。  
 【七】宋・元・明三本俱に「尊導品第三十六」に作る。尙は明本は之に續けて「經は阿難稱譽品に作る」の夾註を附加す。

謂、諸法は畢竟空にして、無所有なることを説き、以て十方の衆生を引致す。我等は共に往き、難問して此の空論を破せん。其の論、若し破せば、佛は則ち自ら退き、我等は、還たび本の如くなることを得ん」と。是の諸の外道は、但だ邪見・悪心・憍慢のみあるが故に、來りて是の畢竟清淨なる般若波羅蜜の過非を出ださんと欲す。譬へば、狂人の虚空を中傷せんと欲して、徒に自ら疲苦するが如し。爾の時、帝釋は、佛の教の如くに般若を受持するに、外道は便を得ること能はず。今、實を驗して、人をして信知せしめんと欲するが故に、帝釋は無量の福德を成就し、天の利根を以て深く般若を信じ、即時に誦念するに、般若の力を得るが故に、外道は遙に佛を遶り、道を復して而して去れり。

問うて曰はく、何を以てか直に還らず、方に佛を遶りて而して去るや。

答へて曰はく、般若の神力を以ての故に、遠處に於いて降伏し、是の念を作さく、「佛の衆の威徳は、甚だ大なり。我等は今往いて、徒に自ら困辱し、成辦する所なし。我等今若し遙に見て直に去らば、人は當に我等は怯弱にして、來りて而も空しく去ると謂ふべし」と。是を以ての故に、詐りにて供養を現じ、佛を遶り、道を復して而して去れり。舍利弗は本是れ梵志なり。諸の外道の遠處にして、而して去るを見、心に少しく憐愍し、小事なるを以ての故に三昧に入るも、求め知ること能はず、是の念を作さく、「此の諸の外道は、何の因縁によりて來り、竟に度を蒙らずして、而して空しく還り去るや」と。佛の言はく、「是れ般若波羅蜜の力なり」と。舍利弗、意に念すらく、「佛は般若波羅蜜を以て、事として濟したまはざる無し。云何なれば此の外道をして空しく來りて、而して去らしめたまへるや」と。佛は舍利弗の念する所を知りて、舍利弗に語りたまはく、「是の諸の梵志は、乃至一念の善心もなく、但だ惡意のみを持し、邪見著心にして、諸法の定相を求めんと欲す。是の故に度に中らず。譬へば、必ず死する病には、良醫神藥ありと雖も、救濟すること能はざるが如し。

て滅せざればなり」と。爾の時、十方如恆河沙等の世界の中の諸天も、亦た華を散じて是の言を作さく、「世尊よ、願はくば、般若波羅蜜をして、久しく閻浮提に住せしめたまへ、若し般若波羅蜜久しく住せば、佛・法・僧も亦た當に久しく住すべく、亦た分別して菩薩摩訶薩の道を知らん。復次に、所在の住處に善男子、善女人ありて、般若波羅蜜の經卷を書せば、是の處は則ち照明と爲り已りて、衆冥を離るればなり」と。佛、釋提桓因等の諸の天子に告げ給はく、「是の如し、是の如し。憍尸迦及び諸の天子、閻浮提の人、般若波羅蜜を受持し、所住の時に隨つて、佛寶是の如く住し、法寶、僧寶も亦た是の如く住し、乃至所住の在處、善男子善女人ありて、般若波羅蜜の經卷を書持せば、是の處は則ち照明と爲り已りて衆冥を離る」と、爾の時、諸の天子は天華を化作し、佛の上に散じて、是の言を作さく、「世尊よ、若し善男子、善女人ありて、般若波羅蜜を受持し、乃至正しく憶念せば、魔、若くは魔天は、其の便を得ること能はず、世尊よ、我等も亦た當に、是の善男子、善女人を擁護すべし。何となれば、若し善男子、善女人にして、般若波羅蜜を受持し、乃至正しく憶念すれば、我等は是の人を視て、則ち是れ佛とし、若くは佛に次ぐとすべければなり」と。

是の時、釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、善男子、善女人、般若波羅蜜を受持し、乃至正しく憶念せば、當に知るべし、是の人は、先世に佛所に於いて、功德を作すこと多く、諸佛に親近して、供養したてまつり、善知識の爲に護らる。世尊よ、諸佛の一切智は、應當に般若波羅蜜の中より求むべく、般若波羅蜜は、亦た當に一切智中より求むべし。何となれば、般若波羅蜜は、一切智に異ならず、一切智は、般若波羅蜜に異ならず、般若波羅蜜と一切智とは、不二不別なればなり。是の故に、我等は是の人を視て、即ち是れ佛とし、若くは佛に次ぐとなす」と。

佛、釋提桓因に告げたまはく、「是の如し、是の如し。憍尸迦よ、諸佛の一切智は、即ち是れ般若波羅蜜、般若波羅蜜は、即ち是れ一切智なり。何となれば、憍尸迦よ、諸佛の一切智は般若波羅蜜の中より生じ、般若波羅蜜は一切智に異らず、一切智は般若波羅蜜に異ならず、般若波羅蜜と一切智とは不二不別なればなり」と。

【論】釋して曰はく、上品の中には、般若を聞受する者には、魔、若くは魔民、外道の梵志も、其の便を得ざることを説けり。今は現に證驗せんと欲するが故に、威神の感を以て、衆魔及び諸の外道を致す。是を以て、外道の梵志は是の念を作さく、「佛は耆闍崛山の中に在りて、般若波羅蜜、所

「是の諸の外道の梵志、佛の所に來向して、佛の短を求めんと欲す。我れ今當に、佛より受くる所の般若波羅蜜を誦念し、是の諸の外道の梵志等をして、終に中道に礙斷を作すこと能はざらしめ、般若波羅蜜を説かしむべし」と。釋提桓因、是の念を作し已りて、即ち般若波羅蜜を誦す。是の時、諸の外道の梵志は、遙に佛を遶り、道を復して還り去る。

時に舍利弗、心に念ずらく、「是の中何の因縁によりてか、諸の外道の梵志は、遙に佛を遶て、道を復して還り去るや」と。佛、舍利弗の心に念(ずる所を)知りて、舍利弗に告げたまはく、「是の釋提桓因は、般若波羅蜜を誦念す。是の因縁を以ての故に、諸の外道の梵志は、遙に佛を遶り、道を復して還り去れり。舍利弗よ、我は是の諸の外道の梵志の一念の善心をも見ず。是の諸の外道の梵志は、但だ惡心のみを持ち、來りて佛の短を索めんと欲す。舍利弗よ、我れ般若波羅蜜を説く時、一切世間、若くは天、若くは魔、若くは梵、若くは沙門衆、婆羅門衆の中に、惡意を持し來りて、能く短を得る者あることを見ず。何となれば、舍利弗よ、是の三千大千世界の中の、諸の四天王天、乃至阿迦尼吒天、諸の聲聞、辟支佛、諸の菩薩摩訶薩等は、是の般若波羅蜜を守護すればなり。何となれば、是の諸の天人は、皆な般若波羅蜜の中より生ずるが故なり。復次に、舍利弗よ、十方如恆河沙等の世界の中の諸佛、及び聲聞、辟支佛、菩薩、摩訶薩、諸の天、龍、鬼人等は、皆な是の般若波羅蜜を守護す。所以何となれば、是の諸佛等は、皆な般若波羅蜜の中より生ずればなり」と。

爾の時、惡魔心に念ずらく、「今佛の四衆、現前し集會し、亦た欲界色界の諸天子もあり、是の中に、必ず菩薩摩訶薩ありて、記を受け、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。我は寧ろ佛の所に至りて其の意を破壞すべし」と。是の時、惡魔は四種の兵を化作して、佛の所に來至す。爾の時、釋提桓因、心に念ずらく、「是の四種の兵は、或は是れ惡魔の化作して、佛に來り向はんと欲す。何となれば、是の四種の兵の嚴飾は、頻婆娑羅の四種の兵も類せざる所、波斯匿王の四種の兵も亦た類せず、諸の釋子の四種の兵、諸の梨唱の四種の兵も皆な亦た類せず。是の惡魔は、長夜に佛の便を索めて衆生を惱まさんと欲す。我は寧ろ般若波羅蜜を誦念すべし」と。釋提桓因、即時に般若波羅蜜を誦念するに、惡魔は其の誦する所を聞き、漸漸に道を復して還り去る。

爾の時、會中の四天王の諸子乃至阿迦尼吒の諸天子は天華を化作し、虛空の中より而も佛の上に散じて是の言を作さく、「世尊よ、願はくば、般若波羅蜜をして、久しく闍浮提に住せしめたまへ。所以何となれば、闍浮提の人、般若波羅蜜を受持せば、所住の時に隨つて佛寶住して滅せず、法寶、僧寶も亦た住し

【三】「終に中道にして、礙斷を作すこと能はざらしめ、般若波羅蜜を説かしむべし」、宋本宮本は「終に中道にして、礙斷を作し、般若波羅蜜を斷ぜざらしむべし」に作る。

【四】「摩訶薩、諸の天、龍、鬼人等は、皆な是の般若波羅蜜を守護す。所以何となれば」原文二十二字、聖本缺之。

【五】正本等は「惡魔は誦する所の如く(是を)聞き」に作るも今は石本に據る。



養することを説かず。

「四百四病」とは、四大、身と爲りて常に相侵害し、一一の火の中に百一の病起る。冷病に二百二あり。水風起るが故なり。熱病に二百二あり。地火起るが故なり。火は熱相、地は堅相にして、堅相の故に消し難く、消し難きが故に、能く熱病を起す。血・肉・筋・脈・骨髓等は、地の分なり。

「其の業報を除く」とは、一切法は、和合の因縁より生じて、作者あること無し。作者あること無きが故に、必ず業報を受け佛の救ひたまふこと能はざる所なり。何に況んや、般若をや必ず業報を受け、必ずしも業報を受けざることは、先に已に説けり。

「官事起る」とは、般若波羅蜜を誦する力の故に、起るに随つて皆滅す。

問うて曰はく、先に人は便を得ること能はざることを説けり。今何を以てか更に説くや。

答へて曰はく、先に人の便を得ること能はざることを説くと雖も、國王、大臣等既に便を得ること能はず、還つて復た恭敬、供養することを説かず。何となれば、是の菩薩は、常に慈悲喜捨の心ありて、衆生に向ふが故なり。後世の功德とは、世世に生ずる所、常に十善道等を離れず。是の故に常に惡道に墮せず。是の人は惡心を折伏するが故に、身を受くること完具し、下賤等の家に生ぜず、佛の學したまふ所の道を學するが故に、變化の身を得、佛に似て三十二相、八十隨形好あり。常に現在の佛國に化生することを得とは、心の到る所に隨つて十方の世界に諸佛を供養したてまつり、諸法を聽受し、衆生を教化し、漸漸に佛道を成ずることを得るなり。是の故に、行者は聽聞し、受持し、乃至正しく憶念して、薩婆若の心を離れず。是の如くにして今世後世の功德を得るなり。

### 第三十五 梵志品

【經】爾の時、諸の外道の梵志、佛の所に來向して、佛の短を求めんと欲す。是の時、釋提桓因、心に念ずらく、

【一】石本は茲に「第三十三品を釋し竟る」七字附加、續いて「大智度論卷第五十九終」十字を出し、而して次に「卷第六十首」を掲ぐ。

【二】宋本は「遺異品」に作り、明本は夾註として「經は遺異品に作る」とす。

復次に、諸佛は一切衆生の中に於いて無等と名け、是の般若の咒術は佛の所作なるが故に、無等等咒と名く。

復次に、此の經の中に自ら三咒の因縁を説く、所謂、是の咒は能く一切の不善法を捨て、能く一切の善法を興ふ。佛は其の歎ずる所に順じたまふが故に言はく、「是の如し、是の如し」と。亦た更に其の讚する所を廣くしたまふ。所謂、般若に因るが故に、十善道乃至諸佛を出生す。是の般若波羅蜜は、菩薩に屬するが故に、佛は譬喩を説きたまはく、「諸佛は能く大に無明の闇を破したまふが故に、満月の如く、菩薩は暗を破すること（佛に）如かざるが故に、星宿の如し」と。夜中に見る所あるは、皆な是れ星、月の力なるが如く、世間生死の夜中に知見する所あるは、皆な是れ佛、菩薩の力なり。若し世に佛なければ、爾の時、菩薩は法を説いて、衆生を度し、人天の樂中に著するより、漸漸に涅槃の樂を得せしむ。菩薩の有する所の智慧は、皆な是れ般若波羅蜜の力なり。

復次に、是の菩薩は、三十七品、十八空を行じて、諸法の畢竟取るべからざることを知ると雖も、亦た聲聞辟支佛の道を證せず、而も能く還つて善法を起し、衆生を教化し、佛世界を淨め、壽命を具足する等は、皆な是れ方便般若波羅蜜の力なり。若し是の人、能く般若を受持し、乃至、正しく憶念せば、今世後世の功德を得ん。今世の功德とは、所謂、終に毒に中りて死ぜざる等なり。

問うて曰はく、先に已に横死せざることを説けり、今何を以てか更に説くや。  
答へて曰はく、已に般若波羅蜜を説けるは、一會の中に説かず。此は後來の者の爲に更に爲に説くなり。

復次に、刀、毒、水、火に二種あり。他の作るあり。自ら作るあり。先には他の兵、毒、水、火等を加ふることを説き、今は自ら傷けざることを爲す。何を以てか之を知る。次に四百四病を説くが故に知るなり。上には人の其の便を得ること能はざることを説くと雖も、其の人の還つて恭敬供

坐を樂します。諸天は是の死相を見て、念じて天樂を惜み、惡處に生すべきことを見て、心に憂毒を懷く。爾の時、若し般若波羅蜜の實相と諸法の虚誑、無常、空寂なるを聞き、是の佛法を信ぜば、心清淨なるが故に、還またたび本處に生ぜん。是の天人は但だ還またたび本處に生ずるのみにあらず、般若を聞くを以ての故に、世世に福樂を受け、漸く無上道を成ぜん。此の中の因縁は經中に説くが如し。般若波羅蜜を大明呪と爲すとは是なり。

問うて曰はく、釋提桓因は、何を以ての故に、般若を名けて大明呪と爲すや。

答へて曰はく、諸の外道の聖人には、種種の呪術ありて、人民を利益し、是の呪を誦するが故に、能く意の欲する所に隨ひ、諸の鬼神、諸の仙人をして、是の呪あらしむるが故に、大に名聲を得、人民歸依す。呪術を貴ぶが故なり。是を以て帝釋、佛に白して言さく、「諸の呪術の中に、般若波羅蜜は、是れ大呪術なり。何となれば、能く常に衆生に道徳の樂を與ふればなり。餘の呪術は樂の因縁もて能く煩惱を起し、又た不善業の故に三惡道に墮す」と。

復次に、餘の呪術は能く貪欲、瞋恚に隨つて自在に惡を作し、是の般若波羅蜜の呪は、能く禪定、佛道、涅槃の諸の著を滅す。何に況んや、貪、恚の龜病をや。是の故に、名けて大明呪、無上呪、無等等呪と爲す。

復次に是の呪の能く人をして老病死を離れしめ、能く衆生を大乘に立て、能く行者をして一切衆生の中に最大ならしむ。是の故に大呪と言ひ、能く是の如く利益するが故に、名けて無上と爲す。先づ仙人所作の呪術あり。所謂、能く他人の心を知る呪を、抑叉尼と名け、能く飛行し變化する呪を健陀梨と名け、能く壽に住すること千萬歳に過ぐる呪は、諸呪の中に於いて與に等しきもの無し。此の無等なる呪術の中より、般若波羅蜜は、過出すること無量なるが故に無等等と名く。

復次に、諸の佛法を無等と名け、般若波羅蜜は佛を得るの因縁なるが故に、無等等と言ふ。

身を受くること完具なり。終に貧窮、下賤、工師、廁を除く人、死人を擔ふ家に生ぜず。常に三十二相を得、常に諸の現在の佛界に化生することを得、終に菩薩の神通を離れず。若し一佛界より、一佛界に至りて、諸佛を供養し、諸佛の法を聽きたてまつらんと欲せば、即ち意に隨つて遊ぶ所の佛界を得、衆生を成就し、佛世界を淨め、漸く阿耨多羅三藐三菩提を得。憍尸迦よ、是を後世の功德と名く。是を以ての故に、憍尸迦よ、善男子善女人は應當に般若波羅蜜を受持し、親近し、讀誦して説き、正憶念し、華香乃至伎樂をもて供養し、常に薩婆若の心を離れざるべし。是の善男子、善女人は、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至りて、今世後世の功德を成就することを得。

【論】釋して曰はく、佛は是れ法王にして、般若波羅蜜を受持する者を讚歎し已りて、次に天王(帝)釋讚じ、(天王帝)釋讚じ已りて、今次に諸天讚(歎)す。多衆の讚を以ての故に、人をして信心轉た深からしめ、是の言を作さく、「應に是の般若波羅蜜を受持すべし」と。此の中に受持の因縁、諸の功德を修し、諸天を増益し、阿修羅を減損し、三寶を斷ぜず、六波羅蜜等の諸の功德、世に出現することを説きたまへり。爾の時、佛、諸天の讚を可とし、(帝)釋に告げて言はく、「汝、是の般若波羅蜜を受持せよ」と。此の中に因縁を説きたまはく、「若し阿修羅、惡心を生じて三十三天と共に闘はんと欲せんに、汝、爾の時、般若を讀誦せば、惡心即時に滅せん。若し二陣相對する時、般若を讀誦せば、阿修羅即ち退き去らん」と。

問うて曰はく、若し爾らば、何を以てか常に般若を誦して、阿修羅の惡心をして生ぜざらしめざるや、何が故に乃ち兩陣をして相對せしむるや。

答へて曰はく、諸天は多く福樂に著し、染欲の心利にして、般若に大功徳あることを知ると雖も、常に誦すること能はざるが故に、又た忉利天は、不淨業の因縁を以ての故に、怨敵あることを致し、闘はざることを得ず。諸天は命を終らんと欲する時、五死の相現す。一には華鬘萎み、二には腋下より汗出で、三には蠅來りて身に著き、四には更に天ありて己が坐處に坐するを見、五には自ら本

何となれば、世尊よ、是の般若波羅蜜は、能く一切の不善法を除き、能く一切の善法を興ふればなり」と。  
佛、釋提桓因に語りたまはく、「是の如し、是の如し。憍尸迦よ、般若波羅蜜は、是れ大明咒なり。無上明咒なり、無等等明咒なり。何となれば、憍尸迦よ、過去の諸佛は、是の明咒に因るが故に、阿耨多羅三藐三菩提を得たまひ、未來世の諸佛、今現在十方の諸佛も、亦た是の明咒に因りて、阿耨多羅三藐三菩提を得たまふ。是の明咒に因るが故に、世間に便ち十善道あり。便ち四禪、四無量心、四無色定あり。便ち檀波羅蜜乃至般若波羅蜜、四念處乃至十八不共法あり。便ち法性、如、法相、法住、法位、實際あり。便ち五眼、須陀洹果乃至阿羅漢、辟支佛道、一切智、一切種智あればなり。憍尸迦よ、菩薩摩訶薩の因縁の故に、十善世に出で、四禪、四無量心乃至一切種智、須陀洹乃至諸佛世間に出づること、譬へば滿月にして照明なれば、星宿も亦た能く照明なるが如し。是の如く、憍尸迦よ、一切世間の善法、正法、十善乃至一切種智は若し諸佛出で給はざる時は、皆な菩薩より生ず。是の菩薩摩訶薩の方便力は、皆な般若波羅蜜より生ず。菩薩摩訶薩は、是の方便力を以て、檀波羅蜜乃至禪波羅蜜、內空乃至無法有法空、四念處乃至十八不共法を行じ、聲明、辟支佛地を證せず、衆生を成就し、佛世界を淨め、壽命を成就し、世界を成就し、菩薩眷屬を成就し、一切種智を得るは、皆な般若波羅蜜より生ず。

復次に、憍尸迦よ、若し善男子、善女人は般若波羅蜜を聞いて、受持し、親近し、乃至正憶念すれば、是の人は、當に今後世の功徳を得べし」と。釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、何等か是の善男子、善女人は、般若波羅蜜を受持し、乃至正しく憶念せば、今世の功徳を得るや」と。佛、釋提桓因に告げたまはく、「若し善男子、善女人ありて、般若波羅蜜を受持し、乃至正しく憶念せば、終に毒に中りて死せず、兵刃も傷げず、水火も害せず、乃至四百四病も中ること能はざる所なり。其の宿命、業報を除く。

復次に、憍尸迦よ、若し官事の起ること有らんに、是の善男子、善女人は、般若波羅蜜を讀誦するが故に、往いて官所に到るも、官は譴責せざらん。何となれば、是の般若波羅蜜の威力の故なり。若し善男子、善女人、是の般若波羅蜜を讀誦して、王所、若くは太子、大臣の所に到らんに、王及び太子、大臣は、皆な歡喜し、問訊し、意を和げて、與に語らん。何となれば、是の諸の善男子、善女人は、常に慈悲、喜捨の心ありて、衆生に向へばなり。憍尸迦よ、若し善男子、善女人、般若波羅蜜を受持し、乃至、正憶念せば、是の如き等の種種の今世の功徳を得。

憍尸迦よ、何等か是れ善男子、善女人の後世の功徳なるとは、是の善男子、善女人は、終に十善道、四禪、四無量心、四無色定、六波羅蜜、四念處乃至十八不共法を離れず、是の人は終に三惡道に墮せずして、

# 卷の第五十八

## 第三十四 勸受持品

【經】爾の時、三千大千世界の所有る四天王天、乃至阿迦尼吒天、釋提桓因、諸天に語りて言はく、「應に是の般若波羅蜜を受くべく、應に持すべく、應に親近すべく、應に讀誦して、説き、正しく憶念すべし。何となれば、般若波羅蜜をば受持し、乃至、正しく憶念するが故に、一切の修集する所の善法をば當に具足し、滿し、諸天衆を増益し、阿修羅を滅損すべし。諸天子、般若波羅蜜を受持し、乃至、正しく憶念するが故に佛種斷ぜず、法種僧種斷ぜず、佛種、法種、僧種斷ぜざるが故に、世間に便ち檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、鬘提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜ありて、皆な世に現じ、四念處乃至十八不共法、菩薩の道皆な世に現じ、須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道、佛道、須陀洹、乃至佛皆な世に現ずればなり」と。

爾の時、佛、釋提桓因に告げ給はく、「憍尸迦よ、汝當に是の般若波羅蜜を受持し、讀誦して、説き、正しく憶念すべし。何となれば、若し諸の阿修羅、惡心をば生じて、三十三天と共に闘はんと欲せば、憍尸迦よ、汝、爾の時、當に般若波羅蜜を誦念すべし。諸の阿修羅の惡心は即ち滅して、更に復た生ぜざらん。憍尸迦よ、若し諸の天子、天女に五の死相現する時は、當に、不如意處に墮すべし。汝當に其の前に於いて、般若波羅蜜を誦讀すべし。是の諸の天子、天女は、般若波羅蜜を聞き、功德力の故に、還た本處に生ぜん。何となれば、般若波羅蜜を聞くは、大利益あるが故なり。

復次に、憍尸迦よ、若し善男子善女人、若くは諸の天子、天女ありて、是の般若波羅蜜經を聞くのみなるも、是の功德を以ての故に、漸く當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。何となれば、憍尸迦よ、過去の諸佛及び弟子は皆な、是の般若波羅蜜を學し、阿耨多羅三藐三菩提を得て、無餘涅槃に入ればなり。憍尸迦よ、未來世の諸佛、今現在十方の諸佛及び弟子も、皆な是の般若波羅蜜を學して、阿耨多羅三藐三菩提を得て、無餘涅槃に入らん。何となれば、憍尸迦よ、是の般若波羅蜜は、一切の善法、若くは聲聞法、若くは辟支佛法若くは佛法を攝すればなり」と。

釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、般若波羅蜜は是れ大明咒なり、無上明咒なり、無等等明咒なり。

にるひは短くして及ばざれば、便ち井を失すと言ふも、井は實は失せざるが如し。般若波羅蜜の實相は、深井の如く、經卷を名けて綆と爲し、行者の書寫し、修習すること能はざるが故に滅すと言ふ。問うて曰はく、若し三寶を説いて、盡く一切の善人善法を攝せば、何を以てか、「復た般若世に在れば、世間に十善道乃至一切種智有り」と言ふや。

答へて曰はく、此の諸法及び諸道は、皆な廣く解す。三寶中の義は、佛寶とは、佛法の攝する所の無學の五衆なり。法寶とは、<sup>一〇</sup>第三諦、所謂、涅槃にして、<sup>一一</sup>四沙門を攝する所の學無學の功德を除き、餘殘の辟支佛の功德、菩薩の功德なり。僧寶とは、<sup>一二</sup>四向四果、學無學の<sup>一三</sup>五衆なり。餘の十善道、四禪、四無量等は、皆な是の道の方便門なり。是の故に別説するなり。

【一〇】 第三諦とは苦・集・滅・道の四聖諦中の第三滅諦をいひ、是は道諦即ち八正道によつて得る佛教の理想たる涅槃である。

【一一】 四沙門とは、勝道・示道・命道・汚道の四者、或は有蓋・無蓋・啞羊・實の四者をいふ。

【一二】 四向四果、學無學とは、四向四果は小乘修行證果の階位にして預流向、一來向、不還向、阿羅漢向の四向と預流果、一來果、不還果、阿羅漢果の四果なり。無學は眞理を探究して煩惱を斷除するを學或は有學といひ、學の究極、煩惱全く盡きて更に修學すべきものなき位を無學と稱し、先の前の四向三果を學或は有學、最後の阿羅漢果を無學とし、大乘にては菩薩の十地を有學、佛果を無學となす。

【一三】 五衆とは佛弟子の中、出家者なる比丘・比丘尼・式叉摩那・沙彌・沙彌尼なり。

【一四】 石本は「第三十二品を釋し竟る」の原文七字を附記す。

第三十三 述 誠 品

【經】爾の時、佛、釋提桓因に告げたまはく、「是の如し、是の如し。憍尸迦よ、是の諸の善男子善女人は、是の般若波羅蜜を書し、經卷を持す、受學し、親近し、讀誦し、説き、正しく憶念し加ふるに復た華香、瓔珞、擣香、澤香、幢蓋、伎樂を供養して、當に無量、無數、不可思議、不可稱量、無邊の福徳を得べし。何となれば、諸佛の一切智、一切種智は、皆な般若波羅蜜の中より生じ、諸の菩薩摩訶薩の禪波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、驪提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀波羅蜜も、皆な般若波羅蜜の中より生じ、内空乃至無法有法空、四念處乃至十八不共法も、皆な般若波羅蜜の中より生じ、諸佛の五眼も、皆な般若波羅蜜の中より生じ、衆生を成就し、佛世界を淨む。道種智、一切種智、諸佛の法も、皆な般若波羅蜜の中より生じ、聲聞乘、辟支佛乘、佛乘も、皆な般若波羅蜜の中より生ず。是を以ての故に、憍尸迦よ、善男子善女人の、是の般若波羅蜜を書し、經卷を受持し、親近し、讀誦し、説き、正憶念し、加ふるに復た華香、乃至伎樂を供養するは、前の七寶塔を供養するに過出すること、百分、千分、千億萬分、乃至算數譬喩も及ぶ能はざる所なり。何となれば、憍尸迦よ、若し般若波羅蜜、世に在れば、佛寶・法寶・比丘僧寶も、〔亦た〕終に滅せず。若し般若波羅蜜、世に在れば、十善道、四禪、四無量心、四無色定、檀波羅蜜、乃至般若波羅蜜、四念處乃至十八不共法、一切智、一切種智も、皆な世に現ず。若し般若波羅蜜世に在れば、世間に便ち刹利の大姓、婆羅門の大姓、居士の大家、四天王乃至阿迦尼吒の諸天、須陀洹果乃至阿羅漢果、辟支佛道、菩薩摩訶薩、無上佛道、轉法輪、衆生を成就し、佛世界を淨むること有ればなり。

【論】釋して曰はく、上に帝釋は佛に答へたてまつりて言はく、「般若を供養すれば福徳甚だ多し」と。更に大天あり、帝釋は一切智人に非ざるを以ての故に、説く所或は錯る。是を以て、佛は所説を印可して言はく、「是の如し、是の如し」と。

問うて曰はく、若し般若波羅蜜の相は、一切の諸觀滅し、語言の道斷へ、不生不滅にして、虚空の相の如くならば、今何を以てか、「般若世に在れば三寶滅せず」と説くや。

答へて曰はく、般若波羅蜜の體性は、佛あるも、佛なきも、常住不滅なり。此に世に在りと言ふは、所謂、般若の經卷を修習し、讀誦すべき者にして、是れ因中に果を説くなり。譬へば、井深き

【九】宋・元・明三本並に宮本は俱に前掲石本の如く「述成」に作る。



佛は塔を以て喩と爲したまへり。

問うて曰はく、是の塔は實と爲すや、假と爲すや。

答へて曰はく、佛は人をして福德の多少を解知し、分別せしめんと欲したまふが故に、是の譬喩を作したまへり。其の虚實を問ふべからず。有人の言はく、「實あり假あり。迦葉佛の般涅槃の後に、國王あり、吉梨婁と名くるが如きは、爾の時、人壽二萬歳にして、是の王は舍利を供養せんが爲の故に、七寶塔を起し高さ五十里なり。又た過去世に轉輪王あり、徳主と名く。一日に五百の塔を起し、高さ五百由旬なり。此を三千大千世界に満てりと言ふ、是の事は假喩なり」と。有人の言はく、「皆な是れ實有なり」と。小國王の如きは、力に隨つて、七寶塔を起て、大王は能く一由旬の七寶塔を起て、或は一由旬に過ぎ、小轉輪王は能く七寶塔を起てて四天下に満て、大轉輪王は能く七寶塔を起てて四天下に過ぐ。梵天王は三千大千世界に主たり。是の佛弟子は能く心を生じ變化して塔を起て、高さ梵天に至り、三千大千世界に満つ。或は菩薩ありて陀羅尼門、諸の三昧門を得、深く六波羅蜜を行ずるが故に、佛滅度の後、能く七寶塔を起てて、三千大千世界に満つ。満つとは、其の多きを擧ぐるが故に間を言はず、間を容れず。後に一一の衆生と言ふは、施主多きが故に福德多し。佛は是の中に自ら福を得るの因縁を説きたまへり。十善道より乃ち一切種智に至るまでは皆な般若波羅蜜の中に攝在し、是の法を和合するを、般若波羅蜜と爲す。是の般若の中より、但だ佛のみを出生するすら、尙ほ應當に供養すべし。何に況んや、三乗及び人天の中の樂を出生するは、皆な般若波羅蜜に由りて有るを、而も供養せざらんや。舍利は是れ無記法にして、是れ諸の善法の所依止の處なり。故に後に乃ち能く、人に果報を與へ、般若波羅蜜を行じて、即時に果を得、後にも亦た報を得。

【七】「五百由旬」、宋・元・明・宮諸本は「五十由旬」に作る。

【八】石本は茲に「第三十品を釋し意を附加し、次に「摩訶般若波羅蜜經述成品第二」と掲ぐ。

き、若し善男子善女人、佛を供養したてまつるが故に、佛般涅槃の後に、七寶塔を起して三千大千世界に満ち、皆な高さ一由旬ならしめ、形壽を盡くして天華、天香、天の瓔珞乃至天の伎樂を供養せんに、汝が意に於いて云何。是の善男子、善女人は、福を得ること多きや不や」と。釋提桓因の言さく、「世尊よ、甚だ多し、甚だ多し」と。佛の言はく、「是の善男子善女人、是の般若波羅蜜を書持し、恭敬し、尊重し、讚歎し、華香、乃至伎樂もて供養する、其の福の甚だ多きには如かず。復た三千大千世界の中に七寶塔を置き、若し三千大千世界中の、衆生の一一の衆生、佛を供養したてまつるが故に、佛般涅槃の後、各七寶塔を起て、恭敬し、尊重し、讚歎し、華香、乃至、伎樂もて供養するも、若し善男子善女人ありて、般若波羅蜜を書持し、乃至正しく憶念して薩婆若の心を離れず、亦た恭敬し、尊重し、讚歎し、華香、瓔珞乃至伎樂もて供養せんに、是の人は福を得ること甚だ多し」と。

釋提桓因、佛に白して言さく、「是の如し。是の如し、世尊よ、若し人、是の般若波羅蜜を供養し、恭敬し、尊重し、讚歎せば、即ち過去、未來、現在の佛世尊を供養すと爲す。若し十方如恆河沙等の世界中の衆生の一一の衆生、佛を供養したてまつるが故に、佛般涅槃の後、各七寶塔を起し、高さ一由旬ならしめ、是の人は若くは一劫、若くは減一劫(の間)、恭敬し、尊重し、讚歎し、華香乃至伎樂もて供養せんに、世尊よ、是の善男子、善女人は、福を得ること多きや不や」と。佛の言はく、「甚だ多し」と。釋提桓因の言さく、「善男子、善女人ありて、是の般若波羅蜜を書持し、乃至正しく憶念し、亦た恭敬し、尊重し、讚歎し、華香乃至伎樂を以て供養せんに、其の福大に多し。何となれば、世尊よ、一切の善法は、皆な般若波羅蜜の中に入ればなり。所謂、十善道、四禪、四無量心、四無色定、三十七品、三解脱門、空・無相・無作、四諦なる苦諦・集諦・滅諦・道諦、六神通、八解脫、九次第定、檀波羅蜜・尸羅波羅蜜・羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜・般若波羅蜜、内空乃至無法有空、諸の三昧門、陀羅尼門、佛の十力、四無所畏、四無礙智大慈大悲、十八不共法、一切智道種智、一切種智なり。世尊よ、是を一切諸佛の法印と名く。是の法中に一切の聲聞及び辟支佛、過去、未來、現在の諸佛は是の法印を學して彼岸に度ることを得たまふ」と。

【論】釋して曰はく、般若波羅蜜をば、若し聞き受持し誦讀する等に無量の功德あり。更に説かんと欲するが故に、現事の譬喩を以て之を證す。人は土塔の高大なるを見て、即時に心を生じて謂はく、「是の塔主の福德は極めて大なり」と。何に況んや、七寶塔の高さ一由旬なるを起こすをや。是の故に

【六】「其の福大に多し」に明本は註して曰く、「ナを南藏は「太だ」に作る」

るのみに非ず、三乘も共に各分に随つて學すること有り。

【經】「憍尸迦よ、若し善男子、善女人ありて、佛般涅槃の後に、佛を供養せんが爲の故に、七寶塔の高さ一由旬なるを作り、天香、天華、天の瓔珞、天の擣香、天の澤香、天衣、天の幢蓋、天の伎樂もて供養し、恭敬し、尊重し、讚歎せんに、憍尸迦よ、汝が意に於いて云何。是の善男子善女人は、是の因縁に従りて、福を得ること多きや不や」と。釋提桓因の言さく、「世尊よ、甚だ多し、甚だ多し」と。佛の言はく、「是の善男子善女人は、是の般若波羅蜜を聞き、書寫し、受持し、親近し、正しく憶念し、<sup>五</sup>薩婆若の心を離れず、亦た恭敬し、尊重し、讚歎し、若くは花香、瓔珞、擣香、澤香、幢蓋、伎樂もて供養せんに、是の善男子、善女人の福德多きには如かず」と。

佛、憍尸迦に告げたまはく、「一の七寶塔を置かんに、若し善男子善女人、佛を供養するが故に、佛般涅槃の後、七寶塔を起して、閻浮提に滿て、皆な高さ一由旬ならしめ、恭敬し、尊重し、讚歎し、華香、瓔珞、幢蓋、伎樂もて供養せんに、憍尸迦よ、汝が意に於いて云何。是の善男子善女人は、福を得ること多きや不や」と。釋提桓因の言さく、「世尊よ、其の福、甚だ多し」と。佛の言はく、「是の善男子、善女人は、前の如く、般若波羅蜜を供養する、其の福甚だ多きには如かず。憍尸迦よ、復た一閻浮提の中に滿つる七寶塔を置き、若し善男子善女人ありて、佛を供養したてまつるが故に、佛般涅槃の後、七寶塔を起して、四天下に滿て、皆な高さ一由旬ならしめ、供養すること前の如くならんに、憍尸迦よ、汝が意に於いて云何。是の善男子善女人は、其の福多きや不や」と。釋提桓因の言さく、「甚だ多し、甚だ多し」と。佛の言はく、「是の善男子善女人、般若波羅蜜を書持し、恭敬し、尊重し、讚歎し、華香、乃至伎樂もて供養する、其の福の甚だ多きには如かず。憍尸迦よ、復た四天下の中に滿つる七寶塔を置き、若し善男子善女人ありて、佛を供養したてまつるが故に、佛般涅槃の後に、七寶塔を起して、小千世界に滿て、高さ一由旬ならしめ、供養すること前の如くせば、憍尸迦よ、汝が意に於いて云何。是の善男子善女人は、其の福多きや不や」と。釋提桓因の言さく、「甚だ多し、甚だ多し」と。佛の言はく、「是の善男子、善女人、是の般若波羅蜜を書し、受持し、恭敬し、尊重し、讚歎し、華香乃至伎樂もて供養する、其の福の甚だ多きには如かず。憍尸迦よ、復た小千世界の中に滿つる、七寶塔を置き、若し善男子、善女人ありて、佛を供養したてまつるが故に、佛般涅槃の後、七寶塔を起して、二千中世界を滿て、皆な高さ一由旬ならしめ、供養すること前の如きも、「故らに」般若波羅蜜を供養して、其の福甚だ多きには如かず。復た二千中世界に七寶塔を置

【五】「薩婆若の心を離れず、亦た恭敬し、尊重し、讚歎し、若くは花」原文十七字別本は缺之。

問うて曰はく、疑なきと決すると何の異なること有りや。

答へて曰はく、初めて三寶を信するが故に是れ疑なく、智慧を究竟するが故に是れ決了す。譬へば、水を渡るに、初めて入るは是れ疑なく、彼岸に出づるは是れ決了するが如し。三分聖戒力の故に信を壊せず、四分力の故に是れ疑なく、正見分力の故に是れ決了す。

復次に、見諦道の中は是れ信を壊せず、思惟道の中は是れ疑なく、無學道の中は是れ決了す。是の如き等、種種に分別す。是の三事は何の果報をか得る。三十七品、乃至六神通は、是れ有爲果なり。三結盡くるより、乃ち煩惱、及び習盡くるに至るは、是れ無爲果にして、是の如き等の果報を得。釋提桓因は、報生の知他心を有す。亦た會つて天耳を以て、諸道の差別を聞く。又た是の大菩薩は、利根にして、觀衆生心三昧に入るを以ての故に、諸道の差別を知ることを得。是の故に佛に答へたてまつる、「深信の者は少し」と。須陀洹より乃ち初發心に至るは、佛道を求むること轉た少く、轉た少きが故に、般若を供養することを知らざるなり。何となれば、少しも前世の生死の中に、三寶の名を聞かず、乃至一切種智の名を聞かざればなり。佛は上の事を證せんと欲したまふが故に説きたまはく、「我れ今佛眼を以て、十方無量阿僧祇の衆生を觀るに、無上道を發するも、般若の方便力を離るるが故に、若くは一(人)、若くは二(人)、阿毘跋致地に住す」と。諸餘の善法は、般若波羅蜜に入るとは是れ諸餘の經なり。所謂、法華經、密迹經等の十二部經の中の義は、般若に同する者にして、名けて般若波羅蜜經と爲さずと雖も、然も義理は、即ち般若波羅蜜經に同するなり。

問うて曰はく、云何なれば須陀洹も亦た般若波羅蜜、乃至一切種智を學して、彼岸に到ることを得るや。

答へて曰はく、此の中の六波羅蜜、三解脱門、三十七品等、乃至一切種智は是れ獨り菩薩の法な

定して答へたまふことを得ず。是の故に反問したまへり。般若波羅蜜の中より、五波羅蜜を生ずとは、後品の中に、佛自ら説きたまはく、方便、智慧、布施、廻向なきは檀波羅蜜と名けず。十八空は、即ち是れ智慧なり。智慧の因縁の故に、四念處、乃至一切種智を生ず。盡く是れ智慧に非ずと雖も、性同じきを以ての故に、智慧を以て主と爲す。是の故に、般若より生ずと言ふ。般若波羅蜜を行すれば、諸法實相を得、布施、持戒等に於いて通達す。若し般若の實相を得ざれば、布施、持戒に通達すること能はず。何となれば、若し一切法は空なれば、則ち罪なく福なし、何ぞ布施持戒を用ひん。若し諸法は(是れ)實有の相ならば、因縁より生ずべからず、先に已に有るが故なり。若し衆生は是れ常ならば、則ち譬へば虚空の如く、亦た死者なけん。若し無常ならば、神は則ち身に隨つて滅し、亦た後世の罪福なけん。若し衆生なくんば、何ぞ殺罪あらん。是の如くんば、亦た不殺生戒等も無し。若し是の般若波羅蜜の實相の法を得れば、則ち有無の二邊に墮せず、中道を用ひて、布施持戒等に通達せん。此の布施持戒等の果報を以ての故に、殺利の大姓乃至諸佛あり。

問うて曰はく、閻浮提の人は利福德を食ふ。何を以てか、般若波羅蜜を供養せざるや。

答へて曰はく、智人少きが故に、般若を供養することを知らざるも咎なきなり。譬へば、金寶も、盲者は識らざるが如し。閻浮提の人は、但だ三尊を信する者すら少し。何に況んや、知つて而も能く行ぜんや。佛は釋提桓因をして自ら説かしめんと欲したまふが故に、幾許の人ありてか、三尊に於いて信等を壞せざることを得るやと反問したまへり。

問うて曰はく、信を壞せざると、疑なきと、決了すると何の差別ありや。

答へて曰はく、有人の言はく、「差別あること無し。佛は莊嚴して、種種に説き、人心を開悟したまへばなり」と。有人の言はく、「三寶の中に於て、信を壞せざることを得。何を以てか之を知る、疑なきを以ての故なり。何を以てか疑なきを知る、決了するを以ての故なり」と。

【四】「三尊」二字、宋元明宮各本「三寶」に作る、蓋し三の数は佛・法・僧を指すものなれば「三寶」といふを當となす。

卷を書し、香華、瓔珞、乃至伎樂もて恭敬し、供養し、尊重し、讚歎すべし。諸餘の善法もて、般若波羅蜜の中に入る者も、亦た應に聞き、受持し、乃至、正しく憶念すべし。何等か是れ、諸餘の善法なる。所謂、檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、毘提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、內空、外空乃至無法有法空、諸の三昧門、諸の陀羅尼門、四念處、乃至十八不共法、大慈大悲なり。是の如き等の無量の諸の善法は、皆な般若波羅蜜の中に入る、是も亦た應に聞き、受持し、乃至、正しく憶念すべし。何となれば、是の善男子、善女人は、當に是の如く念すべければなり。「佛は本、菩薩たりし時、是の如く行じ、是の如く學し給へり。所謂、般若波羅蜜、禪波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、毘提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀波羅蜜、內空乃至無法有法空、諸の三昧門、諸の陀羅尼門、四念處乃至十八不共法、大慈大悲なり。是の如き等の無量の佛法、我等も亦た應に隨つて學すべし。何となれば、般若波羅蜜は是れ我等が尊ぶ所、禪波羅蜜、乃至無量の諸餘の善法も、亦た是れ我等が尊ぶ所、此は是れ諸佛の法印、諸の辟支佛、阿羅漢、阿那含、斯陀含、須陀洹の法印なればなり。諸佛は是の般若波羅蜜乃至一切種智を學して彼岸に度ることを得たまへり。諸の辟支佛、阿羅漢、阿那含、斯陀含、須陀洹も、亦た是の般若波羅蜜、乃至一切〔種〕智を學して、彼岸に度ることを得たり」と。是を以ての故に、憍尸迦よ、善男子善女人は、若くは佛在世、若くは般涅槃の後、應に般若波羅蜜に依止すべし。禪波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、毘提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀波羅蜜乃至一切種智にも亦た應に依止すべし。何となれば、是の般若波羅蜜、乃至一切種智は、是の諸の聲聞、辟支佛、菩薩摩訶薩及び一切世間の天人、阿修羅の依止すべき所なればなり」と。

【論】問うて曰はく、佛は已に種種に般若の功德を讚じたまへり。今、釋提桓因は何故に舍利を以て般若と功德の多少を校ぶるや。

答へて曰はく、信根多き者は、舍利を供養することを喜び、慧根多き者は經法を讀誦することを好む。是の故に、有人は經を書して供養し、有人は舍利を供養するに、何れか爲す所多きと問ふなり。華香、瓔珞等の義は、先に説くが如し。汝が意に於いて云何とは、四事の答の中、此は是れ反問の答なり。是の故に佛は即ち釋提桓因に反問したまへり。或は有人は、舍利を供養して、福德を得ると多く、或は有人は、般若波羅蜜を供養して、福德を得ること多く、人の心に隨ふが故に、佛は一

て決了し、法に於て決了し、僧に於て決了するや」と。釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、閻浮提の人は、佛法僧に於いて、壞せざるも、信少く、佛法僧に於いて、疑なけれども、決了も亦た少し」と。一憍尸迦よ、汝が意に於いて云何。閻浮提の幾所の人か、三十七品、三解脱門、八解脱、九次第定、四無礙智、六神通を得るや。閻浮提の幾所の人か、三結を斷ずるが故に、須陀洹道を得、幾所の人か、三結を斷じ、亦た婬、瞋、癡を薄くするが故に、斯陀含道を得るや。幾所の人か、五下分の結を斷じて、阿那含道を得るや。幾所の人か、五上分の結を斷じて、阿羅漢を得るや。閻浮提の幾所の人か、辟支佛を求め、幾所の人か、阿耨多羅三藐三菩提を發すや」と。釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、閻浮提中の少所の人、三十七品を得、乃至少所の人、阿耨多羅三藐三菩提心を發すのみ」と。

佛、釋提桓因に告げたまはく、「是の如し、是の如し。憍尸迦よ、少所の人、佛を信じて壞せず、法を信じて壞せず、僧を信じて壞せず。少所の人、佛に於いて疑なく、法に於いて疑なく、僧に於いて疑なし。少所の人、佛に於いて決了し、法に於いて決了し、僧に於いて決了す。憍尸迦よ、亦た少所の人、三十七品、三解脱門、八解脱、九次第定、四無礙智、六神通を得。憍尸迦よ、亦た少所の人、三結を斷じて、須陀洹を得、三結を斷し、亦た婬、瞋、癡を薄くして、斯陀洹を得、五下分の結を斷じて、阿那含を得、五上分の結を斷じて、阿羅漢を得。少所の人、辟支佛を求め、是の中より亦た少所の人、阿耨多羅三藐三菩提心を發す。發心(者)中に於て亦た少所の人、菩薩の道を行す。何となれば、是の衆生は、前世に佛を見ず、法を聞かず、比丘僧を供養せず、布施せず、持戒せず、忍辱せず、精進せず、禪定せず、智慧なく、内空、外空乃至無法有法空を聞かず、亦た四念處乃至十八不共法を聞かず、修せず、亦た諸の三昧門、諸の陀羅尼門を聞かず、修せず。亦た一切智、一切種智を聞かず、修せず。憍尸迦よ、是の因縁を以ての故に、當に知るべし、少所の衆生、佛を信じて壞せず、法を信じて壞せず、僧を信じて壞せず、乃至少所の衆生は辟支佛道を求め、是の中に於て、少所の衆生は、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、發心(者)中に於いて少所の衆生は、菩薩道を行じ、是の中に於いて、亦た少所の衆生は、阿耨多羅三藐三菩提を得。憍尸迦よ、我れ佛眼を以て、東方無量阿僧祇の衆生を見るに、發心して阿耨多羅三藐三菩提を行じ、菩薩道を行ずるも、般若波羅蜜の方便力を、遠離するが故に、若くは一(人)、若くは二(人)、阿鞞跋致地に住し、多くは聲聞、辟支佛地に墮す。南、西、北方、四維、上下も、亦た是の如し。是を以つての故に、憍尸迦よ、善男子、善女人の發心して、阿耨多羅三藐三菩提を求むる者は、應に般若波羅蜜を聞き、應に受持し、親近し、讀誦し、説き、正しく憶念すべし。受持し、親近し、讀誦し、説き、正しく憶念し已らば、應に經

尊重し、讚歎し、華香、瓔珞乃至伎樂もて供養すると、是の二の何者が福を得ること多きや」と。佛、釋提桓因に告げたまはく、「我れ還つて汝に問はん。汝が意に隨つて我に答へよ。汝が意に於いて云何。佛の一切種智を得、及び是の身を得るが如きは、何の道に従ひ學して、是の一切種智を得、是の身を得たるや」と。釋提桓因、佛に白して言さく、「佛は般若波羅蜜に従ひ學して、一切種智及び相好の身を得たまへり」と。佛、釋提桓因に告げ給はく、「是の如し、是の如し、憍尸迦よ。佛は般若波羅蜜の中に従ひ學して、一切種智を得。憍尸迦よ、是の身を以て、名けて佛と爲さず。一切種智を得るが故に、名けて佛と爲す。憍尸迦よ、是の佛の一切種智は、般若波羅蜜の中より生ず。是を以ての故に、憍尸迦よ、是の佛身は、一切種智の所依の處にして、佛は是の身に因りて一切種智を得たまふ。善男子、當に是の思惟を作すべし。是の身は一切種智の所依の處なり。是の故に我が涅槃の後に、舍利を供養することを得べしと。復次に、憍尸迦よ、善男子善女人、若し是の般若波羅蜜を聞いて、書寫し、受持し、親近し、讀誦し、正しく憶念し、華香、瓔珞、搗香、澤香、幢蓋、伎樂もて恭敬し、供養し、尊重し、讚歎せんに、是の善男子、善女人は、即ち一切種智を供養すと爲す。是を以ての故に、憍尸迦よ、若し善男子善女人ありて、是の般若波羅蜜を書き、若くは受持し、親近し、讀誦し、説き、正しく憶念し、華香、瓔珞、乃至伎樂もて供養し、恭敬し、尊重し、讚歎し、若し復た善男子、善女人ありて、佛般涅槃の後に、舍利を供養し、塔を起し、華香乃至伎樂もて恭敬し、尊重し、讚歎し、若くは善男子、善女人ありて、是の般若波羅蜜を書持し、華香、瓔珞、乃至伎樂を〔以て〕供養し、恭敬し、尊重し、讚歎せんに、是の人は福を得ること多し。何となれば、是は般若波羅蜜の中に、五波羅蜜を生じ、内空乃至無法有法空、四念處乃至十八不共法を生じ、一切の三昧、一切の禪定、一切の陀羅尼は、皆な般若波羅蜜の中より生じ、衆生を成就し、佛世界を淨むることも、皆な般若波羅蜜の中より生じ、菩薩の家を成就し、色を成就し、資生の物を成就し、眷屬を成就し、大慈大悲を成就することも、皆な般若波羅蜜の中より生じ、刹利の大姓、婆羅門の大姓、居士の大家も、皆な是の般若波羅蜜の中より生じ、四天王乃至阿迦尼吒天、須陀洹乃至阿羅漢、辟支佛、諸の菩薩摩訶薩、諸佛、諸佛の一切種智は、皆な是の般若波羅蜜より生ずればなり」と。

爾の時、釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、閻浮提の人の、般若波羅蜜を供養せず、恭敬せず、尊重せず、讚歎せざるは、供養の利益する所多きを知らざるが爲なるや」と。佛、釋提桓因に告げたまはく、「憍尸迦よ、汝が意に於て云何。閻浮提の中、幾所の人が、佛を信じて壞せず、法を信じて〔壞せず〕、僧を信じて壞せず、幾所の人か、佛に於て疑なく、法に於て疑なく、僧に於て疑なきや。幾所の人か、佛に於

【三】 聖本は「衆生を成就し、佛世界を淨むることも、皆な般若波羅蜜の中より生じ」原文十七字缺之。



復次に、善男子、善女人は若し惡法を遠離し、其の心を調伏し、煩惱を折減し、一心に直信なれば善法に疑悔あること無く、久遠より已來、福德智慧を修集し、一切衆生に於いて、慈悲心あり、衆生を教化して、惡心を除去す、是の如き善男子は、刀兵も命を傷つけず、中斷せず。佛自ら因縁を説きたまへるが如し。長夜に六波羅蜜を行じて、己身及び他身の三毒の刀箭を除く。五波羅蜜は、是れ福德、般若波羅蜜は是れ智慧にして、已に廣く此の二事を集むるが故に、失命に中らず。毒藥、水火等も亦た是の如し。

復次に、外道、神仙の如きは、呪術の力の故に、水に入るも溺れず、火に入るも熱からず、毒蟲も蝨さず、何に況んや、般若波羅蜜をや。是は十方諸佛の因つて呪術を成就したまふ所なり。

問うて曰はく、上の所説の如き、是の事は信すべし。今、此の中には能く般若を受持し、讀誦し、念する等あらず、但だ書寫し供養するのみ。云何なれば是の功德を得るや。

答へて曰はく、是の人の所得の功德も亦た上に同じ。何となれば、人あり、先づ已に師の般若の義を説くを聞き、深く入りて愛樂するも、然も文字を識らず、師に遠離するが故に、讀誦すること能はず。而も財寶を惜まず、人を雇ひて書寫し、心を盡くして種種に供養せんに、意は讀誦の者と同じ、故に亦た功德を得。人の便を得ること能はざるは、諸天守護すればなり。是の事は信じ難きが故に、佛は菩提樹を以て喩と爲したまへり。佛は般若の力を以ての故に、菩提樹の下に於て、無上道を成じたまひ、無上道の氣勢の故に、其の處すら猶ほ威徳ありて、衆生の(其の)中に入るに、衆惡は其の便を得ず。何に況んや、般若波羅蜜は、是れ諸佛の母なり。善男子、心を盡して供養せんに、而も功德なからんや。

【經】 釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、善男子、善女人、般若波羅蜜を書寫し、華香、瓔珞乃至伎樂もて供養すると、若くは人あり、佛涅槃の後、若くは舍利を供養し、若くは塔を起して、供養し、恭敬し、

子、及び十方無量阿僧祇世界中の諸の四天王乃至阿迦尼吒の諸天等の爲に守護せらるるが故なり。是の般若波羅蜜の所止の處には、諸天皆な來りて、供養し、恭敬し、尊重し、讚歎し、禮拜し已りて去る。是の善男子、善女人は、般若波羅蜜をば、但だ書寫し、舍に於いて供養するのみにて、受けず、讀まず、誦せず、説かず、正しく憶念せざるも、今世に、是の如き功德を得。譬へば、若くは人、若くは畜生にして、菩提樹トの諸邊、内外に來入せんに、設ひ人、非人來るも、其の便を得ること能はざるが如し。何となれば、是の處は、過去の諸佛、(其の)中に於て阿耨多羅三藐三菩提を得たまひ、未來の諸佛、現在の諸佛も、亦た(其の)中に於て、阿耨多羅三藐三菩提を得たまふべく、佛を得已りて一切衆生に、無恐無畏を施し、無量阿僧祇の衆生をして、天上、人中の福樂を受けしめ、亦た無量阿僧祇の衆生をして、須陀洹果を得、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得せしめたまふ。般若波羅蜜の力を以ての故に、是の處に、恭敬し、禮拜し、華香、瓔珞、持香、澤香、幢蓋、伎樂を供養することを得。

【論】問うて曰はく、現に受持し讀誦すること有りて軍陣に入るも、刀兵の爲に傷つけられ、或は命を失ふに至る。又た佛は、業因縁は非空非海の中にも免るるを得ること無しと説き給へり。是の中に、佛は何を以ての故に、般若を讀誦する者は、軍陣中に入るも兵刃に傷つかず、亦た命を失はずと言ふや。

答へて曰はく、二種の業因縁あり。一には必ず應に報を受くべし。二には必ずしも報を受けず。必ず應に報を受くべきが爲の故に、法句の中には是の如く説き、此の中には、必ずしも報を受けざるが爲の故に、般若を讀誦すれば、兵刃に傷つかずと説く。譬へば、大逆重罪の應に死すべき人は、強力財寶ありと雖も、免るることを得べからず。人の罪輕くして死の料理に入ると雖も、救ふに用ふべき力勢、財物あれば便ち命を濟ふことを得、救はざれば則ち死するあるが如し。善男子も亦た是の如く、若し必ず報罪を受くるに無ざれば、死事來ること有りと雖も、般若波羅蜜を讀誦するに至れば、則ち濟度することを得。若し讀誦せざれば、則ち死を免れず。是の故に、般若波羅蜜に、力勢あること無しと言ふことを得ず。

【二】宋・元・明等他本は「罪もて死の料理に入ると雖も」に作る。

## 卷の第五十七

## 第三十二 寶塔校量品

爾の時に、佛、釋提桓因に告げたまはく、「若し、善男子、善女人ありて、是の深般若波羅蜜を聞き、受持し、親近し、讀誦し、正しく憶念して薩婆若の心を離れざれば、兩陣戦ふ時、是の善男子善女人は、般若波羅蜜を誦するが故に、軍陣中に入るとも終に命を失せず、刀箭も傷けず。何となれば、是の善男子善女人は、長夜に、六波羅蜜を修行して、自ら姪欲の刀箭を除き、亦た他人の姪欲の刀箭をも除く。自ら瞋恚の刀箭を除き、亦た他人の瞋恚の刀箭を除く。自ら愚癡の刀箭を除き、亦た他人の愚癡の刀箭をも除く。自ら邪見の刀箭を除き、亦た他人の邪見の刀箭をも除く。自ら纏垢の刀箭を除き、亦た他人の纏垢の刀箭をも除く。自ら諸の結使の刀箭を除き、亦た他人の結使の刀箭をも除く。憍尸迦よ、是の因縁を以て、是の善男子善女人は、刀箭の爲に傷けられず。

復次に、憍尸迦よ、是の善男子、善女人は、是の般若波羅蜜を聞き、受持し、親近し、讀誦し、正しく憶念して、薩婆若の心を離れずんば、若くは毒藥を以て熏じ、若くは蟲道こどもちを以てし、若くは火杭を以てし、若くは深水を以てし、若くは刀殺を欲し、若くは毒を與ふるも、是の如き衆惡も、皆な傷つること能はざるなり。何となれば、是の般若波羅蜜は、是れ大明咒、是れ無上咒なればなり。若し善男子善女人、是の明咒の中に於いて學せば、自から身を惱まさず。亦た他を想まさず、亦た兩ながら惱まさず。何となれば、是の善男子善女人は、我を得ず、衆生を得ず、壽命を得ず、乃至知者、見者皆な得べからず、色、受、想、行、識を得べからず、乃至一切種智も亦た得べからざればなり。得べからざるを以ての故に、自ら身を惱まさず、亦た他を惱まさず、亦た兩ながら惱まさざるなり。是の大明咒を學するが故に、阿耨多羅三藐三菩提を得。一切衆生の心を見て、意に従つて說法す。何となれば、過去の諸佛も、是の大明咒を學びて、阿耨多羅三藐三菩提を得たればなり。當來の諸佛も是の大明咒を學して、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べく、今現在の諸佛も、是の大明咒を學して、阿耨多羅三藐三菩提を得たまふ。

復次に、憍尸迦よ、般若波羅蜜は、若し但だ經卷を書寫し、舍に於いて、供養すること有るのみにして、而も受けず、讀まず、誦せず、説かず、正しく憶念せざるも、是の處、若くは人、若くは非人、其の便を得ること能はず。何となれば、是の般若波羅蜜は、三千大千世界の中の四天王、諸天乃至阿迦尼吒の諸天

【一】宮本は「釋第三十二品大明品」とある。

四事の功德を失す。所謂、後身に貧窮に生じ、貧窮なるが故に、自ら利益すること能はず、何ぞ能く他を利せん。若し他を利せざれば、則ち衆生を成就すること能はず。衆生を成就すること能はざれば、亦た佛世界を淨むること能はず。何となれば、衆生淨なるを以ての故に、世界清淨なればなり。若し是等の衆事を具足せずんば、云何ぞ當に一切種智を得べき。要を以て之を言へば、方便なき者は、六波羅蜜を行はずと雖も、内に我心を離るゝこと能はず、外に諸法の相を取る。所謂、我は是れ施者、彼は是れ受者、是は布施物と。是の因縁の故に佛道に到ること能はず。此と相違するは是れ方便なり。

問うて曰はく、若し世間の波羅蜜等は、是れ正道に非ず。是の般若波羅蜜の中に、佛は何を以てか説きたまひしや。

答へて曰はく、此は是れ行者の初門にして、正道と相似するが故に、先づ相似の法を行じ、後に眞道を得るなり。

に來る者は、人を惱ますことを爲さず、但だ般若波羅蜜を破毀することのみを欲するも、其の願に隨はず、破することを得ること能はず。後に來る三種の人は、心に破壊を生ぜん欲すと雖も、即時に滅し去る。

「語るところを人、皆な信受す」とは是の菩薩は常に不善法をして斷滅し、善法轉た増さしむ。所謂、檀波羅蜜より乃ち一切種智に至るまでなり。是の人は福德智慧を修集するが故に、大威徳を成じ、設使ひ妄語の人も皆な信受す。何に況んや、實語の親友、堅固の者をや。是の人は一切衆生の中に於いて、深く慈悲心あり。何に況んや、親友の我に於いて益あるをや。是の菩薩に佛道を愛敬し、身口の無常を知るが故に、無益の言を説かず、善法增長するを以ての故に、瞋恚等の煩惱も、心を覆ふこと能はず。行者は是の念を作さく、「結使を起すと雖も、智慧もて思惟せば、心を覆はしめず、結使若し起らば、今世にも不善、後世にも不善にして佛道を妨ぐ。設使ひ心に結使を起すと、口業を起さず。設ひ口業を起すと、身業を成さず、設ひ身業を起すと、大惡に至りて、凡夫の人の如くならず。是の菩薩は、「復た」卑陋鄙賤なりと雖も、勝法を行するを以ての故に、勝人の數中に在ることを得。是れ今世の功德なり。是の人は深く善法を樂ふが故に、能く善法に於いて四種の正行を求む。二乗の人は、四行を具足すること能はず。深く善法を樂はざるを以ての故なり。所謂、自ら殺生せず、一切を慈悲するも、自利に深きが故に亦た他慈を教えず。是れは一切賢聖の法なるが故に常に讚歎す。是の菩薩は、常に人をして樂たのしみを得せしめんと欲するが故に、不殺の者あるを見れば、歡喜し愛樂す。乃至一切種智も、亦た是の如し。

上には四種の行を廣説し、今は略して功德を説き、總じて六波羅蜜の中に攝入す。所得の果報は衆生と之を共にす。是の菩薩は未だ正位に入らず、諸の煩惱未だ盡さざるが故に、或る時は慳等の諸の煩惱を起す。爾の時、應に是の思惟を作して、其の心の共に布施せざるを諫諭すべし。「我は自ら

親近し、讀誦し、他の爲に説き、正しく憶念し、亦た薩婆若の心を離れずんば、是の今世後世の功德を得。釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、希有なり。是の菩薩摩訶薩は航若波羅蜜を薩婆若に廻向することを爲すが故に、亦た高心ならざるが爲の故に」と。佛、釋提桓因に告げ給はく、「憍尸迦よ、云何なるを菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を薩婆若の心に廻向するが爲の故に、亦た高心ならざるが爲の故にといふや」。釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩、若し世間の檀波羅蜜を行じて、諸の佛、辟支佛、聲聞及び諸の貧窮、乞<sup>三</sup>句、行路の人に布施せんも、是の菩薩は方便なきが故に、高心を生ず。若し世間の尸羅波羅蜜を行ずるも、「我は尸羅波羅蜜を行ず。我は能く尸羅波羅蜜を具足す」と言はば、方便なきが故に、高心を生ず。「我は歸提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜を行じ、我は般若波羅蜜を行じ、我は般若波羅蜜を修したり」と言はば、是れ世間の般若波羅蜜は方便なきを以ての故に、高心を生ず。世尊よ、菩薩は世間の四念處を修する時、自ら念言すらく、「我は四念處を修し、我は四念處を具足す」と。方便力なきが故に、高心を生ずらく、「我は四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分を修す」と。自ら念言すらく、「我は空、無相、無作三昧を修し、我は一切三昧門を修し、當に一切陀羅尼門を得べし。我は佛の十力、四無所畏、十八不共法を修し、我は當に衆生を成就すべく、我は當に佛世界を淨むべく、我は當に一切種智を得べし」と。吾我に著し、方便力なきが故に高心を生ず。世尊よ、是の菩薩摩訶薩は、世間の善法を行じ、吾我に著するが故に高心を生ず。世尊よ、若し菩薩摩訶薩、出世間の檀波羅蜜を行ずれば、施者を得ず、受者を得ず、施物を得ず。是の如きの菩薩摩訶薩は出世間の檀波羅蜜を行じて、薩婆若に廻向するが爲の故に、亦た高心を生ぜず。尸羅波羅蜜を行ずるに、尸羅は不可得なり。歸提波羅蜜を行ずるに、歸提は不可得なり。毘梨耶波羅蜜を行ずるに、毘梨耶は不可得なり。禪波羅蜜を行ずるに、禪は不可得なり。般若波羅蜜を行ずるに、般若は不可得なり。四念處を行ずるに、四念處は不可得なり。乃至十八不共法を修するに十八不共法は不可得なり。大慈大悲を修するに大慈大悲は不可得なり。乃至一切種智を修するに一切種智は不可得なり。世尊よ、是の如きの菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を薩婆若に廻向することを爲すが故に、亦た高心を生ぜざることを爲すが故に」と。

【論】問うて曰はく、先に已に、魔若くは魔民等の三種の人、般若を破壊せんと欲すと説けり。今何を以てか重ねて説くや。

答へて曰はく、佛の先に説きたまふ三種の人は、來りて便を求め、恐怖し愁惱せしめんと欲す。中

【三】「乞句」の句は「句」の誤りか。句はカイ、カツと訓じ句、又は丐にも作り、乞、求に通ず。「乞句」は乞食に同じ、こひ求むるの義。

自ら<sup>二</sup>八解脱の中に入り、人をして八解脱の中に入らしめ、八解脱を讚じ、亦た八解脱に入る者を歡喜し、讚歎す。自ら九次第定中に入り、人をして九次第定中に入らしめ、九次第定を讚じ、亦た九次第定に入る者を歡喜し、讚歎す。

自ら佛の十力、四無所畏、四無礙智、大慈大悲、十八不共法を修するも亦た是の如し。

自ら不謬錯の法を行じ、自ら常捨法を行じ、入をして不謬錯の法(及び)常捨法を行ぜしめ、不謬錯の法(及び)常捨法を讚じ、亦た不謬錯の法(及び)常捨法を行ずる者を歡喜し、讚歎す。

自ら一切種智を得、人をして一切種智を得せしめ、一切種智を讚じ、一切種智の法を得る者を歡喜し、讚歎す。是の菩薩摩訶薩は六波羅蜜を行ずる時、所有る布施を衆生と共にし已りて、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す、無所得なるを以ての故なり。所有る持戒、忍辱、精進、禪定、智慧を衆生と共にし已りて、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す、是れ亦た無所得なるが故なり。

是の善男子善女人は、是の如く、六波羅蜜を行ずる時、是の念を作さく、「我、若し布施せずんば當に貧窮の家に生れ、衆生を成就し、佛世界を淨むること能はず、亦た一切種智を得ること能はざるべし。我、若し戒を持たずんば、當に三惡道中に生じ、尙ほ人身すら得ざるべし。何に況んや、能く衆生を成就し、佛世界を淨め、一切種智を得んや。我、若し忍辱を修めずんば、則ち當に諸根を毀壞し、色を具足せず、菩薩の具足せる色身ありて、衆生、見者、必ず阿耨多羅三藐三菩提に至ることを得る能はず、亦た具足する色身を以て、衆生の成就し、佛世界を淨むることを得て、一切種智を得ること能はざるべけん。我、若し懈怠せば、菩薩道を得ること能はず、亦た衆生を成就し、佛世界を淨むることを得て、一切種智を得ること能はず。我、若し亂心ならば、諸の禪定を生ずること能はず、此の禪定を以て、衆生を成就し、佛世界を淨め、一切種智を得ること能はず、我、若し無智ならば、方便智を得、方便智を以て、聲聞、辟支佛地を過ぎ、衆生を成就し、佛世界を淨め、一切種智を得ること能はざらん」と。

是の菩薩は復た是の思惟を作さく、「我、慳貪に隨ふが故に、檀波羅蜜を具足せざることあるべからず。犯戒に隨ふが故に尸羅波羅蜜を具足せざることあるべからず、瞋恚に隨ふが故に、毘提波羅蜜を具足せざることあるべからず、懈怠に隨ふが故に、毘梨耶波羅蜜を具足せざることあるべからず、亂意に隨ふが故に、禪波羅蜜を具足せざることあるべからず。癡心に隨ふが故に、般若波羅蜜を具足せざることあるべからず。若し檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、毘提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜を具足せずんば、我、終に一切種智を出到すること能はざらん」と。是の如く善男子善女人は、是の般若波羅蜜を受持し、

【二】「八解脱」三字、聖本石本俱に「八背捨」に作る。

を遠離する者を歡喜し、讚歎す。自ら邪淫せず、人をして邪淫せざらしめ、不邪淫の法を讚じ、亦た不邪淫の者を歡喜し、讚歎す。自ら妄語せず、人をして妄語せざらしめ、不妄語の法を讚じ、亦た不妄語の者を歡喜し、讚歎す。兩舌、惡口、無利益の語も、亦た是の如し。自ら食らず、人をして食らざらしめ、不食の法を讚じ、亦た不食の者を歡喜し、讚歎す。不瞋惱、不邪見も亦た是の如し。

自ら檀波羅蜜を行じ、人をして檀波羅蜜を行ぜしめ、檀波羅蜜の法を行ずるを讚じ、亦た檀波羅蜜を行ずる者を歡喜し、讚尸す。自ら尸羅波羅蜜を行じ、人をして尸羅波羅蜜を行ぜしめ、尸羅波羅蜜を讚じ、亦た尸羅波羅蜜を行ずる者を歡喜し、讚歎す。自ら鬚提波羅蜜を行じ、人をして鬚提波羅蜜を讚ぜしめ、亦た鬚提波羅蜜を行ずる者を歡喜し、讚歎す。自ら毘梨耶波羅蜜を行じ、人をして毘梨耶波羅蜜を行ぜしめ、毘梨耶波羅蜜を讚じ、亦た毘梨耶波羅蜜を行ずる者を歡喜し、讚歎す。自ら禪波羅蜜を行ぜしめ、禪波羅蜜を讚じ、亦た禪波羅蜜を行ずる者を歡喜し、讚歎す。自ら般若波羅蜜を行じ、人をして般若波羅蜜を行ぜしめ、般若波羅蜜を讚じ、亦た般若波羅蜜を行ずる者を歡喜し、讚歎す。自ら內空を修し、人をして內空を修せしめ、內空を讚じ、亦た內空を修する者を歡喜し、讚歎す。乃至自ら無法有法空を修し、人をして無法有法空を修せしめ、無法有法空を讚じ、亦た無法有法空を修する者を歡喜す、讚歎す。

自ら一切三昧の中に入り、人をして一切三昧中に入らしめ、一切三昧を讚じ、亦た一切三昧を<sup>二</sup>入る者を歡喜し、讚歎す。自ら陀羅尼を得、人をして陀羅尼を得せしめ、陀羅尼を讚じ、亦た陀羅尼を得る者を歡喜し、讚歎す。

自ら初禪に入り、人をして初禪に入らしめ、初禪を讚じ、亦た初禪に入る者を歡喜し、讚歎す。二禪、三禪、四禪も亦た是の如し。自ら慈心の中に入り、人をして慈心の中に入らしめ、慈心を讚じ、亦た慈心に入る者を歡喜し、讚歎す。悲、喜、捨も亦た是の如し。自ら無邊空處に入り、人をして無邊空處に入らしめ、無邊空處を讚じ、亦た無邊空處に入る者を歡喜し、讚歎す。無邊識處、無所有處、非有想非無想處も亦た是の如し。

自ら四念處を修し、人をして四念處を修せしめ、四念處を讚じ、亦た四念處を修する者を歡喜し、讚歎す。四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分も亦た是の如し。自ら空・無相・無作三昧を修し、人をして空・無相・無作三昧を修せしめ、空・無相・無作三昧を讚じ、亦た空・無相・無作三昧を修する者を歡喜し、讚歎す。

【二】「入」字、宋・元・明等他本は「行」に作る。



め、終に願を成ぜず。人の手を以て、鉾ほこを障げんに、但だ自ら其の手を傷けて、鉾は損する所なきが如し。何となれば、菩薩は内外の法に於いて著せず。衆生は無始世界より來たこゝか、常に内外の法に著するが故に、鬪諍を起す。菩薩は内外の著處を捨て、自ら六波羅蜜に安立し、衆生を教化して、内外の鬪法を捨てしめ、衆生を六波羅蜜に安立す。是の無量世に福徳力を修集して、鬪諍の根盡くるが故に、鬪諍の事ありと雖も、來りて便を得ること能はず。譬へば、毒蛇の蝦蟇を食せんと欲して、常に之に隨逐するに、蝦蟇、摩祇藥の所に到れば、蛇は藥氣を聞きて、毒即ち消歇するが如し。是の法を壞する悪人も亦復た是の如く、般若波羅蜜を行する人を壞せんと欲して、常に之に隨逐するに、般若の力勢を以ての故に、瞋恚、邪見の毒は、即時に消滅し、降伏して、道を得る者あり、弟子と作る者あり、復た道より還り去る者あり。是の般若波羅蜜は、能く無明等の諸の結使を破し、諸の斷常の邪見等を破し、能く五衆、乃至涅槃に著するを滅す。何に況んや、瞋恚・嫉妬・鬪亂の事にして、而も能く滅せざらんや。

【經】復次に、橋尸迦よ、三千大千世界の中の諸の四天王天、諸の釋提桓因、諸の梵天王、乃至阿迦尼吒天は、常に是の善男子善女人の、能く般若波羅蜜を受持し、供養し、讀誦し、他の爲に説き、正しく憶念する者を守護す。十方現在の諸佛も、亦た共に、是の善男子善女人の、能く般若波羅蜜を聞き、受持し、供養し、讀誦し、他の爲に説き、正しく憶念する者を擁護したまふ。是の善男子、善女人は、不善法を滅し、善法轉た増す、所謂、檀波羅蜜轉た増す、無所得なるを以ての故なり。乃至、般若波羅蜜轉た増す、無所得なるを以ての故なり。内空轉た増し、乃至無法有法空轉た増す、無所得なるを以ての故なり。四念處、乃至、十八不共法轉た増す、無所得なるを以ての故なり。諸の三昧門、諸の陀羅尼門、一切智、一切種智轉た増す、無所得なるを以ての故なり。是の善男子、善女人の所説は、人皆な信受し、親友堅固にして、無益の語を説かず。瞋恚の爲に覆はれず、憍慢、慳貪、嫉妬の爲に覆はれず。

是の人は自ら殺生せず、人をして殺生せしめ、不殺生の法を讚じ、亦た不殺生の者を歡喜し、讚歎す。自ら不與取を遠離し、亦た人をして不與取を遠離せしめ、不與取の法を遠離することを讚じ、亦た不與取

す。諸佛の法を觀るに、不可思議にして、衆生に於いて、大悲有るが故に法を説き、邪見、戲論を以て佛法を求めず、佛の意旨の如くにして、著せざるが故に、法を説くも亦た著せず。四顛倒等の諸の邪よこしまなる憶念を除くが故に、四念處の正憶念の中に住し、但だ得道の爲の故に、戲論を爲さざるを名けて、正憶念と爲す。「正憶念」は是れ一切善法の根本にして、修習の行者の初めて入るを名けて、正憶念と爲し、常に行じて、禪定を得るが故に、名けて修と爲す。「今世の功德」とは、先に義を説くが如し。今釋提桓因は、更に今世の功德を説く。所謂、衆生を教化し、乃至衆生をして三乘を得せしむ。先に、般若波羅蜜は、三乘を攝すと説きて、其の義を解せしむ。是の故に、般若波羅蜜の中に、五波羅蜜乃至一切種智と攝すと言ふ。佛、其の説を可としたまふとは、人をして信ぜしめんと欲したまふが故なり。得る所の今世の功德を、汝、一心に諦に聽けとは、上に略して、今世の功德を説き、佛は今廣く其の事を説かんと欲したまふに、信持し難きが故に、一心に諦かに聽けと言へり。

復次に、因小、果大にして、信じ難きが故に、一心に諦に聽けと言ひ、帝釋は信受すと雖も、人知らざるが故に、「唯、世尊よ」と言ふ。是の般若波羅蜜は破壊す可からずと雖も、而も實相を宣示する語言は破す可く、語言破するが故に、信心未だ定らざる者も、亦た破す可し。是の故に、若くは外道梵志等來りて、般若波羅蜜を破壊せんと欲すと説く。「梵志」とは、是れ一切出家の外道にして、若し其の法を承用すること有る者も、亦た梵志と名く。梵志は其の法に愛著し、實相の空法を聞きて、信ぜざるが故に破壊せんと欲す。「魔若くは魔民」とは、先に説くが如し。「増上慢の人」とは、是れ佛弟子の禪定を得るも、未だ聖道を得ざるに、自ら已に得たりと謂ひ、是の人は、須陀洹なく、乃至阿羅漢なく、道なく涅槃なしと聞きて、便ち増上慢を發し、忿惱の心を生じて、是の實相の空法を破せんと欲するなり。是の般若波羅蜜の神力の故に、彼の惡心をして、即時に滅去せし

四禪、四無量心、四無色定、四念處乃至八聖道分、空・無相・無作三昧に安立し、衆生を須陀洹果乃至阿羅漢果、辟支佛道、佛道に安立す。憍尸迦よ、是を菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行じて、現世の功德と後世の功德とを得と爲す。阿耨多羅三藐三菩提を得て、菩薩は法輪を轉じて所願を満足し、無餘涅槃に入る。憍尸迦よ、是を菩薩摩訶薩の後世の功德と爲す。

復次に、憍尸迦よ、善男子、善女人は、是の般若波羅蜜を、若くは聞き、受持し、親近し、讀誦し、他の爲に説き、正憶念せんに、其の所住の處の魔、若くは魔民、若くは外道、梵志、増上慢の人、般若波羅蜜を輕毀し、難問し、破壞せんと欲するに、終に成ずること能はず。其の人は、惡心轉た滅し、功德轉た増す。是の般若波羅蜜を聞くが故に、漸く三乗の道を以て、衆苦を盡くすことを得。譬へば、憍尸迦よ、藥あり、摩祇と名く。蛇あり、飢を行いて、食を索め、蟲を見て噉はんと欲するに、蟲、藥の所に趣き、藥氣の力の故に、蛇は前むすこと能はず、即便ち還り去るが如し。何となれば、是の藥力は能く毒に勝つが故なり。憍尸迦よ、摩祇の藥は、是の如き力あり。是の善男子、善女人は、是の般若波羅蜜を、若くは、受持し、親近し、讀誦し、他人の爲めに説き、正しく憶念せば、若し種種の鬭争を起し、來りて破壞せんと欲する者あらんに、般若波羅蜜の威力を以ての故に、所起の處に隨つて即ち疾く消滅し、その人は、即ち善心を生じて、功德を増益す。何となれば、是の般若波羅蜜は、能く諸法の諍亂を滅す。何等か諸法なる、所謂、婬・怒・癡・無明、乃至大苦聚、諸蓋、結使、纏、我見、人見、衆生見、斷見、常見、垢見、淨見、有見、無見、是の如き一切の諸見と、慳貪、犯戒、瞋恚、懈怠、亂意、亂意、無智、常想、樂想、淨想、我想、是の如き等の愛行、色に著し、受想行識に著し、檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、厲提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜に著し、內空、外空、内外空乃至無法有法空に著し、四念處乃至十八不共法に著し、一切智、一切種智に著し、涅槃に著するなり。是の一切法の諍亂盡くこく能く「消」滅して増長せしめず。

【論】釋して曰はく、「聞く」とは、若くは佛より、若くは菩薩(より)、若くは餘の説法人の邊(より)、般若波羅蜜を聞くなり。是れ十方の三世諸佛の法寶藏なり。聞き已りて信力を用ふるが故に「受け」、念力の故に「持し」、氣味を得るが故に常に來りて承奉し、諮受するが故に「親近し」、親近し已れば或は文を看、或は口受の故に「讀」むと言ひ、爲に常に得て忘れざるが故に「誦し」、宣傳を未だ聞かざるが故に、「他の爲に説く」と言ひ、聖人の經書を直に説きて、歎じ了るが故に、義を解

第三十一 滅諍亂品

【經】

爾の時、釋提桓因、佛に白して言さく、「世尊よ、甚だ奇なり、希有なり。諸の菩薩摩訶薩、是の般若波羅蜜を若し聞いて、受持し、親近し、讀誦し、他の爲に説き、正憶念する時は、是の如く、今世の功德を得。亦た衆生を成就し、佛國土を淨め、一佛界より一佛界に至りて、諸佛を供養したてまつり、欲する所の供養の具は、意に隨つて即ち得、諸佛より法を聞きたてまつり、阿耨多羅三藐三菩提を得るに至るまで終に中忘せず。亦た家の成就、母の成就、生の成就、眷屬の成就、相の成就、光明の成就、眼の成就、耳の成就、三昧の成就、陀羅尼の成就を得。是の菩薩は方便力を以て身を變ずること佛の如く、一佛界より一佛界に至り無佛處に到りて檀波羅蜜乃至般若波羅蜜を讚じ、四禪、四無量心、四無色定を讚し、四念處乃至十八不共法を讚ず。方便力を以て法を説き、三乗の法を以て衆生の度脱す。所謂、聲聞、辟支佛、佛乘なり。世尊よ、快い哉、希有なり。是の般若波羅蜜を受ければ、已に總じて五波羅蜜乃至十八不共法を攝すと爲すや。亦た須陀洹果乃至阿羅漢果、辟支佛道、佛道、一切智、一切種智を攝するや」と。

佛、釋提桓因に告げたまはく、「是の如し、是の如し。憍尸迦よ、是の般若波羅蜜を受ければ、已に總じて五波羅蜜乃至一切種智を攝すと爲す。復次に、憍尸迦よ、是の般若波羅蜜をば受持し、親近し、讀誦し、他の爲に説き、正しく憶念する、是の善男子、善女人の得る所の今世の功德を汝一心に諦かに聽け」と。釋提桓因の言はく、「唯、世尊よ、教を受けん」と。

佛、釋提桓因に告げたまはく、「憍尸迦よ、若し外道、諸の梵志、若くは魔、若くは魔民、若くは増上慢の人ありて、菩薩の般若波羅蜜の心を乖錯し、破壊せんと欲するに、是の諸人は、適ま此の心を生ずるや、即時に滅し去りて、終に願に從はず。何となれば、憍尸迦よ、菩薩摩訶薩は、長夜に檀波羅蜜を行じ、尸羅・毘梨耶・禪・般若波羅蜜を行ず。衆生は長夜に貪諍するを以ての故に、菩薩は悉く内外の物を捨てて、衆生を檀波羅蜜の中に安立す。衆生は、長夜に、破戒するを以ての故に、菩薩は悉く内外の法を捨てて、衆生を戒に安立す。衆生は、長夜に鬪諍するを以ての故に、菩薩は悉く内外の法を捨てて、衆生を忍辱に安立す。衆生は、長夜に懈怠するを以ての故に、菩薩は悉く内外の法を捨てて、衆生を精進に安立す。衆生は、長夜に亂心するを以ての故に、菩薩は悉く内外の法を捨てて、衆生を禪に安立す。衆生は、長夜に愚癡なるを以ての故に、菩薩は悉く内外の法を捨てて、衆生を般若波羅蜜に安立す。衆生は、長夜に愛結を爲すを以ての故に、生死に流轉す、是の菩薩摩訶薩は、方便力を以ての故に、衆生の愛結を斷じて、

【八】官本「釋滅諍品」に作る。

【九】「一佛界」二字、別本は「一界」また別本には「一佛國」に作る。

【一〇】「尸羅・毘梨耶・禪」(那)、般若波羅蜜、石本は「尸羅波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪(那)波羅蜜、般若波羅蜜」に作る。

【論】釋して曰はく、爾の時、諸天、佛に白さく、「我等、當に是の菩薩を守護すべし。我等と事を同じうするが故に、亦た佛道を求むる者は、能く自ら身を捨て、楽しんで一切衆生をして、樂を得せしめんと欲するを以ての故なり」と。

「菩薩に因りて三惡道を斷ずとは、菩薩は未だ欲を離れずと雖も、能く衆生の十不善を遮するが故に、三惡道及び天人の貧窮、諸の災患等を斷じ、十善を行するが故に、三善道の門を開く。或は菩薩ありて五欲の過罪を見、能く欲を離れて四禪を得、本願を以ての故に、四無量心を起し、種種の因縁、身の苦を離れんと欲するが故に、四無色定を起し、佛道の爲めの故に、六波羅蜜、乃至一切種智を修し、是の法を亦た自ら行じ、亦た人にも教へ、是の福德の道法を以て、衆生の中に於いて、展轉して相教へ、常に世間に在り。今當に是の諸の善報の果報を説くべし。刹利の百姓に生ずるより、乃ち三寶の世に出現するに至るまでは、先の義の中に説くが如し。今是の菩薩は、結業生身にして因縁の中に在り、力勢あること無くして、而も能く是の善法を説き、衆生をして修行せしむ。我等は云何ぞ當に守護せざらん。譬へば、太子は小なりと雖も、群臣、百官、奉承せざること無きが如し。佛は諸天の述を可として、而して之を成じ給まへり。若し菩薩を供養する者は、即ち是れ佛を供養する者なり。般若は是れ三世の佛の母なり。若し般若の爲の故に、菩薩を供養すれば、則ち佛を供養すと爲すなり。「初發意の菩薩を供養し、恭敬するに如かず」とは。

問うて曰はく、二乗は已に實際を證す、是れ一切衆生の福田なり、何を以ての故に、初發意の菩薩に如かざるや。

答へて曰く、三事を以ての故に如かざるなり。一には薩婆若の心を用つて行じ、二には常に六波羅蜜等の諸の功德を離れず、三には是の菩薩に由りて三惡道を斷じ、三乗を出生す。二乗の人に依りては、三惡道を斷じ、三乗に出生すること能はざるなり。

【七】「初發意の菩薩を供養し、恭敬するに如かずとは」の課題は直ちに次の問答となる。今その解答を略記せば「菩薩は三事を以ての故に二乗に勝るなり」といふことになり、三事とは次の本文を勢照せよ。

虎狼、獅子、惡賊、鬼魅多し。人の所住の處は、不淨なるが故に、魔及び鬼神は尠しく來り、諸難  
少なきが故に、是を以て後に説けり。行者は三處に於いて住するも畏懼する所なし。(夫は二の因  
縁を以ての故なり。(即ち)一には、善く十八空を修し、二には、般若波羅蜜の威徳の故なり。

【經】爾の時、三千大千世界中の諸の四天王天、三十三天、夜摩天、兜率陀天、化樂天、他化自在天乃至首陀  
婆の諸天、佛に白して言さく、「世尊よ、是の善男子、善女人の、能く般若波羅蜜を受持し、親近し、讀誦  
し、正しく憶念して、薩婆若心を離れざる者を、我等は常に當に守護すべし。何となれば、世尊よ、菩薩  
摩訶薩の因縁を以ての故に三惡道を斷じ、天人の食を斷じ、諸の災患、疾病、飢餓を斷ず。菩薩の因縁を  
以ての故に、便ち十善道、出世間、四禪、四無量心、四無色定、檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘  
梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜、內空乃至無法有法空、四念處、乃至一切種智有り。菩薩の因縁を以  
ての故に、世間に便ち刹利の大姓、婆羅門の大姓、居士の大家、諸王及び轉輪聖王、四天王天乃至阿迦尼  
吒天に生ずる」と有り。菩薩の因縁を以ての故に、須陀洹、須陀洹果、乃至阿羅漢、阿羅漢果、辟支佛、  
辟支佛道有り。菩薩の因縁を以ての故に衆生を成就し、佛國土を淨むる有り。便ち諸佛の世に出現する有  
り、便ち法輪を轉ずる有り、(是の)佛寶、法寶、比丘僧寶あることを知る。世尊よ、是の因縁を以ての故  
に、一切世間の諸天及び人、阿修羅は應に是の菩薩摩訶薩を守護すべし」と。

佛、釋提桓因に語りたまはく、「是の如し、是の如し。憍尸迦よ、菩薩摩訶薩は、因縁を以ての故に、三  
惡道を斷じ、乃至三寶世に出現す。是を以ての故に、諸天及び人、阿修羅は常に應に是の菩薩摩訶薩を守  
護し供養し恭敬し尊重し讚歎すべし。憍尸迦よ、是の菩薩摩訶薩を供養し恭敬し尊重し讚歎するは、即ち  
是れ我を供養するなり。是を以ての故に、是の諸の菩薩摩訶薩を、諸天及び人、阿修羅は常に應に守護し供  
養し、恭敬し尊重し讚歎すべし。憍尸迦よ、若くは三千大千世界、(その)中に滿つる聲聞、辟支佛、譬へ  
ば竹箒、稻麻、叢林の如くならんを、若し善男子善女人ありて、供養し恭敬し尊重し讚歎するも、初發心の  
菩薩摩訶薩の六波羅蜜の所得の福徳を離れざるを供養し恭敬し尊重し讚歎せんには如かず。何となれば、  
聲聞、辟支佛の因縁を以ての故に、菩薩摩訶薩及び諸佛は世に出現すること有らず。菩薩摩訶薩の因縁あ  
るを以ての故に、聲聞、辟支佛、諸佛は世に出現すること有り。是を以ての故に、憍尸迦よ、是の諸の菩  
薩摩訶薩を、一切世間諸天及び人、阿修羅は、常に應に守護し供養し恭敬し尊重し讚歎すべし」と。

病の須ふる所に隨ふ。孤窮を拯濟するに、其の乞ふ所に隨つて、之を給與し、一切衆生の中に於いて、悉く皆な平等に好心もて供養し、亦た是の般若波羅蜜を行じ、是の功德を以ての故に横死せず。是の中に略して三の功德を説き已れり。三千大千世界の中、諸天の發心して、未だ般若波羅蜜を聞かざる者には、先に、「善男子善女人よ、應に聞いて受持し、乃至、正しく憶念すべし」と説き、今は因縁を説く。諸天の大功德あるすらも猶尙ほ供養す。何に況んや、人に於いてをや。一切の人天は應に般若を聽くべしと雖も、能く無上道心を發す者は、最も應に深心に聽くべし。何となれば、般若は是れ佛道の本なるが故なり。

問うて曰はく、此の天は發心するに、何を以てか般若を聞かざるや。

答へて言はく、此の人は、前世に人中に發意して、今天上に生じ、五欲、心を覆ふが故に聞かず。

復次に、諸天は無上道心を發すと雖も、五情の利、五欲の妙、染著深きが故に、東を視て西を忘れ、般若を求むること能はず。色界の諸天は、先づ法を聞いて發心すと雖も、禪定に味著すること深きを以ての故に、般若を求むること能はず。是の故に、聞かざる者は、應に聞いて受持すべしと説く。

復次に、先には魔及び魔天の、其の便を得ること能はざることを説く。是れ内の因縁にして、所謂、空三昧、及び四無量心なり。今は更に便を得ざることを説く。是れ外の因縁なり。所謂、佛、諸天に告げたまはく、「汝等、般若を供養し受持せよ。是の善男子善女人も、亦た是の般若を受持し供養す。事を同じうするが故に、若し魔來りて汝を破せば應に守護すべし」と。

復次に、般若を受持する者は、若くは空舍に在りて住し、若くは曠野に在り、若くは人間に在りて住す。空舍の中に處するは、諸の鬼魅及び賊寇多く、衆惡來り易きが故に初に説く。人の住處、及び空舍を除いて、餘殘の山澤樹林等は、皆な是れ曠野にして、人の行くこと少きが故に、諸の

答へて曰はく、先には實相の智慧の、受け難きを能く受くるを以ての故に、則ち是の菩薩摩訶薩を説き、今は供養、受持、讀誦等の雜説を説くが故に、善男子善女人を攝得す。復次に、經中に説く、女人に五礙あり、(即ち)釋提桓因・梵王、魔王、轉輪聖王、佛と作ることを得ず」と。是の五礙の(爲に)、作佛をする得ずと聞いて、女人は心退き發意すること能はず。或は説法する者あるも、女人の爲に佛道を説かず。是の故に、佛は此の間に説きたまはく、「善男子、善女人よ、女人は作佛を得べし、女身を轉ぜざるに非ざるなり」と。五礙は一身の事を説く。善男子善女人の義は、先に已に廣く説けり。「人、便を得ず」とは、人とは若くは賊、若くは官、若くは怨等に名く。菩薩を惱亂せんと欲して、其の便を求索するなり。

問うて曰はく、先には魔の便を得ざる因縁を説くに、何を以てか但だ空のみを説き、今は人の便を得ざるを説くに、但だ四無量心のみを説くや。

答へて曰はく、有人の言はく、「先には魔、若くは魔民を説くは、怨大なるが故に、法も亦た大なり、故に空を説く。(今は)怨小なるが故に法も亦た小なり、故に四無量心を説く」と。有人の言はく、「四無量心は、是れ菩薩の常に行じて、爲に諸の功德を集むるが故に、後に般若波羅蜜の空相を以て、邪見を除かしめ、衆生に著せず。亦た法にも著せず、是の二法は前後に在ること無し。

復次に、上には魔の恐怖の事を作すこと甚だ多く、多く本形を現せず、或は雷震を現じ、或は風雨を作し、或は病痛等を作す。是の故に諸法の空を説く。今は人の來りて、惡口し、罵詈し、刀杖もて打斫するが故に、四無量心を用ふ。

「横死せず」とは、所謂、罪なくして而も死するなり。或は壽命未だ盡きざるに、錯まりて藥を投ずるが故に、或は藥法に順ぜず、或は看病の人なく、或は飢渴寒熱等もて天命する、是を横死と名く。菩薩は初發意より來た、一切衆生の中に於いて、常に檀波羅蜜を行じ、病に應じて藥を與へ、

【六】茲にいふ「人」とは次に釋する所の「若くは賊、若くは官、若くは怨等に名く」の人なり。



則ち五衆魔及び死魔を壞す。云何ぞ便を得ることを爲さん。魔及び魔人は來りて菩薩を恐怖す。經中に説くが如くんば、魔は龍身の種種の異形長るべきの像と作り、夜來りて行者を恐怖し、或は上妙の五欲を現じて菩薩を壞亂し、或は世間の人心を轉じて、大供養を作さしむ。行者は供養に貪著するが故に、則ち道徳を失す。或は人心を轉じて菩薩を輕惱せしめ、或は罵り、或は打ち、或は傷け、或は害するに、行者は苦に遭うて、或は瞋恚憂愁を生ず。是の如き等の魔は、前人の意の趣向する所に隨ひ、因つて之を壞す。是を便を得と名く。魔品の中に廣く説くが如し。

問うて曰はく、魔の力は甚だ大なり。肉身の菩薩は道力尙ほ少し、云何となれば便を得ざるや。  
答へて曰はく、上に説くが如く、諸佛、菩薩の爲に護らるゝが故なり。此の中に、佛自ら因縁を説きたまへり。是の人は善く諸法の空を修し、亦た空にも著せず。空に著せざる者に、云何ぞ便を得べき。譬へば、瘡なければ則ち毒を受けざるが如く、無相、無作も亦た是の如し。復次に、一切法は實觀すれば、皆な是れ空、無相、無作の相なり。皆な是れ空、無相、無作の相なるが故に、則ち便を得ること無し、亦た受くる者なし。是の故に空は空の便を得べからず、無相は無相の便を得べからず、無作は無作の便を得べからず。(夫は)一相なるを以ての故なり。火は火を滅すること能はず、水を得れば則ち滅するが如し。(夫は)異相なるを以ての故なり。

問うて曰はく、菩薩は三解脱門に住すれば、則ち是れ便を受けん。處と一切法と相違するが故に、空と有と相違し、無相と有相と相違し、無作と有作と相違せん。

答へて曰はく、此の經中に、佛は自ら三解脱門を説きたまふに、自性あること無し。又た先の論議の中に、空、無相、無作を説く中にも亦た著せず。是の故に三解脱門に住すと雖も、魔及び魔民は、其の便を得ず。

問うて曰はく、餘處には皆な菩薩摩訶薩と言ふ。今何を以てか、善男子善女人と言ふや。

問うて曰はく、何者か是れ魔にして、何故に菩薩を惱まし、云何にして便を得るや。

答へて曰はく、魔とは、自在天主に名く、福德の因縁を以て、彼に生ずと雖も、而も諸の邪見を懐けり。(即ち)欲界の衆生は、是れ己が人民なるを以て、復た死生すと雖も、展轉して我が界を離れず。若し復た上の色、無色界に生ずるも、還り來りて我に屬す。若し外道の五通を得ること有るも、亦た未だ我が界を出でず、皆な以て憂と爲さず。若し佛及び菩薩の世に出づれば、我が民を化度して、生死の根を抜き、無餘涅槃に入りて、永く復た還らず。我が境界を空しうすと。是の故に、恨を起して驕嫉す。又た欲界の人を見るに、皆な佛に往趣し、來り歸らず、己に供養を失するが故に、心に嫉妬を生ず。是を以て佛、菩薩を以て名けて怨家と爲す。是の菩薩は、法位に入りて法性生身を得。魔は惡を起すと雖も、壞敗すること能はず。若し未だ阿鞞跋致地を得ざれば、魔は則ち種種に破壊す。若し菩薩、一心に身命を惜まず、方便ありて佛道を求むれば、十方の諸佛及び諸の大菩薩は皆な共に護持す。是の因縁を以ての故に能く佛道を成ず。若し菩薩と爲りて而も懈怠あり、世樂に貪著して、專心に佛道を勤求すること能はざれば、是れ則ち自ら欺き、亦た十方の諸佛及び諸の菩薩を欺くなり。所以何となれば、自ら言く、「我は一切衆生の爲の故に、佛道を求む」と。而も修行を行じ、菩薩の法を壞す。是の罪を以ての故に、諸佛、菩薩の守護せざる所にして、魔は其の便を得。所以何となれば、一切の聖人は、已に正位に入り、一心に道を行じて、深く涅槃を樂しみたまひ、魔は邪位に入りて、邪道を愛著し、邪正相違すればなり。是の故に正行を憎嫉し、狂愚にして自ら高ぶり、佛を沙門瞿曇と喚び、佛、其の實の名を稱して弊魔と爲し、相違するを以ての故に名けて怨家と爲す。經に説くが如くんば、魔に四種あり。一には煩惱魔、二には五衆魔、三には死魔、四には自在天子魔なり。此の中に般若の力を以ての故に、四魔は便を得ること能はず。諸法實相を得て、煩惱魔を壞すれば、天魔も亦た其の便を得ること能はず。無餘涅槃に入るが故に、

【論】問うて曰はく、此の中に佛は四部衆を觀已りて、何を以てか釋提桓因に告げ給へるや。

答へて曰はく、餘品の中には、多く般若波羅蜜の體を説く。今は般若の功德を讃ぜんと欲するが故に、釋提桓因に命じ給へり。譬へば、先づ好寶を以て人に示し、然る後に寶の能くする所を讃するが如し。復次に、普ねく觀るとは、會中の衆生をして、各佛の顧念を知りて、則ち自ら輕んぜざらしめんと欲す。自ら輕んぜざるが故に、法を聽くに堪任す。是を以て普ねく觀す。譬へば、王の群下を顧眄すれば、群下は則ち欣然として自ら慶ぶが如し。功德を説くが故に、應に白衣を以て證すべし。白衣の中には釋提桓因を大と爲す。般若を説くことは、出家の人を以て證と爲す。出家の人の中には、是れ舍利弗、須菩提等を大と爲す。

問うて曰はく、先に釋は是れ字、提桓因は、是れ天主なりと言へり。今は佛は何を以てか、釋と言はずして乃ち命じて、憍尸迦と言ひしや。

答へて曰はく、昔、摩伽陀國の中に婆羅門あり、摩伽と名く。姓は憍尸迦、福德にして大智慧あり。知友三十三人、共に福德を修し、命終りて皆な須彌山の頂、第二の天上に生れ、摩伽婆羅門は天主と爲り、三十二人は輔臣と爲れり。此の三十三人を以ての故に、名けて三十三天と爲し、其の本性を喚ぶが故に憍尸迦と言ひ、或は天主と言ひ、或は千眼等と言ひ、大人之を喚ぶが故に其の姓を稱す。此の中に説く所の般若波羅蜜は、是れ十方の諸佛の説き給へる所の語言名字を經卷に書寫し、實相の智慧を宣傳し顯示す。何となれば、般若波羅蜜には、諸觀の語言の相なくして、而も語言の經卷に因りて、能く此の般若波羅蜜を得、是の故に名字經卷を以て、名けて般若波羅蜜と爲す。此の中に略して佛意を説く。若し能く聞いて般若を受持せば、等しく當に種種の功德を得べし。後に當に廣く説くべし。衆生を度せんと欲し、佛道を得るが爲の故に、供養して般若波羅蜜を受學す。是の人は魔、若くは魔天も、便を得ること能はず。

【五】「白衣」とは繡衣即ち染衣の對、印度にては出家者の繡衣を着するに對し、在家者は白衣を着すれば、茲では在家者を指す。

薩の位に入り、十方の諸佛を見たてまつる。諸天は、佛の廣く明に已に歎じたまふ所の義解を聞き、心轉た深重にして復た讚歎す。一切法の過罪を見るを以ての故に取らず、利益あるが故に捨てず。又た一切法は畢竟空、不生不滅なるを以ての故に、取らず捨てざるなり。

【經】爾の時、佛は四衆の和合の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷及び諸の菩薩摩訶薩、並に四天王天、乃至阿迦尼吒の諸天の皆な會に坐せるを觀たまふ。(而して)普ねく觀已りて佛は釋提桓因に告げたまふ、「憍尸迦よ、若くは菩薩摩訶薩、若くは比丘、若くは比丘尼、若くは優婆塞、若くは優婆夷、若くは諸の天子、若くは諸の天女は、是の般若波羅蜜に於いて、若くは聽き受持し親近し讀誦し、他の爲に説き、正しく憶念し、薩婆若の心を離れずんば、諸の天よ、是の人は魔、若くは魔天も、其の便を得ること能はず。何となれば、是の善男子、善女人は諦かに色空を了知す、空は空の便を得ること能はず、無相は無相の便を得ること能はず、無作は無作の便を得ること能はず、諦かに受想行識の空を了知す、空は空の便を得ること能はず、乃至無作も無作の便を得ること能はず、乃至諦かに一切種智の空を了知す、空は空の便を得ること能はず、乃至無作は無作の便を得ること能はず。何となれば、是の諸法の自性は不可得にして、事として便を得べきこと無し。誰か惱を受くる者あらん。

復次に、憍尸迦よ、是の善男子善女人は、若くは人非人も其の便を得ること能はず。何となれば、是の善男子善女人は、一切衆生の中に善く慈心、悲、喜、捨の心を修す。(夫は)無所得なるを以ての故なり。憍尸迦よ、是の善男子善女人は、終に横死せず。何となれば、是の善男子善女人は、檀波羅蜜を行じ、一切衆生に於いて等心に供給すればなり。

復次に、憍尸迦よ、三千大千世界の四天王天、三十三天、夜摩天、兜率陀天、化樂天、他化自在天、梵天、光音天、遍淨天、廣果天、是の諸天の中に、阿耨多羅三藐三菩提心を發すこと有る者も、未だ是の般若波羅蜜をば聞かず、未だ受持し親近せざらん、是の諸の天子は、今應に聞いて受持し親近し、讀誦し正しく憶念して、薩婆若心を離れざるべし。

復次に、憍尸迦よ、諸の善男子善女人は是の般若波羅蜜を聞いて、受持し親近し讀誦し正しく憶念して薩婆若の心を離れず。是の善男子善女人は、若くは空舍に在り、若くは曠野、若くは人の住處に在るも終に恐怖せず。何となれば、是の善男子善女人は、内空を明む。(夫は)無所得なるを以ての故なり。外空乃至無法有法空を明む。(夫は)無所得なるを以ての故なり。

取らず、捨てざるが故に、受想行議に於いて取らず捨てざるが故に、乃至一切種智に於いて取らず捨てざるが故なり。

【論】釋して曰はく、人は歡喜の至<sup>いた</sup>を以て、則ち三反稱歎す。是の故に、諸天は大徳須菩提の般若波羅蜜を説くを聞き、歡喜して、「快い哉、快い哉」と言へり。

「天王」とは、四天處、四天王、三十三天王、釋提桓因、乃至諸の梵天王なり。梵天已上は更に王あること無し。「諸天」は是れ欲界の天、「諸の梵」は是れ色界の天、「伊餘那」は是れ大自在天王並に其の眷屬なり。「神仙」とは、二種あり。或は天、或は人なり。「天女」とは、是れ天帝釋の夫人、舍脂等の諸の天女なり。須菩提の深般若波羅蜜を説くを讚歎する所以は、其の佛の神力を承くるを知るが故なり。若し能く是の般若波羅蜜を行ぜば、我等は當に是の人を視ること佛の如くなるべしと。所以何となれば、法を尊重するが故なり。「法」とは所謂深般若波羅蜜なり。深法とは、一切法は畢竟空なりと雖も、而も三乗の分別あり。所以何となれば、諸法は若し畢竟空ならば、更に三乗の功徳を修集すべからず。則ち斷滅の中に墮す。若し三乗の功徳を修すれば、則ち是れ差降を分別し、是れ畢竟空なるべからず。是の般若波羅蜜は、畢竟空なりと雖も、而も斷滅に墮せず。分別して三乘ありと雖も、亦た著心を生ぜず。二事の中に於いて、定相を取らず、是の事は甚深微妙なり。故に諸天は大に歡喜し、歎じて快い哉と言へり。

佛は然も其の讚に更に甚深の因縁を説き給はく、「六波羅蜜より乃至一切種智の中に、佛は不可得なり。此を離れても、佛は亦た不可得なり。諸法は和合する因縁の故に佛あるも、自性あること無し。若し菩薩にして、能く是の如く行する者は、當に知るべし、是の菩薩は即ち是れ佛なり」と。即ち是れ佛なりとは、是の世界の中の語に、「如し太子は、未だ正位ならずと雖も必ず當に王たるべし」と。此の中に佛は自ら本事を引きて以て證と爲したまへり。此の菩薩は、已に無生忍を得て菩

【四】「二事」石本「三事」と作る。

# 卷の第五十六

## 第三十 願 視 品

【經】

爾の時、諸天王及び諸天諸の梵王及び諸の梵天、伊餘那天及び神仙、並に諸天女同時に三反稱歎すらく、「快い哉、快い哉、慧命須菩提の所説の法は、皆な是れ佛出世間の因縁にして、恩力もて是の教を演布す。若し菩薩摩訶薩ありて、是の般若波羅蜜を行じて遠離せずんば、我輩は是の人を視ること、佛の如くせん。何となれば、是の般若波羅蜜の中には、法の所謂、色受想行識乃至一切種智を得べきもの無しと雖も、而も三乗の教あり。所謂、聲聞、辟支佛、佛乘なり」と。

爾の時、佛、諸の天子に告げたまはく、「是の如し、是の如し。諸の天子よ、汝が言ふ所の如く、是の般若波羅蜜の中には法の得べき無しと雖も、而も三乗の教あり、所謂、聲聞、辟支佛、佛乘なり。諸の天子よ、若し菩薩摩訶薩ありて是の般若波羅蜜を行じて遠離せざる者は、是の人を視ること當に佛の如くすべし。(夫は)所得なきを以ての故なり。何となれば是の般若波羅蜜の中に、廣く三乗の教を説く、所謂、聲聞、辟支佛、佛乘なり。檀波羅蜜の中に佛は不可得なれど、檀波羅蜜を離れては佛は亦た不可得なり。乃至般若波羅蜜の中にも佛は不可得なれど、般若波羅蜜を離れては佛は亦た不可得なり。内空乃至無法有法空四念處乃至十八不共法、一切種智も亦た是の如し」と。佛、諸の天子に語り給はく、「菩薩摩訶薩、若し能く是の一切諸法、所謂檀波羅蜜乃至一切種智を學せば、是の事を以ての故に、當に是の菩薩摩訶薩を視ること佛の如くなるべし。

諸の天子よ、我れ昔、然燈佛の時に於いて、華嚴城の内、四衢道の頭みたりに佛を見たてまつりて法を聞き、即ち檀波羅蜜行を離れざることを得、尸羅波羅蜜、毘提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜の行を離れず。内空乃至無法有法空、四念處乃至八聖道分を離れず。四禪、四無量心、四無色定、一切三昧門、一切陀羅尼門を離れず。四無所畏、佛の十力、四無礙智、十八不共法、大慈大悲、及び餘の無量の諸佛の法行を離れざることを得き。(夫は)無所得を以ての故なり。是の時、然燈佛は我れ當來世に、一阿僧祇劫を過ぎて、當に佛と作り、釋迦牟尼、多陀阿伽度、阿羅訶、三藐三佛陀、鞞修遮羅那、修伽度、路迦德、無上士調御丈夫、天人師、佛世尊と號すべし」と。記したまへり」と。爾の時、諸の天子、佛に白して言さく、「世尊よ、希有なり。是の般若波羅蜜は能く諸の菩薩摩訶薩をして薩婆若を得せしむ。色に於いて

【一】「所謂」二字正本に無けれども今は元・明・聖・石各本に據つて之を附加す。又た聖本石本は「聲聞乘、辟支佛乘」と「乘」字を附加す。  
【二】如來十號の目目なり。今、梵名音寫の名稱のみ以下の如く解説す。「釋迦牟尼」釋迦の如く、釋迦氏の聖者の意。多陀阿伽度「Tathagata」如來又は如去と譯す。「阿羅訶」Aclara 應供・殺賊・不生・離惡等と譯す。小乘四果の極上位なる阿羅漢と區別する爲め阿羅訶に作る。「三藐三佛陀」Samyaksambuddha 正遍知・等正覺・正等覺等と譯す。「鞞修遮羅那」Vijaya-saripa (sarpipama) 明行足と譯す。「修伽度」angata 善逝・好去・妙往と譯す。「路迦德」Iokrivita 卍間解と譯す。  
【三】「記したまへり」とは受記の義。豫言したまへりといふに同じ。

數法なると、緣縁と増上縁となり。一切法は是れ四種の縁なり。一切處一切時に皆な有るが故に、縁は無邊なりと説く。縁は無邊なるが故に般若波羅蜜は無邊なり。復次に、縁は無邊なりとは、四縁の法は虚誑無實、畢竟空なるが故に、無邊なり。復次に、如・法性・實際の無邊を縁するが故に、般若波羅蜜は無邊なり。如・法性・實際は、是れ自然無爲の相なるが故に、無量無邊なり。五衆の無邊は、是れ觀力の故に、強ひて無邊と作す。復次に、「衆生は無邊なり」とは、衆生は多きを以ての故に、無量阿僧祇、三世十方の衆生は、人の能く數を知ること無きが故に、無邊と言ふ。復次に、是の中に説けり、「衆生は空なるが故に無邊なりと言ふ」と。

「且らく強ひて爲に名を作すも亦た趣く所なし」とは、衆生は定法ありて、趣向すべきこと無きを以ての故なり。火の如きは、定んで趣く所あり。而も衆生は名のみにして、實に衆生の趣くべき無し。「汝が意に於いて云何。般若波羅蜜の中に頗る實に衆生ありと説くや不や」。「不なり、大徳よ」。若し衆生は實に無ならば、云何ぞ邊あらん。譬へば諸佛の如きは、是れ一切實語の人の中の第一にして、無量恒河沙劫の壽に於いて、衆生の名字を説き給ふに、是の衆生の法は、以て説かせざるが故に、生あり、滅あり。何に況んや餘人の顛倒虚誑にして少時に説くをや。我心を生ずるが故に、常に衆生あるべし。是の衆生は、以て般若波羅蜜の中に入らざるが故に無と言ふ。本従り已來、常に清淨にして所有なく、有無等の戲論を滅するが故なり。是の衆生は、無邊なりと説くを以ての故に、般若波羅蜜は無邊なり。

問うて曰はく、無邊の中には何を以て廣く説き、而も大及び無量は何を以て略して説くや。

答へて曰はく、衆生の因縁を以ての故なり。一切の凡夫は諸の煩惱を起し、五衆の中に於いて、諸の邪行を作して、破し難きが故に、是を以て廣く説く。若し衆生の相を破すれば、餘の一切は破し易し。<sup>三</sup>

【三】石本「第二十八品を釋し竟る」聖本は「第二十七品を釋し第二十八品を訖る」を附加す。

に、憍尸迦よ、衆生は無邊なるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦た無邊なり」と。

【論】問うて曰はく、釋提桓因は是れ須陀洹の人なり。云何なれば能く深般若波羅蜜を問ふや。

答へて曰はく、須菩提の如きは、是れ阿羅漢を具足し、菩薩を利益し、衆生を憐愍するを以ての故に、菩薩の所行の事を問ふ。釋提桓因は、聲聞人なりと雖も、是れ諸天の主にして利き智慧あり、衆生を憐愍するが故に、般若波羅蜜を問ふ事も亦是の如し。

復次に、有人の言く、「三千大千世界の中に百億の釋提桓因あり」と。中阿舍の中に釋提桓因は須陀洹を得と説くは、今の釋提桓因に異なれり。今の釋提桓因は是れ大菩薩にして、衆生を憐愍するが故に、三種に般若波羅蜜を讚す。所謂摩訶波羅蜜、無量波羅蜜、無邊波羅蜜は、是れ般若波羅蜜なり。是の般若波羅蜜の中に、諸の聖道を學成するが故に、須菩提は然も釋提桓因を讚じて、廣く其の讚言を解せり。

五衆大なるを以ての故に、般若波羅蜜は大なり。「五衆大なり」とは、所謂る三際に不可得なるが故に、亦た無量無邊なるを以ての故に大と言ふ。是の無量無邊の五衆を破し、一切衆生を將ゐて、無餘涅槃の中に入るが故に、般若波羅蜜は大なりと言ふ。乃至一切種智も亦た是の如し。

「無量」も亦た爾なり。但だ虚空を以て、譬喩とするを異なりと爲す。有法は大なりと雖も、必ずしも無量ならず。是の故に空を以て喩と爲すことを得ず。須彌山の如きは、諸山の中に於いて大なりと雖も、而も量あり、所謂八萬四千由旬なり。

「無邊なり」とは、五衆は、廣大無量なるを以ての故に、無邊なりと言ふ。亦た五衆を以て、有邊なりとすれば、則ち始あり。始あれば則ち終あり。即ち是れ無因無縁にして、斷滅等の種種の過に墮するが故なり。復次に、五衆は三世の中に不可得なるが故に無邊と言ふ。

「縁は無邊なり」とは所謂る一切法の四縁なり。因縁生の一切有爲法と、次第縁の過去現在の心心



が故に般若波羅蜜は無量なり、受想行識乃至一切種智は無量なるが故に般若波羅蜜は無量なり。何となれば一切種智は量不可得なればなり。譬へば虚空の量不可得なるが如し。一切種智も亦た是の如く量は不可得なり。虚空は無量なるが故に一切種智は無量なり、一切種智は無量なるが故に般若波羅蜜は無量なり。是の因縁を以ての故に、是の菩薩摩訶薩の般若波羅蜜は無量なり。 憍尸迦よ、色は無邊なるが故に、諸の

菩薩摩訶薩の般若波羅蜜は無邊なり。何となれば、憍尸迦よ、是の色は前際に不可得、後際に不可得、中際に不可得の故なり。受想行識無邊なるが故に般若波羅蜜無邊なり。何となれば、受想行識は前際、後際、中際に皆な不可得なればなり。乃至一切種智無邊なるが故に般若波羅蜜無邊なり。何となれば、一切種智は前・後、中際に不可得なればなり。是の因縁を以ての故に、憍尸迦よ、是の般若波羅蜜は無邊なり、色は無邊なり、乃至一切種智は無邊なり。

復次に、憍尸迦よ、縁は無邊なるが故に、般若波羅蜜は無邊なり。「須菩提よ、云何なれば縁は無邊なるが故に、般若波羅蜜は無邊なるや」と。須菩提の言く、「一切無邊の法を縁するが故に般若波羅蜜は無邊なり」と。「云何なれば一切無邊の法を縁するが故に般若波羅蜜は無邊なるや」と。須菩提の言く、「無邊の法性を縁するが故に般若波羅蜜は無邊なり」と。

復次に、憍尸迦よ、無邊の如を縁するが故に般若波羅蜜は無邊なり」と。釋提桓因の言く、「云何なれば無邊の如を縁するが故に般若波羅蜜は無邊なるや」と。須菩提の言く、「如は無邊なるが故に縁も亦た無邊なり。縁は無邊なるが故に如も亦た無邊なり。是の因縁を以ての故に、諸の菩薩摩訶薩の般若波羅蜜は無邊なり」と。

復次に、憍尸迦よ、衆生無邊なるが故に般若波羅蜜は無邊なり」と。釋提桓因、須菩提に問ふ、「云何なれば衆生無邊なるが故に般若波羅蜜は無邊なるや」と。「須菩提の言く、「汝が意に於いて云何、何等の法を衆生と名くるや」と。釋提桓因の言く、「法あること無きを衆生と名く。假名の故に衆生と爲す。是の名字は、本と法あること無く、亦た趣く所なし、強ひて名を作ること爲す。憍尸迦よ、汝が意に於いて云何。是の般若波羅蜜の中に衆生は實ありと説くや不や」と。釋提桓因の言く、「無なり」と。「憍尸迦よ、若し般若波羅蜜の中に實を説かずんば、衆生は無邊にして、亦た不可得ならん。憍尸迦よ、汝が意に於いて云何。佛の恆河沙の劫壽の衆生と衆生の名字を説くとも、頗る衆生法あり、生あり滅ありや不や」と。釋提桓因の言く、「不なり。何となれば、衆生は本より已來常に清淨なればなり」と。是の因縁を以ての故

に云何ぞ求むべけんや。復次に、五衆と般若波羅蜜とは一ならず、異ならず、合せず、散ぜず、無色、無形、無對、一相、所謂無相なり。

問うて曰はく、般若波羅蜜は是れ智慧、心數法なるが故に、應に無色、無形、無對なるべし。五衆中の色衆は云何なれば當に無形無對なりと説くや。

答へて曰はく、聖人は慧眼を以て諸法を觀するに、平等にして皆な空、一相、所謂無相なり。是を以ての故に、色衆は無形無對なり。復次に、凡夫人の見る所の色の實に非ることは、種種に先に破するが如し。復次に、因縁あり、般若波羅蜜は即ち是れ凡夫の人の見る所の五衆の如くならず。凡夫の人の見る所の五衆を破するが故に、即ち是れ般若波羅蜜なり。故に不離と言ふ。乃至一切種智も亦た是の如し。如相、法相は先に説くが如し。

【經】釋提桓因、須菩提に語るらく、是の摩訶波羅蜜は、是れ菩薩摩訶薩の般若波羅蜜なり。無量波羅蜜無邊波羅蜜は是れ菩薩摩訶薩の般若波羅蜜なり。諸の須陀洹、須陀洹果は是の般若波羅蜜中從り學成す。乃至諸の阿羅漢、阿羅漢果、諸の辟支佛、辟支佛道、諸の菩薩摩訶薩は、皆な是の般若波羅蜜中從り學成す。衆生を成就し佛國土を淨め、阿耨多羅三藐三菩提を得るも、皆な是從より學成す」と。須菩提、釋提桓因に語りて言はく、是の如し、是の如し。憍尸迦よ、是の摩訶波羅蜜は是れ菩薩摩訶薩の般若波羅蜜なり。無量波羅蜜、無邊波羅蜜は是れ菩薩摩訶薩の般若波羅蜜なり。是の中從り須陀洹果乃至阿羅漢果、辟支佛道を學成す。諸の菩薩摩訶薩は是の般若波羅蜜の中從り學成す。衆生を成就し、佛國土を淨め、阿耨多羅三藐三菩提を得。已に得、今得、當に得べし。憍尸迦よ、色は大なるが故に般若波羅蜜も亦た大なり。何となれば、是の色は前際に不可得、後際に不可得、中際に不可得なればなり。受想行識は大なるが故に般若波羅蜜も亦た大なり。何となれば、受想行識は前際に不可得、後際に不可得、中際に不可得なればなり。乃至一切種智も亦た是の如し。是の因縁を以ての故に、憍尸迦よ、是の摩訶波羅蜜は是れ菩薩摩訶薩の般若波羅蜜なり。憍尸迦よ、是の摩訶波羅蜜は是れ菩薩摩訶薩の般若波羅蜜なり。憍尸迦よ、色は無量なるが故に般若波羅蜜は無量なり。何となれば色の量は不可得なればなり。憍尸迦よ、譬へば、虚空の量の不可得なるが如し。色も亦た是の如く、量は不可得なり。虚空は無量なるが故に色無量なり、色は無量なる

答へて曰はく、此は是れ略して説くなり。二を説けば則ち五事は都べて擲す。復次に、二十種の我見は、一切の凡夫の人に一時に起ること能はずと雖も、今是の會中は此の二事に惑ふ。是を以ての故に但だ二事のみを説く。五衆の如相、乃至一切種智の法相も、亦た是の如し。五衆如は、即ち是れ法相なり。

問うて曰はく、若し如、即ち是れ法相ならば、何を以てか重ねて説くや。

答へて曰はく、行者は既に五衆の如に到りて心に驚く、「法相は何を以てか、畢竟空にして所有なきや」と。是の故に、五衆の法の法相の自ら爾ることを説く。人の火に觸れて手を焼くに、則ち愠心なきは、其の火相の自ら爾るを以ての故なるが如し。若し人、火を執りて之を焼かば、則ち忿然として怒らん。其は火を執りて焼くを以ての故なり。如來は五衆如の中、五衆の法相の中に合せず、散ぜずとは、五衆の如を除きては、如來の如なければ、則ち是れ一相にして、所謂無相なり。所以何となれば、一法は合すること無く、散すること無ければなり。二法の故に合すること有り、散すること有り。五衆の法相を離るるも亦た合すること無く、散すること無し。何となれば、五衆の法相を離れて、如來は不可得なればなり。如來の如・法相と、五衆の如・法相とは、無二無別なるが故に、五衆の如を離れて、五衆の法相は亦た合せず、散ぜずと言ふ。乃至一切種智も、亦た是の如し。能く是の如く、諸法の如と、法相と、合せず、散ぜざることを知るが故に、是の神力あり。

「當に何處に於いてか求むべき」とは、上來は佛の神力に因りて般若の相を説き、今は直に云何にして般若を求むるかを説く。論者の言く、「五衆は虚誑無常にして本は無、今は有、已に有にして還つて無なること、幻の如く、夢の如し。般若波羅蜜は是れ諸佛の實智慧なり。云何にして五衆の中に於て求めん」と。譬へば、重寶を求むるには必ず大海の寶山中に於て求め、溝瀆臭穢の處に在りて求むべからず。五衆を離るれば則ち無生、無滅、無作、無起にして法相あること無し。是の中

答へて曰はく、知も亦た眼の如く、知を過ぎて、是の五衆は是れ如來に非ず。若し知を用つて眼を知らば、復た何事も用つてか能く此の知を知らんや。

問うて曰はく、如來は知を用つて、眼を知り、眼を以て色を知りたまふ。若し如來を知らんと欲せば、何を以てか知ることを得ん。若し如來を以て如來を知らば、是れ則ち無窮ならん。

答へて曰はく、知相は知中に住す。如來、若し知りたまはば、即ち是れ知相なり。若し是れ知相ならば、則ち是れ無常なり。若し無常ならば、則ち後世なし。

復次に、五衆を離れて如來あらば、如來は應に是れ常なるべく、虚空相の如く、變異すべからず。苦を受け樂を受くるも、亦た應に縛なく、解なるかるべし。是の如き等の過罪ありて異を破するが故に、五衆は如來に在らず、如來は五衆に在らず、亦た如來に五衆あるにも非ず。

問うて曰はく、應に五衆の因縁を以ての故に如來あるべし。若し五衆なければ則ち如來も（亦た）無けん。

答へて曰はく、若し五衆の因縁を以て如來あるとならば、則ち如來は自性なし。若し自性なくんば、何ぞ他性に從つて五衆の中に於いて生ずることを得ん。五種に如來を求むるも不可得なり。是の故に如來なし。但だ戲論を以ての故に如來ありと説く。戲論を斷ずるを以ての故に如來なし。如來は是れ不生不滅の法なり。云何ぞ當に戲論を以て如來を求むべき。若し戲論を以て如來を求めば、則ち如來を見ず。若し當に都べて如來なくんば、則ち邪見に墮せん。是の故に若し有無を以て戲論して、如來を求めば、是れ則ち然らず。如來の相は即ち是れ一切法相、一切法相は即ち是れ如來の相、如來の相は即ち是れ畢竟空の相、畢竟空の相は即ち是れ一切法相なり。

問うて曰はく、此の中に何を以てか但だ二事のみを説き、五衆如の中に如來如なく、如來如の中に五衆如なしと言ふや。

が故に如來なし。有人の言はく、「諸の實相に二種の説あり。一には諸法の相は畢竟空にして是れ實なり」と。二には有人の言はく、「畢竟空は示す可く説く可きが故に實に非ず。涅槃の相の如きは示す可からず、是を名けて實と爲す」と。此の二事の畢竟空中に於て如來は不可得なり。畢竟空の實相を破する中にも、如來は亦た不可得なり。畢竟空は即ち是れ無受相なり。畢竟空の實相を破すれば即ち是れ如なり。此従り已下、廣く二義を説く。五衆乃至一切種智に於いても、如來は不可得なり。如來は不可得なるが故に、云何ぞ當に如來の神力あるべき。如來の不可得なることは上に説くが如し。是の五衆は如來に非ず、五衆を離るるも如來に非ず、五衆は如來の中に在らず、如來は五衆の中に在らず、如來には亦た五衆有らず。五衆は生滅、無常、苦、空、無我の相なるが故に、是れ如來に非ず。若し是れ如來ならば、如來も亦た應に是れ生滅すべし。

復次に、五衆は是れ五法にして、如來は是れ一なり。云何ぞ五法を一と作さん。若し五は即ち是れ一ならば、一も亦た應に即ち是れ五なるべし。若し爾らば、世間法と出世間法と一切亂壞せん。是の如き種種の因縁の故に、五衆は如來に非ず。若し五衆を離れて如來ありとせば、如來は應に見ること無く、聞くこと無く、知ること無く、識ること無く、亦た苦樂を覺せざるべし。所以何となれば、知覺等は是れ五衆の法なるが故なり。

問うて曰はく、如來が眼・耳・智慧等を用つて、能く知見したまふに、何の咎有りや。

答へて曰はく、能く見るものは是れ眼にして、是れ如來に非ず。若し如來は見相に非ずして、眼を用つて能く見るとせば、未だ色を取らざる時、云何ぞ是の眼を用ふることを知らん、亦た耳を用つても見るべけん。

問うて曰く、如來は智慧を用ひ、分別して能く知りたまふ。眼は是れ能く見るも、餘は見ること能はず。是を以ての故に、眼を用ひて餘根を取らず。

つる所の神力なり」と。釋提桓因の言はく、「若し一切法は、皆な受くる所なくんば、云何なれば是れ佛に受けたてまつる所の神力なりと言ふや。若し受くること無き相を離るれば、如來は不可得なり。(亦た)如中を離れて如來は不可得なり」と。釋提桓因は是の念を作して言はく、「一切の法は受相なく、一切の法は空にして依止する處なし。云何ぞ當に定んで如來ありと言ふべき。若し如來なくんば、云何ぞ受くる所の神力有らん。又復た受くること無き相を離るるも、如來は亦た不可得なり。今是の如を離るるも如來は不可得なり」と。

問うて曰はく、無受相と如と何等の異なること有りや。

答へて曰く、諸法實相をば、亦た無受とも名け、亦た如とも名く。諸法の中に著す可からざるが故に無受と名け、諸の戲論の破壊すること能はざるが故に、名けて如と爲す。今、如來は、空中に不可得なり。空を離るるも亦た不可得なり。須菩提は然も其れ、「是の如し、是の如し」と言ふ。今須菩提は廣く其の事を説く。無受相、如相の中には、如來は不可得なりとは、或は佛名を以て名けて如來と爲し、或は衆生の名字を以て名けて如來と爲し、先世に來る如く、後世にも亦た是の如く去る、是を亦た如來と名け、亦た如去と名く。十四置難の中に説くが如し。「死して後、去るが如きは、有と爲し、亦は有、亦は無、亦は非有、非無なり」と。佛を如來と名くるは、定光佛等の六波羅蜜を行じて、佛道を成ずることを得たまふが如し。釋迦文佛も亦た是の如く來りたまふが故に如來と名けたてまつり、定光佛等の如きは、智もて諸法の如を知り、如中より來りたまふが故に、如來と名けたてまつり、釋迦文佛も亦た是の如く來りたまふが故に、如來と名けたてまつる。此の二種の如來の中、此の間に説くは是れ佛の如來なり。因りて佛の如來を解するに所有なし。一切の衆生、一切の法は、皆な是の如く、所有なく、受くること無し。及び如來の義は、先に説くが如し。今當に更に略して説くべし。無受相、如來相は、皆な空にして所有なく、無受相、如相は定相なき

【二】「云何なれば是れ佛に受けたてまつる所の神力なりと言ふや。若し受くること無き相を離るれば、……不……」原文十七字、聖本之を闕くは誤りなり。

せり。今釋提桓因は何を以ての故に、當に何處に般若を求むべきやと問へるや。

答へて曰はく、此は般若の體を問はず。但だ般若の言說名字の讀誦す可き事を問へるなり。是の故に、舍利弗の言はく、「當に須菩提所說の品中に於いて求むべし」と。須菩提は、樂んで空を説き、常に善く修習するが故なり。舍利弗は智慧第一なりと雖も、吾我、嫉妬の心なきを以て、又た法愛を斷ずるが故に、而も當に須菩提所說の品中に於いて求むべしと言へるなり。

問うて曰はく、佛の處處に説き給へる般若波羅蜜は、須菩提の所說を比せんと欲するに、百千萬倍にして、算數譬喩も比を爲す可からず。何を以てか、「佛所說の品中に於いて求めよ」と言はざるや。

答へて曰はく、釋提桓因の意は、「佛一人を除きたてまつりて、誰か能く善く説く者ぞ」と。是を以て須菩提を推せり。

復次に、佛は常に一日一夜六時に、佛眼を以て衆生を觀じ、法を聞かざるが故に墮落せしめ給ふこと無し。是の故に、衆生の應に解すべき所、應に得べき所、應に習行すべき所等に隨つて説き、或は般若波羅蜜を説くに、無常、苦、空、無我、病の如く、癰の如き等を名けて般若波羅蜜と爲し、或は諸法の總相と、別相とを分別し、或は諸法の因縁和合して生じ、作者、受者あること無く、知者見者なしと説くを名けて、般若波羅蜜と爲し、或時は法空を説き、或は畢竟空を説くを名けて般若波羅蜜と爲したまへり。是を以ての故に、佛所說の品中に求めよと言はざるなり。亦た釋提桓因は心に念じて、「何者か(是れ)定んで是れ般若の定相なるや」と知らず。是を以て、舍利弗の言はく、「須菩提は常に深く空に入り、説く所、皆な空に趣き、説く所の空も亦た空なり」と。是の故に、「當に須菩提所說の品中に於いて求むべし」と言へるなり。釋提桓因は、歡喜し、須菩提を讚じて言はく、「大徳は神力甚だ大なり」と。須菩提の謙して言はく、「是れ我が力に非ず。是れ佛に受けたてま

來は不可得なり。如を離れて如來は亦た不可得なり」と。

須菩提、釋提桓因に語りて言はく、「是の如し、是の如し。憍尸迦よ、受處なき相を離れて如來は不可得なり。如を離れて如來は亦た不可得なり。受處なき相中に如來は不可得なり。如の中に如來は不可得なり、色如の中に如來の如は不可得なり。如來の如中に色如は不可得なり。色の法相の中に如來の法相は不可得なり。如來の法相の中に色の法相は不可得なり。受想行識の法相の中乃至一切種智も亦た是の如し。憍尸迦よ、如來は色如の中に合せず、散ぜず。受想行識如の中に合せず、散ぜず。如來は色如を離れて合せず、散ぜず。受想行識如を離れて合せず、散ぜず。乃至一切種智も亦た是の如し。如來は色の法相の中に合せず、散ぜず。受想行識の法相の中に合せず、散ぜず。如來は色の法相の中を離れて合せず、散ぜず。受想行識の法相の中を離れて合せず、散ぜず、乃至一切種智も亦た是の如し。憍尸迦よ、是の如き等の一切法中に合せず、散ぜず。是れ佛の神力の用は受くる所なき法なるが故なり。

憍尸迦の言ふが如く、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜は、當に何處に於いて求むべきやとは、憍尸迦よ、色の中に般若波羅蜜を求むべからず、亦た色を離れて般若波羅蜜を求むべからず。受想行識の中に求むべからず、亦た受想行識を離れて求むべからず。何となれば、是れ般若波羅蜜、色受想行識、是の一切法に皆な合せず、散ぜず、無色、無形、無對、一相、所謂無相なればなり。乃至一切種智の中に、般若波羅蜜を求むべからず。亦た一切種智を離れて般若波羅蜜を求むべからず。何となれば、是れ般若波羅蜜、一切種智、是の一切の法は皆な合せず、散ぜず、無色、無形、無對、一相、所謂無相なればなり。何となれば、般若波羅蜜は色に非ず、亦た色を離るるにも非ず。受想行識に非ず、亦た受想行識を離るるにも非ず。乃至一切種智に非ず。亦た一切種智を離るるにも非ず。般若波羅蜜に色如に非ず、亦た色如を離るるにも非ず。受想行識の如に非ず、亦た受想行識の如を離るるにも非ず。般若波羅蜜は色法に非ず、亦た色法を離るるにも非ず。受想行識法に非ず、亦た受想行識法を離るるにも非ず。乃至一切種智如に非ず、亦た一切種智如を離るるにも非ず。般若波羅蜜は一切種智法に非ず、亦た一切種智法を離るるにも非ざればなり。何となれば、憍尸迦よ、是の一切法は皆な所有なく、不可得なればなり。所有なく、不可得なるを以ての故に、般若波羅蜜は色に非ず、亦た色を離るるにも非ず。色如に非ず、亦た色如を離るるにも非ず。色法に非ず、亦た色如を離るるにも非ず。乃至一切種智に非ず、亦た一切種智を離るるにも非ず。一切種智如に非ず、亦た一切種智如を離るるにも非ず。一切種智法に非ず、亦た一切種智法を離るるにも非ざればなり」と。

【論】

問うて曰はく、佛、舍利弗、須菩提は、上從り來た種種の因縁もて般若波羅蜜の相を明かに



くや。

答へて曰はく、色を受くる者は無なるが故に内空を説き、色は受くべからざるが故に外空を説く。是の内外空は則ち一切法の空を攝す。乃至一切種智も亦た是の如し。若し菩薩、能く是の如く學すれば、則ち一切種智を出生す。一切種智は是れ無障礙の相なり。若し菩薩は、「一切法は、虚空の如く障礙無し」と觀すれば、則ち是れ一切種智を觀するなり。(夫は)因果相似するが故なり。舍利弗、是の念を作さく、「菩薩の法は、應當に一切の煩惱を滅すべく、應當に一切諸の善法を受くべし。今、受けず、滅せざることを學して、云何ぞ出でて、薩婆若に至らん」と。是の念を作し已りて、須菩提に問ふ。須菩提答へて言はく、「一切法の生相を破するが故に不生なり。一切法の無常相を破するが故に不滅なり。一切法の、種種の過罪を觀するが故に不受なり。一切法の種種の利益を觀するが故に不捨なり。一切法性は常に清淨なるが故に不垢なり。一切法は能く著心を生ずるが故に不淨なり。一切法は是れ作、無作、起滅、入出、來往等ありと雖も、而も不多、不少、不增、不減なり。譬へば大海は衆流の之に歸するも増さず、火珠は之を煎るも減ぜざるが如し。諸法も亦た是の如く、法性は常任なるが故に、一切法の自性は不可得なるが故に、能く是の如く學せば、則ち出でて薩婆若に到り、學相を見ず、出相を見ず、菩薩相を見ず、般若波羅蜜相を見ず、此の中には略説するが故に、但だ學すること無く、出づること無しと説く」と。

【經】爾の時、釋提桓因、舍利弗に語るらく、「菩薩摩訶薩の般若波羅蜜は當に何處に於てか(是を)求むべきや」と。舍利弗の言はく、「菩薩摩訶薩の般若波羅蜜は、當に須菩提品の中に於て(是を)求むべし」と。釋提桓因、須菩提に語るらく、「是れ汝が神力、舍利弗をして、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を當に須菩提品の中に於て求むべしと語らしむるなり」と。須菩提、釋提桓因に語るらく、「我が神力に非ず」と。釋提桓因、須菩提に語るらく、「是れ誰の神力なるや」と。須菩提の言はく、「是れ佛の神力なり」と。釋提桓因の言はく、「一切の法は皆な受くる處なし。何を以ての故に、是れ佛の神力なりと言ふや。受處なき相を離れては如

ばなり。乃至一切種智も亦た是の如し。何を以ての故に、色を見ざるや。答へて言はく、色の中には、色相は空にして、不可得なるが故に見る可からず。即ち是れ自相空なり。乃至一切種智も亦た是の如し。

復次に、色を學せずとは、是の色は空にして即ち自ら色空を學すること能はず。(夫は)諸法は他相を行じ自相を行ぜざるを以ての故なり。譬へば、人、馬に乗り、馬、馬に乗るに非ざるが如し。問うて曰はく、若し是の如く一切法を學せずんば、云何にして一切智を學するや。

答へて曰はく、是の中に説けり、「若し能く諸法の空の中に於いて、著する所なくんば、是を眞に色空を學すと爲す。若し色に著する者は、是れ諸法を破して、而も空を破せざるなり。若し人、色を破して、而も空に著せざれば是れ則ち色空は不二不別なり。是を能く色空を學すと爲す。不可得空なるを以ての故に空を見ず。乃至一切種智も亦た是の如し」と。無量無邊阿僧祇の佛法とは、是れ一切種智を讚するなり。上の一切種智是なり。菩薩の心中には量あり、限あり。佛の心中に在りては、則ち量なく限なし。是を以ての故に上に佛法を學することをば説くと雖も、今更に別して説くなり。若し能く是の如く學すれば、菩薩の道を行するに増減せず。色の増さざることを學すとは若し但だ四大及び造色の和合して、身を成ずることを見れば、則ち著を生ぜず。是の身中に於いて、界女、好酬、長短の相を起こし、謂つて定實と爲す(が故に)染著の心を生ず。是を増すと爲す。若し色を破して空ならしめ、(而も)心、是の空に著す。是を減すと爲す。乃至一切種智も亦た是の如し。受けず減せずとは、空なるが故に業果を受けず。因縁相續するが故に減せざるなり。是の中に須菩提は自ら因縁を説かく、「色を受くる者は、不可得なるが故に受けず。又た色の内外は空なるを以ての故に受けず。色の中、内外空も空なるを以ての故に減せず」と。

問うて曰はく、應に十八空を以て諸法を空とすべし。此の中に、何を以てか但だ内外空のみを説

舍利弗よ、色と色の性は空なるが故なり。受、想、行、識も亦た生ずることを見ず、亦た滅することを見ず、亦た受くることを見ず、亦た受けざることを見ず、亦た垢なることを見ず、亦た淨なることを見ず、亦た増すことを見ず、亦た減ずることを見ず。何となれば、識と識の性とは空なるが故なり。乃至一切種智も亦た生ずることを見ず、亦た滅ずることを見ず、亦た受くることを見ず、亦た受けざることを見ず、亦た垢なることを見ず、亦た淨なることを見ず、亦た増すことを見ず、亦た減ずることを見ず、何となれば一切種智と一切種智の性は空なるが故なり。是の如く、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は一切法は不生・不滅・不受・不捨・不垢・不淨・不合・不散・不增・不減なるが爲の故に、般若波羅蜜を學して、能く一切種智に到る。學する所無く、到る所無きが故なり。

【論】釋して曰はく、釋提桓因歡喜して言はく、「須菩提は其の智、甚だ深くして、假名を壞せずして、而も諸法實相を説けり」と。爾の時、佛、須菩提を讚じて言はく、「是の如し、是の如し」と。釋して言ふ所の如し。

問うて曰はく、佛は何の故に須菩提を讚じたまひしや。

答へて曰はく、師は自ら高ぶらざるを示す、弟子は師法を承順するが故なり。人あつて、師の説く所を弟子は受けず、弟子の説く所を師聽かざるあり。凡夫人が衆に處して法を説く時、一切の語を破して受けざるが如し。佛には吾我の心無きを以ての故に、須菩提を讚じて、「是の如し、是の如し」と言へり。

復次に、佛は大悲心を以て、衆生をして須菩提の所説を信受せしめんと欲したまふが故に讚じて、「其の智甚だ深し」と言へり。のたま菩薩は一切法の假名なることを知れば、則ち應に般若波羅蜜を學すべし。所以何となれば、一切法は但だ假名のみ有りて、皆な般若波羅蜜の畢竟空相に隨順するが故に是の如く學するなり。

色を學せずとは、假名の法中には定色有ること無し。若し色無くんば、云何にして色を學せん。何となれば、菩薩は五眼を以て色を求むるに、而も是の色の若くは我、若くは無我等の相を見ざれ

【〇】元本は茲に「五衆は……亦た是の如し」原文百九字挿入。註八参照。

一切種智空は一切種智空を學せず。橋尸迦よ、若し是の如く空を學せざる、是を空を學すと名く。不二なるを以ての故に、是の菩薩摩訶薩は、色空を學す。不二なるを以ての故に、乃至、一切種智空を學す。不二なるを以ての故に、若し色空を學せば、不二なるが故に、乃至、一切種智空を學す。不二なるが故に、是の菩薩摩訶薩は、能く檀波羅蜜を學す。不二なるが故に、乃至能く般若波羅蜜を學す。不二なるが故に、能く四念處を學す、不二なるが故に、乃至、能く十八不共法を學す、不二なるが故に、能く無量無邊阿僧祇の佛法を學す。若し能く無量無邊阿僧祇の佛法を學すれば、是の菩薩は、色の爲めに學を増さず、色の爲めに學を減せず、乃至、一切種智の爲めに學を増さず、一切種智の爲めに學を減せず、若し色の爲めに學を増減せず、乃至一切種智の爲めに學を増減せずんば、是の菩薩は、色の爲めに學を受けず、色の爲めに學を減せず、亦た受起行識の爲めに學を受けず、亦た爲めに學を減せず、乃至一切種智も亦た爲めに學を受けず、亦た爲めに學を減せず」と。

舍利弗、須菩提に語るらく、「菩薩摩訶薩は是の如く學して色を受くるが爲めに學せず、色を減するが爲めに學せず、乃至、一切種智も亦た受くるが爲めに學せず、亦た減するが爲めに學せざるや」と。須菩提の言はく、「菩薩摩訶薩は、若し是の如く學して、色を受くるが爲めに學せず。色を減するが爲めに學せず乃至、一切種智も亦た受くるが爲めに學せず、亦た減するが爲めに學せず」と。

(舍利弗、須菩提に語るらく)「須菩提よ、何の因縁の故に菩薩摩訶薩は色を受くるが爲めに學せず、色を減するが爲めに學せず、乃至一切種智も亦た受くるが爲めに學せず、亦た減するが爲めに學せざるや」と。須菩提の言はく、「是の色は受く可からず、亦た受くる者も無し、乃至一切種智も受く可からず、亦た受くる者も無し、内外空なるが故なり。是の如く、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、一切法を受けざるが故に、能く一切種智に到る」と。

是の時、舍利弗、須菩提に語るらく、「菩薩摩訶薩は是の如く般若波羅蜜を學して能く一切種智に到るや」と。須菩提の言く、「菩薩摩訶薩は是の如く般若波羅蜜を學して能く一切種智に到る。(夫は)一切法を受けざるが故なり」と。舍利弗、須菩提に語るらく、「若し菩薩摩訶薩、一切法に於て學を受けず減せずんば、菩薩摩訶薩は云何にして能く一切種智に到らんや」と。須菩提の言く、「菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずるや、色の生ずることを見ず、色の減することを見ず、色の受くることを見ず、色の受けざることを見ず、色の垢なることを見ず、色の淨なることを見ず、色の増すことを見ず、色の減することを見ず。何となれば、

【九】石本「色を受くるが爲に學せず、色を減するが爲に學せず」に作る。

乃至知者見者も空なるが故なり。須陀洹は但だ假名のみ有り、乃至佛も亦た是の如し」と。

【經】爾の時に、釋提桓因是の念を作さく、「是の慧命須菩提は、其の智甚深にして、假名を壞せずして、而も諸法の實相を説く」と。佛、釋提桓因の心に念ずる所を知り、釋提桓因に語りて言はく、「是の如し、是の如し。憍尸迦よ、須菩提は其の智甚深にして、假名を壞せずして而も諸法の實相を説く」と。釋提桓因、佛に白して言さく、「大德、須菩提は云何なれば假名を壞せずして而も諸法の實相を説くとするや」と。佛、釋提桓因に告げたまはく、「色は但だ假名なり、須菩提は假名を壞せずして而も諸法の實相を説くとするや」と。佛は、但だ假名なり、須菩提は亦た假名を壞せずして、而も諸法實相を説く。所以何となれば、是の諸法實相は、壞或は不壞無ければなり。眼、乃至意觸因縁生の諸の受も、亦た是の如く、檀波羅蜜、乃至般若波羅蜜、内空乃至無法有法空、四念處乃至十八不共法も亦た是の如し。須陀洹乃至阿羅漢、辟支佛、佛も是れ但だ假名なり。菩薩道、佛道、一切智、一切種智も亦た是の是し。須陀洹乃至阿羅漢、辟支佛、佛も是れ但だ假名なり。須菩提は假名を壞せずして、而も諸法の實相を説く。何となれば、是の諸法の實相は、壞(或は)不壞無きが故なり。須菩提の所説も亦た壞(或は)不壞無し、是の如く、憍尸迦、須菩提は假名を壞せずして、而も諸法の實相を説く」と。

須菩提、邊提桓因に語るらく、「是の如し。是の如し、憍尸迦、佛の所説の如くんば、諸法は但だ假名なり。菩薩摩訶薩は應に是の知を作すべし、(所謂)諸法は假名なりと。但だ應に是の如く、般若波羅蜜を學すべきなり。憍尸迦、菩薩摩訶薩の是の如く學を作すをば、「色を學せず、受想行識を學せず」と爲す。何となれば、色の當に學すべき者を見ず、受想行識の當に學すべき者を見ざればなり。菩薩摩訶薩の是の如く學するをば、「檀波羅蜜を學せず」と爲す。何となれば、檀波羅蜜の當に學すべき者を見ざればなり。乃至般若波羅蜜を學せず、何となれば、般若波羅蜜の當に學すべき者を見ざればなり。是の如く學するをば、「内空乃至無法有法空を學せず」と爲す。何となれば、内空乃至無法有法空の當に學すべき者を見ざればなり。是の如く學するをば、「四念處乃至十八不共法を學せず」と爲す。何となれば、四念處乃至十八不共法の當に學すべき者を見ざればなり。是の如く學するをば、「須陀洹果乃至一切種智を學せず」と爲す。何となれば、須陀洹果乃至一切種智の當に學すべき者を見ざればなり」と。

爾の時、釋提桓因、須菩提に語りて言く、「菩薩摩訶薩は何の因縁の故に、色を見ず乃至一切種智を見ざるや」と。須菩提の言く、「色は色空乃至一切種智は一切種智空なり。憍尸迦よ、色空は色空を學せず乃至

【八】「五衆は……是の如し」と。原文百九字、元本之を闕く。

大福德成就するが故に、心に生ずる所願、皆な意の如くなることを得て、他に從つて求めざるなり。問うて曰はく、華臺の端嚴なるは是れ誰の力と爲すや。

答へて曰はく、是れ諸天の力なり。諸天は福德自在なるが故に小をして能く大と爲す。有人の言はく、「佛の神力なり。佛は此の般若波羅蜜を以て大功德あり。因の時には少けれども、而も果報は甚だ大にして佛道を成就したまふ。是の故に此の奇特を現し給へり」と。須菩提は即時に分別して、實華に非ざることを知る。釋提桓因は、須菩提の是を化華なりと覺せるを知り、須菩提に語りて言はく、「大徳よ、是の華に生華に非ず」と。生華に非ずとは、是の華の無生空にして出づる所なきを言ふ。須菩提は是の般若波羅蜜を説き、諸法は無生空寂の故に、無生の華を以て供養せり。

意樹とは、諸天は意に念ずる所に隨ひて則ち得。要を以て之を言へば、天樹は意の欲する所に隨ひ、念に應じて則ち至るが故に意樹と言ふ、釋提桓因は須菩提を難するが故に言はく、「是の華は無生なるに、何を以てか、是の華は樹より生ぜずと言ふや」と。須菩提、反質して言はく、「若し不生ならば、何を以てか華と名くるや。不生の法の中には、所謂、是の華は是れ華に非ずと分別する所なし」と。是の時に、釋提桓因は心に伏して而も問ふ、「但だ是の華のみ無生なりや。諸法も亦た無生なりや」と。須菩提は答ふ、「但だ是の華のみ不生なるに非ず、色も亦た不生なり。何となれば、若し一法空なれば則ち一切法は皆な空なればなり。若し行者一法の中に於いて、了了に決定して空を知れば、則ち一切法の中にも、皆な亦た明了なり。若し五衆は不生なれば、則ち五衆の相に非ず。乃至一切種智も亦た是の如し。」五衆は因縁和合に從つて生ずれば、定性有ること無く、但だ假名のみ有り。假名の實相とは、所謂五衆の如、法性、實際なり。須菩提の説く所は此の理に違はず、何となれば、聖人は、名字は是れ俗諦なり。實相は第一義諦なりと知る。所説有りとは凡夫人に隨ふなり。第一義諦の中には彼も此も無く、亦た諍も無し。乃至一切種智も亦た是の如し。衆生も空、

喜して是の念を作さく、「須菩提の説く所の法は無礙無障なること、譬へば時雨の如し國土溉灌、種蒔、及び種種の用水、常に不足に苦しむに、若し時雨普ねく降れば、霑洽せざるは無きが如く、願の如くならざる無し。小乗の法も、亦た是の如く、初め種種に、布施、持戒、禪定、無常等の諸觀を讚歎するに、量有り、限有り、末後に涅槃を説く。此の中に須菩提の明かにする所は、初發心從り乃ち佛道に至るまで唯だ諸法實相を説いて、分別する所なし。譬へば、大雨の遍ねく閻浮提に満ちて、潤はざる所なきが如し。又た地に先づ穀子有りと雖も、雨無ければ、則ち生ぜざるが如く、行者も亦た是の如く因縁ありと雖も、法雨を得ざれば發心せし者は退き、未だ發(心)せざる者は住(ま)まる。若し法雨を得れば、發心せし者は增長し、未だ發せざる者は發す。是を以ての故に法雨を雨ふらすが如しと説く。

復次に、譬へば、惡風、塵土、諸熱、毒氣等は、雨を得れば則ち消滅するが如く、法雨も亦た是の如し。惡覺觀、塵土、三不善、毒邪見、惡風、邪師、惡蟲及び諸の惡知識等は、般若波羅蜜の法雨を得れば、則ち皆な除滅す。人は時雨を蒙るが故に天を供養す。諸天は法雨を聞きて大に利益し、供養せんと欲するが故に是の念を作さく、「我等は寧ろ華を作りて、佛と諸の大菩薩、比丘僧及び須菩提に散じ、亦た般若波羅蜜を供養す可し」と。須菩提は善く般若を説くを以て、之を敬ふこと重きが故に名を甄かたはして供養す。是の般若波羅蜜は多く諸法の空を説き、又た上に化人が法を聽くが如く、其の相に隨ふことを得んと欲するが故に化華を以て供養す。

復次に、諸天は當に歡喜すべき時、便ち心に稱ひて供養し、多く還取することを容さざる故に、即ち化華を作りて佛、須菩提、諸の菩薩、比丘僧、及び般若波羅蜜に散す。花を佛の上に散するは是れ佛寶を供養し、諸の菩薩、須菩提、及び般若波羅蜜に散するは、是れ法寶を供養し、諸の比丘僧に散するは、是れ僧寶に供養するなり。是の念を作し已りて、意に隨ひて變化し、三寶を供養し、

り」と。

### 第二十九 散華品

【經】爾の時に、釋提桓因及び三千大千世界の中の四天王天、乃至阿迦尼吒の諸天、是の念を作さく、「慧命須菩提は、法雨を雨らさんとす。我等は寧ろ華を化作し、佛、菩薩摩訶薩、比丘僧、須菩提、及び般若波羅蜜の上に散ず可し」と。釋提桓因及び三千大千世界の中の諸天は華を化作して、佛、菩薩摩訶薩、比丘僧、及び須菩提の上に散じ、亦た般若波羅蜜を供養す。是の時、三千大千世界の華は悉く虛空中に周遍し、化して華臺の、端嚴殊妙なるを成ず。須菩提、心に念ずらく、「是の諸の天子の散ずる所の華は天上に未だ會つて見ず。是の如き華を是の華に比するに、是は化華にして樹生の華に非ず。是の諸の天子の散ずる所の華は心樹より生ぜしものにして樹生の華に非ず」と。

釋提桓因は須菩提の心に念ずる所を知り、須菩提に語りて言はく、「大德、是の華は生華に非ず、亦た意樹に生ぜしにも非ず」と。須菩提、釋提桓因に語りて言はく、「憍尸迦、汝、是の華は生華に非ず、亦た意樹に生ずるに非ずと言へり。憍尸迦、是れ若し生法に非ずんば名けて華と爲さず」と。

釋提桓因は須菩提に語りて言く、「大德、但だ是の華のみ不生なるや。色も亦た不生、受想行識も亦た不生なりや」と。須菩提の言はく、「憍尸迦、但だ是の華のみ不生なるに非ず、色も亦た不生なり。若し不生ならば是を名けて色と爲さず。受想行識も、亦た不生なり。若し不生なれば、是を名けて識と爲さず。六入、六識、六觸、六觸因縁生の諸の受も、亦た是の如し。檀波羅蜜は不生なり、若し不生ならば、是を檀波羅蜜と名けず、乃至、般若波羅蜜も不生なり、若し不生ならば、是を般若波羅蜜と名けず。内空は不生なり、若し不生ならば是を内空と名けず。乃至無法有法空も不生なり、若し不生ならば無法有法空と名けず。四念處は不生なり、若し不生ならば是を四念處と名けず。乃至十八不共法も不生なり、若し不生ならば是を十八不共法と名けず。乃至一切種智も不生なり、若し不生ならば是を一切種智と名けず。

【論】釋して曰はく、釋提桓因及び諸天は、須菩提の説く所の般若の義を聞くに、「一切の法は盡く是れ實相にして分別する所なく、空を説くと雖も、諸法に於いて破する所なく、亦た諸の行業、果報を失せず」と。聲聞の人、佛前に於いて、能く是の甚深の法を説くが故に釋提桓因等は、皆な歡



の天子は發心して菩薩と爲り、利益深きが故に爲に説くなり。

復次に、諸天の爲に説くと雖も、即ち是れ諸の大弟子に答ふ。上には諸法の空を説き、今は深般若波羅蜜の中に、衆生は畢竟空なることを説く。是を以ての故に、般若波羅蜜の中には、説く者有ること無し。何に況んや、聽受する者有らんや。若し能く是の如く、諸法の空を解し、心に著する所無ければ、則ち能く信受す。爾の時、須菩提は深般若波羅蜜を説き、舍利弗は讚歎して其の事を助成す。般若波羅蜜は、但だ空を以ての故に受くべきに非ず。亦た廣く三乗有ることを説く。三乗の義は先に説くが如し。菩薩を攝取すとは、般若波羅蜜を以て、諸の菩薩を利益して、增長することを得せしむるなり。

復次に、攝取とは、是の般若波羅蜜の中に十地有り、菩薩をして一地従り一地、乃至第十地に至らしむるなり。十地の義と、六波羅蜜乃至一切種智の義とは、先に説けるが如し。化生の者は、般若の行報を説く。般若波羅蜜を行じ、一切法に於いて、無礙なるが故に、捷疾辯を得。有人は能く捷疾なりと雖も、鈍根の故に深く入ること能はず。能く深く入るを以ての故に利なり。是の利は、諸法實相を辯説すること、無邊無盡なるが故に、樂説無盡と名く。般若の中には諸の戲論無きが故に能く問難すること無し。斷絶とは、不可斷辯に名く。法愛を斷するが故なり。衆生の應ずる所に隨つて、而も爲に法を説くを隨應辯と名け、涅槃に趣く利益の事を説くが故に義辯と名け、一切世間に(於ける)第一の事、所謂、大乘を説く。是の世間最上辯と名く。須菩提は其の問を然りとし、「是の如し、是の如し」と言ふ。舍利弗は是の念を作さく、「須菩提は常に樂んで空を説く。何を以ての故に、我が所説を受くるや。般若波羅蜜は、廣く三乗の教を説く。應當に更に因縁有るべし」と。須菩提の答ふ、「般若波羅蜜は、廣く三乗の法を説くと雖も、定相有るに非ず。皆な十八空の和合を以ての故に説く。攝取の菩薩の七種の辯も、亦た是の如し。(夫は)空の智慧を以ての故な

【七】原文「難斷絶者名不可斷辯斷法愛放隨衆生所」十七字、聖本之を闕くは誤り。

答へて曰はく、阿難は是れ第三の轉法輪の將にして、能く大衆の師と爲る。是れ世尊に近侍して、初道を得と雖も、漏未だ盡くさざるを以ての故に、多聞智慧有りと雖も、自ら空の智慧の中に於いて、未だ能く善巧ならざるを以て、若し空法を説くは自ら未だ入らざるが故に、皆な是れ他事なり。是の故に言ふこと無し。或る時は諸有の事を説けば、則ち能く問ひ能く答ふ。後品の中に佛に問ひたてまつりて言ふが如くんば、「世尊、何を以てか、但だ般若波羅蜜のみを讚歎して、五波羅蜜を讚じたまはざるや」と。此の中に、人誰か能く是の深般若波羅蜜を信ぜんと問ふは、是れ空事に非ざるが故なり。阿難は便ち答ふ。須菩提は常に樂んで空事を説き、有を説くことを喜ばず。又た阿難は是の時、樂説の心生するを以て是の故に答を聽す。阿難は煩惱未だ盡くさざるが故に、智慧力鈍し、然るに信力猛利なるが故に、甚深般若波羅蜜の中に於いて、能く法の如く問答するなり。

問うて曰はく、般若波羅蜜は所有なく、一定の法有ること無し。云何なれば四種の人は信受して非法なりと言はざるや。

答へて曰はく、今、須菩提は、此の中に自ら因縁を説けり、(即ち「空を以て色を分別せず」と。色は即ち是れ空、空は即ち是れ色なり。是を以ての故に、般若波羅蜜は、失する所無く、破する所無く、若し破する所無ければ、則ち過罪無し。是の故に非法なりと言はず。空は即ち是れ般若波羅蜜なり。空の智慧を以て色を破して空ならしめず。亦た色を破する因縁を以ての故に空有らず。空は即ち是れ色、色は即ち是れ空なるが故に、般若波羅蜜の中に諸の戲論を破するを以て、是の如き功德有るが故に、信受せざること無し。無相、無作、無生、無滅、寂滅、遠離も亦た是の如し。乃至一切種智も皆な應に廣く説くべし。

問うて曰はく、諸の大弟子、是の義を問ふに、須菩提は何を以て乃ち諸の天子に答ふるや。

答へて曰はく、諸の大弟子は已に阿羅漢を得。但だ自ら疑を爲すが故に問ふも益利の事少し。諸

故に、菩薩を護持し、乃至一切世間最上辯は不可なるが故なり。

【論】論者の言はく、是の時、諸の大弟子、舍利弗等は須菩提に語るらく、「是の般若波羅蜜の法は甚深にして解し難し。諸法は定相なきを以ての故に甚深と爲し、諸の思惟、觀行滅するが故に見難く、亦た般若波羅蜜に著せざるが故に解し難く知り難しと名け、三毒及び諸の戲論を滅するが故に寂滅と名け、是の智慧の妙味を得るが故に常に満足を得、更に求むる所無し。餘の一切の智慧は、皆な龜澁にして樂み叵きが故に微妙と言ふ。諸の大弟子は是の言を作さく、「般若波羅蜜の智慧は甚深なるに、世間の人は智慧淺薄にして、但だ福德の果報に貪著し、而も樂んで神徳を修せず、有に著すれば則ち情勇み、有を破すれば則ち心怯へ、本と聞習する所の邪見の經書に堅く著して捨てず。是の如きの人は常に世樂を樂しむ。是を以ての故に、誰か能く信受せんと言ふ。是の深般若波羅蜜を、若し信受すること無くんば、何ぞ説くことを用つて、阿難の助と爲さん。答ふ、四種の人有りて能く信受す。是の故に大徳須菩提の所説は、必ず信受するもの有り、空説にあらざるなり。一には阿鞞跋致の菩薩摩訶薩は、一切法の不生不滅を知り、相を取らず、著する所無きが故に、是れ則ち能く(信)受す。二には漏盡の阿羅漢は、漏盡るが故に、著する所無く、無爲最上の法を得て、所願已に満たし、更に求むる所無きが故に、常住、空、無相、無作の三昧(を以て)般若波羅蜜に隨順するが故に則ち能く信受す。三には三種の學人は、正見を成就し、漏未だ都べて盡きずと雖も、四信力の故に亦た能く信受す。四には有菩薩は、未だ阿鞞跋致を得ずと雖も、福德利根にして智慧清淨に、常に善知識に隨ふ。是の人も亦た能く信受す。信受の相は、是の法は佛、菩薩、大弟子の所説に非ずと言はず、般若波羅蜜の諸法は、皆な畢竟空なりと聞くと雖も、先法を愛するを以ての故に、而も非法なりと言はざるなり。

問うて曰はく、上より已來、阿難は都べて言論無く、今何を以てか須菩提に代りて答ふるや。

は能く受け、是法、非法を言はざらん」と。須菩提の言はく、「空を以て色を分別せず、色を以て空を分別せず。受想行識も亦た是の如し。無相無作を以て色を分別せず、色を以て無相無作を分別せず。受想行識も亦た是の如し。無生、無滅、寂滅、(遠)離を以て色を分別せず、色を以て無生、無滅、寂滅、(遠)離を分別せず。受想行識も、亦た是の如し。眼、乃至意觸因縁生の受も、亦た是の如く、檀波羅蜜、乃至般若波羅蜜、内空、乃至無法有法空、四念處乃至十八不共法、一切の三昧門、一切の陀羅尼門、須陀洹乃至阿羅漢、辟支佛、佛、一切智(も亦た是の如し)。空を以て一切智を分別せず、一切智を以て空を分別せず。空を以て一切種智を分別せず、一切種智を以て空を分別せず。無相、無作、無生、無滅、寂滅、(遠)離も亦た是の亦如し」と。須菩提は暗の天子に語つて言く、「是の般若波羅蜜は甚深なり、誰か能く受くる者ぞ。是の般若波羅蜜の中には法として示すべき無く、法として説く可き無し。若し法として示す可き無く、法として説く可き無くんば、受くる人も亦た不可得なり」と。爾の時に舍利弗、須菩提に語つて言はく、「般若波羅蜜の中には廣く三乗の教を説き、及び菩薩の法、初發意地從り乃至十地、檀波羅蜜乃至般若波羅蜜、四念處乃至八聖道分、佛の十力乃至十八不共法を攝取し、菩薩の教を護持す。菩薩摩訶薩は是の如く般若波羅蜜を行じ常に化生して神通を失せず、諸佛の國に遊び、善根を具足し、其の欲する所に隨ひて諸佛を供養したてまつり、即ち願の如くなることを得、諸佛に聽受したてまつる所の法教に從つて薩婆若に至るまで、初より斷絶せず。未だ曾つて三昧を離れざる時、當に捷疾辯、利辯、不盡辯、不可斷辯、隨應辯、義辯、一切世間最上辯を得べし」と。須菩提の言はく、「是の如し、是の如し。舍利弗の言ふが如く、般若波羅蜜は廣く三乗の教を説き、及び菩薩の教を護持し、乃至菩薩摩訶薩は一切世間最上辯を得ること不可得なるが故に、我乃至知者見者も不可得なり。色受想行識、檀波羅蜜乃至般若波羅蜜も不可得なり。内空乃至無法有法空も不可得なり。四念處乃至八聖道分、佛の十力乃至一切種智も亦た不可得なるが故なり」と。舍利弗、須菩提に語るらく、「何の因縁の故に、般若波羅蜜の中に、廣く三乗を説く、而も不可得なるや。何の因縁の故に、般若波羅蜜の中に菩薩を護持し、何の因縁の故に、菩薩摩訶薩は捷疾辯乃至一切世間最上辯を得るも不可得なるや」と。須菩提、舍利弗に語りて言はく、「内空を以ての故に、般若波羅蜜に廣く三乗を説くは不可得なるが故なり。外空乃至無法有法空の故に、廣く三乗を説くは不可得なるが故なり。内空の故に、菩薩を護持し、乃至一切世間最上辯は不可得なるが故なり。外空乃至無法有法空の

答へて曰はく、譬喩の法は或は實事を以てし、或時は假設の因縁に隨ふが故に説く。佛の言のたまふが如くんば、「若し樹木をして、我が所説を解せしめん者は、我は亦た記して須陀洹を得と言はん」と。但だ樹木は因縁の解す可き無し。佛は人の意を解悟せんが爲の故に、此の喩を引きたまひしのみ。涅槃は是れ一切法中、究竟無上の法なり。衆川萬流（の中にて）は大海を上と爲し、諸山の中にては須彌（山）を上と爲し、一切法の中にては虚空を上と爲すが如し。涅槃も亦た是の如く、老病死の苦あること無く、邪見、貪恚等の諸の衰有ること無く、愛別離の苦あること無く、怨憎會の苦無く、所求不得の苦無く、無常、虚誑、敗壞、變異等の一切皆な無し。要を以て之を言へば、涅槃は是れ一切の苦盡き、畢竟常樂にして、十方の諸佛、菩薩、弟子衆の所歸の處、安隱常樂にして是に過ぐる者無く、終に魔王魔人の爲に破せられず。（夫は）阿毘曇の中に説くが如し。有上法とは、一切有爲の法と及び虚空、非智縁盡なり。無上法とは、智縁盡にして所謂涅槃なり。是の故に、法の涅槃に勝る者無きことを知る。須菩提は般若波羅蜜の力の大なることを美よみするが故に、「若し法の涅槃に勝る者あらんに、是も亦た幻の如し」と言へり。譬へば、大熱の鐵丸を以て、<sup>五</sup>摩の起これる <sup>六</sup>毳上に著けんに、直に燒き下り過ぎ、勢熱して損すること無く、但だ更に燒く可き者無きが如し。般若波羅蜜の智慧も、一切の有法乃至涅槃を破し、直に過ぎて礙無く、智力を滅せず、直に更に法の破す可き無し。是の故に、設ひ法の涅槃に勝る者あらんも、智慧の力は亦た能く破すと云ふ。

【經】爾の時慧命舍利弗、摩訶目犍連、摩訶拘絺羅、摩訶迦旃延、富樓那、彌多羅尼子、摩訶迦葉、及び無數千の菩薩は須菩提に問ふ、「般若波羅蜜は、是の如く甚深にして、見難く、解し難く、知り難く、寂滅微妙なり。誰か當に受くべき者ぞ」と。爾の時、阿難は諸の大弟子及び諸の菩薩に語るらく、「阿鞞跋致の諸の菩薩阿訶薩は、能く是の甚深にして、見難く、解し難く、知り難き、寂滅微妙の般若波羅蜜を受けん、正見成就せる人、漏盡の阿羅漢は、所願已に満ちて、亦た能く之を受けん。復次に、善男子善女人は、多く佛を見たてまつり、諸佛の所に於いて多く供養し、善根を種ゑ、善智識に親近して利根あり、是の人

【四】「大」字、聖本「火」に作る。

【五】「擘」裂け目なり。

【六】「毳」とは柔軟なる毛で織りなせる衣服等をいふ。

が説法と相應せん」と。

問うて曰はく、是の化人は心心數法無く、聽受すること能はず、何ぞ説法を用ゐんや。

答へて曰はく、即ち幻化の人をして聽かしむるに非ず、但だ行者をして、諸法に於て心を用ゐ、著する所無きこと、幻化の人の如くならしめんと欲するなり。是の幻化の人は聞くこと無く、亦た證すること無し。衆生は、幻の如く、夢の如くなれば、法を聽くことも、亦た幻の如く、夢の如し。衆生は説法の人なり。法を聽く者は是れ法を受くる人なり。須菩提の言はく、「但だ法を説く者、法を聽く者のみ、幻の如く、夢の如くなるにあらず。我乃至知者、見者も皆な幻の如く、夢の如し。色も亦た幻の如く、夢の如く、乃至涅槃も幻の如く、夢の如し。即ち是の所説の法は、幻の如く、夢の如し」と。一切衆生の中にて佛を第一と爲し、一切諸法の中にて涅槃は第一なり。是の二事は、幻の如く、夢の如しと聞きて驚疑すらく、「佛及び涅槃は、最上最妙なり。云何なれば幻の如く、夢の如くなるや」と。是を以ての故に、重ねて其の事を問ふ、「佛及び涅槃は、悉く幻の如く、夢の如くなるや」と。須菩提は將に誤り説くこと無く、我等は將に謬り聽くこと無しと。是を以て更に定んで問ふ。須菩提は諸の天子に語るらく、「我は佛及び涅槃は、正しく自ら、幻の如く、夢の如しと説けり。是の二法は妙なりと雖も、皆な虚妄の法より出るが故に空なり。所以何となれば、虚妄の法に従ふが故に涅槃あり、福德智慧に従ふが故に佛ありて、是の二法は因縁に屬して、實定あること無ければなり。念佛、念法の義の中に説くが如し」と。須菩提は是の念を作さく、「般若波羅蜜の力は、假令、法の涅槃に勝る者ありとも、能く幻の如くならしむ。何に沉んや、涅槃をや。何となれば、涅槃は、一切の憂愁苦惱、畢竟して滅す。是を以ての故に法の涅槃に勝る者あること無し。

問うて曰はく、若し法の涅槃に勝る者無くんば、何を以ての故に、若し法の、涅槃に勝るもの有るも、亦復た幻の如しと説くや。

【二】「無」字、聖本に無し。

【三】「最上最妙なり。云何なれば……なるか」聖本「最第一なり。何ぞ……ならん」に作る。

## 卷の第五十五

## 第二十八 幻人聽法品

【經】 爾の時に諸の天子心に念ずらく、「應に何等の人を用つてか須菩提の所説を聽かしむべき」と。須菩提は諸の天子の心に念ずる所を知りて、諸の天子に語りて言く、「幻化の人の法を聽くが如く、我は應に是の如き人を用ふべし。何となれば、是の如き人は聞くこと無く、聽くこと無く、知ること無く、證すること無きが故なり」と。諸の天子、須菩提に語るらく、「是の衆生は幻の如く、化の如く、法を聽く者も亦た幻の如く化の如くなるや」と、(須菩提の言く)「是の如し、是の如し。諸の天子よ、衆生は幻の如くなれば、法を聽く者も亦た幻の如く、衆生は化の如くなれば、法を聽く者も亦た化の如し。諸の天子よ、我は幻の如く夢の如し、衆生乃至知者、見者も亦た幻の如く夢の如し。諸の天子よ、色は幻の如く夢の如く、受想行識は幻の如く、夢の如し。眼乃至意觸因縁生の受も、幻の如く、夢の如く、内空乃至無法有法空、檀波羅蜜乃至般若波羅蜜も幻の如く夢の如し。

諸の天子よ、四念處乃至十八不共法は幻の如く夢の如し。須陀洹果は幻の如く夢の如く、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道は、幻の如く夢の如し。諸の天子よ、佛道は、幻の如く夢の如し」と。爾の時に、諸の天子、須菩提に問ふ、「汝は、佛道をば幻の如く夢の如しと説けり。汝は涅槃をも亦復た幻の如く夢の如しと説くや」と。須菩提、諸の天子に語るらく、「我れ佛道をば幻の如く、夢の如しと説けば、我は涅槃も、亦た幻の如く夢の如しと説く。若し法の涅槃に勝る者ありとも、我は亦復た幻の如く夢の如しと説かん。何となれば、諸の天子、是の幻夢と涅槃とは不二不別なればなり」と。

【論】 問うて曰はく、上に已に、幻の如く、夢の如く、説く者無く、聽く者無しと説けり。今、何を以ての故に、復た應に何等の人か、須菩提の意に隨つて、法を聽く者を用ふべきと問ふや。

答へて曰はく、諸天子は、先に須菩提の所説は解す可からずと言ひ、此の中に須菩提は、幻化の人の喩を説けり。今、諸の天子は、更に是の念を作さく、「何等の人か聽きて、須菩提の所説と相應し、能く信受し、行じて道果を得ん」と。須菩提の答ふらく、「幻化の人の如く、聽く者は、則ち我

【一】 宋・宮兩本「幻聽品」、元・明兩本「如幻品」、聖本「釋第二十七品、訖第二十八品」に作る。

(そは)一切心行の處滅し、言語の道斷するが故なり。是の故に諸の天子は、驚疑し迷悶す。須菩提は諸の天子に答ふらく、「汝が解せざる所の者は、汝自ら應に爾るべし。是の法は一説する所なく、乃至一字の著す可く、取る可きを説かず、字なく、語なし、是れ諸佛の道なり。何となれば、名字は皆な空にして、虚誑無實なればなり。色の名字を破する中に説くが如し。名字を用ふれば、則ち語言あり、若し名字なければ則ち語言なし」と。諸の天子は是の念を作さく、「若し説くこと無く、若し聽くこと無くんば、今日和合の聚會は何の所作か有らん」と。須菩提は此の義を解せんと欲するが故に、譬喩を以て之を明にす。諸の天子は復た是の念を作さく、「譬喩を以て我等に解悟せしめんと欲するも、而も此の譬喩は轉た更に深妙の譬喩にして、鹿を以て細に喩へ、定事を以て不定を明す。今、此の譬喩も亦た微妙にして定相なし」と。須菩提は諸の天子の心の、深般若の中に於いて迷没して自ら出づること能はざることを知る。是の故に説けり、「般若波羅蜜は五衆に異ならず、五衆の實相は即ち是れ般若波羅蜜なり。今、是の般若波羅蜜は深きに非ず、妙に非ず、乃至一切種智も深きに非ず、妙に非ず」と。諸の天子は爾の時、深く須菩提の口に色心を説くと雖も、説く所なく、乃至阿耨多羅三藐三菩提を生ずるも、亦た是の如きを知る。須菩提は諸の天子の心を知りて答へて言はく、「是の如し。是の如し。我のみ獨り爾るに非ず。佛の菩提を得たまひし時も亦た説くこと無く、寂滅の相にして、實に説く者、聽く者なしかりき」と。是の故に須陀洹果、乃至佛道は皆な無爲法に因りて、而して有なり。是の法を離れて是の忍を得れば、即ち須陀洹なく、乃至佛道も亦た是の如し。菩薩は初發心より乃ち佛を得るに至るまで、其の中間に於いて一切の法を説くこと無く聞かざること無し。諸觀を滅するが故に、語言を斷するが故に説く可からず。説く可からざるが故に聽く可からず。聽く可からざるが故に知る可からず。知る可からざるが故に一切の法に於いて受くること無く著すること無ければ則ち涅槃に入るなり。



無法有法空を説かず、四念處、乃至十八不共法を説かず、陀羅尼門、三昧門、乃至一切種智を説かず、須陀洹果乃至阿羅漢果を説かず、辟支佛道を説かず、阿耨多羅三藐三菩提道を説かず、是の法の中に名字語言を説かず」と。須菩提は諸の天子の心に念ずる所を知り、諸の天子に語りて言はく、「是の如し、是の如し。諸の天子よ、是の法の中には諸佛の阿耨多羅三藐三菩提は説く可からざるの相なり。是の中にも亦た説く者なく、亦た聴く者なく、亦た知る者なし。是を以ての故に、諸の天子よ、善男子、善女人の須陀洹果に住せんと欲し、須陀洹果を證せんと欲する者は、是の人は是の忍を離れず。斯陀含、阿那含、阿羅漢果、辟支佛道、佛道に住せんと欲し、證せんと欲するも是の忍を離れず。是の如く、諸の天子よ、菩薩摩訶薩は初發心より般若波羅蜜の中に應に是の如く住すべし。説くもの無く、聴くもの無きを以ての故なり。

【論】問うて曰はく、諸の夜叉の語は隱覆して正しからずと雖も、而も事則ち鄙近なり、深般若波羅蜜を説くは、常辭を用ふと雖も、而も幽旨玄遠にして、事異なり、趣乖けり。何を以てか相況すや。

答へて曰はく、諸天は適人の解せざる所を以て、況し已つて未だ悟らず、必ずしも事趣皆な同じきを以て喩と爲さざるなり。有人の言はく、「天帝に九百九十九の門あり、門は皆な十六青衣の夜叉を以て之を守る。此の諸の夜叉の語言は浮僞にして情趣妖詔なり。諸天は之を賤しみ以て意に在かず。是の故に其の言を解せずして而して其の意況す。言辯を須ゐらずして、而して之を識るべし。故に尙ほ了知すべしと言ふ。今、深般若の言を聞くに、及ぶべきに似て、而も玄旨幽遠、之を尋ぬること深しと雖も、而も之を失すること逾遠し、故に夜叉の言を以て、其の知り叵きことを況す。又た夜叉の語は解し難しと雖も、眼に見て其の言を相傳へ、其の心を度れば、皆な知る可きを以てなり。譬へば、深淵の駛水も、船を得れば渡るべきが如し。須菩提の説く所の、般若波羅蜜の畢竟空の義は、定相あること無く、取る可からず。傳譯して悟ることを得べからず、有と言ふことを得ず、無と言ふことを得ず、有無と言ふことを得ず、非有非無と言ふことを得ず、非有非無も亦た無し。

【經】

爾の時、會中に諸の天子ありて是の念を作さく、「諸の夜叉の言語名字句の説く所すら尙ほ了知すべし。須菩提の説く所の言語・論議・解釋般若波羅蜜は了かあきらかに知るべからず」と。須菩提は諸の天子の心に念ずる所を知り、諸の天子に語るらく、「解せず、知らざるや」と。諸の天子の言はく、「大徳よ、解せず、知らず」と。須菩提、諸の天子に語るらく、「汝等は法を應に知らざるべし。我は論説する所なく、乃至一字をも説かず。亦た聴く者も無し。何となれば、諸の字は般若波羅蜜に非ず。般若波羅蜜の中には聴く者なく、諸佛の阿耨多羅三藐三菩提も字なく、説くこと無し。諸の天子よ、佛は化人を化作したまひ、是の化人、復た四部衆なる比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷を化作し、化人の四部衆の中に於いて法を説くが如し。汝が意に於いて云何。是の中に説く者あり、聴く者あり、知る者ありや不や」と。諸の天子の言はく、「不なり、大徳よ」と。須菩提の言はく、「一切の法は、皆な化人の如く、此の中に説く者なく、聴く者なく、知る者なし。諸の天子よ、譬へば、人の夢中に佛の説法を見る（が如し）。汝が意に於て云何、是の中に説く者あり、聴く者あり、知る者ありや不や」と。諸の天子の言はく、「不なり、大徳よ」と。須菩提は諸の天子に語るらく、「一切の諸法は皆な夢の如く、説くもの無く、聴くもの無く、知る者なし。諸の天子よ、譬へば二人の大深淵に在り、各一面に住して佛法衆を讚ずるに、二の擲ひきまありて出づるが如し。諸の天子、意に於いて云何、是の二人の擲は展轉して相解するや不や」と。諸の天子の言はく、「不なり、大徳須菩提よ」と。須菩提は諸の天子に語るらく、「一切法も亦た是の如く、説くもの無く、聴くもの無く、知る者なし。諸の天子よ、譬へば、巧なる幻師の四衢の道中に於いて、佛及び四部の衆を化作し、中に於いて説法するが如し。諸の天子、意に於いて云何、是の中に説く者あり、聴く者あり、知る者ありや不や」と。諸の天子の言はく、「不なり、大徳よ」と。須菩提は諸の天子に語るらく、「諸の天子よ、一切諸法は幻の如く、説く者なく、聴く者なく、知る者なし」と。爾の時、諸の天子は心に念ずらく、「須菩提の説く所は解し易からしめんとをばし、深を轉じ、妙を轉ず」と。須菩提は諸の天子の心に念ずる所を知り、諸の天子に語りて言はく、「色は深きに非ず、妙に非ず、受想行識は深きに非ず、妙に非ず。色の性は深きに非ず、妙に非ず。色の性は深きに非ず、妙に非ず、受想行識の性は深きに非ず、妙に非ず。眼の性、乃至意の性、色の性、乃至法の性、眼界の性、乃至境界の性、眼識、乃至意識、眼觸、乃至意觸、眼觸因縁生の受、檀波羅蜜、乃至般若波羅蜜、内空、乃至無法有法空、四念處、乃至十八不共法、一切諸の三昧門、一切の陀羅尼門、乃至一切種智、一切種智の性は深きに非ず、妙に非ず」と。諸の天子は復た是の念を作さく、「是の所説の法の中には色を説かず、受想行識を説かず、眼、乃至意觸因縁生の受を説かず、檀波羅蜜、乃至般若波羅蜜を説かず、内空、乃至

し。三千大千世界は純ちんぱらはれ金剛なりとは、餘の世界は底に金剛あり、及び佛の所行、所坐の處には金剛ありと雖も、而も餘の處には皆な無し。是の菩薩の所願の世界は皆な是れ金剛なり。菩提樹香もて衆生を度すとは先の義中に説くが如し。

問うて曰はく、此の中の事は希有にして皆な信すべしと雖も、受想行識の名字あること無く、檀波羅蜜の名字、乃至佛の名字のなきことは是れ信すべきこと難し。

答へて曰はく、世界あり、大福德智慧の人の生ずる處なり。樹木、虚空、土地、山水等は常に諸法實相の音を出だし、所有る法は皆な是れ不生不滅、不淨不垢、空、無相、無作等なり。衆生は生れて便ち是の音を聞き、自然に無生法忍を得。是の如き世界の中には分別して諸法の名字、所謂、是の五衆、十二入等、檀波羅蜜、乃至十八不共法、須陀洹、乃至諸佛を説くことを須すみず。是の世界の衆生は皆な三十二相八十隨形好ありて身を莊嚴し、無量の光明、一種の道、一種の果あり。是の中に住すべからずとは、菩薩は自ら念ずらく、「我れ能く是の如き世界に生ずれば、則ち高心を生ず」と。是を以ての故に、相を取りて此の中に住すべからず。須菩提は自ら説けり、「因縁に住せず、諸佛の佛道を得たまふ時は諸法の中に於いて定んで實相を得ず。故に當に何所どこにか住すべき」と。今、舍利弗は是の念を作さく、「若し都べて住する所なくんば、當に何處にか住して佛道を成ずることを得べき」と。須菩提は舍利弗の心の所念を知り、舍利弗に語るらく、「諸の菩薩は皆な是れ佛子なり。子の法は應に父の所行の如くなるべし。諸佛の心は一切法の中に於いて住したまふ所なし。所謂、色乃至一切種智なり。菩薩も亦た應に是の如く學し、住する所なき心を用つて、般若波羅蜜を行すべし。諸佛は住する所なき心の中にも亦た住せず、住せざるに非ざる心の中にも亦た住したまはず。畢竟清淨なるが故に諸の菩薩は亦た應に佛に隨つて住すべし。畢竟清淨なるが故に、諸の菩薩は亦た應に佛に隨つて學すべし。」

答へて曰はく、清淨に住することを破せず。但だ我を計し、邪見もて相を取る心に住することを破す。譬へば、田を治して其の機草を去るが如し。

復次に、法愛を斷ぜんが爲の故に住すべからず。諸佛の畢竟空を説きたまふ智慧に違はんことを欲せざるが故に住すべからず。若し方便を以て、不著の心もて衆生を憐愍するが故ならば、住すと雖も咎なく、乃至八十種の隨形好も亦た是の如し。八人とは、所謂、見諦道中の信行、法行なり。須陀洹は極く久しきは七世生なり。有須陀洹は、今世に煩惱盡きて阿羅漢を得。有家家の須陀洹は三世生なり、三世生已りて涅槃に入る。有中間の須陀洹は第三を除き、餘の中間に涅槃に入る。六無礙、五解脫の中に住する者は皆な是れ須陀洹向なり。斯陀含は欲界六種の結を斷じて天上に生じ、天上より來り人間に生じて涅槃に入るを斯陀含と名く。欲界の第七分の結を斷ずるを向阿那含と名け、第八分の結を斷ずるも亦た向阿那含と名け、又た一種子と名く。斯陀含の此の間に死し、彼の間に生じて涅槃に入り、能く欲界一切の結使を斷ずるを阿那含と名け、此の間に死し、色・無色界に生じて涅槃に入り、更に復た來生せず。今世に滅する阿那含あり、中陰に滅する阿那含あり、即ち生する時、涅槃に入る阿那含あり、生じ已り、諸行を修起して涅槃に入る阿那含あり、諸行を勤求せずして涅槃に入る阿那含あり、上行乃至阿迦貳吒の阿那含あり、無色界に生じて涅槃に入る阿那含あり。身證を得て涅槃に入る阿那含あり、是を阿那含と名け、亦た向阿羅漢とも名く。阿羅漢に九種あり、漏を盡くし身を捨つる時を、無餘涅槃に入ると名く。聲聞、辟支佛地を過ぎて菩薩地に住し、道種智、一切種智もて一切法を知り、一切の煩惱及び習を斷じ、成佛して法輪を轉じ、三十二相あり、廣く世界の無量の衆生を度し、無量の壽命あることは皆な先の論議の中に説くが如し。聲聞の人の善く四如意足を修し、是の三昧力を得るも、能く壽に住すること、若くは一劫、若くは減一劫なり。菩薩は善く四如意足を修し、若し如恆河沙劫の壽を欲せば亦た得ること意の如

涅槃は即ち是れ無爲の相なり。是の故に、今、須陀洹果等の無爲の相に住すべからずと説く。若し是の須陀洹果は無爲の相ならば、則ち法として著す可きもの無し。何の愛する所、何の取る所ぞ。若し是れ有爲の相ならば、有爲相は則ち虚誑にして實なく、亦た住すべからず。是の故に、須陀洹果の無爲の相に住すべからずと説く。乃至佛の無爲の相に住すべからざるも、亦た是の如し。如し菩薩、佛道を行ぜんと欲せば、初に檀波羅蜜を行じて、應に福田を求むべし。所以何となれば、福田の因縁功德の故に、所願を満することを得ればなり。良田に種うれば則ち收益する所多きが如し。佛の説きたまふが如くんば、「餘の田の果報は有量なるも、賢聖の田は無量、果報も亦た無量なり」と。菩薩は是の須陀洹等の福田の果報の無量なることを聞くが故に、便ち須陀洹と作らんと欲す。是を以ての故に、須陀洹の福田に住すべからず。乃至辟支佛も亦た是の如しと説く。

問うて曰はく、「二乗は小なるが故に、應に過ぎて住せざるべし。佛の福田には何故に住せざるや。答へて曰はく、菩薩の法は、諸法に於いて應に平等なるべし。若し佛を以て大と爲し、衆生を小と爲さば、則ち等しき法相を破す。復次に、空なるが故に、一切處に住すべからず。復次に、菩薩は應に等心に布施すべし。若し福田を分別すれば、則ち大悲を破し、亦た三分清淨の布施を破す。初地の中に住すべからずとは、若し初地を捨てざれば、則ち一地を得ず。大益を求むるが故に、應に小利を捨つべし。復次に、著心にして相を取るを以ての故に住すべからず。乃至第十地も亦た是の如し。

問うて曰はく、若し菩薩摩訶薩の法は發初心より應に六波羅蜜を行すべく、六波羅蜜を行するが故に法位に入り、法位に入るが故に、應に阿鞞跋致地に住すべく、阿鞞跋致地に住し已りて、應に五神通を起すべし。十方の諸佛に供養したてまつることは後に廣く説くが如し。今、何を以てか皆な住すべからずと言ふや。

須菩提、舍利弗の心に念ずる所を知り、舍利弗に語りて言く、「汝が意に於いて云何、諸佛は何所にか住したまふ」と。舍利弗、須菩提に語るらく、「諸佛に住處あること無し。諸佛は色の中に住せず、受想行識の中に住せず。有爲性の中に住せず、無爲性の中に住せず。四念處の中に住せず乃至十八不共法の中に住せず、一切種智の中に住せず。舍利弗よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜の中に應に是の如く住すべし。諸佛の諸法の中に住したふが如く、住するに非ず。住せざるに非ず。舍利弗よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜の中に應に是の如く學すべし。我は當に不住法に住すべきが故なり」と。

【論】者の言はく、般若波羅蜜の中の住とは、所謂、五衆と五衆相の空なり。五衆相の空とは、十八空觀を以ての故なり。復次に、般若波羅蜜經に空の義を説くに、五衆の相は空なり、但だ凡夫顛倒の故に五衆の相を取り、五衆和合して菩薩の相を取る。般若波羅蜜の中には、衆生空を以て衆生を除けば、即ち是の菩薩相なく、法空を以て五衆を除けば、則ち五種の相なし。二空は別異なること無きが故に五衆の空と菩薩の空とは無二無別なりと言ふ。梅檀の火の滅すると、糞草木の火の滅すると、滅法には異なること無く、未だ滅せざる時の相を取りて、滅時に於て説くが故に別異あり、滅中に於ては則ち異なること無きが如し。乃至一切種智も亦た是の如し。住すべからずとは、所謂五衆の中に住すべからざるなり。

問うて曰はく、應に如住の義を説くべし、何を以ての故に不住を説くや。

答へて曰はく、若し能く五衆の中に於いて心離れて住せざれば、則ち是れ住するの義なり。是の故に、「有所得を以ての故に住すべからず、乃至一切種智も亦た是の如し」と説けり。先に五衆の中に住すべからざることを説くも、何の門を以て住すべからざるかを知らず。今、常、無常等の門の中に住すべからず、乃至遠離して住すべからざるを説く。

問うて曰はく、須陀洹果等の無爲相に住すべからざるに、何の次第ありや。

答へて曰はく、菩薩は先づ諸法の空にして、所有なきを觀じ、心退没して涅槃を取らんと欲す。

法眼・佛眼を生ずべきにも住すべからず。我れ當に一切の三昧門を生ずべきにも住すべからず。欲する所に隨つて諸の三昧に遊戲するにも住すべからず。我れ當に一切の陀羅尼門を生ずべきにも住すべからず。我れ當に佛の十力を得べきにも住すべからず。我れ當に四無所畏、四無礙智、十八不共法を得べきにも住すべからず。我れ當に大慈大悲を具足すべきにも住すべからず。我れ當に三十二相を具足すべきにも住すべからず。我れ當に八十隨形好を具足すべきにも住すべからず。有所得を以ての故なり。是の八人は是れ信行の人、是れ法行の人なりと、是の如きにも住すべからず。須陀洹の七世の生を極むるにも住すべからず。家家に住すべからず。須陀洹の命終して垢盡るにも住すべからず。須陀洹の中間に涅槃に入るにも住すべからず。是の人は斯陀含果の證に向ふにも住すべからず。是の人は斯陀含より一往來して、涅槃に入るにも住すべからず。是の人は阿那含果の證に向ふにも住すべからず。斯陀含の一種にも住すべからず。是の人は阿那含にて彼の間に涅槃に入るにも住すべからず。是の人は阿羅漢果の證に向ふにも住すべからず。是の人は阿羅漢にて、今世に無餘涅槃に入るにも住すべからず。是の人は辟支佛にも住すべからず。聲聞、辟支佛地を過ぎて、我れ當に菩薩地に住すべきにも住すべからず。道種智の中にも住すべからず。有所得を以ての故なり。一切種、一切法を知り、己に諸の煩惱及び習を斷ずるにも住すべからず。佛は阿耨多羅三藐三提を得て、當に法輪を轉すべきにも住すべからず。佛事を作して無量阿僧祇の衆生を度し、涅槃に入るにも住すべからず。四如意足の中にも住すべからず。佛の三昧に入り如恒河沙等の劫壽に住するにも住すべからず。我れ當に壽命無殃數劫を得べきにも住すべからず。三十二相の一一の相、百福莊嚴にも住すべからず。我が一世界は十方恆河沙等の世界の如きにも住すべからず。我が三千大千世界は、純ら是れ金剛なるにも住すべからず。我れ菩提樹をして當に是の如きの香を出ださしむべく、衆生は是を聞きて婬欲・瞋恚・愚癡ある無く、亦た聲聞、辟支佛の心なし。是の一切の人は必ず當に阿耨多羅三藐三善提を得べし。若し衆生の是の香を聞く者は身病、意病、皆な悉く除き盡くすにも住すべからず。當に我が世界の中に色受想行識の名字あること無からしむべきにも住すべからず。當に我が世界の中に檀波羅蜜の名字あること無く、乃至般若波羅蜜の名字あること無からしむべく、當に我が世界の中に四念處の名字あること無く、乃至十八不共法の名字あること無く、亦た須陀洹の名字なく、乃至佛の名字あること無からしむべきにも住すべからず。有所得を以ての故なり。何となれば、諸佛の阿耨多羅三藐三善提を得たまふ時、一切の諸法は無所得なるが故なり。是の如く、幡尸迦よ、菩薩は般若波羅蜜の中に於いて住すべからず。有所得を以ての故なり。爾の時、舍利弗は心に念ずらく、「菩薩は今、云何にして應に般若波羅蜜の中に住すべき」と。

と。須菩提の言はく、憍尸迦よ、菩薩摩訶薩は、色の中に住すべからず、有所得なるを以ての故なり。受想行識の中に住すべからず、有所得を以ての故なり。眼の中に住すべからず、乃至意觸、眼觸因縁生の受、色の中に住すべからず、乃至法の中に住すべからず、眼識、乃至意識、眼觸、乃至意觸、眼觸因縁生の受、乃至意觸因縁生の受の中に住すべからず、有所得を以ての故なり。地種、乃至識種の中に住すべからず、有所得を以ての故なり。檀波羅蜜、乃至般若波羅蜜、四念處、乃至十八不共法の中に住すべからず、有所得を以ての故なり。須陀洹果の中に住すべからず、有所得を以ての故なり。乃至阿羅漢果、辟支佛道、菩薩道、佛道、一切種智に住すべからず、有所得を以ての故なり。

復次に、憍尸迦よ、菩薩摩訶薩は色は是れ常に住すべからず、色は是れ無常に住すべからず、受想行識も亦た是の如し。色、若くは樂、若くは苦、若くは淨、若くは不淨、若くは我、若くは無我、若くは空、若くは不空、若くは寂滅、若くは不寂滅、若くは離、若くは不離に住すべからず、有所得なるを以ての故なり。受想行識も亦た是の如し。

復次に、憍尸迦よ、菩薩摩訶薩は須陀洹果の無爲相、斯陀含果の無爲相、阿那含果の無爲相、阿羅漢果の無爲相に住すべからず。辟支佛道の無爲相、佛道の無爲相に住すべからず。須陀洹の福田に住すべからず。斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛、佛の福田に住すべからず。

復次に、憍尸迦よ、菩薩摩訶薩は初地の中に住すべからず。有所得を以ての故なり。乃至第十地の中に住すべからず、有所得を以ての故なり。

復次に、菩薩摩訶薩は、初發心の中に住して我れ當に檀波羅蜜を具足すべきにも住すべからず。乃至我れ當に般若波羅蜜を具足すべきにも住すべからず、六波羅蜜を具足して當に菩薩位に入るべきにも住すべからず。菩薩位に入り已りて當に阿鞞跋致地に住すべきにも住すべからず。菩薩は當に五神通を具足すべきにも住すべからず。有所得を以ての故なり。菩薩は五神通に住し已り、我れ當に無量阿僧祇の世界に遊び、諸佛を禮敬し供養し、法を聽き、法を聽き已りて他人の爲に説かんと。菩薩摩訶薩は是の如きに住すべからず。有所得を以ての故なり。諸佛の世界の嚴淨なるが如く、我も亦た當に世界を莊嚴すべきにも住すべからず。有所得を以ての故なり。衆生を成就して佛道に入らしむるにも住すべからず。無量阿僧祇の世界の諸佛の所に到りて尊重し、愛敬し、供養し、香華・瓔珞・淨香・搗香・幢幡・華蓋・百千億種の寶衣を以て諸佛を供養し上るにも住すべからず。有所得を以ての故なり。我れ當に無量阿僧祇の衆生をして、阿耨多羅三藐三菩提心を發さしむべしと。是の如きにも菩薩は住すべからず。我れ當に五眼なる肉眼・天眼・慧眼。



を知る」と。法は即ち是れ法寶なり。今の佛と過去の佛は即ち是れ佛寶なり。諸の菩薩及び弟子は即ち是れ僧寶なり。六波羅蜜は先に説くが如し。示すとは、人の好醜、善不善、應に行すべきと行すべからざるを示すなり。生死を醜と爲し、涅槃安隱を好と爲し、三乘を分別し、六波羅蜜を分別する、是の如き等を示すと名く。教ふとは、教へて、「汝、惡を捨て善を行ぜよ」と言ふ、是を教と名く。利すとは、未だ善法の味を得ざるが故に、心則ち退没するを、爲に法を説いて、引導して出でしめ、「汝は因時に於いて果を求むること莫れ。汝は今勤苦すと雖も、果報出づる時は大に利益を得」と。其の心をして利ならしむるか故に利と名く。喜とは、其の所行に隨つて、而も之を讚歎すれば、其の心をして喜ばしむ。若し布施を樂しむ者に、布施を讚すれば、則ち喜ぶが故に喜と名く。此の四事を以て説法を莊嚴するなり。

【經】爾の時に、須菩提、釋提桓因に語りて言はく、「憍尸迦よ、汝今、當に菩薩摩訶薩の般若波羅蜜の中の如に應に住すべき所と、住すべからざる所とを聽くべし。憍尸迦よ、色の色空、受想行識の識空、菩薩の菩薩空（に於いて）、是の色空と菩薩空とは不二不別なり。受想行識空と菩薩空とは不二不別なり。憍尸迦よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜の中に應に是の如く住すべし。

復次に、眼の眼空乃至意の意空、菩薩の菩薩空（に於いて）、眼空、乃至菩薩空は不二不別なり。六塵も亦た是の如し。地種の地種空、乃至識種の識種空、菩薩の菩薩空（に於いて）、憍尸迦よ、地種空乃至識種空と菩薩空とは不二不別なり。憍尸迦、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜の中に應に是の如く住すべし。無明の無明空乃至老死の老死空、無明滅の無明滅空乃至老死滅の老死滅空、菩薩の菩薩空（に於いて）、憍尸迦よ、無明空乃至老死空、無明滅空乃至老死滅空と菩薩空とは不二不別なり。憍尸迦よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜の中に應に是の如く住すべし。檀波羅蜜乃至般若波羅蜜、內空乃至無法有法空、四念處乃至十八不共法、一切三昧門、一切陀羅尼門、聲聞乘、辟支佛乘、佛乘、聲聞、辟支佛、菩薩、佛も亦た是の如し。一切種智の一切種智空、菩薩の菩薩空（に於いて）、一切種智空と菩薩空とは不二不別なり。憍尸迦よ、菩薩摩訶薩若般若波羅蜜中に應に是の如く住すべし」と。

爾の時に、釋提桓因、須菩提に問うて云はく、「云何なれば般若波羅蜜の中に住すべからざる所なるや」

に、車は廻向の處と異なるが故に、廻向ある可く、但だ車のみ有るを、而も廻向と異なること無しと言ふを得ざるが如くなるが故なり。心相は常に非ず心相に非ずとは、須菩提は意に謂へらく、「是の心相は如・常住・不生・不滅・不垢・不淨なり」と。心相に非ざるを以ての故に心に非ず、亦た是非の心も無し。是の故に不可思議と説く。不可思議も亦た常に不可思議にして、籌量思惟して相を取る可からず。是の因縁を以ての故に阿耨多羅三藐三菩提に因る所の心は果に似たり。似ざれば則ち生ずること能はず。若し初心淨ならざれば、後に淨心を發すこと能はず。鐵を鍊るも金と成すこと能はざるが如し。佛は須菩提を以て、深く因縁般若波羅蜜の中に入れたまふ。此は是れ般若波羅蜜の名なり。能く深く諸法の因縁を得るを以ての故に、即ち以て名と爲す。違錯あること無きが故に大衆の中に於いて讚じて言はく、「善い哉、善い哉。汝は是れ小乗の人にして而も能く善く深般若波羅蜜を説く」と。諸の菩薩の心を安慰すとは、般若波羅蜜を以て諸の菩薩に教ふるに、「汝は自ら煩惱未だ盡きず、未だ佛道を成ぜざるを以ての故に、自ら懈廢すること莫れ、諸法は〔障なく〕礙なく、初心と後心とに異相あること無し。但だ勤めて精進すれば、則ち佛道を成ぜん」と。我れ應に恩を報すべしとは、須菩提は是の念を作さく、「我は此の諸法實相を行じて、老病死苦を脱することを得たり。我は云何ぞ是の法の大恩を念ぜらん」と。是を以ての故に常に樂んで法を説く。

復次に、佛は大悲心あり、樂んで法を説き、衆生を度したまふ。我は佛恩を以ての故に、道を得たり。我も亦た佛を助けたてまつり、法を説き衆生を度せん。是を報恩と爲す。又た知る、「今の世尊は過去の諸佛に因りて佛道を成ずることを得たまへり。是の故に我も亦た過去の佛を愛敬すること、子の父を愛敬するが故に、亦た祖父をも愛重するが如くならん。亦た過去の諸の菩薩及び弟子を愛敬せん。能く法を説きて教示するが故なり。今の世尊も亦た此に因りて成ずることを得たまへり」と。須菩提は深心に三寶を信するが故に説けり。「我は今世尊及び法、過去の諸佛及び弟子の恩

こと、春に果樹を殖<sup>つ</sup>ゑ、時に隨つて溉灌すれば華果繁茂するが如し。智慧分別を以て一切諸法に作者あること無きことを知る。菩薩の初發意の廻向は佛心の與<sup>たよ</sup>に因縁と作る。而も初發意の廻向の時は未だ佛心あらず。佛心の中には初の廻向心なし、無しと雖も而も能く因縁と作る。

問うて曰はく、若し初發心の廻向の時、菩提心なくんば、何の所にか廻向するや。

答へて曰はく、般若波羅蜜の實相中には、諸法は常相に非ず、無常相に非ず、有相に非ず、無相に非ず。故に難じて、「廻向心は已に滅して所有なくんば、云何ぞ菩提の與めに因と作らん」と言ふべからず。若し諸法は不生・不滅・非不生・非不滅ならば、云何ぞ不生不滅を以て難を作さん。「菩提心なくんば、何の所にか廻向せん」と。

復次に、佛自ら説き給はく、「菩提の相は過去に非ず、未來に非ず、現在に非ず」と。云何ぞ難じて、「未來の菩提なきが故に、何の所にか廻向せん」と言はんや。

復次に、如如品の中に説く、「過去世は未來世を離れず、未來世は過去世を離れず、過去世の如と未來世の如とは一如にして二なし」と。云何ぞ菩提心は廻向心の中に在らず、廻向心は菩提心の中に在らずと説かんや。但だ菩薩は佛法を讚歎するを聞いて、發心し愛樂し、我が所有の功德、皆な佛道に廻向し、發心より已來、乃ち佛道に至るまで、是の功德を修して休まず息まず、幻の如く夢の如く無所得なるを用つての故に、是を菩薩の般若波羅蜜と名け、能く諸法の因縁より果報を生ずるも、而も定相あること無きことを知る。釋提桓因の難すらく、「何を以ての故に、廻向心は菩提心の中に在りて得べからず、菩提心は廻向心の中に在りて得べからざるや」と。須菩提は、世諦の幻の如く夢の如きを以て説かず、但だ第一義諦を以て説けり。是の二心は皆な空にして心相に非ず。何となれば諸法畢竟空の中には是心非心なし。是の如き法に云何ぞ廻向ある可きや。若し二法あらば廻向ある可し。譬へば、車に乗りて西に行き、南に止宿する處あるが故に、車を廻して趣向する

復次に、釋提桓因は般若波羅蜜の相を問うて、五衆患厭の事を問はず。但だ般若の相のみを説く。般若の相とは、五衆を離れずして涅槃あり、涅槃を離れずして五衆あり、五衆の實相は即ち是れ涅槃なり。是の故に、初發心にして鈍根なる者は、先づ無常等の觀を用ゐ、然る後に五衆の寂滅等を觀す。十二因縁も亦た是の如し。

復次に、四念處乃至八聖道分を修す。是の共法は薩婆若に應ずる心なり。無所得を以てとは、是れ般若波羅蜜の相に名く。六波羅蜜、乃至十八不共法は、獨り是れ大乘の法なり。

問うて曰はく、應に般若波羅蜜の相行を説くべし。何を以ての故に、中間に諸法を説き、諸法は更に相因熟たり、潤益し增長す(といふや)。

答へて曰はく、須菩提は、上に先づ諸法の無常等の過を説き、後に諸法の遠離、寂滅にして、無所得空なることを説き、然る後、諸法は空なりと雖も、因縁和合に従ふ故に有りと説き、次に四念處より乃ち十八不共法に至るまで、佛道を行することを説く。聽者は是の念を作さく、「上に遠離、寂滅、空を説くが故に、常に非ざることを知り。十二因縁を説くが故に、不滅なることを知る。而も知者、見者なし。誰か是の諸法を修行して佛を得ん」と。是の故に説く。菩薩は是の念を作さく、「諸法は空にして我なく、衆生なく、而も因縁に従ふが故に有り。四大、六識、是の十法は各各力ありて能く生じ能く起き能く作す所あり。地の能く水を持し、能く火を爛し、能く風を消し、能く識を廻轉するが如し。能く十法を分別するに各所作あり。衆生は顛倒の故に謂はく、「是は人の作、我が作なり」と。皮と肉との和合の故に語聲あるを、惑ふ者は人語と謂ふが如く、火の乾ける竹林を燒きて大音聲を出すも、此の中に作者あること無きが如く、又た木人、幻人、化人は、能く動作ありと雖も、作者あること無きが如く、此の十法も亦た是の如し。前生の法と後生の法と因縁和合し、或は共生の因縁、或は相應の因縁、或は報因縁等の常修常集の因縁は果報をして增長せしむる

等の過の故に常に安隱ならず。

問うて曰はく、五衆には但だ此の十五種の惡あるのみなるや、更に餘事あるや。

答へて曰はく、略して説かば則ち十五にして、廣く説かば則ち無量無邊なり。雜阿含の中に、五衆には百種の罪過ありと呵するが如し。

問うて曰はく、何を以てか常に無常、苦、空、無我を説き、或る時は、八事は病の如く、癰疽等の如しと説き、餘の七事は少しく説く處あるや。

答へて曰はく、人に上中下あり。利根の爲の故に、四を説けば、即ち苦諦に入る。中根の者に四を説くも則ち厭心を生ずること能はず。病の如く癰の如し等の八事を説けば、即ち厭心を生ず。鈍根の人は、是の八事を聞くも、猶ほ厭を生ぜず。更に爲に痛惱等の七事を説けば、然る後に乃ち厭ふ。利根は度し易きが故に、常に多く四事を説き、鈍根の人は、時に度すべき者あるが故に、希に餘事を説く。上の八事を名けて聖行と爲し、餘の七事は凡夫、聖人共に行ず。初の四は、十六聖行に入るが故に、般若の中に常に説き、又た般若は、若くは菩薩の爲に説き、利根なるが故に多く聖行を説く。今、云何なれば是れ初の行法なりやと問ふが故に、此の中に都べて十二入を説く。乃至六種等も亦た應に是の如くなるべし。十八界等を呵することも亦た應に具に説くべし。誦者は忘失す。何となれば、此の十八界等の諸法は、皆な是れ五衆の別名なり、故に説かざるべからず。若し行者は五衆等の寂滅、遠離、不生、不滅、不垢、不淨を觀ぜば、此れ但だ般若波羅蜜の爲の故なり。上の十五を合せず、十五事を説くは三乘共なるが故なり。聲聞の人は智力薄きが故に、初に始めて五衆の若くは遠離、若くは寂滅なり等と觀すること能はず。但だ能く無常等を觀じ、第三諦に入りて乃ち能く寂滅を觀ず。菩薩は利根なるが故に、初に五衆を觀すれば、便ち寂滅の相を得。無所得を用ふとは、常に無所得空慧を用つて諸法の相を觀するなり。

是れ初に方便に入りて行ずることを問ふ。云何にして住すとは、深く究竟に入りて住ずることを問ふ。須菩提は其の語を受けて是の答を作せり。若し人飢渴せんに、飲食を給足すれば、恩を感じることも則ち深し。菩薩も亦た是の如く、發心して佛道を求むるに、是の人の爲に般若を説けば、則ち大に利益を得、恩を感じることも亦た深し。是の故に般若を説く。若し未だ發心せざる者は當に發すべく、已に聖道に入れる者は則ち堪任せず。漏盡きて後に生ずること無きを以てなり。是れ等の如き因縁の故に任へずと言ふ。

問うて曰はく、若し是の人は任へずんば、何を以ての故に、是の人は若し發心せば、我も亦た隨喜して其の功德を障げず、上人は應に更に上法を求むべしと言ふや。

答へて曰はく、須菩提は是れ小乘なりと雖も、常に空を習ひ行するが故に、聲聞道に著せず。是を以ての故に、假に言を説く。若し發心せば、何の答か有らん。此の中に須菩提は自ら二の因縁を説く。一には其の福德心を障げず、二には上人は應に更に上法を求むべし。是を以ての故に、上人は阿耨多羅三藐三菩提を求むるに咎なし。上人にして小法を求めば是れ恥づ可きなり。中間、傍及び餘事を以ての故に更に稱問せり。何等か是れ般若波羅蜜なるとは、所謂、薩婆若の心に應じて、色の無常、苦、空、無我を觀すること、先に説くが如し。五衆の能く諸惱を生ずることを觀するが故に、病の如しと言ひ、有人は、五衆は病の如しと聞くも、謂ひて輕微と爲すが故に、癰疽の如しと言ひ、有人は癰疽を以て愈え難きも、猶ほ或は差ゆ可しとするが故に、箭鏑の體に入りて出すことを得べからざるが如しと言ふ。有人は箭鏑の體に在りて、沈むこと深きを以て、抜き難しと雖も、良方妙術は猶ほ出でしむ可しとするが故に、常に痛惱すと言ふ。人の衰に著けば常に不吉あるが如く、五衆も亦た是の如し。若し人、隨逐すれば則ち安隱なること無し。衰あるを以ての故に、常に憂怖を懷く。是の五衆は、師子虎狼と共に住して、常に憂畏を懷くが如し。是の五衆は無常、虛誑

鬼といひ、八部衆の一なり。羅刹 (Rakshas)。可畏、護者と譯し、速疾鬼、食人鬼といふ。

【一〇】 釋提婆那民 (Sakrabandhava)。又た釋迦提婆因陀羅、釋提桓因といひ、能天主と譯し、三十三天の主なる帝釋天なり。「民」字、宋宮本は「氏」に作る。

【一五】 須夜磨 (Suryama)。善時・時分・妙善などと譯し、欲界六天の一、空居四天の一。

【一六】 刪兜率陀 (Sanghata)。[磨] 字別本「摩」に作る。

【一七】 須涅蜜陀 (Sumeru)。六欲天の一。

【一八】 婆舍跋提 (Vasavarti)。六欲天の一、欲界の最高天。

【一九】 尸棄 (Sikhin)。梵天の異名。

【二〇】 首陀婆 (Suddhava)。色界四禪天中九天の一。聲聞第三果阿那含果の聖者の生る所、五淨居天といふ。

【二一】 業報生身。勝德修行の果報として得たる天人の身なり。

【二二】 火三昧は火光三昧の略、身より火光を出す禪定なり。

【二三】 常光明。佛の二光明の一、神通光の對。佛身として常に放つ光明なり。

答へて曰はく、有人の言はく、「此は是れ後の會なり」と。有人の言はく、「即ち是れ前の會の天なり」と。須菩提は善く能く深般若波羅蜜を説くを以て諸天は歡喜す。是を以ての故に佛は微笑し給ひしに、常光益益更に明を發し諸天の光明は復た現ぜず。日の出づる時、星月燈燭の復た光明なきが如し。譬へば、焦炷の 閻浮檀金の邊に在るが如し。四天王天とは、東方は 提多羅吒〔秦に治國と言ふ〕と名く。乾闥婆及び 毘舍闍に主たり。南方は 毘流離〔秦に増長と言ふ〕と名く。拘槃荼及び 薛荔多に主たり。西方は 毘流波又〔秦に雜語と言ふ〕と名く。諸の龍王及び 富多那に主たり。北方は 犍沙門〔秦に多聞と言ふ〕と名く。夜叉及び羅刹に主たり。釋提桓因は釋迦は秦に能と言ひ、提婆は秦に天と言ひ、因提は秦に主と云ひ、合して之を 釋提婆那民と言ふ。須夜磨は夜摩天王の名なり。秦には妙善と言ふ。刪兜率陀は兜率陀天王の名なり。秦には妙足と言ふ。須涅蜜陀は秦に化樂と言ひ、婆舍跋提は秦に他化自在天と言ひ、此の間の一の梵天王を 尸棄と名け秦には火と言ふ。梵天より乃ち 首陀婆天に至る。〔首陀婆は〕秦には淨居天と言ふ。業報生身の光とは、欲界の天は燈燭、明珠等の施及び布施、持戒、禪定等清淨なるを以ての故に、身に常に光明ありて、日月を須ゐず。色界天は禪を行じ、欲を離れて、火三昧を修習するが故に、身より常に妙光を出だし、日月及び欲界の報の光明に勝る。離欲天は要を取りて之を言へば、是の諸の光明は、皆な心清淨なるに由るが故に得。佛の 常光明とは、面 各一丈なり。諸天の光の大なる者は、無量由旬なりと雖も、佛光の邊に於いては、蔽はれて現ぜず。釋提桓因は佛の神力、光明を見て是の念を作さく、「佛の光明は能く諸天の光を蔽ふ、智慧の明も亦た當に能く我等が愚闇を破すべし」と。又た佛の命じたまふを以つて須菩提は般若を説けり。是の故に言はく、「一切の諸天は、皆な大に集會して、須菩提の般若の義を説くを聽かん」と欲し、今、大福德の諸天は皆な集まりて、般若の義を聞かんと欲す」と。云何なれば是れ般若波羅蜜なるとは、是れ般若の體を問ふ。云何にして行ぜんとは、

【二】「焦炷」松明の火なり。

【三】閻浮檀金 (Jambūnada-silver)。閻浮樹間を流る

一川から産出する砂金。

【四】提多羅吒 (Dhṛtarāṣṭriya)。

治國天又は持國天といふ。

【五】乾闥婆 (Gandharva)。

尋香行、食香と譯し、八部衆

の一、雅樂を司る神。

【六】毘舍闍 (Piśācā)。

癡狂鬼、啖精鬼と言ふ。

【七】毘流離 (Virūdhaka)。

拘槃荼 (Kumbhāraṇḍa)。

冬瓜の梵名 Kusmāraḍa といひ

轉訛せる語とせらる。冬瓜鬼、

變形鬼、厭眉鬼の諸譯名あり

啖精鬼の一なり。

【九】薛荔多 (Viruddha?) 聖

本は「薛荔」に作る。

【一〇】毘流波又 (Virūpākā)。

雜語、惡眼等と譯し、廣目天

なり。

【一一】富多那 (Pitana)。

臭餼鬼といふ。

【一二】犍沙門 (Vajrasana) 或

は Vajravajra) 多門、普門と

譯し、多聞天なり。

【一三】夜叉 (Yakṣa)。

威德・暴

惡・勇健と譯し、捷疾鬼・祠祭

復次に、憍尸迦よ、菩薩摩訶薩は薩婆若に應ずる心もて、無明の縁もて諸行乃至老死の因縁は大苦衆集ありと觀ず。亦た無所得なるが故なり。無明滅するが故に諸行滅し、乃至生滅するが故に老死滅し、老死滅するが故に憂悲愁惱の大苦衆滅するを觀ず。無所得なるを以ての故なり。

復次に、憍尸迦よ、菩薩摩訶薩は薩婆若に應ずる心もて、四念處を修す。無所得なるを以ての故なり。乃至佛の十力、十八不共法を修す。無所得なるを以ての故なり。

復次は、憍尸迦よ、菩薩摩訶薩は薩婆若に應ずる心もて、檀波羅蜜を行す。無所得なるを以ての故なり。尸羅波羅蜜、凜提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜を行す。無所得なるを以ての故なり。

復次に、憍尸迦よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行す時、是の觀を作す、但だ諸法は諸法と共に相因縁し、潤益増長し分別校計す。是の中に我なく、我所なし。菩薩の廻向心は阿耨多羅三藐三菩提心の中に在らず、阿耨多羅三藐三菩提心は廻向心の中に在らず、廻向心は阿耨多羅三藐三菩提心の中に在らず。阿耨多羅三藐三菩提心は廻向心の中に於いて亦た不可得なり。菩薩は一切法を觀ずと雖も、亦た法として得べき無し。是を菩薩摩訶薩の般若波羅蜜と名く。

釋提桓因、大德須菩提に問ふ、「云何なれば菩薩の廻向心は阿耨多羅三藐三菩提の心中に在らざるか。云何なれば阿耨多羅三藐三菩提心は廻向心の中に在らざるか。云何なれば廻向心は阿耨多羅三藐三菩提心の中に不可得なるや。云何なれば阿耨多羅三藐三菩提心は廻向心の中に於いて不可得なるや」と。須菩提、釋提桓因に語りて言はく、「憍尸迦よ、廻向心、阿耨多羅三藐三菩提心は心に非ず、是れ心相に非ず、心相に非ざる中に廻向す可からず。是れ心相に非ず、常に心相に非ず、不可思議相なり、常に不可思議相なり、是を菩薩摩訶薩の般若波羅蜜と名く」と。爾の時、佛、須菩提を讚じて言はく、「善い哉、善い哉、須菩提よ。汝は諸の菩薩摩訶薩の爲に般若波羅蜜を説いて、諸の菩薩摩訶薩の心を安慰す」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、我れ應に恩を報ずべく、恩を報ぜざるべからず。過去の諸佛及び諸の弟子は諸の菩薩の爲に六波羅蜜を説いて示教し利喜す。世尊も、爾の時、亦た中に在つて學し、阿耨多羅三藐三菩提を得たまへり。我も今、亦た當に諸の菩薩の爲に六波羅蜜を説いて示教し利喜して、阿耨多羅三藐三菩提を得せしめん」と。

【論】問うて曰はく、初品の中に、佛、殊勝の光明を放ちたまひ、諸天、大に此の間に集ると（説けり）。何を以てか更に説くや。



## 卷の第五十四

## 第二十七 天主品

【經】

爾の時、三千大千世界の諸の四天王天は無數百千億の諸天と俱に來りて會中に在り。三千大千世界の諸の釋提桓因等の諸の忉利天、須夜魔王等の諸の夜摩天、刪兜率陀天王等の諸の兜率陀天、須涅蜜陀天王等の諸の妙化天、婆舍跋提天王等の諸の自在行天は、各無數百千億の諸天と俱に來りて會中に在り。三千大千世界の諸の梵天王、乃至首陀婆の諸天等、各無數百千億の諸天と俱に來りて會中に在り。是の諸の四天王乃至首陀婆の諸天、業報生身の光明は佛の常光に於いて百分、千分、萬億分の一にも及ぶこと能はず、乃至算數譬喩を以て比と爲す可からず。世尊の光明は最勝にして最妙、最上にして第一、諸天の業報の光明は佛常光の邊に在りては照ならず、現ぜず。譬へば魚炷を閻浮檀金に比するが如し。

爾の時、釋提桓因、大德須菩提に白さく、「是の三千大千世界の諸の四天王天、乃至、首陀婆の諸天は、一切和合して、須菩提の般若波羅蜜の義を説くを聽かんことを欲す。須菩提よ、菩薩摩訶薩は云何にして應に般若波羅蜜の中に住すべきや。何等か是れ菩薩摩訶薩の般若波羅蜜なるや。云何にして菩薩摩訶薩は應に般若波羅蜜を行すべきや」。須菩提、釋提桓因に語りて言はく、「憍尸迦よ、我れ今、當に佛意に承順し、佛の神力を承け、諸の菩薩摩訶薩の爲に般若波羅蜜を説き、菩薩摩訶薩の應に般若波羅蜜の中に住すべき所の如くすべし。諸の天子の、今未だ阿耨多羅三藐三菩提心を發さざる者は應當に發すべし。諸の天子、若し聲聞の正位に入れば、是の人は阿耨多羅三藐三菩提心を發すこと能はず。何となれば、生死と障隔を作すが故なり。是の人、若し阿耨多羅三藐三菩提心を發さば我も何た隨喜せん。何となれば、上人は應に更に上法を求むべく、我は終に其の功德を斷たざればなり。憍尸迦よ、何等か是れ般若波羅蜜なりや。菩薩摩訶薩は薩婆若に應ずる心もて、色の無常を念じ、色の苦を念じ、色の空を念じ、色の無我を念じ、色は病の如く(或は)疽、癰、瘡の如く、箭の身に入りて痛惱し、衰壞し憂畏して、安ぜざるが如しと念ず。(そは)無所得なるを以ての故なり。受想行識も亦た是の如し。眼・耳・鼻・舌・身・意・地種・水・火・風・空、識種は無常乃至憂畏不安を觀ず、是も亦た無所得なるが故なり。色の寂滅を觀し、不生・不滅・不垢・不淨を離る。受想行識も亦た是の如し。地種より乃至識種の寂滅を觀じ、不生・不滅・不垢・不淨を觀る、亦た無所得なるが故なり。

【一】元・明二本は「天王品」、  
宮本は「問佳品」に作る。

信樂せしめんと欲するが故なり。餘の地動の因縁は先に説くが如し。此の中に佛は自ら因縁を説きたまへり。所謂、我は般若波羅蜜を説き、十方の諸佛も亦た是の般若波羅蜜を説きたまへ、十二那由陀の天人は阿鞞跋致地を得て法位に入る。是の故に地動す。又た十方世界の衆生も等しく亦た無上道意を發す。是の故に地動す。爾の時、諸天も亦た種種の蓮華を散じ、及び種種の雜香、天衣、天蓋、千萬種の天の妓樂あり。諸の龍王等は四大海水の中より涌出し、及び諸の夜叉、羅刹等、皆な慈心を生じ、手を合せて佛を讚じたてまつれり。又た佛の笑みたまふ時、無量の光明、遍ねく十方如恒河沙等の世界を覆ひ、爾所等の希有の事あり。要を取りて之を言へば、地の動するは皆な諸法實相を説くに由る。所謂、般若波羅蜜〔の故〕なり。

や。

答へて曰く、菩薩は是の念心を離れず、衆生を捨てず、無所得を用つての故なり。無所得空と畢竟空とは名は異なるも而も義は一なり。不可得空は初に在つて、畢竟空は後に在り。畢竟空は大なるを以ての故に、悲を生ずることも亦た大なり。大悲とは阿差末經の中に説くが如く三種の悲あり。(即ち)衆生縁と法縁と無縁となり。無縁の悲は畢竟空より生ず。是を以て舍利弗の難する所を解く。佛は其の説を證するが故に讚じて言はく、「善い哉、若し般若波羅蜜を説くことを解せんと欲せば、當に汝の所説の如くなるべし」と。爾の時、衆中の天人、菩薩は是の念を作さく、「般若波羅蜜は甚深なり、三世の諸佛は皆な中より生じたまふ。須菩提は小乗の人なり。云何なれば佛は、般若波羅蜜を説かんと欲せば、當に汝が所説の如くなるべしと讚じたまふや」と。是の故に、次に言はく、「須菩提の所説は、皆な佛意を承く。正しくは彌勒等の諸の菩薩、梵天王等をして佛意を承けざらしむるすら、尙ほ問ふことを得ること能はず。何に況んや、須菩提は佛前に在りて自ら恣ほいに樂説せんや。諸の菩薩、般若波羅蜜を學せんと欲するも、亦た當に汝が所説の如く學すべし」と。是の品を説く時、三千大千世界の地は六種に振動すとは、是の時、會中に多くの菩薩ありて阿耨多羅三藐三菩提心を發たし、皆な當に作佛すべし、佛は是れ天地の大主なり、地神は歡喜して、「我が主、今生じたまふ」といふ。故に地をして大に動ぜしむ。

復次に、人、心に深般若波羅蜜を信する者は得難く希有なるが故に、是の人は福德の因縁を以て大風を感じ、以て水を動かし、水の動するが故に地も動す。

復次に、地下の大龍王は來りて、般若波羅蜜を聽かんと欲し、水より出づるが故に水動じ、水の動するが故に地も動す。

復次に、佛の神力の故に地をして動ぜしむ。般若波羅蜜は見難く知り難く、衆人を引導して、益

力あり。譬へば下藥を和合するに、巴豆はつは最も力あるが如し。般若波羅蜜も亦た是の如く、餘の波羅蜜と合して、而も諸の煩惱を破し、邪見を抜き、戲論を捨つと雖も、般若波羅蜜の力は最勝なり。是を以ての故に、皆な是れ般若波羅蜜の力なりと説く。

問うて曰く、種種に此の般若波羅蜜の微妙にして甚深なることを讃するも、誰か能く隨順して般若波羅蜜を行すべきや。

答へて曰はく、有菩薩は無量世に諸の福德を集め、利根にして諸の煩惱を折薄し、未だ阿鞞跋致地に到らずと雖も、般若波羅蜜を聞いて即時に信受し、深く入りて通達す。是の如きの相は、則ち能く般若波羅蜜の道を行す。所謂一切衆生を救度して、世間の憂惱を離れしめ、大悲心の故に一切衆生を離れず。菩薩は常に大悲及び畢竟空を離るべからず。畢竟空を念じて世間の諸の煩惱を破し涅槃を示し、而して大悲もて之を引いて還つて善法の中に入らしめ、以て衆生を利益す。爾の時、舍利弗、須菩提を難すらく、「若し菩薩は、是の大悲の念、及び畢竟空の念を離れずんば、一切衆生は皆な當に菩薩と作すべし。何となれば、是の畢竟空は無相にして分別する所なく、菩薩に有にして衆生に無なるべからず。若し有ならば、一切衆生は應に共に有なるべく、若し無ならば、菩薩も亦た應に無なるべし」と。須菩提は答ふらく、「汝は我を難せんと欲して、而も我が義を助成せり。何となれば、諸法の相は、畢竟空なるが故に、衆生も亦た空なり。衆生は空なるが故に、畢竟空の念も亦た空なり。若し諸法は、畢竟空ならば何ぞ衆生あらん、實に空なり。而も我を難じて言はく、「衆生は是の念を離れず、皆な當に菩薩と爲すべし」と。是の故に、衆生は所有なきが故に、畢竟空の念も亦た所有なし。衆生は無性、衆生は離、衆生は空、衆生は不可知なれば、畢竟空の念も亦た畢竟空なり。色乃至阿耨多羅三藐三菩提も亦た是の如しと説く」と。

問うて曰はく、此の中の念は、是れ大悲の念を離れず、何を以てか、畢竟空の念を離れずと説く

爾の時に、佛、須菩提を讚じて言はく、「善い哉、善い哉、是れ菩薩摩訶薩の般若波羅蜜なり。其の説く者有るも亦た當に是の如く説くべし。汝が説く所の如く、般若波羅蜜は、皆な是れ佛意を承くるが故に、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を學して、應に汝が説く所の如く學すべし」と。須菩提、是の般若波羅蜜品を説く時、三千大千世界は六種に震動し、東湧西没し、西湧東没し、南湧北没し、北湧南没し、中湧邊没し、邊湧中没せり。

爾の時、佛、微笑したまふ。須菩提、佛に白して言さく、「何の因、何の縁の故に微笑したまふや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「我れ此の世界に於て般若波羅蜜を説くが如く、東方の無量阿僧祇世界の諸佛も、亦た諸の菩薩摩訶薩の爲に般若波羅蜜を説きたまひ、南・西・北方、四維、上下も亦た是の般若波羅蜜を説く。是の般若波羅蜜品を説く時、十二那由他の諸の天人無生法忍を得、十方の諸佛、是の般若波羅蜜を説きたまふ時、無量阿僧祇の衆生も亦た阿耨多羅三藐三菩提心を發す。

【論】 論者の言はく、舍利弗は是の念を作さく、「須菩提の説く所は、六波羅蜜の世間と出世間と、及び菩提道とを分別して大に衆生を利益す」と。故に歡喜し、讚じて言はく、「善い哉、善い哉」と。再び之を言ふは喜の至れるなり。問ふ、「是れ何の波羅蜜の力なるや」と。須菩提、是の思惟を作さく、「一切の心數法の中に、智慧を除けば、能く是の如く分別し、疑を斷じて開導すること無し。諸の波羅蜜の中に、若し般若波羅蜜を離れては、自體を成就すること能はず。何に況んや、能く分別し開導せんや」と。是の如く、思惟し已りて、舍利弗に答ふ、「是れ般若波羅蜜の力なり」と。先に説くが如く、我なく、知者なく、見者なし。今、此を以て證知するに、是れ般若波羅蜜の力にして、佛の力に非ず、須菩提の力に非ず。何となれば、所謂般若波羅蜜は、斷常、有無の二邊等をば離るゝが故に、能く一切の善法、所謂三乗の法の定相堅牢不壞の相を生じ、又た般若波羅蜜は、無量無邊なるが故に、能く一切の善法を受くること、大海の能く衆川萬流を受くるが如し。三乗の善法とは所謂六波羅蜜、乃至十八不共法なり。十方三世の諸佛は般若波羅蜜を行するが故に、皆な阿耨多羅三藐三菩提を得たまへり。餘の波羅蜜を行すと雖も、般若波羅蜜は最も尊大にして、分別通達

し。六波羅蜜には世間と出世間とを雜ふるが故に遠く、三十七品、三解脱門等、乃至大慈大悲は畢竟清淨なるが故に近し。復次に、阿耨多羅三菩提の道は、初發意より乃ち金剛三昧に至るまでにして、其の中に菩提の爲にする苦行するも、皆な是れ菩提道なり。

【經】爾の時に、舍利弗は須菩提を讚じて言はく、「善い哉、善い哉、何等か波羅蜜の力なりや」と。須菩提の言はく、「是れ般若波羅蜜の力なり。何となれば、般若波羅蜜は能く一切諸の善法の、若くは聲聞法、辟支佛法、菩薩法、佛法を受く。舍利弗よ、過去の諸佛は般若波羅蜜を行じて阿耨多羅三藐三菩提を得たまひ、未來の諸佛も亦た般若波羅蜜を行じて當に阿耨多羅三藐三菩提を得たまふべし。舍利弗よ、今現在十方諸國界の中の諸佛も亦た是の般若波羅蜜を行じて、阿耨多羅三藐三菩提を得たまふ。舍利弗よ、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を説くを聞く時、疑はず難ぜずば、當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は菩提道を行ずるなり。菩薩道とは一切衆生を救ふが故に心に一切衆生を捨てず。所得なきを以ての故に菩薩は常に應に是の念、所謂大悲の念を離れざるべし」と。

舍利弗、復た問ふ、「菩薩摩訶薩をして、常に是の念、所謂大悲の念を離れざらしめんことを欲す。若し菩薩摩訶薩、常に大悲の念を離れずんば、一切衆生をして皆な當に菩薩と作らしむべし。何となれば、須菩提よ、一切衆生も亦た諸の念を離れざるが故なり」と。須菩提の言く、「善い哉、善い哉、舍利弗よ。汝は我を難ぜんと欲して而も我が義を成ぜり。何となれば、衆生は無なるが故に念も亦た無なり。衆生の性無なるが故に念も亦た性は無なり。衆生の法無なるが故に念も亦た法は無なり。衆生離なるが故に念も亦た離なり。衆生空なるが故に念も亦た空なり。衆生不可知なるが故に念も亦た不可知なり。舍利弗よ、色は無なるが故に念も亦た無なり。色の性は無なるが故に念も亦た性は無なり。色の法は無なるが故に念も亦た法は無なり。色は離なるが故に念も亦た離なり。色は空なるが故に念も亦た空なり。色は不可知なるが故に念も亦た不可知なり。受想行識も亦た是の如し。眠乃至意、色乃至法、地種乃至識種、檀波羅蜜乃至般若波羅蜜、內空乃至無法有法空、四念處乃至十八不共法、一切の三昧門、一切の陀羅尼門、一切智、一切種智乃至阿耨多羅三藐三菩提無なるが故に念も亦た無なり。乃至阿耨多羅三藐三菩提不可知なるが故に念も亦た不可知なり。舍利弗よ、菩薩摩訶薩は是の道を行じ、我は是の念、所謂大悲の念を離れざらしめんことを欲す」と。

若し菩薩は一切の三界の無常、空を知るが故に中に依止せず。爾の時、煩惱を折して能く菩薩道を淨らうす。是の故に須菩提は説けり、「菩薩は六波羅蜜を行じて、應に色乃至一切種智を淨らうすべし」と。問うて曰はく、色を淨らし、乃至一切種智を淨らうするは、即ち是れ菩薩道を淨らうするなり。何を以ての故に更に問ふや。

答へて曰はく、菩薩の能く色をして畢竟空ならしむる、是を清淨と名く。是の事は深妙にして、頗に得べからず。是の故に舍利弗は問へり、「新學の菩薩は、云何にして是の初の方便道を修するや」と。須菩提、答ふ、「若し菩薩は能く二種の波羅蜜を行す。六波羅蜜は是れ初めて菩薩道を開き、能く無所得空を用つて三十七品を行するは是れ佛道を開くなり」と。淨らうすとは名けて開くと爲す。道中の荆棘けいきよくを去るを名けて、道を開くと爲すが如し。何等か是れ二種の波羅蜜なる。即ち一には世間、二には出世間なり。世間とは、須菩提、自ら義を説く、所謂、食を須てるには食を與ふる等なり。是の義は初品の中に説くが如し。若し施す時は依止する所あり。譬へば老病の人の他の力を持つに依りて、能く行き、能く立つが如く、施者は實智慧を離れ、心力の薄少なるが故に依止す。依止すとは己身と財物と受者となり。是の法の中に相を取り、心著して憍慢等の諸の煩惱を生ずる、是を世間の不動、不出と名く。動とは柔順忍なり、出とは無生法忍なり。聲聞法の中の動とは學人にして、出とは無學人なり。餘の五波羅蜜も亦た是の如し。是を初めて菩薩道を開くと名く。

問うて曰はく、菩薩道は即ち是れ阿耨多羅三藐三菩提なり、何を以てか更に問ふや。

答へて曰はく、菩薩の時は道あるも、佛は已に到りて道を須ゐたまはず。是の道は、阿耨多羅三藐三菩提を得るが爲の故に、菩提道と名く。菩薩は、是の道を行するが故に、菩薩道と名く。此の中に佛は、遠道、所謂六波羅蜜の菩薩道、(及び)近道、所謂三十七品の菩提道を説きたまへり。六波羅蜜の中には、布施、持戒等を雜ゆるが故に遠く、三十七品は但だ禪定と智慧のみ有るが故に近

一、摩訶迦梅延は、修多羅を分別すること第一、富樓那は人に說法する中の第一なるが如し。今、舍利弗は何を以ての故に、須菩提は説法人の中に於て應に最第一なるべしと讚するや。

答へて曰はく、佛は佛眼を以て、一切衆生の利根と鈍根とを觀じ、一切法の總相と別相とを籌量し、其の所得の法に隨つて各第一を記したまふことに錯なし。富樓那は四衆の中に於いて、十二部經、種種の法門、種種の因縁、譬喩を用ひ、説いて能く衆生を利益すること第一なり。須菩提は常に無諍三昧を行じ、菩薩と事を同うし、巧に便ち一種の空相法門を樂説することを富樓那に勝れたり。譬へば巧師の多く能くする所あるも、能くする所多きが故に、普ねく精悉ならざるが如く、人ありて偏に一事を能くすれば、則ち必ず其の美を盡くすが如く、富樓那は多能なりと雖も、須菩提の常に樂んで空を行するが故に、能く巧に空を説くに如かず。是の故に舍利弗は須菩提の巧に空義を説くを聞きて便ち讚言すらく、「汝は説法人の中に於いて、應に第一と作すべし」と。舍利弗は須菩提の、問はるるに隨つて皆な能く答ふるを見るに、風の空中に行くが如く、罣礙する所なし。爾の時、須菩提は謙せず受けず。何となれば安立平實にして人相を好くするが故なり。人相を好くすとは自ら讚せず自ら毀らず、他に於いても亦た讚せず毀らざるなり。若し自ら身を讚せば、大人の相に非ず、人の爲に讚ぜられずして而も便ち自ら美とし、若し自ら毀るは是れ、な妓輪なの人なり、若し他を毀るは是れ讒賊の人なり、若し他を讚するは是れ諂媚の人なり。須菩提は無生の法を説くが故に、舍利弗は讚すと雖も而も諂に非ず。須菩提は舍利弗の實に讚ぜしを以ての故に謙ならず。又た法愛を斷するを以ての故に心に高ぶらず、亦た愛著せず。但だ無礙無障の因縁、所謂一切法は依止する所なく、依止する所なきが故に、無障無礙なりと答ふ。依止する所なき義は先に説くが如し。此の中に須菩提は自ら説けり、「内法は空なるが故に色は内に依止せず、外法は空なるが故に色は外に依止せず、中間は所有なきが故に色は中間に依止せず、色の如く、乃至一切種智も亦た是の如し」と。

【八】修多羅 *Sūtra* (梵) *Sutta* (巴) は線、條の義、契經、聖教と譯す。

【九】「妓輪」二字、別本は「妖諂」に作るも同義なり。



舍利弗、須菩提に問ふ、「云何なれば世間の檀波羅蜜なる、云何なれば出世間の檀波羅蜜なる」と。須菩提の言はく、「若し菩薩摩訶薩、施主と作りて能く沙門。婆羅門、貧窮乞人に施し、食を須つものには食を與へ、飲を須つものには飲を與へ、衣を須つものには衣を與へ、臥具、牀榻、房舍、香華、瓔珞、醫藥、種種の須つ所の養生の物、若くは妻子、國土、頭目、手足、支節、内外の物を盡く以て給施す。施す時に是の念を作さく、「我は與へ、彼は取る、我は慳貪ならず、我は施主と爲る、我は一切を捨つ、我は佛教に隨ひて施す、我は檀波羅蜜を行ず」と。是の施を作し已り、用て法を得し、一切衆生と之を共にし、阿耨多羅三藐三菩提に廻向して念して言はく、「是の布施の因縁は衆生をして今世の樂を得せしめ、後に當に涅槃に入ることを得せしむべし」と。是の人の布施に三礙あり。何等か三なる。我相と他相と施相となり。是の三相に著する布施は是を世間の檀波羅蜜と名く。何の因縁の故に世間と名くるや。世間の中に於いて動かず、出でず、是を世間の檀波羅蜜と名く。云何なれば出世間の檀波羅蜜と名くるや。所謂、三分清淨なり。何等か三なる。菩薩摩訶薩の布施の時、我は不可得なり、受者を見ず、施物は不可得にして亦た報をも望まず。是を菩薩摩訶薩の三分清淨の檀波羅蜜と名く。

復次に、舍利弗よ。菩薩摩訶薩は布施の時、一切衆生に與ふるに衆生も亦た不可得なり。此の布施を以て阿耨多羅三藐三菩提に廻向し。乃至微細の法相をも見ず。舍利弗よ、是を出世間の檀波羅蜜と名く。何を以ての故に名けて出世間と爲すや。世間の中に於いて能く動き能く出づ、是の故に出世間の檀波羅蜜と名く。尸羅波羅蜜の所依ある、是を世間の尸羅波羅蜜と爲し、所依なき、是を出世間の尸羅波羅蜜と爲す。餘は檀波羅蜜に説くが如し。鬻提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜の所依ある、是を世間と名け、所依なき是を出世間と名く。餘も亦た檀の中に説くが如し。是の如く、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は六波羅蜜を行ずる時、菩薩道を淨む」と。

舍利弗、須菩提に問ふ、「云何なるを菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提の道と爲すや」と。須菩提の言はく、「四念處は是を菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提の道と爲す。乃至八聖道分、空解脫門、無相解脫門、無作解脫門、內空乃至無法有法空、一切の三昧門、一切の陀羅尼門、佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、大慈大悲、舍利弗よ是を名けて菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提の道と爲す」と。

【論】問うて曰はく、五百の阿羅漢あり、佛は各其の第一なるものを説きたまへり。舍利弗は智慧

第一、目捷連は神足第一、摩訶迦葉は頭陀を行する中の第一、須菩提は無諍三昧を得ること第

【四】 五百の阿羅漢。五百羅漢、五百比丘、五百上首といひ、阿羅漢果（三界の見、思、二惑を斷盡せる位）を證得し、他の尊敬、供養を受くる資格を得たる五百の佛弟子。

【五】 神足とは神足通、神境通、具には神境智證通といひ、五通の一。境界或は己身の變現自在なる不可思議力なり。

【六】 頭陀 Dhāta (杖) とは煩惱の塵垢を去り衣食住に貪著せずして佛道を修すること、十二種行あり、十二頭陀行といふ。

【七】 無諍三昧とは空理に安住して他との諍なき禪定。

の心に無生の法を愛樂することを知るが故に、須菩提に語るらく、「汝は實に愛樂して無生法を説くや」と。須菩提は即ち其の間を受けて心に亦た愧づること無し。何となれば、是の論議は破す可からず、過罪あること無ければなり。何を以てか之を知る。須菩提は自ら説く、「法として合すべきもの無く、法として散すべきもの無く、無色、無形、空、一相、所謂無相なり」と。空相すら尙ほ受けず、何に沉んや餘相をや。舍利弗、重ねて讚すらく、「汝が樂んで説く無生の法及び語言は、皆な無生にして、是れ實に清淨なり。若し當に樂説及び語言は無生に非ず、但だ外物の無生を説かば、則ち清淨に非ず」と。須菩提は即ち復た其の讚を受け、舍利弗に答ふらく、「但だ樂説と語言とのみ、是れ無生なるに非ず。色乃至一切種智も皆な亦た生ずる所なし」と。

【經】爾の時に、舍利弗、須菩提に語るらく、「須菩提は説法人の中に於て、應に最も上に在るべし。何を以ての故に、須菩提は問ふ所に隨つて皆な能く答ふればなり」と。

須菩提の言はく、「諸法は所依なきが故なり」と。舍利弗、須菩提に語るらく、「云何なれば諸法は所依なきや」と。須菩提の言はく、「色の性は常に空にして、内に依らず外に依らず兩の中間に依らず。受想行識の性は常に空にして内に依らず外に依らず兩の中間に依らず。眠耳鼻舌身意の性は常に空にして、内に依らず外に依らず兩の中間に依らず。檀波羅蜜の性は常に空、乃至般若波羅蜜の性は常に空なり。内に依らず外に依らず兩の中間に依らず。内空の性は常に空、乃至無法有法空の性は常に空にして、内に依らず外に依らず。舍利弗よ、四念處の性は常に空、乃至一切種智の性は常に空にして、内に依らず外に依らず兩の中間に依らず。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、一切諸法は所依なし。性は常に空なるが故なり。是の如く、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は六波羅蜜を行ずる時、應に色受想行識を淨むべし、乃至應に一切種智を淨むべし」と。

舍利弗、須菩提に問ふ、「菩薩摩訶薩は云何なれば六波羅蜜を行ずる時、菩薩道を淨むるや」と。須菩提の言はく、「世間の檀波羅蜜あり、出世間の檀波羅蜜あり。尸羅波羅蜜、鬘提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜にも世間あり、出世間あり」と。

中には、衆生なきが故に、須陀洹乃至佛無く、法空なるが故に須陀洹果、乃至佛道無し。聖人、聖法すら猶尚ほ虚誑にして定實なし、何に況んや、凡人、六道の業、及び果報をや。

問うて曰く、須菩提は已に種種の因縁もて、定んで不生法を説けり。今、舍利弗は何を以ての故に更に不生法の生、生法の生を問へるや。

答へて曰く、須菩提は上に得道の因縁を説くが故に、舍利弗は須菩提の意を得、不生の法を説いて、一切法を破すと雖も、因縁の爲の故に説いて、而も心は無生の法に著せず。是の故に更に問へり。又た此の法は甚深なるを以て聽く者をして了了に解することを得せしめんと欲するが故に更に問へり。上には得道の行法を問ひ、今は總じて一切法は云何にして生するやを問ふ。慧眼を用つて一切法は皆な不生なりと知れども、今、現見の諸法生ず。是の故に、云何にして生するやと問ふ。

須菩提の答ふらく、二事は皆な非なり。若し生の生ならば、生法は已に生じ、應に更に生すべからず。若し不生の生ならば、生法は未だ有らざるが故に、生すべからず。若し生する時、半ば生じ、半ば不生なりと謂はば、是も亦た生ぜず。若し生の分なれば、則ち已に生じ竟り、若し未生の分なれば、則ち生すること無きが故なり。是れ須菩提は是の肉眼を用ひて見ず、通達せざるを以ての故に、二法皆な受けず。但だ是の生は、幻の如く夢の如く虚誑法より生ず。應に離すべく、應に相を取らざるべしと説く。舍利弗の問ふ、「何等の法か二にして俱に受けざるや」と。須菩提は世諦を以ての故に説けり、「色乃至一切種智は、畢竟不生にして、自然に空相なり」と。實の中に生あらしむることを欲せず。若し生諦は虚誑にして生あるべくんば、生は幻化の如し。此の中に不生の因縁を説く。所調、合せず散せざるなり。有人の言はく、「生と法とは異なり。謂はく、生は是れ常にして、生すべき所の法は無常なり」と。是の故に更に問はば、答ふる者は、生法の不異を以てす。若し生法を説けば、已に生相を説くなり。生、不生は、上に説くが如し。舍利弗は須菩提の所説を聞き、須菩提

生法及び無生相を説くや」と。須菩提、舍利弗に語るらく、「我は樂んで無生法を説き、亦た樂んで無生相を説く。何となれば、諸の無生法及び無生相の樂説及び語言、是の一切法は皆な合せず、散ぜず、無色、無形、無對、一相、所謂無相なればなり」と。舍利弗、須菩提に語るらく、「汝は樂んで無生法を説き、亦た樂んで無生相を説く。是の樂説と語言とも亦た不生なり」と。須菩提の言はく、「是の如し、是の如し。舍利弗よ。何となれば、舍利弗よ、色は不生なり、受想行識は不生なり。眼は不生なり、乃至意も不生なり。地種は不生なり、乃至識種も不生なり、意行は不生なり、口行も不生なり、身行も不生なり。檀波羅蜜は不生なり、乃至一切種智も不生なり。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、我は樂んで無生法を説き、亦た樂んで無生法を説く。是の樂説の語言も亦た不生なり」と。

【論】「論」者の言はく、爾の時に舍利弗は須菩提の樂説に難なきことを知り、而も問うて言はく、「若し一切の法、無相ならば、此の無生の相を云何にして證せん。是れ生法を用つて證を得るや。不生法を用つて證を得ると爲すや。若し生法を用つて證を得ば、生法は虚誑なり。汝は已に種種の因縁もて破せり。又た生法を以て生法を脱することを得べからず。若し無生の法を以て證することを得ば、無生は未だ法相あらず、以て證す可からず。云何ぞ證を得ん」と。須菩提は二法皆な受けず、(そは)俱に過あるが故なり。先に説くが如し。舍利弗、是の念を作さく、「佛の經に、二法は一切法の、若くは有爲、若くは無爲を攝す。生は有爲、無生は無爲なりと説く。今、須菩提は此の二法を離る、云何ぞ當に得道の事を説くべけん」と。是の念を作し已りて須菩提に問ふ、「得道の事あること無しや」と。菩須提は是れ大阿羅漢にして、無諍三昧を行すること第一なり。但だ菩薩の爲の故に是の無生を説く。汝は云何ぞ當に邪見を作して、得道の者なしと説くべけん。是の故に、知あり、得ありと言ふ。知と得とは、即ち是れ得道の果の別名なり。須菩提は恐らくは前語に違ふが故に、二法を以てせずと言ふが故に、但だ世俗の爲の故に、須陀洹乃至佛有りと説けり。何となれば、一切の諸法は我相なし。今、我を用つて、須陀洹乃至佛を分別するは、是れ世俗の法なり。

復次に、未だ法空を得ざるが故に、是れ善、是れ不善、是れ有爲、是れ無爲等と言ふ。第一義の

此の大悲心及び諸法空の二因縁を以ての故に、能く内外の所有を惜まらずして衆生を利益し、難行の想、苦行の想を起さずして、一心に精進し歡喜す。人の自身の爲め、及び父母妻子の爲に、身を勤めて修行すれば以て苦と爲さず、若し他の爲に作せば則ち歡心なきが如し。苦行、難行は、後品の本生の因縁もて變化し、現に畜生の形を受くといふ中に説くが如し。一切諸法は、畢竟空、不可思議相の故に、一切法は還つて而も轉ぜざるが故に名けて轉ずと爲さず。但だ虛妄顛倒を破するが爲の故に、名けて法輪を轉ずと爲す。

【經】舍利弗、須菩提に語るらく、「今、生法を以て道を得せしめんと欲するや、無生法を以て道を得せしめんと欲するや」と。須菩提、舍利弗に語るらく、「我は生法を以て道を得せしめんと欲せず」と。舍利弗の言はく、「今、須菩提よ、無生法を以て道を得せしめんと欲するや」と。舍利弗の言はく、「須菩提の所説の如くんば、短なく得なし」と。須菩提の言はく、「知あり得あり。二法を以てせず、世間の名字を以ての故に、知あり得あり。世間の名字の故に、須陀洹、乃至阿羅漢、辟支佛、諸佛有り。第一實義の中には、知なく得なく須陀洹なく乃至諸佛なし」と。「須菩提よ、如し世間の名字の故に知あり得あらば、六道別異は亦た世間の名字の故に有り。第一實義を以て(の故)に非ざるなり」と。須菩提の言はく、「是の如し、是の如し。舍利弗よ、世間の名字の故に、知あるが如く、得あるが如く、六道別異も、亦た世間の名字の故に有り、第一實義を以て(の故)に非ざるなり。何となれば、舍利弗よ、第一實義の中には業なく報なく、生なく滅なく、淨なく垢なければなり」と。舍利弗、須菩提に語るらく、「不生法を生ずるや、生法を生ずるや」と。須菩提の言はく、「我は不生法をして、生ぜしむることを欲せず。亦た生法をして生ぜしむることを欲せず」と。舍利弗の言はく、「何等か不生法をして、生ぜしむることを欲せざるや」と。須菩提の言はく、「色は是れ不生法にして、自性空なれば生ぜしむることを欲せず。受想行識は不生法にして自性空なれば、生ぜしむることを欲せず。乃至阿耨多羅三藐三菩提は不生法にして自性空なれば、生ぜしむることを欲せざるなり」と。舍利弗、須菩提に語るらく、「生より生ずるや、不生より生ずるや」と。須菩提の言はく、「生より生ずるに非ず、亦た不生より生ずるに非ず。何となれば、舍利弗よ、生と不生と、是の二法は合せず散ぜず、無色、無形、無對、一相、所謂無相なればなり。舍利弗よ、是の因縁を以ての故に、生より生ずるに非ず、亦た不生より生ずるに非ず」と。爾の時、舍利弗、須菩提に語るらく、「須菩提よ、樂んで無

に入るを異りと爲す。菩薩道には種種の衆行ありと雖も、但だ難行、苦行は希有の事と爲し、衆生は見已りて歡喜して言はく、「菩薩は我等の爲に此の行を爲す」と。餘行は深妙なりと雖も、人の知らざる所にして、物を感じる能はざるが故に説かず。

復次に、舍利弗の難意の如く、若し諸法は都て是れ無生にして空寂ならば、一切衆生は皆な樂に著せん。菩薩のみ、何を以ての故に、獨り苦行を受けん。

復次に、諸佛は常に遠離、寂滅を樂ひ、法愛を斷じ、決定して諸法を知り、轉ぜず、還らず。何を以ての故に、衆生の與に法輪を轉じたまふや。須菩提は、佛前に於いて、無生法を説き、佛は呵折したまはず、快心にして樂説することを得。無難の力の故なり。答ふらく、舍利弗よ、我は亦た都て無生法の中に、六種の聖人あらしむることを欲せずと。菩薩を除くが故に六と言ふ、及び六道は別異なり。何となれば、無生法の證を得るを以ての故に、謂つて聖法と爲せばなり。聖人には差別あるも、無生法の中には、都て所有なし。

復次に、無生法の中には、二種の失あり。(即ち龜なる失とは、殺盜等の罪の故に三惡道あり。細なる失とは、心に布施、持戒等の福に著するを用ふるが故に三善道あり。若し菩薩は難心、苦心を生ずれば、則ち一切衆生を度すること能はず。世間の小事の心に難かり、以て苦と爲すが如きすら猶ほ成ぜず、何に況んや、佛道を成ずるをや。成ずるの因縁は、所謂大慈大悲心なり。衆生に於いて父母、兒子、己身の想の如し。何となれば、父母、兒子、己身は自然に愛を生じ、推して愛するに非ざればなり。菩薩は善く大悲心を修するが故に、一切衆生、乃至怨讎に於いて同意に愛念し、是の大悲の果報、利益の具、都て惜み持する所なく、内外に有する所、盡く衆生に與ふ。此の中には不惜の因縁を説く。所謂一切處一切種、一切法は不可得なるが故に、若し行者は初めて佛法に入り、衆生空を用つて、諸法の無我なることを知り、今、法空を用つて諸法も亦た空なることを知り、

煩惱の氣ありと雖も、道場に坐する時は、乃ち盡きて妨ぐる所なきが故に、畢竟清淨なり。

復次に、畢竟清淨なりとは、柔順道に於いて畢竟清淨なるなり。佛道の爲にあらず、衆生空、法空を以ての故なり。色を見るに無生にして畢竟清淨なり。乃至佛及び佛法は無生にして畢竟清淨なり。

須菩提は種種の因縁もて、諸法の相の決定して無生なることを説く。此の事に因りて、舍利弗は是の難を作さく、「賢聖の中にて、最小なる者は、須陀洹、須陀洹法にして、最大なる者は佛、佛法なり。若し爾らば聖人なること無く、小なること無し。聖法も亦た優劣なく、亦た六道の別異なけん」と。此は略して難す。後に、三結を斷じて、道を修する者を問ふは、廣く難を爲すなり。

問うて曰はく、云何なれば是れ五種の菩提なるや。

答へて曰はく、一には柔順忍、二には無生忍、及び三種の菩提なり。三菩提の中に於いては、二を過ぎて而して第三の菩提に住す。復た五種の菩提あり一には發心菩提と名け、無量の生死の中に於いて發心し、阿耨多羅三藐三菩提の爲にするが故に、名けて菩提と爲す。此れ因中に果を説くなり。二には伏心菩提と名け、諸の煩惱を折〔伏〕し、其の心を降伏し、諸の波羅蜜を行す。三には明〔心〕菩提と名け、三世の諸法の本末、總相、別相を觀じ、分別籌量して、諸法實相、畢竟清淨、所謂般若波羅蜜の相を得。四には出到菩提と名け、般若波羅蜜の中に於いて、方便力を得るが故に、亦た般若波羅蜜に著せず。一切の煩惱を滅し、一切十方の諸佛を見たまつり、無生法忍を得、三界を出でて薩婆若に到る。五には無上菩提と名け、道場に坐し、煩惱の習を斷じて阿耨多羅三藐三菩提を得。是の如き等は五菩提の義なり。餘の諸の賢聖の結を斷ずる義は先に説くが如し。

問うて曰く、聲聞道には廣く結を斷ずる義を説く。何を以てか辟支佛に行あり、菩薩に種種の行あるを説かざるや。

答へて曰はく、辟支佛は聲聞に於いて復た異道なく、但だ福德利根にして、小しく深く諸法實相

那合、阿那含果、阿羅漢、阿羅漢果、辟支佛、辟支佛道を得べからず、菩薩摩訶薩の一切種智を得べからず、亦た六道の別異も無く、亦た菩薩摩訶薩の五種の菩提を得ず。須菩提よ、若し一切法は不生の相ならば、何を以ての故に、須陀洹は三結を斷ぜんが爲の故に道を修し、斯陀含は婬、恚、癡を薄くせんが爲の故に道を修し、阿那含は五下分の結を斷ぜんが爲の故に道を修し、阿羅漢は五上分の結を斷ぜんが爲の故に道を修し、辟支佛は辟支佛法の爲の故に道を修するや。何を以ての故に、菩薩摩訶薩は難行を作し、衆生の爲に種種の苦を受くるや。何を以ての故に、佛は阿耨多羅三藐三菩提を得たまふや。何を以ての故に、佛は法輪を轉じたまふや」と。

須菩提、舍利弗に語るらく、「我は無生法をして、所得あらしめんを欲せず、我は亦た無生法の中に須陀洹須陀洹果を得せしめんことを欲せず、乃至無生法中に阿羅漢、阿羅漢果、辟支佛、辟支佛道を得せしめんことを欲せず。我は亦た無生法中に菩薩をして難行を作し、衆生の爲に種種の苦を受けしめんことを欲せず。菩薩も亦た難行の心を以て道を行ぜず。何となれば、舍利弗よ、難心、苦心を生ずれば無量阿僧祇の衆生を利益すること能はざればなり。舍利弗よ、今、菩薩は衆生を憐愍し、衆生に於いて、父母兄弟の想の如く、兒子及び己身の想の如し。是の如くなれば能く無量阿僧祇の衆生を利益す、是れ無所得なるを用つての故なり。所以何となれば、菩薩摩訶薩は應に是の如き心を生ずべし、「我は一切處、一切種に不可得なるが如く、内外法も亦た是の如し」と。若し是の如き想を生ずれば則ち難心、苦心なし。何となれば、是の菩薩は一切種、一切處、一切法に於いて受けざるが故なり。舍利弗よ、我は亦た無生法の中に、佛をして阿耨多羅三藐三菩提を得せしめたまつらんことを欲せず。亦た無生の中に法輪を轉せしめたまつらんことを欲せず。亦た無生法を以て道を得せしめんことを欲せず」と。

【論】〔論〕者の言はく、無生觀に二種あり、(即ち)一には柔順忍觀、二には無生忍觀なり。前に無生は是れ柔順忍觀にして畢竟淨ならず、漸く柔順觀を習ひ、無生忍を得れば、即ち畢竟淨なりと説けり。

問うて曰はく、菩薩は未だ結を盡さず、未だ佛道を得ず、智慧未だ淳淨ならず、云何なれば畢竟清淨なりと言ふや。

答へて曰はく、是の菩薩は無生忍を得る時、諸の煩惱を滅し、菩薩の道を得、菩薩の位に入り、



行者は先に無生の觀門に入り、後に不二に入る。又は先に不二に入り、後に無生に入る。觀の義は一なりと雖も、行者は分別して、色の二なるを破するが故に不二と言ふ。色の生を破するが故に無生と言ふ。上に無生の因縁を説いて、自相空なりと謂へり。今は不二の因縁を説く。所謂、合せず散せず、一相にして所謂、無相なり等と。義は同じく一の空なりと雖も、上は自相空、此は是れ散空なり。

「色は無二の法數に入る」とは、行者は色の不生不滅の相を觀じ、是の時、色を分別し、今變じて無生と爲す。是の故に、色は無生にして即ち是れ不二なりと説く。何となれば、色を破散すれば、即ち是れ無生なればなり。先に諸法を分別する時、色を離れて、更に生あることを得ざるが如く、今、色を破散すれば、即ち是れ無生にして、更に無生あることを得ず。是を以ての故に、色は即ち是れ無二の法數に入る。是の二阿羅漢は、佛の前に於て、共に論じ竟れり。須菩提が更に是の義を説くは、佛に證知をなさしめんと欲せるが故なり。

【經】爾の時、須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じて是の如く諸法を觀ず。是の時色を見るに無生なり、畢竟淨なるが故なり。受想行識を見るに無生なり、畢竟淨なるが故なり。我を見るに無生なり、乃至知者見者も無生なり、畢竟淨なるが故なり。檀波羅蜜を見るに無生なり、乃至般若波羅蜜も無生なり、畢竟淨なるが故なり、内空を見るに無生なり、乃至無法有法空も無生なり、畢竟淨なるが故なり。四念處を見るに無生なり、乃至十八不共法も無生なり、畢竟淨なるが故なり。一切の三昧、一切の陀羅尼を見るに無生なり、畢竟淨なればなり。乃至一切種智を見るに無生なり、畢竟淨なるが故なり。凡人、凡人の法を見るに無生なり、畢竟淨なるが故なり。須陀洹、須陀洹法、斯陀含、斯陀含法、阿那含、阿那含法、阿羅漢、阿羅漢法、辟支佛、辟支佛法、菩薩、菩薩法、佛、佛法を見るに無生なり。畢竟淨なるが故なり」と、

舍利弗、須菩提に語るらく、「我れ須菩提所説の義を聞くが如くんば、「色は是れ不生なり、受想行識は、是れ不生なり、乃至佛、佛法も是れ不生なり」と。若し爾らば須陀洹、須陀洹果、斯陀含、斯陀含果、阿

乃至一切種智も不二にして是れ一切種智に非ざるなり。舍利弗、須菩提に問ふ、「何の因縁の故に、是の色は無二の法數に入り、受想行識は無二の法數に入り、乃至、一切種智も無二の法數に入ると言ふや」。

須菩提、答へて曰はく、色は無生に異ならず、無生は色に異ならず、色は即ち是れ無生、無生は即ち是れ色なり。受想行識は無生に異ならず、無生は識に異ならず。識は即ち是れ無生、無生は即ち是れ識なり。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、色は無二の法數に入り、受想行識は無二の法數に入り、乃至一切種智も、亦た是の如し」と。

【論】問うて曰く、上品の竟そわらに便ち應に不生を問ふべし。何を以てか此の中に方まに問へるや。

答へて曰く、三種の大法は解し易く、多くの衆生を利益するが故に、先づ何の因縁の故に、色は不生にして、色に非すと爲し、乃至一切種智は、不生にして、一切種智に非すと爲すやと問ふに、須菩提は答ふらく、「色は是れ空にして、色の中に色相なし」と。行者は是の無生の智慧を以て、色をして無生ならしむ。若し能く是の無生を得れば、心には念を作さく、「今、即ち色の實相を得たり」と。是の故に「色は無生にして色に非すと爲す」と言へり。色性は常に自ら無生なり。今、智慧力の故に無生ならしむるに非ず。人あり、色を破して空ならしむるも、猶ほ本の色想を存するが如し。譬へば、廁を除きて舍を作るに、今廁なしと雖も、猶ほ不淨の想あるが如し。若し能く廁は本より無にして幻化の所作なりと知れば、則ち廁の想なきが如し。行者も是の如く、若し能く色は本より已來こゝかた、初め自ら無生なりと知らば、則ち復た色想を存せず。是の故に、色は無生にして色に非すと爲す、乃至一切種智も亦た是の如しと言ふ。

問うて曰はく、汝は先に自ら「無生は即ち是れ無二なり」と説けり。今何を以てか更に問ふや。

答へて曰はく、義は一なりと雖も、入る所の觀門異れり。上には、因中に先に果あり、若くは果なし、是の生法は一異等なり、是の生は若くは初に生じ、若くは後に生ずといふを破し、是の如き等の生を破するを無生と名くと言ひ、今は眼色の有無等の諸の二を破するが故に、是を不二と名く。

一切の別相の法中に、皆な遠離することを得。色の中に色を離るるが如し。色を離るれば、即ち是れ自相空なり。

「遠離」とは、是れ空の別名なり。菩薩は般若波羅蜜を得、一切の法に於いて、心皆な遠離す。所以何となれば、一切諸法の過罪を見るが故なり。阿羅蜜は秦に遠離と言ひ、波羅蜜は秦に到彼岸と言ふ。此の二は音相近く、義相會するが故に、阿羅蜜を以て波羅蜜を釋す。何等の法をか遠離する。所謂、衆・界・入、乃至一切智、是の諸法を遠離するを以ての故に、般若波羅蜜と名く。禪波羅蜜の如きは、能く人心を調伏し、般若波羅蜜は能く人をして諸法を遠離せしむ。

「觀」とは、諸法の常、無常等を觀ぜざること、先に説くが如し。

【經】舍利弗、須菩提に問ふ、「何の因縁の故に、色は不生にして是れ色に非ざる、受想行識は不生にして是れ識に非ざる、乃至一切種智は不生にして是れ一切種智に非ざるや」と。須菩提の言はく、「色の色たる相は空なれば、色空の中には色なく生なし。是の因縁を以ての故に、色は不生にして是れ色に非ず。受相行識の識たる相は空なれば、識空の中には識なく生なし。是の因縁を以ての故に、受想行識は不生にして是れ受想行識に非ず。舍利弗よ、檀波羅蜜の檀波羅蜜たる相は空にして、檀波羅蜜空の中には檀波羅蜜なく生なし。尸羅波羅蜜、瞿提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜の般若波羅蜜たる相は空にして、般若波羅蜜空の中には般若波羅蜜なく生なし。

是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、般若波羅蜜は不生にして是れ般若波羅蜜に非ず。内空乃至無法有法空四念處乃至十八不共法、一切種智も亦た是の如し。是の因縁を以ての故に、内空は不生にして是れ内空に非ず。乃至一切種智も、不生にして、是れ一切種智に非ざるなり。

舍利弗、須菩提に問ふ、「汝は何の因縁の故に、色は不二にして是れ色に非ず、受想行識は不二にして是れ識に非ず、乃至一切種智は不二にして是れ一切種智に非ずと言ふや」と。須菩提、答へて曰く、「所有る色は所有る不二なり。所有る受想行識は所有る不二なり。是れ一切法は皆な合せず散ぜず、無色、無形、無對、一相、所謂無相なり。眼、乃至一切種智も亦た是の如し。

是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、色は不二にして是れ色に非ず、受想行識は不二にして是れ識に非ず。

【三】「阿羅蜜」 Arhita

答へて曰はく、先に已に大樹の喩もて、一斫して斷すべきに非ざることを答へたるも、是の事は難きが故に更に問ふなり。

復次に、是の般若波羅蜜には無量の義あり。曇無竭品の中に説くが如し。「般若波羅蜜は、大海の水の無量なるが如く、須彌山の種種に嚴飾せるが如し」と。是の故に問ふ。又た此の問は同じと雖も、答の義は種種に異なれり。

復次に、諸佛は法愛を斷じ、經書を立てず、亦た言語を莊嚴せず、但だ衆生を拯濟せんが爲に、應に度すべき者に隨つて説きたまへり。大清涼の美池には無量の衆生、前後より來りて飲み、おのおの飽いて而も去るが如し。聽く者も亦た是の如く、佛は先に菩薩、般若波羅蜜、及び觀を説きたまふに、前に來る者は解悟を得る有りて而して去り、後に來る者は未だ聞かず。是の故に重ねて問ふなり。

菩薩とは、先づ菩提に三種あり、阿羅漢の菩提、辟支佛の菩提、佛の菩提なり。無學は智慧清淨にして無垢なるが故に名けて菩提と爲す。菩薩は大智慧ありと雖も、諸の煩惱の習未だ盡きざるが故に菩提と名けず。此の中には但だ一種のみを説く。所謂佛の菩提なり。薩埵は秦に衆生と言ふ。是の衆生は無上道の爲の故に發心し修行するなり。

復次に、薩埵を大心と名く。是の人は大心を發し、無上菩提を求めて、而も未だ得ず。是を以ての故に、名けて菩提薩埵と爲す。佛は已に是の菩提を得たまへば名けて菩提薩埵と爲さず。大心を満足したまふが故なり。菩薩の餘の義は、先に廣く説くが如し。

復次に、佛は此の中に自ら因縁を説きたまはく、「是の人は佛道の爲の故に修行し、一切諸法の相を知るも亦た著せず」と。諸法の相とは、以て諸法の門は是れ色、是れ聲なり等と知るべし。略して菩薩の義を説き、先づ諸法の各各の相、地の堅相の如きを知り、然る後に畢竟空相を知る。是の二種の智慧の中に於いても亦た著せず、但だ衆生を度せん<sup>と</sup>と欲するが故に、菩薩は是の如き智慧を得。

【二】「菩薩とは」、別本は「菩提とは」に作る。

## 卷の第五十二

## 第二十六無生品

【經】

爾の時に、慧命舍利弗、須菩提に語るらく、「菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ諸法を觀ず。何等か是れ菩薩、何等か是れ般若波羅蜜、何等か是れ觀なるや」と。須菩提、舍利弗に語るらく、「汝の問ふ所の、何等か是れ菩薩なるやとは、阿耨多羅三藐三菩提の爲に、是の人は大心を發す。是を以ての故に名けて菩薩と爲す。亦た一切法、一切種相を知り、是の中にも亦た著せず、色相を知りて著せず、乃至、十八不共法を知りて亦た著せず」と。舍利弗、須菩提に問ふ、「何等をか一切法相と爲す」と。須菩提の言はく、「若し名字の因縁和合等を以て、是は色、是は聲・香・味・觸・法、是は内、是は外、是は有爲法、是は無爲法なりと知り、是の名字の相と語言とを以て諸況の相を知る、是を諸法の相を知ると名く。舍利弗の問ふ所の如く、「何等か是れ般若波羅蜜なる」とは、「遠離の故に般若波羅蜜と名く」。何等の法をか遠離する」とは、「衆界入を遠離し、檀波羅蜜乃至禪波羅蜜を遠離し、內空乃至無法有法空を遠離す。是を以ての故に、遠離を般若波羅蜜と名く。

復次に、四念處を遠離し、乃至十八不共法を遠離し、一切智を遠離す。是の因縁を以ての故に、遠離を般若波羅蜜と名く。舍利弗の問ふ所の如く、「何等か是れ觀なるや」とは、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時、色は常に非ず、無常に非ず、樂に非ず、苦に非ず、我に非ず、無我に非ず、空に非ず、不空に非ず、相に非ず、無相に非ず、作に非ず、無作に非ず、寂滅に非ず、不寂滅に非ず、離に非ず、不離に非ず。受想行識も亦た是の如しと觀じ、檀波羅蜜乃至般若波羅蜜、內空乃至無法有法空、四念處乃至十八不共法、一切三昧門、一切陀羅尼門、乃至一切種智は常に非ず、無常に非ず、樂に非ず、苦に非ず、我に非ず、無我に非ず、空に非ず、不空に非ず、相に非ず、無相に非ず、作に非ず、無作に非ず、寂滅に非ず、不寂滅に非ず、離に非ず、不離に非ずと觀ず。舍利弗よ、是を菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、諸法を觀ずと名く。

【論】問うて曰はく、所謂、菩薩の義、般若波羅蜜多の義、諸の觀の義は上に已に問へり、今何を以てか更に問ふや。

【一】宋元明三本は「無生三觀品」と作り、而して明本は「經は無生品に作る」の原文五字の夾註を附す。

ざるが如し。「著せず」とは、五衆に若し一罪あるすら猶ほ著すべからず。何に況んや、身には飢渴・寒熱・老病死等あり、心には憂愁・恐怖・妬嫉・瞋恚等ありて、後世には三惡道に墮し、一切の無常・苦・空・無我に自在なることを得ず。是の如き等の無量無邊の過罪あり、云何ぞ著す可けんや。「是れ色と言はず」とは、邪見を以て、色の若くは常、若くは無常なり等と説かず。五衆は是の如き常相なり。乃至一切種智も亦た是の如しと言はず。何となれば、色の中には五種の正行を行すればなり。是の五衆は皆な生相なく、相は皆な一相なり。一相は則ち無相なり。若し無相なれば、則ち五衆あるに非ず。乃至一切種智も亦た是の如し。若し一切法に生相なければ、般若波羅蜜と不二不別なり。是の無生の心を得れば、即ち是れ般若波羅蜜なり。般若波羅蜜を得れば、即ち諸法の不生不滅なるを知る。是を以ての故に、般若波羅蜜は即ち是れ不生と不二不別なり。

復次に、須菩提は自ら因縁を説けり。所謂、是の無生の法は一相ならず、二相ならず、三(相)ならず、異ならず。何となれば、諸法は無生にして一相なるが故なり。乃至一切種智も亦た是の如く、如の無生無滅なるも、亦た是の如し。

問うて曰はく、末後に何を以ての故に、色乃至一切種智は、無二の法數に入ると説くや。

答へて曰はく、菩薩は、若し未だ色を破せざれば、則ち愛等の結使を生じ、是の色等に著す。色を破し已れば、則ち邪見を生じ、是の色空等に著す。今色等は空の智慧を用ふるが故に、皆な空にして不二の相なり。是の諸法は虚誑不實にして、内外入れて、攝する所なるが故に、名けて二と爲す。色等、乃至一切種智も、是の二を離るれば、不二と名く。今、須菩提は、衆生を憐愍し、諸の菩薩を利益するが故に、是の諸法の不二を説きて、無二の法數の中に入るなり。

身意は不生にして是れ意に非ず、檀波羅蜜は不生にして是れ檀波羅蜜に非ず乃至般若波羅蜜は不生にして是れ般若波羅蜜に非ざればなり。何となれば、色と不生とは不二不別なり、乃至般若波羅蜜と不生とは不二不別なればなり。内空は不生にして是れ内空に非ず、乃至無法有法空も不生にして、是れ無法有法空に非ず。何となれば、内空乃至無法有法空と不生とは不二不別なればなり。世尊よ、四念處は不生にして四念處に非ず。何となれば、四念處と不生とは不二不別なればなり。何となれば、世尊よ、是の不生の法は一に非ず、二に非ず、三に非ず、異に非ず。是を以ての故に四念處と不生とは不二不別なり。乃至十八不共法も不生にして十八不共法に非ず。何となれば、十八不共法と不生とは不二不別なればなり。何となれば、世尊よ、是の不生法は一に非ず、二に非ず、三に非ず、異に非ざればなり。是を以ての故に、十八不共法は不生にして十八不共法に非ず。世尊よ、如は不生にして如に非ず、乃至不可思議性も不生にして、是れ不可思議性に非ず。世尊よ、是の阿耨多羅三藐三菩提は不生、一切智、一切種智は不生にして是れ一切種智に非ず。何となれば、是の阿耨多羅三藐三菩提、乃至一切種智と不生とは不二不別なればなり。何となれば、世尊よ、是の不生の法は一に非ず、二に非ず、三に非ず、異に非ず、是を以ての故に、乃至一切種智は不生にして一切種智に非ず。世尊よ、色は不滅の相にして是れ色に非ず。何となれば、色と及び不滅の相とは不別なればなり。何となれば、世尊よ、是の不滅の法は一に非ず、二に非ず、三に非ず、異に非ず。是を以ての故に、色は不滅の相にして是れ色に非ず、受想行識は不滅の相にして是れ識に非ず。何となれば、識と不滅の相とは不二不別なればなり。何となれば、世尊よ、是の不滅の法は一に非ず、二に非ず、三に非ず、異に非ず。是を以ての故に、識は不滅の相にして是れ識に非ず。檀波羅蜜乃至般若波羅蜜、内空乃至無法有法空、四念處乃至十八不共法も亦た是の如し。世尊よ、是を以ての故に、色は無二の法數に入り、受想行識は無二の法數に入り、乃至一切種智も無二の法數に入る。

【論】者の言はく、須菩提、佛に白して言さく、「菩薩は能く是の如く諸法を觀ず」と。五衆の中に於て五種の正しき觀行あり。所謂、「受けず」とは五衆の中に無常の火あり、能く心を燒くを以ての故なり。「視ず」とは、相を取らず、但だ無常等の過を觀するのみに非ず、是の五衆の空を觀じて相を取らざるが故なり。「住せず」とは、五衆に依止せず、諸の煩惱の賊の來ることを畏るるが故に、敢へて久しく住せざるなり。譬へば空なる聚落の賊の所止の處に、智者は久しく住するべから

く、亦た聽者無く、邪説なく、正説なく、亦た無説者も無し。一切法は因縁和合の故に生じ、諸縁を離るるが故に滅し、起る者あること無く、滅する者あること無きを知るが故に、畏れず、怖かず、没せず、悔いざるなり。菩薩は一切法の虚誑にして、實なく、定なきことを知り、若くは死の急なる時、若くは阿鼻泥犁に墮するも、心猶ほ動ぜず、況んや虚聲を聞いて、而も恐怖すること有らんや。人の夢中に怖畏の事を見、覺め已りて則ち恐心なく、夢の法は能く心を誑はして實事あること無しと知るが如し。菩薩も亦た是の如く、世間の心の夢中に入りて、恐畏あるを見れども、諸法實相を得て覺する時は、則ち畏るる所なく、諸法は但だ是れ虚誑にして、眞實あること無きを知るなり。復次に、譬へば、幻事を智者は見ると雖も、心に惑ふ所なく、是れ誑法たるを知るが如く、菩薩も亦た是の如し。一切法は幻の如くにして、能く人心を誑はし、是の中に實なきことを知る。是を以ての故に、怖畏せざるなり。炎の如く影の如く化の如きも亦た是の如し。

【經】須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じて是の如く諸法を觀ず。是の時菩薩摩訶薩は色を受けず、色を視ず、色に住せず、色に著せず、亦た是れ色を言はず。受想行識も亦た受けず、視ず、住せず、著せず、亦た是れ受想行識なりと言はず。眼を受けず、視ず、住せず、著せず、亦た是れ眼なりと言はず。耳鼻舌身意も亦た受けず、視ず、住せず、著せず、亦た是れ意なりと言はず。檀波羅蜜を受けず、視ず、住せず、著せず、亦た是れ檀波羅蜜なりと言はず。尸羅波羅蜜、鬘提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜を受けず、視ず、住せず、著せず、亦た是れ般若波羅蜜なりと言はず。內空を受けず、視ず、住せず、著せず、亦た是れ內空なりと言はず。乃至無法有法空も亦た是の如し。復次に、世尊よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、四念處を受けず、視ず、住せず、著せず、亦た是れ四念處なりと言はず。乃至十八不共法をも受けず、視ず、住せず、著せず、亦た是れ十八不共法なりと言はず。一切の三昧門、一切の陀羅尼門乃至一切種智をも受けず、視ず、住せず、著せず、亦た是れ一切種智なりと言はず。

復次に、世尊よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、色を見ず乃至一切種智を見ず。何となれば、色は不生にして是れ色に非ず、受想行識は不生にして是れ識に非ず、眼は不生にして是れ眼に非ず、耳鼻舌

【六】「視ず」は別本に「示さず」に作る。



より生ず。譬へば、眼あり、色あり、明あり、空あり、見んと欲する心等の諸の因縁あり、和合して眼識を生ずるが如し。是の中に、眼は是れ見者、若くは識は是れ見者、若くは色は是れ見者、若くは明は是れ見者なりと言ふことを得ず。若し是の眼、色、識等の各各に見る所あることを得ざれば、和合の中にも亦た見ること有るべからず。是を以ての故に、法は畢竟空にして、幻の如く、夢の如し。一切諸法も亦た是の如しと見る。

復次に、「一切法は無常にして亦た失せず」。無常は五常倒を破して斷滅の倒を失せず。是の無常は法を失せず。即ち是れ實相門に入る。是の故に須菩提、舍利弗に語るらく、「無常は即ち是れ動相、即ち是れ空相なり。一切法も亦た是の如し」と。

復次に、「一切法は常に非ず、失に非ず」とは、十八空の後に義を説くが如し。「色は畢竟不生なり」とは、五衆、作者、生者、起者は不可得なるが故なり。

復次に、「生相は不可得なり」とは、先に生を破する中に説くが如く、一切法も亦た是の如し。何となれば、若し色は生ぜずと説かば、色に非ずと爲せばなり。「受想行識に非ず」とは、此の中に須菩提は自ら説けり。色是因縁より生じて、自性あること無く、常に空相なり。若し法は常に空相ならば、是の法は生相なく、滅相なく、住異の相なし。受想行識も亦た是の如し。「是の」故に不生相の法は、即ち是れ無爲にして、有爲の相に非ず。餘法も亦た是の如し。畢竟不生ならば、當に誰にか般若を教ふべきとは、畢竟不生は即ち是れ諸法實相なり。諸法實相は即ち是れ般若波羅蜜なり。云何にして般若波羅蜜を以て、般若波羅蜜に教へん。若し是の畢竟不生を離れて菩薩あらば、應當應當に般若波羅蜜を教ふべし。是の菩薩と般若波羅蜜は畢竟不生にして無二無別なり。云何ぞ當に教ふべき。「畢竟不生を離れて道を行す」とは、上に説く中に、已に合して解せり。「菩薩は是を聞いて没せず、悔いず」とは、菩薩は一切法の中に於て、我、衆生、乃至知者、見者を見ず。亦た説者な

【五】常倒とは四顛倒の一、恒存性なきものを常住なりと思ふ誤れる見解をいふ。

けて受想行識と爲さずとは、須菩提の言はく、「色の性は空なり。是の空に無生、無滅、無住、無略なり。受想行識の性は空にして、是の空は無生、無滅、無住、無異なり。眼乃至一切の有爲法の性は空にして、是の空は無生、無滅、無性、無異なり。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、畢竟不生ならば、是を色と名けず、畢竟不生ならば、是を受想行識と名けざるなり。」

舍利弗の言ふ所の如く、阿の因縁の故に、畢竟不生の法ならば、當に是の般若波羅蜜を教ふべきやとは、須菩提の言はく、「畢竟不生は即ち是れ般若波羅蜜なり。般若波羅蜜は即ち是れ畢竟不生なり、般若波羅蜜と畢竟不生とは二なく別なし。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、我は、畢竟不生は當に是の般若波羅蜜を教ふべきやと説く」と。

舍利弗の言ふ所の如く、何の因縁の故に、畢竟不生を離れて、菩薩の阿耨多羅三藐三菩提を行ずること無きやとは、須菩提の言はく、「菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、畢竟不生般若波羅蜜に異なることを見ず。亦た畢竟不生の菩薩に異なることを見ず。畢竟不生と及び菩薩とは二なく別なし。畢竟不生の色に異なることを見ず。何となれば、是の畢竟不生と及び色とは二なく別なければなり。畢竟不生の受想行識に異なることを見ず。何となれば、畢竟不生と受想行識とは二なく別なければなり。乃至一切種智も亦た是の如し。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、畢竟不生を離れて菩薩の阿耨多羅三藐三菩提を行ずること無し」と。

舍利弗の言ふ所の如く、何の因縁の故に、菩薩の是の説を作すを聞いて、心没せず、悔いず、驚かず、怖かず、畏れざる、是を菩薩は般若波羅蜜を行ずと名くるやとは、須菩提の言はく、「菩薩摩訶薩は諸法に覺知の相あることを見ず。一切諸法を夢の如く、幻の如く、炎の如く、影の如く、化の如しと見る。舍利弗よ、是の因縁を以ての故に、菩薩は是の説を作すを聞いて心没せず、悔いず、驚かず、怖かず、畏れざるなり」と。

【論】〔論〕者の言はく、「諸法は自性あること無し」とは、性空なるを以て、諸法の各々の性を破す。此の中に須菩提は自ら説けり、「諸法は和合生にして、自性あること無し」と。五衆等の法、及び六波羅蜜等の善法を和合し、是より菩薩の名字を出だすが如し。是の菩薩は、作法に従ひ衆生和合して生ずるが故に、一法の成ずる所に非ず。是を以ての故に假名と言ふ。是の衆法も亦た和合の邊

【四】「衆法」別本には「衆縁」に作る。

こと有るべけんや。若し法は先に有ならば、然る後に生を問ふ可し。法體先に無なり、云何ぞ生ずること有らん。

【經】舍利弗の言ふ所の如く、我の如くに、諸法も亦た是の如く自性なしとは、舍利弗よ、諸法は、和合生の故に自性なし。舍利弗よ、何等か和合生にして自性なきや。舍利弗よ、色は和合生にして自性なく、受想行識は和合生にして自性なく、眼は和合生にして自性なく、乃至意も和合生にして自性なく、色乃至法、眼界乃至法界、地種乃至識種、眼觸乃至意觸、眼觸因縁生の受、乃至意觸因縁生の受も、和合生にして、自性なし。檀波羅蜜、乃至般若波羅蜜も、和合生にして、自性なし。四念處、乃至十八不共法も和合性にして自性なし。

復次に、舍利弗よ、一切法は無常にして亦た失せず。舍利弗、須菩提に問ふ、「何等の法か無常にして亦た失せざるや」と。須菩提の言はく、「色は無常にして亦た失せず。受想行識は無常にして亦た失せず。何となれば、若し法無常ならば即ち是れ動相、即ち是れ空相なり。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、一切の有爲法は無常にして亦た失せず。若くは有漏法、若くは無漏法、若くは有記法、若くは無記法は無常にして亦た失せず。何となれば、若し法無常ならば、即ち是れ動相、即ち是れ空相なり。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、一切の作法は無常にして亦た失せざるなり。

復次に、舍利弗よ、一切法は常に非ず、減に非ず、舍利弗の言はく、「何等の法か常に非ず、減に非ざるや」と。須菩提の言はく、「色は常に非ず、減に非ず、何となれば、性自ら爾なればなり。受想行識は常に非ず、減に非ず、何となれば、性自ら爾なればなり。乃至意觸因縁生の受も常に非ず、減に非ず、何となれば、性自ら爾なればなり。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、諸法は和合生にして自性なし」と。

舍利弗の言ふ所の如く、何の因縁の故に、色は畢竟不生なるや、受想行識は畢竟不生なるやとは、須菩提の言はく、「色は作法に非ず、受想行識は作法に非ず、何となれば、作者は不可得なるが故なり。舍利弗よ、眼は作法に非ず、何となれば、作者は不可得なるが故なり。乃至意も亦た是の如く、眼界乃至意觸因縁生の受も亦た是の如し。

復次に、舍利弗よ、一切の諸法は皆な起に非ず、作に非ず。何となれば、作者は不可得なるが故なり。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、色は畢竟不生なり、受想行識も畢竟不生なり」と。

舍利弗の言ふ所の如く、何の因縁の故に畢竟不生ならば是を名けて色と爲さず、畢竟不生ならば是を名

若くは觀する。是を菩薩と名く。是の法は皆な自相空なるを以つての故に空なり。所謂、檀波羅蜜、檀波羅蜜の相は空なり。乃至、佛、佛の相も空なり。

「一切處」とは、五衆、十二入、十八界、乃至一切種智なり。「一切種智」とは、十八空、三解脱門、般若波羅蜜は、若くは常、若くは無常等と觀じ、一門、二門、乃至無量の門等に入る。是れを一切種智と名く。菩薩を求索するに不可得なり。又た自法の中には自法なきを以つて、亦た他法も無し。此の中に説くが如く、色は色の中に不可得なり、色は受の中に不可得なり、受は受の中に不可得なり、受は色の中に不可得なり、乃至般若波羅蜜は般若波羅蜜の中に不可得なり。乃至、教化の中に教化は不可得なり。「但だ名字のみ有り」とは、是の五衆は破壊散滅し、虚空の如くにして異なること無し。是の菩薩は但だ名字のみ有りて、幻化の人の如く、假の名字の中に更に名を立することを爲す。須菩提、舍利弗に語るらく、「但だ菩薩のみ假の名字ならず、五衆も皆な亦た假の名字なり」と。假の名字の中に、假の名字の相は不可得にして、皆な第一義の中に入る。若し是の如くんば、空は則ち菩薩に非ず。

復次に、六波羅蜜より、乃ち一切種智に至るまで、是の法を行するが故に、名づけて菩薩と爲す。是の法も亦た假の名字、菩薩も亦た假の名字なれば、空にして所有なし。是の諸法は等なり、強ひて爲に名を作す。因縁和合の故に有にして、亦た其の實なし。

「我の名字は畢竟不生なり」とは、此の品の初に已に説くが如し。此の中に須菩提も亦た衆生空、法空も我を破するが如く、所謂、我は畢竟不可得なり。乃至知者、見者も不可得なり。

云何ぞ當に生ずること有るべけんや。五衆は畢竟不可得なり、云何ぞ五衆の生ずること有らんや。乃至、意觸因縁生の受も畢竟不可得なり、云何ぞ當に生ずること有るべけんや。六波羅蜜は畢竟不可得なり、乃至、諸の陀羅尼門、三昧門、聲聞、辟支佛、佛は畢竟不可得なり。云何ぞ當に生ずる

こと有るべき。諸の三昧門、諸の陀羅尼門は、畢竟不可得なり。云何ぞ當に生ずること有るべき。聲聞、乃至佛は畢竟不可得なり。云何ぞ當に生ずること有るべき。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、我は、「我の名字の如くに我も亦た畢竟不生なり」と説くなり。

【論】問うて曰はく、心心數法は無形にして見る可からざるが故に、無邊なるべけんも、色は是れ有形にして見る可し、云何ぞ無邊ならんや。

答へて曰はく、處として色あらざること無く、遠近、輕重を籌量することを得べからず。佛の説きたまへるが如くんば、「四大は處として有らざること無し、故に名けて大と爲す。五情を以て、其の限を得べからず。斗を以て其の多少、輕重を稱量す可からず」と。是の故に、色は無邊なりと言ふ。

復次に、是の色は過去時の初始より不可得なり。未來時の中にも、恒河沙劫數の限ありて色は當に盡くこと有るべき無し。是の故に後邊なし。初邊と後邊とは無きが故に、中も亦た無きなり。

復次に、邊は色相に名く。是の色を分別し、破散するに、邊は不可得にして本相あること無し。復次に、無爲法は不生不滅なるが故に、無數無量無邊なり。法空觀を以て、色を觀するに皆な空にして、虚空及び無爲と同相なり。無量無數無邊の法中より、乃ち微塵に至るまで不可得なり、何に況んや菩薩をや。是の故に五衆は無邊なりと説く。菩薩も亦た無邊なり。色の無邊なるが如く、乃至十八不共法も亦た是の如し。相に隨つて分別することは先に説くが如し。是の五衆は無量無數無邊なるが故に、色は是れ菩薩なりと言ふことを得ず。四衆も亦た是の如し。

復次に、色若し心心數法を離るれば草木瓦石の如し。云何ぞ菩薩と名けんや。若し心心數法は、色を離るれば則ち依止する處なく、亦た能く爲す所なし。云何ぞ菩薩と名けん。

復次に六波羅蜜、十八空、三十七品、十力、乃至十八不共法、如、法性、實際、不可思議性、三解脱門、陀羅尼門、諸の三昧門、薩婆若、道智、一切種智、三乘、三乘の人、是の法を若くは修し、

佛法、初地乃至十地、一切智、道種智、一切種智も亦た是の如し。須陀洹乃至阿羅漢、辟支佛、菩薩、佛も亦た是の如し。菩薩は菩薩の中に不可得なり。菩薩は般若波羅蜜の中に不可得なり。般若波羅蜜は般若波羅蜜の中に不可得なり。般若波羅蜜は菩薩の中に不可得なり。般若波羅蜜の中の教化は所有なくして、不可得なり。教化の中の教化は所有なくして、不可得なり。教化の中の菩薩、及び般若波羅蜜は所有なくして不可得なり。舍利弗よ、是の如く、一切の法は所有なくして、不可得なり。是の因縁を以ての故に、一切種、一切處に〔於いて〕菩薩は不可得なり。當に何等の菩薩にか般若波羅蜜を教ふべき。

舍利弗の言ふ所の如く、何の因縁の故に、菩薩摩訶薩は、但だ假名のみ有りと説くやとは、舍利弗よ、色は是れ假名なり、受想行識は是れ假名なり。色の名は色に非ず、受想行識の名は識に非ず。何となれば、名と名相は空なればなり。若し空なれば即ち菩薩に非ず。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、菩薩は但だ假名のみ有り。

復次に、舍利弗よ、檀波羅蜜は但だ名字のみ有り。名字の中に檀波羅蜜有るに非ず。檀波羅蜜の中に名字あるに非ず。是の因縁を以ての故に、菩薩は但だ假名のみ有り。尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜は但だ名字のみ有り、名字の中には般若波羅蜜あること無く、般若波羅蜜の中には名字あること無し。是の因縁を以ての故に、菩薩は但だ假名のみ有り。舍利弗よ、内空は但だ名字のみ有り。乃至無法有法空も、但だ名字のみ有り。名字の中には内空なく、内空の中には名字なし。何となれば、名字と内空とは、俱に不可得なればなり。乃至、無法有法空も、亦た是の如し。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、菩薩は但だ假名のみ有り。舍利弗よ、四念處は但だ名字のみ有り。乃至十八不共法も、但だ名字のみ有り。一切の三昧門、一切の陀羅尼門乃至一切種智も亦た是の如し。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、我は、「菩薩は但だ假名のみ有り」と説くなり。

舍利弗の言ふが如く、何の因縁の故に、我の名字を説くも我は畢竟不生なりとは、舍利弗よ、我は畢竟不可得なり、云何ぞ當に生ずること有るべき。乃至知者、見者は畢竟不可得なり。云何ぞ當に生ずること有るべき。舍利弗よ、色は畢竟不可得なり。云何ぞ當に生ずること有るべき。受想行識は畢竟不可得なり。云何ぞ當に生ずること有るべき。眼は畢竟不可得なり。乃至、意觸因縁生の受も、畢竟不可得なり。云何ぞ當に生ずること有るべき。檀波羅蜜は、畢竟不可得なり。乃至般若波羅蜜は畢竟不可得なり。云何ぞ當に生ずること有るべき。内空は、畢竟不可得なり。乃至、無法有法空は、畢竟不可得なり。云何ぞ當に生ずること有るべき。四念處は畢竟不可得なり。乃至、十八不共法は、畢竟不可得なり。云何ぞ當に生ずること有るべき。

れば、舍利弗よ、虚空の邊は不可得なり、中も不可得なり、邊なく中なきが故に但だ説きて虚空と名くるが如し。是の如く、舍利弗よ、色の邊は不可得なり、中も不可得なり、是の色は空なるが故に空の中に亦た邊なく、亦た中も無し。受想行識の邊は不可得なり、中も不可得なり、識は空なるが故に空の中に亦た邊なく、亦た中も無し。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、色は邊なきが故に、當に知るべし、菩薩も亦た無邊なりと。受想行識は邊なきが故に當に知るべし、菩薩も亦た無邊なりと。乃至十八不共法も亦た是の如し。

舍利弗の言へるが如く、色は是れ菩薩、是れ亦た不可得なり。受想行識は是れ菩薩、是れ亦た不可得なり。舍利弗よ、色、色相は空なり。受想行識、識相は空なり。檀波羅蜜、檀波羅蜜の相は空なり。乃至般若波羅蜜も亦た是の如し。内空、内空の相は空なり、乃至無法有法空、無法有法空の相も空なり。四念處、四念處の相は空なり、乃至十八不共法、十八不共法の相も空なり。如・法性・實際・不可思議性、不可思議性の相は空なり。三昧門、三昧門の相は空なり。陀羅尼門、陀羅尼門の相は空なり。一切智、一切智の相は空なり。道種智、道種智の相は空なり。一切種智、一切種智の相は空なり。聲聞乘、聲聞乘の相は空なり。辟支佛乘、辟支佛乘の相は空なり。佛乘、佛乘の相は空なり。聲聞人、聲聞人の相は空なり。辟支佛、辟支佛の相は空なり。佛、佛の相は空なり。空の中の色は不可得なり。受想行識も不可得なり。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、色は是れ菩薩、是れ亦た不可得なり。受想行識は是れ菩薩、是れ亦た不可得なり。舍利弗の言ふが如く、何の因縁の故に、一切種、一切處に於て菩薩は不可得なる。當に何等の菩薩にか般若波羅蜜を教ふべきとは、舍利弗よ、色は色の中に不可得なり、色は受の中に不可得なり。受は受の中に不可得なり、受は色の中に不可得なり、受は想の中に不可得なり、想は想の中に不可得なり、想は色・受の中に不可得なり、想は行の中に不可得なり、行は行の中に不可得なり、行は色・受・想の中に不可得なり、行は識の中に不可得なり。識は識の中に不可得なり、識は色・受・想・行の中に不可得なり。舍利弗よ、眼は眼の中に不可得なり、眼は耳の中に不可得なり。耳は耳の中に不可得なり、耳は眼の中に不可得なり、耳は舌の中に不可得なり。舌は舌の中に不可得なり。舌は眼・耳・鼻の中に不可得なり、舌は身の中に不可得なり。身は身の中に不可得なり。身は眼・耳・鼻・舌の中に不可得なり、身は意の中に不可得なり。意は意の中に不可得なり、意は眼・耳・鼻・舌・身の中に不可得なり。六入、六識、六觸、六觸因縁生の受も亦た是の如し。檀波羅蜜、乃至般若波羅蜜、内空、乃至無法有法空。四念處乃至十八不共法、一切三昧門、一切陀羅尼門、性法乃至辟支

ち阿羅漢に至るまでを聲聞の人と名け、因縁法を觀じ、空を悟ること小しく深く、少しく衆生を愍むを辟支佛の人と名け、深く空法に入り、六波羅蜜、大慈大悲を行す、是を菩薩の人と名く。功德別異なるが故に名字も亦た異なり。我と衆生と人との如きは一事にして、眼に事を見るを以ての故に、見者と名け、意を得るが故に、知者と名け、苦樂を受くるが故に、受者と名く。是の我、衆生、人等は、先に已に種種の因縁もて、無なることを説けるが故に、菩薩も亦た應に無なるべし。是の故に、須菩提、舍利弗に語るらく、「衆生は無なるが故に三世の中に菩薩なし」と。

問うて曰はく、五衆和合して菩薩あらば、菩薩は應に無なるべく、五衆は應に有なるべし。

答へて曰はく、是の事を破せんが爲の故に、衆生なく、我なしと言ふ。我なきが故に、則ち五衆は屬する所なし。屬する所なきが故に空なり。空なるが故に菩薩なきなり。

問うて曰はく、若し五衆空ならば、空は即ち是れ菩薩ならん。

答へて曰はく、五衆は空にして亦た菩薩にも非ず。空にして所有なく、分別なきが故なり。五衆は五衆を離れて性なく、亦た菩薩も無し。若し菩薩なしと説かば、則ち三世は皆な無なり。是の五衆等の世間法、六波羅蜜等の道法を觀する、是を菩薩と名く。是の法は空なるが故に、菩薩も亦た空なり。此の中に佛、自ら因縁を説きたまはく、「諸法の空は、菩薩に異ならず、菩薩は、空に異ならず、菩薩空なれば、三世は空にして、二なく別なし」と六波羅蜜より、乃ち一切種智に至るまで、是の諸法を行するが故に、名けて菩薩と爲す。是の諸法は、空なるが故に、菩薩も亦た空なり。此の中の法は空なり。聲聞、辟支佛は、是の空を得るが故に、聲聞、辟支佛人と名く。聲聞、辟支佛人は、空なるが故なり。菩薩も亦た是の如し。

【經】舍利弗の言ふが如く、色は無邊なるが故に、當に知るべし、菩薩も亦た無邊なりと。受想行識は無邊なるが故に、知るべし、菩薩も亦た無邊なりと。舍利弗よ、色は虚空の如く、受想行識も虚空の如し。何とな



問うて曰はく、我と菩薩とは是れ一物なり。云何なれば我を以て菩薩に喩ふるや。

答へて曰はく、是の般若波羅蜜の中には、一切法は空なり。初學は得ざれば、便ち爲に空を説く、先づ當に罪福を分別し、罪を捨てて福德を修すべし。福德の果報は無常なり、無常なるが故に苦を生ず。是の故に福を捨て世間を厭ひ道を求めて涅槃に入る。爾の時、應に是の念を作すべし。「我に因るが故に諸の煩惱を生ず。是の我は、六識の中に於いて求むるに不可得なり。但だ顛倒を以ての故に、我に著す」と。是の故に、無我を解すること易く、化を受くべきこと易し。若し色は空なりと言はば、則ち解し難し。耳に空を説くを聞くと雖も、眼に常に實を見る。是の故に先づ惡罪の中の我を破し、後に一切諸法を破す。一切の佛弟子の道を得る者は無我を自ら知り、自ら證す。未だ道を得ざる者は、餘法の空を信すること、無我を信するが如くなること、能はず。是の故に無我を以て喩と爲す。是の中に須菩提の説かく、「一切法の空より推すに菩薩なし」と。無我を用つて喩と爲す。小を以て大に喩ふること石蜜を甘露に喩ふるが如し。

問うて曰はく、舍利弗は空、無我の義を知れり。何を以ての故に、事事に問を致すや。

答へて曰はく、須菩提は聲聞の人にして、その徳は菩薩に如かず、而も佛前に於て深般若を説く。新學の菩薩は心に或は疑を生じて、「上に佛は歎じて、汝は摩訶衍を説きて、般若に隨順すと言ふと雖も、佛は須菩提に、順ぜんとす」と謂はん。舍利弗は此の疑を斷ぜんと欲するが故に問を發するなり。

復次に、佛は須菩提と共に般若を説いて、乃至終竟せんと欲したまふ。是の故に舍利弗は事事に質問し、須菩提をして善く深義を分別せしめ、衆人をして敬信せしむ。是を以ての故に、過去世の中の菩薩の不可得なるより、乃至恐れず怖かざるを問ひ、須菩提はその義を答ふらく、我と衆生と人とは、即ち是れ一物なり。未だ道を得ざる時、各を凡夫の人（と名け）、初めて道に入るより乃

我心を計すべからず、諸法を分別すべからず」と。但だ衆の善を行する、是の事すら難しと爲す。行者は是の念を作さく、「若し我なくんば、誰の爲にか善を修せん。先きに我ありて今、般若波羅蜜を以ての故に無し」として、心に憂感を生ず。是の故に須菩提は更に重ねて説かく、「我は本より已來無なり。先に有にして、今無なるに非ず」と。行者は是の如く、本來自ら無にして、今、失ふ所なきを知るが故に、憂ふる所なし。譬へば、深根の大樹は、一斫を以て能く斫す可からず、多く斧の力を用つて、乃ち能く斷つが如く、菩薩の空も亦た是の如し。一たび説いて便ち得べからず。是を以ての故に廣く分別す。須菩提は、佛の問ひたまふ時、是の念を作さく、「若し定んで菩薩の法あらば、應に三世に通じて有るべし。今、前世の中には、菩薩あること無し。何となれば、前世には初きが故なり。未來世も亦た是の如し。未だ因縁あらざるが故なり。前後相待するが故に中間あり。若し前後なければ、則ち中間なし。若し五衆は是れ菩薩なりと謂はば、五衆は無邊なること、先に種種の因縁を説けるが如し。五衆は、畢竟空なるが故に、無量無邊なり。無量無邊なるが故に、無爲法に同じ。若し菩薩は無邊なりとは、是の事は然らず。此の因縁を以ての故に、菩薩は不可得なり。當に誰れの爲にか、常に一切處、一切種、一切時に菩薩を求むるに不可得なりと説くべき。當に誰の爲にか、我は畢竟不生空にして所有なきが如く、五衆も亦た是の如し、畢竟不生にして所有なし、既に衆生及び五衆法なし、云何ぞ菩薩あらんと説くべきや。

問うて曰はく、衆生及び五衆法の畢竟不生なる、是の法を解する者は即ち是れ菩薩ならん。

答へて曰はく、畢竟不生なれば名けて色と爲さず、名けて受想行識と爲さず。何となれば、五衆は是れ生相にして、畢竟不生の中には是の分別なければなり。五衆は畢竟不生なれば、以て教化す可からず。畢竟不生を離れては、亦た菩薩の行道も無し。當に誰にか教ふべき、菩薩は是を聞いて怖かず、畏れざる、是を能く菩薩道を行すと爲す。

【三】別本には「行者は是の如く是の如し。本來自ら無なれば、今、失す所なきが故に」に作る。

が如し。

復次に、舍利弗よ、法性は有ること無きが故に菩薩の前際は不可得なり。法性は空なるが故に、離なるが故に、性は無なるが故に、菩薩の前際は不可得なり。餘は上に説くが如し。

復次に、舍利弗よ、如は有ること無きが故に、空なるが故に、離なるが故に、性無きが故に、實際は有ること無きが故に、空なるが故に、離なるが故に、性無きが故に、不可思議性は有ること無きが故に、空なるが故に、離なるが故に、性無きが故に、菩薩の前際は不可得なり。餘は上に説くが如し。

復次に、舍利弗よ、聲聞は有ること無きが故に、菩薩の前際は不可得なり。聲聞は空なるが故に、離なるが故に、性は無なるが故に、菩薩の前際は不可得なり。辟支佛は有ること無きが故に、空なるが故に、離なるが故に、性は無なるが故に、菩薩の前際は不可得なり。佛は有ること無きが故に、空なるが故に、離なるが故に、性は無なるが故に、菩薩の前際は不可得なり。阿耨多羅三藐三菩提は有ること無きが故に、乃至性無きが故に菩薩の前際は不可得なり。

復次に、一切種智は有ること無きが故に、乃至性無きが故に菩薩の前際は不可得なり。何となれば、舍利弗よ、空は前際も不可得、後際も不可得、中際も不可得なれば菩薩は不可得なり。舍利弗よ、空は菩薩に異ならず、亦た前際に異ならず。空と菩薩と前際との是の諸法は無二無別なり。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、菩薩は不可得なり。後際、中際も亦た是の如し。

【論】問うて曰はく、上に已に説けり、菩薩、菩薩の字は不可得なり。誰の爲にか般若波羅蜜を説かんと。今何を以てか更に説くや。

答へて曰はく、應に是の問を作すべからず。須菩提は、空行第一にして、常に樂んで空を説き、若し所説あれば、常に空門を以て衆生を利益せり。

復次に、上には略して説き、是の中には十種に廣く菩薩の不可得なるを分別す。行者若し諸法の空を觀じ、無相無作に隨順し、無作心を以ての故に、所作あることを欲せずんば、尙ほ自ら利益を作すこと能はず、何に況んや、人を利益せんをや。若し人、我心の中に住せば、能く諸法の善、不善の相を分別し、諸の善法を集めて不善法を捨てん。今、佛説きたまはく、般若波羅蜜の中には

を行ずと名くと言ふや」と。

爾の時に須菩提、舍利弗に報へて言く、「衆生は所有なきが故に菩薩の前際は不可得なり。衆生は空なるが故に菩薩の前際は不可得なり。衆生は離なるが故に菩薩の前際は不可得なり。舍利弗よ、色有ること無きが故に菩薩の前際は不可得なり。受想行識有ること無きが故に菩薩の前際は不可得なり。色は空なるが故に菩薩の前際は不可得なり。受想行識は空なるが故に菩薩の前際は不可得なり。色は離なるが故に菩薩の前際は不可得なり。受想行識は離なるが故に菩薩の前際は不可得なり。舍利弗よ、性は性無きが故に菩薩の前際は不可得なり。受想行識は性無きが故に、菩薩の前際は不可得なり。舍利弗よ、檀波羅蜜は有ること無きが故に、菩薩の前際は不可得なり。尸羅波羅蜜、髣提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜有ること無きが故に、菩薩の前際は不可得なり。何となれば、舍利弗よ、空中には前際も不可得、後際も不可得、中際も不可得なり。空は菩薩に異ならず、菩薩は前際に異ならず。舍利弗よ、空と前際との是の諸法は無二無別なり。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、菩薩の前際は不可得なり。舍利弗よ、檀波羅蜜は空なるが故に、檀波羅蜜は離なるが故に、檀波羅蜜の性は無なるが故に、檀波羅蜜の性は無なるが故に、菩薩の前際は不可得なり。尸羅波羅蜜、髣提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜は空なるが故に、般若波羅蜜は離なるが故に、般若波羅蜜の性は無なるが故に菩薩の前際は不可得なり。何となれば、舍利弗よ、空中には前際も不可得、後際も不可得、中際も不可得なり。空は菩薩に異ならず、菩薩は亦た前際にも異ならず。舍利弗よ、空と菩薩と前際との是の諸法は無二無別なり。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、菩薩の前際は不可得なり。復次に、舍利弗よ、内空は所有なきが故に菩薩の前際は不可得なり。乃至、無法有法空も所有なきが故に、菩薩の前際は不可得なり。内空は空なるが故に、内空の性は無なるが故に、無法有法空も所有なきが故に、無法有法空に至るまで、空なるが故に、離なるが故に性は無なるが故に、菩薩の前際は不可得なり。餘は上に説くが如し。

復次に、舍利弗よ、四念處は所有なきが故に、菩薩の前際は不可得なり。四念處は空なるが故に、離なるが故に、性無きが故に菩薩の前際は不可得なり。乃至、十八不共法も所有なきが故に、菩薩の前際は不可得なり。十八不共法は空なるが故に、離なるが故に、離なるが故に、性は無なるが故に菩薩の前際は不可得なり。餘は上に説くが如し。是の因縁を以ての故に、舍利弗よ、菩薩の前際は不可得なり。

復次に、舍利弗よ、一切の三昧門、一切の陀羅尼門は有ること無きが故に、菩薩の前際は不可得なり。三昧門、陀羅尼門は空なるが故に、離なるが故に、性無きが故に菩薩の前際は不可得なり。餘は上に説く

羅蜜なりと説く。摩訶衍と般若波羅蜜は無二無別なるが故なり。

## 第二十五 十 無 品

【經】

慧命須菩提は佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩の前際は不可得、後際も不可得、中際も不可得なり。色は無邊なるが故に當に知るべし、菩薩摩訶薩も亦た無邊なりと。受想行識は無邊なるが故に當に知るべし、菩薩摩訶薩も亦た無邊なりと。色は是れ菩薩摩訶薩は亦た不可得なり。受想行識は是れ菩薩摩訶薩、是れ亦た不可得なり。是の如く、世尊よ、一切種、一切處に於いて菩薩を求むるに不可得なり。世尊よ、我れ當に何等の菩薩摩訶薩に般若波羅蜜を教ふべきや。世尊よ、菩薩摩訶薩は但だ名字あるのみ。我の名字を説くに我は畢竟不生なるが如し。我の如く、諸法も亦た是の如く自性なし。何等の色か畢竟不生なる。何等の受想行識か畢竟不生なる。世尊よ、是れ畢竟不生なれば名けて色と爲さず。是れ畢竟不生なれば名けて受想行識と爲さず。世尊よ、若し畢竟不生の法は當に誰か是れ般若波羅蜜なりと教ふべきや。畢竟不生を離れて亦た菩薩は阿耨多羅三藐三菩提を行ずることも無し。若し菩薩、是の説を作すを聞いて、心に没せず、悔いず、驚かず、怖かず、畏れずんば、當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は能く般若波羅蜜を行ずるなり」と。舍利弗、須菩提に問ふ、「何の因縁の故に、菩薩摩訶薩の前際は不可得、後際も不可得、中際も不可得なりと言ふや。須菩提よ、何の因縁の故に、色は無邊の故に當に知るべし、菩薩も亦た無邊なりと言ふや。受想行識は無邊なるが故に當に知るべし、菩薩も亦た無邊なりと言ふや。須菩提よ、何の因縁の故に、色は是れ菩薩、是も亦た不可得なり、受想行識は是れ菩薩、是も亦た不可得なりと言ふや。須菩提よ、何の因縁の故に、一切種、一切處に於いて菩薩は不可得なり。當に何等をか菩薩の般若波羅蜜なりと教ふべしと言ふや。須菩提よ、何の因縁の故に、菩薩摩訶薩は但だ名字のみ有りと言ふや。須菩提よ、何の因縁の故に、我の名字を説くに、我は畢竟不生なるが如く、我の如く諸法も亦た是の如く自性なし、何等の色か畢竟不生なる、何等の受想行識か畢竟不生なると言ふや。須菩提よ、何の因縁の故に、畢竟不生を名けて色と爲さず、畢竟不生を名けて受想行識と爲さずと言ふや。須菩提よ、何の因縁の故に、若し畢竟不生の法は、當に誰か是れ般若波羅蜜なりと教ふべしと言ふや。須菩提よ、何の因縁の故に、畢竟不生を離れては、亦た菩薩の阿耨多羅三藐三菩提を行ずること無しと言ふや。須菩提よ、何の因縁の故に、若し菩薩は是の説を作すを聞いて心没せず、悔いず、驚かず、怖かず、畏れず、若し能く是の如く行ぜば、是を菩薩摩訶薩は般若波羅蜜

【三】 別本は「二十三品を釋し竟る」を附記す。

四念處と摩訶衍とは無二無別なり。乃至十八不共法も摩訶衍と異ならず、摩訶衍は十八不共法に異ならず。十八不共法と摩訶衍とは無二無別なり。是の因縁を以ての故に、須菩提よ、汝が摩訶衍を説くは、即ち是れ般若波羅蜜を説くなり。

【論】〔論〕者の言はく、富樓那は自ら疑なしと雖も、新學鈍根の者が、義一にして而も名字異なることを解せざるが爲の故に問を發し、須菩提は即ち其の事を以て佛に白さく、「佛法は甚深なり。我が説く所の者は將に失あること無しや」と、佛、答へたまはく、「汝は摩訶衍を説き般若に隨順して違錯あること無し」と、此の義は初に已に之を論ぜり。今佛は爲に隨順の因縁を説きたまふ。所謂、三乘に攝する所の一切の善法は皆な合聚して、般若波羅蜜の中に在り。所以何となれば、一切の三乘の善法は皆な涅槃の爲なるが故なり。涅槃の門に三種あり。一切法は皆な空門、無相門、無作門に入る。持戒の如きは能く禪定を生じ、禪定は能く實智慧を生ず。世間に著せざるが故なり。何等か三乘の助道法にして般若の中に攝在するや。所謂、六波羅蜜三十七品、三解脱門、佛の十力、四無所畏、四無礙智、大慈大悲、十八不共法は錯謬の相なく、常に捨行す。此の中、三十七品、三解脱門は、是れ三乘の共法なり。六波羅蜜は、是れ菩薩の法なり。十力、乃至常捨行は、是れ佛法なり。有人の言はく、「六波羅蜜に具足あり、不具足あり、不具足とは二乘に共する法なり。具足とは獨り菩薩のみの法なり」と。

復次に、摩訶衍は空なり、般若波羅蜜も亦た空なり。空の義は一なるが故に、須菩提は隨順して錯ること無し。般若波羅蜜の空なるが如く、五波羅蜜乃至如・法性・實際・不可思議性・涅槃も亦た是の如し。

復次に、般若波羅蜜乃至涅槃は、皆な是れ合せず、散せず、無色、無形、無對にして、一相、所謂無相なり。是の同相の故に、摩訶衍は則ち是れ般若波羅蜜なりと説く。摩訶衍は則ち是れ般若波

【一】富樓那 *puṣpa* 具には富樓那彌多羅尼子 *puṣpaṇi* *paṇi-puṣpa* 十弟子の一人にして佛弟子中説法第一なり。

## 卷の第五十二

## 第二十四會 宗 品

【經】

爾の時に、慧命富樓那彌多羅尼子、佛に白して言さく、「世尊よ、佛は須菩提をして諸の菩薩摩訶薩の爲に、般若波羅蜜を説かしむ、今乃ち摩訶衍を説くことを爲すや」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、我は摩訶衍を説くも將に般若波羅蜜を離ること無からんとす」と。佛の言はく、「不なり。須菩提よ、汝は摩訶衍を説き、般若波羅蜜に隨つて、般若波羅蜜を離れず。何となれば一切の所有る善法、助道法、若くは聲聞法、若くは辟支佛法、若くは菩薩法、若くは佛法、是の一切の法は、皆な般若波羅蜜の中に攝入すればなり」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何等か諸の善法、助道法、聲聞法、辟支佛法、菩薩法、佛法にして皆な般若波羅蜜の中に攝入するや」と。佛、須菩提に告げ給へく、「(夫は)所謂、檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、鬘提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜、四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分、空・無相・無作解脫門、佛の十力、四無所畏、四無礙智、大慈大悲、十八不共法は錯謬の相なくして常に捨行す。

須菩提よ、是の諸餘の善法、助道法、若くは聲聞法、若くは辟支佛法、若くは菩薩法、若くは佛法は、皆な般若波羅蜜の中に攝入す。須菩提よ、若くは摩訶衍、若くは般若波羅蜜、禪波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、鬘提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀波羅蜜、若くは色、受、想、行、識、眼色、眼識、眼觸、眼觸因縁生の諸の受、乃至意法、意識、意觸、意觸因縁生の諸の受、地種乃至識種、四念處、乃至八聖道分、空・無相・無作解脫門、及び諸の善法、若くは有漏、若くは無漏、若くは有爲、若くは無爲、若くは苦諦、集諦、滅諦、道諦、若くは欲界、若くは色界、若くは無色界、若くは内空乃至無法有法空、諸の三昧門、諸の陀羅尼門、佛の十力、乃至十八不共法、若くは佛法、佛法性、如、實際、不可思議性、涅槃、是の一切の諸法は皆な合せず、散せず、無色、無形、無對にして一相所謂無相なり。

須菩提よ、是の因縁を以ての故に、汝が説く所の摩訶衍は、般若波羅蜜に隨順す。何となれば、須菩提よ、摩訶衍は般若波羅蜜に異ならず、般若波羅蜜は摩訶衍に異ならず、般若波羅蜜と摩訶衍とは無二無別なり。檀波羅蜜は摩訶衍に異ならず、摩訶衍は檀波羅蜜に異ならず。檀波羅蜜と摩訶衍とは無二無別なり。乃至禪波羅蜜も亦た是の如し。須菩提よ、四念處は摩訶衍に異ならず、摩訶衍は四念處に異ならず。

り。

問うて曰はく、何を以ての故に、三世及び三世の等の中の檀波羅蜜は不可得なるや。

答へて曰はく、諸法の等の中に三世の等なく、等の中の等の相も亦た不可得なり。何に況んや、三世の六波羅蜜、乃至十八不共法も亦た是の如くなるをや。

復次に、三世の中の凡夫の相は不可得なり。聲聞、乃至佛も亦た不可得なり。衆生は空なるを以ての故なり。菩薩は般若波羅蜜に住して、能く是の如く三世の等の空を學し、諸善の功徳を集め、便ち一切種智を具足す。佛、説きたまはく、「菩薩は能く是の如く、三世の等の中に住して、則ち能く一切世間、及び諸天・人・阿修羅に勝出す」と。是の時に須菩提、讚じて言はく、「世尊よ、善い哉、善い哉。是の摩訶衍は諸の菩薩を利益す。所以何となれば、過去の諸の菩薩は、是の摩訶衍を學して一切種智を得、未だ得ず、今得ることも亦た是の如し」と。有人の言はく、「清淨を得て因縁なければ、染垢穢も亦た因縁なく、大小、好醜、縛解も、皆な主を與へらること無し」と。有人の言はく、「好醜、縛解は時節に至りて自ら得」と。有人の言はく、「福德を成就するが故に佛道を得」と。有人の言はく、「但だ清淨の實智慧を得て佛道を得」と。是の如き等の説は、皆な是れ非因縁なり。少因縁なり、須菩提の讚歎せざる所なり。今佛は非因縁を捨て、不具足の因縁を捨てず。具足の因縁、所謂六波羅蜜を説きたまふ。三世の菩薩は、是の乘を學し、具足して佛道を成ずることを得。佛も亦た須菩提の嘆ずる所を可して、「是の如し、是の如し」と言へり。

【三】「六」は別本に「五」とあり。



の衍の中に學して、當に一切種智を得べし。世尊よ、今十方の無量阿僧祇の世界の中の、諸の菩薩摩訶薩も、亦た是の衍の中に學して、一切種智を得。是を以ての故に、世尊よ、是の衍は實に是れ菩薩摩訶薩の摩訶衍なり」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し、過去・未來・現在の諸佛は、是の摩訶衍の中に學して、已に一切種智を得たり。當に得べく、今も得」と。

【論】〔論〕者の言はく、須菩提は略して讚じて、是の摩訶衍の前際・後際・中際は、俱に不可得にして、三世等しきが故に摩訶衍と名くと説けり。今、佛は廣く須菩提の讚する所を演べたまふ。是の三世は云何なれば不可得なる。所謂過去世は過去世空なり、未來世は未來世空なり、現在世は現在世空なるが故に不可得なり。三世等しとは、等は空なり。摩訶衍は摩訶衍自ら空なり。菩薩は菩薩自ら空なり。是の三世の中の三世の相の空とは、空の義は先に説くが如し。此の中に佛は自ら空の因縁を説き給へり。所謂、空と空相は一に非ず、二に非ず、三に非ず、四に非ず、五に非ず、等うして異ならず、合せず、散せず、分別すること有ること無し。是の故に三世は等うして、空相は所有なきが故に、是の等も亦空なり。菩薩は能く是の如く諸法の三世の等を解し、無始世より來た、疲厭することを爲さず。未來世の無邊なるを以ての故に難を爲さず、是を菩薩の三世の等と爲し、摩訶衍と名く。是の摩訶衍の中の等相は不可得にして、不等相も亦た不可得なり。是の三世等の三昧を得て是の不等相を破す。不等相は相待の故に有り。等不等は、畢竟無なるが故に、等も亦た無なり。欲、不欲、乃至三界、三界を度ることの是の相待法も亦た是の如し。此の中に佛、自ら説きたまはく、「是の諸法は皆な因縁の和合に従ふが故に自性なく、自性なきが故に空なり」と。

復次に、過去の色は過去の色相空なり。未來、現在も亦た是の如し。色の如く、餘の四衆も亦た是の如し。所以何となれば、空中の空相は不可得なり。何に況んや、空中に三世五衆の相あらんや。菩薩は五衆の空を觀じ、貪欲を斷じて道行、所謂檀波羅蜜等に入る。亦た是の五衆の如きは三世の中に不可得なり。三世は等なるが故なり。等は即ち是れ空なり。是の等の中の檀波羅蜜は不可得な

の受想行識空なり。未來・現在の受想行識は未來・現在の受想行識空なり。空中の過去の色は不可得なり。何となれば、空中の空も亦た不可得なればなり。何に況んや、空中の過去の色の得べけんや。空中の未來・現在の色は不可得なり。何となれば、空中の空も亦た不可得なればなり。何に況んや、空中の未來・現在の色の得べけんや。空中の過去の受想行識は不可得なり。何となれば、空中の空も亦た不可得なればなり。何に況んや、空中の過去の受想行識を得べけんや。空中の未來・現在の受想行識は不可得なり。何となれば、空中の空も亦た不可得なればなり。何に況んや、空中の未來・現在の受想行識を得べけんや。

須菩提よ、過去の檀波羅蜜も不可得なり、未來の檀波羅蜜も不可得なり、現在の檀波羅蜜も不可得なり、三世等中の檀波羅蜜も亦た不可得なり。何となれば、等中の過去世は不可得、未來世も不可得、現在世も不可得にして、等中の等も亦た不可得なればなり。何に況んや、等中の過去世、未來世、現在世を得べけんや。尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜も亦た是の如し。

復次に、須菩提よ、過去世の中の四念處は不可得なり、乃至過去世の中の十八不共法も不可得なり。未來世、現在世も亦た是の如し。

復次に、須菩提よ、三世等中の四念處は不可得なり、乃至三世等中の十八不共法も亦た不可得なり。何となれば、等中の過去世の四念處は不可得、等中の未來世の四念處は不可得、等中の現在世の四念處は不可得にして、等中の等も亦た不可得なればなり。何に況んや、等中の過去世の四念處、未來現在世の四念處を得べけんや。等中の等も亦た不可得なり。何に況んや、等中の過去、乃至十八不共法を得べけんや。未來、現在世も亦た是の如し。

復次に、須菩提よ、過去世中の凡夫人は不可得なり。未來世、現在世中の凡夫人も不可得なり。三世等中の凡夫人も亦た不可得なり。何となれば、衆生は不可得、乃至知者見者も、不可得なるが故なり。過去世中の聲聞、辟支佛、菩薩佛は不可得なり。未來・現在世中の聲聞、辟支佛、菩薩、佛は不可得なり。三世等中の聲聞、辟支佛、菩薩佛は不可得なり。何となれば、衆生は不可得、乃至知者見者も不可得なるが故なり。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜の中に住し、三世の等の相を學して、當に一切種智を具足すべし。是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。所謂、三世の等の相の菩薩摩訶薩は、是の衍の中に住し、一切世間及び諸天・人・阿修羅に勝出して、薩婆若を成就す。

爾の時に須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、善い哉、善い哉、是れ菩薩摩訶薩の摩訶衍なり。何となれば、過去の諸の菩薩は、是の衍の中に學して、一切種智を得たり。未來世の諸の菩薩摩訶薩も、亦た是

眼見の事に名け、未だ好醜、實不實、自相他相を分別せず。色法は無常、生滅、不淨等に名く。色如は色の和合して有り、水沫の牢固ならずして、離散すれば則ち無く、虚偽無實にして但だ人の眼を誑はすのみなるが如きに名く。色の現在は是の如し。過去、未來も亦た爾なり。現在の火の熱より、過去未來も亦た、是の如くなるを比知するが如し。

復次に、諸佛は、「色相は畢竟清淨空なり」と觀じたまふが如く、菩薩も亦た應に是の如く觀すべし。色〔眼〕法、色如は何の因縁もてか凡夫の人の見る所の如くならざる。性、自ら爾るが故なり。此の性は深妙なり、云何にして知るべき。色相の力を以ての故に知るべし。火は烟を以て相と爲すを以て、烟を見れば、則ち火あることを知るが如く、今眼色の無常にして破壊、苦惱、龜澁の相なるを見て、其の性の爾ることを知る。此の五法の去らず、來らず、住せざることは、先に説くが如し。乃至無爲、無爲法・如・性・相の來らず、去らず、住せざることも、亦た是の如し。

【經】須菩提よ、汝が言ふ所の是の摩訶衍は前際にも不可得なり、後際にも不可得なり、中際にも不可得なり。是の衍は三世等しと名く。是を以ての故に、説いて摩訶衍と名くること、是の如し、是の如し。須菩提よ、是の摩訶衍は前際にも不可得なり、後際にも不可得なり、中際にも不可得なり。是の衍は三世等しと名く。是を以ての故に説いて摩訶衍と名く。何となれば須菩提よ、過去世は過去世空なり。未來世は未來世空なり。現在世は現在世空なり。三世等しとは三世等空なり。摩訶衍は摩訶衍空なり。菩薩は菩薩空なればなり。何となれば、須菩提よ、是の空は一に非ず、二に非ず、三に非ず、四に非ず、五に非ず、異に非ず、是を以ての故に、説いて三世等しと名く。是れ菩薩摩訶薩の摩訶衍なり。

是の衍の中には等不等の相は不可得なるが故に、染不染不可得なり、瞋不瞋不可得なり、癡不癡不可得なり、慢不慢不可得なり、乃至一切善法不善法も不可得なり。是の衍の中には、常は不可得なり、無常は不可得なり、樂は不可得なり、苦は不可得なり、實は不可得なり、空は不可得なり、我は不可得なり、無我は不可得なり、欲界は不可得なり、無色界は不可得なり、欲界を度ることは不可得なり、色界を度ることは不可得なり、無色界を度ることは不可得なり。何となれば、是の摩訶衍は自法不可得なるが故なり。須菩提よ、過去の色は過去の色空なり。未來・現在の色は未來・現在の色空なり。過去の受想行識は過去

【二】「五法」別本は「三法」に作る。

衆生なく、乃至知者、見者なきが故に、來者、去者なし。來者、去者なきが故に、來去の相も亦た應に無かるべし。

復次に、三世の中に、去相を求むるに不可得なり。所以何となれば、已に去れる中には、去ること無く、未だ去らざる中にも、亦た去ること無く、已に去り、未だ去らざることを離れて、去る時にも亦た去ること無し。

問うて曰はく、身の動く處ある、是を名けて去ると爲す。已に去り、未だ去らざる中には、身の動くこと無し。是を以ての故に、去時に身動けば即ち應に去ること有るべし。

答へて曰はく、然らず、去相を離れて、去時は不可得なり。去時を離れて、去相は不可得なり。云何ぞ去時に去ると言はんや。

復次に、若し去時に去相あらば、應に去相を離れて、去時あるべし。何となれば、汝は、去時に去ること有りと説くが故なり。

復次に、若し去時に去らば、應に二の去ること有るべし。一には去る時を知り、二には去る時に去ることを知る。

問うて曰はく、若し爾らば何の咎ありや。

答へて曰はく、若し爾らば、二の去者あり。何となれば、去者を離れて去相なし。若し去者を離れて去相なくんば、去相を離れて去者なけん。是の故に、去者は去らず、不去者も亦た去らず、不去を離れても、亦た去ること有ること無し。來者、住者も亦た是の如し。是を以ての故に、佛は説きたまはく、「凡夫の人の法は、虚誑無實にして、復た肉眼の見る所なりと雖も、畜生と異なること無し。是は信す可からず」と。是の故に、諸法の來ること無く、去ること無く、住する處なく、亦た動ずること無しと説くなり。何者か是なる。所謂、色、色法、色如、色性、色相なり。色は

し。耳、鼻、舌、耳、意、意法、意如、意性、意相は從つて來る所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。色、聲、香、味、觸、法も亦た是の如し。須菩提よ、地種、地種法、地種如、地種性、地種相は從つて來る所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。水、火、風、空、識種、識種法、識種如、識種性、識種相も亦た是の如し。須菩提よ、如、如法、如如性、如如相は從つて來る所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。須菩提よ、實際、實際法、實際如、實際性、實際相は從つて來る所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。須菩提よ、不可思議、不可思議法、不可思議如、不可思議性、不可思議相は從つて來る所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。

須菩提よ、檀波羅蜜、檀波羅蜜法、檀波羅蜜如、檀波羅蜜性、檀波羅蜜相は從つて來る所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。尸羅波羅蜜、尸羅波羅蜜法、尸羅波羅蜜如、尸羅波羅蜜性、尸羅波羅蜜相は從つて來る所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。檀波羅蜜、檀波羅蜜法、檀波羅蜜如、檀波羅蜜性、檀波羅蜜相は從つて來る所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。阿耨多羅三藐三菩提法・如・性・相は從つて來る所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。須菩提よ、有爲法、有爲法法、有爲法如、有爲法性、有爲法相は從つて來る所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。須菩提よ、無爲法、無爲法法、無爲法如、無爲法性、無爲法相は從つて來る所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。是の因縁を以ての故に、須菩提よ、是の摩訶衍は來處を見ず、去處を見ず、住處を見ざるなり。

【論】「論」者の言はく、佛の謂はく、「須菩提よ、汝は何を以てか、但た摩訶衍のみの來ること無く、去ること無く、住すること無きを讚するや。一切法も亦た是の如く、來ること無く、去ること無く、住すること無し。一切法の實相は不動なるが故なり」と。

問うて曰く、諸法は現に來去あり、見る可きなり。云何なれば不動の相にして來ること無く、去ること無しと言ふや。

答へて曰く、來去の相は、先に已に破せり。今當に更に説くべし。一切の佛法の中には我なく、

復次に、事を數えて數あるも、事は無なるを以ての故に數も亦た無なり。無量とは、斗を以て物を稱量するが如く、智智を以て諸法を量るも、亦た是の如し。諸法は空なるが故に無數なり、無數なるが故に無量無邊なり。實智あること無くんば、云何ぞ能く諸法の定相を得ん。無量なるが故に無邊なり。量は總相に名け、邊は別相に名く。量は初始と爲し、邊は終竟と名く。

復次に、我、乃至知者見者は無なるが故に、實際も亦た無なり。實際は無なるが故に、無數も亦た無なり。無數は無なるが故に、無量も亦た無なり。無量は無なるが故に、無邊も亦た無なり。無邊は無なるが故に、一切法も亦た無なり。是を以ての故に一切法は無にして畢竟清淨なり。是の摩訶衍は能く一切衆生及び法を含受す。二事は相因る、若し衆生なければ則ち法なし。若し法なければ即ち衆生なし。先には總相をもて一切法の空を説き、後には一一別して諸法の空を説く。實際は是れ最後の妙法なり。此れ若し無くんば、何に況んや餘法をや。不可思議性より乃至如涅槃の性の如きも、亦た是の如し。

【經】須菩提よ、汝が言ふ所の、是の摩訶衍は來處を見ず、去處を見ず、住處を見ざることを、是の如し、是の如し。須菩提よ、是の摩訶衍は來處を見ず、去處を見ず、住處を見ず。何となれば、須菩提よ、一切諸法は不動の相なるが故なり。是の法は來處なく、去處なく、住處なし。何となれば、須菩提よ、色は從つて來る所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。受、想、行、識は從つて來る所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なければなり。須菩提よ、色法は從つて來る所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。受、想、行、識法は從つて來る所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。須菩提よ、色如は從つて來る所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。受、想、行、識如は從つて來る所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。須菩提よ、色性は從つて來る所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。受、想、行、識性は從つて來る所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。須菩提よ、色相は從つて來る所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。受、想、行、識相は從つて來る所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。須菩提よ、眼、眼法、眼如、眼性、眼相は從つて來る所なく、亦た去る所なく、亦た住する所なし。

【〇】「事を數えて……」は原文「數事數事無故……」なり別本には「繫數事數事」、元明聖石四本は「數數事事」に作る。

答へて曰く、諸法の因果は皆な是れ虚誑にして、無明に因るが故に、衆生の心を誑まよはすこと有り。衆生は是の法の中に於いて著を生じ、而も虚空に於いては著を生ぜず。六塵の法は衆生の心を誑まよはす。虚空は復た誑はすと雖も則ち爾らず。是を以ての故に、虚空を以て喩と爲し、鹿現の事を以て微細の事を破す。虚空の色に因るが故に、但だ假名のみありて、定法あること無きが如く、衆生も亦た是の如し。五衆の和合に因るが故に、但だ假名のみ有りて、亦た定法なし。摩訶衍も亦た是の如し。衆生は空なるを以て佛なく、菩薩なし。衆生あるを以ての故に佛あり、菩薩あり、若し佛なく、菩薩なければ、即ち摩訶衍なけん。是を以ての故に、摩訶衍は能く無量無邊阿僧祇の衆生を受く。若し是れ有法ならば、無量の諸佛及び弟子を受くること能はざらん。

問うて曰はく、若し實に虚空なくんば、云何にして能く無量無邊阿僧祇の衆生を受くるや。

答へて曰はく、是を以ての故に、佛の説きたまはく、「摩訶衍はなるが故に、阿僧祇も無なり。阿僧祇は無なるが故に、無量も亦た無なり、無量は無なるが故に、無邊も亦た無なり、無邊は無なるが故に、一切法も亦た無なり。是を以ての故に、能く受く」と。

阿僧祇とは、僧祇は秦に數と言ひ、阿は秦に無と言ふ。衆生と諸法とは、各各邊を得べからざるが故に無數と名く。虚空を數ふるに、十方遠近に、邊の得べからざるが故に、無數と名く。分別して六波羅蜜を數ふるに、種種の布施、種種の持戒等、數あること無し。幾いくばくの衆生を數ふるに、已いの上乗、當の上乗、今の上乗ありて數ふ可からず。是を無數と名く。

復次に、有人の言はく、「初の數を一と爲す。但だ一のみ有り。一と一の故に二と言ふも、是の如き等は、皆な一にして更に餘の數法なし。若し皆な是れ一ならば則ち無數なり」と。有人の言はく、「一切法は和合するが故に名字あり。輪、輞、輻、轂の如きありて、和合するが故に名けて車と爲し、定實の法あること無し。一法なきが故に多も亦た無し。先に一にして後に多なる故なり。」

【八】「阿僧祇」は *Asamkhyā* (梵)の音寫、大數、無數と譯し、算數し得ざる數の極のこと。

【九】已は過去、當は未來、今は現在の義、三世の上乗を夫々「已の上乗、當の上乗、今の上乗」といふなり、尙ほ上乘とは *Uttarayāna* (梵)、下乗の對、大乘といふに同じ。

くと言はずして、而も所有なければ、一切の物を受くと言ふや。

答へて曰はく、我は、虚空には自相なく、色相を待つて虚空を説くと説けり。若し自相なければ、則ち虚空なし。云何ぞ無量無邊と云はんや。

問うて曰はく、汝は「受相は則ち是れ虚空なり」と言へり。云何なれば無と言ふや。

答へて曰はく、受相には即ち是れ色相なし。色の到らざる處を名けて虚空と爲す。是を以ての故に無は虚空なり。若し實に虚空あらば、未だ色の有らざる時、應に虚空あるべし。若し未だ色あらずして虚空あらば、虚空は則ち無相なり。何となれば、未だ色の有らざるを以てなり。色に因つての故に虚空の有ることを知る。色あるが故に便ち無色あり。若し先づ色ありて後に虚空あらば、虚空は則ち是れ作法なり。作法は名けて常と爲さず。若し無相の法あらば、是れ不可得なり。是を以ての故に無は虚空なり。

問うて曰く、若し常に空ありて、色に因るが故に、虚空の相を現せば、然る後の相も虚空に在るや。

答へて曰く、若し虚空は先に無相ならば、後の相も亦た住する所なけん。若し虚空は先に有相ならば、相の相とする所なく、若し先に無相ならば、相として亦た住する所なけん。若し相を離れて無相ならば、已に相に住處なく、若し相に住處なければ、所相の處も亦た無く、所相の處なきが故に、相も亦た無く、相及び相處を離れて更に法あること無けん。是を以ての故に、虚空を名けて相と爲さず、名けて法と爲さず、名けて法に非すと爲さず、名けて有と爲さず、名けて無と無さず。諸の語言を斷じ寂滅にして無餘涅槃の如し。餘の一切法も亦た是の如し。

問うて曰はく、若し一切法、是の如くならば、即ち是れ虚空なり。何を以てか復た虚空を以て喩と爲すや。



何となれば、我、乃至一切諸法は皆な不可得なるが故なり。

譬へば、須菩提よ、涅槃の性の中に、無量無邊阿僧祇の衆生を受くるが如く、是の摩訶衍も亦た無量無邊阿僧祇の衆生を受く。是の因縁を以ての故に、須菩提よ、虚空の無量無邊阿僧祇の衆生を受くるが如く、是の摩訶衍も亦た是の如く、無量無邊阿僧祇の衆生を受く。

【論】問うて曰はく、何を以てか、虚空は廣大無邊なるが故に、一切の物を受くと説かずして、而も虚空は所有なきが故に、能く一切の物と衆生とを受く、摩訶衍も亦た所有なしと言ふや。

答へて曰はく、現に虚空を見るに所有なくして、一切萬物は皆な其の中に有り、所有なきを以ての故に能く受くればなり。

問うて曰はく、心心數法も亦た形質なし。何を以てか一切の物を受けざるや。

答へて曰はく、心心數法は、覺知の相にして是れ受相に非ず。又た住處の若くは内、若くは外、若くは近、若くは遠なし。但だ分別相を以ての故に、心形あることを知る。色法には住處あり。色處に因るが故に、虚空あることを知る。色は物を受けざるを以ての故に、則ち虚空は物を受くることを知る。色と虚空とは相違ず。色、若し受けざれば、則ち虚空は、是れ受くることを知る。無明を以ての故に、明あることを知り、苦を以ての故に樂あることを知るが如く、色の無なるに由るが故に、虚空ありて更に別相なしと説く。

復次に、心心數法には更に不受の義あり。邪見の心は正見を受けず、正見の心は邪見を受けざるが如し。虚空は則ち然らず。(夫は)一切皆な受くるが故なり。

又た心心數法は、生滅の相にして、是れ斷ず可き法なり、虚空は則ち然らず。心心數法と虚空とは、但だ無色無形なることは同じきも、都べて異なることなしと言ふを得ず。是を以ての故に、諸法の中にて、虚空は能く一切を受くと説く。

問うて曰はく、我が先の間意は然らず。何を以てか、虚空は無量無邊なれば、能く一切の物を受

【六】心心數法とは心王(意識作用の本體、容體の總相を認識するもの)と心所(心王に隨伴生起する特殊作用にして別相なり)のこと。  
【七】別本には「色は物の性を受けざるを以て」に作る。

の因縁を以ての故に、須菩提よ、是の摩訶衍は、無量無邊阿僧祇の衆生を受く、何となれば、我、衆生、乃至一切諸法は皆な不可得なるが故なり。

復次に、須菩提よ、我、衆生、乃至知者見者は所有なきが故に、當に知るべし、四念處は所有なしと。四念處は所有なきが故に、乃至十八不共法も所有なしと。十八不共法は所有なきが故に、當に知るべし、虚空は所有なしと。虚空は所有なきが故に、當に知るべし、摩訶衍は所有なしと。摩訶衍は所有なきが故に、當に知るべし、阿僧祇無量無邊は所有なしと。阿僧祇無量無邊は所有なきが故に、當に知るべし、一切諸法は所有なしと。是の因縁を以ての故に、須菩提よ、是の摩訶衍は、無量無邊阿僧祇の衆生を受く。何となれば、我、衆生、乃至一切諸法は皆な不可得なるが故なり。

復次に、須菩提よ、我、衆生は所有なく、乃至知者見者は所有なきが故に、當に知るべし、性<sup>六</sup>地は所有なく、乃至已作地も所有なしと。已作地は所有なきが故に、當に知るべし、虚空は所有なしと。虚空は所有なきが故に、當に知るべし、摩訶衍は所有なしと。摩訶衍は所有なきが故に、當に知るべし、阿僧祇無量無邊は所有なしと。阿僧祇無量無邊は所有なきが故に、當に知るべし、一切諸法は所有なしと。是の因縁を以ての故に、是の摩訶衍は、無量無邊阿僧祇の衆生を受く。何となれば、我、衆生、乃至一切諸法は皆な不可得なるが故なり。

復次に、須菩提よ、我、衆生、乃至知者見者は所有なきが故に、當に知るべし、須陀洹は所有なしと。須陀洹は所有なきが故に、當に知るべし、斯陀含は所有なしと。斯陀含は所有なきが故に、當に知るべし、阿那含は所有なしと。阿那含は所有なきが故に、當に知るべし、阿羅漢は所有なしと。阿羅漢は所有なきが故に、當に知るべし、乃至一切諸法も所有なしと。是の因縁を以ての故に、須菩提よ、是の摩訶衍は、無量無邊阿僧祇の衆生を受く。何となれば、須菩提よ、我、乃至一切諸法は皆な不可得なるが故なり。

復次に、須菩提よ、我、乃至知者見者は所有なきが故に、當に知るべし、聲聞乘は所有なしと。聲聞乘は所有なきが故に、當に知るべし、辟支佛乘は所有なしと。辟支佛乘は所有なきが故に、當に知るべし、佛乘は所有なしと。佛乘は所有なきが故に、當に知るべし、聲聞人は所有なしと。聲聞人は所有なきが故に、當に知るべし、須陀洹は所有なしと。須陀洹は所有なきが故に、乃至、佛も所有なし。佛は所有なきが故に、當に知るべし、一切種智は所有なしと。一切種智は所有なきが故に、當に知るべし、虚空は所有なしと。虚空は所有なきが故に、當に知るべし、摩訶衍は所有なしと。摩訶衍は所有なきが故に、當に知るべし、乃至一切諸法は所有なしと。是の因縁を以ての故に、摩訶衍は、無量無邊阿僧祇の衆生を受く。

【五】「性地」別本「法性」又は「性法」に作る。

僧祇、是の一切法は不可得なるが故なり。

復次に、須菩提よ、我は所有なく、乃至知者見者は所有なきが故に、當に知るべし、不可思議性は所有なしと。不可思議性は所有なきが故に、當に知るべし、色、受、想、行、識は所有なしと。色、受、想、行、識は所有なきが故に、當に知るべし、虚空は所有なしと。虚空は所有なきが故に、當に知るべし、摩訶衍は所有なしと。摩訶衍は所有なきが故に、當に知るべし、阿僧祇は所有なしと。阿僧祇は所有なきが故に、當に知るべし、無量は所有なしと。無量は所有なきが故に、當に知るべし、無邊は所有なしと。無邊は所有なきが故に、當に知るべし、一切諸法は所有なしと。是の因縁を以て、須菩提よ、當に知るべし、摩訶衍は無量無邊阿僧祇の衆生を受くと。何となれば、須菩提よ、我乃至知者、見者等、一切法は皆な不可得なるが故なり。

復次に、須菩提よ、我は所有なく、乃至知者見者は所有なきが故に、當に知るべし、眼は所有なく、耳、鼻、舌、身、意も所有なしと。眼乃至意は所有なきが故に、當に知るべし、虚空は所有なしと。虚空は所有なきが故に、當に知るべし、摩訶衍は所有なしと。摩訶衍は、所有なきが故に當に知るべし、阿僧祇は所有なしと。阿僧祇は所有なきが故に、當に知るべし、無量は所有なしと。無量は所有なきが故に、當に知るべし、無邊は所有なしと。無邊は所有なきが故に、當に知るべし、一切諸法は所有なしと。是の因縁を以ての故に、須菩提よ、摩訶衍は無量無邊阿僧祇の衆生を受く。何となれば、須菩提よ、我、乃至一切諸法は皆な不可得なるが故なり。

復次に、須菩提よ、我は所有なく、乃至、知者見者は所有なきが故に、當に知るべし、檀波羅蜜は所有なく、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜も所有なしと。般若波羅蜜は所有なきが故に、當に知るべし、虚空は所有なしと。虚空は所有なきが故に、當に知るべし、摩訶衍は所有なしと。摩訶衍は所有なきが故に、當に知るべし、無量無邊阿僧祇は所有なしと。無量無邊阿僧祇は所有なきが故に、當に知るべし、一切諸法は所有なしと。是の因縁を以ての故に、須菩提よ、摩訶衍は、無量無邊阿僧祇の衆生を受く。何となれば、我、衆生乃至一切諸法は皆な不可得なるが故なり。

復次に、須菩提よ、我は所有なく、乃至、知者見者は所有なきが故に、當に知るべし、内空は所有なく、乃至無法有空も所有なしと。無法存法空は所有なきが故に、當に知るべし虚空は所有なしと。虚空は所有なきが故に、當に知るべし、摩訶衍は所有なしと。摩訶衍は所有なきが故に、當に知るべし、阿僧祇は無量無邊は所有なしと。阿僧祇無量無邊は所有なきが故に、當に知るべし、一切諸法は所有なしと。是

に似如し、無生忍を得て従り已後は分別する所なきこと虚空の如し。

復次に、佛の如きは、無礙智を以て、實相を觀たまふこと虚空の如し。餘人は則ち然らず、智慧未だ畢竟清淨ならざるが故なり。

復次に、佛は前後に諸法畢竟空と説きたまふ。無餘涅槃の相の如きは、虚空の如く、疑を致すべからず。餘法も亦た是の如し。乃至虚空の、説に非ず不説に非ざるが如し。(摩訶衍も)亦た是の如し。

問うて曰く、虚空の如く所有なしと言へば便ち足る。何を以てか種種の相なしと説くや。

答へて曰く、初發心の菩薩は、内外の種種の因縁法の中に於いて心を著す。是を以ての故に、佛は虚空に是の種種の相なきが如く、摩訶衍も亦た是の如しと説きたまへり。

【經】須菩提よ、汝が言ふ所の如し。虚空の無量無邊阿僧祇の衆生を受くるが如く、摩訶衍も亦た無量無邊阿僧祇の衆生を受くること、是の如し、是の如し。須菩提よ、衆生は所有なきが故に、當に知るべし、虚空も所有なしと。虚空は所有なきが故に、當に知るべし、摩訶衍も亦た所有なしと。是の因縁を以ての故に、摩訶衍は無量無邊阿僧祇の衆生を受く。何となれば、是の衆生、虚空、摩訶衍、是の法は皆な不可得なるが故なり。

復次に、須菩提よ、摩訶衍は所有なきが故に、當に知るべし、阿僧祇は所有なしと。阿僧祇は所有なきが故に、當に知るべし、無量は所有なしと。無量は所有なきが故に、當に知るべし、無邊は所有なしと。是の因縁を以ての故に、須菩提よ、是の摩訶衍は、無量無邊阿僧祇の衆生を受く。何となれば是の衆生、虚空、摩訶衍、阿僧祇、無量無邊、是の一切法は不可得なるが故なり。

復次に、須菩提よ、我は所有なく、乃至知者見者は所有なきが故に、當に知るべし、如、法性、實際は所有なしと。如、法性、實際は所有なきが故に、當に知るべし、乃至無量無邊阿僧祇も所有なしと。無量無邊阿僧祇は所有なきが故に、當に知るべし、一切法は所有なしと。是の因縁を以ての故に、須菩提よ、摩訶衍は、無量無邊阿僧祇の衆生を受く。何となれば是の衆生、乃至知者、見者、實際、乃至無量無邊阿

非ざるが如く、摩訶衍も亦た是の如く、色に非ず、無色に非ず、可見に非ず、不可見に非ず、有對に非ず、無對に非ず、合に非ず、散に非ざるなり。是を以ての故に、摩訶衍は空と等しと説く。

須菩提よ、虚空の常に非ず、無常に非ず、樂に非ず、苦に非ず、我に非ず、無我に非ざるが如く、摩訶衍も亦た是の如く、常に非ず、無常に非ず、樂に非ず、苦に非ず、我に非ず、無我に非ず、是を以ての故に、摩訶衍は空と等しと説く。

須菩提よ、虚空は空に非ず、不空に非ず、相に非ず、無相に非ず、作に非ず、無作に非ざるが如く、摩訶衍も亦た是の如く、空に非ず、不空に非ず、相に非ず、無相に非ず、作に非ず、無作に非ず、是を以ての故に、摩訶衍は空と等しと説く。

須菩提よ、虚空の寂滅に非ず、寂滅ならざるに非ず、離に非ず、不離に非ざるが如く、摩訶衍も亦た是の如く、寂滅に非ず、寂滅ならざるに非ず、離に非ず、不離に非ざるなり。是を以ての故に、摩訶衍は空と等しと説く。須菩提よ、虚空は闇に非ず、明に非ざるが如く、摩訶衍も亦た是の如く、闇に非ず、是を以ての故に、摩訶衍は空と等しと説く。

須菩提よ、虚空の可得に非ず、不可得に非ざるが如く、摩訶衍も亦た是の如く、可得に非ず、不可得に非ざるなり。是を以ての故に、摩訶衍は空と等しと説く。須菩提よ、虚空は可説に非ず、不可説に非ざるが如く、摩訶衍も亦た是の如く、可説に非ず、不可説に非ざるなり。是を以ての故に、摩訶衍は空と等しと説く。須菩提よ、是の諸の因縁を以ての故に、摩訶衍は空と等しと説くなり。

【論】「論者の言はく、須菩提は、「衍は虚空の如し」と讚じ、佛は即ち廣く述べて、其の事を成じたまふ。虚空には十方なきが如く、摩訶衍も亦た十方なし。(虚空に)長短方圓青黄赤白等なき(が如く)、是の摩訶衍も亦た是の如し。

問うて曰く、虚空は應に爾るべし。是れ無爲法にして無色無方なればなり。摩訶衍は是れ有爲法、是れ色法にして、所謂、布施、持戒等なり。云何なれば虚空と等しと言ふや。

答へて曰く、六波羅蜜に二種あり、世間と出世間となり。世間(の六波羅蜜)は、是れ有爲法、色法にして虚空に同じからず。出世間(の六波羅蜜)は如、法性、實際、智慧と和合するが故に、虚空

衍も亦た是の如し。東方なく、南方、西方、北方、四維、上下なし。

須菩提よ、虚空の長に非ず、短に非ず、方に非ず、圓に非ざるが如く、須菩提よ、摩訶衍も亦た是の如し。長に非ず、短に非ず、方に非ず、圓に非ざるなり。須菩提よ、虚空の青に非ず、黄に非ず、赤に非ず、白に非ず、黒に非ざるが如く、須菩提よ、摩訶衍も亦た是の如し。青に非ず、黄に非ず、赤に非ず、白に非ず、黒に非ざるなり。是を以ての故に、摩訶衍と空とは等しと説く。

須菩提よ、虚空は過去に非ず、未來に非ず、現在に非ざるが如く、摩訶衍も亦た是の如く、過去に非ず、未來に非ず、現在に非ざるなり。是を以ての故に、摩訶衍は空と等しと説く。須菩提よ、虚空は増さず、減ぜざるが如く、摩訶衍も亦た是の如し。増さず、減ぜざるなり。須菩提よ、虚空は垢なく、淨なきが如く、摩訶衍も亦た是の如し。垢なく、淨なきなり。須菩提よ、虚空の生なく、滅なく、住なく、異なきが如く、摩訶衍も亦た是の如し。生なく、滅なく、住なく、異なきなり。

須菩提よ、虚空は善に非ず、不善に非ず、記に非ず、無記に非ざるが如く、摩訶衍も亦た是の如し。善に非ず、不善に非ず、記に非ず、無記に非ざるなり。是を以ての故に、摩訶衍は、空と等しと説く。虚空の見なく、聞なく、知なく、識なきが如く、摩訶衍も亦た是の如し。見なく、聞なく、知なく、識なきなり。

虚空は知る可からず、識る可からず、見る可からず、斷ず可からず、證す可からず、修す可からざるが如く、摩訶衍も亦た是の如く、知る可からず、識る可からず、見る可からず、斷ず可からず、證す可からず、修す可からざるなり。是を以ての故に、摩訶衍は空と等しと説く。虚空は染相に非ず、離相に非ざるが如く、摩訶衍も亦た是の如く、染相に非ず、離相に非ざるなり。虚空は欲界に繫せず、色界に繫せず、無色界に繫せざるが如く、摩訶衍も亦た是の如く、欲界に繫せず、色界に繫せず、無色界に繫せざるなり。虚空の初發心なく、亦た二三四五六七八九、第十心なきが如く、摩訶衍も亦た是の如く、初發心なく乃至第十心無し。虚空の乾慧地、性地、八人地、見地、薄地、離欲地、已辦地なきが如く、摩訶衍も亦た是の如く、乾慧地なく、乃至已作地なきなり。虚空の須陀洹果なく、斯陀含果なく、阿那含果なく、阿羅漢果なきが如く、摩訶衍も亦た是の如く、須陀洹果なく、乃至阿羅漢果なし。虚空の聲聞地なく、辟支佛地なく、佛地なきが如く、摩訶衍も亦た是の如し。聲聞地なく、乃至佛地なきなり。是を以ての故に、摩訶衍と空と等しと説く。

虚空の色に非ず、無色に非ず、可見に非ず、不可見に非ず、有對に非ず、無對に非ず、合に非ず、散に

【四】「已辦地」別本は「已作地」に作る。

もて説くなり。所謂、佛の三十二相は、莊嚴の身なるが故に、一切衆生に勝り、佛の光明は、日月諸天の一切の光明に勝り、佛の音聲は、一切の音樂、世界の妙聲、諸天の梵音に勝り、佛の法輪は、轉輪聖王の寶輪、及び諸の外道の一切の法輪に勝れて、無障無礙なり。餘の法輪は、利益する所微淺にして、或は一世、二世、極まるも千萬世に至るのみ。佛の法輪は、能く永く無餘涅槃に入り、復た還つて生死に入らざらしむるなり。

復次に、若し衆生實有ならば、佛は衆生をして涅槃に入り、永く其の根を抜かしめたまふべからず。此は一身を殺すよりも過ぎたり。是の如き大なる咎あり。衆生は顛倒の心を以て、我を見るが故に、佛は其の顛倒を破せんと欲して説いて言はく、「涅槃には衆生の滅す可きもの無し」と。故に咎なし。是の如き功德あるが故に、摩訶衍は能く一切世間に勝出す。

問うて曰はく、一切世間とは、十方六道の衆生なり。何を以てか、獨り諸の天・人・阿修羅に勝出すと説くや。

答へて曰く、六道の中の三は是れ善道、三は是れ惡道なり。摩訶衍は、尚ほ能く三善道すら破して勝出す、何に況んや惡道をや。

問うて曰はく、龍王經の中に説かく、「龍、菩薩道を得」と。何を以てか、是を惡道なりと説くや。答へて曰く、衆生は無量無邊にして、龍の道を得る者は少し。

復次に、有人の言はく、「大菩薩は、身を變化して、教化するが故に、龍王の身と作る」と。

## 第二十三 合 受 品

【經】佛、須菩提に告げたまはく、「汝が言ふ所の、<sup>三</sup>衍と空と等しきことは如是なり、如是なり。須菩提よ、衍と空とは等し。須菩提よ、虚空に、東方なく、南方、西方、北方、四維、上下なきが如く、須菩提よ、摩訶

【二】宮本は「等空品」に作り、聖本は三字無し。

【三】「衍」とは Yam (梵) の略音寫、摩訶衍那(大乘)の略なり。

「若し法性は是れ有法にして無法に非すとせば、摩訶衍は世間を破して勝出することを得ること能はざらん。須菩提よ。「法性は有に非ざるを以ての故に、摩訶衍は能く世間に勝出することを得」とは。

問うて曰はく、有爲法は因縁の和合にして、虚誑なるが故に無と言ふも、如、法性、實際、不〔可〕思議性は、是れ無爲實法にして名けて實際と爲す、云何ぞ無と言ふや。

答へて曰く、無爲は空なるが故に無と言ふ。

復次に、佛説きたまはく、「有爲を離れて、無爲法は得べからず。有爲法の實相は、即ち是れ無爲法なり」と。

復次に、是の有爲法は虚誑なり。如、法性、實際の如きは、是れ實なりと觀すれば、人は法性に於て、相を取り、諍を起すを以ての故に、法性なしと言ふ。或は有と説き、或は無と説くも、各因縁あるが故に咎なし。如、實際、不可思議性も亦た是の如し。世間の檀波羅蜜は、著の故に有なり。出世間の檀波羅蜜は、無なるが故に空なり。慳貪を破するが爲めの故に、檀波羅蜜ありと言ひ、邪見を破するが故に、檀波羅蜜は無なりと言ふ。初學者を度せんが爲めに説きて有なりと言ひ、若しくは聖人は心中に説いて無と言ふこと、檀波羅蜜の如く、乃至若しくは衆生は、實有にして、是れ無法に非ず、強ひて滅して、無餘涅槃に入らしむべからず（とするが如し。）

問うて曰く、三十二相より以後は、何を以てか説いて摩訶衍は勝出すと言はざるや。

答へて曰く、應當に説くべきも、直に文の煩はしきが故に説かず。

復次に、三十二相より、乃ち衆生の爲に法輪を轉ずるに至るまで、亦た是れ摩訶衍にして、但だ名字を異にするのみ。

復次に、上に總相もて、摩訶衍は勝出すと説くも、云何にして勝出せるかを知らざれば、今別相



の中間に於いて、無量の衆生を利益し、決定して諸法實相を知り、六波羅蜜を具足するが故に、諸の魔王を破し、及び外道を壊り、煩惱の習を斷じ、一切種智を具足し、總相と別相とを悉く知り、悉く了じ、阿耨多羅三藐三菩提を成ず。三人は俱に生死を免ると雖も、然も方便の道おのく各異なれり。是の故に須菩提は、摩訶衍の一切世間を摧破し、人天、阿修羅の上に勝出するを讚歎す。譬へば虚空は一切の國土を含受して、而も虚空の故に盡きざるが如し。摩訶衍も亦た是の如く、三世の諸佛及び諸の弟子を含受すれども、摩訶衍は亦た滿たず。又た虚空は常相なるが故に、入相なく、出相なく、住相なきが如く、是の乘も亦た是の如し。未來世の入る處なく、過去世の出る處なく、現在世の住する處なし。三時を破するが故に、三世等しく摩訶衍と名く。

問うて曰はく、佛は應に須菩提の歎する所を讚じて「善い哉」と言たまふべし。何を以てか更に摩訶衍を説きたまへるや。

答へて曰く、佛は將に須菩提の歎する所に順ひて、而して讚說せんと欲したまふなり。上に説く摩訶衍は遠きを以ての故に、今は略して摩訶衍の相を説き、然して後廣く述べたまふ。須菩提の讚する所の摩訶衍とは、所謂、六波羅蜜、諸の陀羅尼門、三昧門、十八空、四念處、乃至十八不共法等なり。

須菩提の説く所の如く、摩訶衍は一切世間を破壊し、人天、阿修羅の上に勝出すとは、是の事は實に爾なり。何となれば、是の三界は虚誑にして、幻の如く、夢の如く、無明、虚妄の因縁の故に、因果あるも定實あること無く、一切無常にして、破壊し、磨滅す、皆な是れ空相なり。摩訶衍は、三界と相違するを以ての故に、能く摧破し勝出す。若し三界は定實にして、常に虚妄ならずんば、是の摩訶衍は、摧破し勝出すること能はず。何となれば、力等しきが故なり。五衆、十二入、十八界、六觸の諸受を生ずるも、亦た是の如し。

須菩提よ、若し諸佛の光明は、是れ有法にして、無法に非ずとせば、諸佛の光明は、普く恆河沙等の世界を照らすこと能はざらん。須菩提よ、諸佛の光明は、無法なるを以て、法に非ず。是を以ての故に、諸佛は能く光明を以て、普ねく恆河沙等の世界を照らしたまふ。須菩提よ、若し諸佛の六十種の莊嚴音聲は、是れ有法にして、無法に非ずとせば、諸佛は六十種の莊嚴音聲を以て、遍ねく十方無量阿僧祇の世界に至りたまふこと能はざらん。須菩提よ、諸佛の六十種の莊嚴音聲は、無法なるを以て、法に非ず。是を以ての故に、諸佛は能く六十種の莊嚴音聲を以て、遍ねく十方無量阿僧祇の世界に至る。

須菩提よ、諸佛の法輪は、若し是れ有法にして、無法に非ずとせば、諸佛は、法輪を轉じたまふこと能はず。諸の沙門、婆羅門、若くは天、若くは魔、若くは梵、及び世間の餘衆の、如法に轉ずること能はざる所の者ならん。須菩提よ、諸佛の法輪は、無法なるを以て法に非ず。是を以ての故に、諸佛は法輪を轉じたまひ。諸の沙門、婆羅門、若くは天、若くは魔、若くは梵、及び世間の餘衆は、如法に轉ずること能はざる者なり。須菩提よ、諸佛は、衆生の爲に、法輪を轉じたまふに、是の衆生が、若し實に有法にして、無法に非ずとせば、是の衆生をして、無餘涅槃に於て、而も般涅槃せしめたまふこと能はざるなり。須菩提よ、諸佛は衆生の爲に、法輪を轉じたまふに、是の衆生は無法にして法に非ざるを以て、是を以ての故に、衆生は無餘涅槃の中に於いて、已に滅し、今に滅し、當に滅すべし。

【論】「論」者の言はく、須菩提は上に五事を以て、摩訶衍を問ひたてまつり、佛は已に答へ竟りたまへり。須菩提は歡喜讚歎して是の言を作さく、「世尊よ、是の摩訶衍は、大力勢ありて、人天世間を破壊し、已に能く中に於いて勝出す。譬へば、三人惡道を度るに、一は、夜に於いて逃遁して、獨り其の身を脱し、二は、錢を以て免るることを求め、三は、大王の如く、大軍衆を將ゐて、寇賊を摧破し、舉軍全く濟ひて、畏難する所なきが如し。三乘も亦た是の如く、阿羅漢の如きは、一切の總相と、別相とを知ること能はず、亦た魔王を破すること能はず、又た外道を降伏すること能はず、老病死を厭ひて、直に涅槃に趣く。辟支佛の如きは、諸法實相に入ること、聲聞より深く、少しく悲心あり、神通力を以て、衆生を化度し、能く煩惱を破すれども、魔、人、及び外道を破すること能はず。菩薩の如きは、初發心より、一切衆生に於いて、大慈悲を起し、未だ佛を得ずと雖も、其

須菩提よ、若し性人法は、是れ有法にして、無法に非ずとせば、是の 訶衍は、一切世間及び諸天・人・阿修羅に勝出すること能はざらん。性人法は、無法なるを以て、法に非ず。是を以ての故に、摩訶衍は、一切世間及び諸天・人・阿修羅に勝出す。須菩提よ、若し八人法、須陀洹法、斯陀含法、阿那含法、阿羅漢法、辟支佛法、佛法は、是れ有法にして、無法に非ずとせば、是の摩訶衍は、一切世間及び諸天・人・阿修羅に勝出すること能はざらん。八人法乃至佛法は、無法なるを以て、法に非ず。是を以ての故に、摩訶衍は、一切世間、及び諸天・人・阿修羅に勝出す。須菩提よ、若し性人は、是れ有法にして、無法に非ずとせば、是の摩訶衍は、一切世間、諸天・人・阿修羅に勝出すること能はざらん。性人は、無法なるを以て、法に非ず。是を以ての故に、摩訶衍は、一切世間及び諸天・人・阿修羅に勝出す。

須菩提よ、若し八人、須陀洹、乃至佛は、是れ有法にして、無法に非ずとせば、是の摩訶衍は、一切世間、及び諸天・人・阿修羅に勝出すること能はざらん。八人乃至佛は、無法なるを以て、法に非ず。是を以ての故に、摩訶衍は、一切世間、及び諸天・人・阿修羅に勝出す。須菩提よ、若し一切世間及び諸天・人・阿修羅は、是れ有法にして、無法に非ずとせば、是の摩訶衍は、一切世間、及び諸天・人・阿修羅に勝出すること能はざらん。一切世間、諸天・人・阿修羅は、無法なるを以て、法に非ず。是を以ての故に、摩訶衍は、一切世間、及び諸天・人・阿修羅に勝出す。須菩提よ、若し菩薩摩訶薩は、初發心より乃ち道場に至るまで、其の中間の諸心に於いて、若し當に是れ有法にして、無法に非ずとせば、是の摩訶衍は、一切世間、及び諸天・人・阿修羅に勝出すること能はざらん。菩薩は初發心より、乃ち道場に至るまで、其の中間の諸心に於いて、無法なるを以て、法に非ず。是を以ての故に、摩訶衍は、一切世間、及び諸天・人・阿修羅に勝出す。

須菩提よ、若し菩薩摩訶薩の金剛の如き慧は、若し是れ有法にして、無法に非ずとせば、是の菩薩摩訶薩は、一切の結使、及び習は無法にして法に非ずと知りて、一切種智を得ること能はざらん。須菩提よ、菩薩摩訶薩の金剛の如き慧は、無法なるを以て、法に非ず。是の故に菩薩は、一切の結使、及び習の無法にして非法なることを知りて、一切種智を得、是を以ての故に、摩訶衍は、一切世間、及び諸天・人・阿修羅に勝出す。須菩提よ、若し諸佛の三十二相は、是れ有法にして、無法に非ずとせば、諸佛の威徳は、照然として、一切世間、及び諸天・人・阿修羅に勝出すること能はざらん。須菩提よ、諸佛の三十二相は、無法なるを以て、法に非ず。是を以ての故に、諸佛の威徳は照然として、一切世間、及び諸天・人・阿修羅に勝出す。

法に非ずとせば、是の摩訶衍は一切世間及び諸天・人・阿修羅に勝出すること能はざらん。須菩提よ、色は、虚妄にして憶想分別して、名字等を和合して、一切の無常破壊の相有れど法なし。是を以ての故に、是の摩訶衍は、一切世間及び諸天・人・阿修羅に勝出す。(乃至)受、想、行、識も亦た是の如し。

須菩提よ、若し眼乃至意、色乃至法、眠識乃至意識、眼觸乃至意觸、眼觸因縁生の受、乃至意觸因縁生の受、若し當に實有にして虚妄ならず、異諦ならず、顛倒ならず、常不壊の相ありて、無法に非ずとせば、是の摩訶衍は、一切の世間及び諸天・人・阿修羅に勝出すること能はざらん。須菩提よ、眼乃至意觸因縁生の受は、虚妄にして憶想分別して、名字等を和合して、一切無常破壊の相あれど法は無し。是を以ての故に、摩訶衍は、一切世間及び諸天・人・阿修羅に勝出す。

須菩提よ、若し法性は、是れ有法にして、無法に非ずとせば、是の摩訶衍は、一切の世間及び諸天・人・阿修羅に勝出すること能はざらん。須菩提よ、法性は無法なるを以て法に非ず。是を以ての故に、摩訶衍は、一切の世間及び諸天・人・阿修羅に勝出す。

須菩提よ、若し如、實際、不可思議性は、是れ有法にして、無法に非ずとせば、是の摩訶衍は、一切の世間及び諸天・人・阿修羅に勝出すること能はざらん。須菩提よ、如、實際、不可思議性は、無法なるを以て、法に非ず。是を以ての故に、摩訶衍は、一切世間及び諸天・人・阿修羅に勝出す。

須菩提よ、若し檀波羅蜜は是れ有法にして、無法に非ずとせば、是の摩訶衍は、一切の世間及び諸天・人・阿修羅に勝出すること能はざらん。檀波羅蜜は、無法なるを以て、法に非ず。是を以ての故に、摩訶衍は、一切世間及び諸天・人・阿修羅に勝出す。若し尸羅波羅蜜、髻提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜は、是れ有法にして、無法に非ずんば、是の摩訶衍は、一切世間及び諸天・人・阿修羅に勝出すること能はざらん。尸羅波羅蜜、乃至般若波羅蜜は無法なるを以て、法に非ず。是を以ての故に、摩訶衍は、一切世間、諸天・人・阿修羅に勝出す。

須菩提よ、若し内空乃至無法有法空は、是れ有法にして、無法に非ずとせば、是の摩訶衍は一切世間及び諸天・人・阿修羅に勝出すること能はざらん。内空乃至無法有法空は、無法なるを以て、法に非ず。是を以ての故に、摩訶衍は、一切世間及び諸天・人・阿修羅に勝出す。

須菩提よ、若し四念處乃至十八不共法は、是れ有法にして、無法に非ずとせば、是の摩訶衍は、一切世間及び諸天・人・阿修羅に勝出すること能はざらん。四念處乃至十八不共法は、無法なるを以て法に非ず。是を以ての故に、摩訶衍は、一切世間及び諸天・人・阿修羅に勝出す。

## 卷の第五十一

## 第二十二勝出品

【經】

慧命須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、摩訶衍、摩訶衍は、一切世間、及び諸天・人・阿修羅に勝出す。世尊よ、是の摩訶衍は虚空と等し。虚空が無量無邊阿僧祇の衆生を受くるが如く、摩訶衍も亦た是の如く、無量無邊阿僧祇の衆生を受く。世尊よ、是の摩訶衍は來處を見ず、去處を見ず、住處を見ず。是の摩訶衍は前際を得べからず、後際も得べからず、中際も得べからず、三世は等しく是れ摩訶衍なり。世尊よ、是を以ての故に是の乘を摩訶衍と名く」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。菩薩摩訶薩の摩訶衍は、所謂、六波羅蜜なる、檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、鬘提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜なり。是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、所謂、一切の陀羅尼門、一切の三昧門、所謂、首楞嚴三昧、乃至離著虚空不染三昧なり。是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、所謂、内空乃至無法有法空なり。是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、所謂、四念處、乃至十八不共法、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。須菩提の言ふ所の如く、是の摩訶衍は、一切世間及び諸天・人・阿修羅に勝出せり。

須菩提よ、若し欲界が當に實有りて虚妄ならず、異諦ならず、顛倒せず、常不壞の相ありて、無法に非ずとせば、是の摩訶衍は一切世間及び諸天・人・阿修羅に勝出すること能はざらん。須菩提よ、欲界は虚妄にして、憶想分別して名字等を和合するを以て一切の無常相あれど、法は無し。是を以ての故に、摩訶衍は一切世間及び諸天・人・阿修羅に勝出す。

須菩提よ、色界、無色界が、若し當に實有にして、虚妄ならず、異諦ならず、顛倒ならず、常不壞の相ありて、無法に非ずとせば、是の摩訶衍は一切世間及び諸天・人・阿修羅に勝出すること能はざらん。須菩提よ、色界、無色界は、虚妄にして憶想分別して、名字等を和合するを以て、一切の無常、破壊の相有りて法は無し。是を以ての故に、摩訶衍は一切世間及び諸天・人・阿修羅に勝出す。

須菩提よ、若し色は當に實有にして、虚妄ならず、異諦ならず、顛倒ならず、常、不壞の相ありて、無

滅、不垢、不淨、乃至三世、三相、増減等、是を法空と名く。我より乃ち知者、見者に至るまで、須陀洹より乃ち佛に至るまで、是を衆生空と名く。

問うて曰はく、二種の不可得有り。一には法有るも智慧少きが故に得ること能はず。二には大智慧有りて、推求すれども、得ること能はず。此は、云何なれば不可得なるや。

答へて曰く、是の法は無なるが故に不可得なり。

問うて曰はく、一切法は本末不可得ならば、人に於いて何の利あるや。

答へて曰はく、此の中に佛、自ら説きたまはく、「畢竟清淨なるが故なり」と。畢竟とは行者は無に依りて有を破し、有に於いて清淨を得、無に於いて未だ清淨ならず。(夫は)依止するを以ての故なり。此の中に佛、自ら不可得の因縁を説きたまへり。一切衆生は不可得なり。一切法は不可得なり。譬へば、如、法性、實際等、乃至不作、不起、不可得なるが如し。

復次に、十八空の故に、法性は不可得なり。乃至不起、不作、十八空の中には、初地乃至十地無く、衆生を成就することも無く、佛世界を淨むることも無く、五眼も無し。(夫は)十八空を以ての故に空なり。畢竟清淨なるが故に不可得なり。菩薩は不可得の法を用つて、是の乘に乗じて、薩婆若を出づるなり。<sup>三八</sup>

【三八】石本は卷を分たず。原文「大智度論卷第五十〔第十九品を釋し第二十品を説る〕」の十八字附加。諸本異同あり。

須陀洹果乃至阿羅漢果、辟支佛道、佛道、一切種智は不可得なり、畢竟淨なるが故なり。不生・不滅・不垢・不淨・無起・無作は不可得なり、畢竟淨なるが故なり。過去世・未來世・現在世の生住滅は不可得なり、畢竟淨なるが故なり。増減は不可得なり、畢竟淨なるが故なり。何の法か不可得なるが故に、不可得なりとするや。法性は、不可得なるが故に、不可得なり。如、實際、不可思議性、法性法相、法位、檀波羅蜜は、不可得なるが故に不可得なり。乃至、般若波羅蜜は、不可得なるが故に不可得なり。内空は、不可得なるが故に不可得なり。乃至、無法有法空は、不可得なるが故に不可得なり。四念處は、不可得なるが故に、不可得なり、乃至十八不共法は、不可得なるが故に、不可得なり。須陀洹は、不可得なるが故に、不可得なり。乃至、佛は不可得なるが故に、不可得なり。須陀洹果は、不可得なるが故に、不可得なり。乃至佛道は、不可得なるが故に、不可得なり。不生、不滅、乃至不起、不作は、不可得なるが故に、不可得なり。復次に、須菩提、初地は不可得なるが故に、不可得なり。乃至第十地は、不可得なるが故に、不可得なり。畢竟淨なるが故なり。云何なるを初地乃至十地と爲すや。所謂、乾慧地・性地・八人地・見地・薄地・離欲地・已作地・辟支佛地・菩薩地・佛地なり。内空中に初地は不可得なり、乃至無法空中に初地は不可得なり。乃至無法有法空中に初地は不可得なり。内空乃至無法有法空中に第二・第三・第四・第六・第七・第八・第九・第十地は不可得なり。何となれば、須菩提、初地は得に非ず、不得に非ず、乃至十地も得に非ず、不得に非ず。(夫は)畢竟淨なるが故なり。内空乃至無法有法空中、衆生成就は不可得なり。(夫は)畢竟淨なるが故なり。内空乃至無法有法空中、五眼は不可得なり。(夫は)畢竟淨なるが故なり。是の如く、須菩提、菩薩摩訶薩は、一切諸法の不可得を以ての故に、是の摩訶衍に乗じて薩婆若に住す。

【論】<sup>三七</sup>「論」者の言はく、出づとは、是の乘を行じて、佛道の邊に到り出づるなり。又復た成就を以ての故に出づと名く。是の乘を以て薩婆若を成就する、是を名けて出づと爲す。此の中に佛、自ら空の因縁を説きたまへり。「乘」とは、是れ六波羅蜜なり。「用ふる所の法」とは、是れ慈悲方便等の諸法にして、六波羅蜜に攝せざる所なり。出づる者は是れ菩薩なり。是の三法は皆な空なり。此の中に佛、復た因縁を説きたまふ。我は不可得なり、乃至知者、見者は不可得なり、(夫は)畢竟空なるが故なり。五衆、十二入、十八界、檀波羅蜜、乃至十八不共法、須陀洹、乃至薩婆若、不生、不

【三七】「論」字附加は元・明二本に従ふ。石本「釋して言はく」となす。

二五  
ざればなり。所以何となれば、法性は相性空なるが故なり。乃至無作の性は、無作の性性空なるが故なり。諸餘の法も亦た是の如し。須菩提、是の因縁を以ての故に是の乘には、住處無し。(夫は)不住の法(にして)不動の法なるを以ての故なり。

【論】問うて曰く、上に是の乘は薩婆若に到れば、更に勝法の去る可き(所)無しと言へり。今、何を以てか是の乘には住する處無しと説くや。

答へて曰く、先に説けるは、空にして不二の法なるを以ての故に住すと云へり。(夫は)幻の如く、夢の如し。坐臥行住有りと雖も、實に是れ住するに非ず。菩薩も亦た是の如く、薩婆若に到りて住すと云ふと雖も、亦た定住するところ無し。佛は此の中に自ら説きたまはく、「一切法は本従り已來、住相無し。云何ぞ獨り大乘のみ住すること有らんや。若し住する所有れば、畢竟空法を以て住す。譬へば如、法性、法相、實際は住するに非ず。住せざるに非ず、不生、不滅、不垢、不淨、不起、不作なるが如し。住せずとは、自相の中に住せず、住せざるに非ずとは、異相の中に住せざるなり。住せずとは、空を説きて有を破し、「住せざるに非ず」とは、世諦方便を説きて住すること有り、住せずとは、無常を説きて常相を破し、「住せざるに非ず」とは、滅相を破す。此の中に佛、自ら説きたまはく、「法性、法性の相は空なり。何となれば、自相空なるが故なり。乃至、無起、無作の諸餘の法も亦た是の如し」と。

【經】須菩提よ、汝が問ふ所の、誰か當に是の乘に乗じて出づべき者ぞとは、人の是の乘に乗じて、出づる者有ること無し。何となれば、是の乘及び出づる者、用ふる所の法、及び出づる時、是の一切の法は皆な所有無ければなり。若し一切法にして所有無くんば、何等の法を用ゐてか當に出づべけん。何となれば、我は不得なり。乃至知者、見者は不可得なり。畢竟淨なるが故なり。不可思議性は不可得なり、畢竟淨なるが故なり。衆、入界は不可得なり、畢竟淨なるが故なり。檀那波羅淨は不可得なり、畢竟淨なるが故なり。乃至般若波羅蜜は不可得なり、畢竟淨なるが故なり。内空は不可得なり、畢竟淨なるが故なり。乃至無法有法空は不可得なり、畢竟淨なるが故なり。四念處は不可得なり、乃至十八不共法も不可得なり、畢竟淨なるが故なり。須陀洹は不可得なり、乃至阿羅漢、辟支佛、菩薩、佛も不可得なり、畢竟淨なるが故なり。

【二五】元・石兩本に據れば「法性の法性たるは空なるが故なり」とす。  
【二六】「住處」二字、宋・宮聖三本は「所住」、元・明二本は「所住の處」となす。



人は則ち無相の法中をして出でしめんと欲するなり。此の中に佛、自ら説きたまはく、「五衆は空相なり、三界を出づること能はず。薩婆若に至ること能はず。(夫は)五衆の中、五衆の相は空なるが故なり。十二入、乃至意觸因縁生の受の空なるも、亦た是の如く、夢等の空の譬喩も亦た是の如し。自相空なるが故に、出づること無く、至ること無し。若し人、六波羅蜜をして出でしめんと欲せば、此の人は則ち爲に無相の法をして、出でしめんと欲するなり。何となれば、六波羅蜜は、因縁和合なるが故に、自性無く、自性無きが故に、空なればなり。菩薩は六波羅蜜に著して、邪道に墮するが故に、爲に空を説く。十八空、乃至一切種智も亦た是の如し」と。

問うて曰はく、六波羅蜜には道、俗有り。俗は著す可きが故に、空を説く可し。出世間の六波羅蜜、三十七品、乃至十八不共法は(共に)著する所無きが故に何を以て空を説くや。

答へて曰く、諸の菩薩は、漏未だ盡くさず、福德智慧の力を以ての故に、是の法を行じ、或は相を取りて、愛著するが故なり。凡夫の法は虚妄顛倒なり。此の法は、凡夫の法の邊従り生ず。云何ぞ是れ實ならん。是を以ての故に、佛の説きたまはく、「是も亦た空なり。喩を以てすれば、無相の法は、是れ大乘にして、即ち是れ無相なり。無相ならば云何ぞ出有り、至ること有らん」と。諸法は皆な空にして、但だ名字の相、假名、語言のみ有り。今、名字等も亦た空なり。喩を以てすれば、無相は第一義の中には不可得なり、世俗法の中には相有り。名字等の假名の相の義は先に説くが如し。是の如きの法を用つて、三界従り出で、薩婆若の中に至りて住す。是れの實法に非ず、亦た動する所無し。

【經】須菩提よ、汝が問ふ所の、是の乗は何處に住するやとは、須菩提、是の太乗には住處無し。何となれば、一切法には住相無ければなり。是の乗、若し住するも、住法に住せず。須菩提、譬へば法性の生ぜず、滅せず、垢づかず、淨からず、起無く、作無く、住に非ず、不住に非ざるが如し。須菩提、是の乗も亦た是の如く、住にあらず、不住に非ざるなり。何となれば、法性の相、乃至無作の相は、住にあらず、不住に非

【三】「起」字、宋・元・明三本及び宮本聖本は「相」に作る。

答へて曰く、是の乘は是れ菩薩の法より、乃ち金剛三昧に至る、是の諸の功德は、清淨にして變じて佛法と爲る。是の乘には大力有りて能く去る所有り、直に以て佛に至る。更に勝處の去るべき無きが故に住すと言ふなり。譬へば、劫盡の火、三千世界を燒き、勢力甚だ大なるも、更に燒く所無きが故に、便ち自ら滅するが如く、摩訶衍も亦た是の如し。一切の煩惱を斷じ、諸の功德を集めて、其の邊際を盡し、更に斷ずる所無く、更に知る所無く、更に集むる所無きが故に、便ち自ら滅に歸す。

「不二の法」とは、諸の菩薩の著を斷ずるが故に説く。此の中に佛、自ら説きたまはく、「大乘と薩婆若と是の二法は、一ならざるが故に合せず。異ならざるが故に六情の所知を散せず。虚妄を盡くすが故に色なく形無く、對無く一相なり」と。

問うて曰はく、先には一ならざるが故に合せずと言ふ。今、何を以てか一相なりと言ふや。

答へて言はく、此の中に一相と言ふに、所謂、無相なり。無相なれば、則ち佛道に出至することは有ること無し。凡夫の人を引導せんが爲の故に、説きて一相と言ふ。

「實際」とは、是れ諸法の末後なり、實相には出無く入無し。若し狂人有りて、實際をして佛道に出至せしめんと欲せば、此の人は則ち無相の法をして出でしめんと欲するなり。「如、法性」の法相は先に説くが如し。

「不可思議性」とは、有人の言はく、「即ち是の如、法性、實際、無量無邊の心、心數法は滅なるが故に、不可思議と言ふ」と。復た有人の言はく、「實際、涅槃を過ぎて、更に諸法の實を求むるに、若は有、若は無なり。是を不可思議と名く」と。復次に、一切諸佛の法は、能く思惟し、籌量する者有ること無きが故に、不可思議と名く。復た有人の言はく、「一切諸法を分別し、思惟するに、皆な同じく涅槃の相なり。是れ不可思議なり」と。若し人、空中をして出でしめんと欲せば、此の

なれば、不生の性、乃至無作、無作三の性は空なるが故なり。須菩提、是の因縁を以ての故に、摩訶衍は三界の中從り出でて、薩婆若の中に至りて住す。(夫は)動ぜざる法の故なり。

【論】問うて曰く、佛は已に須菩提の問ふ所を知りたまふ。今、何を以てか、更に稱して而も答へたまへるや。

答へて曰く、是の摩訶般若波羅蜜經は、十萬偈、三百二十萬言有り、四阿含と等しきなり。此は一座に説き盡したまひしに非ず。又た上に須菩提の問ふ所は已に答へたまへり。二事は時を異にし、日を異にするが故に、第三問を稱して而も答へ給ひしなり。復次に、有人の言はく、「聲聞法の中には、不思議の事有ること無く、一日、一坐の中に説き盡くすことを得ず」と。佛は無礙解脫有り、菩薩は不可思議三昧有りて、能く多事をして少時と作らしめ、心時を多時と作し、亦た能く大色を以て小に入れ、小色を大と作す。又た六十小劫、法華經を説くに、人、「且從り食に至る」と謂ふが如し。

問うて曰く、色は有形にして見る可く、時は無形にして、但だ名のみ有り。云何にして近きを以て遠しと爲し、遠きを以て近しと爲すことを得ん。

答へて曰はく、是を以ての故に、「不可思議神通の力を以てす」と説く。人の夢中に、夢に見る所有りとし、自ら以て覺せりと爲し、夢中に復た夢み、是の如く展轉するが故に、是の一夜あるが如し。是を以ての故に、更に其の間を稱して而も答へたまへり。是の乘は何處より出で、何處に至りて住するやとは、佛、答へたまはく、「是の乘は、三界の中從り出でて、薩婆若の中に至りて住すと。

問うて曰く、是の乘は是れ佛法と爲んや、又は是れ菩薩の法なりと爲んや。若し是れ佛法ならば、云何にして三界より出づるや。若し是れ菩薩の法ならば、云何にして薩婆若の中に住するや。

【三】原文「無作性の性は空云々」に作るが今は、宋・元・明・宮・聖・石諸本に據る。

でず、亦た薩婆若に住せざればなり。須菩提よ、若し人、檀波羅蜜をして出でしめんと欲せば、是の人は、無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。若し人、尸羅波羅蜜、髣提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜をして出でしめんと欲せば、是の人は、無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。何となれば、檀波羅蜜の相は、三界を出でず、亦た薩婆若にも住せざればなり。所以何となれば、檀波羅蜜、檀波羅蜜の相は空なり。尸羅波羅蜜、髣提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜の相は空なるが故なり。

若し人、内空を出で、乃至、無法有法空を出でしめんと欲せば、是の人は、無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。何となれば、須菩提、内空の相、乃至無法有法空の相は、三界を出でず、亦た薩婆若に住せざればなり、所以何となれば、内空、内空の性は空なり、乃至、無法有法空、無法有法空の性は空なるが故なり。若し人、四念處をして出でしめんと欲せば、是の人は、無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。何となれば、四念處の性は、三界を出でず、亦た薩婆若に住せず。所以何となれば、四念處、四念處の性は、空なるが故なり。若し人、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分をして出でしめんと欲せば、是の人は、無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。何となれば、八聖道分の性は、三界を出でず、亦た薩婆若にも住せざればなり。所以何となれば、八聖道分の性は空なるが故なり。乃至十八不共法も亦た是の如し。須菩提、若し人、阿羅漢をして生處を出でしめんと欲せば、是の人は、無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。若し人、辟支佛をして生處を出でしめんと欲せば、是の人は、無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。若し人、多陀阿伽度、阿羅訶、三藐三佛陀をして出でしめんと欲せば、是の人は、無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。何となれば、須菩提、阿羅漢の性は、辟支佛の性は、佛の性は、三界を出でず、亦た薩婆若に住せざればなり。所以何となれば、阿羅漢、阿羅漢の性は空なり、辟支佛、辟支佛の性は空なり、佛、佛の性は空なるが故なり。若し人、須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、阿羅漢果、佛道、佛道、一切種智を出でしめんと欲せば、是の人は無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。上に説くが如し。若し人、名字、假名、施設の相をして、但だ語言有りて出でしめんと欲せば、是の人は、無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。何となれば、名字は空にして三界を出でず、亦た薩婆若に住せざればなり。所以何となれば、名字、名字の相は空なるが故なり。乃至施設も亦た是の如し。若し人、不生不滅の法、不垢、不淨、無作の法をして出でしめんと欲せば、是の人は、無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。何となれば、不生、乃至無作の法性は、三界を出でず、亦た薩婆若に住せざればなり。所以何と

に、佛は此の中に更に説きたまはく、「第十地の相とは、所謂、菩薩の六波羅蜜を行じ、方便力を以ての故に、乾慧地、乃至菩薩地を過ぎて、佛地に住することなり。佛地は即ち是れ第十地なり」と。菩薩は能く是の如く十地を行す、是を大乘に發趣すと名く。

## 第二十一 出 到 品

【經】佛、須菩提に告げたまはく、汝が問ふ所は、「是の乘は、何の處より出で、何の處に至りて住するか」となり。佛は言はん。是の乘は三界の中從り出でて、薩婆若の中に至りて住す。(夫は)不二の法を以ての故なり。何となれば、摩訶衍と薩婆若との是の二法は、共にして合せず、散ぜず、色無く、形無く、對無く、一相にして、所謂無相なり。若し人、實際をして出でしめんと欲せば、是の人は無相の決をして出でしめんと欲すと爲す。若し人、如・法性・不可思議性をして、出でしめんと欲せば、是の人は、無相の法をして出でしめんと欲す。若し人、色空をして出でしめんと欲せば、是の人は、無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。若し人、受想行識空をして、出でしめんと欲せば、是の人は、無相の法をして、出でしめんと欲す。何となれば、須菩提、色空の相は三界を出でず、亦た薩婆若に住せず。受相行識空の相は三界を出でず、亦た薩婆若にも住せざればなり。所以何となれば、色、色相は空なり、受想行識相も空なるが故なり。

若し人、眼空をして出でしめんと欲せば、是の人は、無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。若し人、耳鼻舌身意空をして出でしめんと欲せば、是の人は、無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。若し人、乃至意觸因縁生の受空をして出でしめんと欲せば、是の人は、無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。何となれば、須菩提、眼空は三界を出でず、亦た薩婆若に住せず、乃至意觸因縁生の受空も三界を出でず、亦た薩婆若に住せざればなり。所以何となれば、眼、眼想は空なり、乃至意觸因縁生の受、意觸因縁生の受相は空なるが故なり。

若し人、夢をして出でしめんと欲せば、是の人は、無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。若し人、幻、焰、響、影、化をして出でしめんと欲せば、是の人は、無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。何となれば、須菩提、夢想は三界を出でず、亦た薩婆若に住せず、幻、焰、響、影、化の相も亦た三界を出

ることは、先に説けるが如し。佛、此の中に自ら説きたまはく、「是の菩提樹は黄金を以て根と爲し、七寶を莖節枝葉と爲し、莖節枝葉の光明は、遍ねく十方無數阿僧祇の諸佛の世界を照らす」と。或は佛有り、菩薩の七寶を以て佛樹を莊嚴す。或は是に如かざる者有り。所以何となれば、諸佛の神力は不可思議にして、衆生の爲の故に、種種の莊嚴を現じたまへばなり。「一切の諸善功德を成満し具足す」とは、菩薩は七地の中に住して、諸の煩惱を破し、自利を具足し、八地・九地に住して、他人を利益す。所謂、衆生を教化し、佛世界を淨む。自ら利し他を利すること深大なるが故に、一切の功德を具足す。阿羅漢、辟支佛の如きは、自利を重んずと雖も、利他を輕んずるが故に具足と名けず。諸天及び小菩薩は能く利益すと雖も、而も自ら未だ煩惱を除かざるが故に亦た具足と名けず。是を功德を具足すと名く。「九地竟り」

「當に知るべし、佛の如し」とは、菩薩は是の如く、樹下に坐して、第十地に入るを名けて、法雲地と爲す。譬へば大雲の雨を澍ぎ、連りに下りて間無きが如く、心に自然に無量無邊の清淨なる、諸佛の法を生ずること、念念に無量なり。爾の時、菩薩は是の念を作さく、「欲界の魔王の心は、未だ降伏せず」と。眉間の光を放ちて、百億の魔宮をして、闇蔽して現ぜざらしむ。魔は即ち瞋惱し、其の兵衆を集め、來りて菩薩に逼る。菩薩、魔を降し已るに、十方の諸佛は、其の功勳を慶び、皆な眉間の光を放ちて、菩薩の頂從り入りたまふ。是の時、十地に得る所の功德は、變じて佛法と爲り、一切の煩惱の習を斷じて、無礙解脫を得、十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、大慈大悲等の、無量無邊の諸佛の法を具す。是の時、地は爲に六種に震動し、天は華香を雨らし、諸の菩薩、天、人は、皆な手を合せて讚歎す。是の時、大光明を放ちて、遍ねく十方無量の世界を照らすに、十方の諸佛、諸菩薩、天、人は大聲に唱へて言はく、「某方、某國、某甲の菩薩、道場に坐して、佛事を成具す。是れ其の光明なり」と。是を十地と名く。當に知るべし佛の如くなることを。復次

菩薩は、蓮華に化生す。四生の中に於いて、菩薩は胎生、化生なり。四種の人中に於ては、菩薩は刹帝利、婆羅門の二姓の中に生ず。此の二種の姓に生るるは、人の貴ぶ所なるが故なり。

家を成就すとは、婆羅門の家は智慧有り、刹帝利の家は力勢有り。婆羅門は後世を利益し、刹帝利は今世を利益す。是の二種は世に於て益有り、是の故に菩薩は此の中に在りて生ず。復次に、諸の功德法の家は、所謂、不退轉の生なり。是を家生成就と名く。「姓成就す」とは、菩薩は兜率天上より、世間の何姓を貴と爲して、能く衆生を攝するかを觀じ、即ち是の姓中に於て生ず。七佛の中、初の三佛は憍陳如姓の中に生れ、次の三佛は迦葉姓の中に生れ、釋迦文尼佛は憍曇姓の中に生れたまへるが如し。復次に、菩薩は初より、深心にして牢固なり。是を諸佛の姓と名く。有人の言はく、「無生法忍を得る。是れ諸佛の姓なり。是の時、佛の一切種智の氣分を得るが故なり。

聲聞法の中の三姓・地・人の如し」と。

「眷屬成就す」とは、(眷屬は)皆な是れ智人、善人にして、世世に功德を集む。此の中に佛、自ら説きたまはく、「純ら菩薩を以て眷屬と爲す」と。不可思議經の中に説くが如きは、「瞿毘耶は是れ大菩薩なり。一切の眷屬は皆な是れ阿毘跋致地に住す。菩薩は方便三昧變化力を以て男と爲り、女と爲り、共に眷屬と爲る。轉輪聖王の居士の寶もて是の夜叉、鬼神を人身に現作し、人と事を共にせしむるが如し」と。「出家成就す」とは、釋迦文菩薩の如きは、夜、宮殿に於いて、諸の姝女を見るに、皆な死せる狀の如し。十方の諸天、鬼神は幡華、供養の具を齎持して、迎へ奉りて將に出でんとす。是の時、車匿は淨飯王の勅を受くと雖も、而も菩薩の意に隨つて、自ら馬を牽きて至る。四天王の使者は、馬足を接捧して城を踰えて出づ。諸の煩惱及び魔人を破せんが爲に、一切の衆人に示すらく、「在家の穢は此の如し。大功德貴重の人すら猶尙出家す。況んや諸の凡(夫)細(人)をや」と。是の如き等の因縁を、出家成就と名く。佛樹を莊嚴することを成就す」とは、菩提樹を莊嚴す

【三】「姑」字、元・明二本「性」に作る。

「所願の如くなることを得」とは、是の菩薩は、福德智慧を具足するが故に、願として得ざる無く、聽く者は、無量無邊世界の度する所の分を聞く。疑へば得べからざるなり。是を以ての故に、次に願ふ所、意の如しと説く。此の中に、佛、自ら「六波羅蜜の具足」を説きたまへり。五度は則ち福德を具足し、般若は則ち智慧を具足す。「諸天、龍、夜叉、毘闍婆の語を知る」とは、我れ上に福德智慧を具足すれば、願ふ所意の如しと説けり。他人の種種の語を知るは、即ち是れ願ふ所の事なり。復次に、菩薩は宿命【一〇】智清淨なることを得るが故に、處處の生の一切の語を知るなり。復次に、願智を得るが故に、立名を知る者は、心に強ひて種種の名字語言を作す。

復次に、菩薩は解衆生語言三昧を得るが故に、一切の語に通じて礙無きなり。復次に、自ら四無礙智を得、又復た佛の四無礙智を學す。是を以ての故に衆生の語言、音聲を知る。

「處胎成就す」とは、有人の言はく、「菩薩は白象に乗じ、無量の兜率の諸天の與に、圍遶し恭敬し供養し侍從せられて母胎に入る」と。有人の言はく、「菩薩の母は如幻三昧力を得るが故に、腹をして廣大無量ならしめ、一切の三千大千世界の菩薩、及び天、龍、鬼神皆な入出することを得、胎中に宮殿、臺觀有り。先づ床座を莊嚴し、繒幡蓋を懸け、華を散し香を燒く。皆な是れ菩薩の福德業の因縁の感する所なり。然る後に菩薩は來り下りて之に處す。亦た三昧力を以ての故に、下りて母胎に入り、兜率天上に於いては故の如し」と。「生成就す」とは、菩薩生ぜん欲する時は、諸天、龍、鬼神、三千大千世界を莊嚴し、是の時に七寶の蓮華座有りて、自然にして有り、母の胎中從り無量の菩薩有りて先づ出で、蓮華の上に坐し、又手し讚歎して菩薩を【三】俟待す。及び諸天、龍、鬼神、仙聖、諸の玉女等は、皆な手を合せて、一心に菩薩の生ずるを見んと欲す。然る後に、菩薩は母の右脇從り出づること、滿月の雲中從り出づるが如く、大光明を放ちて無量の世界を照らす。是の時、大名聲有りて、十方世界に遍滿し、唱へて言はく、「某國の菩薩、最後の身生ず」と。或は有

【一〇】「智」字、石本「智慧」に作る。

【三】「俟待」二字、聖本「使侍」に作る。



の兵衆、宮殿、城郭、飲食、歌舞、殺活、憂苦等なり。菩薩も亦た是の如く、是の三昧の中に住して、能く十方世界に於いて變化し、其の中に遍滿し、先づ布施等を行じて衆生に充滿し、次に法を説き、教化して三惡道を破壊し、然る後に衆生を三乘に安立し、一切の利益すべき所の事は成就せざること無し。是の菩薩は心不動にして、亦た心相をも取らざるなり。「常に三昧に入る」とは、菩薩は如幻等の三昧を得て、役する所の心に能く所作有り、<sup>一九</sup>今、身を轉じて報生三昧を得。人の色を見るに、心力を用ゐざるが如く、是の三昧の中に住すれば、衆生を度すること安隱にして、如幻三昧に勝り、自然に事を成じて、役用する所無し。人の財を求むるに、力を役して得る者有り、自然に得る者有るが如し。「衆生所應の善根に隨つて身を受く」とは、菩薩は二種の三昧、二種の神通の行得、報得を得。何の身を以て、何の語を以て、何の因縁を以て、何の事を以て、何の道を以て、何の方便を以て(すべきか)を知り、而して爲に身を受け、乃至畜生の身を受けて、之を化度す。(八地竟り)

「無邊の世界に度する所の分を受く」とは、無量阿僧祇、十方世界の六道の中の衆生にして、是の菩薩の教化して應に度すべき所の者は而も之を度す。是の世界に三種有り、淨なる有り、不淨なる(有り)。雜なる有り。是の三種の世界の中の衆生にして、應に度す可き所、利益有る者は皆な之を攝取す。譬へば燈を然すは、目有る人の爲にして、盲者の爲ならざるが如し。菩薩も亦た是の如く或は先に因縁有る者あり。或は始めて因縁を作す者あり。復次に、三千大千世界を一世界を一世界と名け、一時に起り、一時に滅す。是の如き等の、十方の如恆河沙等の世界は、是れ一佛の世界なり。是の如き一佛の世界の數、如恆河沙等の世界は、是れ一佛世界の海なり。是の如き佛世界の海の數、如十方恒河沙の世界は、是れ佛世界の種なり。是の如き世界の種は十方に無量なり。是を一佛世界と名け、一切世界の中に於いて、是の如き分を取る、是を一佛の度したまふ所の分と名く。

【一九】「今」字、宋・元・明・宮諸本は「念」に作る。然れば「所作の念有り、身を轉じて」云々とす。

戲することを得、能く無量無邊の世界に至る。菩薩は七地の中に住する時、涅槃を取らんと欲す。爾の時、種種の因縁及び十方の諸佛有りて、衆生を擁護し、心に衆生を度せんと欲し、莊嚴神通を好むに、意に随つて自在にして、乃ち無量無邊の世界の中に、罣礙する所無く、諸佛の國を見たまつり、亦た佛國の相をも取らざるに至る。「諸佛の國を觀ず」とは、有菩薩は、神通力を以て、飛んで十方に到り、諸の清淨世界を觀じ、相を取りて自ら其の國を莊嚴せんと欲す。有菩薩は、佛、將ツキめて十方に至り、清淨世界を示したまふに、淨國の相を取りて自ら願行を作す。世自在王佛の法積比丘を將ツキめて十方に至り、清淨世界を示したまへるが如し。或は有菩薩は自らは本國に住し、天眼を用つて、十方の清淨世界を見、初は淨相を取るも、後に不著の心を得るが故に還つて（之を）捨つ。「見る所の佛國の如く、自ら其の國を莊嚴す」とは、先に説くが如し。是の八地を轉輪地と名く。轉輪ニ「聖」王の寶輪の至る處には、礙無く、障無く、諸の怨敵無きが如し。菩薩は是の地の中に住して、能く法寶を雨あめらし、衆生の願を滿し、能く障礙するもの無し。亦た能く見る所の淨國の相を取り、而して自ら其の國を莊嚴す。「實の如く佛心を觀ず」とは、諸佛の身を觀するに、幻の如く、化の如く、五衆、十二入、十八界の所攝に非ざるなり。若は長、若は短、若干種の色は、衆生の先世の業因縁の見る所に隨ふ。此の中に佛、自ら説きたまはく、「法身を見る者、是れ佛を見たまつると爲す。法身とは不可得法空なり。不可得法空とは、諸の因縁の邊より生じ、法として自性有ること無し」と。「上根の諸根を知る」とは、十力の中に説くが如し。菩薩は先づ一切衆生の心の所行を知り、誰か鈍、誰か利、誰か布施多く、誰か智慧多しと（知り）、其の多き者に因りて之を度脱す。「佛國土を淨む」とは、二種の淨有り、一には菩薩は自ら其の身を淨め、二には衆生の心を淨めて清淨の道を行ぜしむ。彼我の因縁、清淨なるを以ての故に、所願に随つて、清淨世界を得るなり。「如幻三昧に入る」とは、幻人は一處に住するも、所作の幻事は世界に遍滿するが如し。所謂、四種

【七】 原本「擁護還生心欲」云々、今は宋・宮本に據つて「擁護衆生心欲」云々を採用譯生す。

【八】 「聖」字挿入は宋・元・明宮諸本に従ふ。

法空にして、定慧等しきが故に、能く安隱に菩薩の道を行じ、阿鞞跋致地從り、漸漸に一切種智を得。「慧地に意を調ふ」とは、是の菩薩は、先づ老病死の三惡道を憶念し、衆生を愍念するが故に、心意を調伏し、今、諸法實相を知らしむるが故に、三界に著せず、三界に著せざるが故に調伏す。「心寂滅」とは、菩薩は涅槃の爲の故に、先づ五欲の中に於いて、五情を折伏し、意情は折伏し難きが故に、今、七地に住して、意情寂滅なり。「無礙智」とは、菩薩は般若波羅蜜を得て、一切の實、不實の法中に於いて無礙なり。是の道慧を得て、一切衆生を將ゐて實法に入り、無礙解脫を得、佛眼を得て、一切法の中に於いて、無礙ならしむ。

問うて曰はく、是の七地の中に何を以てか佛眼を得と説くや。

答へて曰はく、是の中に應に佛眼を學すべし。諸法に於いて無礙なること佛眼に似如せり。

「愛に染ます」とは、是の菩薩は七地に於いて、智慧力を得と雖も、猶ほ先世の因縁有りて此の肉身有り。禪定に入れば著せざれども、禪定を出づる時は著氣有りて、此の肉眼の所見に隨ひ、好人を見ては親愛し、或は是の七地の智慧の實法を愛す。是の故に佛、説きたまはく、「六塵の中に於いて捨心を行じ、好惡の相を取らず」と。「七地竟り」

「衆生の心に順入す」とは、菩薩は是の八地の中に住し、一切衆生の心の趣く所を順觀し、動發し、思惟し、深く念じて順觀し、智慧を以て分別して、是の如きの衆生は、永く得度の因縁無し、是の衆生は、無量阿僧祇劫を過ぎて、然る後に度す可し、是の衆生は或は一劫、<sup>二五</sup>二劫、乃至、十劫にして度す可し、是の衆生は、或は一世、二世、乃至、今世に度す可し、是の衆生は、或は即時に度すべき者なり、是の衆生は熟せり、是の衆生は未熟なり、是の人は聲聞乘を以て度す可く、是の人は辟支佛乘を以て度す可しと知る。譬へば良醫の病を診して、<sup>二六</sup>差ゆることの久しき、近き、治す可き、治す可からざるを知るが如し。「諸の神通に遊戲す」とは、先に諸の神通を得て、今、自在に遊

【二五】「二劫乃至」四字、宋・宮・聖三本無之。

【二六】「差」字、宋・元・明三本及び宮本は「瘡」に作る。兩者同義なり。

福德・清淨なり。諸の善根・福德・清淨なるが故に、是を無礙莊嚴なり。

「一切の法を等しく觀ず」とは、法等忍の中に説くが如し。此の中に佛、自ら説きたまはく、「諸法に於いて増損せず」と。諸法の實相を知るとは、先に種種の因縁廣く説くが如し。

「無生法忍」とは、生滅無き諸法實相の中に於いて、信受し通達して、無礙不退なり、是を無生忍と名く。「無生智」とは、初は忍と名け、後を智と名く、龜なる者は忍、細なる者は智なり。佛、自ら説きたまはく、「名色の不生なることを知るが故なり」と。「諸法は一相なりと説く」とは、菩薩は、「内外の十二入は、皆な是れ魔網にして、虚誑不實なり。此の中に於いて、六種の識を生ずるも、亦た是れ魔網にして虚誑なり」と知る。何者か是れ實にして唯だ不二の法なる。眼無く、色無く、乃至意無く、法無き等、是を實と名く。衆生をして十二入を離れしむるが故に、常に種種の因縁を以て、是の不二法を説く。「分別の相を破す」とは、菩薩は是の不二法の中に住して、所縁の男女、長短、大小等、諸法を分別するを破す。「憶想を轉ず」とは、内心に諸法等を憶想し、分別するを破す。「見を轉ず」とは、是の菩薩は先づ我見、邊見等の邪見を轉じ、然る後に道に入る。今、法見、涅槃見を轉ずるは、諸法に定相無きを以てなり。「涅槃を轉ず」とは、聲聞、辟支佛の見を轉じて、直に佛道に趣くなり。

「煩惱を轉ず」とは、菩薩は福德・持戒の力を以ての故に、龜なる煩惱を折伏して、安隱に道を行ずるも、唯だ愛・見・慢等の微細の者の在る有り。今、亦た細なる煩惱をも離る。復次に、菩薩は實智慧を用つて、是の煩惱は則ち是れ實相なりと觀ず。譬へば神通の人は、能く不淨を轉じて、淨と爲すが如し。

「定慧を等うる地」とは、菩薩は初め三地に於いては慧多く定少し、未だ心を攝すること能はざるが故なり。後の三地には定多く慧少し。是を以ての故に、菩薩位に入ることを得ず。今、衆生空、

に利根なり。利根なるが故に、諸法を分別して相を取る。是を以ての故に七地の中には、相空を以て空を具足すと爲す。佛は或る時には有爲空、無爲空を説きて空を具足すと名け、或る時には不可得空を説きて空を具足すと名けたまへり。

「無相を證す」とは、無相は即ち是れ涅槃にして證すべく修す可からず。修す可からざるが故に、知ると言ふことを得ず。無量無邊にして、分別す可からざるが故に、具足と言ふことを得ず。

「無作を知る」とは、三事は通すと雖も、是く二事を知りて、更に義(を以て)其の名を立つ。無作は但だ名のみを知るに有り。

「三分清淨なり」とは、所謂十善道にして、身の三、口の四意の三、是を三分と名く。已に上に三解脱門を説くを以ての故に、此の中には復た説かず。三分清淨なりとは、或は人の身業清淨にして、口業清淨ならず、口業清淨にして、身業清淨ならず、或は身口業は清淨なれども、意業は清淨ならざる有り。或は世間に三業清淨なるも、而も未だ著を離るること能はざるもの有り。是の菩薩は、三業清淨にして、及び著を離るるが故に、是を三分清淨なりと名く。

「一切衆生の中にて、慈悲と智とを具足す」とは、悲に三種有り、(所謂)衆生縁、法縁、無縁なり。此の中には無縁の大悲を説いて具足すと名く。所謂、法性空乃至實相も亦た空なり。是を無縁の大悲と名く。菩薩は深く實相に入り、然る後に衆生を悲念す。譬へば人に一子有り、好き寶物を得、則ち深心に愛念して、以て之を與へんと欲するが如し。

「一切衆生を念ぜず」とは、所謂、世界を淨むることを具足するが故なり。

問うて曰はく、若し衆生を念ぜずんは、云何にして能く佛世界を淨むるや。

答へて曰はく、菩薩は衆生をして、十善道に住せしめ、佛國を莊嚴することを爲す。莊嚴すと雖も、未だ無礙の莊嚴を得ず。菩薩をして、衆生を教化し、衆生の相を取らざらしむれば、諸の善根。

【三】元・明兩本は「自相空」に作る。

【四】宋・元・明三本及び宮本聖本石本俱に「生縁」に作る。

生は、必ず三乘に至ればなり。

云何に菩薩は、佛樹を莊嚴することを成就するや。是の菩提樹は、黄金を以て根と爲し、七寶を莖・節・枝・葉と爲し、莖節枝葉の光明、遍ねく十方阿僧祇の三千大千世界を照らすなり。云何に菩薩は、一切諸の善九〔根〕、功徳を成滿し具足するや。菩薩は衆生を清淨にし、佛界にも亦た淨むることを得、是を菩薩は九地中に住して十二法を具足すと爲す。

云何なれば菩薩は、十地の中に住し、當に佛の如しと知るべしといふや。若し菩薩摩訶薩は六波羅蜜を具足し、四念處乃至十八不共法、一切種智を具足し。〔圓〕滿して、一切の煩惱及び習を斷ず、是を菩薩摩訶薩、十地の中に住し、當に佛の如しと知るべしと爲す。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、是の十地の中に住し、方便力を以ての故に、六波羅蜜を行じ、四念處乃至十八不共法を行じ、乾慧地、性地、八忍地、見地、薄地、離欲地、已作地、辟支佛地、菩薩地を過ぎ、是の九地を過ぎて佛地に住す。是を菩薩の十地と爲す。是の如く、須菩提、是を菩薩摩訶薩、大乘に發趣すと名く。

【論】〔論〕者の言はく、我等の二十法は、不可得なるが故に著せず。不可得の因縁は、先に種種に説けるが如し。我見、乃至知者、見者、佛（に依る）見、僧（に依る）見は、是れ衆生空に入るが故に、是の見到著すべからず。餘の斷・常乃至戒見、是の法は空なるが故に著すべからず。

問うて曰く、餘は知るべし、因見は云何。

答へて曰く、一切の有爲法は、展轉して因果と爲る。是の法の中に著し、心に相を取りて、見を生ずる、是を因見と名く。所謂、因に非ざるを因と説き、或は因果の一異等（を説く）なり。

「空を具足す」とは、若し菩薩、能く盡く十八空を行ぜば、是を空を具足すと名く。復次に、二種の空、（所謂）衆生空と法空を行する、是を空を具足すと名く。復次に、若し菩薩、能く畢竟空を行じて、中に於いて著せざれば、是を空を具足すと名く。

問うて曰く、若し爾らば、佛は此の中に何を以てか、但だ自相空のみを説きたまひしや。

答へて曰はく、此の三種の空は、皆な是れ自相空なり。六地に住する菩薩は福徳あるを以ての故

【九】「根」字挿入は宋・元・明三本及び宮本に據る。

【一〇】「圓」字挿入は元・明二本に據る。

【一一】「忍」字、聖本石本「人」に作る。

【一二】〔論〕字附加は明本に據る。石本は「釋して言く」に作る。

り。云何なれば菩薩は見を轉ずるや。聲聞・辟支佛地に於て見を轉ずるが故なり。云何なれば菩薩は煩惱を轉ずるや。諸の煩惱を轉ずるが故なり。云何なれば菩薩は定慧を等うする地なるや。所謂、一切種智を得るが故なり。云何なれば菩薩は意を調ふや。三界に於て不動なるが故なり。云何なれば菩薩は心、寂滅なるや。六根を制するが故なり。云何なれば菩薩は無礙智なるや。佛眼を得るが故なり。云何なれば菩薩は愛に染まざるや。六塵を捨つるが故なり。是を菩薩は七地の中に住して、二十法を具足すと爲す。

云何に菩薩は、衆生の心に順入するや。菩薩は一心を以て、一切衆生の心及び心數法を知るなり。云何に菩薩は、諸の神通に遊戲するや。是の神通を以て、一佛國從り一佛國に至り、亦た佛國の想をも作さざるなり。云何に菩薩は、諸の佛國を觀ずるや。自ら其の國に住し、無量の諸の佛國を見、亦た佛界の想無きなり。云何に菩薩は、見る所の佛國の如く、自ら其の國を莊嚴するや。轉輪聖王の地に住し、遍ねく三千大千世界に至り、以て自ら莊嚴するなり。云何なれば菩薩は、實の如く佛身を觀ずるや。實の如く法身を觀ずるが故なり。是を菩薩は八地の中に住して、五法を具足すと爲す。

云何に菩薩は、上下の諸根を知るや。(夫は)菩薩は佛の十力に住して一切衆生の上下の諸根を知るなり。云何なれば菩薩は、佛國を淨むるや。衆生を淨むるが故なり。云何なるを菩薩の如幻三昧とするや。是の三昧に住して、能く一切を成辦し、亦た心相をも生ぜざるなり。云何なれば菩薩は、常に三昧に入るや。菩薩は報生三昧を得るが故なり。云何なれば菩薩は衆生所應の善根に隨つて身を受くるや。菩薩は、衆生の應に善根を生ずべき所を知り、而して爲に身を受けて衆生を成就するが故なり。是を菩薩は八地の中に住して、五法を具足すと爲す。

云何に菩薩は、無邊の世界、度する所の分を受くるや。十方無量の國土中の衆生を、諸佛の法の如く、度すべき所の者は之を度脱すなり。云何なれば菩薩は、願ふ所の如くなることを得るや。六波羅蜜を具足するが故なり。云何なれば菩薩は諸天・龍・夜叉・捷闍婆の諸辭を知るや。辯力の故なり。云何なれば菩薩は、胎生を成就するや。菩薩は世世に常に、化生するが故なり。云何なれば菩薩は家を成就するや。常に大家に在りて、生ずるが故なり。云何なれば菩薩は、所生を成就するや。若は刹(帝)利家に生じ、若は婆羅門家に生ずるが故なり。云何なれば菩薩は、姓を成就するや。過去の菩薩の生ずる所の姓の如く此の中從り生ずるが故なり。云何なれば菩薩は眷屬を成就するや。純ら諸の菩薩摩訶薩を眷屬と爲すが故なり。云何なれば菩薩は出生成就するや。生ずる時、光明遍ねく無量無邊の世界を照らし、亦た相を取らざるが故なり。云何なれば菩薩は出家成就するや。出家の時、無量百千億の諸天、出家に侍從し、是の一切の衆

【五】元・明兩本は「菩薩慧地」に作る。

【六】「五法」は元・明・聖・石諸本に據る、原文「四法」とするは「五法」の誤り。

【七】「諸」字、宋・元・明三本及び宮本聖本石本俱に「語」に作る。  
【八】「終」字、聖本「辨」に作る。

# 卷の第五十

## 第二十發趣品(續)

【經】

云何なれば菩薩は我は著せざるや。畢竟無我なるが故なり。云何なれば菩薩は衆生に著せず、壽命に著せず、衆數乃至知者、見者に著せざるや。是の諸法は畢竟不可得なるが故なり。云何なれば菩薩は斷見に著せざるや。法として斷ずるもの有ること無く、諸法は畢竟不生なるが故なり。云何なれば菩薩は常見に著せざるや。若し法、不生ならば、是れ常と作さざればなり。云何なれば菩薩は相を取るべからざるや。諸の煩惱無きが故なり。云何なれば菩薩は因見を作すべからざるや。諸見不可得なるが故なり。云何なれば菩薩は名色に著せざるや。名色處の相は無なるが故なり。云何なれば菩薩は五衆に著せず、十八界に著せず、十二入に著せざるや。是の諸法の性無きが故なり。云何なれば菩薩は三界に著せざるや。三界の性無きが故なり。云何なれば菩薩は應に心に著を作すべからざるや。云何なれば菩薩は應に願を作すべからざるや。云何なれば菩薩は應に願を作すべからざるや。是の諸法の性無きが故なり。云何なれば菩薩は佛に依るの見到著せざるや。依見を作せば佛を見たてまつらざるが故なり。云何なれば菩薩は法に依るの見到著せざるや。法は見る可からざるが故なり。云何なれば菩薩は僧に依るの見到著せざるや。僧相は無爲にして依る可からざるが故なり。云何なれば菩薩は戒に依るの見到著せざるや。罪無罪に著せざるが故なり。是を菩薩は七地の中に住して二十法に著すべからざる所と爲す。

云何なれば菩薩は應に空を具足すべきや。諸法の自相空を具足するが故なり。云何なれば菩薩は無相を證するや。諸相を念ぜざるが故なり。云何なれば菩薩は無作を知るや。三界の中に於て作さざるが故なり。云何なれば菩薩は三分清淨なるや。十善道を具足するが故なり。云何なれば菩薩は一切衆生の中、慈悲智具足するや。大悲を得るが故なり。云何なれば菩薩は一切衆生を念ぜざるや。佛、世界を淨むることを具足するが故なり。云何なれば菩薩は一切法を等しく觀するや。諸法に於て損益せざるが故なり。云何なれば菩薩は諸法實相を知るや。諸法實相、知ること無きが故なり。云何なれば菩薩は無生忍なるや。諸法は不生、不滅、不作の爲の故なり。云何なれば菩薩は無生智なるや。名色の不生なるを知るが故なり。云何なれば菩薩は諸法の一相を説くや。【一】心に二相を行ぜざるが故なり。云何なれば菩薩は分別相を破するや。一切法を分別せざるが故なり。云何なれば菩薩は憶想を轉ずるや。小大の無量の想轉ずるが故なり。

【二】宮本は「第二十品中十地釋論」、聖本は「釋第十九品下、訖第二十品」、等諸本異同あり。

【一】「不作」二字、元・明兩本「不作忍」に作る。  
 【三】「一」字挿入は元・明・石諸本に據る。  
 【四】「想」字、聖本「相」に作る。



からず」と説きたまへり。菩薩は、深く衆生を念するが故に、大悲心の故に、一切諸法の畢竟空なることを知るが故に、施す時に惜む所無く、求むる者有るを見れば、瞋らず、憂ひず、布施の後、心に亦た悔いず、福德大なるが故に、信力も亦た大に、深く清淨に諸佛を信敬したてまつり、六波羅蜜を具足し、未だ方便を得ずと雖も、無生法忍、般舟三昧の深法の中に於て、亦た疑ふ所無く、是の念を作さく、「一切の論議は皆な過罪有り。唯だ佛の智慧のみは、諸の戲論を滅して、闕失有ること無きが故に、而も能く方便を以て諸の善法を修す。是の故に疑はざるなり」と。【四九】〔六地竟り〕

【四九】 原文「大智度論卷第四十九」、聖本「釋第十九品上」附加。

の無常、苦火に没在するを愍念す。云何が安坐して、空く無益の事を説かん。如し人、火を失して、四邊に俱に起らば、云何ぞ其内に安處して、餘事を語り説かんや。此中に、佛の説きたはく、「若し聲聞・辟支佛の事を説くすら、猶ほ無益の言と爲す、何に況んや餘事をや」と。

「瞋恚を遠離す」とは、心中に初めて生ずるを瞋心と名く。未だ定まらざるを以ての故なり。瞋心増長して事定まり、打斫し、殺害する、是を惱心と名け、惡口し讒謗する、是を訟心と名け、若し殺害し、打縛する等は、是を闘心と名く。菩薩は大慈悲の衆生なるが故に、則ち是の心を生ぜず。常に此の惡心を防ぎて入ることを得せしめず。

「自ら大にして、人を蔑むを遠離す」とは、内外の法を見ず、所謂、受の五衆、不受の五衆なり。

「十不善道を遠離す」とは、菩薩は十不善道中の過罪、種種の因縁を觀することは先に説けるが如し。此の中に佛の説きたまはく、「十不善道は、小乗を破る、何に況んや大乘をや」と。「大慢を遠離す」とは、菩薩は十八空を行じて、諸法は定んで、大小の相有るを見ず。「自用を遠離す」とは、七種の憍慢の根本を抜くが故に、又た深く善法を楽しむが故なり。「顛倒を遠離す」とは、一切法中に常、樂、淨、我に不可得なるが故なり。「三毒を遠離す」とは、三毒の義は先に説けるが如し。又た此の三毒の所縁には定相有ること無し。「五地竟り」

六波羅蜜とは先に説けるが如し。此の中に、佛の説きたまはく、「三乗の人は、皆な此の六波羅蜜を以て、彼岸に到ることを得」と。

問うて曰く、此は是れ菩薩地なり。何を以つてか、聲聞・辟支佛は彼岸に到ることを得と説くや。答へて曰く、六波羅蜜は多く能くする所有り、大乘法中には則ち能く小乗を含受し、小乗は則ち能はず。是の菩薩は六地の中に住して六波羅蜜を具足し、一切諸法の空を觀するも、未だ方便力を得ずして、聲聞・辟支佛地に墮せんことを畏る。佛は將み護りたまふが故に、「聲聞・辟支佛心を生ずべ

【四六】「斫」字、聖本「破」に作る。

【四七】宋・元・明・宮・聖・石諸本は「心」字無し。

【四八】「淨、我、宋・元・明三本及び宮本「我、淨」に作る。

「一切の物を惜まず」とは、一切の物を惜まざる中に種種の因縁有りと雖も、此の因縁は最大なり。所謂、菩薩は、一切法の畢竟空を知り、憶念して一切の取相を滅せず。是の故に受者に於いて恩を求めず、惠施の中に高心無く、是の如くにして清淨なる檀波羅蜜を具す。〔四地竟り〕

「白衣に親しむことを遠離す」とは、行者は道を妨ぐるを以ての故に出家せり。若し復た白衣に習近せば、則ち本と異なること無けん。是を以ての故に、行者は先づ自ら度することを求めて、然る後に人を度す。若し未だ自ら度すること能はずして、而も人を度せんと欲する者は、浮ぶことを知らざる人の、溺るるを救はんと欲して、相與俱あひともに没するが如し。是の菩薩は、白衣に親しむことを遠離すれば、則ち能く諸の清淨の功德を集め、深く佛を念するが故に、身を變じて諸の佛國に至り、出家して頭を剃り、染衣を著く。所以何となれば、常に出家の法を樂んで、白衣に習近することを樂はざるが故なり。比丘尼を遠離すとは、初品の中に説くが如し。

問うて曰く、菩薩は等心に一切衆生を視る、云何なれば共に住することを得ざるや。

答へて曰く、是の菩薩は未だ阿鞞跋致を得ず、未だ諸漏を斷ぜず、諸の功德を集むる人にして、樂に著する所なり。是を以ての故に、共に住することを得ず。又た人の誹謗を離るるが爲なり。若し誹謗せば、地獄に墮するが故なり。

「他家を慳惜することを遠離す」とは、菩薩は是の念を作さく、「我れ自ら家を捨つるすら、尙ほ食らず惜まず、云何ぞ他家を貪惜せんや」と。菩薩の法は一切衆生をして、樂を得せしめんと欲す。彼の人は、我が衆生に與ふることを助く、云何が慳惜せんや。衆生は、先世の福德因縁、今世に少し。功夫有るが故に我を供養することを得、何を以てか慳嫉せんや。無益の談説を遠離すとは、此は即ち是れ稀語にして、自心他心の愁事を解くことを爲す。王法の事、賊の事、大海、山林、藥草、寶物、諸方の國土、是の如き等の事を説くは、福五に於て益無く、道に於て益無し。菩薩は一切衆生

【五】「福に於て益無く」原文四字、石本は之を闕く。

に、慳吝の心起りて、便ち自ら獨り食するは、甚だ慚愧す可きが如し。〔三地竟り〕

「阿蘭若住處を捨てず」とは、衆（人）を離れて獨り住し、若し聲聞・辟支佛心を過ぐれば、是れ衆（人）を離ると名く。一切法は、無所得空なるを以ての故に取らず。相に著せず、乃至、阿耨多羅三藐三菩提も亦た取らず。（夫は）著心有ること無きを用つての故なり。菩薩は、常に諸の功德を集めて、厭足すること無し。無上道を得れば、則ち足り、更に勝法無きが故なり。飲食、衣服、臥具に足ることを知るは、是れ善法の因縁にして、以て要と爲さざるが故に説かず。

「頭陀の功德を捨てず」とは、後に覺魔品の中に、無生法忍を説くが如し。此の中には、無生法忍を以て、頭陀と爲す。菩薩は、順忍に住して、無生法忍を觀ず。是の十二頭陀は、持戒清淨の爲の故なり。持戒清淨なるは、禪定の爲の故なり。禪定は、智慧の爲の故なり。無生法忍は、即ち是れ眞の智慧、無生法忍は、是れ頭陀の果報なり。（夫は）果中に因を説けばなり。

「戒を捨てず、戒相を取らず」とは、是の菩薩は諸法實相を知るが故に、尙ほ持戒を見ず、何に況んや破戒をや。種種の因縁ありと雖も戒を破らず、此れ最も大と爲す。（夫は）空解脱門に入るが故なり。汚穢の諸欲は、先に説けるが如し。此の中に佛の説きたまはく、「是の心相は、虚誑不實なりと知るが故に、乃ち欲心を生ぜざるに至る。何に況んや欲を受けんや」と。

「世間の心を厭ふ」とは、世間不可樂相の中に説くが如し。此の中に、佛の説きたまはく、「厭心の果報は所謂、無作解脱門なり」と。「一切の所有を捨つ」とは先に説けるが如し。

「心を没せず」とは、先に已に、種種の因縁もて説けり。菩薩は是の不没不畏の相を聞く。「二識處に生ぜず」とは、二識處とは、所謂、眼色の中に眼識を生ぜず、乃至意法の中に意識を生ぜざるなり。菩薩は、是の不二門の中に住して、六識の所知、皆な是れ虚誑無實なることを觀じて、大誓願を作さく、「一切衆生をして、不二法の中に住して、是の六識を離れしめん」と。

【四三】「法」字、宋・元・明・宮・聖各本に無之。

【四四】「相」字、宋・元・明・宮本「想」に作る。

【四五】原文「不没心」三字、明本は「心不没」即ち「心没せず」に作る。

莫れ」と。(二地竟り)

「多く學問して厭足すること無し」とは、菩薩は多く學問して、是の智慧の因縁を知り、智慧を得れば、則ち能く分別して道を行す。人に眼有れば、至る所に礙無きが如し。是の故に菩薩は、是の願を作さく、「十方の諸佛の説きたまふ所の法有り。我れ盡く受持せん。聞持陀羅尼の力の故に、清淨なる天耳力を得るが故に、不忘陀羅尼の力を得るが故に」と。譬へば、大海の能く一切十方の諸水を受持するが如し。菩薩も亦た是の如く、能く十方諸佛の説きたまふ所の法を受持す。

「法施を淨む」とは、苗中に草を生ぜんに、穢を除けば、則ち茂るが如し。菩薩も亦た是の如く、法施の時、名利、後世の果報を求めず、乃至衆生の爲の故に、小乗の涅槃を求めず、但だ大悲のみを以て、衆生に於て、佛の轉法輪、法施の相、莊嚴なる佛國の相に隨ひ、世間の無量の勤苦を受け、慚愧處に住して、阿蘭若住處を捨てざるなり。「少欲知足」は先に説くが如し。

問うて曰く、種種の因縁は、生死の中に在りて厭はず。何を以ての故に、但だ二因縁のみ厭はずと説くや。

答へて曰く、是れ善根備具の故に、生死の中に在るも苦惱薄少なり。譬へば、人瘡有らんに、良藥を之に塗れば、其の痛み差えて少し。菩薩は善根を得て清淨なるが故に、今世の憂愁、嫉妬、惡心等悉く皆な止息す。若し更に身を受くれば、善根の果報を得、自ら福樂を受け、亦た種種の因縁もて衆生を利益し、其の願ふ所に隨つて自ら世界を淨め、世界嚴淨にして、天宮に勝り、之を視るに厭ふこと無く、能く大菩薩の心を慰釋す。何に況んや凡夫をや。是を以ての故に、多くの因縁有りと雖も、但だ二事のみ厭ふこと無しと説く。慚愧に種種有りと雖も、此の中に大なる者は、聲聞・辟支佛心なり。菩薩は發心して、廣く一切衆生を度せんと欲す。苦惱を少なくすることを得て、獨り涅槃を取らんと欲するは、是れ慚愧す可し。譬へば、有人大に 箛箏を設けて、衆人を 請呼せん

【三七】宋・元・明・宮諸本「清淨なる天耳力の故に」、聖本「淨なる天耳力を得るが故に」に作る。

【三八】「十」字、聖本無之。

【三九】「藥」字、石本「醫」に作る。

【四〇】「箛」字、聖本「篳」に作る。

【四一】「呼」字、聖本「唵」に作る。

を以ての故に、其の照を取らざることを得ざるが如し。菩薩も亦た是の如く、師に於いて、智慧の光明を得、其の惡を計らず。

復次に、弟子は應に是の念を作すべし、「師は般若波羅蜜を行するに、無量の方便の力あり。知らず、何の因縁を以ての故に、此の惡事有るや」と。薩陀波崙の空中に、十方の佛の教を聞くが如し、「汝は法師に於いて、其の短を念すること莫れ、常に敬畏を生ぜよ」と。

復次に、菩薩は是の念を作さく、「法師の惡を好むは、是れ我が事に非ず。我が求むる所の者は、唯だ法を聞いて以て自ら利益せんと欲す。泥像、木像の如きは、實の功德無けれども、佛想を發するに因るが故に、無量の福德を得。何に況んや、是の人は智慧、方便もて能く人の爲に説くをや。是を以ての故に、法師には過有りと雖も、我に於いて咎無し」と。「世尊を想ふが如し」とは、我れ先に菩薩は世人に異なることを説けり。世人は好醜を分別して、好き者に愛著す、猶ほ佛に如かず。惡しき者を輕慢することは、了<sup>つひ</sup>に比數せず。菩薩は則ち然らず、諸法の畢竟空を觀じ、本從<sup>よ</sup>り已來、皆な無餘涅槃の相の如くし、一切衆生を觀じて、之を視ること佛の如くす。何に況んや法師をや。智慧利益有りて、能く佛事を作すを以ての故に、之を視ること佛の如し。

「諸波羅蜜を勤求す」とは、菩薩は是の念を作さく、「是の六波羅蜜は、是れ無上正眞道の因縁なり。我れ當に一心に、是の因縁を行すべし」と。譬へば、商人、農夫の適する所の國土、須ふる所の物、地に宜しき所の種子に隨つて、勤修し、求辦するに、事として成らざること無きが如く、又た今世に布施を行すれば、後に大富を得、戒を持てば、後に尊貴を得、禪定智慧を修すれば、道を得るが如し。菩薩も亦た是の如く、六波羅蜜を行すれば、則ち佛と成ることを得<sup>三三</sup>。道を勤求すとは、常に一心に六波羅蜜を勤求するなり。所以何となれば、若し軟<sup>三三</sup>心にして漸進せば、則ち煩惱の爲に覆はれ、魔人に壞せらる。是を以ての故に、佛、説きたまはく「二地の中に於いて、勤求して懈ること

【三三】「道字、宋・元・明・宮・聖各本無之。  
【三三】「軟字、聖・石兩本「濡」に作る。

復次に、菩薩は、人間を見るに、天祠有り、人の肉、血、五藏を用つて羅刹鬼を祀る。人の代る者有れば、則ち聽す。菩薩は是の念を作さく、「地獄の中に、若し當に是の如き代理有らば、我れ必ず當に代るべし」と。衆人は菩薩の大心の是の如くなるを聞きて、則ち之を貴敬し尊重す。所以何となれば、是の菩薩は、深く衆生を念すること、慈母に踰ゆるが故なり。

「師を信じ、恭敬し、諸受す」とは、菩薩は師に因りて、阿耨多羅三藐三菩提を得。云何ぞ師を信じ、恭敬し、供養せざらん。智徳高明なりと雖も、若し恭敬供養せずんば、則ち大利を得ること能はず。譬へば、深き井は美水なれども、若し三四ろどなほ 緩なれば、水を得るに由無きが如し。若し憍慢、高心を破して、宗尊敬伏なれば、則ち功德の大利、之に歸す。又た雨は墮ちて山頂に住せず、必ず下處に歸するが如く、若し人、憍心にして、自ら高ければ、則ち法水入らず、若し善師を恭敬すれば、則ち功德、之に歸す。復次に、佛の説きたまはく、「善師に依止すれば、持戒、禪定、智慧、解脱、皆な増長することを得」と。譬へば、衆樹は雪山に依れば、根莖、枝葉、華果、皆な茂盛なることを得るが如し。是を以ての故に、佛の説きたまはく、「諸の師に於いて、之を宗敬すること、佛の如くせよ」と。

問うて曰く、惡師を、云何ぞ供養し、信受することを得ん。善師すら、之を視ること、佛の如くなること能はず、何に況んや惡師をや。佛は何を以ての故に、此の中に、諸師に於いて尊ぶこと、世尊を想ふが如くせよと説きたまふや。

答へて曰く、菩薩は、世間の法に順すべからず。世間の法に順すれば、善者は心著し、惡者は之を遠離す。菩薩は則ち然らず。若し能く深義を開釋し、疑結を解散すること有りて、我に於いて益有れば、則ち心を盡くして之を敬ひ、餘惡を念せず、弊囊に寶を盡らんに、囊の惡しきを以ての故に、其の寶を取らざることを得ざるが如く、又た夜、嶮道を行き、弊人炬を執るに、人の惡しき

【譯】 聖本「願」に作る。

「歡喜を受く」とは、菩薩は、是の持戒を見るが故に、身口清淨なり。(復た)恩を知り、忍辱なるが故に、心清淨なり。(而して)三業清淨なるが故に、則ち自然に歡喜を生ず。譬へば、人、香湯に沐浴し、好き新衣を著け、瓔珞もて莊嚴し、鏡中に自ら觀ぜば、心に歡喜を生ずるが如し。菩薩も亦た是の如く、是の善法を得て自ら莊嚴す。戒は是れ禪定智慧の根本なり。我れ今、是の淨戒を得れば、無量無邊の福德、皆な應に得易し。是を以て自ら喜ぶ。菩薩は是の戒忍の中に住して、衆生を教化し、他方の佛前に生ずることを得、及び天上人中に生じて樂を受けしめ、或は聲聞、辟支佛乘を得せしむ。佛乘は、衆生の樂著を觀すること、長者の小兒の共に戯るるを觀て、亦た之と同じく戯れ、更に少しく異なる物を以て之を興へ、前の好む所を捨てしむるが如し。菩薩も亦た是の如く、衆生を教化して、人天の福樂を得せしめ、漸漸に誘進して三乘を得せしむ。是を以ての故に、歡喜の樂を受くと言ふ。

「一切衆生を捨てず」とは、善く大悲心を修集<sup>三</sup>し、誓つて衆生を度するが故に、發心牢固なるが故に、諸佛、賢聖の爲に輕笑せられざるが故に、一切衆生に負くを恐るるが故に、捨てざるなり。譬へば、先づ人に物を許し、後、若し與へざれば、則ち是れ虛妄の罪人なるが如し。是の因縁を以ての故に衆生を捨てず。

「大悲心に入る」とは先に説けるが如し。此の中に佛、自ら説きたまはく、「本願の大心は衆生の爲の故なり」と。所謂、一一の人の爲の故に、無量劫に於いて、代りて地獄の苦を受け、乃ち是の人をして、功德を集行して佛と作り、無餘涅槃に入らしむるに至る。

問うて曰く、代りて罪を受くる者有るこ無し、何を以てか是の願を作すや。

答へて曰く、是の菩薩は、弘大の心深く、衆生を愛す。若し代<sup>三</sup>るること疑はざるなり。

【三】「集」字、宋・元・明三本及び宮本は「習」に作る。

【三】石本「必ず疑ひ怠らざるなり」に作る。



水を以て、此の人に供給す。七日にして雨止む。熊、此の人を將ゐて其の道徑を示し、熊は人に語りて言はく、「我は是れ罪身にして、多くの怨家あり。若し問ふ者有りととも、我を見たりと言ふこと莫れ」と。(此の人、答へて言はく、「爾なり」と。此の人、前すみ行くに、諸の獵者を見る。獵者、問うて言はく、「汝は何れ従り來るや。衆獸有るを見るや不や」と。答へて言はく、「我は一の大なる熊を見たるも、此の熊は我に於いて恩有り、汝に示すことを得ず」と。獵者の言はく、「汝は是れ人なり。當に人類を以て相親しむべし。何を以てか熊を惜むや。今、一たび道を失すとも、何れの時か復た來らん。汝、我に示さば、汝に多分を與へん」と。此の人は心變じて、即ち獵者を將ゐて、熊の處所を示す。獵者、熊を殺して即ち多分を以て之に與ふ。此の人、手を展べて、肉を取るに、二肘俱に墮つ。獵者の言はく、「法は何の罪か有る」と。答へて言はく、「是の熊は、我を看ること、父の子を視るが如し。我れ今、恩に背けり。將に是れ此の罪なり」と。獵者は恐怖して、敢へて肉を食せず。持して衆僧に施す。爾の時、上座の六通の阿羅漢、諸の下座に語るらく、「此は是れ菩薩なり、未來世に當に佛と作ることを得べし」と。此の肉を食ふこと莫く、即時に塔を起てて供養す。王、此の事を聞き、勅を國內に下す、「恩を知らざる人をして、此に住せしむること無からしめよ」と。又た種種の因縁を以て、恩を知る者を讚す。恩を知る人の義は、閻浮提に遍ねく、人、皆な信行す。復次に、菩薩は是の念を作さく、「若し人の惡事を、我れに於て有するすら、猶尙應に度すべし。何に況んや、我に於いて恩有るをや」と。

「忍辱力に住す」とは、忍波羅蜜の中に廣く説くが如し。

問うて曰く、種種の因縁は是れ忍辱の相なり。此の中に何を以てか但だ不瞋不惱のみを説くや。

答へて曰く、此は是れ忍辱の體なり。先づ瞋心を起こして、然る後に身口もて他を三惱ます。是れ菩薩の初行なるが故に、但だ忍を説いて、法忍を説かざるなり。

【三】「惱」字、聖本「憶」に作る。

釋多羅三藐三菩提の道に非ず」と。云何に菩薩は、所有物を布施するや。菩薩は初發心の時、布施するに、是は與ふ可し、是は與ふ可からず」と言はず。云何なれば菩薩は、布施の後、心に悔いざるや。慈悲力の故なり。云何なれば菩薩は深法を疑はざるや。功德力を信するが故なり。是を菩薩は、六地の中に住して、六法を遠離すと名く。

【論】〔論〕者の言はく、「戒清淨なり」とは、初地の中にては多く布施を行じ、次に持戒は、布施に勝ることを知る。所以何となれば、持戒は則ち一切衆生を攝するも、布施は則ち一切に普ねく周らすこと能はざればなり。持戒は、遍ねく無量に滿つ。不殺生戒は、則ち一切衆生の命を施すが如し。衆生の無量無邊なるが如く、福德も亦た無量無邊なり。諸の能く佛道を破する事を略説して、此の中に皆な破戒と名く。是の破戒の垢を離るるを、皆な清淨と名く。乃ち聲聞辟支佛心に至るすら、尙ほ是れ戒の垢なり。何に況んや餘惡をや。

「恩を知り恩を報ず」とは、有人の言はく、「我れ宿世の福德因縁もて應に得べし」と。或は言はく、「我は自然に尊貴なり。汝に何の恩か有らん」と。是の邪見に墮す。是の故に佛、説きたまはく、「菩薩は應に恩を知るべし」と。衆生は宿世の樂因有りと雖も、今世の事合せずんば、則ち樂を得るに由無し。譬へば、穀種、地に在れども、雨無ければ則ち生ぜず。地は能く穀を生ずるを以ての故に、雨に恩無しと言ふ可からざるが如し。受くる所の物は、是れ宿世に種うる所なりと雖も、供奉の人の敬愛好心、豈に恩分に非ざらんや。復次に、恩を知るは、是れ大悲の本、善業を開くの初門なり。人に愛敬せられ、名譽遠く聞え、死しては、則ち天に生じ、終に佛道を成ず。恩を知らざる人は、畜生よりも甚し。佛、本生經に説きたまふが如し。有人、山に入りて木を伐り、迷惑して道を失す。時に、暴雨に値ひ、日暮れ、飢寒し、惡蟲毒獸、來りて侵害せんと欲す。是の人、一の石窟に入るに、窟中に一の大なる熊あり。之を見て恐怖して出づ。熊、之に語りて言はく、「汝、恐怖すること勿れ。此の舍は溫暖なり、中に於て宿るべし」と。時に連雨七日なり。常に甘果、美

【三八】聖本「六」字を「云」に作るは誤り。  
【三九】「論」字挿入は元・明二本に據る。

【三〇】「熊」字、石本「麋」に作る。

とを知るが故に、是を世間心を厭ふと名く。云何なれば菩薩は、一切の所有を捨つるや。内外の諸法を惜まざるが故に、是を一切の所有を捨つと名く。云何なれば菩薩は、心没せるや。二種の譏處に心生ぜざるが故に、是を心没せずと名く。云何に菩薩は、一切の物を惜まるや。一切の物に於て、著せず念ぜざる、是を一切の物を惜まらずと名く。是を菩薩は、五地の中に於いて、十法を捨てずと爲す。

云何に菩薩は、白衣に親しむを遠離するや。菩薩は生ずる所を出家し、一佛界従り一佛界に至り、常に出家し、剃頭して染衣を著す。是を白衣に親しむを遠離すと名く。云何に菩薩は、比丘尼を遠離するや。比丘尼と共に住せず、乃至彈指の頃も、亦た念を生ぜざる、是を比丘尼を遠離すと名く。云何に菩薩は、他家を慳惜することを遠離するや。菩薩は、是の如く思惟す、「我れ應に衆生を安樂にすべし、他、今、我を助けて安樂なり、云何ぞ慳を生ぜん」と。是を他家を慳惜することを遠離すと名く。云何に菩薩は、無益の談處を遠離すとや。若し談處有りて、或は聲聞辟支佛心を生ぜば、我れ當に遠離すべし、是を無益の談處を遠離すと名く。云何に菩薩は、瞋恚を遠離するや。瞋心、惱心、闘心をして、入ることを得せしめざる、是を瞋恚を遠離すと名く。云何に菩薩は、自大を遠離するや。所謂、内法を見ざるが故に、是を自大を遠離すと名く。云何に菩薩は、人を蔑むことを遠離するや。所謂、外法を見ざるが故に、是を人を蔑むことを遠離すと名く。云何に菩薩は、十不善道を遠離するや。是の十不善は、能く八聖道を障ふ、何に況んや阿耨多羅三藐三菩提をや。是を十不善道を遠離すと名く。云何に菩薩は、大慢を遠離するや。是の菩薩は、法として大慢を作すべき者を見ず。是を大慢を遠離すと名く。云何に菩薩は、自用を遠離するや。是の菩薩は、是の法の自用す可き者を見ず。是を自用を遠離すと名く。云何に菩薩は、顛倒を遠離するや。顛倒の處は、不可得なるが故に、是を顛倒處を遠離すと多く。云何に菩薩は、婬・怒・癡を遠離するや。婬・怒・癡の處は見る可からざるが故に、是を婬・怒・癡の處を遠離すと名く。是を菩薩は五地の中に住して、十二法を遠離すと名く。

云何に菩薩は、六地の中に住して、六法、所謂、六波羅蜜を具足するや。諸佛及び聲聞、辟支佛は、六波羅蜜の中に住して、能く彼岸に度る。是を六法を具足すと名く。云何に菩薩は、聲聞、辟支佛の意を作さざるや。(菩薩は)是の念を作さく、「聲聞、辟支佛の意は、阿耨多羅三藐三菩提の道に非ず」と。云何に菩薩は、布施して憂心を生ぜざるや。(菩薩は)是の念を作さく、「此は阿耨多羅三藐三菩提の道に非ず」と。云何に菩薩は、索むる所有るを見て、心没せざるや。(菩薩は)是の念を作さく、「此は阿耨多羅三藐三菩提の道に非ず」と。云何に菩薩は、索むる所有るを見て、心没せざるや。(菩薩は)是の念を作さく、「此は阿

【三七】元・明二本「談説」に作る。以下之に順ず。

る、是を妙清淨と名く。云何なるが菩薩の、恩を知り恩を報ずとするや。若し菩薩摩訶薩は、菩薩道を行じ、乃至小恩すら尙ほ忘れず、何に況んや多きをや。是を恩を知り恩を報ずと名く。云何に菩薩は、忍辱力に住するや。若し菩薩、一切衆生に於いて、瞋無く惱無き、是を忍辱力に住すと名く。云何に菩薩は、歡喜を受くるや。所謂、衆生を成就し、此を以て喜と爲す。是を歡喜を受くと名く。云何なれば菩薩は、一切衆生を捨てざるや。若し菩薩は、念じて一切衆生を救はんと欲するが故に、是を一切衆生を捨てずと名く。云何なるを菩薩が大悲心に入るとするや。若し菩薩は、是の如く念ずれば(即ち)「我れ一一の衆生の爲の故に、如恆河沙等の劫(の間)、地獄の中に勤苦を受け、乃ち是の人、佛道を得て涅槃に入るに至るべし」と。是の如きを名けて、一切十方の衆生の爲に、苦を忍ぶと爲す。是を大悲心に入ると名く。云何に菩薩は、師を信じ、恭敬し、諮受するや。若し菩薩は、諸師に於いて、世尊の如く想ふ。是を師を信じ、恭敬し、諮受すと名く。云何に菩薩は、諸波羅蜜を勤求するや。若し菩薩は、一心に諸波羅蜜を求めて異事無し。是を諸波羅蜜を勤求すと名く。是を菩薩摩訶薩は、二地の中に住して、八法を満足すと爲す。

云何に菩薩摩訶薩が、多く學問して、厭足すること無しとするや。諸佛所説の法、若は是れ此の間の世界、若は十方世界の、諸佛の所説を盡く聞持せんと欲す。是を多く學問して、厭足すること無しと名く。云何なるを菩薩は法施を淨むとするや。法施する所有り、乃ち阿耨多羅三藐三菩提を求めざるに至る。何に況んや餘事をや。是を名利を求めざる法施と名く。云何に菩薩は、佛の世界を淨むるや。諸の善根を以て、佛の世界を淨めんと廻向す。是を佛世界を淨むと名く。云何に菩薩は世間の無量の勤苦を受け以て厭ふことを爲さざるや。諸の善根を備具するが故に、能く衆生を成就し、亦た<sup>二六</sup>佛界を莊嚴し、乃ち薩婆若を具足するに至るまで、終に疲倦せず。是を無量の勤苦を受くるを以て、厭ふことを爲さずと名く。云何に菩薩は慚愧處に住すとするや。諸の聲聞、辟支佛の意を取つ、是を慚愧の處に住すと名く。是を菩薩摩訶薩は、三地の中に住して、五法を満足すと爲す。

云何に菩薩は、阿蘭若住處を捨てざるや。能く聲聞辟支佛地を過ぐ。是を阿蘭若住處を捨てずと名く。云何に菩薩は、少欲なりるや。乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るすら尙ほ欲せず、何に況んや餘欲をや。是を少欲と名く。云何に菩薩は、足ることを知れるや。一切種智を得るのみ、是を知足と名く。云何に菩薩は、頭陀の功徳を捨てざるや。諸の深法忍を觀ずる、是を頭陀の功徳を捨てずと名く。云何に菩薩は、戒を捨てざるや。戒相を取らざる、是を戒を捨てずと名く。云何に菩薩は、諸の欲を穢惡とするや。欲心起らざるが故に、是を諸欲を穢惡すと名く。云何なれば菩薩は、世間心を厭ふや。一切の法は、不作なるこ

【三】石本「佛國土」に作る。

恃んで憍慢を生ず。是の故に應に是の念を作すべし、「我は頭を剃り、染衣を著け、鉢を持して食を乞ふ。此は是れ憍慢を破するの法なり。我れ云何ぞ中に於いて憍慢を生ぜんや」と。又た此の憍慢は、人心の中に在りて、則ち功德を覆没し、人の愛せざる所にして、惡聲流布し、後身は常に弊惡の畜生中に生じ、若くは人中の卑鄙下賤に生ず。是の憍慢に、是の如き無量の過罪有りと知りて、是の憍慢を破す。(夫は)阿耨多羅三藐三菩提を求めんが爲の故なり。人、財を求むる如きすら、猶尙謙遜し意を下す、何に況んや、無上道を求むるをや。憍慢を破するを以ての故に、常に尊貴を生じ、終に下賤の家に在りて生ぜず。

「實語」とは是れ諸善の本にして、天に生ずるの因縁、人の信受する所なり。是の實語を行する者は、布施、持戒、學問を假らずして、但だ實語を修するのみにて、無量の福を得。實語とは、説の如く隨つて行するなり。

問うて曰く、口業に四種有り。何を以てか但だ實語を説くや。

答へて曰く、佛法の中には實を貴ぶが故に、實を説き、餘は皆な四諦に攝す。實の故に涅槃を得るなり。復次に、菩薩は衆生と共に惡口、綺語、兩舌を事とし、或る時は能く妄語の罪ありて重きが故に、初地に應に是の菩薩行を捨つべし。初地には、未だ具足すること能はず。此の四業を行するが故に、但だ實語のみを説く。第二地の中には、則ち能く具足す。

問うて曰く、初地の中に、何を以てか但だ十事のみを説くや。

答へて曰く、佛は法王爲り、諸法の中に、自在を得たまふ。是の十方を知れば、能く初地を成ず。譬へば良醫は、能く藥草の種數を知るも、若くは五、若くは十にして、能く病を破するに足れるが如し。是の中、其の多少を難すべからず。「初地竟り」。

【經】云何なるが菩薩の戒清淨なる。若し菩薩摩訶薩、聲聞辟支佛心、及び諸の破戒、佛道を障ふる法を念ぜざ

り。所以何となれば、佛道の中に二種有り。正見世間と正見出世間となり。正見の故なり。

佛身を愛樂すとは、種種の讚佛の功德、十力、四無所畏、大慈大悲、一切智慧を聞き、又た佛身の三十二相、八十種隨形好、大光明を放ち、天人の供養して、厭足すること有ること無きを見て、自ら、「我れ當來世も亦た當に是の如くなるべし」と知るなり。假令、佛を得る因縁無きすら猶尙愛樂す、何に沉んや、當に得べくして、而も愛樂せざらんや。是の深心得て、佛を愛樂したてまつるが故に、世世に常に佛に値ふことを得るなり。

「法教を演出す」とは、菩薩は上の如く、法を求め、己に衆生の爲に演説するなり。菩薩の家に在る者は多く財施を以てし、出家は佛を愛するの情重く常に法施を以てす。若は佛、世に在すも、若は世に在さざるも、善く持戒に住し、名利を求めず、心を一切衆生に等うして、而も爲に法を説く。檀の義を讚歎するが故に、名けて初善と爲し、分別して持戒を讚歎するを、名けて中善と爲し、是の二法の果報の、若は諸の佛國に生じ、若は大天と作るを、名けて後善と爲す。復次に、三界の五受衆の身の、苦惱多きを見て、即ち厭離の心を生ずるを、名けて初善と爲し、居家を棄捨して、身を離るるが爲の故に、中善と爲し、心の煩惱を離るるが爲の故に、名けて後善と爲す。聲聞乘を解説するを、名けて初善と爲し辟支佛乘を説くを、名けて中善と爲し、大乘を宣暢するを、名けて後善と爲す。

「妙義・好語」とは、三種の語は、復た辭妙なりと雖も、而も義味淺薄に義理深妙なりと雖も、而も辭具足せず。是を以ての故に妙義好語を説く。三毒の垢を離るるが故に、但だ正法を説き、非法を雜へざる、是を「清淨」と名く。八聖道分、六波羅蜜を備ふるが故に、名けて「具足」と爲す。「修多羅十二部經」は先に説けるが如し。

「僣慢を破す」とは、是の菩薩は出家して戒を持し、法を説いて能く二五衆疑を斷ず。或る時は自ら

【二五】「衆疑」、別本に「衆生の疑惑」とある。

きは、本と菩薩たりし時、名けて樂法と曰へり。時に、世に佛無く、善語を聞かず。四方に法を求め、精勤すること懈らざりしも、了<sup>つ</sup>に得ること能はざりき。爾の時に、魔變じて婆羅門と作り、而して之に語りて言く、「我に佛の説きたまふ所の一偈有り。汝能く皮を以て紙と爲し、骨を以て筆と爲し、血を以て墨と爲して、此の偈を書寫せば、當に以て汝に與ふべし」と。樂法は即時に自ら念すらく、「我れ世世に、身を喪ふこと、無數なれども、是の利を得ず」と。即ち自から皮を剝ぎ、之を曝して乾かしめ、其の偈を書せんと欲するに、魔は便ち身を滅す。是の時に、佛、其の至心を知り、即ち下方從り<sup>三三</sup>湧出して、爲に深法を説きたまふに、即ち無生法忍を得たり。又た薩陀波崙の如きは、苦行して法を求め、釋迦文菩薩の如きは、五百の釘を身に釘す。(是れ等は皆な)法を求めんが爲の故なり。又れ金堅王の如きは、身を割くこと五百處、炷を燈し、巖に投じ、火に入ること爲す。是等の如き、種種の苦行難行は、衆生の爲に法を求むるなり。復次に、佛、自の求法の相を説きたまはく、「薩婆若の爲にして、聲聞、辟支佛に墮せず」と。

「常に出家す」とは、菩薩、家に在りては、種種の罪の因縁有ることを知る。「我れ若し家に在らば、自ら清淨の行を行ふことを得ること能はず。何ぞ能く人をして、諸の淨行を得せしめん。若し在家の法に隨はば、則ち鞭杖等有りて、衆生を苦惱す。若し善法に隨つて行ぜば、則ち居家の法を破せん。二事を籌量するに、我れ今、出家せざるも、死する時は、俱に亦た當に捨つべし。今、自ら遠離せば福德大なりと爲さん」と。復次に、菩薩は是の念を作さく、「一切の國王及び諸の貴人は、力勢、天の如く、樂を求めて未だ已まず。死して之を強奪す。我れ今、衆生の爲の故に、家を捨てて清淨戒を持し、尸羅波羅蜜の因縁を具足せん」と。此の中に、佛は自ら説きたまはく、「菩薩は世の雜心ならず」と。

「出家して雜心ならず」とは、九十六種の道中に於いて出家せず、但だ佛道中に於いて出家するな

【三三】「湧」字、別本「踊」と作る。

【三四】「家を捨てて清淨戒を持し」、別本「家を捨し清淨にして戒を持し」とある。

して之を視るに二無し。此の中に、佛、自ら等心とは、四無量心なりと説きたまへり。是の菩薩は衆生の樂を受くるを見れば、則ち慈喜心を生じ、是の願を作さく、「我れ當に一衆生をして、皆な佛樂を得せしむべし」と。若し衆生の苦を受くるを見れば、則ち悲心を生じて之を愍み、是の願を作さく、「我れ當に一切衆生の苦を抜くべし」と。若し不苦不樂の衆生を見れば、則ち捨心を生じて、是の願を作さく、「我れ當に衆生をして、愛憎の心を捨てしむべし」と。四無量心の餘の義は先に説くが如し。

「捨心」とは、捨に二種有り。一には財を捨てて施を行じ、二には結を捨てて道を得。此の慳を除くを以て捨と爲すは、第二の結を捨つるが與めの因縁と作り、七地の中に至りて乃ち能く結を捨つるなり。

問うて曰く、捨相に種種有り。内外、輕重、財施、法施、世間、出世間等なり。佛は何をての故に、但だ分別憶想無き出世間の施のみを説きたまひしか。

答へて曰く、布施に種種の相ありと雖ども、但だ大なる者を説いて相を取らざるなり。

復次に、佛は一切法に於いて著したまはず、亦た此を以て、菩薩に布施を教へて、佛法の如きにも著せざらしめたまふ。此の中に、應に廣く無分別の布施を説くべし。餘の布施の相は、處處に已に種種に説けり。「善知識に近づく」の義は先に説けるが如し。

「法を求む」とは、法に三種有り。一には、諸法の中の無上なるもの、所謂、涅槃なり。二には、涅槃を得るの方便たる八聖道なり。三には、一切の善語實語にして、八聖道を助くる者、所謂八萬四千の法衆、十二部經、四藏、所謂、阿含・阿毘・毘曇尼・雜藏、摩訶般若波羅蜜等の、諸の摩訶衍經は皆な名けて法と爲す。此の中に、「法を求む」とは、書寫し、讀誦し、正しく憶念するなり。是等の如くにして、衆生の心病を治するが故に、諸法の樂を集めて身命を惜まざるなり。釋迦文佛の如



に發心して深く入らざらんや。後の薩陀波崙の品中に、長者の女、佛の功德を讚歎したてまつるを聞いて、即時に家を捨て、曇無竭の所に詣るが如し。

復次に、信等の五根を成就し、純熟するが故に、能く是の深心を得。譬へば、小兒は眼等の五情根、未だ成就せざるが故に、五塵を分たず、好醜を識らざるが如し。信等の五根の未だ成就せざるも、亦た復た是の如く、善惡を識らず、縛解を知らず、五欲を<sup>三</sup>愛樂して、邪見に没す。信等の五根を成就せる者は、乃ち能く善惡を識別す。十善道、聲聞法すら猶向ほ愛樂す、況んや無上道にして、而も深く念ぜらんや。初めて無上道心を發してより、已に世間に於いて最上たり。何に況んや成就するをや。

復次に、菩薩は、始めて般若波羅蜜の氣味を得るが故に、能く深心を生ず。人の閉せられて幽闇に在り、微隙より光を見、心則ち踊躍し、是の念を作して、衆人に(向ひ)、<sup>二</sup>獨り是の如きの光明を見ることを得」と言ひ、欣悅し愛樂して、即ち深心を生じ、是の光明を念じ、方便して出でんことを求むるが如し。菩薩も亦た是の如く、宿業の因縁の故に閉せられて、十二入無明黑闇の獄中に在り、所有の知見は皆な是れ虚妄なるも、般若波羅蜜を聞いて少しく氣味を得、深く薩婆若を念じ、「我れ當に云何にして、此の六情の獄より出づることを得て、諸佛聖人の如くならん」と。

復次に、阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、願に隨つて行する所あり。是を以ての故に深心を生ず。深心とは、一切諸法の中の愛は、薩婆若を愛するに如くもの無く、一切衆生の中の愛は、佛を愛したてまつり、又た深く悲心に入りて、衆生を利益するに如くもの無し。是の如き等を深心の相と名く。初地の菩薩は、應に常に是の心を行すべし。

「一切衆生に於いて等心たり」とは、菩薩は是の深心を得已りて、心を一切衆生に於いて等うす。衆生は常に情もて其の親しき所を愛し、其の憎む所を惡む。菩薩は深心を得るが故に、怨親平等に

【三】 別本「愛樂して」と作る。

て菩薩は應に十法(所謂)深心乃至實語を行すべし。須菩提は知れりと雖も、衆生の疑ひを斷ぜんが爲の故に、世尊に問へり。「云何なる是れ深心なる」と。佛の答へたまはく、「薩婆若に應ずる心もて、諸の善根を集むることなり」と。「薩婆若の心」とは、菩薩摩訶薩は、初めて阿耨多羅三藐三菩提の意を發して、是の願を作さく、「我は未來世に於いて、當に佛と作るべし」と。是の阿耨多羅三藐三菩提の意、即ち是れ薩婆若に應ずる心なり。「應ず」とは、心を繋けて、「我れ當に佛と作るべし」と願ふなり。若し菩薩、利根なれば、大に福德を集め、諸の煩惱薄く、過去の罪業少く、發意して即ち深心得。

「深心」とは、深く佛道を樂しみ、世世に世間に於て心薄し、是を薩婆若に應ずる心と名く。作す所の一切の功德の、若は布施、若は持戒、若は修定等もて、今世後世の福樂、壽命、安隱を求めず。但だ薩婆若の爲にす。譬へば慳貪の人の<sup>二九</sup>因縁無ければ、乃至、一錢と(雖)も施さず、貪惜し積聚して、但だ増長せんことを望むが如し。菩薩も亦た是の如く、福德の若は多きも、若は少きも、餘事に向けず、但だ愛惜し積集して、薩婆若に向く。

問うて曰く、是の菩薩は、未だ薩婆若を知らず、其の味を得ざるに、云何にして能く深心得るや。

答へて曰く、我れ先に已に説けり。此の人若し利根なれば、諸の煩惱薄く、<sup>三〇</sup>福德純厚にして、世間を樂します。未だ大乘を讚歎するを聞かずと雖も、猶ほ世間を樂します。何に況んや已に聞けるをやと。摩訶迦葉の如きは、金色の女を娶りて、妻と爲せしも、心に愛樂せず、棄捨して出家せり。又た耶舎長者の子の如きは、中夜に、衆の姪女の皆な死狀の如くなるを見て、直に十萬兩金の寶<sup>三一</sup>履を捨てて、水岸の邊に於て、直に渡りて佛(所)に趣けり。是等の如く、諸の貴人、國王にして、五欲を厭捨する者は無數なり。何に況んや菩薩は佛道の種種の功德、因縁を説くを聞きて、而も即時

【二九】「因縁」、別本「恩縁」と作。

【三〇】石山寺本等は「功德淳厚にして」と作る。

【三一】「履」字、別本「履」と作る。

に至るまで、終に佛を念ずることを離れず。是を佛身を愛樂し、地業を治むと名く」と。「云何なるを菩薩は、法教を演出して地業を治むとするや」と。佛の言はく、「菩薩は、若は佛、現在し、若は佛、滅度の後、衆生の爲に說法し、初中後善く、妙義、好語、淨潔、純具、所謂、修妬路乃至優波提舍なり。是を法教を演出して、地業を治むと名く」と。「云何なるを菩薩は、憍慢を破し、地業を治むとするや」と。佛の言はく、「菩薩は是の憍慢を破するが故に、終に下賤の家に生ぜず。是を菩薩は、憍慢を破して、地業を治むと名く」と。「云何なるを菩薩は、實語して、地業を治むとするや」と。佛の言はく、「菩薩は、所説の如く説に隨つて行ず。是を實語もて地業を治むと名く」と。是を菩薩摩訶薩は、初地の中に住し、十事を修行して、地業を治むと爲す。

【論】<sup>一七</sup>釋して曰く、須菩提は上に摩訶衍を問ひ、佛、種種に、摩訶衍の相を答へたまへり。上には又大乘に發趣する者を問ひ、今は大乘に發趣するの相を答へたまふ。菩薩摩訶薩は、是の乘に乗じて、一切法の本従り已來、不來、不去、無動、無發、法性常住なることを知るが故に、又大悲心を以ての故に、精進波羅蜜の故に、方便力の故に、還つて諸の善法を修し、更に勝地を求め、而も地相を取らず、亦た此の地を見ざるなり。

問うて曰く、應に大乘に發趣することを答ふべし、何を以てか地に發趣することを説くや。

答へて曰く、大乘は即ち是れ地なり。地に十分有り。初地従り二地に至る。是を發趣すと名く。譬へば馬に乗つて象に趣き、馬を捨てて象に乗り、象に乗りて龍に趣き、象を捨てて龍に乗るが如し。

問うて曰く、此の中に、是れ何等か十地なるや。

答へて曰く、地に二種有り。一には但だ菩薩地、二には共地なり。共地とは、所謂、乾慧地より乃ち佛地に至るまでなり。但だ菩薩地とは、歡喜地、離垢地、有光地、增曜地、難勝地、現在地、深入地、不動地、善根地、法雲地なり。此の地相は、十地經論の中に廣く説くが如し。初地に入り

【一五】「所説の如く説に隨つて行ず、別本には「所説の如く、所行の如き」とあり。

【一六】「初地の中に住し、別本「初住地の中に」と作る。

【一七】別本に「論者の曰く」とある。

【一八】「善根地」、別本「善相地」と作る。

は、分別の相を破す。十三には、憶想を轉ず。十四には見を轉ず。十五には、煩惱を轉ず。十六には、等定慧地。十七には、意を調ふ。十八には、心寂滅す。十九には、無礙智。二十には愛に染まず。須菩提、是を菩薩摩訶薩は、〔第〕七地の中に住して、應に具足すべき二十法と名く。

復次に、須菩提、菩薩摩訶薩は、八地の中に住して、應に五法を具足すべし。何等か(是れ)五法なるや。衆生の心に順入し、諸の神通に遊戲し、諸佛の國を觀て、見る所の佛國の如く、自ら其の國を莊嚴し、實の如く、佛身を觀じて、自ら佛身を莊嚴す。是を五法を具足し滿すと名く。

復次に、須菩提、菩薩摩訶薩は、八地の中に住して、復た五法を具足す。何等か(是れ)五なるや。上下の諸根を知り、佛世界を淨め、如幻三昧に入り、常に三昧に入り、衆生所應の善根に隨つて身を受く。須菩提、是を菩薩摩訶薩、八地の中に住して、五法を具足すると爲す。

復次に、須菩提、菩薩摩訶薩は、九地の中に住して、應に十二法を具足すべし。何等を(是れ)十二なるや。無邊世界に度する所の分を受け、菩薩、是の如き願を得、諸天・龍・夜叉・健闍婆の語を知りて、而も爲に法を説き、處胎成就し、家成就し、所生成就し、性成就し、眷屬成就し、出生成就し、出家成就し、莊嚴佛樹成就し、一切諸善功德成滿し具足す。須菩提、是を菩薩摩訶薩、〔第〕九地の中に住して、應に具足すべき十二法と名く。須菩提、十地の菩薩は、當に知るべし、佛の如くなることを」と。

爾の時に、慧命須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何なるを菩薩摩訶薩は深心に地業を治むとするや」と。佛、言はく、「菩薩摩訶薩は、薩婆若に應ずる心もて、諸の善根を集む。是を菩薩摩訶薩、深心に地業を治むと名く」と。「云何なるを菩薩は、一切衆生の中に於いて、等心なりとするや」と。佛の言はく、「菩薩は一切衆生の中に於いて、等心なりと名く」と。「云何に菩薩は、布施を修すとすや」と。佛の言はく、「菩薩は一切衆生に施與して、分別する所無し。是を布施を修すと名く」と。「云何なるを菩薩は、善知識に親近すとすや」と。佛の言はく、「能く人をして、薩婆若の中に入りて住せしむ。是の如く善智識に親近し、諮受し恭敬し、供養す。是を善知識に親近すと名く」と。「云何なるを菩薩は、法を求むとするや」と。佛の言はく、「菩薩は薩婆若に應ずる心もて法を求め、聲聞、辟支佛地に墮せず。是を法を求むと名く」と。「云何なるを菩薩は常に出家して地業を治むとするや」と。佛の言はく、「菩薩は、世世に雜心ならず、佛法の中に出家して、能く障礙する者無し。是を常に出家して、地業を治むと名く」と。「云何なるを菩薩は、佛身を愛樂し地業を治むとするや」と。佛の言はく、「若し菩薩は、佛の身相を見たてまつるより、乃ち阿耨多羅三藐三菩提

【三】 別本「佛國土」に作る。

【三】 別本「所願の如きを得」とある。

【四】 「家成就し、所生成し、別本は「生成成就し、家成就し」と作る。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、四地の中に住して、應に行を受け、十法を捨てざるべし。何等か(是れ)十なるや。一には阿練若住處を捨てず。二には、少欲。三には、知足。四には、頭陀の功德を捨てず。五には、戒を捨てず。六には、諸欲を穢惡す。七には、世間心を厭ふ。八には、一切の所有を捨つ。九には、心没せず。十には、一切の物を惜まざ。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩、第四地の中に住して、十法を捨てずと名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、五地の中に住して、十二法を遠離す。何等か(是れ)十二なるや。一には、白衣に親むことを遠離す。二には、比丘尼を遠離す。三には、他家を慳惜することを遠離す。四には、無益の談説を遠離す。五には、瞋恚を遠離す。六には、自大を遠離す。七には、萬人を遠離す。八には、十不善道を遠離す。九には、大慢を遠離す。十には、自用を遠離す。十一には、顛倒を遠離す。十二には、婬・怒・癡を遠離す。須菩提、是を菩薩摩訶薩、(第)五地の中に住して、十二事を遠離すと爲す。

復次に、須菩提、菩薩摩訶薩は、六地の中に住して、當に六法をば具足すべし。何等か(是れ)六なるや。所謂六波羅蜜なり。復た六法有り、爲すべからざる所なり。何等か(是れ)六なるや。一には聲聞、辟支佛の意を作さず。二には布施に憂心を生ずべからず。三には索むる所有るを見ては心没せず。四には所有の物は布施す。五には布施の後に心悔いず。六には深法を疑はず。須菩提、是を菩薩摩訶薩、六地の中に住して、應に六法を滿具し、六法を遠離すべしと名く。

復次に、須菩提、菩薩摩訶薩は七地の中に住して、二十の法に著すべからざる所あり。何等か(是れ)二十なるや。一には、我に著せず。二には、衆生に著せず。三には、壽命に著せず。四には、衆數乃至知者見者に著せず。五には、斷見に著せず。六には、常見に著せず。七には、相を作すべからず。八には、因見を作すべからず。九には、名色に著せず。十には、五衆に著せず。十一には、十八界に著せず。十二には、十二入に著せず。十三には、三界に著せず。十四には、著處を作らず。十五には、所期の處を作らず。十六には、依處を作らず。十七には、佛に依る見に著せず。十八には、法に依る見に著せず。十九には、僧に依る見る著せず。二十には、戒に依る見に著せず。是の二十の法は、著すべからざる所なり。復た二十法の應に具足し滿すべきもの有り。何等か(是れ)二十なるや。一には、空を具足す。二には、無相を證す。三には、無作を知る。四には、三分清淨なり。五には、一切衆生の中に(於て)慈悲智を具足す。六には、一切の衆生を念せず。七には、一切法、等しく觀じ、是の中にも亦た著せず。八には、諸法實相を知り、是の事をも亦た念せず。九には、無生法忍。十には、無生智。十一には、諸法一相を説く。十二に

【七】「二には、少欲……九には心没せず」原文四十五字、別本異同あり。「二には、少欲にして知足。三には、頭陀の功德を捨てず。四には、捨戒せず(又た)戒相を取らず。五には、諸の欲を穢汚せず。六には、世間心を厭ふ。七には一切の所有を捨す。八には心没せず。九には、二識處を生ぜず。」

【八】「捨戒」凡そ佛教徒の戒律に對する態度に持戒、破戒、捨戒の三種あり、捨戒は戒を破するのではなく、その戒が根及び機等に適せざる場合、之を保留し、捨するるのである。

【九】「白衣」黃衣の對、出家者に對する在家者の稱。之に餘り親近することを排するなり。

【一〇】「無益の談處」とあるも宗・明等諸本に従つて「無益の談説」となす。

【一一】別本「無生忍法」に作る。

# 卷の第四十九

## 第二十發趣品

【經】

佛、須菩提に告げたまはく、「汝は問ふ、云何にして菩薩摩訶薩は大乗に發趣するや」と。若し菩薩摩訶薩、六波羅蜜を行ずる時、一地従り一地に至る、是を菩薩摩訶薩の大乗に發趣すと名く」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何にして菩薩摩訶薩は、一地従り一地に至るや」と。佛の言はく、「菩薩摩訶薩は、一切法に來去の相無く、亦た法の若は來り、若は去り、若は至り、若は至らざるもの有ること無きを知る、(夫は)諸法の相の不滅なるが故なり。菩薩摩訶薩は、諸地に於いて、念せず、思惟せず、而も地業を修治し、亦た地を見ず。何等か菩薩摩訶薩の地業を治むるや。菩薩摩訶薩は、初地に住する時、十事を行ふ。一には、深心堅固、是れ不可得なるが故なり。二には一切衆生の中に於いて等心なり。(是れ)衆生、不可得なるが故なり。三には布施もて人に與ふ。(是れ)受くる人、不可得なるが故なり。四には、善智識に親近して、自ら高うせず。五には法を求む。(是れ)一切法、不可得なるが故なり。六には常に出家す。(是れ)家、不可得なるが故なり。七には佛身を愛樂す。(是れ)相好、不可得なるが故なり。八には、法教を演出す。(是れ)諸法の分別、不可得なるが故なり。九には憍慢を破す。(是れ)法・生・慧、不可得なるが故なり。十には實語す。(是れ)諸語、不可得なるが故なり。菩薩摩訶薩は、是の如く、初地の中に住して、十事を修治し、地業を治む。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、「第」二地の中に住して、常に八法を念ず。何等か(是れ)八なるや。一には、戒清淨なり。二には、恩を知り恩を報ず。三には、忍辱に住す。四には、歡喜を受く。五には、一切の衆生を捨てず。六には、大悲心に入る。七には、師を信じ、恭敬し、諸受す。八には、諸の波羅蜜を勤求す。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩、「第」二地の中に住して、應に満足すべき八法と名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、三地の中に住して、五法を行ず。何等か(是れ)五なるや、一には、多く學問して厭足すること無し。二には、淨法を施しても亦た自ら高うせず。三には、佛國土を莊嚴しても亦た自ら高うせず。四には、世間の無量の勤苦を受けて、以て厭ふことを爲さず。五には慚愧處に住す。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩、「第」三地の中に住して、應に満足すべき五法と名く。

【一】「是れ不可得なるが故なり」石山寺本は「無所得なるを用つての故なり」とす。

【二】「不可得なるが故なり」石山寺本は「無所得なるを以つての故なり」とす。

【三】「布施」別本「捨心」と作る。

【四】本別「忍辱力」と作る。

【五】「莊嚴」、別本「淨む」と作る。

【六】「受けて」別本「愛みて」と作る。

第三十四	勸受持品(五)	二七
第三十五	梵志品(五)	二八
第三十六	稱譽品(五)	二八
第三十七	校量舍利品(五)	二九
第三十八	校量法施品(六)	二六
第三十九	隨喜廻向品(六)	二九
第四十	照明品(六)	三五
第四十一	信謗品(六)	二七
第四十二	歎淨品(六)	二七
第四十三	無作實相品(六—六五)	三〇
第四十四	諸波羅蜜品(六)	三四
第四十五	歎信行品(六—六七)	三六

目次

大智度論だいちどろん (全一百卷中自卷第四十九至卷第六十七)

(本丁)

(通頁)

第二十	發趣品(四一—五〇)	一
第二十一	出到品(五〇)	三
第二十二	勝出品(五一)	四
第二十三	舍受品(五一)	四
第二十四	會宗品(五一)	六
第二十五	十無品(五一)	六
第二十六	無生品(五二)	八
第二十七	天主品(五二)	一〇
第二十八	幻人聽法品(五二)	一〇
第二十九	散華品(五二)	一七
第三十	視顧品(五二)	一五
第三十一	滅諍亂品(五二)	一五
第三十二	寶塔校量品(五七)	一六
第三十三	述誠品(五七)	一七

目次

一



卷之三

經傳通考

釋經論部 四

眞野正順譯



CHENG YU TUNG  
EAST ASIAN LIBRARY  
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY  
130 St. George Street  
8th FLOOR  
TORONTO, CANADA M5S 1A5

國譯一切經

大東出版社藏版







